大正十二年六月十六日印刷
大正十二年六月十九日發行

漢文叢書
先哲叢談（非賣品）

東京府下大久保町西大久保二百三十六番地
編輯者　塚本哲三

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行者兼印刷者　三浦理

東京市神田區錦町三丁目九番地
印刷所　有朋堂印刷部

東京市神田區錦町一丁目十九番地
發行所　有朋堂書店

則爲相盡心者。何得如斯乎。此言可以想其平生矣。初從先子將辭古河也。號泣籲天曰。請蚤奪妾命。勿使父母永憂同其世。而再會無期也。若不得之。則使歲一再必見父母。雖去藩猶不去者。既而來江戸。先子入大府仕籍。從此後得數見父母。於是父母自悔前言。云。善亦數出入其邸。尋謁侯及世子。所著賢相野史四卷。許我志三卷。及所校刻雙桂集六卷。皆上之。褒稱拜賜。足以酬母夙志矣。善不肖幼不好讀書。其受句讀于先子膝下時。日蒙督責。猶怠惰不警。弱冠始覺不可不學。則先子見背矣。自此母寡居善治家事。使余一從事于鉛槧。至今雖無有一所得。而猶未墜箕裘。亦母之賜也。母不奉佛。未嘗掌珠串誦佛號。嘗曰。雙桂先生儒宗也。其子敬仲先生亦儒也。其子公道亦復非俗士。爲之婦。爲妻。爲母。奈何信彼天堂地獄之說。聞者謂爲女中之丈夫。今玆文化丙子年六十六歲。健食無恙。嗚呼其節義雖出於天性。亦得無由祖及先子之教化而然乎。因併及之。

希望をはたす　二〇 二十歳　二一 父死す　二二 やもめ暮し　二三 鉛は文字を消す粉、槧は古へ紙に代用せる板、即ち文筆の意　二四 父祖の業　二五 數珠、　二六 佛教にいふ地獄極樂の說　二七 十三年

先哲叢談　終

母不レ能レ奪レ之。然猶垂レ愛。時時勸二睽離一不レ留。而母堅操不レ回。遂從二先子一。其事二先子一也。儼有二孟光之風一。至二先子終一レ世。二十八年如二一日一矣。又其侍レ姑也。孝養備至。其姑來二江戸一。僑二居市中一。時比鄰相謂曰。新來人。姑與レ婦恩情篤密。此必夫贅壻。而妻與レ母則眞母子也。不レ然

ざるを覺れば、則ち先子(三一)に背かる。此れより母寡居(三二)善く家事を治め、余をして一に事に鉛槧(三三)に從はしむ。今に至るまで一の得る所有る無しと雖も、而も猶ほ未だ箕裘を墜さざる、亦母の賜なり。母佛を奉ぜず。未だ嘗て珠串(三五)を掌にして佛號(三四)を誦せず。嘗て曰く、雙桂先生は儒宗なり。其子敬仲先生も亦儒なり。其子公道亦復俗士に非ず。之が婦と爲り、妻と爲り、母と爲る、奈何ぞ彼の天(三六)堂地獄の說を信ぜんと。聞く者謂つて女中の丈夫と爲す。今茲文化丙子年(三七)六十六歲、健食恙なし。嗚呼其節義天性に出づと雖も、亦祖及び先子の敎化に由つて然る無きを得んや。因つて併せて之に及ぶ。

(一) 喪終る (二) 辭職 (三) 一周年 (四) 士籍 (五) 往きて安否を伺ふ (六) 自己の器量を計り知らざるもの (七) 道のみぞばたにのたれじにする (八) 連れ添ひて長く難儀する (九) 良きつれあひ (一〇) はら〳〵と涙を落す (一一) 二家に嫁がず (一二) 再縁 (一三) 美味美肉 (一四) その志を變へしめがたし (一五) そむきはなる (一六) 堅き貞操動かず (一七) 漢の梁鴻の妻、夫に從ひて覇陵山中に入りしを以て有名なり (一八) わび住居す (一九) 隣近所の人 (二〇) 情合があつし (二一) 入夫、いりむこ (二二) 誠意をつくす (二三) 泣き叫ぶ (二四) 同じ世に生きながら再び面會するの時期無し (二五) 幕府 (二六) 離縁を勸めし言 (二七) 古河侯の邸 (二八) お褒にあづかり頂戴物あり (二九) 平生の

適以得二良匹一也。母潸然零レ涕曰。嗚呼大人。何出二此言一。妾聞女子常理不レ踐二庭一。又聞三先舅之時語二古烈女一。其見二稱述一者。或嘗レ苦。或致レ死。以不レ易二其操一。今也夫不レ去レ妾。妾奈何自求レ去。且有レ祿而配。無レ祿則離。不義莫レ大レ焉。假令再醮以身纒二錦繡一。口飽二粱肉一。豈所レ願哉。父

時に比鄰(一九)相謂つて曰く、新來の人、姑と婦と恩情(二〇)篤密なり。此れ必ず夫は贅壻(二一)にして、妻と母とは則ち眞の母子ならん。然らずんば則ち爲に心(二二)を相盡すこと、何ぞ斯の如くなるを得んやと。此言以て其平生を想ふ可し。初め先子に從つて將に古河を辭せんとするや、號泣(二三)天に籲んで曰く、請ふ蚤く妾の命を奪ひ、父母をして、永く其世(二四)を同じうして再會期無きを憂へしむる勿かれ。若し之を得ずんば、則ち歳に一再必ず父母に見え、藩を去ると雖も、猶ほ去らざる者のごとくならしめよと。既にして江戸に來り、先子大府(二五)の仕籍に入る。此より後數ゝ父母に見ゆることを得たり。是に於て父母自ら前言(二六)を悔ゆと云ふ。善亦數ゝ其邸(二七)に出入し、謁を侯及び世子に辱うす。著す所賢相野史四卷、許我志三卷、及び校刻する所雙桂集六卷、皆之を上る。褒稱(二八)賜を拜す。以て母の夙志に酬ゆるに足れり。善不肖幼にして讀書を好まず。其の句讀を先子の膝下(二九)に受くる時、日に督責を蒙つて、猶ほ怠惰警めず。弱冠(三〇)始めて學ばざる可から

初其乞レ辭也。母省ニ父母一。父母謂レ母曰。爲レ汝擇レ壻時。以爲原氏之子有ニ才行一。又言ニ其祿一。則二百石也。是以妻レ之。豈謂及レ嗣レ世。祿減ニ其半一。然猶可ニ以無レ飢矣。至ニ其辭レ仕。則不三自揆ニ其量一也。夫士無ニ恒祿一。何以衣食。其轉ニ死溝壑一。計レ日可レ待也。汝與下配ニ如レ此者一永歷中患難上。不レ如更

は、則ち自ら其量を揆らざるなり。夫れ士にして恒祿なければ、何を以て衣食せん。其の溝壑(六)に轉死せんこと、日を計つて待つべきなり。汝此の如き者に配(八)して永く患難(七)を歷んよりは、如かず、更め適いて以て良匹(九)を得んにはと。母潸然(一〇)として涕を零して曰く、嗚呼大人、何ぞ此言を出せる。妾聞く、女子の常理は二庭(一一)を踐まずと。又先舅の時〻古の烈女を語るを聞くに、其の稱述せらるゝ者、或は苦を嘗め、或は死を致し、以て其操を易へず。今や夫妾を去らず。妾奈何ぞ自ら去るを求めん。且つ祿有りて配し、祿無ければ則ち離る、不義焉れより大なるは莫し。假令再醮(一二)以て身錦繡を纏ひ、口粱肉(一三)に飽くとも、豈に願ふ所ならんやと。父母之を奪ふ(一四)こと能はず。然るに猶ほ愛を垂れ、時時睽離(一五)を勸めて置かず。而も母の堅操(一六)回らず。遂に先子に從ふ。其先子に事ふるや、儼として孟光(一七)の風有り。先子世を終るに至るまで、二十八年一日の如し。又其姑に侍するや、孝養備に至る。其の始めて江戸に來り、市中に僑居(一八)するや、

者如レ林。而多謝ニ絶之一。九月病レ疫。原芸菴。松本尙齋。措レ劑無レ驗。至ニ閏九月四日一。竟不レ起。年僅半百。先子及門人。相議定ニ宅兆于江戸城北諏訪山子院洞泉寺一。以レ禮葬焉。後建レ石勒ニ銘序一。芥彥章撰。

百。先子及び門人、相議して宅兆(五)を江戸城北諏訪山の子院洞泉寺に定め、禮を以て葬る。後石を建てて銘序(六)を勒す。芥彥章の撰なり。

(一)四年　(二)流行病　(三)藥劑を投ずれども効果なし　(四)五十歲　(五)墓地　(六)ほりつける

吾母土井侯臣。秋田重信女也。年十六歸ニ先子一。居一年祖病沒。先子服除襲就レ仕。亡レ何以レ病致仕。不レ允。猶乞不レ止。以レ是獲レ罪。禁錮匝年。終削レ籍。當ニ

吾が母は土井侯の臣、秋田重信の女なり。年十六にして先子に歸す。居ること一年にして祖病んで沒す。先子服除(一)して襲いで仕に就く。何もなく病を以て致仕(二)す。允されず。猶ほ乞うて止まず。是を以て罪を獲、禁錮匝年(三)、終に籍を削(四)らる。初め其の辭を乞ふに當つて、母、父母を省す。父母、母に謂つて曰く、汝の爲に壻を擇ぶ時、以爲へらく、原氏の子才行(五)有り、又其祿を言へば、則ち二百石なりと。是を以て之に妻す。豈に謂はんや、世を嗣ぐに及び、祿其半を減ぜんとは。然れども猶ほ以て飢うること無かる可し。其の仕を辭するに至つて

年僅十有九。祖記二其墓一曰。爲レ人嚴毅。雖二遊朋羣居之時一。未三嘗及二聲色財利之事一。瑜嘗謂行且長成。箕裘之託吾其無レ憂焉。如何不幸未レ冠而夭。又及レ去二唐津一。別レ墓詩云。寂寞空山一片碑。趨レ庭憐爾學レ詩時。面容髣髴猶如レ見。涙滴丘前春樹枝。次諱恭胤。字敬仲。即吾先子也。次諱光寛。四歳夭。

又唐津を去るに及び、墓に別るゝ詩に云ふ、寂寞たる空山(九)一片の碑、庭に趨り(一〇)て憐む爾詩を學ぶの時、面容髣髴(一一)として猶ほ見るが如し、涙は滴る丘前春樹の枝と。次、諱は恭胤、字は敬仲、即ち吾が先子(一二)なり。次、諱は光寛、四歳にして夭す。

(一)家の學問　(二)十年　(三)嚴格　(四)遊び友達と一座する時　(五)淫らなる聲不正の色及び金錢上のことを口にせず　(六)大成す　(七)父祖の業を託し繼がしむるに足れりとなり、箕裘とは父祖の業をつぐこと　(八)二十歳に及ばずして早死す　(九)人氣なき山　(一〇)孔子の子鯉庭に夫子の前を趨りし故事よりして、家庭の教育を受くる義にいふ　(一一)顔つきありありと眼に見る如し　(一二)父

明和丁亥秋八月。携二先子一遊二江戸一。是時都下人士。聞二祖名一。來求レ謁

明和丁亥(一)の秋八月、先子を携へて江戸に遊ぶ。是時都下の人士、祖の名を聞き、來つて謁を求むる者林の如し。而して多くは之を謝絶す。九月疫(二)を病む。原芸菴・松本尙齋、劑(三)を措いて驗なし。閏九月四日に至り竟に起たず。年僅に半(四)

清商一。祖妙通二象胥一。或吟二詩餘一唱二小曲一。西人咸咋レ舌。侯大喜。侯又至二福濟寺一。寺主支那僧也。其所藏書畫數十品出示。侯亦使二祖鑒一レ之。其工拙眞僞皆能辨別。或彼不レ能レ讀者。一覽輒讀レ之。侯亦大喜。歸藩之後賞二賚之一。

ぶ。侯又福濟寺(六)に至る。寺主は支那の僧なり。其所藏の書畫數十品を出し示す。侯亦祖をして之を鑒せしむ(七)。其の工拙眞僞(八)皆能く辨別す。或は彼の讀むこと能はざる者も、一覽輒ち之を讀む。侯亦大に喜ぶ。歸藩の後之を賞賚す(九)。

(一) お伴　(二) 通譯　(三) 塡詞、一定の曲調あり、之によりて詞を作る歌曲　(四) 小歌　(五) 驚嘆す　(六) 長崎の禪寺　(七) 鑒別せしむ　(八) 上手と下手、眞物と贋物　(九) 賞はほむ、賚は賜與

祖有二丈夫子三人一。長諱良胤。字朴伯。號二一菴一。幼穎敏。篤二志於家學一。而先レ祖七年卒。以二寶曆庚辰六月七日一。

祖に丈夫子三人有り。長、諱は良胤、字は朴伯、一菴と號す。幼にして穎敏、志を家學(一)に篤うす。而るに祖に先だつこと七年にして卒す。寶曆庚辰(二)六月七日を以てす。年僅かに十有九。祖其墓に記して曰く、人となり嚴毅(三)、遊朋群居(四)の時と雖も、未だ嘗て聲色財利(五)の事に及ばず。瑜嘗て謂へらく、行々且つ長成(六)せば、箕裘(七)の託吾れ其れ憂なしと。如何ぞ不幸未だ冠(八)せずして夭せると。

後爲二一家說一。與二伊藤氏一迥異。而作二疑藤一不二縱辨一之者。不レ忍レ背二舊師一也。

㊀ 死す　㊁ 指導

祖好二音律一。在二古河一日。邀二日光樂師上松是雙者一。學レ笙盡二其道一。祖所二常玩一之笙名二海棠一。蓋畫以二海棠一故名焉。先子善二橫笛一。門人古館尙淳善二篳篥一。時合奏以爲レ娛。柴栗山。嘗自二京師一將レ往二佐野一。路過二古河一。攜レ琴來謁。爲彈二一曲一。

祖、音律を好む。古河に在りし日、日光の樂師上松是雙といふ者を邀へ、笙を學びて其道を盡す。祖の常に玩ぶ所の笙を海棠と名づく。蓋し畫くに海棠を以てするが故に名づく。先子横笛を善くし、門人古館尙淳篳篥を善くす。時々合奏以て娛を爲す。柴栗山、嘗て京師より將に佐野に往かんとし、路古河を過り、琴を携へ來り謁す。爲に一曲を彈ず。

㊀ 音樂　㊁ 笙に海棠の繪あり　㊂ 原善の父　㊃ 柴野栗山

嘗扈二君侯一至二長崎一。侯過二客館一。乃使三祖接二

嘗て君侯に扈して長崎に至る。侯客館に過る。乃ち祖をして淸商に接せしむ。祖妙に象胥に通ず。或は詩餘を吟じ小曲を唱ふ。西人咸舌を咋む。侯大に喜

儒。余以爲腐儒。古河老小杉元卿。嘗至江戸。聞之曰。渠無阿其族則可矣。至其譏誹之。則可不見以詰問乎。明日芸菴至。元卿盛氣相詰曰。余聞吾子毎以腐儒呼吾師雙桂先生。敢問有說否。曰。君未知之乎。夫古之大儒必貧困守陋閭。然公瑤家資頗富。是余所以目以腐儒也。元卿抵掌大笑。蓋以其腐富音近也。

る。元卿(五)盛氣相詰つて曰く、余聞く吾子(六)毎に腐儒を以て吾が師雙桂先生を呼ぶと。敢へて問ふ說有りや否やと。曰く、君未だ之れを知らざるか。夫れ古の大儒は必ず貧困陋閭(七)を守る。然るに公瑤家資(八)頗る富む。是れ余が目するに腐儒を以てする所以なりと。元卿掌を抵つて大笑す。蓋し其腐・富音近きを以てなり。

(一) 第一の伯父　(二) おほまかにしてすぐる　(三) 家老　(四) 親族にへつらふ　(五) 怒氣を含んで責め問ふ　(六) 足下　(七) むさぐるしき住居　(八) 家の資産

祖年十五出京。十九而歸。是歳東涯故矣。此受其提誨。實屬幼時。

祖年十五にして京を出で、十九にして歸る。是の歳東涯故(一)す。此れ其提誨(二)を受くる、實に幼時に屬す。後一家の說を爲す。伊藤氏と迥かに異なり。而も疑藤を作つて縱に之を辨ぜざるは、舊師に背くに忍びざればなり。

章曰。海西東轍迹巡。等二輩儒一建二大論一。考二古聖一不レ謬レ倫。命世傑先覺民。又曰。其紀レ事方二之武事一。如三老將用レ兵縱鬪不レ可レ禦。而自中二律度一。僧大潮曰。今士林操觚諸子。將二尸而祝一レ之。又曰。其途レ吾序。似レ讀二昭明文選諸賦一宏麗雄渾可レ誦也。先達有レ言。夫文則材取二諸文選一。余於二原文一亦云。服仲英初見。劇談半日。退而歎曰。至レ如二雙桂先生一。則文藪能事畢矣。

文藪の能事畢れりと。

(一)交際廣からず　(二)東涯　(三)後進學者中の頭　(四)仁齋の弟子藺嵎　(五)才すぐれてさとく學を好む　(六)學問ひろく文章上手　(七)名聞のために動かず　(八)利益を得るために分別をめぐらさず　(九)青木敦、昆陽と號す　(一〇)車の轍巡る、即ちあまねく至る　(一一)世に名ある傑士　(一二)ほしいまゝに兵をかけめぐらし、殆ど豫め測るべからずして、而も律度に中るが如し　(一三)士人文士　(一四)崇拜して其風に倣ふ義、莊子逍遙遊に出づ　(一五)梁の昭明太子蕭統なり、文選の編者　(一六)廣く美しくをゝし　(一七)先輩、蓋し徂徠をさす　(一八)文章は其の材料を文選より取る　(一九)服部元雄　(二〇)激論

祖之大舅芸菴。爲レ人廓達奇偉。以二良醫一振二一世一。每謂レ人曰。世稱二吾甥公瑤一爲二大

祖の大舅芸菴(一)、人と爲り廓達奇偉(二)、良醫を以て一世に振ふ。每に人に謂つて曰く、世吾が甥公瑤を稱して大儒と爲す。余以て腐儒と爲すと。古河の老小杉元卿(三)、嘗つて江戸に至り、之を聞きて曰く、渠其族(四)に阿る無きは則ち可なり。其の之を譏謗するに至ては、則ち見て以て詰問せざる可けんやと。明日芸菴至

去レ京。至三五十來没二于江戸一。僻二居唐津古河一。中間合二十三年。是以交道不二甚廣一。則世未レ有三實知レ祖者一。尙且稱レ之者。伊藤原藏。謂下幼學二其門一時上爲二後進領袖一。伊藤才藏曰。幼而穎敏嗜レ學。早有二神童之稱一。及レ長博學能文。不二爲レ名動一。不二爲レ利謀一。靑厚甫曰。有二良史之才一。芥彦

に僻居すること、中間合して二十三年。是を以て交道(一)甚だ廣からず。則ち世未だ實に祖を知れる者あらず。尙ほ且つ之を稱する者、(二)伊藤原藏は、幼にして其門に學べる時を謂つて、後進(三)の領袖と爲す。(四)伊藤才藏は曰く、幼にして穎敏(五)學を嗜む。早に神童の稱あり。長ずるに及び博學能文(六)、名の爲に動かず、利(八)の爲めに謀らずと。靑厚甫(九)は曰く、良史の才ありと。芥彦章(七)は曰く、海の西東轍迹(一〇)巡る、羣儒に等しうして大論を建て、古聖を考へて倫を謬らず、命(一一)世の傑先覺の民と。又曰く、其の事を紀する、之を武事に方ぶるに、老將の兵を用ふる縱騁(一二)すべからずして、而も自ら律度に中るが如しと。僧大潮は曰く、今士林操觚(一三)の諸子、將に尸(一四)して之を祝せんとすと。又曰く、其の吾を送る序、昭明(一五)の文選の諸賦を讀むに似たり。宏麗雄渾(一六)誦すべきなり。先達(一七)言へる有り、夫れ(一八)文は則ち材諸を文選に取ると。余原の文に於ても亦云はんと。服仲英(一九)初めて見、劇談(二〇)半日、退いて歎じて曰く、雙桂先生の如きに至つては、則ち

德何如。則類二大友眞鳥一。孰拜レ之爲二眞天子一。（眞鳥聚レ衆僭號。未レ幾天兵平レ之。雙桂集卷六論二先儒一條可二併見一）

藩中一士人。有二南條某者一。從二稻葉迂齋一學。嘗視下祖復二增彥敬一書中。凡人之有レ生。仁義禮智。其他百德皆性之所レ具焉。雖二則所一レ具焉也。猶是微矣之語上。不レ領二其旨一。因二祖門人古館尙淳恩田大雅一問レ之。祖叩二兩端一竭レ之。而彼猶守二朱說一。問答反復及二數十條一。古館恩田二子。筆二記其語一。名二聖學辨談錄一。亦足レ窺二吾家學大旨一。他日予將二刊布一。

藩中一士人南條某といふ者有り。稻葉迂齋に從つて學ぶ。嘗て祖が增彥敬に復する書中、凡そ人の生有る、仁義禮智、其他百德皆性の具する所(一)、則ち具する所と雖も、猶ほ是れ微なり。との語を視て、其旨を領せず(二)。祖の門人古館尙淳•恩田大雅に因つて之を問ふ。祖兩端(三)を叩いて之を竭す。而も彼猶は朱說を守り、問答反復數十條に及ぶ。古館•恩田の二子、其語を筆記し、聖學辨談錄と名づく。亦吾が家學の大旨を窺ふに足る。他日予將に刊布せんとす。

(一) 人性の中に具はれ　(二) 意味を了解せず　(三) 論語子罕篇の語、終始本末上下精粗、凡て正反兩面より說きつくすなり

自二年二十八

年二十八にして京を去りしより、五十、來りて江戸に沒するに至るまで、唐津•古河

又曰。徂徠每謂。宋儒說佛氏所謂徧一切法界。若論ニ佛異同一。則徂徠說。豈非下佛氏自ニ捨身信他念佛衆生攝取不捨說一轉化來上乎。

又曰く、徂徠每に謂ふ、宋儒の說は、佛氏の所謂徧一切法界(一)なりと。若し佛の異同を論ぜば、則ち徂徠の說、豈に佛氏の捨身信他念佛衆生攝取不捨(二)の說より轉化し來れるに非ざらんやと。

(一) 眞理はあらゆる現象世界に充滿すといふ說　(二) 自身を捨てて佛の功力を信じ佛陀を念ずれば佛陀は一切衆生ををさめ取りて捨つることなし

又曰。徂徠學。猶ニ演劇扮ニ聖人一也。服ニ堯之服一。誦ニ堯之言一。行ニ堯之行一。是堯而已矣。此孟子有レ爲言之。而徂徠恆引ニ徵其學一。果不レ問ニ其心與レ

又曰く、徂徠の學は、猶ほ演劇に聖人に扮するがごときなり。堯の服を服、堯の言を誦し、堯の行を行ふ。是れ堯のみと。此れ孟子爲にすること有つて之れを言ふ。而して徂徠恆に引いて其學を徵し、果して其心と德との何如を問はず。則ち大友眞鳥に類す。孰か之を拜して眞の天子とせん。(眞鳥衆を聚め僭號(一)す。未だ幾くならずして天兵之を平ぐ。雙桂集卷六先儒を論ずる條を併せ見る可し)

(一) 天子の稱をおかす

云。董卓使三呂布守二中閤一。而布私與二侍婢一情通。布不二自安一。遂刺二殺卓一。而演義添レ之。以二貂蟬連環計一。猶下宋儒以三易有二窮理二字一。添二許多格物致知說一。形氣章。添二許多體用理氣一。樂記天理人欲。添中許多本然氣質上。畢竟以下聖人未二嘗言一之說上敷二衍之一。此宋學不レ猶二演義三國志一乎。

貂蟬連環の計を以てす。猶ほ宋儒が易(五)に窮理の二字あるを以て、許多の格物致知(六)の說を添へ、形氣の章には、許多の體用理氣(七)を添へ、樂記の天理人欲には、許多の本然の氣質を添ふるがごとし。畢竟聖人の未だ嘗て言はざるの說を以て之を敷衍(八)す。此れ宋學は猶は演義三國志のごとくならずやと。

(一) 陳壽の三國志　(二) 董卓　(三) 奥座敷　(四) 演義三國志　(五) 易經　(六) 物にいたりて知をいたす　(七) 體は本體、用は作用、理は形而上の道、物を生ずるの本、氣は形而下の器、物を生ずるの具　(八) 意味を說き廣ぐ

又曰。宋儒精レ體粗レ用。物氏知レ用不レ知レ體。均レ之其失一耳。雖レ然寧爲二宋儒一不レ爲二物氏一。

又曰く、宋儒は體に精しうして用に粗なり。物氏は用を知つて體を知らず。之を均るに其失は一のみ。然りと雖も寧ろ宋儒たるも物氏たらざれ。

洙泗微響。謂是可下以庶中幾百世俟二聖人一而不上レ惑矣。其大意詳下于復二增彥敬一書中上。書既載二雙桂集一。茲不二復贅一。夫漢唐訓詁之學。於レ道無レ所レ得。至レ宋其所說大變。而大行。然亦非二聖人之旨一。此邦元寬以來。學者亦皆從二宋儒一。及二伊藤仁齋一始排レ之。物徂徠亦成二一家言一。與二海內士一別建二旗鼓一而馳。然其說去二聖人之學一者益遠矣。當二祖之時一。學者非レ朱卽物。非レ物卽藤。於レ是慨然作二非朱詰物疑藤三種一。與二洙泗微響一將二併以鐫一レ梓。而天早奪レ年。使二大業不一レ終。可二深惜一哉。

に從ふ。伊藤仁齋に及び始めて之を排す。物徂徠亦一家の言を成し、海內の士と別に(五)旗鼓を建てて馳す。然れども其說聖人の學を去ること益〻遠し。祖の時に當つて、學者朱に非ざれば卽ち物、物に非ざれば卽ち藤なり。是に於て慨然として非朱・詰物・疑藤の三種を作り、洙泗微響と將に併せて以て梓に鐫まんとす。而るに天早く年を奪ひ、大業をして終へざらしむ。深く惜むべきかな。

(一) 道德と人の性　(二) 再び述べず　(三) 字句の解釋　(四) 元和寬文以來　(五) 別に一家の說を立つ

祖曰。宋儒聖學演義也。陳志云。王允潛結二卓將呂布一。使レ爲二內應一。又

祖曰く、宋儒は聖學の演義なり。陳志(一)に云ふ、王允潛に卓の將呂布に結び、內應を爲さしむと。又云ふ、董卓、呂布をして中閤(二)を守らしむ。而るに布私に侍婢(三)と情通す。布自ら安んぜず、遂に卓を刺殺すと。而して演義(四)之に添ふるに、

雄姿如レ龍。然其亂氣亦如レ初。諸善レ騎者。各施二其術一而不レ得レ御。祖獨提二其驂一。躍而上レ之。則不レ假二鞭筴之威一。能安二其訓一。進退周旋。無レ不レ如レ意。有レ詩云。驕氣龍鍾村客家。三年虞坂苦二鹽車一。一朝忽獲二英雄駕一。飛電風生捲二白沙一。

役に苦しむをいふ、次に出でたる虞坂鹽車の故事に取りたる語 (四) かひば (五) 荒れ狂ひてやまず (六) 荒々しき氣象 (七) むちを以ておどさずとも命令通り (八) 猛しき氣象衰へて村人の家に飼はる (九) 戰國策に、昔騏驥鹽車を駕して虞阪を上る、遷延轅を負うて進む能はず云々、その故事に取りて駄馬扱をされしをいふ (一〇) 英雄に乘らるゝことを得 (一一) 馬の飛ぶこと速かなる形容

祖奮然以二究レ道治一レ經爲レ志。於二漢儒以來諸說一。無レ所レ不レ窺。久之以爲咸不レ得二聖人之旨一。遂立二自己見一。以二論孟一爲二根據一。細講二道德性命一。嘗著二一書一。名曰二

祖、奮然道を究め經を治むるを以て志と爲し、漢儒以來の諸說に於て、窺はざる所無し。久しうして以爲へらく、咸聖人の旨を得ずと。遂に自己の見を立て、論孟を以て根據と爲し、細かに道德(一)性命を講ず。嘗て一書を著し、名づけて洙泗微響と曰ふ。謂へらく、是れ以て百世聖人を竢つて惑はざるに庶幾かると。其大意、增彥敬に復する書中に詳かにす。書既に雙桂集に載す。茲に(二)復贅せず。夫れ漢唐訓詁の學(三)は、道に於て得る所無し。宋に至り其所說大に變じて、大に行はる。然れども亦聖人の旨に非ず。此邦元寬(四)以來、學者亦皆宋儒

常帶ニ二劍柄飾。以レ金彫ニ畫櫻花一。亦表ニ其不一レ能レ忘也。

家畜ニ二馬一。一名ニ蓬萊一。一名ニ瑤池一。蓬萊仙臺產。駿駔異レ常。初某侯出ニ重價一求購。而踶嚙不レ可レ近。遂鬻レ之。於レ是厄ニ于鹽車一。又奪ニ其飼秣一。祖聞レ之曰。惜哉不レ展ニ其能一。而暴戾自縱。此御レ之者。惟由レ不レ得ニ其術一耳。因復買ニ之數金一。乃使ニ一食盡ニ一石粟一。則

家に二馬を畜ふ。一は蓬萊と名づけ、一は瑤池と名づく。蓬萊は仙臺の產にして、駿(一)駔常に異なり。初め某侯重價を出して求購す。而して踶嚙(二)近づく可からず。遂に之を鬻ぐ。是に於て鹽車(三)に厄められ、又其飼秣(四)を奪はる。祖之を聞いて曰く、惜いかな其能を展べずして、暴戾(五)自ら縱にする、此れ之を御する者、惟其術を得ざるに由るのみと。因つて復之を數金に買ひ、乃ち一食に一石の粟を盡さしむ。則ち雄姿龍の如し。然るに其亂氣(六)亦初の如く、諸〻の騎を善くする者、各〻其術を施して御するを得ず。祖、獨り其駿を捉り、躍つて之に上れば、則ち鞭策(七)の威を假らずして、能く其訓に安んず。進退周旋、意の如くならざるは無し。詩有り云ふ、驕氣龍鍾(八)たり村客の家、三年虞坂(九)鹽車に苦む。一朝忽ち英雄(一〇)の駕を獲、飛電(一一)風生して白沙を捲くと。

(一) 駿は馬のすぐれたること、駔はあらくして勢壯なること　(二) 或は蹴り或は嚙みつく　(三) 駄馬とせられて勞

有レ幾哉。吾烏敢當レ之。且已應二其召一。義不レ可レ辭也。遂適二唐津一。閱二十八年一。歸二遊于京一。途遇二東洋一。東洋握二祖手一。嘆曰。使下平平庸器皆列二貴顯一。而海内名士屏中處僻遠上。信有レ命哉。

在二唐津一日。掘レ地遇二髑髏一。其夕月明見二窗紙有二女子影一。出視則無。家人大怖。祖讀書自如。頃笑謂二先子一。時年十二三。曰。是狐狸之所レ爲。兒將レ弓射レ之。於レ是女影自滅。

唐津に在りし日、地を掘つて髑髏に遇ふ。其夕月明窗紙に女子の影有るを見る。出でて視れば則ち無し。家人大に怖る。祖、讀書自如たり。頃あつて笑つて先子（時に年十二三）に謂ふ。曰く、是れ狐狸の爲す所。兒弓を將つて之を射よと。是に於て女の影自ら滅す。

(一) 家の障子　(二) 常とかはらず

嘗遊二芳野一賞二櫻花一。耽戀三日不レ能レ去。遂折二一枝一攜去。後制爲レ杖。終身手レ之。其所二

嘗て芳野に遊び櫻花を賞す。耽戀三日去ること能はず。遂に一枝を折つて携へ去る。後制して杖と爲し、終身之を手にす。其の常に帶ぶる所の二劍の柄飾、金を以て櫻花を彫畫す。亦其の忘るゝこと能はざるを表すなり。

(一) 深くめで賞すること三日間　(二) 柄の飾

祖兼善レ醫。其居レ京。遠近來請レ治者。屨恆滿二戶外一。時土井侯召二良醫一。祖幡然應レ聘而起。山脇東洋來謂曰。請勿レ就レ辟。君學富量深。它日必當下遇二三顧之人一。以竟中其用上矣。如二醫術一。於二他人一可レ稱。於レ君乃末技耳。以二末技一屈二仕僻遠之藩一。甚惜レ之。祖曰。於乎如二子之所レ言者。宇宙

祖兼ねて醫を善くす。其の京に居るや、遠近來つて治を請ふ者、屨恆に戶外に滿つ。時に土井侯良醫を召す。祖幡然(一)聘に應じて起つ。山脇東洋來つて謂つて曰く、請ふ辟に就くことなかれ。君は學富み量深し(二)。它日必ず當に三顧(三)の人に遇ひ、以て其用を竟ふべし。醫術の如き、他人に於ては稱す可きも、君に於ては乃ち末技(四)のみ。末技を以て僻遠(五)の藩に屈仕す。甚だ之を惜むと。祖曰く、於乎子の言ふ所の如き者、宇宙(六)幾かある。吾れ烏ぞ敢へて之に當らん。且つ已に其召に應ず。義辭す可からざるなりと。遂に唐津に適く。十八年を閱し京に歸遊す。途東洋に遇ふ。東洋祖の手に握り、嘆じて曰く、平平(七)たる庸器をして皆貴顯に列し、而も海內の名士をして僻遠に屏處せしむ(八)。信(九)に命有るかなと。

(一) 飜然に同じ、心をひるがへして　(二) 學豐かにして器量すぐる　(三) 蜀漢の劉備自ら孔明を南陽の草廬に三顧す、其故事により値遇の人をいふ　(四) 末のわざにして本技に非ず　(五) 片田舍　(六) 世界　(七) 平凡の人物　(八) 片田舍に籠り居る　(九) まことに天命なり

異二於羣兒一。十歲受二章句于伊藤東涯一。漸長嗜レ學如二飢渴一。口誦手錄。晝夜不レ廢。父母內奇レ之。而過二慮其或得一レ疾。諭曰。下レ帷發憤成人之事。兒今童年。惟學無二間斷一可也。祖曰。蚤起尋二思文字一。覺二心下鬆爽一。稍晏則頭岑岑心裏不二甚安一。人或曰。其先美濃守以二驍勇一著。此子他日亦有下以二文事一大過上レ人。

他日亦文事を以て大に人に過ぐる有らんと。

㊀武田信玄の號 ㊁生れながらにして才すぐる ㊂案讀 ㊃口に讀み手に書きうつす ㊄思ひ過す ㊅書齋の帷を垂れこめて苦學するは大人のこと ㊆頭の中すきてさつぱりとする ㊇朝寢 ㊈頭のやめる貌 ㊉武勇を以て世に名高し

年十四喪レ父。哀毀過レ禮。服闋之二大坂一。既而來二江戶一。依二舅氏原芸菴一。與二青厚甫高子式呂玄丈輩一。往還論レ文。居三歲。念レ母不レ已。乃赴二大坂一。母尋病沒。治レ喪茹レ痛。遂復歸レ京。

年十四、父を喪ひ、哀毀禮に過ぐ。服闋つて大坂に之く。既にして江戶に來り、舅氏原芸菴に依り、青厚甫・高子式・呂玄丈輩と、往還して文を論ず。居ること三歲、母を念うて已まず。乃ち大坂に赴く。母尋いで病沒す。喪を治め痛を茹ひ、遂に復京に歸る。

㊀怨み痛むこと禮に過ぐ ㊁青木敦、字は厚甫。惟馨、字子式 ㊂茹痛含辛の語あり、蓋し痛嘆するをいふ

家祖原瑜。字公瑤。小字三右衞門。號二雙桂一。又號二尙菴一。平安人。仕二唐津侯一。侯後移二封古河一祖之父曰二光茂一。小字三右衞門。甲斐武田機山公之將原虎胤美濃守六世之孫也。住二平安一不レ仕。娶二原芸菴女一。芸菴居二平安一。其子亦襲稱二芸菴一。居二江戸一。共以レ醫名。以二享保三年十月十三日一生レ祖。祖生而凝儁

家祖原瑜、字は公瑤、小字は三右衞門、雙桂と號す。又尙菴と號す。平安の人。唐津侯（侯後に古河に移封せらる）に仕ふ。

祖の父を光茂といふ。小字は三右衞門、甲斐武田機山公の將原虎胤（美濃守）六世の孫なり。平安に住して仕へず。原芸菴（一）（芸菴平安に居る。其子、亦芸菴を襲稱して江戸に居る。共に醫を以て名有り）の女を娶り、享保三年十月十三日を以て祖を生む。祖生れて（二）凝儁羣兒に異なり。十歳にして章句（三）を伊藤東涯に受く。漸く長ずるや學を嗜むこと飢渴せるが如く、口誦手錄（四）して、晝夜廢せず。父母内に之を奇として、其の或は疾を得んことを過慮（五）す。謂つて曰く、帷を下して（六）發憤するは成人のことなり。兒は今童年、惟學に間斷無ければ可なりと。祖曰く、蚤に起きて文字を尋思すれば、心下鬆爽（七）を覺ゆ。稍安（八）すれば則ち頭岑岑と（九）して心裏甚だ安からずと。人或は曰く、其先美濃守驍勇（一〇）を以て著る。此子

而甚重ニ梅龍ー。其與ニ梅龍ー書曰。鴻少時游ニ平安ー。從ニ宇先生ー歲餘。藩命有レ限。未レ盡レ請レ益而歸。無レ何先生逝矣。乃後數歲。以ニ藩命ー之ニ東武ー。道過ニ平安ー。卽訪ニ林生ー。相與謁ニ先生墓ー。感泣不レ能レ已也。林生乃謂ニ不佞ー。子何不下一見ニ武兄ー而定中交也。其人才學富贍。且奉ニ宇先生敎ー有レ年矣。鴻不佞遂介ニ林生ー見ニ足下ー焉。則不ニ唯典刑之存ー。其言之似ニ夫子ー。使ニ人感喜交併ー矣。

有り、未だ益を請ふことを盡さずして歸る。何もなく先生逝く。乃ち後數歲、藩命を以て東武(二)に之く。道平安(三)を過る。卽ち林生を訪ひ、相與に先生の墓に謁し、感泣已む能はず。林生乃ち不佞に謂ふ、子何ぞ一たび武兄(四)を見て交を定めざるや。其人才學富贍(五)、且つ宇先生の敎を奉じて年有りと。鴻不佞遂に林生を介して足下を見る。則ち唯典刑(六)の存するのみならず、其言(七)の夫子に似たる、人をして感喜交併(八)せしむと。

(一)頭分　(二)江戸　(三)京都　(四)武田梅龍　(五)才すぐれ學問ゆたか　(六)宇野士新の學の典刑が梅龍に存す　(七)言も亦士新先生に似る　(八)悲しみと喜びと一所に起る

家祖原瑜

藝文。兼名二于武事一。其憶レ昔歌。東山年少抱二雄圖一。學レ弓走レ馬讀二孫吳一。腰間龍劒金轆轤。睥二睨靑雲一常烏呼。飜然折レ節改二前途一。自見當年君子儒。又宇士新有二贈詩一云。閉レ關憐二我久一。說レ劒愛二君深一。又墓碣記云。少時習二武技一。講二明孫吳之書一。居常曰。絳灌無レ文。隨陸無レ武。不レ可レ稱二全士一也。

ふ、東山（一）の年少雄圖（二）を抱き、弓を學び馬を走らせて孫吳（三）を讀む。腰間の龍劒金轆轤、靑雲を睥睨（四）して常に烏呼す。飜然（五）節を折つて前途を改む。自ら見る當年君子の儒と。又宇士新贈詩有り云ふ、關を閉ぢて我が久しきを憐み、劒を說いて君が深きを愛すと。又墓碣の記に云ふ、少時武技を習ひ、孫吳の書を講明す。居常曰く、絳灌（六）文無く、隨陸（七）武無し。全士（八）と稱す可からざるなり。と。

（一）美濃の出なればいふ　（二）大志　（三）孫子と吳子と、兵書なり　（四）にらみつく　（五）心をかへ志を曲げて未來の方針を改む　（六）漢の絳侯周勃と灌嬰なり、共に高祖の功臣、武ありて文なし　（七）漢の隨何と陸賈共に高祖に仕へ、辯口あり　（八）完全なる人物

赤松國鸞出二於同門一。其學亦領二袖一時一。

赤松國鸞、同門に出でて其學亦一時に領袖たり。而して甚だ梅龍を重んず。其の梅龍に與ふる書に曰く、鴻、少時平安（一）に游び、宇先生に從ふこと歲餘。藩命限

名維嶽。字峻卿。中名亮。字士明。私ニ謚文靖。美濃人。梅龍本姓武田氏。其先處ニ三河篠田村一。故世世以ニ篠田一爲レ氏。梅龍初襲稱レ之。明霞遺稿中稱ニ篠士明一者是也。後雖レ復レ本。亦省レ田爲ニ單姓一。少年師ニ伊藤東涯一。東涯爲作ニ維岳字峻卿說一以勗レ之。而年二十一。東涯下世。乃有ニ祭文一。於レ是從ニ宇士新一。居十年士新亦異レ世。乃有ニ哭詩一。此時學既大成。終召爲ニ妙法院親王侍讀一。

は士明、文靖と私謚す。美濃の人。

梅龍、本姓は武田氏、其先三河篠田村に處る。故に世世篠田を以て氏と爲す。梅龍初め襲いで之を稱す。明霞遺稿中篠士明と稱する者は是れなり。後本に復すと雖も、亦田を省いて單姓と爲す。少年のとき伊藤東涯を師とす。東涯爲に維岳字峻卿の說を作り以て之を勗む。而るに年二十一、東涯下世(一)す。乃ち祭文有り。是に於て宇士新(二)に從ふ。居ること十年にして士新も亦世を異(三)にす。乃ち哭詩有り。此時學既に大成す。終に召されて妙法院親王の侍讀と爲る。

(一) 死す　(二) 宇野士新　(三) 死す

梅龍非ニ特通ニ

梅龍特に藝文に通ずるのみにあらず、兼ねて武事に名有り。其の昔を憶ふ歌にい

濬水以二經義一爲レ任。頗有二春臺之風一。熊耳長技在二文章一。殆追二南郭一。而交相善。熊耳謂爲三久要有二兄弟之誼一。

濬水、經義を以て任と爲し、頗る春臺の風有り。熊耳の長技文章にあつて、殆ど南郭を追ふ。而も交り相善し。熊耳謂つて久要兄弟の誼有りと爲す。

(一) 經書の義を明らむるを任務とす　(二) 長所は文章にあり　(三) 久しき要約

濬水有二一男一。以二多病不レ堪二家學一故。養二片山兼山一爲レ子。兼山不レ喜二徂徠說一。是以不レ得二終承一レ歡而出。於レ是以二姪德修字子業一爲レ後。

濬水に一男有り。多病家學に堪へざるを以ての故に、片山兼山を養つて子と爲す。兼山、徂徠の說を喜ばず。是を以て終に歡を承くるを得ずして出づ。是に於て姪の德修字は子業を以て後と爲す。

(一) 養父の意に諧はず

武欽繇

武欽繇。字聖謨。號二梅龍一。初

武欽繇、字は聖謨、梅龍と號す。初名は維嶽、字は峻卿、中ごろ名は亮、字

絶句解拾遺。南留別志。校刻皆成二灊水手一。其所二自著一。辨道考。辨名考。絶句解考證。絶句解拾遺考證。亦皆以レ領二會徂徠意一爲レ主。

灊水莊重嚴毅。師道卓然。有二列侯請レ教者一。則先書二待レ己之儀一。致レ之而後往。井金峨匡正錄曰。近世諸老應二諸侯之招一。豫期二之禮待一。有下曰三苟不レ如レ是則我不二敢見一者上。夫不レ見則已。唯見而禮不レ至。亦可二以去一レ之耳。惡有下先爲二之極一而後往者上乎。金峨此言於レ義不レ爲レ乖也。雖レ然。世之學レ道而苟合取レ容者。觀二於灊水一可レ無レ慚乎。

灊水、(一)莊重嚴毅、師道卓然たり。列侯の敎を請ふ者有れば、則ち先づ(二)己を待つの儀を書し、之を致して後往く。(三)井金峨の匡正錄に曰く、近世の諸老、諸侯の招に應ずるや、豫め之が禮待を期し、苟も是の如くならざれば則ち我れ敢へて見ずといふ者有り。夫れ見ざれば則ち已む、唯だ見て禮至らざれば、亦以て之を去る可きのみ。惡ぞ先づ之が(四)極を爲して後往く者有らんやと。金峨の此言は義に於て乖くと爲さざるなり。然りと雖も、世の道を學んで(五)苟合容れられんことを取る者、灊水に觀ば慚無かる可けんや。

(一)おもくしく嚴重 (二)自己の待遇法を書き上げる (三)井上金峨 (四)法を定め置きて往く (五)人の意を迎へて說の一致をはかること

越二武功一是以。子孫綿綿稱二宇佐美一。中葉雖レ微不レ至レ絕レ祀。自二來爰居一數二世于此一。服二農及レ賈。家以レ富起。雖レ多二豪宗一。曾莫二共比一。翁繼二其業一益以不貲。鳴レ鐘食レ鼎幾二乎千指一。聚斯散レ之亦唯是理。賑二及鄕鄰一多恃湘錡。上下略

を繼いで益〻以て不貲、(八)鐘を鳴し(九)鼎に食するもの千指に幾し。聚れば斯に之を散ずる亦唯だ是理のみ。鄕鄰を賑及し多く恃んで湘錡す。(一〇)（上下を略す。）

(一) 大内能耳　(二) 祝詞　(三) 藤原氏　(四) 連綿して絕えざるさま　(五) 家亡びて先祖の祭を絕つ　(六) 農業と商業　(七) 豪家　(八) 財甚だ豐か　(九) 合圖の鐘を鳴らして食事するもの千人ばかり　(一〇) 祖先の祭祀をなすとなり、詩の召南采蘋篇にこゝに以て之を湘(に)る維れ錡及び釜にとあり。則ち蘋を摘み、錡卽ちあしがなへにて煮て祖先に供ふるをいふ

灊水篤信二徂徠一。畢レ力校二刻其遺著一。雖二高足弟子一。所レ不レ及也。如二四家雋。古文矩。文變考。絕句解。

灊水篤く徂徠を信じ、力を畢して其遺著を校刻す。高足の弟子と雖も、及ばざる所なり。四家雋・古文矩・文變考・絕句解・絕句解拾遺・南留別志の如き、校刻皆灊水の手に成る。其の自ら著す所、辨道考・辨名考・絕句解考證・絕句解拾遺考證、亦皆徂徠の意を領會するを以て主と爲す。

川。居近之。因號濔水。父習翁好學有志。濔水年十七。父命來江戸。師事徂徠。乃在其塾者僅三年。徂徠沒。未全得徂徠之旨。則留與社友相劘切。居六年携板美中歸鄕。即以美中爲食客。日資切劘。久之學大進。再來江戸。住芝三島街。開門授徒。晩以儒顯仕出雲侯。與聞其政有勞勤云。

事す。乃ち其塾にあること僅に三年にして、徂徠没す。未だ全く徂徠の旨を得ず。則ち留つて社友と相劘切す。(二)居ること六年、板美中(三)を携へて鄕に歸る。即ち美中を以て食客と爲し、日に切劘を資け、久しうして學大に進む。再び江戸に來り、芝三島街に住し、門を開いて徒に授く。晩に儒を以て出雲侯に顯仕す。其政に與聞(四)して勞勤有りといふ。

(一)今の上總國夷隅郡　(二)互に學德をみがく　(三)板倉美中　(四)參與す

濔水家世居南總。以豪富聞。熊耳壽濔水父頌曰。翁本大姓系乎藤氏。先著北

濔水の家世ゝ南總に居り、豪富を以て聞ゆ。熊耳(一)、濔水の父を壽する頌(二)に曰く、翁の本の大姓は藤氏に系す。(三)先は北越に著れ武功是以ふ。子孫綿綿(四)宇佐美と稱す。中葉微なりと雖も祀(五)を絶つに至らず。來つて爰に居りしより此に數世、農(六)と賈とに服し、家富を以て起る。(七)豪宗多しと雖も曾て共に比するなし。翁其業

者。乞レ診者亦履恆盈レ戸。不レ勝二其煩一。而亦足三以消二閒曠一也。又與二秦貞父一書曰。不佞近狀無レ可レ聞者一。醫事頗劇。不レ堪二其煩一。雖レ然。疾下夫世醫趨レ利不レ攻二其術一。巧言飾レ拙。斃二人於非命一不仁甚上矣。是以黽勉從レ事。亦唯乘輿濟レ人之類。祇足三以取二誹笑一也。

事に從ふ。亦唯、乘輿人を濟すの類（一一）、祇に以て誹笑を取るに足ると。

（一）醫術　（二）匙加減、調劑　（三）やつがれ　（四）多くして常に絶えず　（五）ひまをつぶす　（六）秦守節、字は貞夫、長州の人、周南門　（七）お耳に入れること無し　（八）世上の俗醫　（九）非業の死をとげさす　（一〇）つとめはげむ　（一一）衞の大夫子產重職にありながら、輿を以て人を濟す。根本を忘れて末節の仁を事とする意

宇惠

宇惠。字子迪。小字惠助。號二灊水一。本姓宇佐美。修爲レ宇。南總人。仕二出雲侯一。灊水生二于南總夷灊郡一。郡有レ川。曰二夷灊

宇惠、字は子迪、小字は惠助、灊水と號す。本姓は宇佐美、修して宇となす。

南總の人。出雲侯に仕ふ。

灊水は南總夷灊郡に生る（一）。郡に川有り、夷灊川といふ。居之に近し。因て灊水と號す。父習翁學を好み志有り。灊水年十七、父の命にて江戸に來り、徂徠に師

王以㆓斌媚脆弱㆒而成㆓一家㆒。後世書家無下不レ被㆓其毒㆒者上也。至レ畫亦然。自下狩野氏以㆓浮靡輕佻㆒投㆓世俗之好㆒擅中譽當時上。吠レ聲逐レ臭之徒。靡然嚮レ風。觀レ此鴿臺於㆓書畫㆒亦可レ謂レ有レ識矣。春臺嘗稱爲㆓西海第一之才子㆒。非㆓虛聲讚揚㆒也。

(一)王羲之　(二)ほめ尊ぶ　(三)手をとりあつて睦ぶ　(四)王羲之　(五)尊圓法親王、伏見天皇の第六子、天台座主、青蓮院宮門主、御家流の一派を開く　(六)女々しく弱々し　(七)多くの犬が一犬の聲に吠え立て、蠅が臭を逐ふ如く、多くの俗人が其あとに從ふ　(八)一樣に　(九)お世辭の賞讚

又兼好㆓軒岐術㆒。交㆓山脇玄飛。香川太冲。吉益周助輩㆒。喜㆓所謂古醫方㆒。不レ屑㆓宋明後之說㆒。其七劑屢有レ效云。與㆓奈大夏㆒書曰。不佞在レ斯。勿レ論㆓乞レ詩乞レ書乞レ講邀飮

又兼て軒岐の術を好み、山脇玄飛・香川太冲・吉益周助輩と交る。所謂古醫方を喜び、宋・明後の說を屑とせず。其七劑屢〻效有りと云ふ。奈大夏に與ふる書に曰く、不佞斯にあり。詩を乞ひ、書を乞ひ、講を乞ひ、邀へ飮む者を論ずるなく、診を乞ふ者も亦履恆に戶に盈つ。其煩に勝へざるも、而も亦以て間曠を消すに足れりと。又は秦貞父に與ふる書に曰く、不佞近狀聞す可き者無し。醫事頗る劇しく、其煩に堪へず。然りと雖も、夫の世醫の利に趨り其術を攻めず、巧言拙を飾り、人を非命に斃すの不仁甚しきを疾む。是を以て黽勉

與余爲方外寡二之交者。可見平生贈答。而事尤詳於此集序文。爰偶辱其來訪。臨別賦此詩以謝。兼寄和子蕁。詩曰。遲日青山黄鳥啼。堪歎陶令訪幽棲。城中靈運若相問。爲道送君過虎溪。

ることなし、一日陶淵明、陸修靜の二人之を訪ふ、三人與に語るに其道よく合す、惠遠乃ち與に乗じ二人を送つて思はず虎溪を過ぎ、三人顔見あはせて大笑せりといふ、此詩は即ち龍鶴臺を陶令に比し、無隠自らを惠遠に比し、互に其心の合せるを悦べるなり

雑華集又載。生能書。其嗜義之筆法者。與余同辨。因爲此詩相嘉尙。詩曰。相逢文雅友。把臂意何親。逸少墨池月。千里照兩人。鶴臺與南塘先生書曰。本邦之書。自尊圓

雑華集又載す、瀧生書を能くす。其義之(一)の筆法を嗜むこと、余と辨を同じうす。因て此詩を爲つて相嘉尙(二)す。詩に曰く、相逢ふ文雅の友、臂(三)を把て意何ぞ親しむ。逸少(四)墨池の月、千里兩人を照す、と。鶴臺南塘先生に與ふる書に曰く、本邦の書、尊圓(五)王が嫵媚(六)脆弱を以て一家を成ししより、後世の書家其毒を被らざる者無きなり。畫に至つても亦然り。狩野氏が浮靡輕佻を以て世俗の好に投じ、譽を當時に擅にせしより、聲(七)に吠え臭を逐ふの徒、靡然(八)として風に嚮ふ、と。此を觀れば鶴臺書畫に於ても亦識有りと謂ふ可し。春臺嘗て稱して西海第一の才子と爲すこと、虛聲(九)の讃揚に非ざるなり。

鶴臺旁博窺二釋氏書一。殆極二其說一。行狀曰。最精二佛學一。其在二海北一。傾二佛藏一究二其旨一。藩宿僧無隱無學輩。皆極二推服一。其他緇徒不レ得二其說一。則有二就而質焉者一。又無隱禪師雜華集載。謝二瀧彌八來訪一詩引曰。瀧生實天下奇才也。無レ論二其深達二儒術一言語炙輠。傍精二吾佛學一。以レ故

鶴臺旁ら博く釋氏の書を窺ひ、殆ど其說を極む。行狀に曰く、最も佛學に精し。其の海北(一)に在るや、佛藏を傾けて其旨を究む(二)。藩の宿僧無隱・無學の輩、皆推服を極む。其他緇徒(三)其說を得ざれば、則ち就いて質す者有り。又無隱禪師の雜華集に載す、瀧彌八の來訪を謝する詩の引に曰く、瀧生は實に天下の奇才なり。其の深く儒術に達し言語炙輠(四)たるは無論、傍ら吾が佛學に精し。故を以て余と方外寡二(五)の交を爲すこと、平生の贈答に見る可し。而して事尤も此集の序文に詳なり。爰に偶〻其來訪を辱うす。別に臨み此詩を賦し以て謝し、兼て和子蓦に寄す。詩に曰く、遲日(六)青山黃鳥(七)啼く、歡に堪へたり陶令(八)が幽棲(九)を訪ふを、城中靈運(一〇)若し相問はば、爲に道へ君を送つて虎溪(一一)を過ぐと。

(一) 長門 (二) 藏經のあるかぎり教旨を研究す (三) 僧侶 (四) 輠は車の油を注入する所にして、之をあぶれば油出でて止まず、轉じて辯說水の流るゝが如く少しもよどみなきをいふ (五) 佛徒以外の二無き友 (六) 春のながき日 (七) うぐひす (八) 陶淵明なり、以前に彭澤の令たりしよりいふ (九) 世俗をのがれたる幽邃なる住居 (一〇) 晉の謝靈運をいふ、以て和子蓦に喩ふ (一一) 晉の惠遠法師廬山に居ること三十餘年、客を送るに未だ嘗て虎溪を過ぎた

紀平洲小語曰。長門瀧長愷彌八。在ㇾ鄕飮二于一權貴一。酒酣問曰。凡爲ㇾ治和漢孰難易。彌八曰。漢難和易。曰何也。曰彼使下不學之人居中政職上。則必恥ㇾ受二其制一。我雖三不學之人爾居二政職一。而下亦不ㇾ恥ㇾ受二其制一。所二以彼難我易一也。合坐失ㇾ色。其人以告ㇾ君。君曰。諷二刺公等一。唯是此老。又曰。彌八豪邁不ㇾ能ㇾ屈ㇾ物。然與ㇾ聞二善言美行一。淚必交ㇾ睫。

紀平洲(一)の小語に曰く、長門の瀧長愷彌八。鄕にありて一權貴(二)に飮む。酒酣にして問うて曰く、凡そ治を爲す、和漢孰か難易なる、と。彌八曰く、漢難く和易し、と。曰く何ぞや、と。曰く彼は不學の人をして政職に居らしむるときは、則ち必ず其制を受くるを恥づ(三)。我は不學の人爾く政職に居ると雖も、而も下亦其制を受くるを恥ぢず。彼難く我易き所以なり、と。合坐色を失ふ(四)。其人以て君に告ぐ。君曰く、公等を諷刺(五)するは、唯だ是れ此老のみ、と。又曰く、彌八豪邁にして物に屈すること能はず。然れども善言美行(六)を與り聞くときは、淚必ず睫に交る、と。

(一) 細井平洲　(二) 貴人　(三) 命令を受くるを恥とす　(四) 一座のもの顏色を變ず　(五) 暗にそしり諫む　(六) 善い言葉りっぱな行爲を人より聞く時は淚がまつげににじみ出る

瀧長愷。字彌八。號二鶴臺一。長門人。仕二本府一。鶴臺本姓引頭氏。爲レ後二於瀧一。遂蒙二其姓一。自レ幼英邁好レ學。其居レ鄕。從二周南一承二徂徠之說一。後來二江戶一。時徂徠沒已三年。乃遊二南郭門一。南郭異二其才一。不三視以二弟子一。既而去到レ京。又之二長崎一。英二所レ往而不レ重二其才學一。再來二江戶一。則名聲大起。從遊甚多。寶曆癸未。韓使來聘。於レ是奉二君命一歸レ鄕接二伴之一。韓使嘆二其學該博有力一云。

瀧長愷、字は彌八、鶴臺と號す。長門の人。本府に仕ふ。鶴臺、本姓は引頭氏、瀧に後たり、遂に其姓を蒙る。幼より英邁學を好む。其の鄕に居るや、(一)周南に從つて徂徠の說を承く。後江戶に來る。時に徂徠沒して已に三年なり。乃ち南郭の門に遊ぶ。南郭其才を異とし、視るに弟子を以てせず。既にして去つて京に到る。又長崎に之く。往く所として其才學を重んぜざるはなし。再び江戶に來る。則ち名聲大に起り、(二)從遊甚だ多し。寶曆癸未(三)、韓使來聘す。是に於て君命を奉じて鄕に歸り之に接伴す(四)。韓使其の學の該博有力(五)なるを嘆ずと云ふ。

(一) 山縣周南　(二) 從ひ學ぶ者　(三) 十三年　(四) 應接す　(五) 廣くして力有り

誠一而送。謂曰。元禎今日欲レ送レ君。有二公事一不レ果。故使二見代一焉。直方曰。異哉言也。先生已辱自臨二常山一曰。今日送レ君者。寡君所レ命。非二私送一也。余則使二見代送一耳。

(一)幕府　(二)交情親密　(三)町外れに見送る　(四)不思議なお言葉　(五)自分自らの見送りに非ず

井四明撰二行狀一曰。先生壯歲喪レ父。哀毀過レ禮。衰以爲レ襯。三年不レ脫。毎旦往拜二其墓一。慟哭而歸。二十五月而止。喪レ母亦若レ斯。値二其忌日一。必薦二所レ嗜者一。告以二生日之語一。哭泣失聲而已。

(一)井四明、行狀を撰びて曰く、先生壯歲父を喪ひ、(二)哀毀禮に過ぐ。(三)衰以て襯と爲し、三年脫せず。毎旦往いて其墓を拜し、慟哭して歸る。二十五月にして止む。母を喪ふも亦斯の如し。其忌日に値へば、必ず嗜む所の者を薦め、告ぐるに(四)生日の語を以てし、(五)哭泣失聲するのみ。

(一)井上潛、字は仲龍、四明を號す、岡山の儒官　(二)悲み痛むこと禮以上なり　(三)喪服を以て襯絆となす　(四)生前の時の言　(五)聲をあげて泣き口をきけず

瀧長愷

常山恒好レ武。其文集紀ニ古名將事一者極多。著ニ常山紀談一。亦索ニ戰國死レ義伏レ節。忠臣勇者之迹一。或考ニ覈異傳雜說一。此皆出ニ于好レ武之心一也。每戒ニ子弟一曰、苟爲ニ武士一者。寧廢ニ文事一。勿レ廢ニ武事一。

常山恒に武を好む。其文集古名將の事を紀する者極めて多し。常山紀談を著はし、亦戰國の義に死し節に伏せし忠臣勇者の迹を索め、或は異傳雜說を考覈す。此れ皆武を好むの心に出づるなり。每に子弟を戒めて曰く、苟も武士たる者、寧ろ文事を廢するも、武事を廢するなかれと。

(一)異なる言ひ傳へ、色々の說を研究しらべる

常山與ニ大府代官野口直方ニ小字辰之助。友善。直方嘗任ニ備中倉敷一。及ニ其去一而赴ニ江戸一也。侯令ニ常山送ニ之於郊外一。常山携ニ男子

常山、大府の代官野口直方(小字は辰之助)と友として善し。直方嘗て備中倉敷に任す。其の去つて江戸に赴くに及ぶや、侯、常山をして之を郊外に送らしむ。常山男子誠を携へて送り、謂ひて曰く、元禎今日君を送らんと欲し、公事有りて果さず。故に兒をして代らしむと。直方曰く、異なるかな言や。先生已に辱なくも自ら臨まると。常山曰く、今日君を送るは、寡君の命ずる所、私送に非ざるなり。余則ち兒をして代り送らしむるのみと。

庇ニ覆衆人一。然危言刺譏無レ所レ避。終乃被ニ貶黜一。從レ是杜レ門謝レ客。著書自娯。答ニ松崎子允一書曰。禎也豈敢砥ニ厲廉隅一。鼓ニ簧名聲一乎。亦唯非ニ公事一。未ニ嘗至ニ於權貴之門一。十有七年一日。其所ニ自信一是已。又復ニ觀海一書曰。禎也行行之性。狂愚悻直。不レ識ニ機微一。危言無レ所レ忌。亦且抑レ强植レ弱。當路所レ惡。以ニ此數事一。當ニ衆口鑠レ金之日一。其及也宜矣。幸賴ニ寡君仁恕一。特從ニ末減一。使ニ明善襲ニ祿。補ニ黑衣之缺一。執ニ人臣之事一。君恩不レ可レ不レ知也。

ば、未だ嘗て權貴の門に至らず。十有七年一日、其の自ら信ずる所是れのみと。又觀海に復する書に曰く、禎や(一一)行行の性、(一二)狂愚悻直、(一三)機微を識らず、危言忌む所無し。亦且つ强を抑へ弱を植つ。(一四)當路の惡む所、此數事を以て、衆口(一五)金を鑠すの日に當る。(一六)其の及ぶや宜なり。幸に寡君(一七)の仁恕に頼り、特に末減(一八)に從ひ、明善をして祿を襲はしめ、(一九)黑衣の缺を補ひ、人臣の事を執る。君恩知らざる可からざるなりと。

(一) 毅然として立つ　(二) 一身を忘れて國事に從ふ　(三) ごまかしかくせるを詰問し租税の未納なるをさめしむ　(四) 證書　(五) たすけかばふ　(六) 危言は正言高議、刺譏はそしる　(七) 役をおとししりぞく　(八) 廉直の節をみがき立つ　(九) 名前評判を世に吹き立てる　(一〇) おかみの用事　(一一) ばか正直　(一二) 剛直なる性質　(一三) 人情の微密なる所を知らず　(一四) 役人　(一五) 多人數の讒言に遇ふ　(一六) 當路のにくしみがかゝるも尤も　(一七) 備前侯のお慈悲　(一八) 罪科輕減　(一九) 黑衣は戎衣、故に侍衞の士を斥す

寛延庚午。奉二侯命一赴二讚之丸龜一。海上風濤驟起。舟將二覆沒一。衆皆無二生色一。常山神色自若。朗吟曰。南溟奉レ使使臣槎。直破長風萬里波。忽値怒濤似二奔馬一。起提二雄劍一叱二龍鼉一。其豪氣如レ此。

寛延庚午(一)、侯命を奉じて讚(二)の丸龜に赴く。海上風濤驟かに起り、舟將に覆沒せんとす。衆皆生色(三)なし。常山神色自若(四)、朗吟して曰く、南溟(五)使を奉ず使臣の槎、直に破る長風萬里の波、忽ち値ふ怒濤奔馬に似たるに、起つて雄劍を提げて竈鼉(六)を叱すと。其豪氣此の如し。

(一)三年　(二)讚岐　(三)生きたる顏色　(四)顏色少しも變らずおちつき拂つて　(五)南の海　(六)大すつぽんやわに、海の怪物なり

常山爲レ人方正特立。忘レ身徇レ國。數歷二要職一。其所レ爲賑レ貧救レ窮詰レ慝擧レ滯。或使二訟者自恥無一レ言。或焚二契券一。以

常山人となり方正(一)特立(二)、身を忘れて國に徇ふ。數〻要職を歷、其の爲す所貧を賑し窮を救ひ慝(三)を詰り滯を擧ぐ。或は訟者をして自ら恥ぢて言無からしむ。或は契券(四)を焚き以て衆人(五)を庇覆す。然れども危言刺譏(六)避くる所無く、終に乃ち貶黜(七)せらる。是より門を杜ぎ客を謝し、著書自ら娛む。松崎子允に答ふる書に曰く、禎や豈に敢へて廉隅(八)を砥厲(九)し、名聲を鼓簧せんや。亦唯公事(一〇)に非らざれ

湯元禎。字之祥。小字新兵衞。號二常山一。姓湯淺。修爲二湯氏一。備前人。世仕二國侯一。常山父子傑。素好レ學。常山結髮受二庭訓一知レ讀レ書。時其藩有二曹子漢者一。悅二伊物之說一。常山兄二事之一。勉學不レ倦。年二十四來二江戸一。是時取二贄南郭一。專修二古文辭一。無レ幾還レ鄕。後八年復來二江戸一。與二春臺及蘭臺觀海諸名人一結レ交。一時嘖嘖有二輿稱一云。

湯元禎、字は之祥、小字は新兵衞、常山と號す。姓は湯淺、修して湯氏と爲す。備前の人。世國侯に仕ふ。

常山の父子傑、素學を好む。常山結髮(一)より庭訓(二)を受けて書を讀むことを知る。時に其藩に曹子漢(三)といふ者あり。伊・物の說(四)を悅ぶ。常山之に兄事し、勉學倦まず。年二十四、江戸に來る。是時贄(五)を南郭に取り、專ら古文辭を修む。幾もなく鄕に還る。後八年復江戸に來り、春(六)臺及び蘭臺(七)・觀海の諸名人と交を結び、一時嘖嘖(八)として輿稱(九)ありと云ふ。

(一) 少年　(二) 家庭教育　(三) 八田憲章字は子漢、備前の人　(四) 伊藤仁齋・物徂徠等の說　(五) 束脩を納む、入門す　(六) 太宰春臺　(七) 井上蘭臺　(八) 口々にはめる　(九) 一般の好評

湯元禎

論多中レ綮。門人増井彦敬亦以レ儒有レ名。同仕二小倉一爲二教授一。石増二先生文抄行二于世一。彦敬嘗修二書吾祖一以求レ交。祖復書曰。蓋石子逝後獲二其所レ著辨道解蔽者一而讀レ之。亡論其與二鄙見一頗有二異同一。然其大要有大合二於鄙夷一者上。乃潸然者久之曰。夫聖遠道湮。諸家紛然。晩生後學匪レ無二墻面一。而能卓爾出レ羣。可三以爲二後進之木鐸一者。方今僅有二石子輩一而已。奚爲斯人而長逝矣哉。

はる。彦敬嘗て書を吾が祖に修め以て交を求む。(三)祖の復書に曰く、蓋し石子逝いて後其著す所の辨道解蔽といふ者を獲て之を讀む。亡論其鄙見(四)と頗る異同有り。然れども其大要大に鄙夷(五)に合する者有り。乃ち潸然(六)たること久しうして曰く、夫れ聖遠く道湮み(七)、諸家紛然として、晩生後學(八)墻面(九)する無きにあらず。而して能く卓爾(一〇)として羣を出で、以て後進の木鐸(一一)たるべき者、方今僅かに石子輩有るのみ。奚爲ぞ斯の人にして長逝するやと。

(一) 彈は彈劾、はじき斥くるなり、刺はそしる　(二) 穴、即ち急所に當る　(三) 書狀を送つて交際を求む　(四) 自分の意見　(五) 上に同じ　(六) さめ〳〵と泣く貌　(七) 道衰ふ　(八) 後進の學者　(九) 垣に面する如く一物も見えず一歩も進めず　(一〇) 羣をぬけるさま　(一一) 先導者

麟洲自ㇾ幼好ㇾ學負二才氣一。先輩皆期二其有ㇾ成。初從二柳滄洲堀南湖一學。比二弱冠一。其父拉來二江戸一。見二某生一。生即出二修辭家所ㇾ作艱澀文一試ㇾ之。麟洲一目輒成ㇾ誦。生驚器二重之一。及ㇾ壯應二小笠原侯徵一。誘二掖後進一。其啓迪作興之功尤多。寶曆己卯。省二父于京一。會疾作遂不ㇾ起。時年五十有三。

麟洲幼より學を好み才氣を負ふ。先輩皆其の成るあらんことを期す。初め柳滄洲●堀南湖(一)に從つて學ぶ。弱冠(二)の比、其父拉して江戸に來り、某生に見ゆ。生卽ち修辭家の作す所の艱澀(三)なる文を出して之を試む。麟洲一目輒ち誦を成す。生驚いて之を器重す。壯に及び小笠原侯の徵に應じ、後進を誘掖(四)す。其啓迪作興(五)の功尤も多し。寶曆己卯(六)、父を京に省(七)す。會ゝ疾作り遂に起たず。時に年五十有三なり。

㊀堀正修、字は身之、南湖と號す、順庵門　㊁二十歳頃　㊂解し難き文　㊃たすけ導く　㊄啓迪は敎へ導く、作興は鼓舞する　㊅九年　㊆歸宅して親の安否を訪ふ

麟洲嘗著二辨道解蔽一。彈二刺徂徠學一。其持

麟洲嘗て辨道解蔽を著し、徂徠の學を彈刺(一)す。其持論多くは竅(二)に中る。門人增井彦敬亦儒を以て名有り。同じく小倉に仕へ教授たり。石增二先生文抄世に行

蘭臺養二戸口氏之子一爲レ嗣。潛字仲龍。號二四明一。學博行修。早有二重名一。今年八十七。矍鑠能談レ古。男觀字賓王。亦承二儒職一。有二孫四人一。長天祥。字徴民。次天覺。字先民。次天祐。字順民。次天爵。字錫民。皆善士也。蓋蘭臺德澤之所レ及云。

蘭臺戸口氏の子を養つて嗣と爲す。潛字は仲龍、四明と號す。學博く行修り、早に重名有り。今年八十七、矍鑠(一)として能く古を談ず。男觀字は賓王、亦儒職を承く。孫四人有り。長は天祥、字は徴民。次は天覺、字は先民。次は天祐、字は順民。次は天爵、字は錫民。皆善士なり。蓋し蘭臺が德澤(二)の及ぶ所といふ。

(一) 年老いて元氣盛なるさま　(二) 德風の餘澤が子孫に影響す

石川正恆

石川正恆。字伯卿。小字平兵衛。號二麟洲一。平安人。仕二小倉侯一。

石川正恆、字は伯卿、小字は平兵衛、麟洲と號す。平安の人。小倉侯に仕ふ。

成二一家一。勿下立二吾籬下一以後上人。金峨後立二自己見一。而尙稱二父執蘭臺先生一。終身師事焉。

(一) 門下 (二) 父の友

嘗瘞二齒于牛島牛女祠畔一。立レ石表レ之。使二金峨作一レ記。東江書丹一。蘭臺沒後。東江以爲字未レ工。乃易レ石改書。蓋初以レ楷。後以二八分一。

嘗て齒を牛島の牛女祠畔に瘞め、石を立てて之を表し、金峨をして記を作り、東江をして書丹せしむ。蘭臺の沒後、東江以爲へらく、字未だ工ならずと。乃ち石を易へて改書す。蓋し初め楷を以てし、後八分を以てす。

(一) 東京向島牛の御前祠内 (二) 字の一書體、小篆と隷書との中間に在り

蘭臺自レ少絕二婬欲一。其於二婦人一。無二老少一不レ欲レ交二一語一。訪二人所一。雖レ方二宴飮爲レ歡時一。婦女出則速辭去。

蘭臺少より婬欲を絕つ。其婦人に於ける、老少となく一語を交ふるを欲せず。人所を訪ひ、宴飮歡を爲す時に方ると雖も、婦女出づれば則ち速かに辭し去る。

(一) 酒を飮み興ず

渤之不可測也。人性亦猶舟楫也。舟楫遵海而濟。則百萬之粟可運而致焉。雖然乎。海與舟楫。非一物也。人性守道而行。則億兆之衆可教而用焉。雖然乎。道與人性。非一物也。又曰。熙幼孤貧。無師保之訓。雖然哉。誦詩而知有雅頌。讀書而知有堯舜。然後困學二十年如一日。益信仲尼之道。何暇及宋儒滕物二家也哉。宋儒不知聖人。不足與言之。滕維楨自稱古學。不免宋儒之弊。物茂卿作為二辨。又著論語徵庸學解。亦唯與二義及定本發揮奚擇哉。有所緣飾而駁仁齋者。亦果是耶。非耶。熙之所未知也。

る法　(二)盲目　(三)つんぼ　(四)わきまへ調べる　(五)心性研究は學問の第一目的に非ず　(六)心性の事は孔子言ふ所罕也、性の論思孟にはじまる　(七)子思の中庸と孟子　(八)其の弊害やころびたふれて大なる沼澤の中に陷る　(九)溪水涸れてかちにて渡る　(一〇)大洋　(一一)運搬し得べし　(一二)億兆の民衆も之を教化して使用し得　(一三)蘭臺の名　(一四)貧にして頼る所なく師の教訓を受けず　(一五)詩經は内容を風、雅、頌の三に分類す。風は風俗歌、雅は更に小大の二ありて、小雅は燕饗の樂、大雅は朝會の樂、頌は宗廟の樂歌　(一六)苦學　(一七)孔子　(一八)伊藤仁齋と物徂徠　(一九)伊藤仁齋　(二〇)文飾する

井上金峨受業于蘭臺。蘭臺友視之。不待以弟子。毎謂曰。子誠有才者也。自當

井上金峨、業を蘭臺に受く。蘭臺之を友視し、待つに弟子を以てせず。毎に謂つて曰く、子は誠に才有る者なり。自ら當に一家を成すべし。吾が籬下に立つ(一)て以て人に後るゝことなかれと。金峨後自己の見を立つ。而も尙ほ父執(二)蘭臺先生と稱し、終身師事す。

肆者往焉。豈辨ニ究之一哉。心性者非ニ學問之所ㇾ先也。是故六經不ㇾ論ㇾ之。孔子亦所ニ罕ㇾ言一也。思孟之書首唱。而後性道之說。紛紛競起。遂至ニ宋儒一而極矣。其弊也蹶然陷ニ于大澤一。又曰。夫古之聖王。立ㇾ道以使ニ天下之人由ㇾ之而行一者。豈如下谿壑水涸而可ニ徒跣一者上乎。道猶ニ溟

豈に谿壑(九)の水涸れて徒跣すべき者の如くならんや。道は猶ほ溟渤(一〇)の測る可からざるがごとし。人性は亦猶ほ舟楫のごときなり。舟楫海に遵つて漕がば、則ち百萬の粟(一一)運んで致す可し。然りと雖も、海と舟楫とは、一物に非ざるなり。人性道を守つて行はば、則ち億兆(一二)の衆も敎へて用ふ可し。然りと雖も、道と人性とは、一物に非ざるなりと。又曰く、熙(一三)幼にして孤貧(一四)、師保の訓無し。然りと雖も、詩を誦して雅頌(一五)あるを知り、書を讀んで堯舜あるを知る。然して後困學(一六)二十年一日の如く、益々仲尼(一七)の道を信ず。何の暇あつて宋儒滕物(一八)二家に及ばんや。宋儒聖人を知らず。與に之を言ふに足らず。滕維楨(一九)自ら古學と稱するも、宋儒の弊を免れず。物茂卿一辨を作爲し、又論語徵・庸學解を著すも、亦唯二義及び定本發揮と奚ぞ擇ばんや、緣飾(二〇)する所有りて仁齋を駁するは、亦果して是か、非か、熙の未だ知らざる所なりと。

(一) 孟子公孫丑上篇に在り。言語の上に間然する所ありとも心に泝つて反求する勿れの意。是告子の心を動かさざ

云二國厩一。則可レ問レ馬也。是孔子之私慨也。則重レ人賤レ畜。其義當レ然矣。讀レ不爲レ否者。固非二朱註之意一也。對問之語。載在二本集一。當時經筵不レ盡。依二朱註一。亦可レ見矣。享保中。講官物先生。奉二朝命一校二古註疏一。室先生亦與焉。編成進呈。悉以鋟レ梓頒二布天下一。七經孟子考文是也。伏惟朝廷之德意。先後各有レ所レ立。不二必相因一也。然則諸家之學。義雖二相反一。猶並二置之一。豈可二偏絕一哉。

（八）羅山の私謚　（九）經書を講ずる席　（一〇）論語「厩焚、子退レ朝曰、傷レ人乎、不レ問レ馬」の「不」を「否」とし「傷レ人乎否、問レ馬」といふ說につきての問答也　（一一）儒官物徂徠　（一二）片手落に棄てる

蘭臺一之學。有下頗似二徂徠一者上。澀井太室曰。蘭臺如下告子不レ得二于言一勿レ求二于心一。讀書會意。答二郇正舒一書。陳二其所見一。節二錄于左一。曰。夫道者如二大路一然。瞽者往焉。

蘭臺の學、頗る徂徠に似たる者有り。澀井太室曰く、蘭臺は、告子の言(一)に得ずんば心に求むる勿れ（讀書會意）の如しと。郇正舒に答ふる書に、其所見を陳す。左に節錄せん。曰く、夫れ道は大路の如く然り。瞽者(二)往き、聾者(三)往く。豈に之を辨究(四)せんや。(五)心性は學問の先にする所に非ざるなり。是故に六經之を論ぜず、(六)孔子も亦罕に言ふ所なり。(七)思孟の書首唱し、而して後性道の說、紛紛として競ひ起り、遂に宋儒に至つて極れり。(八)其弊や蹶然大澤に陷ると。又曰く、夫れ古の聖王、道を立てて以て天下の人をして之に由つて行かしむること、

先朝所ㇾ行。而後主必行者。漢武好二公羊一。宣帝不ㇾ當ㇾ立二穀梁一。其所ㇾ遇之時異也。國初官板諸書。亦皆非二宋儒所ㇾ著也。豈爲三盡取二程朱之說一哉。文敏公嘗侍二經筵一。進二講論語一。既焚章。神祖曰。讀ㇾ不ㇾ爲ㇾ否如何。曰。臣謂。可ㇾ問ㇾ人。亦可ㇾ不ㇾ問ㇾ馬乎。曰。然非二朱熹之解一也。臣愚以爲若

侍し、論語を進講す。(九)廐焚章にて、神祖曰く、不を讀んで否と爲すは如何と。曰く、臣謂ふに、人を問ふ可くんば、亦馬をも問はざる可けんやと。曰く、然らば朱熹の解に非らざるなり。臣愚以爲へらく、若し國廐と云はば、則ち馬を問ふ可きなり。是は孔子の私廐なり。則ち人を重んじ畜を賤む。其義當に然るべし。不を讀んで否と爲すは、固より朱註の意に非らざるなりと。對問の語、載せて本集に在り。當時經筵盡くは朱註に依らざること、亦見る可し。享保中、講官物先生、朝命を奉じて古註疏を校す。七經孟子考文是なり。編成つて進呈す。(一〇)悉く以て梓に鋟んで天下に頒布す。室先生亦與れり。伏して惟ふに、朝廷の德意、先後各立つる所有りて、必ずしも相因らざるなり。然れば則ち諸家の學、義相反すと雖も、猶ほ之を並置す。豈に編絶すべけんやと。(一一)

(一)程子の學　(二)批難反駁す　(三)漢の武帝　(四)春秋の公羊傳　(五)春秋の穀梁傳　(六)德川幕府の初世　(七)

序二山陽行錄一。稱二中子叔上也。山陽行錄。蘭臺所レ著。

蘭臺閉レ戸讀レ書。有二客至一。則自答以二不在一。客以爲レ戲。蘭臺勵レ聲曰。主人自答如レ此。何僞之有。讀レ書不レ輟。

蘭臺戸を閉ぢ書を讀み、客至る有れば、則ち自ら答ふるに不在を以てす。客以て戲と爲す。蘭臺聲を勵して曰く、主人自ら答ふる此の如し。何の僞か之れ有らんと。書を讀んで輟まず。

(一) 石島正猗、字仲緩、筑波は其號、南郭門

蘭臺不レ信二伊洛學一。嘗作二讀鳩巣室先生文一。非三駁其固守二朱説一。且擧下國家不三必依二宋儒一之證上曰。通煕竊以爲

蘭臺伊洛(一)の學を信ぜず。嘗て鳩巣室先生の文を作讀し、其の固く朱説を守るを非駁(二)す。且つ國家必ずしも宋儒に依らざるの證を擧げて曰く、通煕竊かに以爲へらく、先朝の行ふ所にして後主必ず行はば、漢武(三)公羊を好む、宣帝(四)當に穀梁を立つべからず。其の遇ふ所の時異なればなり。國初(五)官板の諸書、亦皆宋儒の著す所に非ざるなり。豈に盡く程朱の説を取れりとせんや。文敏公(六)嘗て經筵(七)に(八)

了心冒二母姓一。爾後世世沿二稱之一。父通翁字玄璠。大府醫員也。有二三男子一。伯玄存。襲二職祿一。仲蚤夭。叔則蘭臺也。幼穎敏好レ學。年十二。元日賦レ詩云。大邊雲物改。海上日華新。先酌屠蘇酒。趨レ庭獻二老親一。父異レ之。期以二他日盛名一。弱冠從二天野曾原一(名景胤)學。既而入二林鳳岡之門一。享保中。鳳岡奉レ旨校二官庫書一。蘭臺與焉。時未レ有二蘭臺號一。而人以二蘭臺一呼レ之。遂以爲レ號。元文五年。應二辟備前侯一。任二敎授之職一。

邊雲物改まり、海上日華新なり、先づ酌む屠蘇の酒、庭に趨つて老親に獻ずと。(七)父之を異とし、期するに他日の盛名を以てす。(八)弱冠、(九)天野曾原（名は景胤）に從つて學び、既にして林鳳岡の門に入る。享保中、鳳岡旨の奉じて官庫の書を校するや、蘭臺與れり。時に未だ蘭臺の號有らず。而るに人蘭臺を以て之を呼ぶ。遂に以て號と爲す。元文五年、辟に備前侯に應じ、教授の職に任ず。(一〇)

（一）晴賢叛して其の主大内義隆を弑す　（二）長男　（三）次男　（四）早死す　（五）三男　（六）空には雲のたゞずまひも改まり、海上には旭日新にさし昇る　（七）孔子の子鯉、字は伯魚嘗て庭に孔子の前を趨る。父母及び師等長者のもとに到るにいふ　（八）後日大名をあげんことを豫期す　（九）二十歲頃　（一〇）史官の異名

蘭臺字叔。而世以爲二子叔一者。自下石筑波

蘭臺字は叔。而して世以て子叔と爲すは、(一)石筑波山陽行錄に序して、子叔と稱せしによるなり。（山陽行錄は、蘭臺の著す所なり）

題殆遍。嘗結二茅堂于圓覺寺傍一。名二松濤館一。以爲二遊息所一。曰。吾死其即安レ此乎。乃建二壽碣一。松崎君修撰レ記。後三年卒二于江戸一。門人輿レ櫬往營二葬之一。

松崎君修記を撰ぶ。後三年、江戸に卒す。門人櫬を輿せ往いて之を營葬す。(五)

(一)名勝を愛するの情　(二)名士詩人　(三)勝景を評し之に題す　(四)生前の墓碑　(五)ひつぎ

井通熙。字叔。小字嘉膳。號二蘭臺一。又號二圖南一。姓井上。修爲二井氏一。江戸人。仕二備前侯一。蘭臺之先。周防大内氏族也。七世祖某。死二逆臣陶晴賢難一。某娶二井上氏一。生二了心一。

井通熙

井通熙、字は叔、小字は嘉膳、蘭臺と號し、又圖南と號す。姓は井上、修して井氏と爲す。江戸の人。備前侯に仕ふ。

蘭臺の先は、周防大内氏の族なり。七世の祖某、逆臣陶晴賢(一)の難に死す。某井上氏を娶り、了心を生む。了心母姓を冒す。爾後世世之を沿稱す。父通翁字は玄璠、大府の醫員なり。三男子有り。(二)伯は玄存、職祿を襲ぐ。(三)仲は蚤く夭す。(四)叔(五)は則ち蘭臺なり。幼にして穎敏學を好む。年十二、元日に詩を賦して云く、天(六)

鬢如レ絲。一自三蓬累歸二山阿一。貴賤貧富不二復知一。我肉既飫二鳥鳶腹一。我顱偶爾匹二鵙夷一。我形不レ須司命復。我魂不レ要宋玉辭。糟丘煙霞喚レ我起。知己誰如二山人奇一。山人日日摩二我頂一。饒然何利二天下一爲。出二離蓬蒿一厠二綺席一。子羽莫三謾嘲二支離一。我聞古酒人。一棺徒戢レ身。縱葬二陶家土一。何異二湘水濱一。涓滴不レ到劉伶冢。南州雞絮豈沾レ脣。淵明臨レ終不レ得レ足。畢卓了レ生不二復晨一。古來酒人孰如レ我。宿習綿綿醉二天眞一。不レ管功名朽不朽。不レ論形神親不親。未レ作阿梨七分破。常染酴醾萬斛春。君不レ見無功日月終二醉鄕一。酈生意氣盡二高陽一。中山千日偏苦レ短。百年三萬亦非レ長。嵆阮化爲二禍之父一。黃公壚下暗悲傷。笑殺人間北海守。何如地下南面王。自誇唯我酣暢哉。長夜濡レ首首作レ杯。子羽頭顱聞二此語一。同口責二子羽一。子羽汝爲二生頭顱一。彼爲二死頭顱一。生死頭顱亦奚擇。況勝二子璋血摸糊一。蹙頞不レ飲一何愚。汝今不レ飲歲將レ去。俛仰間與レ彼爲レ伍。

[四二] 名は食其、漢の陳留高陽の人、沛公に謁し、齊に說いて其七十餘城を下ししを以て有名なり [四三] 嵆康と阮籍、竹林の七賢の中 [四四] 朔北の北海郡に主たらんよりは死して地下の王となるべし [四五] 酒たけなはにして心のびやか [四六] 生きてゐるあたま [四七] 顏をしかめて酒を飲まず [四八] 俯仰の間に老死して死頭顱のなかまとならん

蘭亭故負二勝情一。喜二鎌倉山水奇麗一。歲一再與二名人韻士一相追隨。品

蘭亭故勝情(一)を負ふ。鎌倉の山水奇麗を喜び、歲に一再は名人韻士と相追隨し、品題(二)殆ど遍し。嘗て茅堂を圓覺寺(三)の傍に結び、松濤館(二)と名づけ、以て遊息の所と爲す。曰く、吾れ死せば其れ卽ち此に安ぜんかと。乃ち壽碣(四)を建て、

豪擧一。皆道山人達士流。座中一客字子羽。璧頰不ㇾ飲心獨憂。試問髑髏汝何幸。驚二駭甘夢一不ㇾ得ㇾ休。又問汝何物。奴耶隷耶將王侯。樽前搖ㇾ頭供二嬉笑一。若非二侏儒一必俳優。髑髏答言在ㇾ世時。只記沈湎飮二酒池一。又記朝戴二漉酒巾一。夕著二白接羅一。有ㇾ時興來稱二草聖一。脫帽何妨

らんとす。俛仰（べんぎやう）の間彼と伍（ご）を爲さんと。（四八）

（一）氣性大なり　（二）人の頭骨にて造れるさかづき　（三）清盛の子、一の谷の役敗れて擒となり鎌倉に送られし時白拍子千壽と狎る　（四）みだりの言を傳へ聞きて他に考へ合はせず　（五）一樣にあなどり罵る　（六）頓死　（七）秋山玉山　（八）手にとりてもてあそぶ　（九）死と生とを同一視し身體をわすれ世にぬきんでて自分のきまゝにす　（一〇）盛んなるふるまひ　（一一）璧はしかむ、頰は鼻ばしら、卽ち顏をしかむ　（一二）悟りのひらけざるをいふ　（一三）月氏とも書す、漢代に葱嶺の西にありし種族の稱　（一四）趙襄子知伯を亡ぼし其髑髏を飮器とす　（一五）蘭亭奇を好んで奇徹底す　（一六）秋山玉山の字　（一七）かほをしかめる　（一八）快き夢をさまされて休むことを得ざるか　（一九）酒樽の前に頭を動かして人々の笑ひに供す　（二〇）一寸法師　（二一）酒色におぼるゝこと　（二二）陶淵明酒熟する每に頭上の角巾を取りて酒を漉し畢りて後之を著く　（二三）帽の名、晉書山簡傳に出づ　（二四）草書の名人、書言故事に張旭大に醉ひて叫呼狂走し、醒めて草聖と稱すとあり、又杜甫の飮中八仙にも出でたり、凡て酒と關係ある事を以て此に引用す　（二五）蓬累は處々を流轉するなり、山阿は山のくま、卽ち山中に葬られしをいふ　（二六）酒を盛るべき革囊と匹偶を爲せり　（二七）楚辭宋玉の招魂をいふ　（二八）蘭亭を斥す　（二九）白骨の白々たるさま　（三〇）草むら　（三一）りつぱな席に連なる　（三二）秋山玉山　（三三）分散して全からず　（三四）吳の鄭泉平は酒を嗜む、死に臨んで曰く、願くは我を陶家の側に葬れ、後陶家に其の土を取られて酒壺となりたしと　（三五）一滴の酒　（三六）晉の人、字は伯倫、酒を好むを以て名あり　（三七）隣家の酒を盜飮せる人、晉書に見ゆ　（三八）酒を嗜む習慣綿々として絕えず醉ひて天眞の純性をあらはす　（三九）功名の後に傳はると傳はらざるとをかまはず　（四〇）形骸と精神　（四一）重ねて釀せる酒、又其色に似て晚春初夏に開く花の名、盞し梨に對する修辭にて、其常に酒に親しむ意をあらはす也

髏。乃幷序錄之。序曰。高子式山人達士也。置髑髏杯。時時把玩。一死生。遺形骸。超然自適焉。少年輩爭飮爲豪擧。予獨甓𤫿不能飮。衆笑予未達。因作髑髏杯行自嘲。衆爲髑髏解嘲。詩曰。既非月支頭。亦無知伯仇。山人好奇奇至骨。日盛美酒以髑髏。少年爭飮誇

利することを爲ん。蓬蒿を出離して綺席に厠る。子羽謾りに支離を嘲ることなかれ。我れ聞く古の酒人、一棺徒らに身を戢むと。縱ひ陶家の土に葬らるるも、何ぞ湘水の濱に異ならん、涓滴到らず劉伶が冢。南州の雞絮豈に脣を沾さんや。淵明終に臨んで足ることを得ず。畢卓生を了へて復晨せず。古來酒人孰か我に如かん。宿習綿綿天眞に醉ふ。管せず功名の朽不朽。論ぜず形神の親不親。未だ作さず阿梨七分破るゝを。常に染む醉醺萬斛の春。君見ずや無功が日月醉鄕に終り、酈生が意氣高陽に盡く。中山千日偏に短きを苦み、百年三萬亦長きにあらず。嵆阮化して禍の父と爲り、黃公壚下暗に悲傷す。笑殺す人間北海の守、何ぞ如かん地下南面の王。自ら誇る、唯我れ酣暢なるを。長夜首を濡して首杯と作る。子羽の頭顱此語を聞き、同口に子羽を責む。子羽汝は生頭顱たり、彼は死頭顱たり。生死頭顱亦奚ぞ擇ばん。況んや子璋が血摸糊たるに勝るをや。甓𤫿飮まず一に何ぞ愚なる。汝今飮まざれば歲將に去

佗攷一也。蔦蹊信レ之、以毀二蘭亭一。甚誤矣。凡爲二後學一者多厭二儒者一。一味慢罵。蔦蹊亦不レ免焉。蘭亭病者數月。終不レ起矣。非二暴卒一也。見二山惟熊撰墓誌一。余聞鎌倉今現有二大館次郎墓一。過者必就弔レ之。奈何其得レ發レ之乎。秋玉山蘭亭友人也。有二髑髏杯行詩一。陳レ不レ知レ爲二何人髑

こと能はず。衆予が未達(一二)を笑ふ。因つて髑髏杯行を作て自ら嘲り、兼ねて髑髏の爲に嘲を解く。詩に曰く、既に月支(一三)の頭に非ず、亦知伯(一四)が仇に非ず、山人奇を好んで奇骨に至る。日に美酒を盛るに髑髏を以てす。少年爭ひ飲んで豪擧(一五)を誇る、皆道ふ山人達士の流と。座中の一客字は子羽(一六)、蹙頞(一七)飲まず心獨り憂ふ。試に問ふ髑髏汝何の辜あつて、甘夢(一八)を驚駭して休することを得ざるか。又問ふ汝何物ぞ、奴か隷か將た王侯か、樽前頭(一九)を搖して嬉笑に供す。若し侏儒(二〇)に非らずんば必ず俳優ならん、髑髏答へて言ふ世にある時、只記す沈湎酒池(二一)に飲むを、又記す朝に漉酒巾(二二)を戴き、夕に白接䍦(二三)を著け、時有つて興來れば草聖(二四)と稱す。脫帽何ぞ妨げん鬢絲の如きを、一たび蓬累(二五)して山阿に歸せしより、貴賤貧富復知らず、我肉既に烏鳶の腹を飫かしめ、我が顱偶爾(二六)として鴟夷に匹す。我が形は須ひず司命の復するを。我が魂は要せず宋玉(二七)の辭。糟丘の煙霞我を喚び起す。知己(二八)誰か山人の奇に如かん。山人日日我が頂を摩す。皞然(二九)何ぞ天下を

而豪宕好ﾚ奇。常擧二髑髏杯一爲ﾚ飲。伴蒿蹊閑田次筆。引二百井塘雨筆記一曰。蘭亭於二鎌倉教恩寺一。得下平重衡與二舞妓千壽一爲ﾚ宴之杯上。自ﾚ此飲添ﾚ興。尙且不ﾚ足焉。發二大舘次郎墓一。制二髑髏杯一。以供二玩弄一。當二其發ﾚ墓也。大雷雨。而不二敢顧一。遂行二其意一。翌年此日暴卒。此傳二聞妄言一不二

閑田次筆に、百井塘雨の筆記を引いて曰く、蘭亭鎌倉教恩寺に於て、(三)平重衡が舞妓千壽と宴を爲しし杯を得、此より飲に興を添へ、尙ほ且つ足れりとせず。大館次郎の墓を發き、髑髏杯を制して、以て玩弄に供す。其の墓を發くに當つてや、大に雷雨す。而も敢へて顧みず、遂に其意を行ふ。翌年此日暴かに卒すと。此れ妄言(四)を傳聞して佗に攷へざるなり。蒿蹊之を信じ、以て蘭亭を毀る。甚だ誤れり。凡そ倭學を爲す者多く儒者を厭ひ、一味(五)慢罵す。蒿蹊も亦免れず。蘭亭病むこと數月、終に起たず。暴卒(六)に非ざるなり。山惟熊の撰する墓誌に見ゆ。余聞く鎌倉今現に大館次郎の墓有り。過ぐる者必ず就いて之を弔ふ。奈何ぞ其れ之を發くことを得んや。秋玉山(七)は蘭亭の友人なり。髑髏杯行の詩有り。何人の髑髏たるかを知らざるを陳ぶ。乃ち序を幷せて之を錄せん。序に曰く、高子式山人は達士なり。髑髏杯を置き、時時把玩(八)す。死生(九)を一にし、形骸を遺れ、超然自適す。少年輩爭ひ飲んで豪擧(一〇)と爲す。予獨り蹙頞(一一)して飲む

氏。一則多二姿色一。而拙二女工一。一則有二才徳一。而貌甚寢。吁才色並茂。自レ古爲レ難レ得焉。苟有二一於此一則足矣。余何之爲レ妻。祖曰。愛レ色者。目見而後心悦レ之也。未三始有レ見。則醜美何論。不レ如下納二其善二刺繡一以使上レ理二家事一也。蘭亭嘆曰。誠然。誠然。非二交以レ信。孰能言レ之。然終舍二才徳一娶二姿色一。夫婦人雖レ不二必責以レ徳。而亦不レ可三以レ色爲レ主也。蘭亭惑焉。果六娶終無レ子。

苟も此に一あれば則ち足れり。余何れをか妻とせんと。祖曰く、色を愛するは、(五)目見て後心之を悦ぶなり。未だ始より見ること有らずば、則ち醜美何ぞ論ぜん。如かず、其の刺繡に善きを納れて以て家事を理めしめんにはと。蘭亭嘆じて曰く、誠に然り。誠に然り。(六)交信を以てするに非ずんば、孰か能く之を言はんと。然るに終に才徳を舍てて姿色を娶る。夫れ婦人は必ずしも責むるに徳を以てせずと雖も、而も亦色を以て主と爲すべからざるなり。蘭亭惑ふ。果して六たび娶つて終に子無し。

(一)著者原善の祖父雙桂　(二)なかよくす　(三)なかうど女　(四)女の技藝　(五)才徳にても姿色にても一つのすぐれたるものあればよろし　(六)交際に忠信を主とするにあらずば誰かかく思ひきつていはん

蘭亭性善レ酒。

蘭亭性酒を善す。而して(一)豪宕奇を好み、常に(二)髑髏杯を舉げて飲を爲す。伴蒿蹊の

世有二蘭亭盲後書蹟一。此世人彊求者也。天履仁藏二數張一。嘗曰。人之喜二蘭亭書一。徒供二玩弄一耳。余不レ忍レ使三其蹟佗日逢二人媟黷一也。遂皆瘞二土中一。

世に蘭亭盲後の書蹟有り。此れ世人の彊ひて求むる者なり。天履仁数張を藏す。嘗て曰く、人の蘭亭の書を喜ぶこと、徒に玩弄に供するのみ。余其蹟をして佗日人の媟黷に逢はしむるに忍びざるなりと。遂に皆土中に瘞む。

（一）天沼履仁　（二）なれけがす

蘭亭詩。與レ人往復者。每屬二藤華岡一書レ之。故時人或謂二華岡一爲二蘭亭之書佐一。

蘭亭の詩にして、人と往復する者は、毎に藤華岡に屬して之を書す。故に時人或は華岡を謂つて蘭亭の書佐と爲す。

（一）伊藤華岡、江戸の書家　（二）書記

吾祖少年在二江戸一時。與二蘭亭一親善。嘗謂レ祖曰。余覓レ婚。媒媼云。有二二

吾が祖少年にして江戸に在りし時、蘭亭と親善す。嘗て祖に謂つて曰く、余婚を覓む。媒媼云ふ、二氏有り。一は則ち姿色に多くして女工に拙し。一は則ち才徳有りて、貌甚だ寢しと。吁才色並に茂なるは、古より得難しと爲す。

明大家之作。大氏暗二誦之一。其所二自賦一。殆入二佳境一。遂與二一時名士南郭翟一。聲譽並馳。紫芝園漫筆曰。胡元瑞詩藪云。唐人朱雍。初無二令譽一。及レ嬰二瞽疾一。詩名始彰。見二雲溪友議一。吾友高子式。年十七失レ明。厥後詩才漸高。豈造物之均邪。令二人不レ兼二有其長一也。抑造物之慈也。令下人失二於彼一得中於此上也。

て明を失し、厥後詩才漸く高し。豈に造物の均か、人をして其長を兼有せざらしむる。(七)抑ゝ造物の慈や、人をして彼に失ひ此に得しむると。(八)

(一)學問の大意　(二)盲目　(三)詩經に收むる所の詩三百篇　(四)絶妙の域に達す　(五)評判ならび高し　(六)よきはまれ　(七)造物者の公平　(八)視力を失ひて詩文に得

蘭亭生平擧止。盡俟二相者一。於レ是不レ爲二瞽者倀倀狀一。嘗曰。余明未レ喪時。不レ堪レ見二盲人動摸二索其左右一也。豈今效レ之乎。

蘭亭生平の擧止、盡く相者(一)を俟つ。是に於て瞽者倀倀(二)の狀を爲さず。嘗て曰く、余明未だ喪はざりし時、盲人の動もすれば其左右を摸索(三)するを見るに堪へざりき。豈に今之に效はんやと。

(一)介添人　(二)道をふみまよふさま　(三)さぐりまはる

古人集皆及二死後一人傳レ之也。至三其身自錄二之梓一。則可レ笑甚也。乃通二書于三角一以辨レ之。三角答書和二南溟一。俱駁二南郭一。既而世生前鏤二其詩文一者漸多。人亦稱爲二盛事一。三角心羨レ之。遂自刻二其集一。然恥二前言一。至二詩集一則用二隱名一。

高惟馨

高惟馨。字子式。號二蘭亭一。又號二東里一。本姓高野。裁爲レ高。江戶人。蘭亭父勝春。號二百里居士一。以二俳諧一名二于世一。蘭亭幼從二徂徠一學。既了二其大義一。而十七爲レ瞽。從レ是壹潛二心于詩一。三百篇以下。漢魏六朝唐

高惟馨、字は子式、蘭亭と號し、又東里とも號す。本姓は高野、裁して高と爲す。江戶の人。

蘭亭の父勝春は、百里居士と號し、俳諧を以て世に名有り。蘭亭幼にして徂徠に從つて學び、既に其(一)大義を了る。而るに十七にして瞽となる。是より壹に心を詩に潛め、(三)三百篇以下、漢・魏・六朝・唐・明大家の作は、(二)大氐之を暗誦す。其の自ら賦する所、殆ど(四)佳境に入り、遂に一時の名士南郭の輩と、(五)聲譽並び馳す。紫芝園漫筆に曰く、胡元瑞の詩藪に云ふ、唐人宋雍、初め(六)令譽無し。瞽疾に嬰るに及び、詩名始めて彰ると、雲溪友議に見ゆと。吾が友高子式、年十七にし

文。固不レ足レ志。言レ事似レ實レ直。答レ問嫌レ誇レ智。

三角集。文二卷。每二卷首一題二奧田士亭著一。詩三卷。每二卷首一題二揥水燕倉著一。揥水燕倉。不レ知二何謂一也。而近聞二其說一。伊勢有二櫛田川一。三角居近レ之。因曰二揥水一。而奧田反燕。士亭反倉。不三其見署二姓名一者。抑有レ故。南郭始刻二其集初編一也。入江南溟以爲

三角集、文二卷あり。卷首每に奧田士亭著と題す。詩三卷あり。卷首每に揥水燕倉著と題す。揥水燕倉とは、何の謂ひなるやを知らざるなり。而るに近ろ其の說を聞くに、伊勢に櫛田川有り。三角の居之に近し。因つて揥水と曰ふ。而して奧田の反燕、(一)士亭の反倉、其の見に姓名を署せざるは、抑〻故有り。南郭始めて其集の初編を刻するや、入江南溟以爲へらく、古人の集は皆死後に及び人之を傳ふるなり。其身自ら之を梓に鋟るに至つては、則ち笑ふ可きの甚だしきなりと。乃ち書を三角に通じ以て之を辨ず。三角答書南溟に和し、(二)俱に南郭を駁す。既にして世生前其詩文を鏤む者漸く多く、人亦稱して盛事と爲す。三角心に之を羨み、遂に自ら其集を刻す。然れども前言を恥ぢ、詩集に至つては則ち隱名を用ふ。

(一) 奧田（あうてん）の反切は燕（えん）、士亭（しかう）の反切は倉（さう）　(二) 贊成す

枝指一。苦苣忌ㇾ蜜鱔忌ㇾ醋。魚鱠用ㇾ蔘。坙ニ肚裏一。胡桃麻姑鯽蒜麥。葱麪鮎魚渾犯ㇾ雉。鰻鱺鰍鱔忌ニ川椒一。楊梅與ㇾ葱雀與ㇾ李。筍鰕畏ㇾ糖鷄畏ㇾ菌。莧鴨與ㇾ鼈休ㇾ同ㇾ錡。魚目有ㇾ睫腹丹字。鳥足不ㇾ伸是自死。鯽魚糖餅黃魚蕎。一犯永訣屍變ㇾ紫。醋鱔相犯。食經不ㇾ載。而余見ニ二人死者一以揭ニ廚壁一。

犯せば永訣屍紫に變ず。（醋(二二)・鱔相犯すこと、食經に載せず。而も余二人の死者を見る。以て廚壁に揭ぐ。）

(一) 讀みおぼえる　(二) 食ひ合せ　(三) 天門は天門冬といふ植物、砂糖漬にす、赤豆はあづき　(四) 葱はねぎ、蒜はにんにく、鼈はすつぽん、李はすもも、雞子は雞卵　(五) 棗はなつめ、菱はひし、酢はす、李はすもも　(六) 蝦の異稱　(七) 妊婦が桑椹卽ち桑の實、鮏、鱠卽ちなます、卵にしようがを混食すれば子にかさを生じ又は指の多き子を産むとなり　(八) ちさの一種　(九) キタゴ、鰻に似たる一種の魚　(一〇) 胃腸。坙の字原本のまゝ、或は坐の古文坙にて「肚裏に坐す」と訓ずべきか　(一一) 胡桃はくるみ、鯽はふな　(一二) 素麪と香魚とは雉にわるし　(一三) 鰻鱺はうなぎ、鰍はどぢやう、鱔はキタゴ　(一四) 蔘　(一五) やまもも　(一六) たけのことえび　(一七) 莧はひゆ、鴨はかも、錡は鍋の類　(一八) 魚の目にまつげを生じ、腹の丹の字のかたある時、又鳥の足ちゞんで伸びざるもの

三角集。巾箱本五卷。合三冊。詩文略有ニ諸體一。而缺ニ書牘一。曰。尺牘之

三角集は、巾箱本(一)五卷、合して三册。詩文略には諸體有り。而して書牘を缺く。曰く、尺牘(二)の文、固より志すに足らず。事を言ふは直(三)を賣るに似、問に答ふるは智を誇るに嫌ありと。

(一) 袖珍本　(二) 書簡文　(三) 己の眞直を見せびらかす

虧レ盈之戒一也。集中載二亭記及詩一。詩有下人間交際重二謙損一。天道循環警二滿虧一之句上。後偏好二物之三角一。自二文房諸具一。至二百雜器一。多製以二三角一云。

亭の記及び詩を載す。詩に、人間の交際謙損を重んず。(一)天道循環して滿虧を警むの句有り。後偏に物の三角なるを好み、文房諸具より、百雜器に至るまで、多く製するに三角を以てすと云ふ。

(一) 天道は次第にめぐりて滿つるものはかくるをいましむ

三角詩。其誦憶而益レ人者。食禁歌也。曰。天門赤豆勿レ食レ鯉。葱蒜鼈李惡二雛子一。棗菱酢李共畏レ蜜。無腸公子避二梨柹一。妊婦桑椹鯉鱠卵。子薑發レ瘡生二

三角の詩にて、其(一)誦憶して人を益する者は、(二)食禁の歌なり。曰く、(三)天門赤豆に鯉を食ふことなかれ、(四)葱蒜・鼈・李に雛子を惡む。(五)棗・菱・酢・李共に蜜を畏れ、(六)無腸公子に梨・柹を避く。(七)妊婦桑椹・鯉鱠・卵、子薑瘡を發し枝指を生ず。(八)苦苣蜜を忌み鱔に醋を忌む。魚鱠に蓼を用ふれば(一〇)肚裏を堅にす。(一一)胡桃・麻姑・鯽・蕎麥、(九)葱麪鮎魚渾て雉を犯す。(一三)鰻鱺・鰍・(一四)鱔は川椒を忌み、(一五)楊梅と葱、雀と李、(一二)筍・鰕糖を畏れ、鶉に菌を畏る。(一七)莧・鴨と鼈と鰤を同じうするを休めよ。(一八)魚目(一六)睫あり腹丹字、鳥足伸ばざるは是れ自ら死す。鯽魚と糖餅、黃魚と蕎、一たび

曰二先生一不レ名。

三角賦質謙讓。年七十七。恐下及二身後一人之撰中諛墓之文上。於レ是建二壽碣一。自紀二履歷一。其銘曰。起二于田間一。升二中廳直一。何以得レ之。稽古之力。

三角賦質謙讓なり。年七十七、身後に及び人の諛墓の文を撰ばんことを恐れ、是に於て壽碣を建て、自ら履歷を紀す。其銘に曰く、田間に起りて、中廳直に升る、何を以てか之を得たる、稽古の力なりと。

(一)うまれつき謙遜　(二)おもねりへつらひて作れる墓碑の文　(三)生前に設くる碑を壽といふ　(四)古道ををさめたる力

年三十三。喪レ父。翌年訣二東涯一。爲絶二酒肉一。服二心喪一者。合四年。

年三十三にして、父を喪ひ、翌年東涯に訣る。爲に酒肉を絶ち、心喪に服することと合せて四年なり。

(一)心中に喪を守る。古制師には心喪に服す

亭之名二三角一。傚二俞退翁一存二

亭の三角と名づくるは、俞退翁に傚つて、盈つるを虧くの戒を存するなり。集中に

奥田士亨。字嘉甫。小字宗四郎。號二蘭汀一。又號二南山一。又號二三角亭一。伊勢人。仕二津侯一。三角幼時。就二表叔柴田蘋洲者一學。蘋洲嘗詔曰。讀レ書宜レ師二天下第一人一。當二今之世一。京師伊藤原藏。卽其人也。汝可二往而學一。於レ是卽負レ笈遊二東涯門一。親炙十年。殆入二其室一。乃擢仕二津侯一。謹愼勤レ事。歷二事四君一。五十年未二嘗有一レ過。侯皆眷注甚渥。老年致仕。後時招二見之一。呼

奥田士亨、字は嘉甫、小字は宗四郎、蘭汀と號す。又南山と號し、又三角亭とも號す。伊勢の人。津侯に仕ふ。

三角幼時、表叔(一)柴田蘋洲といへる者に就いて學ぶ。蘋洲嘗て謂つて曰く、書を讀むには宜しく天下第一の人を師とすべし。今の世に當つては、京師の伊藤原(二)藏、卽ち其人なり。汝往いて學ぶ可しと。是に於て卽ち笈(三)を負うて東涯の門に遊び、親炙(四)十年、殆ど其室に入る。乃ち擢でられて津侯に仕へ、謹愼事を勤む。四君に歷事(五)し、五十年未だ嘗て過有らず。侯皆眷注(六)甚だ渥し。老年致仕す。後時〻之を招見するに、呼んで先生と曰つて名いはず。

(一) 母方の叔父　(二) 東涯　(三) 書を入るゝ籠　(四) 親しく昵近すること十年にして殆ど奥義に達す　(五) 四代の主君につぎつぎに仕ふ　(六) 目をかけらるゝこと厚し

者。惟蕃署考一卷。餘皆藏二于家一。是以世未レ詳三其所レ撰有二何書一也。青木一清者。吾知レ之。即爲二昆陽後一。因得三遍見二遺著一。乃紀二其目一。經濟纂要前集十二卷。後集五卷。續集三卷。官職略記十三卷。刑法國字譯十二卷。昆陽漫錄六卷。續錄一卷。國家食貨略。國家金銀錢譜。答問小錄。奉使小錄。對、客夜話。夜話小錄。一夕話。續一夕話。雜集。郡名考。和蘭勸酒哥解。和蘭櫻木一角說。長崎聞書。各一卷。和蘭文字略考三卷。和蘭話譯。草廬雜談。各二卷。續草廬雜談一卷。

ざるなり。青木一清といふ者あり。吾れ之を知る。即ち昆陽の後たり。因つて遍く遺著を見るを得たり。乃ち其目を紀せん。經濟纂要前集十二卷・後集五卷・續集三卷・官職略記十三卷・刑法國字譯十二卷・昆陽漫錄六卷・續錄一卷・國家食貨略・國家金銀錢譜・答問小錄・奉使小錄・對客夜話・夜話小錄・一夕話・續一夕話・雜集・郡名考・和蘭勸酒哥解・和蘭櫻木一角說・長崎聞書、各一卷、和蘭文字略考三卷・和蘭話譯・草廬雜談各二卷、續草廬雜談一卷、

㊀ 學問廣く見聞あまねし　㊁ 版にきざむ

奥田士亨

以爲於二其説一必有下可二收用一者上。而和蘭之字。蚊脚蟹行。未レ易二通解一。於レ是或之二長崎一質二譯者一。或博攷二其書一。遂粗獲二了會一。近此學漸闢。而皆不レ得レ不レ本二昆陽一云。大槻玄澤。六物新志曰。和蘭學之一塗。草創於二白石新井先生一。中興於二昆陽青木先生一。休明於二蘭化前野先生一。隆盛於二鷧齋杉田先生一。故近時從二事於斯一者。皆莫レ不レ淵二源於四先生一焉。

昆陽博學洽聞。著書甚富。而其所二鍥梓一

易からず。是に於て或は長崎に之いて譯者(三)に質し、或は博く其書に攷へ、遂に粗了會を獲たり。近ろ此學(四)漸く闢く。而して皆昆陽に本づかざるを得ずといふ。(五)大槻玄澤の六物新志に曰く、和蘭學の一塗、(六)草創は白石新井先生に於てし、中興は昆陽青木先生に於てす。(七)休明は蘭化前野先生に於てし、隆盛は鷧齋(八)杉田先生に於てす。故に近時斯に從事する者、皆四先生に淵源せざるはなしと。

(一) 採用す (二) 其形蚊のあしの如く、其字行かにの歩むの如く横さまなり (三) 通譯 (四) 蘭學 (五) 蘭學者、名は茂質、字は子煥、玄澤と稱し、磐水と號す、仙臺の藩醫 (六) 手始め (七) 休は美し、明は明か (八) 杉田玄伯

昆陽、博學洽聞(一)にして、著書甚だ富む。而も其鍥梓(二)する所の者、惟蕃薯考一巻のみ。餘は皆家に藏す。是を以て世未だ其の撰する所何書有るかを詳にせ

哉。卽雖二種藝之地一。遇二歲歉一則民不ㇾ能ㇾ無二菜色一。意者百穀之外。可二以當ㇾ穀者。莫ㇾ如二蕃藷一也。乃陳ㇾ官。求二種子于薩摩一。試種二之官藥苑中一。則極蕃衍。於ㇾ是以二國字一著二蕃藷考一卷一。而演二其培植之法一。官鏤ㇾ版併二種子一行二下諸島及諸州一。未二數年一無二處不ㇾ種。至ㇾ今上下便ㇾ之。雖二歲不ㇾ登。民不二遑餓一者。實昆陽之惠及二無窮一矣。題二其墓門之碑一。曰二甘藷先生之墓一。有ㇾ以哉。

(七)國字を以て蕃藷考一卷を著して、其(八)培植の法を演ぶ。官、版に鏤み種子を併せて諸島及び諸州に行下す。未だ數年ならざるに、處として種ゑざるなく、今に至つて上下之を便とす。(九)歲登らずと雖も、民遑かに餓ゑざるは、實に昆陽の惠、無窮に及べるなり。其墓門の碑に題して、甘藷先生之墓といふ。以有るかな。

㊀島流しにす　㊁つまる所は罪人をして天壽を終へしむるため　㊂耕作のできる土地にても飢饉にてあへば人民食なくして顔色青ざむる如き事あり　㊃さつまいも　㊄幕府の藥園、卽ち今の東京小石川の植物園なり　㊅殖え繁る　㊆日本文　㊇作りかた　㊈穀物みのらず

當二昆陽時一。未ㇾ有下講二和蘭之學一者上。昆陽獨

昆陽の時に當り、未だ和蘭の學を講ずる者有らず。昆陽獨り以爲へらく、其說に於て必ず(一)收用す可き者有らんと。而るに和蘭の字、(二)蚊脚蠏行、未だ通解し

東涯門。其學壹志ニ有用。於ニ經義文章ニ不ニ必究思。故若下不レ類ニ堀川之徒一者上。然非三始有ニ他師一矣。山崎氏社中劄記雜話續録載下青木文藏者。學ニ仲郁愓齋一。後師ニ淺見絅齋一事上。此同名異人。非ニ昆陽一也。

究思(二)せず。故に堀川(三)の徒に類せざる者の若し。然れども始より他師有るに非ず。山崎(四)氏社中の劄記（雜話續錄）に、青木文藏といふ者、仲郁愓齋に學び、後淺見絅齋を師とせし事を載す。此は同名異人にして、昆陽に非ざるなり。

(一)世の中の實利　(二)深く考へず　(三)東涯京都の堀川に在り　(四)山崎闇齋

嘗嘆曰。凡有レ罪非ニ死刑一者。遠放ニ之島嶼一。要在レ使三其終ニ天年一耳。然諸島少ニ五穀一。常以ニ海產木實一給レ食。是以往往不レ能レ免ニ餓死一。豈不ニ亦痛一

嘗て嘆じて曰く、凡そ罪ありて死刑に非ざる者は、遠く之を島嶼(一)に放つ。要は其をして天年を終へしむるに在るのみ。然るに諸島五穀少なく、常に海產、木實(二)を以て食に給す。是を以て往往餓死を免るゝこと能はず。豈に亦痛しからずや。卽ひ種藝(三)の地と雖も、歲歉に遇へば、則ち民菜色無き能はず。意ふに百穀の外、以て穀に當つ可き者、蕃薯(四)に如くはなしと。乃ち官に陳じ、種子を薩摩に求め、試に之を官の藥苑(五)中に種うるに、則ち極めて蕃衍(六)す。是に於て

大岡忠相。賜レ觀二官庫書一。乃以爲草莽臣。得レ窺二官書一。自レ古未二之有一也。雖二西土一亦然矣。如三皇甫謐自表借二書一車一。蓋以二武帝之舊好一故也。予自レ非二大岡公之遇一。惡能爲二此榮一哉。元文己未。拜二大府命一。管二典籍事一。後屢奉レ旨到二諸州一。投二梵刹民家一。搜下索其舊錄足三以徵二國家事一者上。而進二呈之一。其所二著述一。亦莫レ不レ上。延享甲子。擧二紅葉山火番一。尋改二評定所儒者一。終遷爲二書物奉行一。

より未だ之れ有らざるなり。(五)西土と雖も亦然り。皇甫謐自ら表して書一車を借りしが如きは、蓋し武帝の舊好(六)を以ての故なり。予大岡公の遇(七)に非ざるよりは、惡ぞ能く此榮を爲さんやと。元文己未(八)、大府(九)の命を拜して、典籍の事を管す。後屢〻旨を奉じて諸州に到り、梵刹民家(一〇)に投じ、其舊錄(一一)以て國家の事を徵(一二)するに足る者を搜索して、之を進呈す。其の著述する所、亦上らざるは莫し。延享甲子(一三)、紅葉山の火の番に擧げらる。尋いで評定所の儒者に改め、終に遷つて書物奉行と爲る。

(一)浪人 (二)りつぱな才ありて學問好き (三)大岡越前守忠相 (四)民間仕へざる臣 (五)支那 (六)昔馴染の故 (七)厚き待遇 (八)四年 (九)幕府 (一〇)寺院 (一一)古き記錄 (一二)しらべ見る (一三)元年

一

昆陽出二伊藤

昆陽、伊藤東涯の門に出で、其學壹(一)に有用に志し、經義、文章に於ては必ずしも

詩固超乘。書亦不レ凡。遣以供二清玩一。玉山海内一名家。僕嘗辱二忘年交一。今則亡矣。

玉山出二於林門一。交道甚廣。於二蘐苑徒一。與二南郭仲英蘭亭鶴臺輩一尤爲レ驩。南郭蘭亭之沒也。爲作二詩數首一而弔レ之。

玉山林門に出でて、(一)交道甚だ廣し。(二)蘐苑の徒に於ては、(三)南郭・仲英・蘭亭・鶴臺の(四)輩と尤も驩を爲す。(五)南郭・蘭亭の沒するや、爲に詩數首を作りて之を弔ふ。

(一) 林鳳岡の門弟なればいふ (二) 交際廣し (三) 徂徠門の人々 (四) 服部南郭、同仲英、高蘭亭、瀧鶴臺 (五) なかよく交はる

青木敦書

青木敦書。字厚甫。小字文藏。號二昆陽一。武藏人。仕二大府一。昆陽初處士也。其清才好學。早見レ知二於

青木敦書、字は厚甫、小字は文藏、昆陽と號す。武藏の人。大府に仕ふ。

昆陽は初め(一)處士なり。其清才、(二)好學、早く(三)大岡忠相に知られ、官庫の書を觀ることを賜ふ。乃ち以爲へらく、(四)草莽の臣にして、官書を窺ふことを得るは、古

一日與二古伯彝一。飲二劉文翼所一。玉山謂曰。余與二伯彝一同嗜レ酒也。而伯彝爲二柳下惠一。余則伯夷。蓋伯彝不レ問二善否一。玉山非レ醇不レ飲。故有二此言一。

玉山以二詩文一已冠二冕一時一。又工レ作レ字。雖二短章片墨一爲二人所一レ傳。赤松國鸞與二三上宗順一書曰。秋玉山詩一首。卽其所二手書一。

一日古(一)伯彝と、劉文翼(二)の所に飲む。玉山謂つて曰く、余、伯彝と同じく酒を嗜む。而して伯彝は柳下惠(三)たり、余は則ち伯夷なりと。蓋し伯彝は善否(四)を問はず、玉山は醇(五)に非ざれば飲まず。故に此言有り。

(一) 古の字辛の誤か、辛島鹽井、字は伯彝、熊本の儒官 (二) 宮瀬維翰、字は文翼、龍門と號す、自ら修して劉を氏とす、紀伊の人 (三) 論語微子篇に、伯夷を謂つて、其志を降さず、其身を辱めずといひ、柳下惠を謂つて、志を降し身を辱むといへり。伯夷は其君に非ざれば事へず、柳下惠は汙君を恥ぢず、小官を卑とせず、三たび黜けられても去らざるをいふ (四) 酒の善惡 (五) 美酒

玉山詩文を以て已に一時に冠冕(一)たり。又工に字を作し、短章片墨(二)と雖も人に傳へらる。赤松國鸞、三上宗順に與ふる書に曰く、秋玉山の詩一首、卽ち其の手書する所なり。詩は固より超乘(三)、書亦凡ならず。遣つて以て淸玩に供す(四)。玉山は海内の一名家にして、僕嘗て忘年(五)の交を辱うす。今は則ち亡しと。

(一) すぐれて頭立ちたる人の意 (二) 短い文一片の書 (三) すぐれてりつぱ (四) お送りして足下の御覽にそなへる (五) 年齡の如何を問はず、唯だ學德を以てする交り

外柔內剛。有下親友作二觴觶杯一者上。諸客皆擧。獨子羽不二敢飮一。作レ詩諷レ之。

登二富士山一者。修二役小角法一。以下自二六月朔一至中七月二十日上。爲二登陟期一。然玉山以二七月二十一日一登。是日天淸風和。獨擅二覽勝一。遂有二富嶽記一。其文朗暢人之所レ賞也。南郭嘗稱曰。天地有二富嶽一。乃始有二此記一。苟神而不レ文則已。羣玉之圃一題二名山一。萬古愈增二顏色一。若二夫木華之神一。則固當三粲然啓二玉齒一爾。

富士山に登る者、(一)役の小角の法を修め、六月朔より七日二十日に至るを以て、登陟の期と爲す。然るに玉山七月二十一日を以て登る。是日天淸く風和ぎ、獨り(二)覽勝を擅にす。遂に富嶽記有り。其文(三)朗暢人の賞する所なり。南郭嘗て稱して曰く、天地富嶽有りて、乃ち始めて此記有り。(四)苟も神にして文ならずんば則ち已む、(五)羣玉の圃一たび名山に題して、萬古愈〻顏色を增す。夫の(六)木華の神の若きは、則ち固より當に(七)粲然として玉齒を啓くべきのみと。

(一)役の小角、文武天皇時代、大和の人、呪術を善くし鬼神を驅使す　(二)眺望を十分になす　(三)ほがらかにしてのびやか　(四)淺間の神が文を解せずばそれまでなるが　(五)玉山が羣玉の圃といふ言を富士山に題してより永遠にいよ〳〵山のりつぱさを增す　(六)淺間神社の祭神、木華咲耶姬命　(七)齒をあらはして美しく微笑すべし

焉。是則不佞所下以涓埃圖上報ニ我公一矣。又復ニ越子聽一書曰。敝邑菊池氏時。蓋始建レ學。及レ至ニ加藤氏一也。荒廢不レ修。絃誦久熄。加藤氏亡國除。未レ幾我先公實享ニ茅土之封一而入立焉。五世及ニ今公一。尊ニ信儒教一。再ニ興學館一。扁曰ニ時習一。臣儀蓋與有レ議焉。

て議する有りと。

(一)五年　(二)教頭　(三)あやありて美なり　(四)德化におもむく　(五)國學、此處にては肥後藩の學校を建つる命令下りしなり　(六)南北朝の頃菊地武時父子肥後に在りて學を興す　(七)自己の謙稱　(八)一滴の水と一點のちり、極めて少なきをいふ　(九)越智雲夢　(一〇)加藤清正肥後に封ぜられ子忠廣の世に亡ぶ　(一一)學校荒れすたる　(一二)絃は琴誦は讀、學校の課業をいふ　(一三)古へ諸侯を封ずる時、其封地の方角に應ずる土を白茅に包み、天子より諸侯に授けたる故事　(一四)扁額を掲ぐ

紀平洲小語曰。肥後秋山儀子羽。與レ余親交十數年。會飲醉語。是非四應。未三嘗一聞ニ拒レ人之言一。又曰。子羽

(一)紀平洲の小語に曰く、肥後の秋山儀子羽、余と親しく交ること十數年。(二)會飲醉語、(三)是非四應、未だ嘗て一も人を拒むの言を聞かずと。又曰く、子羽、(四)外柔内剛なり。親友に髑髏杯を作る者有り。諸客皆擧ぐ。獨り子羽のみ敢へて飲まず。詩を作つて之を諷すと。

(一)細井平洲、名は德民、尾張の人、米澤侯の賓師となる　(二)一所に酒飲みて醉ひ語る　(三)是といへば是、非といへは非、凡て人の言に賛す　(四)外はやさしく心はなけし

侯命更養₂佗子₁嗣ㇾ醫。使₃玉山壹爲₂儒學₁。乃來₂江戸₁。從₂祭酒林鳳岡先生₁。先生奇₂愛其才學₁。方₃講說日已有₂疾病₁。則使₂玉山代₁。久之業大進。其歸₂于國₁也。執ㇾ贄及ㇾ門者踰ㇾ千云。

（一）肥後藩　（二）叔父　（三）醫術を以て俸祿を受く　（四）老學者　（五）他人の子を養子とす　（六）大學頭の唐名　（七）束脩を納めて入門す

寶曆乙亥。熊本新刱₂時習館₁。此玉山建議所ㇾ興也。玉山乃爲₂之提學₁。揭₂學規十三則₁。薦₂俊才₁敎₂子弟₁。於ㇾ是藩中斐然鄕ㇾ化。復₂岩謙齋₁書曰。廟學之命新下。足₃以興₂菊池氏廢₁

寶曆乙亥、熊本新に時習館を刱む。此れ玉山建議して興す所なり。玉山乃ち之が提學（二）と爲り、學規十三則を揭げ、俊才を薦め子弟を敎ふ。是に於て藩中斐然（三）として化（四）に鄕ふ。岩謙齋に復する書に曰く、廟學（五）の命新に下る。以て菊池氏（六）の廢を興すに足る。是れ則ち不佞（七）が涓埃（八）我が公に報いんことを圖る所以なりと。又越子聰（九）に復する書に曰く、敝邑菊池氏の時、蓋し始めて學を建つ。加藤（一〇）氏に至るに及ぶや、荒廢（一一）修めず、絃誦（一二）久しく熄む。加藤氏亡びて國除かれ、未だ幾ならずして我が先公實に茅土（一三）の封を亨けて入つて立つ。五世にして今公に及ぶ。儒敎を尊信し、學館を再興す。扁（一四）して時習といふ。臣儀蓋し與つ

秋山儀。字子羽。小字儀右衛門。號玉山。肥後人。仕國侯。

玉山世祿于本藩。秋山需菴者。爲玉山從父。以扁倉術亦受俸焉。玉山出爲之後。早習其技。又自少好學。博窺羣籍。其所發明。宿學皆驚嘆。於是

卷之八

秋山儀

秋山儀、字は子羽、小字は儀右衛門、玉山と號す。肥後の人。國侯に仕ふ。

玉山世々本藩(一)に祿す。秋山需菴といふ者、玉山の從父たり。(三)扁倉の術を以て亦俸を受く。玉山出でて之が後と爲り、早く其技を習ふ(二)。又少より學を好み、博く羣籍を窺ふ。其發明する所(四)宿學皆驚嘆す。是に於て侯命じて更に(五)佗子を養ひて醫を嗣がしめ、玉山をして壹に儒學を爲めしむ。乃ち江戸に來り、(六)祭酒林鳳岡先生に從ふ。先生其才學を奇愛し、講說の日己れ疾病有るに方つては、則ち玉山をして代らしむ。久しうして業大に進む。其の國に歸るや、(七)贄を執り門に及ぶ者千を踰ゆと云ふ。

芥彦章丹丘詩話曰。絶句之義。迄無二定義一。謂レ裁二近體首尾或中二聯一。恐不レ足レ憑。吾友宇士朗謂絶句者。謂二一句一絶一。律詩句句聯排。絶句不レ然。故絶句對二律詩一之稱耳。此說明白可レ據。古人未三嘗言及一。

芥彦章の丹丘詩話に曰く、絶句の義、迄に定義無し。近體(一)の首尾或は中二聯を裁つと謂ふ。恐らくは憑るに足らざらん。吾が友宇士朗謂ふ、絶句とは、一句一絶(二)を謂ふ。律詩は句句聯排(三)なれども、絶句は然らず。故に絶句は律詩に對するの稱のみと。此說明白據る(四)べし。古人未だ曾て言及せずと。

(一) 古詩に對して五七言律詩　(二) 一句にしてきれる　(三) 句と句とが對句になる　(四) 信ずべし

激。士朗不必然。其與大潮師書曰。夫物翁當世龍門。四方之士踵其門者何限。而翁弗容曰。毋涸我爲也。即容之。不再三往不獲見焉。即獲見。亦不必得其提誨。云。鑑之取謁。翁方會客炙笙。輒呼鑑入命之坐。而又命之食。遂令從二三子之後。博我約我。叩其兩端而竭焉。鑑鄙人也。才性駑下。何以有此於翁也。則惟師之故愛及屋烏耳。又與玄海師書曰。文豈易言哉。綜該古今。包羅天地。然後爲得也。今求其人。海內之大。而一物先生在焉。

後に從はしむ。我を博くし我を約し、其兩端を叩いて竭す。鑑は鄙人なり。才性駑下、何を以てか(八)翁に此ることあらん。則ち惟師(九)の故愛屋烏に及ぶのみと。又玄海師に與ふる書に曰く、文豈に言ひ易からんや。古今を綜該(一〇)し、天地を包羅(一一)し、然る後に得たりと爲すなり。今其人を求むるに、海內の大(一二)、而も一物先生あるのみと。

(一) 徂徠の家號　(二) 山縣周南、服部南郭、平野金華　(三) 鯉魚河水を泝つて龍門の地に至れば飛急にして登る能はず、登る者あらば龍になるといふ、因て聲望高きもの〻喩にいふ也　(四) 教訓　(五) 士朗の名　(六) 笙を煖め吹く意、劉禹錫の詩に「日落方收鼓、天寒更炙笙」　(七) 弟子　(八) 論語子罕篇に曰く、我を博むるに文を以てし我を約するに禮を以てすと　(九) 師(大潮)に對する徂徠の愛情が推して我にまで及べる　(一〇) すべあはす　(一一) 一つにまとめる　(一二) 天下の大にして、只一人の徂徠先生あるのみ

能レ如二士朗一。士朗誠才哉。且余以レ疾故。省二思慮一一二精神一。不レ操レ觚者久之。則其先レ余翩翩固宜。而不レ宜レ先者之先。獨何歟。

（六）弟士朗がひらひらと自分より先だちて飛びゆくは尤もなり　（七）學問に於て先だつは尤もなれど弟として兄に先だち死するは何事ぞや

嘗來二江戸一入二蘐園之社一。與二周南南郭金華輩一相交。無レ何歸二于京一。徂徠有二贈言一。贈二于季子一序。是也。春臺斥非曰。兵介嘗遊二東都一。從二我徂徠先生一學二古文辭一。既歸二平安一而畔レ之。與二其兄一俱非二徂徠一。此言之過

嘗て江戸に來りて蘐園の社に入り、周南・南郭・金華の輩と相交る。何もなく京に歸る。徂徠贈言有り。（一）季子を贈る序、（二）是なり。春臺の斥非に曰く、兵介嘗て東都に遊び、我が徂徠先生に從つて古文辭を學ぶ。既にして平安に歸りて之に畔き、其兄と俱に徂徠を非ると。此れ言の過激なり。士朗必ずしも然らず。其の大潮師に與ふる書に曰く、夫れ物翁は當世の（三）龍門なれば、四方の士の其門に踵る者何ぞ限らん。而るに翁容れずして曰く、我を溷すことを爲す毋かれと。卽ひ之を容るゝも、再三往かざれば見ることを獲ず。卽ひ見ることを獲るも、亦必ずしも其提誨（四）を得ずと云ふ。（五）鑑の謁を取るや、翁方に客を會し（六）筅を炙る。輒ち鑑を呼び、入れて之に坐を命ず。而して又之に食を命じ、遂に二三子の（七）

宇鑒。字士茹。改字士朗。小字兵介。士新弟。平安人。士朗與二士新一友愛篤至。其學充實不二相讓一。世稱二平安二字先生一。而年僅三十一。先二士新一卒。嗟乎天少假レ年。其樹立當レ未レ可レ量。士新序二遺稿一云。余與二子朗一同レ學者十餘年。而自顧レ所レ成。曾未レ

宇鑒

宇鑒、字は士茹、改字は士朗、小字は兵介、士新の弟なり。平安の人。

士朗、士新と友愛篤至(一)にして、其學充實相讓らず(二)。世平安の二宇先生と稱す。而るに年僅かに三十一、士新に先んじて卒す。嗟乎天少しく年を假さば(三)、其樹立當に未だ量る可からざるべし。士新、遺稿に序して云く、余士朗と學を同じうすること十餘年。而して自ら成す所を顧みるに、曾て未だ士朗の如くなる能はず。士朗誠に才ある哉。且つ余疾を以ての故に、思慮を省き精神を一にし(四)、觚を操らざること久し(五)。則ち其の余に先だつて翩翩たるは(六)固に宜なり。而して宜しく(七)先だつべからざる者の先だつは、獨り何ぞや。

(一) 兄弟のなかよきこと此の上なし (二) 其學問の空虛ならざること互に負けず (三) 今少しく生き延びしならば大成することと其程度の推測しがたきほどならん (四) 思考を少なくし精神を散らさず (五) 文を作らざること久し

其門人片徽猷一。淨寫以致二諸當完所一。余受讀レ之。銘辭流暢可レ誦。至二其敍文一則蕪𦵮。蓋以下其臨終口二授門人一。門人受而經二紀之一。不上能三盡如二其意一故。致二此鹵莽一耳。今玆將レ木二稿刪一也。同志之士欲レ附二驥之一。乃相共議去二其敍文一。但以二銘之不一レ可二以孤行一也。節二取其敍中數語一。以弁二諸其端一以具二一篇之文一云。

以て諸を其端に弁し、以て一篇の文を具すと云ふ。

(一) 澤村琴所の門弟　(二) 宇野士新　(三) 姓は片中、字は季秩、號は北海、越後人　(四) 銘の辭句はのびやかにして誦するに足る　(五) 亂雑　(六) 疏漏、亂雑　(七) 印刷に附す　(八) 單獨に出す

吾先友天履仁。爲レ人寡欲。於二世味一泊如也。惟以二肘不一レ離レ案爲二人間至樂一。而甚慕三吾祖與二宇氏兄弟一。其著書皆自寫珍藏。稱不レ容レ口。論語考。自二里仁一至二雍也一三卷。上梓亦成二履仁手一。

吾が先友天履仁、人と爲り寡欲、世味に伯如たり。惟肘案を離れざるを以て人間の至樂と爲す。而して甚だ吾が祖と宇氏兄弟とを慕ふ。其著書は皆自ら寫して珍藏し、稱して口を容れず、論語考、里仁より雍也に至る三卷は、上梓亦履仁の手に成る。

(一) 天沼爵、字は履仁、號は恆庵、江戸の人　(二) 俗世の名利に對して澹泊なり　(三) 机によつて書を讀む

入。宇氏最等劣者也。華嶠又曰。士新妄誇其酉洞博覽。不自知其執拗撩撥。欲建旗幟取中勝於徂徠先生。多引羣書著論語考。然其說泛然無所適從矣。華人於經爲傳注者古今甚多。而如此者未嘗有之也。其文大氏缺潤舒暢。故其所綴緝結構者。所謂楞攊殺接是謬擬古文辭也。豈不哀哉。如明霞遺稿。識者駁之。則不及徂徠先生者遠甚。

明霞遺稿載。澤村琴所墓銘敍。野子賤以爲文辭不佳。改撰附琴所刪稿。書其後云。先生之歿也。門人前島當完等。狀其遺事行。以乞銘墓碑於平安宇先生。後七年。宇先生病且沒。其文乃成。遺命

明霞遺稿に載す、澤村琴所が墓銘の敍(一)、野子賤しんで以て文辭佳ならずと爲し、改撰して琴所刪稿に附す。其後に書して云ふ、先生の歿するや、門人前島當完(二)等、其遺せる事行を狀し、以て墓碑に銘せんことを平安の宇先生に乞ふ。後七年、宇先生病んで且に沒せんとし、其文乃ち成る。其門人片徽猷に遺命し、淨寫以て諸を當完の所に致す、と。余受けて之を讀むに、銘辭(三)流暢誦す可し。其敍文に至つては則ち蕪(五)甚だし。蓋し其臨終に門人に口授(四)し、門人受けて之を經紀するに、盡く其意の如くなる能はざるを以ての故に、此鹵莽(六)を致すのみ。今玆將に稿刪を木(七)せんとするや、同志の士之を附刻せんと欲し、乃ち相共に議して其敍文を去る。但銘の以て孤行(八)すべからざるを以て、其敍中の數語を節取し、

一振レ也。蓋人之好惡各異。是非互議。要可レ待二公論一耳。原田東岳視二士新一者甚卑矣。東岳筆疇曰。徂徠東涯二先生匹也。而徂徠在レ堂。東涯在レ室。南郭春臺二子匹也。而南郭在レ戸。春臺在レ門。蘭嵎周南二子匹也。而偕在二廊廡下一。金華士新二子匹也。而偕窺二門牆一未レ能

りと。筆疇に又曰く、士新妄に其酉洞博覧を誇つて、自ら其執拗撩撥(一六)を知らず。旗幟を建てて勝を徂徠先生に取らんと欲し、多く羣書を引きて論語考を著す。然れども其説泛然(一七)として適從する所無し。華人、經に於て傳注を爲す者古今甚だ多し。而るに此の如きは未だ嘗て之れ有らざるなり。其文大氏霑潤(一八)舒暢を缺く。故に其の綴緝(一九)結構する所の者、所謂樗櫪殺接(二〇)是れ古文辭を謬り擬するなり。豈に哀しからずや。明霞遺稿の如き、識者之を駁す。則ち徂徠先生に及ばざるもの遠きこと甚だしと。

(一) 子は字なり、宇氏兄弟なり (二) 大内熊耳 (三) 伊藤仁齋と其子東涯をいふ、古學派を奉ずればなり (四) 文運の盛なる世 (五) ならび行きて少し退く (六) 一時代をおしなびける (七) 文學の衰勢を挽廻す (八) すき嫌ひ (九) 善惡 (一〇) 匹敵するの意 (一一) 堂は表座敷、室は奥座敷。即ち室に在るは一歩長ぜるなり (一二) 戸口 (一三) 廊下のきした (一四) 平野金華 (一五) 垣根 (一六) 執拗はねぢけたるなり、撩撥はみだれはづれたるなり (一七) ひろくしてしまりなし (一八) うるほひありてなだらか (一九) 綴りあつめ組立てる (二〇) 無用の文字連續す

稱二富士一。唯睿可二庶幾一。而未レ到二絶頂一。僕之所レ志固不二近小一。而今之所レ得。辟二諸登レ山一。尚在二其足一。嘗未レ到レ半。何論二絶頂一。而睿又非レ所レ願也。若二富士一則非二物先生一莫二能當一。吾輩以二物先生故一常稱レ之耶。固所レ不二敢期一。而亦非レ所レ願也。

南郭答二了願師一書曰。二子固難レ得之才也。熊耳送二小野孟鉉一序曰。古學父子。應二國家右文之化一。繼レ踵而起。宇氏兄弟。乘二大業復古之運一。雁行而漸。風二靡一時一。以雪二戰國五百年斯文之抑鬱一。則亦可レ謂二

南郭、了願師に答ふる書に曰く、二子（一）は固に得難きの才なりと。熊耳（二）が小野孟鉉を送る序に曰く、古學父子（三）、國家右文（四）の化に應じ、踵を繼いで起る。宇氏兄弟、大業復古の運に乘じ、雁行（五）して漸み、一時（六）を風靡し、以て戰國五百年斯（七）文の抑鬱を雪ぐ。則ち亦一振と謂ふ可きなりと。蓋し人の好惡（八）各〻異なり、是（九）非互に議す。要は公論を待つ可きのみ。原田東岳士新を視ること甚だ卑し。東岳筆疇に曰く、徂徠・東涯の二先生（一〇）は匹なり。而して徂徠堂（一一）に在り、東涯室に在り。南郭・春臺の二子は匹なり。而して南郭戶（一二）にあり、春臺門にあり。蘭嵎・周南の二子は匹なり。而して偕に廊廡（一三）の下に在り。金華（一四）・士新の二子は匹なり。而して偕に門牆（一五）を窺つて未だ入ること能はず。宇氏は最も等の劣れる者な

固未及濟南。余亦不謂過之。然經術文章相兼。彼亦有所未及。則不佞所稱何過之有。又與芥彥章書曰。夫物夫子者實東方開闢一人。其在華夏亦難其比。而以陪臣居散職。何論華夏。即在國中。不君實於兒童。不司馬於走卒。又未泰斗於學者。晚乃稍見仰。然矮人觀場。未有實知者。是與夫富士之僻。其爲不幸。豈余病之比哉。雖然。是何足論。是何足論。其所爲發憤。乃摛藻揆天庭。所傅施不可測也。又答玄海上人書曰。謂洛諸山睿宕最秀。僕兄弟比之。它人則爲諸山。又謂僕兄弟雖

庶幾す可し。而も未だ絶頂に到らず。僕の志す所固より近小にあらず。而して今の得る所、諸を登山に辟ふれば、尙ほ其足に在り。曾て未だ半に到らず。何ぞ絶頂を論ぜん。而して睿又願ふ所に非ざるなり。富士の若き則ち物先生に(一九)非ざれば能く當ることなし。吾輩物先生の故を以て常に之を稱するのみ。固より敢へて期せざる所にして、亦願ふ所に非ざるなりと。

(一) あやまり (二) 士新が徂徠に勝らんとするは是れ自ら徂徠に及ばざるをあらはす譯にて却て身を卑くするに當る (三) 心から打込む (四) 祭文及び死者を哭する詩を作つてはめあげる (五) 自慢 (六) 李于鱗 (七) 經學と文章と (八) 自分 (九) 芥川煥、號は丹丘、士新門 (一〇) 中華、支那 (一一) 比ぶるもの少し (一二) 常職無き官 (一三) 君實は司馬光の稱、卽ち兒童に知らるゝこと司馬光の如くならず、又召使はしり小僧にまで知らるゝこと彼の如くならず (一四) 學者の頭目とならず (一五) 一寸法師が芝居を見る如く實際のことを知る者なし (一六) 死後天に上り詞藻天帝の庭に輝き (一七) 比叡山と愛宕山と (一八) 富士を標準とすれども叡山ぐらゐに達し得べし (一九) 富士の頂を極むることはおもひよらず

氣。而別立二意見一。以求レ勝二徂徠一。其果能勝二徂徠一則不レ知也。余恐三平之勝二徂徠一。適其所二以自卑下一也。士新駁二徂徠一者如レ此。然其實心二醉徂徠一。是以其沒也。作二祭文哭、詩一褒二揚之一。杉以成既以爲二過稱一。士新與レ書曰。僕稱二物子一。未三敢過二其實一。庸何病。物子所二自負一經術也。其文

其實に過ぎず。庸何ぞ病へん。物子(五)の自負する所は經術なり。其文固より未だ濟南(六)に及ばず。余亦之に過ぎたりと謂はず。然れども經術(七)文章相兼ぬること、彼も亦未だ及ばざる所有り。則ち不佞(八)の稱する所何の過ぎたることか之れ有らんと。又芥彥章(九)に與ふる書に曰く、夫れ物夫子は實に東方開闢の一人にして、其の華夏(一〇)に在りても亦其比(一一)を難うす。而して陪臣を以て散職(一二)に居る、何ぞ華夏を論ぜん。卽ち國中に在つては、(一三)兒童に君實たらず、走卒に司馬たらず。又未だ學者(一四)に泰斗たらず。晩に乃ち稍仰がる。然れども矮人場(一五)を觀る、未だ實に知る者有らず。是れ夫の富士の僻せると與に、其の不幸と爲す。豈に余が病の比ならんや。然りと雖も、是れ何ぞ論ずるに足らん。是れ何ぞ論ずるに足らん。其の發憤を爲す所、乃ち摛藻天庭(一六)に掞き、傳施する所測る可からざるなりと。又玄海上人に答ふる書に曰く、謂ふ洛の諸山(一七)睿•宕最も秀づ。僕の兄弟之に比す。宅人は則ち諸山たりと。又謂ふ、僕の兄弟富士(一八)を稱すと雖も、唯睿を

卒。然世皆知
其力不三必滅二
信長秀吉一。士
新生二鞿韄之世一。未三嘗置二妻妾一。志厚氣邁、強學越レ人。將下以統二漢魏以來諸說一。別立中一家上。而年
四十八、志不レ酬沒。然世皆知四其學不三必讓二仁齋徂徠一。

以來の爭亂を平げて霸王の業を立てんとす (六) 弓矢を入るゝ袋、弓矢を袋にするより、轉じて太平の世の稱 (七) 志厚く氣象すぐる (八) 學をつとむること他にまさる (九) 一派の見を立つ (一〇) 目的を果さずして死す

士新於二徂徠一。著二論語考一。痛糾二其繆謬一。或至レ謂二如レ是果孔子之罪人也。先王之罪人也。天下之罪人也。他作レ辨擊二春秋說一。作二名公四序評一。彈二文章一。春臺斥非曰。三平自負二其才

士新の徂徠に於ける、論語考を著して痛く其謬誤(一)を糾し、或は是の如きは果して孔子の罪人、先王の罪人、天下の罪人なりと謂ふに至る。他に辨を作つて春秋の說を擊ち、名公四序評を作つて文章を彈ず。春臺の斥非に曰く、三平自ら其才氣を負みて、別に意見を立て、以て徂徠に勝らんことを求む。其の果して能く徂徠に勝るやは則ち知らざるなり。余恐る(二)三平の徂徠に勝らんとするは、適に其の自ら卑下する所以なりと。士新の徂徠を駁すること此の如し。然れども其實徂徠に心醉す(三)。是を以て其の沒するや、(四)祭文哭詩を作つて之を褒揚す。杉以成既に以て過稱と爲す。士新書を與へて曰く、僕物子を稱する、未だ敢へて

姓一。士新以爲レ非。一日江村某至。此人冒二他姓一。問曰。大人先生之實父乎不。士新毅然曰。吾家之父。不三始有二虛實一。

他姓を冒す。問うて曰く、大人は先生の實父なりや不やと。士新毅然として曰く、吾が家の父、始より虛實あらずと。(一)

(一) 吾が家の父は始めより假の父實の父の區別なし。即ち養子とならず其の姓を受けざればかくいふ

士新撰二上杉謙信傳一。雖二偶然一。其立志創業。士新有下髣二髴之一者上。夫謙信生二戰國之際一。自レ少不レ御レ內。天資驍勇。兵勢大奮。將下以撥二保平以降之亂一更立中霸業上。而年四十九。功不レ成

士新上杉謙信の傳を撰ぶ。偶然なりと雖も、其立志創業、(一)士新之に髣髴(二)たる者有り。夫れ謙信は戰國の際に生れ、少より內を(三)御せず。天資驍勇(四)にして、兵勢大に奮ひ、將に以て保平(五)以降の亂を撥め、更に霸業を立てんとす。而るに年四十九、功成らずして卒す。然れども世皆其力必ずしも信長・秀吉に減ぜざるを知る。士新鞬橐(六)の世に生れ、未だ嘗て妻妾を置かず。志厚氣邁(七)、强學(八)人に越え、將に以て漢・魏以來の諸說を統べ、別に一家(九)を立てんとす。而るに年四十八、志(一〇)酬いずして沒す。然れども世皆其學必ずしも仁齋・徂徠に讓らざるを知る。

(一) 目的を立て、事業を創始す　(二) 似寄る　(三) 妻妾を近づけず　(四) うまれつきつよく勇し　(五) 保元・平治

潮文既名二海内一。而近時又大典。以二能文一聞二一時一。此二釋。勿論泰二斗於緇林一。求二之操觚者流一。亦不レ易レ得也。而一則傳二士新一。一則受二士新一。

姓氏解二卷。綜二理古今一。考二覈倭漢一。於二姓氏一事一殆無二餘蘊一焉。而其卷首不レ題二署作者名姓一者。此士新深意。蓋倣下古以二國字一書者上也。說詳二于吾祖過庭紀談一。然近時京師人。松本愼者。以二近江宇鼎士新著七字一。攙二入舊板卷首一。且作二之序一。附下其修二複姓一爲二單姓一非レ是論上。大失二士新意一。爲二人後一承二其

姓氏解二卷、古今を綜理し[1]、倭漢を考覈し、姓氏の一事に於ては殆ど餘蘊無し。而して其卷首作者の名姓を題署せざるは、此れ士新の深意にして、蓋し古國字を以て書する者に倣へるなり。(說、吾が祖の過庭紀談に詳かなり)然るに近時京師の人、松本愼といふ者、近江宇鼎士新著の七字を以て、舊板の巻首に攙入し[2]、且つ之が序を作つて、其の複姓を修して單姓と爲すは是にあらずとの論を附す。大に士新の意を失へり。[3]

(一) 古より今までをすべをさめ日本と支那とを比較研究す　(二) 補ひ入る　(三) 宇野を略して宇と云ふは不當

人の後と爲りて其姓を承くること、士新以て非と爲す。一日江村某至る。此人

者有レ三焉。不レ見二宇野三平一至レ市。不レ見二香川太沖一治レ病。不レ見二谷左中一作レ文。

士新奉二李王一善二古文辭一。然與二徂徠南郭輩所一レ作殊二其趣一。初得二大潮禪師指授一。其復二田文瑟一書曰。僕始學レ文。嘗就二潮公一而正焉。於レ今思レ之。其刪潤皆當。非レ若二世儒不レ辨レ體。不レ論レ格。點レ金作レ鐵。變レ夏爲レ夷者一。大潮亦嘗稱二士新文一爲レ得二元美髓一。夫大

士新、李・王(一)を奉じて古文辭を善くす。然れども徂徠・南郭が輩の作す所と其趣を殊にす。初め大潮禪師の指授(二)を得たり。其の田文瑟(三)に復する書に曰く、僕始めて文を學ぶや、嘗て潮公に就いて正す。今に於て之を思ふに、其刪潤皆當れり(四)。世儒が體を辨ぜず、格を論ぜず(五)、金を點し鐵と作し、夏を變じて夷と爲す(六)者の若きに非ずと。大潮亦嘗て士新の文を稱して元美の髓を得たり(七)と爲す。夫れ大潮の文既に海内に名あり。而して近時又大典、能文を以て一時に聞ゆ。此二釋(八)は、勿論緇林(九)に泰斗たり。之を操觚者流(一〇)に求むるも、亦得易からざるなり。而して一は則ち士新に傳へ、一は則ち士新に受く。

(一) 李攀龍と王世貞、共に明代の古文辭學者　(二) 指示教授を受く　(三) 田中琦字は文瑟、號は大觀、平安の人、士新の門　(四) 添削皆當を得　(五) 文の體裁をわきまへず、法式を論ぜず　(六) 黃金の如き佳文に批點して鐵の如き下品のものとなし、中國の風を變じて野蠻の風となす　(七) 王世貞の骨髓を得たり　(八) 大典・大潮の二佛者は無倫僧侶なかまでの立派な人物なり　(九) 僧侶なかま　(一〇) 文學者なかま

省○字子魚○後無レ所ニ師承ー○與ニ弟士朗ー共發憤自奮○遂持ニ海内文柄ー○其所レ著論語考○爲ニ最大有レ力○士新固不下與ニ時推ー爲中伍上○其學將ニ精究以曠レ世○於レ是杜レ門掃レ軌○切磋甚勤○釋大典書燈記曰○太田見良○嘗謂ニ宇先生ー曰○比歳儉米貴○吾與ニ君等ー所ニ尤病ー也○先生曰○吁一掬之米○可ニ以丼レ日而不レ餓○抑何所レ病○但米貴物從レ之○乃使ニ油貴ー○是吾所ニ獨病ー也○先生之志○於レ是乎可レ知已○

士新刻厲讀レ書○足不レ踰ニ戸閾ー十有餘年○時人爲レ之語曰○都下不レ見

燈記に曰く、太田見良、嘗て宇先生に謂つて曰く、比ろ歳儉に米貴し。吾れ君等と尤も病ふる所なり。先生曰く、吁一掬(七)の米、以て日を丼せて餓ゑざる可し。抑ゝ何の病ふる所ぞ。但米貴ければ物之に從ふ。乃ち油をして貴からしむ。是れ吾が獨り病ふる所なりと。先生の志、是に於てか知る可きのみと。

(一)名聞利欲を心にかけず　(二)師より學ぶ無し　(三)文界の頭目たり　(四)世間に絶えて無し　(五)家にとぢこもりて一切外出をせず　(六)研鑽をつとむ　(七)少しの米さへあれば何日も餓ゑざるべし

士新刻厲(一)書を讀み、足戸閾(二)を踰えざること十有餘年。時人之が爲に語して曰く、都下見ざる者三有り。宇野三平が市に至るを見ず。香川太沖が病を治せしを見ず。谷左中が文を作るを見ずと。

(一)刻苦勉勵　(二)しきみ

所レ勒僅此而已。此蓋蘭林之遺意也。蘭林以三墓石惟記二其姓名生卒一爲レ足。如レ誌二言行一。謂爲二浮華事一。其說見二學山錄及講習餘筆一。

(一)題字をはりつける　(二)生れた日と死んだ日

宇鼎。字士新。小字三平。號二明霞軒一。本姓宇野。裁爲二宇氏一。平安人。士新父安治。屬二角倉與市一司二運漕一。士新自レ少屣二脫榮利一。潛二意載籍一。始受二章句于向井滄洲一。名三

宇鼎

宇鼎、字は士新、小字は三平、明霞軒と號す。本姓は宇野、裁して宇氏と爲す。平安の人。

士新の父は安治、角倉與市に屬して運漕を司る。士新少より(一)榮利を屣脫し、意を載籍に潛む。始め章句を向井滄洲（名は三省字は子魯）に受け、後、(二)師承する所無し。弟士朗と共に發憤自ら奮ひ、遂に(三)海內の文柄を持す。其の著す所、論語考、最も大に力有りと爲す。士新固より時輩と伍を爲さず。其學將に精究以て(四)世を曠しうせんとす。是に於て(五)門を杜ぢ軌を掃ひ、(六)切磋甚だ勤む。釋大典の書

翼運。吳臨川集。名山藏詳笻。唐文粹。皇朝類苑。自警編。餘冬序錄。呂氏春秋。後山叢談。東國史略。石林燕語。周禮訓雋。讀書管見。經籍會通。六經奧論。千百年眼。江關筆談。南島志。蝦夷志。東雅。唐律疏議。古今餘材抄。湖亭涉筆。異稱日本傳。周易翼傳。易翼傳。周易集解。皇王大紀。事纂。羅豫章集。學齋佔畢。鼠璞。大極圖述。唐國史補。大學衍義。閒窗雜錄。寓意錄。羣籍綜言。老學菴筆記。孫可之文錄。李習之文集。曲洧舊聞。創業起居註。書疑。考工記解。禹貢論。

學齋佔畢•鼠璞•大極圖述•唐國史補•大學衍義•閒窗雜錄•寓意錄•羣籍綜言•老學菴筆記•孫可之文錄•李習之文集•曲洧舊聞•創業起居註•書疑•考工記解•禹貢論。

蘭林墓。在二谷中玉林寺一。小石碑。正面鐫題曰。蘭林藤原明遠之墓。左側曰。寶曆十一年辛巳。九月三日。其

蘭林の墓は、谷中玉林寺に在り。小石碑、正面に鐫題(一)して曰く、蘭林藤原明遠之墓。左側に曰く、寶曆十一年辛巳九月三日と。其の勒する所僅かに此れのみ。此れ蓋し蘭林の遺意なり。蘭林、墓石は惟其姓名生卒(二)を記すを以て足れりと爲し、言行を誌すが如きは、謂つて浮華の事と爲す。其說學山錄及び講習餘筆に見ゆ。

別有二此意一乎。又更作下宋儒說レ體論。讀二朱註一論。中庸論上。以詰二問韓使一。其他學山錄講習餘筆、等往往載下宋儒有中不レ可レ信者上。

蘭林一意耽レ學。胷中更無二世務一。對二不レ讀レ書者一。則惟敍二寒暄一耳。絕無二他話一。以レ故世謂爲二癡呆一。

蘭林一意學に耽り、胷中更に世務無し。書を讀まざる者に對すれば、則ち惟寒暄(一)を敍ぶるのみ。絕えて他話なし。故を以て世に謂つて癡呆(二)と爲す。

(一) 時候の挨拶　(二) ばか

蘭林垂レ終遺命。寄二納其所レ藏書四十九部于足利學校一。其意欲下傳二之永世一以供中後人之覽上。其目如レ左。漢魏叢書。玉海。杜氏通典。明文

蘭林終に垂とし遺命して、其の藏する所の書四十九部を足利學校に寄納す。其意之を永世に傳へて以て後人の覽に供せんと欲す。其目左の如し。漢魏叢書・玉海・杜氏通典・明文翼運・吳臨川集・名山藏詳節・唐文粹・皇朝類苑・自警編・餘冬序錄・呂氏春秋・後山叢談・東國史略・石林燕語・周禮訓雋・讀書管見・經籍會通・六經奧論・千百年眼・江關筆談・南島志・蝦夷志・東雅・唐律疏議・古今餘材抄・湖亭涉筆・異稱日本傳・周易翼傳・易翼傳・周易集解・皇王大紀・事纂・羅豫章集・

矣。是以僕於二朱子之解一。亦不レ能レ無二間然一。又曰。僕竊謂凡讀二古書一。須レ通二其時之言辭一。蓋三代之書。有二三代之言辭氣象一。漢魏之書。有二漢魏之言辭氣象一。苟不レ知二其所一レ然。則雖二説得當一。或畔二其言意一者有矣。今姑以二歷史一言レ之。兩漢史所レ言。與二六朝史一不レ同。六朝史所レ言。亦與二唐宋史一不レ同。蓋言辭之道。與レ時升降。其有レ不レ一亦自然之勢也。但宋儒每每以二近言一解二古言一。以二今意一解二古意一。是以非二古意一者。或有レ之矣。今以二明德一事一言レ之。朱子於二大學一。以二心之虛靈不昧一說レ之。其意非レ不二精妙一。雖レ然。證二諸古書一。似レ無二此例一。夫明德一語尚書易詩左傳等。每每言レ之。而皆以爲。聖人之道德光輝發越以施二乎物一者。而未下嘗以二心之妙用一說上レ之也。豈大學一書。惟

徳、光輝發越以て物に施す者にして、未だ嘗て心の妙用を以て之を說かざるなり。豈に大學の一書のみ、惟別に此意有らん(一五)やと。又更に宋儒の體を說くの論、朱註を讀む論、中庸論を作し、以て韓使を詰問す。其他學山錄・講習餘筆等、往往宋儒の信ず可からざる者有るを載す。

(一) 學博く思慮周密 (二) 氷は水より出で水より寒く、青は藍より出で藍より青しの約にて師よりすぐれたる意 (三) 仁齋 (四) 儒學の研究に於ては大にまちがひあり (五) 經書の註解 (六) 說き殘せる所無し (七) 言が古代のよみにちがひ、意義が古代の意味を失ふ (八) 人の天賦の性及び道德を說く點に於て高尙深遠に過ぐ (九) まゝ非難すべきところあり (一〇) 時代に連れて變化す (一一) 特有の言語と氣風と (一二) 前漢書と後漢書と (一三) 魏・晉・齊・梁・陳の六朝の史書 (一四) 心の德たるや形無けれど其の作用靈妙にして明かなり (一五) 朱子の說の如く、明德を以て心の妙用として說くもの一もなし

者甚多。至丙彼曰乙足下之論。毋下乃爲二伊藤氏一之所上謬乎。伊藤氏於二貫邦一可レ謂二豪傑之士一。而於二聖學工夫一。大有二謬戻一。足下果知レ之乎甲。其識二朱子一略曰。朱子諸經傳註。亦雖下最窮二精密一無中復餘蘊上。然或言違二古訓一。義失二古意一者。未二必爲一レ無。大抵於二性命道德之間一。失二諸高遠一者有

未だ必ずしも無しと爲さず。大抵(八)性命道德の間に於て、諸を高遠に失する者有り。是を以て僕、朱子の解に於て、亦間然(九)する無き能はずと。又曰く、僕竊かに謂ふ、凡そ古書を讀むには、須らく其時の言辭に通ずべし。蓋し三代の書には、三代(一〇)の言辭氣象有り。漢・魏の書には、漢・魏の言辭氣象有り。苟も其の然る所を知らざれば、則ち說得て當ると雖も、或は其言意に畔く者有り。今姑く歷史を以て之を言はん。(一一)兩漢史に言ふ所、六朝史と同じからず。(一二)六朝史の言ふ所、亦唐宋史と同じからず。蓋し言辭の道、時と升降す。其の一ならざる有るも亦自然の勢なり。但宋儒每每近言(一三)を以て古言を解し、今意を以て古意を解す。是を以て古意に非らざる者或は之れ有り。今明德の一事を以て之を言はんに、朱子の大學に於ける、(一四)心の虛靈不昧を以て之を說く。其意精妙ならざるに非ず。然りと雖も、諸を古書に證するに、此の例無きに似たり。夫れ明德の一語は、尙書・易・詩・左傳等に、每每之を言ふ。而して皆以爲へらく、聖人の道

蘭林讀レ書極レ力撮抄。其所レ著多積レ抄而爲レ編者也。然皆統紀有二體裁一。若二學山錄一。尤非二常儒所一レ及也。識者稱爲レ不レ愧二唐土人一。

蘭林書を讀み力を極めて撮抄(一)す。其の著す所多くは抄を積んで編を爲す者なり。然るに皆統紀體裁(二)あり。學山錄の若き、尤も常儒の及ぶ所に非ざるなり。識者稱して唐土の人に愧ぢずと爲す。

(一) 要領をつまんで拔書す　(二) 統一して記錄し體裁整ふ

蘭林出二於鳩巢門一。而博學精密。世以爲二寒水青藍一。蘭林雖下奉二宋學一者上。非下如二鳩巢之於二宋說一。毫不上レ容レ疑。寬延元年。韓使來聘。蘭林與レ之筆語。議二朱子一

蘭林、鳩巢の門に出でて、博學精密(一)、世以て寒水青藍(二)と爲す。蘭林宋學を奉ずる者なりと雖も、鳩巢の宋說に於て、毫も疑を容れざるが如きに非ず。寬延元年、韓使來聘す。蘭林之と筆語し、朱子を議すること甚だ多し。彼れ足下の論は、乃ち伊藤氏(三)の爲にこれ誤たるゝ毋からんや。伊藤氏の貴邦に於ける、豪傑の士と謂ふ可し。而るに聖學(四)の工夫に於ては大に謬戾有り。足下果して之を知るかと曰ふに至る。其の朱子を議する略に曰く、朱子の諸經傳註(五)、亦最も精密を窮め、復た餘蘊(六)なしと雖も、然れども或は言古訓(七)に違ひ、義古意を失するもの、

人云。嗚歸德芙蓉樓集。有下賀三蘭林爲二儒官一序上。曰。滕先生。嚋官方技。起レ死肉レ骨。擧振二東方一。最喜二經術文學一。一旦釋レ匙而歎曰。士君子濟レ世。奚翅艸根樹皮哉。嗚呼軒岐邈矣。扁倉古矣。肘後載籍。叔世滋博。況乎寡レ要。若乃合二同入人一。及知レ物之明。安適施二今之世一乎。生命亦大。一失折レ肱。則駟亦不レ及。已矣。已矣。於レ是乎。不三復從二事醫藥一。鼅鼄網二藥籠一。乃上言請レ爲二儒官一。不レ報。居數年。入目二侍醫一行二經筵事一。雖二則特恩一。非二其志一也。丁卯春正月。定降二爵侍講一。束髮衣冠。從二事禮一也。於レ是乎。先生之善可レ知也。

今の世に施さんや。生命亦大なり。一たび失して肱を折らば、則ち駟も亦及ばず。已んぬ。已んぬと。是に於てか、復た醫藥に(九)從事せず。(一〇)鼅鼄藥籠に網す。乃ち上言して儒官たらんと請ふ。(一一)報ぜられず。居ること數年、入つて侍醫を目て經筵の事を行ふ。則ち特恩なりと雖も、其志に非ざるなり。丁卯の春正月、定めて侍講に降爵し、束髮衣冠、禮に從事す。是に於てか、先生の善知る可きなり。

(一) 藤原の略 (二) 前官は醫者にて死者をたゝしめ骨に肉をつくるほど巧み (三) 經學と文章 (四) 草の根や樹の皮、藥品のこと (五) 軒は軒轅氏即ち黄帝の姓、岐は岐伯、共に支那醫學の祖、邈たりは遠き貌 (六) 扁鵲と倉公、共に支那古代の名醫 (七) 唐書藝文志、葛洪に肘後救卒法六卷ありと見ゆ (八) 後代なり、即ち後代に至るに隨つて醫書益々多く、愈々範圍のみ博くなりて要を得ること少なし (九) 一度失敗して肱を折りしならばとりかへしつかず。三度肱を折らざれば名醫となれずと云ふ古語より出づ (一〇) 蜘蛛が藥ばこに網をはるとなり、醫を止めたるをいふ (一一) 聞屆けられず

藤原明遠。字深藏。中村氏。號二蘭林一。又號二盈進齋一。江戸人。仕二大府一。蘭林初稱二玄春一。承二父玄悅一爲二醫官一。乃能修二其業一。所レ著有二醫方綱紀三卷一。博學莫レ所レ不レ窺。延享四年正月十九日。改レ醫擢二儒員一。時年五十一。蓋國初以降。自レ醫而轉レ職。蘭林一

藤原明遠

藤原明遠、字は深藏、中村氏、蘭林と號し、又盈進齋とも號す。江戸の人。大府に仕ふ。

蘭林初め玄春と稱す。父玄悅を承けて醫官と爲り、乃ち能く其業を修む。著す所醫方綱紀三卷有り。博學窺はざる所なし。延享四年正月十九日、醫を改め儒員に擢でらる。時に年五十一なり。蓋し國初以降、醫よりして職を轉ずるは、蘭林一人と云ふ。鳴歸徳の芙蓉樓集に、蘭林が儒官と爲るを賀する序あり。曰く、(一)滕先生、疇官方技、死を起たしめ骨に肉し、聲東方に振ふ。最も(三)經術文學を喜び、(二)一旦匙を釋てて歎じて曰く、士君子世を濟ふ、奚ぞ翅に(四)艸根樹皮のみならんや。嗚呼(五)軒岐邈たり。(六)扁倉古し。(七)肘後の載籍、(八)叔世滋〻博く、汎乎として要寡し。若し乃ち天人を合同し、及び物を知るの明、安に適として

熊耳慕二徂徠之學一。尤工修二古文辭一。時人以爲二當今之于鱗一。南郭屢稱曰。熊耳於二文章一。刻二意于滄溟一。故殆肖レ之。方今秉レ筆擬レ李者甚衆。而皆不レ能レ及也。

熊耳、徂徠の學を慕ひ、尤も工に古文辭を修む。時人以て當今の于鱗（一）と爲す。南郭屢〻稱して曰く、熊耳の文章に於ける、滄溟（二）に刻意す。故に殆ど之に肖たり。方今筆を秉つて李に擬する者甚だ衆し。而も皆及ぶ能はざるなりと。

（一）李于鱗、姓は李、名は攀龍、明代の古文辭學者なり、王世貞と相對して世に李王の古文辭といふ、唐詩選は其編に係る　（二）李于鱗の號、其の文に似せんことを苦心す

熊耳於二南郭一。雖レ不レ取レ贄。毎承二其誨督一。文章尤得二南郭刪潤一而長進。故其集中於二南郭一必推二尊之一。以二先生一稱レ之。

熊耳の南郭に於ける、贄（一）を取らずと雖も、毎に其誨督（二）を承く。文章尤も南郭の刪潤（三）を得て長進す。故に其集中南郭に於ては必ず之を推尊し、先生を以て之を稱す。

（一）入門せず　（二）をしへはげます　（三）添削をうけて進歩す

熊耳於二俗事一。一切姓稱二大内一。至レ臨レ文則稱レ餘。自言其先出レ自二百濟明帝太子餘琳一。故以レ餘爲二本姓一。有二竹雨齋者一。亦餘姓也。榊原玄輔記二其墓一曰。按馬韓國。餘璋王太子琳聖。航レ海歸化。推古天皇。館二於周防多多良一。琳聖七世之孫曰二正恆一。賜二姓多多良一號二大内一。其後子孫遂以二大内一爲レ氏。餘章王事。東涯秉燭談載レ之。其說云。日本紀所謂餘豐璋。唐書曰二扶餘豐一。此璋其祖武王名。扶餘百濟氏。今世以爲二百濟餘章王一者誤矣。不レ知稱二餘姓一者。未レ及レ攷レ之乎。將或修爲レ餘乎。

熊耳の俗事に於ける、一切姓大内を稱し、文に臨むに至り則ち餘を稱す。自ら言ふ其先百濟の明帝の太子餘琳より出づ。故に餘を以て本姓と爲すと。竹雨齋といふ者有り。亦餘姓なり。榊原玄輔其墓に記して曰く、按ずるに馬韓國餘璋王の太子琳聖、海に航して歸化す。推古天皇、周防の多多良に館せしむ。琳聖七世の孫を正恆と曰ひ、姓多多良を賜ひ大内と號す。其後子孫遂に大内を以て氏と爲すと。餘章王の事、東涯の秉燭談に之を載す。其說に云ふ、日本紀に所謂餘豐璋とは、唐書にて扶餘豐と曰ふ。此れ璋は其祖武王の名、扶餘は百濟の氏なり。今世以て百濟の餘章王と爲すは誤れりと。知らず餘姓を稱する者(一)、未だ之を攷ふるに及ばざるか。將た或は修して餘と爲すか。

(一) 餘姓の由來をしらべ出すこと能はざるか、又扶餘を略して餘となすか

餘承裕。字子綽。大内氏。小字忠大夫。號二熊耳一。陸奧人。仕二唐津侯一。

熊耳生二于陸奧三春熊耳村一。自二兒時一嗜レ學。年十七。負レ笈來二江戸一。就二秋子帥一問レ業。乃介二子帥一謁二徂徠一。既而到レ京見二東涯一。遂赴二長崎一留講業。是時始見二李滄溟集一大喜。即自謄二寫全部一。日以讀誦焉。居十年。去復來二江戸一。教二授于淺草一。於レ是名聲藉甚。問レ奇者日踵二其門一。亡レ何召爲二唐津侯文學一。

餘承裕、字は子綽、大内氏なり。小字は忠太夫、熊耳と號す。陸奧の人。唐津侯に仕ふ。

熊耳は陸奧三春熊耳村に生れ、兒時より學を嗜む。年十七にして、笈を負うて江戸に來り、秋子帥(一)に就いて業を問ふ。乃ち子帥を介して徂徠に謁す。既にして京に到つて東涯に見ゆ、遂に長崎に赴き、留つて講業す。是時始めて李滄溟集を見大に喜ぶ。卽ち自ら全部を謄寫し、日に以て讀誦す。居ること十年、去つて復江戸に來り、淺草に教授す。是に於て名聲藉甚(二)、奇を問ふ者日に其門に踵る。何くも亡く召されて唐津侯の文學(三)と爲る。

(一) 秋元以正、字は子帥、嵎夷と號す、岡崎藩の文學 (二) 名聲盛に世に聞ゆ (三) 儒官

辭以不能。於是人人謂。千里文而不詩。其實非也。余覽千里在播時作。亦自當行。所以云附者。有說也。千里急於名。又好勝人。是時東都有服子遷。赤石有梁景鸞。南紀有祇伯玉。詩名聞于海內。千里自量雖與此數子並馳。而世方勸復古業。左國史漢人人誦之。託其訓詁亦足不朽。故廢詩專意作諸觿。以網羅其名。既而恐後人以文士觀己。則傳註詩書論孟。以崇其名。然已急於名。又好勝人。故其所論說引證不精。且以臆見勇斷疑義。或勦襲他人說。以爲其著作。雖取快於一時。難免識者指摘。余爲千里深惜之云。

観んことを恐れ、則ち詩・書・論・孟(一三)を傳註して、以て其名を崇うす。然れども已に名に急に、又人に勝つことを好む。故に其論説する所、引證精しからず。且つ臆見を以て疑義を勇斷す。或は他人の説を勦襲(一四)して、以て其著作と爲し、快を一時に取ると雖も(一五)、識者の指摘を免れ難し。余千里の爲に深く之を惜むと云ふ。

(一) 人の垣の下に立たず、即ち人の下風に立たず　(二) 尤もなる論　(三) 醫業をやむ　(四) 唐宋以後の小說書類　(五) 人々其說を相傳へて　(六) 理由あり　(七) 服部南郭　(八) 梁田蛻巖　(九) 紀州に祇園南海あり　(一〇) 復古學　(一一) 左傳・國語・史記・漢書　(一二) 文字文句の註解に從事しても姓名を遺すに足れり　(一三) 詩經・書經・論語・孟子の註釋を作る　(一四) ぬすみまねる　(一五) 物識りの批難をのがれがたし

餘承裕

日本詩史。於二龍洲一頗貶二駁之一。然亦表二其豪爽不一レ立二人籬下一。似レ爲二具論一。乃記二於左一。千里初在二攝之西宮邑一。以レ醫爲レ業。一旦投二刀圭一而來二于京師一。專以レ儒行。是時京師已有下悅二傳奇小說一者上。千里兼唱二其說一。都下翕然傳レ之。其名躁二于一時一。千里於レ是不二復作一レ詩。人或乞レ詩。則

日本詩史の龍洲に於ける、頗る之を貶駁す。然れども亦其豪爽にして人の籬下(一)に立たざるを表す。具論と爲すに似たり。乃ち左に記さん。千里初め攝の西宮の邑に在り。醫を以て業と爲す。一旦刀圭(三)を投じて京師に來り、專ら儒を以て行ふ。是時京師已に傳奇(四)小說を悅ぶ者有り。千里兼ねて其說を唱ふ。都下翕然(五)之を傳へ、其名一時に躁し。千里是に於て復詩を作らず。人或は詩を乞へば、則ち辭するに不能を以てす。是に於て人人謂ふ、千里は文にして詩ならずと。其實は非なり。余千里が播•攝に在りし時の作を覽るに、亦自ら當に行ふべし。爾いふ所以の者は、說(六)有るなり。千里名に急に、又人に勝つことを好む。是時東都に服子遷(七)あり。赤石に梁景鸞(八)あり。南紀に祇伯玉(九)あり。詩名海内に聞ゆ。千里自ら量るに此數子と並び馳せ難く、而も世方に復古(一〇)の業を勸め、左•國•史•漢(一一)人人之を誦す。其訓詁(一二)に託するも、亦不朽にするに足れりと。故に詩を廢して專意諸觴を作り、以て其名を網羅す。既にして後人文士を以て己を

首。此外絶不。視其詩。因表出於此。曰。驅車向東路。東路遠且長。悲風何蕭蕭。颯吹我衣裳。攬轡正徘徊。拔衣登高岡。中原有佳人。意思不凡常。鳴琴白雪飛。吹笙青雲翔。大雅久不聞。逸響初飄揚。此會難再遇。離別ノ一方。遊子懷佳人。何以慰我傷。恨恨長嘆息。車輪轉中腸。願得雙羽翼。高飛在君傍。其二。扁舟曾乘興。五煒照秦城。沈醉黃金盡。狂歌白雪清。文章憐落魄。詞賦論豪英。海内誰畏友。中原堪數名。

し、悲風何ぞ蕭蕭たる、颯として我が衣裳を吹く、轡を攬つて正に徘徊し、衣を拔いて高岡に登る、中原佳人有り、意思凡常ならず、琴を鳴らせば白雪飛び、笙を吹けば青雲翔ける、大雅久しく聞えず、逸響初めて飄揚す、此會再遇し難し、離別す天の一方、遊子佳人を懷ふ、何を以てか我が傷を慰めん、恨恨として長嘆息すれば、車輪中腸を轉ず、願くは雙羽翼を得て、高く飛んで君の傍に在らん。其二、扁舟曾て興に乘じ、五煒秦城を照す、沈醉黃金盡き、狂歌白雪清し。文章落魄を憐み、詞賦豪英を論ず、海内誰か畏友、中原名を數ふるに堪へたり。

(一) 木下實聞字は公達、號は蘭皐、尾張の人 (二) 物悲しき風寂しげに吹く (三) 皇君を斥す (四) 音樂の絕妙なるをいふ (五) 雅音久しく耳にせざりしが今すぐれたる音すみ上る (六) 遊子は龍州自ら、佳人は皇君 (七) 車輪轉じて進み行くにつれ別離の情に堪へず中心甚だ悲し (八) 詩文を作り互の零落を憐みすぐれたる氣象を論ず

能折ㇾ已用ニ宗叔言一。是以家人動詣ニ宗叔一請焉。

吾祖過庭紀談曰。僧修ニ其道一。又爲ニ詩文若書畫諸技藝一。書ㇾ之曰ニ禪餘之暇爲ニ某某事一。是禪寂澄心即禪也。其禪之外以ㇾ究ニ經論一爲ㇾ餘。故禪餘之暇。禪與ㇾ餘二者之暇也。京師一先生。序ニ釋大潮西溟餘稿一曰。禪之餘暇深嗜ニ斯文一。此以ニ禪餘之餘一爲ニ餘暇一也。可ㇾ發ニ一噱一。所ㇾ謂一先生謂ニ龍洲一也。

吾が祖過庭紀談に曰く、僧其道を修め、又詩文若しくは書畫諸技藝を爲し、之を書して禪餘の暇某某の事を爲すといふ。是れ禪寂澄心即ち禪なり。(一)其禪の外經論を究むるを以て餘と爲す。(二)故に禪餘の暇は、禪と餘と二者の暇なり。京師の一先生、釋大潮の西溟餘稿に序して曰く、禪の餘暇深く斯文を嗜むと。此れ禪餘の餘を以て餘暇と爲すなり。一噱(三)を發す可しと。所謂一先生とは龍洲を謂ふなり。

(一)禪定に入りて心を淸淨にすること卽ち禪　(二)經文論部を攻究するを餘となす　(三)一大笑

熙朝文苑。載下龍洲酬ニ蘭皐君見ニ寄詩二

熙朝文苑に、龍洲が蘭皐君(一)の寄せらるゝに酬ふる詩二首を載す。此外絶えて其詩を覩ず。因つて此に表出す。曰く、車を驅つて東路に向ふ、東路遠く且つ長

縄温卿稱レ之曰。就二龍洲著述中一爲二尤善一。孟子解。」子龍錄下龍洲駁二孟子一之言上爲レ序。又其解中。掊擊不レ遺二餘力一。此解而兼レ刺者也。左傳荀子史記世說四部觿。多二謬妄臆說一。世乃謂爲二白駒失孤石栗一。四音失。觿此譯二孤石栗一。俗謂二過失一爲二失孤石栗一。

龍、龍洲が孟子を駁するの言を錄して序と爲す。又其解中、掊擊餘力(一)を遺さず。此れ解にして刺を兼ぬるもの(二)なり。左傳・荀子・史記・世說四部の觿(三)は、謬妄臆說多し。世乃ち謂ひて白駒がしくじりと爲す。四の音失。觿此にくじりと譯す。俗に過失を謂ひてしくじりと爲す。

(一) ありたけの力を以て攻撃す　(二) 解釋にして且つそしりを兼ぬるもの　(三) 觿は「くじり」と訓ず、結を解くの錐也、よりて解の義とす、四と失と音通、四の失解の義にて「しくじり」といふ也

龍洲性褊急。受二其使令一者。毎將レ不レ堪。獨門人加島宗叔者。能得二龍洲意一。龍洲亦

龍洲性褊急(一)にして、其使令を受くる者、毎に將に堪へざらんとす。獨り門人加島宗叔といふ者、能く龍洲の意を得(二)、龍洲亦能く己を折つて(三)宗叔の言を用ふ。是を以て家人動もすれば宗叔に詣つて請ふ。

(一) 氣短か、せつかち　(二) 氣心をのみこむ　(三) 我意を曲げる

所レ纂。有下出ニ於正史之外一者上。如ニ謝承後漢書。王隱晉書一。其事多見ニ世説劉義慶註一。新刻本据ニ世説註一。刪ニ落舊本文一。殊不レ知。世説取ニ風旨於片言隻語一。故所ニ引證一亦掇ニ其要一。簡ニ省其事一。蒙求則事實詳爲レ主。李良所レ謂注下敷演者。卽是已。豈可ニ刪落一哉。今仍ニ舊本一補レ之。以復ニ其舊一。又曰。新刻本考例云。文獻通考藝文部。經籍考小學部。載ニ蒙求三卷一。按ニ文獻通考一。無ニ藝文部一。經籍考小學部。載ニ蒙求一。是目未レ睹ニ其書一。而杜撰引證。其所レ考亦可レ知已。

する者は、卽ち是れのみ。豈に刪落す可けんや。今舊本に仍つて之を補ひ、以て其舊に復すと。又曰く、新刻本の考例に云ふ、文獻通考藝文の部に、蒙求三巻を載すと。文獻通考を按ずるに、藝文の部に無し。經籍考小學部に、蒙求を載せたり。是れ目未だ其書を睹ずして、杜撰引證(六)するもの。其の考ふる所亦知る可きのみと。

(一) あざけりそしる　(二) 削り去る　(三) おもむきを極めて短き語句にて表す　(四) 簡單に要をつまみ、繁文を省略す　(五) 註を下して意をのべひろむ　(六) 雜駁に引きて證とせりとなり

龍洲著書甚多。詩經毛傳補義。治レ詩者以爲レ便。近時

龍洲著書甚だ多し。詩經毛傳補義は、詩を治むる者以て便と爲す。近時繩溫卿之を稱して曰く、龍洲の著述中に就いて尤も善しとすと。孟子解に、男子

家語一。即以爲我更作レ註以壓ニ倒之一。乃謂レ商曰。德夫其學固淺。今見ニ此註一果多ニ舛誤一。吾嘗爲ニ注解一。將ニ爲レ世鋟レ梓。已歸始秉レ筆作ニ補註一。

淺し。今此註を見るに果して舛誤(三)多し。吾れ嘗て註解を爲り、將に世の爲に梓に鋟まんとすと。已に歸り始めて筆を秉つて補註を作る。

(一) 新刻 (二) 舂臺の字 (三) 舛はなまり、誤はあやまり

南郭所ニ校刻一蒙求。當時盛行ニ于世一。龍洲作ニ箋注一。乃欲ニ以壓ニ南郭一也。故其例言恣詆ニ訾南郭校本一曰。舊本多ニ誤謬一。近歲刻本稱ニ改正一焉。而十纔一二耳。又曰。蒙求

南郭が校刻する所の蒙求、當時盛に世に行はる。龍洲箋注を作り、乃ち以て南郭を壓せんと欲す。故に其例言に恣に南郭の校本を詆訾(一)して曰く、舊本誤謬多し。近歲の刻本改正と稱して、十に纔一二のみと。又曰く、蒙求の纂する所、正史の外に出づるもの有り。謝承の後漢書、王隱の晉書の如き、其事多く世說の劉義慶の註に見ゆ。新刻本、世說の註に据り、舊本の文を刪落(二)す。殊に知らず、世說は風旨(三)を片言隻語に取れり、故に引證する所亦其要(四)を撮り、其事を簡省せるを。蒙求は則ち事實詳かなるを主と爲す。李良の所謂注下(五)敷演

從レ京改レ業爲レ儒。晩年應二蓮池侯徵一。掌二文教一。其志在レ治レ經。頗善二文章一。又通二小說俗語一。名聲藉二甚一時一。蛻巖答書曰。足下關西古學。不レ待二蘐園一而興者。比二時賢一臭味自別。不レ問而知三其不二肯苟交一也。又赤松國鸞。與二劉文翼一書曰。平安之於二文學一。其由來尙矣。然以レ今觀レ之。不レ及二東都之盛一遠甚。乃足レ稱三名下果無二虛士一者。唯岡千里一人。其他彭彭儦儦。要亦春秋無二義戰一。

る文章を善くす。又小說俗語に通じ、名聲(二)一時に藉甚たり。蛻巖の答書に曰く、足下は關西の古學、(三)蘐園を待たずして興る者、(四)時賢に比し臭味自ら別なり。問はずして其の肯へて苟も交らざるを知ると。又赤松國鸞、(五)劉文翼に與ふる書に曰く、平安の文學に於ける、其由來尙し。然れども今を以て之を觀れば、東都の盛なるに及ばざるや遠きこと甚だし。乃ち名下果して虛士無しと稱するに足る者、唯だ岡千里一人のみ。其他(六)彭彭儦儦、要するに亦(七)春秋に義戰無し。

(一)一藩の學事をつかさどる　(二)名聲の世に盛なること　(三)蘐園によらずとも特立して起るべきもの　(四)當世の賢者に比しおもむき異なり　(五)宮瀬龍門、江戸の人　(六)彭彭儦儦何れも人の多きこと　(七)春秋に義戰なきが如く、學者は多けれど、秀でたる者なし

龍洲嘗過二書商一。見二新鐫春臺增註孔子

龍洲嘗て書商を過り、(一)新鐫の春臺が增註孔子家語を見、即ち以爲へらく、我れ更に註を作つて以て之を壓倒せんと。乃ち商に謂つて曰く、(二)德夫其學固

錦江在職五十餘年。一日不レ闕レ直。見二于傳一。而餘暇撰著如レ此。常人所レ不レ及也。

復二荻正卿一書曰。老禿今玆七十有二歲。肉斤酒斗。步走如レ飛。此爲二寶曆十年春事一。嗚呼老健之不レ足レ賴也。是歲九月十九日沒。友人入江南溟作レ傳。墓在二江戸本所本法寺一。

(一)荻正卿に復する書に曰く、(二)老禿今玆七十有二歲、肉は斤酒は斗にして、步走飛ぶが如しと。此れ寶曆十年春の事と爲す。(三)嗚呼老健の賴むに足らざるや、是歲九月十九日沒す。友人入江南溟傳を作る。墓は江戸本所本法寺に在り。

(一) 荻生友山、河越の人　(二) 老人の自稱　(三) 老人の健康はあてにならず

岡白駒。字千里。小字太仲。號二龍洲一。播磨人。仕二蓮池侯一。龍洲少時。自二播磨一徙二攝津一。以レ醫爲レ業。及レ

岡白駒

岡白駒、字は千里、小字は太仲、龍洲と號す。播磨の人。蓮池侯に仕ふ。龍洲、少時播磨より攝津に徙り、醫を以て業と爲す。京に徙るに及び業を改めて儒と爲る。晩年蓮池侯の徵に應じ、(一)文教を掌る。其志經を治むるにあり。頗

者多。後掲装作帖。傳爲奇賞。遂轉歷櫻町天皇乙覽云。

相模酒匂川。歳漲流爲患。官吏治之無功。田中丘隅。字喜古。武藏川崎人也。錦江嘗一見卽察其非常人。遂薦治酒匂。果底績。乃堤其東西。名曰文命。立碑以紀事。錦江代喜古作文。享保十四年。喜古沒。錦江又撰其墓記。

相模の酒匂川、歳々張流して患を爲す。官吏之を治むるも功無し。田中丘隅、字は喜古、武藏川崎の人なり。錦江嘗て一見卽ち其の常人に非ざるを察し、遂に薦めて酒匂を治めしむ。果して績(一)を底す。乃其ち東西に堤し、名づけて文命といひ、碑を立て以て事を紀す。錦江、喜古に代りて文を作る。享保十四年、喜古沒す。錦江又其墓記を撰ぶ。

(一) 手柄をあぐ

芙蓉樓集藏于家。未刊布。余嘗借覽之。卷帙頗爲浩瀚。廣交時彥。

芙蓉樓集、家に藏して、未だ刊布せず。余嘗て之を借覽するに、卷帙(一)頗る浩瀚と爲す。廣く時彥(二)に交る。錦江在職五十餘年、一日も直(三)を闕かずと、傳に見ゆ。而も餘暇の撰著此の如し。常人の及ばざる所なり。

(一) 卷數非常に多し　(二) 時の名士　(三) 宿直

代點定。故以名云。屋木歇獨木。肸篤訥鑯蘧曬鑯。葛及栗過栗。質葛刺屋速謁郁。過蔑貲質訥葛密（譯曰、有涯人做業。頤呵仰神祇）斯枯捺兒屋。傜木兒篤吉結跋。捺曬蘧篤木。葛密曬傜葛斯兒。密穀速鴞斯結列。（譯曰。聞神與正直一任此身安。）此二首嘗自書與信濃飯田人某。偶有爲狐所憑者。三年不去。某乃誦斯歌。狐即去。此狐後又憑江戸本所石原商家之女。自陳畏錦江歌。

ていふ、聞く、神正直に與すと、一任す此身の安きを）此二首嘗て自ら書して信濃飯田の人某に與ふ。偶々狐に憑かるゝ者有り。三年にして去らず。某乃ち斯の歌を誦す。狐即ち去る。此狐後又江戸本所石原商家の女に憑り、自ら太だ錦江の歌を畏ると陳ぶ。

（一） 點評していたゞく

元文二年。金輪寺住持宥衞。奉命立碑于飛鳥邱。錦江代撰文并書。人往觀之

元文二年、金輪寺の住持宥衞、命を奉じて碑を飛鳥邱に立つ。錦江代つて撰文し并に書す。人往きて之を觀る者多し。後搨裝（一）して帖と作し、傳へて奇賞を爲す。遂に轉じて櫻町天皇の乙覽（二）を歷と云ふ。

（一） 石版ずりにし、裝釘して書帖となす （二） 乙夜の覽に備ふ

二十一史一。其餘恩準レ之書甚多。自作二芙蓉樓記一曰。辛亥之冬。余架二一小樓於江上一。顏レ之曰二芙蓉一。以爲二藏書之所一。芙蓉名何取。取三諸芙蓉當二乎軒一也。芙蓉相距實三百餘里矣。而坐挹二三峰雪一者。其高且秀也。樓何由起。蓋家有二賜書千餘卷一。恐レ辱二帷房側湢之地一。此樓之所レ起云云。

芙蓉の名何にか取れる。諸を芙蓉軒に當るに取るなり(三)。芙蓉相距る實に三百餘里。而も坐して三峰の雪を挹るは、其の高く且つ秀でたればなり。樓何に由つてか起る。蓋し家に賜書千餘卷有り。帷房側湢の地に辱さんことを恐る(四)。此れ樓の起る所なり云々と。

㈠享保十六年　㈡額なり、扁額をかゝぐるなり　㈢富士山軒端に見ゆ　㈣帷房はねや側湢は浴室のそばをいふ

錦江又善二倭歌一。傳レ自二冷泉公一。其集名曰二密郁詠捨密一。言二三代波一也。蓋歷二泉家三

錦江又倭歌を善くす。冷泉公より傳ふ。其集の名を、みよのなみといふ。三代波を言へるなり。蓋し泉家三代の點定(一)を歷たり。故に以て名づくと云ふ。思へども人のわざには限あり、力を添へよ天地の神。(譯していふ、涯有り人の做業、呵護神祇を仰ぐ) 直なるを護るときけば何事も、神に任する身こそ安けれ。(譯し

邑屠二者上。苟有二義氣若才能一者。必撫而愛レ之。用以令レ盡二其力一。躬亦專以レ奉レ公立レ志。開二人之善言一。若見下有二奇策一者上。乃傾レ身引二薦之一。唯恐レ後。冀三以供二國家用一也。前後由レ此有下拔爲二良吏一效中績。歸德恆言。世人好レ學。談玄雖レ有レ餘。何益二乎吾縣官之務一乎。倘矣哉。古聖人之治。今豈猶以爲二不レ可レ行レ之者一乎哉。誠有レ味二其言一也。故有二奇飭良吏之才一者。聞レ之。時試焉施行。頗有レ效云。是歸德餘事也。歸德既以三自竭二勤力一達矣。雖三亦盛世所二明試一。非二其忠誠奉レ公。何以至レ此乎。則士不レ可三以不二弘毅一者乎。

を以て達す。亦盛世の明試する所なりと雖も、其忠誠公に奉ずるに非ずんば、何ぞ以て此に至らんや。則ち士は以て弘毅ならざる可からざる者かと。(一一)

(一) 徂徠門のともがらと往來す (二) 白河の産なればいふ (三) 心強く氣概をたつとぶ (四) 倜儻は衆人と異なりて志大なること、恢廓は志のひろく大なること (五) 邑は村里、屠は穢多なり、賤しき者を指す (六) 推薦す (七) 世間の學を好む輩高遠なる學理を說くに十分なれども屬吏たる務めに益無し (八) 聖人の治も之を實行し得ざるものとなさんや (九) 餘談 (一〇) 忠勤の力をつくすことゆきとゞく (一一) 士たるものは器量寛弘にして忍耐強くあるべし。論語泰伯篇にあり

錦江方二享保間一。侍二講禮記明律一。寵遇日厚。賜二十三經

錦江、享保間に方つて、禮記明律を侍講し、寵遇日に厚し。十三經二十一史を賜ひ、其餘恩之に準ずるの書甚だ多し。自ら芙蓉樓の記を作つて曰く、辛亥(一)の冬、余一小樓を江上に架し、之に顔(二)して芙蓉といひ、以て藏書の所と爲す。

江戸。十七歳爲二成島道雪者嗣一。性好レ學悦二徂徠之説一。乃與二其徒一周旋。一時著稱。成島氏仕二大府一爲二坊主一。錦江襲二其職一。元文二年晉二同朋之班一。至二其爲レ人。則有二南郭贈序一。足三以想二其概一曰。歸德朔北之產。爲レ人弘毅。志尙二節概一。而又與二倜儻恢廓之士一相親善。雖下俠少年居二

時著稱あり。成島氏大府に仕へて坊主たり。錦江其職を襲ぎ、元文二年同朋の班に晉む。其人と爲りに至つては、則ち南郭の贈序有り、以て其概を想ふに足る。曰く、歸德は朔北(二)の產なり。人となり弘毅(三)にして、志、節概を尙ぶ。而して又倜儻(四)恢廓の士と相親善し、俠少年邑居(五)に居る者と雖も、苟も義氣若しくは才能有る者は、必ず撫して之を愛し、用ひて以て其力を盡さしむ。躬も亦專ら公に奉ずるを以て志を立つ。人の善言を聞き、若しくは奇策ある者を見ては、乃ち身を傾けて之を引薦(六)し、唯後れんことを恐れ、以て國家の用に供せんことを冀ふ。前後此に由つて拔かれて良吏と爲り績を效すもの有り。歸德恒に言ふ、世人(七)學を好む、談玄餘有りと雖も、何ぞ吾が縣官の務に益あらんや。尙いかな、古聖人の治、今豈に猶ほ以て(八)之を行ふ可からざる者と爲さんやと。誠に其言に味有り。故に奇策良吏の才有る者之を聞き、時に試みて施行するに、頗る效有りと云ふ。是は歸德の餘事(九)なり。歸德既に自ら勤力(一〇)を竭す

劉惔常云。見二何次道飲一レ酒。使下人欲上レ傾二家釀一。予於二平子和一亦云。南郭記レ墓曰。飲レ酒忼慨。時或激烈至二泣下一。

㊀己を高く持して人をにらみ下すこと　㊁劉伯倫と李青蓮と、共に酒を以て名高し　㊂家釀は家に造れる酒なり、何次道が酒を飲む樣を見れば、人をして其家に造れる酒を悉く飲ませ見んとの心を起さしむ

鳴鳳卿。一名信遍。字歸德。又字子陽。成島氏。成鳴倭讀同。故假修爲二鳴氏一。稱二道筑一。號二錦江一。又號二芙蓉道人一。陸奧人。仕二大府一。

錦江本姓平井氏。生二于陸奧白河一。幼來二

鳴鳳卿

鳴鳳卿、一名信遍、字は歸德、又の字は子陽、成島氏、成と鳴は倭讀同じ、故に假に修して鳴氏と爲す。道筑と稱す。錦江と號し、又芙蓉道人とも號す。陸奧の人。大府に仕ふ。

錦江本姓は平井氏、陸奧の白河に生る。幼にして江戸に來り、十七歲にして成島道雪といふ者の嗣と爲る。性學を好み徂徠の說を悅ぶ。乃ち其徒と周旋し、一

其所二自賞一也。徂徠稱古狂簡吾無レ所レ裁。此徂徠寛大愛レ才。稱譽每過二其實一者也。宇士新痛斥二金華之文一。嘗著二彈金華稿刪一。附二名公四序評後一以印行。

しと。此れ徂徠寛大にして才を愛し、稱譽每に其實に過ぐる者なり。宇士(三)新痛く金華の文を斥け、嘗て彈金華稿刪を著し、名公四序評の後に附し以て印行す。

(一) 論語公冶長篇に曰く、吾黨の小子狂簡にして斐然として章を爲す、之を裁する所以を知らずと、意は、孔門の弟子志大にして事に簡略に、文采美しきあやをなせども之を裁割して中道に合せしむる所以を知らずとなり、吾れ裁する所無しとは極めて讃稱するなり　(二) ほめ言葉が實際より過ぐ　(三) 宇野士新

金華好レ酒痛飮。徂徠送三其子和飮レ酒傲睨。深慕二伯倫之三河一序曰。青蓮之爲一レ人。紫芝園漫筆曰。何充善飮。

金華酒を好み痛飮す。徂徠其三河に之くを送る序に曰く、子和酒を飮みて傲睨(一)、深く伯倫・青蓮の人となりを慕ふと。紫芝園漫筆に曰く、何充善く飮む。劉惔常に云ふ、何次道が酒を飮むを見れば、人をして家(三)釀を傾けんと欲せしむ、予、平子和に於て亦云はんと。南郭墓に記して曰く、酒を飮んで忼慨す。時に或は激烈泣下るに至ると。

古者大夫七十而致レ事。若不レ得レ謝。則必賜二之几杖一。行役以二婦人一。適二四方一乘二安車一。自稱曰二老夫一。然則古時大夫年未二七十一。且猶不レ得レ稱レ老。況其下乎。今足下未レ及二始衰一。而自稱曰レ老。豈不二太早一乎。純所レ見如レ此。是以有二前書一云。足下若以爲レ不レ然。則盍レ答書以辨レ之。純雖二不敏一。將二拜而受上レ敎。今足下不レ然。特致二謝一聲一而已。則其不レ見レ悅也明矣。純不レ知二其罪一。故玆復請。足下若曰下我非二仲尼之徒一。何以二禮法一爲上。則非二純所レ知也。

金華文章尤

南郭送序曰。嘗相與登二東山一。互望數十里。邑屋臺榭相屬。而子和臨レ之。飄然心已蔑二視一世一。乃顧謂レ余曰。寥寥乎無レ聞哉。使三我頓生二自愛之心一。凡其大言自稱。率此類也。

南郭の送序に曰く、嘗て相與に東山に登る。(一)互望數十里、(二)邑屋(三)臺榭相屬す。而して子和之に臨み、飄然として心已に一世を蔑視す。乃ち顧みて余に謂つて曰く、(四)寥寥乎として聞ゆる無し。我をして(五)頓に自愛の心を生ぜしむと。凡そ其大言自稱、率ね此類なり。

(一) 見渡すこと數十里 (二) 民屋 (三) 臺は土を高く築きしもの、之に屋を作るを榭といふ、此處は大廈高樓を斥す (四) ひつそりとして世に聞ゆるものなし (五) 自己の偉大なるを自覺し俄かに自分の身ををしむ念生ず

金華、文章は尤も其の自賞する所なり。徂徠稱す、古の(一)狂簡吾れ裁する所無

且犬馬之年。亦在二足下之先一。足下與レ純言。不レ宜二自稱曰一レ老。於レ純尚可。若與二他人一如レ此。必將レ謂二足下不一レ知レ禮。純竊爲二足下一恥也。又書云。抑足下以レ純爲下出二無稽之言一。以欺中足下上乎。請復言レ之。禮。恆言不レ稱レ老。鄭康成以爲レ廣レ敬。夫以レ不レ稱レ老爲レ廣レ敬。則稱レ老爲二不敬一可レ知矣。

乘り、自ら稱して老夫といふ。然らば則ち古時には大夫年未だ七十ならざれば、且つ猶ほ老と稱するを得ざりき。況や其下をや。今足下未だ始衰(一三)に及ばずして自ら稱して老といふ。豈に太だ早からざらんや。純見る所此の如し(一四)。是を以て前書有りて云へり。足下若し以て然らずと爲さば、則ち盍ぞ答書以て之を辨ぜざる。純不敏と雖も、將に拜して教を受けんとす。今足下然らず(一五)。特に謝すの一聲を致すのみ。則ち其の悅ばれざるや明かなり。純其罪を知らず。故に玆に復た請ふ。足下若し我れ仲尼(一六)の徒に非ず、何ぞ禮法を以てせんと曰はば、則ち純が知る所に非ざるなりと。

㊀ 春臺の名　㊁ 年齢を以て人に高ぶる傲慢のことば　㊂ 足下に師事せず　㊃ 自己の年齢を謙遜していふ　㊄ よりどころの無き言　㊅ 禮記に、平素の言に老といはずとあり　㊆ 敬の精神を推し廣む　㊇ 辭職す　㊈ 許可を得ず　㊉ 脇息と杖　(一一) 召使ふに婦人を以てす　(一二) 安坐し得るやうに造れる車　(一三) 五十歳をいふ、禮記に五十にして始めて衰ふとなり　(一四) これ故前便の書にて申上げたり　(一五) 辯明の辭無し　(一六) 孔子のともがらにあらざれば禮法などはどうでもよろし

之。而金華不改。春臺書云。足下每與純書牘。自稱愚老。老尊稱也。故呼先生長者曰老。禮也。若自稱曰老者。以歯高人。倨傲之辭也。故與門人小子言。或時以之自稱耳。其於朋友。雖已年長於彼。然猶自稱曰弟。亦禮也。先賢所行可見矣。純雖不才。未委質於足下。

ふる毎に、自ら愚老と稱す。老は尊稱なり。故に先生、長者を呼んで老と曰ふは、禮なり。若し自稱して老と曰ふは、歯を以て人に高ぶる倨傲の辭なり。故に門人小子と言ふ、或は時に之を以て自稱するのみ。其朋友に於ける、己が年彼より長ずと雖も、然も猶ほ自ら稱して弟と曰ふ、亦禮なり。先賢の行ふ所見る可し。純不才と雖も、未だ質を足下に委せず。且つ犬馬の年、亦足下の先に在り。足下純と言ふには、宜しく自ら稱して老といふべからず。純に於ける尙ほ可なり。若し他人と此の如くならば、必ず將に足下を禮を知らずと謂はんとす。純竊かに足下の爲に恥づと。又書に云ふ、抑ゝ足下純を以て無稽の言を出し、以て足下を欺くと爲すか。請ふ復之を言はん。禮に恆言老を稱せずと。鄭康成以て敬を廣むと爲す。夫れ老を稱せざるを以て敬を廣むと爲さば、則ち老を稱するを不敬と爲すこと知る可し。古者大夫七十にして事を致し、若し謝を得ざれば、則ち必ず之に几杖を賜ひ行役婦人を以てし、四方に適くに安車に

小夜。僕名染之助。又愛ㇾ猫爲ㇾ甚。其所ㇾ蓄蕃息至二十八頭一。

爲す。其蓄ふ所蕃息(一)して十八頭に至る。

(一)蕃殖、ふゆ

紫芝園漫筆載。一日余與二平子和一語及二天文一。子和曰。吾不ㇾ識ㇾ星。唯識二北斗與二明星一而已。余曰。北斗信子識ㇾ之乎。其所謂明星者。果是太白邪。莫下是以二歳星一爲中明星上耶。子和笑曰。吾不ㇾ識二眞明星一也。

紫芝園漫筆に載す、一日余平子和(一)と語天文に及ぶ。子和曰く、吾れ星を識らず。唯北斗と明星とを識るのみと。余曰く、北斗信に子之を識るか。其所謂明星とは、果して是れ太白(二)か。是れ歳星を以て明星と爲す莫きかと。子和笑つて曰く、吾れ眞の明星を識らざるなりと。

(一)平野金華　(二)金星

金華與二書春臺一。毎自稱ㇾ老。春臺以爲二非禮一。數貽ㇾ書責ㇾ

金華書を春臺に與ふるに、毎に自ら老と稱す。春臺以て非禮と爲し、數〻書を貽りて之を責む。而るに金華改めず。春臺の書に云ふ、足下(一)純に書牘を與

然子男女同二衣裳一。是何禮也。金華從容曰。薄祿小臣。家貧不レ能レ給二新衣一。而令不レ可レ犯。幸荊婦有二一衣稍華一。以得レ免二罪戾一焉。事聞二于侯一。即日加二賜祿數石一。

侯に聞ゆ。即日祿數石を加賜す。

㊀世人を輕侮す　㊁職務に拘束されず意をほしいまゝにす　㊂つまりは主君を敬ふため　㊃一枚の衣のやや美しきを有す

嘗與二徂徠一同泛二墨多河一。問曰。吉原倡家不レ知東邪。西邪。徂徠指二示東方一曰。江上有二長堤一。名曰二日本堤一。所謂吉原妓樓在二其堤下一也。金華笑曰。先生妄言。不二惟文字上一。於二地理一亦能妄言。

嘗て徂徠と同じく墨多河に泛ぶ。問うて曰く、吉原の倡家は知らず東か西かと。徂徠東方を指示して曰く、江上に長堤有り、日本堤と名づく。所謂吉原妓樓は其堤下に在りと。金華笑つて曰く、先生の妄言、惟文字上のみにあらず、地理に於ても亦能く妄言すと。

㊀先生のでたらめは惟文字の上だけにあらず

金華有二一妾一僕一。妾名月

金華に一妾一僕有り。妾名は月小夜、僕名は染之助。又猫を愛すること甚だしと

金華器宇偉然。才鋒出二儕輩一。學二徂徠一。閑二修辭一。家素貧窶。不レ能レ聚レ書。架上惟有二左傳禮記莊子通鑑撮抄數卷一而已。其將レ屬レ文。必先見レ之者數遍。而後下レ筆。

金華、器宇偉然(一)、才鋒儕輩(二)に出づ。徂徠に學び、修辭に閑ふ(三)。家素貧窶にして書を聚ること能はず。架上(四)惟左傳・禮記・莊子・通鑑の撮抄數卷有るのみ。其の將に文を屬せんとするには、必ず先づ之を見ること數遍にして、後筆を下す。

(一)器量偉大　(二)同輩、なかま　(三)字句を連ねて文を作るに長ず　(四)書棚の上

少曠達。侮二弄一世一。服レ官尚縱任不レ拘。侯家嘗布レ令曰。佳節見レ君者。宜レ用二新衣一。禁二垢衣一。而金華著二其妻衣一而出。吏尤曰。所二前布一之令。要在レ敬レ君而已。

少うして曠達、一世(一)を侮弄す。官に服するも尚ほ縱任(二)拘らず。侯家嘗て令を布いて曰く、佳節に君に見ゆるには、宜しく新衣を用ふべし、垢衣を禁ずと。而るに金華其妻の衣を著て出づ。吏尤めて曰く、前に布く所の令、要(三)は君を敬するに在るのみ。然るに子男女衣裳を同じうす。是れ何の禮ぞやと。金華從容として曰く、薄祿の小臣、家貧にして新衣を給する能はず。而も令犯す可からず。幸に荊婦(四)一衣の稍華なるを有し、以て罪戾を免るゝを得たりと。事

先生送君彝遊函嶺曰。昨日晁郎採樂還。井郎今日又遊山。山中芝草知長短。玉筍流雲可重攀。近日縣次公。送子和之參州曰。休唱陽關三疊詞。陽關三疊不勝悲。送君多馬河邊柳。折自南枝至北枝。亦皆易成誦也。

つて曰く、唱ふるを休めよ陽關三疊の詞、(六)陽關三疊悲に勝へず、君を送る(七)多馬河邊の柳、折つて南枝より北枝に至ると。亦皆誦を成し易しと。

(一) 口に誦す (二) 君彝は山井崑崙といふ、故に井郎といへり (三) 南唐の沈廷瑞道術有り、林棲路宿、多く玉筍・浮雲の二山に在り (四) 山縣周南 (五) 平野金華 (六) 唐の王維、元二の安西に使するを送する詩に曰く、渭城朝雨浥輕塵、客舍青々柳色新、勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人と。此の結句を三たび疊してうたふを三疊といふ (七) 多摩川

平玄中。字子和。小字源右衛門。號金華。私諡文莊。姓平野。修爲平氏。陸奥人。仕守山侯。

平玄中

平玄中、字は子和、小字は源右衛門、金華と號し、文莊と私諡す。姓は平野、修めて平氏と爲す。陸奥の人。守山侯に仕ふ。

若可二其所一レ可也。君命所レ不レ聽也。涅而不レ緇。得レ正斃斯已。或其負レ親而逃。遵二海濱一而處。版築屠釣。不下猶愈中奴婢自侮。跪起如二子性一。百役無レ不二是奉一。嗟來而飽。夏畦以安。沒レ身而無レ爲者上乎。則謀二之物先生一。先生曰。鱉次公有二亡レ君之國一可也。而有二父母在一。區區之節。潔レ己近レ名。如二大義一何。已。君子豈以二匹夫匹婦之諒一爲乎。有二父母在一。有二亡レ君之國一可也。次公愕然且懼且泣。遂奉二君命一云。

出づ　(一一) 一度にかゝりと變る　(一二) 盟約を破り姓名を記したる誓約書を燒く　(一三) しつかりとしたる操守無し　(一四) 惡い評判　(一五) 染めても黑く染まず。精神の操守不拔なるをいふ　(一六) 以下支那の故事をひきて、自ら可とする所を可とせば、以下の人々の爲す所にも劣るまじと、其覺悟を述べしなり。海濱云々は孫叔敖が海より擧げられしを、版築は傅說が版築の間より擧げられしを、屠は伊尹、釣は呂尙をさす　(一七) 自から奴婢の如く卑屈になる　(一八) こゝら來りて食へと鄙みて與ふる所の食に飽く　(一九) 人に諂ひ笑ふは夏の田を耕すより苦しと云ふ成語より、上官に諂ひ仕へて甘んずる意　(二〇) 小さき節義　(二一) 自分の身を潔白にして名を售る　(二二) 俗人の所謂皺とするもの

紫芝園漫筆曰。古人絕句。有下入レ耳能令二人成上レ誦者。如二宋延淸邙山。賀季眞回鄕偶書一。是也。物

紫芝園漫筆に曰く、古人の絕句、耳に入り能く人をして(一)誦を成さしむる者有り。宋延淸の邙山、賀季眞の回鄕偶書の如き是れなり。物先生、君彝が函嶺に遊ぶを送るに曰く、昨日晁郞藥を採つて還り、(二)井郞今日又山に遊ぶ、山中の芝草知んぬ長短、(三)玉笥流雲重ねて攀づ可しと。近日(四)縣次公、(五)子和が參州に之くを送

富在天。擲棄不顧可乎。而人各有所見也。苟其所見而爲乎。何其眷眷愛故弗已。狐裘而羔袖不瑕有害。無知所終薄。首鼠以爲龍斷之望乎。卽其執熱濯之。一朝而豹變。靡不絶同盟焚載書。更名佗師。青雲自致。人或謂無特操。側目而視。惡聲載道路。所不辭哉。

君命も聽かざる所あり。涅すれども緇せず。正を得斃れて斯に已まん。或は其の親を負うて逃げ、海濱に遵つて處り、販粲屠釣するも、猶ほ奴婢自ら侮り、跪起すること子性の如く、百役是れ奉ぜずといふことなく、嗟來にして飽き、夏畦以て安じ、身を沒して爲すことなき者に愈らざらんやと。則ち之を物先生に謀る。先生曰く、繫次公君亡きの國にあらば可なり。而れども父母の在すあり。區區の節、己を潔うして名に近づく。大義を如何にせん。君子豈に匹夫匹婦の諒を以てせんや。父母在すあり。君亡きの國あらば可なりと。次公愕然として且つ懼れ且つ泣き、遂に君命を奉ずと云ふ。

（一）大學頭　（二）平野金華　（三）長州侯毛利氏　（四）出入するに規則あり　（五）山縣周南　（六）耰鉏は田畑を耕すすきくは、卽ち大意は、人(徂徠を指す)の農具を借り受けて自己の田畑を耕し（徂徠より敎を受けて學び五穀みのれば(業成り成功すれば)わが榮達は天の運にして人の力にあらず（徂徠の恩にあらず）として、すてて之を顧みざるが如き事を爲し得んやとなり　（七）見て以て善を信ずる所を敢行すとなさば　（八）ひたすら故きを顧み戀ひてやまず　（九）狐の皮衣の貴重なるに羊の皮衣の賤しきを附くるも何等差支なしとして歸著すべき所を知らず。鼠が穴より首を出したり入れたりするが如く心を二途にわかつ　（一〇）岡の上より市場を見渡して利益を獨占する故事より

於吾輩。不得爲老兄之不言。如何。如何。

嘗師林祭酒。此事不見行状及墓記。獨金華贈序詳之。曰。長侯慕林子之學。而公侯之貴。出入有度。則不能朝夕其家躬親肆業。將使次公就弟子列受而傳之。次公不肯。慨然嘆曰。物先生在矣。其唯成我也。奈何。借人耰鉏。既而大穫。謂

嘗て林祭酒(一)を師とせんとす。此事行狀及び墓記に見えず。獨り金華(二)の贈序之を詳かにす。曰く、長侯林子(三)の學を慕ふ。而も公侯の貴き、出入度あり(四)。則ち其家に朝夕して躬親ら業を肆ふこと能はず。將に次公(五)をして弟子の列に就き受けて之を傳へしめんとす。次公肯ぜず。慨然として嘆じて曰く、物先生在り。其れ唯我を成さんや。(六)奈何ぞ人の耰鉏を借り、既にして大に穫れば、富天にありと謂ひ、擲棄顧ずして可ならんや。而れども人各〻見る所あり。苟も其見る所にして(七)爲さんか、何ぞ其れ眷眷(八)故を愛みて已まず、狐裘(九)にして羔袖瑕にして害あるならずとして、終に薄く所を知る無く、首鼠以て龍斷(一〇)の望を爲さんや。即ち其の熱を執て之を濯ぎ(一一)、一朝にして豹變し、同盟(一二)を絶ち載書を焚き、名を佗の師に更へ、青雲自ら致さざる靡し。人或は特操(一三)なしと謂つて、目を側てて視、惡聲(一四)道路に載つるも、辭せざる所なり。若し其可とする所を可とせば、

文辭豐縟。當今之時。麟之角哉。其中有二可レ疑者一。皇某皇某者。是何言也。老兄一代名儒。社中巨擘。世所二矜式一。言則爲レ法。駟不レ及レ舌。弟嘗謂。大東超二於宇宙一者三焉。開國以來。一姓爲レ君。載籍所レ不レ記也。周有二二分一。服二于人一也。稱爲二至德一。今也有二天下一。而不レ去二臣位一。秦人壞二封建一。刑名以治。堂堂中國。於レ今三千年。不レ能二復復一。當今封建密二於周人一。而仁浹二於海隅一也。漢以來所レ不レ聞焉。此三者實超二于宇宙一矣。名教存二

するや、稱して至德となす。今や天下を有するも、而も臣位を去らず。(一二)秦人封建(一三)を壞ち、刑名(一四)以て治む。堂堂たる中國、今に於て三千年、復復(一五)すること能はず。當今封建周人より密にして、仁海隅(一六)に浹し。漢以來聞かざる所なり。此三者は實に宇宙に超ゆ。名教(一七)吾輩に存す。老兄の爲にこれ言はざるを得ず。如何、如何

(一)うまれつき (二)先日 (三)服部南郭 (四)記載する所ひろく、文章美し (五)極めて稀なる喩 (六)護園社中の頭目 (七)世人の敬ひのつとる所の人 (八)駟馬の速かなるも一旦言ひしことには追ひつかれず (九)日本が世界に超越する理由三 (一〇)建國以來一姓連綿として君主たるは書物にもなきこと (一一)周は天下の二分の一を領有しながら殷に服從せるを至德と稱す (一二)德川氏天下を領有するも猶は臣位に在り (一三)諸侯ありて各地方を治め、官位地を世襲する制度、中央集權に對して地方分權の稱 (一四)名を以て實を責め毫も恕する所なき主義、申不害・韓非等之を唱ふ (一五)また再び封建制に復すること能はず (一六)仁德四海の隅々までもゆきわたる (一七)名分を正す教は吾等の保持する所

理氣性命。宋學謬誤擧既發揮。實先得ニ我口之所レ嗜者也。夫述而不レ作。君子之道。仁齋何有ニ竊レ珠還レ櫝之陋一。苟是之述。惡有下其書一言不ニ相援及一。而自古處者上乎哉。顧其書既成後適見レ諸。或有ニ不幸終身不レ得レ見者一。皆不レ可レ知也。以レ是刺ニ乎仁齋一誣矣。

生じ且つ人性は天より享受すとなす說　㈧まちがひを皆說明す　㈨先聖の道を祖述して自ら作爲せず　(一〇)他人の說の精髓を剽竊して知らぬ振してゐる　(一一)自己の述著

蘐苑之徒。春臺獨以ニ禮法一自任。且其賦性之嚴。辨論之勁。縱有レ所レ疑。其徒不ニ敢議一。而獨周南能忠ニ告之一。其書曰。日者於ニ子遷所一。得レ見ニ老兄鎌倉紀行一。記載該博。

蘐苑の徒、春臺獨り禮法を以て自ら任ず。且つ(一)其賦性の嚴にして、辨論の勁き、縱ひ疑ふ所有るも、其徒敢へて議せず。而して獨り周南のみ能く之に忠告す。其書に曰く、(二)日者(三)子遷の所に於て、老兄の鎌倉紀行を見るを得たり。(四)記載該博、文辭豐縟、當今の時、(五)麟の角なるかな。其中に疑ふ可き者有り。皇某皇某とは、是れ何の言ぞ。老兄は一代の名儒、(六)社中の巨擘、(七)世の矜式する所、言は則ち法と爲る。(八)駟も舌に及ばず。弟嘗て謂ふ、(九)大東、宇宙に超ゆる者三あり。(一〇)開國以來、一姓君と爲す。載籍の記せざる所なり。(一一)周二分を有ち、人に服

徂徠於二古人一。掊擊詆訶不レ遺二餘力一。其徒承二襲口胎一。浸失二厚道一。獨周南溫良馴雅。其持論稍平。書二吉齋漫錄後一曰。向者在二東都一。或有二言者一。仁齋先生倡レ學。本有二帳中之書一。諸弟子輩不レ得二與見一。曰吉齋漫錄。曰甕記。曰櫝記。余甚不レ信。既而得レ見二漫錄一。其言鑿鑿有レ味。所レ謂

徂徠の古人に於ける、掊擊詆訶(一)餘力を遺さず。其徒口胎(二)を承襲し、浸厚道(三)を失す。獨り周南溫良馴雅(四)、其持論稍平かなり。吉齋漫錄の後に書して曰く、向者に東都に在り。或は言ふ者有り、仁齋先生學を倡ふるに、本帳中(五)の書有り。諸弟子輩與り見るを得ず。曰く吉齋漫錄、曰く甕記、曰く櫝記と。余甚だ信ぜず。既にして漫錄を見るを得て、其言鑿鑿(六)として味有り。所謂理氣性命(七)、宋學(八)の謬誤學既に發揮す。實に先づ我口の嗜む所を得る者なり。夫れ述べて(九)作らざるは、君子の道なり。仁齋何ぞ珠を竊み櫝を還す(一〇)の陋有らん。苟も是を之れ述べば、惡ぞ其書一言も相援及せずして自ら古處する者有らんや。顧ふに(一一)其書既に成るの後適ゝ諸を見るか、或は不幸終身見得ざる者有らんも、皆知る可らざるなり。是を以て仁齋を刺るは誣ふるなり。

(一) 力のありだけ攻擊し、そしる　(二) 徂徠が他人を好んでそしる口さきをうけつぐ　(三) 溫厚の道を失す　(四) おだやかになれてゐる　(五) 秘藏の書　(六) しつかりとして味あり　(七) 天地間先づ理あり然る後に氣あつて物を

周南少二南郭一四歳。文章雖レ不レ及。亦自足二不朽一。然欿然不二自足一。病中尚寄二書南郭一曰。今疾踰レ年不レ已。岌岌乎。傾者必覆。幾不レ起矣。余於二文辭一無レ所レ喩。老兄所二熟知一也。諸友門人欲二梓而傳一。拒而不レ允。數請數拒。於レ今數年所矣。余死彼必行二其意一。行二其意一必圖二諸老兄一。請勞二足下一。爲レ我刈レ蕪除レ茀。略存二繩墨一。莫レ貽二同社之詬一幸甚。

周南、南郭より少きこと四歳。文章及ばずと雖も、亦自ら不朽たるに足る。然るに欿然(一)自ら足れりとせず、病中尚ほ書を南郭に寄せて曰く、今疾年を踰えて已えず。岌岌乎(二)たり。傾く者は必ず覆へる。(三)幾ど起たざらん。余文辭に於て喩る所無きは、老兄の熟知する所なり、諸友門人(四)梓して傳へんと欲す。拒んで允さず。數〻請ひ數〻拒む。今に於て數年所なり。余死せば彼必ず其意(五)を行はん。其意を行はば必ず諸を老兄に圖らん。請ふ足下を勞せん我が爲に(六)蕪を刈り茀を除き、略繩墨(七)を存し、同社(八)の詬を貽すことなからば幸甚と。

(一) 不滿足におもふ貌　(二) 危きさま　(三) 多分回復せざるべし　(四) 版行し後世に傳ふ　(五) 出版せん　(六) 蕪は荒れたるなり、茀は雜草、卽ち草をかり荒れたるを開く意にて、文稿を消削改訂するをいふ　(七) 法に協ふやうにし　(八) 蘐園社中の恥辱

家一。待二子一者異二章弟子一云。

正德辛卯。朝鮮信使。途歷二長州一。館二赤間關一。周南乃奉二君命一接二對之一。筆談唱酬。信使驚二其雋才一。雨伯陽嘗稱曰。海西無雙。徂徠書曰。夫雨生者。故不レ足三以輕二重足下一。雖レ然。海西者苞二筑以南一而言レ之也。謂二之無雙一者。莫二之與京一也。盛哉言乎。非二足下一未レ足二以當一レ之矣。吾始以爲海內唯足下與二東壁一。而今而後又有二雨生一。

正德辛卯(一)、朝鮮の信使(二)、途長州を歷、赤間關に館す。周南乃ち君命を奉じて之に接對す。筆談唱酬(三)、信使其雋才に驚く。雨伯陽(四)嘗て稱して曰く、海西無雙(五)と。徂徠の書に曰く、夫れ雨生は、故以て足下を輕重するに足らず(六)。然りと雖も、海西とは、筑以南(七)を苞ねて之を言へるなり。之を無雙と謂ふは、之と與に京なるはなしとなり。盛なるかな言や。足下に非ずんば未だ以て之に當るに足らず。吾れ始め以爲へらく、海內唯だ足下と東壁(八)とのみと。而今而後(九)又雨生有りと。

(一) 元年 (二) 音問の使 (三) 筆談にて問答す (四) 雨森芳洲 (五) 九州に比無し (六) 雨森芳洲の言は足下の價を左右するに足らず (七) 筑前筑後以南をこめていふ (八) 安藤東野 (九) 今よりして後芳洲あり

山縣孝孺。字次公。小字少助。號二周南一。周防人。仕二國侯一。周南父長白。字子成。宦二長門一職居二師儒一。欲二周南不一レ墜二家學一。攜至二江戸一。托二徂徠一受レ業。時周南年甫十九。英特負二才氣一。已學二於家庭一。通二其大義一。及レ見二徂徠一。孜孜更無二他念一。學日益進。是時徂徠業未二大振一。而周南東野早登二其門一。迭爲二羽翼一。是以及三徂徠成二大

山縣孝孺

山縣孝孺、字は次公、小字は少助、周南と號す。周防の人。國侯に仕ふ。

周南の父長白、字は子成、長門に宦して職師儒に居る。周南が家學を墜さざるを欲し、攜へて江戸に至り、徂徠に托して業を受けしむ。時に周南年甫めて十九、英特才氣を負ふ。(一)已に家庭に學び、其大義に通ず。(二)徂徠に見ゆるに及び、孜孜として更に他念なし。學日に益〻進む。是時徂徠業未だ大に振はず。而して周南・東野早く其門に登り、迭に羽翼たり。是を以て徂徠大家を成すに(三)及ぶや、二子を待つこと羣弟子に異なりと云ふ。

(一) すぐれて居て才氣をたのむ　(二) 道の大意を知る　(三) 大家となる

宇士新與二大潮禪師一書曰。夫元美世所レ推。誰不レ希者。而庶幾者鮮矣。獨吾物翁新意縱横。是大海紫瀾哉。滕東壁長語或有二庶幾一焉。近時僧大典。以二能文一擅二時名。每曰。蘐園徒善二文章一者。獨滕東壁。

(一)宇士新、大潮禪師に與ふる書に曰く、夫れ元美(二)は世の推す所、誰か希はざる者ぞ。而も庶幾する者鮮し(三)。獨り吾が物翁、新意縱横(四)、是れ大海紫瀾なるかな(五)。(六)滕東壁の長語或は庶幾き有りと。近時僧大典、能文を以て時名を擅にす。每に曰く、蘐園の徒(七)文章を善くする者、獨り滕東壁のみと。

(一) 宇野士新 (二) 王元美 (三) 追隨し得るもの少し (四) 物徂徠先生は嶄新の意見を縱横自在に發揮す (五) 大洋の波濤の如く宏大 (六) 東野 (七) 徂徠門の文士

東野墓碑銘。服南郭撰。誌銘秋澹園撰。墓在二淺草茅原福壽院。一小石碑勒二銘序一。後刻二同盟十有七人合レ貲立レ之。

東野の墓碑銘は、服南郭(一)の撰、誌銘は秋澹園(二)の撰なり。墓は淺草茅原福壽院に在り。一小石碑、銘序を勒す(三)。後に、同盟十有七人貲を合せて之を立つと刻す。

(一) 服部南郭 (二) 秋元子帥 (三) 墓碑銘の序文を刻みつける

所レ為字説中語一云レ爾。不佞謂猶尚能戯。且不レ死。翌日訃至。悲哉。渠貧窶君侯所レ知。君侯卿而翼レ之。不佞諸人所レ知。然不レ能下免二其貧一以死上。貧固士之常。庸何傷乎。以二渠之才之學一。而假レ之以レ年。豈不佞之所二能及一哉。天貧レ之窶レ之。又奪二之年一。加以レ無レ後。何其毒也。不佞亦免二覗予之嘆一乎。

東野没後二十年。遺稿三巻刻始成。春臺序陳下初本多侯將二捐レ貲刊上レ之。而終不レ果レ事。此序春臺文集所レ載者。多二百七十八字一。皆刺レ侯也。蓋侯將下布二字印一為中一版上乎。徂徠呈レ侯書曰。承活字頗成。則東壁且レ不レ朽哉。且之子無レ鬚。豈容レ俾二字有一レ鬚乎。

東野の没後二十年にして、遺稿三巻刻始めて成る。春臺の序、初め本多侯將に貲(一)を捐てゝ之を刊せんとして、終に事を果さざるを陳ぶ。此序春臺文集に載する所の者、二百七十八字多し。皆侯を刺るなり。蓋し侯將に字印を布いて一版を爲さんとするや、徂徠、侯に呈する書に曰く、承く、活字頗る成ると。則ち東壁且に朽ちざらんとす。且つ之の子鬚なし。豈に字に鬚あらしむべけんや(二)と。

(一) 出版費を出す　(二) 出版延引するを人の長じて鬚の生ずることに假りて諷せしならん

其在遠者悉集。而後梓之。彙諸友人所爲碑志。及哭詩祭文。以附其後。庶足以不朽渠已。足下豈忘渠哀甲以送時事邪。足下藏渠詩若文。則寫致之。渠已散之魂。庶亦來歸哉。又與谷國禪師曰。渠平生不得其親戚之力。惟不佞是倚。故當其疾與死。不佞之百事皆廢。是其所以久留不報師書之故也。蓋昔者享師于草堂。張樂乎。東壁橫吹以倡之。賦詩乎。東壁曼聲以和之。而師所賜金叵羅。亦東壁能三酌以賞之。今則亡矣哉。又與下館侯曰。十二日不佞往視。則相顧曰。歲在大淵獻。吾歸東壁之期至也。世心世肝。既已嘔盡。辭氣壯甚。渠蓋記不佞

渠の才と學を以て、之に假すに年を以てせば、豈に不佞の能く及ぶ所ならんや。天之を貧にし之を窶にし、又之が年を奪ひ、加ふるに後なきを以てす。何ぞ其れ毒するや。不佞亦祝予(一九)の嘆を免かれんやと。

(一) 十二支の亥の別名、即ち亥の年を以て生れ、亥の年に死せりとなり　(二) 唐の李長吉　(三) 咯血　(四) 李長吉将に死せんとして夢に一版書を持するを見る。曰く、天上の白玉樓成る、君を召して記を作らしむと　(五) 天上の圖書府を司る文士缺員となれるを以て東野を召し上す　(六) 孀はやもめ、煢々は獨りさびしげに立てるさま　(七) 之が救濟に財布の金を奪つてはだかにせんとす　(八) 佛式に從ひ卒都婆を建てんとす　(九) こけつまろびつ急ぎて恭す　(一〇) 著込みの鎧をつけて送る　(一一) うつして送る　(一二) 禪師をわが家にもてなす　(一三) 笛を吹く　(一四) うるはしき聲　(一五) 金のさかづき　(一六) 今年は亥の歲　(一七) 俗世の心肝すでに吐きつくす。咯血をさす　(一八) 卵を翼におほひて孵化せしむ。少時扶持せしをさす　(一九) 公羊傳に、子路死す、孔子曰く、天予を祝つ、とあり、祝は斷つなり、即ち天が吾がたのみとする者を斷てりとの意

書之府。不レ可二以久虛一邪。悲哉。渠無レ子。而孀煢煢乎無レ所レ歸焉。渠親戚欲下褫二孀之嚢一而裸上余翟力爭レ之。迺免。又欲レ堵二婆其家一。諸友人餬匄以救レ之。迺糾レ金買レ石而碑二建之一。俾四百歲後識三其爲二儒者墓一焉。渠生平所レ著不レ留二其稾一。諸友八百方求レ之。謄錄成レ卷者。僅三焉。且歎二

しか。足下渠が詩若しくは文を藏せば、則ち之を寫致せよ。渠の已に散ずるの魂、庶くは亦來り歸せんかなと。又香國禪師(一一)に與ふるに曰く、渠平生其親戚の力を得ず。惟だ不佞に是れ倚る。故に其疾と死とに當つては、不佞の百事皆廢す。是れ其の久しく留めて師の書に報ぜざる所以の故なり。蓋し昔者師(一二)を草堂に享す。樂を張れば、東壁横吹(一三)以て之を倡ふ。詩を賦すれば、東壁曼聲(一四)以て之に和す。而して師の賜ふ所の金巨羅(一五)、亦東壁能く三酌以て之を賞す。今は則ち亡しと。又下館侯に與ふるに曰く、十二日不佞往いて視れば、則ち相顧みて曰く、歲大淵獻(一六)にあり。吾れ東壁に歸るの期至れり。世心世肝(一七)、既に已に嘔盡すと。辭氣壯なること甚だし。渠蓋し不佞が爲す所の字說中の語を記して爾云ふ。不佞謂ふ猶ほ尙ほ能く戲る。且つ死せじと。翌日訃至る。悲しいかな。渠が貧窶は君侯の知る所。君侯卿(一八)にして之を翼すること、不佞諸人の知る所。然るに其貧を免れて以て死する能はず。貧は固より士の常、庸何ぞ傷まん。

先一愛ニ重之一。至ニ疾終一惜者甚。與ニ其徒一書。言及レ之。使ニ讀者感動一。擧ニ一二於左一。與ニ富春山人一曰。獨悲東壁以ニ四月十三日一死。渠三世以ニ大淵獻一降也。亦終以レ之陟焉。記十年前。渠齡同ニ長吉一。而殆將下嘔ニ出心肝一以死上。而不レ死。今遂嘔ニ出心肝一以死。豈白玉樓記。必待ニ其人一耶。天圖

て感動せしむ。一二を左に擧げん。富春山人に與ふるに曰く、獨り悲む東壁四月十三日を以て死するを。渠三世大淵獻（一）を以て降り、亦終に之を以て陟る。記す十年前、渠齡長吉（二）と同じうして、殆ど將に心肝（三）を嘔出し以て死せんとして、死せず。今遂に心肝を嘔出して以て死す。豈に白玉樓記（四）、必ず其人を待つか。天圖書の府（五）、以て久しく虛しうす可からざるか。悲しいかな。渠子なくして、孀煢（六）煢乎として歸する所なし。渠が親戚孀の橐（七）を褫つて裸にせんと欲す。余輩力めて之を爭ふ。廼ち免る。又其冢に塔婆（八）せんと欲す。諸友人匍匐（九）して以て之を救ふ。廼ち金を糾せ石を買つて之を碑建し、百歲の後をして其の儒者の墓たるを識らしむ。渠生平著す所其槀を留めず。諸友人百方之を求め、謄錄卷を成す者、僅かに三。且つ其の遠に在る者悉く集るを竢つて、後之を梓し、諸友人の爲る所の碑志、及び哭詩祭文を彙めて、以て其後に附す。庶くは以て渠を不朽にするに足らんのみ。足下豈に渠が甲（一〇）を裏にして以て送りし時の事を忘れ

南郭頗通二國風一。嘗遊二神戸侯浮洲別業一。賦二倭歌一遣レ興。歌曰。失慈葛捻見。乙結紗穀穀祿屋。密慈篤栗納。鳥吉斯紗捻密納但賛篤失木捻失。

南郭頗る國風に通ず。嘗て神戸侯の浮洲の別業に遊び、倭歌を賦して興を遣る。(歌に曰く、靜かなる池の心を水鳥の、うきすの浪の立つとしもなし)南郭の父、名は元矩、北村季吟に事へて國風を善くす。故に其遺を承くと云ふ。

(一)和歌　(二)別邸、別莊　(三)身靜かなれば心動搖することなき意を寓す　(四)遺風をうけつぐ

南郭父名元矩。事二北村季吟一善二國風一。故承二其遺一云。

作二唐詩選附言一。以レ稿視二徂徠一。咨二問焉。徂徠見曰。再思レ之。乃煅煉數日。復改出。徂徠又曰。未也。凡五撰。始得二徂徠許可一。以授二剞劂一。

唐詩選附言を作る。稿を以て徂徠に視しめて咨問す。徂徠見て曰く、再び之を思へと、乃ち煅煉數日、復た改め出す。徂徠又曰く、未しと。凡そ五撰して、始めて徂徠の許可を得、以て剞劂に授く。

(一)文詞をよくねる　(二)本來は彫刻に使ふ小刀とのみとなれど、轉じて此處にては文書を版におこす義なり、板木に附す

今不二復存一。予今觀二翁之遺畫一。涔涔涕下。口不レ能レ言。欲レ炙之色。蓋亦形二乎外一矣。仲英因以二翁十三四歲時所レ爲墨竹一紙一贈レ之。其末有二周雪寫三字一。蓋幼字也。其千尺干レ霄者。蓋既萌二于此一。距レ今六十餘年。墨淋漓如レ新。云云。

㈠秋山玉山　㈡さめ〳〵と涙こぼる　㈢物欲しきそぶり顔色にあらはる。晉の顧榮同僚と宴飲し、炙肉を執るものの貌狀凡ならず、欲する色あるを見、榮炙肉を割いて之に啗はしむ　㈣南郭　㈤霄は天なり、卽ち天を凌ぐこと、大成せしをいふ　㈥墨色滴るが如く鮮かなり

幼時出レ京。投レ老歸遊。時親眷舊故。皆既爲二土中人一。故鄕却如二他鄕一。有レ詩云。五十年前出二上京一。今遊猶作二客中情一。別長何處尋二桑梓一。誶薄無三家問二弟兄一。認二得山川一疑二夢寐一。想來多少自分明。共知流二轉人寰裏一。愧似三劉郎返二赤城一。

幼時京を出で、老に投じて㈠歸遊す。時に親眷舊故、㈡皆既に土中の人と爲り、故鄕却つて他鄕の如し。詩あり云く、五十年前上京を出で、今遊猶ほ客中の情を作す、別長うして何の處か桑梓㈢を尋ねん。誶薄㈣うして家の弟兄を問ふもの無く、山川を認め得て夢寐かと疑ふ。想ひ來れば多少自ら分明、共に知る人寰裏に流轉せしを、愧づ劉郎の赤城に返るに似たるをと。

㈠老年となつて歸京す　㈡懇意な人　㈢故鄕　㈣ふしあはせにして訪問すべき兄弟無し

慕一者上。其來薦二束脩一者甚衆。大氐歲得二金百五十餘兩一。凡以レ儒爲二生理一。其饒裕如レ此者鮮矣。嘗講二莊子一。聽徒寔夥。門外爲レ市。當二是時一。京師松岡玄達講二本草一。其盛匹二南郭一云。

如き者鮮し。嘗て莊子を講ず。聽徒寔に夥しく、門外市を爲す。是時に當つて、京師の松岡玄達本草(五)を講ず。其盛なること南郭に匹すと云ふ。

(一)優雅にしておだやか　(二)入門する者　(三)生計　(四)豐富　(五)植物に關する學

南郭兼善二繪事一。恒言。日本畫以二僧雪舟。狩野元信一爲レ至。如二八種畫譜一。所レ謂隸畫。不レ足レ見也。秋玉山服翁墨竹記曰。予收二翁醉畫芭蕉一。偶爲レ人取去。

南郭兼て繪事を善くす。恒に言ふ、日本畫は僧雪舟・狩野元信を以て至れりと爲す。八種畫譜の如き、所謂隸畫は、見るに足らざるなり。秋(一)玉山の服翁墨竹記に曰く、予翁の醉畫芭蕉を收む。偶〻人の爲に取去らる。今復存せず。予今翁の遺畫を觀、涔涔として涕下り、口言ふこと能はず。(三)炙を欲するの色、蓋し亦外に形る。(二)仲英因つて翁が十三四歲の時爲せる所の墨竹一紙を以て之を贈る。其末に(四)周雪寫の三字有り。蓋し幼字なり。其千尺(五)霄を干すもの、蓋し既に此に萠す。今を距ること六十餘年、墨淋漓(六)として新なるが如し、云々と。

得下奉二薄技於大藩一。猥侍中弄臣之末上。竊惟當時先侯之恩。山高海深。乃不下責レ喬以中其不能上。以爲文史之小。小人所レ習片長可レ使。是以不三啻免二罪戾一。苟獲三承レ乏而備二顧問一。亦唯知レ臣莫レ如レ君。乃先侯憫レ愚之餘。嘗私命レ喬曰。予不二女疵瑕一也。後人將レ求二多於女一。我千秋之後。女其行乎。不レ如レ俾二女成レ名。他日或適二四方一。無レ謂二我不レ知レ女。喬感泣刻レ骨。私心自誓。亡レ何先侯卽レ世。卽大藩亦多二貸恩一。尋乃賜レ玦。得下全二首領一放中歸草野上。

私に喬に命じて曰く、予女を疵瑕(六)とせざるも、後の人將に多きを女に求めんとす(七)。我が千秋の後(八)、女其れ行かんか。如かず女に名を成さしめんには。他日或は四方に適き、我れ(九)女を知らずと謂ふことなかれと。喬、感泣骨に刻み、私心自ら誓ふ。何もなく先侯世に卽く(一〇)。卽ち大藩亦貸恩(一一)多し。尋いで乃ち玦(一二)を賜ひ、首領を全うして草野に放歸するを得たりと。

(一) 泰山北斗は衆人の仰ぐ所　(二) 柳澤氏を指す　(三) 輕少なるわざを以て大藩に仕ふ　(四) 文臣の小役には一匹夫の學習せる些少の長所を用ふるも差支なし　(五) 才智乏しき身が顧問の任に備はる　(六) きずある者、此處は才力乏しき者の謂　(七) 後人は汝にまだ多くを期待せん　(八) 歿後　(九) 我れ汝を知るの明無かりしと言ふこと勿れ　(一〇) 死歿す　(一一) 恩惠多し　(一二) 暇をたまはる

南郭爲レ人風流溫藉。藝苑之士莫下不二雅

南郭人となり風流溫藉(一)、藝苑の士雅慕せざる者なし。其來つて束脩(二)を薦むる者甚だ衆し。大氐歲に金百五十餘兩を得。凡そ儒を以て生理(三)を爲す、其饒裕(四)此の

服元喬。字子遷。小字小右衛門。號南郭。又號芙渠館。姓服部。修爲服氏。平安人。南郭齡十四來江戸。十六起仕柳澤侯。三十四而致仕。乃下帷授徒。其學得之徂徠。而才氣俊拔。遂以詩文山斗一世。其答柳太夫書中。略陳所以罷官。曰。昔嘗先侯之世。

服元喬

服元喬、字は子遷、小字は小右衛門、南郭と號す。又芙渠館と號す。姓は服部、修して服氏と爲す。平安の人。

南郭齡十四にして江戸に來り、十六のとき起つて柳澤侯に仕ふ。三十四にして致仕し、乃ち帷を下して徒に授く。其學之を徂徠に得たり。而して才氣俊拔、遂に詩文を以て一世に山斗(一)たり。其の柳太夫(二)に答ふる書中、略官を罷むる所以を陳ぶ。曰く、昔嘗て先侯の世、薄技(三)を大藩に奉じ、猥に弄臣の末に侍するを得たり。竊に惟れば當時先侯の恩、山と高く海と深し。乃ち喬を責むるに其不能を以てせず。以爲へらく文史(四)の小なる、小人習ふ所片長使ふべしと。是を以て啻に罪戾を免るゝのみならず、苟も乏(五)を承けて顧問に備ふることを獲るも、亦唯臣を知ること君に如くは莫し。乃ち先侯愚を憫むの餘、嘗て

春臺疾。原芸澤名尙賢。字子才。診レ脈曰。先生無二遺言一止矣。有則言レ之。它日疾病。言不レ如レ意也。春臺喜曰。子才誠非レ如二世醫之視レ不レ起猶面諛一也。卽囑以二後事一。觀海作二行狀一。南郭撰二墓記一。皆其遺言也。

春臺疾む。原芸澤（名は尙賢、字は子才）脈を診て曰く、先生遺言無くば止む。有らば則ち之を言へ。它日疾病(一)にて、言ふこと意の如くならざらんと。春臺喜んで曰く、子才誠に世醫の起たざるを視て猶ほ面諛(二)するが如きに非ずと、卽ち囑するに後事を以てす。觀海行狀を作り、南郭墓記を撰す。皆其遺言なり。

(一) 病氣危篤となる　(二) へつらふ

春臺無レ子。義子零替不レ修レ祭。寛政八年。値二五十年忌辰一。書商嵩山房。陳二菲薦一祭レ墓。爲建二一片小石于墓碣下一。以紀二其浴レ恩事一。墓在二江戶谷中天眼寺之側一。

春臺子無し。義子零替(一)祭を修めず。寛政八年、五十年忌辰に値ひ、書商嵩山房、菲薦(二)を陳して墓を祭り、爲に一片の小石を墓碣の下に建て、以て其の恩に浴する事を紀す。墓は江戶谷中天眼寺の側に在り。

(一) 春臺の祭祀を行はず　(二) 菲は薄薦は供、僅かの供物

常祿也。不能二百石。則出不足以行士之事。入不足以守祭祀。養父母。畜妻子。是何以爲士哉。所謂二百石以上而後可者。語爲士之常者也。何足以爲重哉。所謂重祿者。萬取千焉。千取百焉。之謂重祿。純何敢望之。曩時木順庵仕加賀。藤宗恕仕越前。皆以五百石。二子者誠先覺也。然以今觀之。未見其可畏也。若夫野順清仕桑那。大高生仕松山。皆以樸樕之材食四百石。是何幸也。其他在諸侯國而食二百石以上者。抑何限。要之有儒名而無其實者。比比皆是。然榮達如彼者。無他。遇時也。故純亦未以二百石爲富也。

仕ふるに、皆五百石を以てす。二子は誠に先覺なり。然れども今を以て之を觀れば、未だ其の畏るべきを見ざるなり。若し夫の野順清が桑那に仕へ、(八)大高生が松山に仕ふる、皆樸樕(九)の材を以て四百石を食む。是れ何の幸ぞや。其他諸侯の國に在りて二百石以上を食む者、抑ゝ何ぞ限らん。之を要するに儒名(一〇)有りて其實無き者、比比皆是なり。然るに榮達彼の如きは、他無し、時に遇へばなり。故に純も亦未だ二百石を以て富めりと爲さざるなりと。

(一) 仕官せぬ人　(二) 論語の文に取る、善く用ふる人を得ざりし歎　(三) うぬぼれ甚だし　(四) 祖宗の祭祀を行ふ　(五) 過分の知行とは主君の取高の十分の一を取るもの　(六) 木下順庵　(七) 伊藤宗恕、字は元務、號は坦庵、平安の人　(八) 大高坂芝山　(九) 小さき木、轉じてつまらぬ人　(一〇) 儒者の名あつて其の實なきものどれもこれも皆然り

兄弟之後一。開二其餘論一而已。雖レ然純不三敢畔二先生一。敬奉二其教一以到二于今一。于レ今不レ欲下以二先生亡一而欺上レ之。是以敢謝二足下一。決弗レ承レ諭。子還勉哉。旄丘之葛。有レ誕二其節一。惟足下良圖。

春臺以二處士一終。然非二其志一也。蓋待二善賈一而竟不レ沽也。報二平田公信一書曰。純嘗與レ人言曰。必使二予仕一。則二百石以上而後可。與二足下一言亦然。今書中乃以二是言一爲二自負太過一。嗚呼足下亦未二之深察一也。請詳言レ之。夫二百石者。士之

春臺處士(一)を以て終る。然れども其志に非ざるなり。蓋し善賈(二)を待ちて竟に沽れざるなり。平田公信に報ゆる書に曰く、純嘗て人と言つて曰く、必ず予をして仕へしめんとならば、則ち二百石以上にして後可なりと。足下と言ふも亦然り。今書中乃ち是言を以て自負(三)太だ過ぎたりと爲す。嗚呼足下亦未だ之に深く察せざるなり。請ふ詳に之を言はん。夫れ二百石は、士の常祿なり。二百石なる能はざれば、則ち出でては以て士の事を行ふに足らず、入つては以て祭祀(四)を守り、父母を養ひ、妻子を畜ふに足らず。是れ何ぞ以て士と爲さんや。所謂二百石以上にして後可なりとは、士たるの常なる者を語れるなり。何ぞ以て重しと爲すに足らんや。所謂重祿(五)とは、萬に千を取り、千に百を取る、之を重祿といふ。純何ぞ敢へて之を望まん。曩時木順庵(六)加賀に仕へ、藤宗恕(七)越前に

に謝す。決して諭を承けず。(二〇)子遷勉めよや。(二一)旄丘の葛、其節を誕くする有り。(二二)惟足下良く圖れよと。

(一)盲從せず　(二)極めてひろき度量　(三)山縣周南　(四)孟子は鄒に生れ孔子に魯に生る　(五)はしいまゝにしてしまりなき人　(六)雞のあばら骨、雞肋棄て難く思ふ　(七)これ先生のことなり　(八)夜起きてゐることを好まず　(九)宇野士朗　(一〇)京都の人は仕官せざる故定まれる祿を給せらるゝことなし　(一一)講義の店を開く　(一二)宋學の書　(一三)すぐれてさときこと仁齋の如きも　(一四)下僕となりて勞働す　(一五)僅かの祿　(一六)土芥、とるにたらざるもの　(一七)校閲　(一八)平野金華の字　(一九)死後の寄託　(二〇)貴意に應じかたし　(二一)南郭の字　(二二)詩經に「旄丘之葛兮、何誕之節兮」鄭箋に、士氣緩めば則ち闊節を生ず云々

謂徂徠有下不二風流一者三上焉。善飲而惡レ酒。一也。不レ好二夜坐一。二也。不レ喜二乘舟一。三也。又與二南郭一書。論下刺徂徠贈二宇士朗一序上曰。此序通篇與レ人爭。非二君子之道一。序稱。洛人無二恆祿一。儒生之寄二其間一。亦難レ爲レ生。則舌耕開レ肆。百千成レ羣。日不レ遑レ給。語レ性語レ天。率非二宋籍一不可也。故雖レ有三聽儁若二仁齋一。猶率二其所レ習。洛之所二以陋一是已。此大不レ然。夫洛儒信難レ爲レ生。東儒果皆不レ寒邪。且士無二田祿一者。未レ能レ爲二農工商賈一。則鬻二其技一以給二衣食一。固其宜也。古人有二傭賃力作者一。當時識者不二以爲一レ賤。今爲二書生一而無二升斗之祿一。則亦舌耕筆耕唯其所レ爲。何不可之有。先生何獨惡レ之乎。又曰。純之愚竊以爲。先生之功其大者唯二辨。故二辨不レ可レ不レ傳也。若二佗諸文一。其土苴耳。傳レ之固可。緩レ之亦可。卽不レ傳亦可。足下若校二二辨一耶。則純雖二不敏一將レ參二閱一焉。純之願也。今足下乃以レ輯二遺文一。委二子和與一レ純。子和則可。純則不可。何者護園之門。親受二顧命一者。足下一人。佗不レ與。如不レ聞レ命。而以代二奉レ命者一。何以爲レ敬二先師一乎。所二以不可一也。所三以曰二子和則可一者。先生所レ悅也。純雅不レ見レ知二於先生一。特從二二三

先生之所以ニ雖助視レ純也。書云非ニ知之艱一。行之惟艱。先生有焉。又曰。徂徠先生平日不レ教ニ小子雅一。是以其門無ニ長幼之序一焉。又曰。徂徠先生謂。仁齋先生好レ奇。自レ余觀レ之。徂徠之好レ奇。甚ニ於仁齋一。古人所謂尤而效レ之者。夫子有焉。又曰徂徠以ニ風流一自許。人亦與レ之。予

耕唯其の爲す所、何の不可か之れ有らん。先生何ぞ獨り之を惡むかと。又曰く、純の愚をもつて竊に以爲へらく、先生の功其大なる者唯二辨あり。故に二辨傳へざる可からざるなり。佗の諸文の若き、其れ土苴(一六)のみ。之を傳ふる固より可、之を緩うするも亦可、卽ち傳へざるも亦可なり。足下若し二辨を校(一七)するか、則ち純不敏と雖も將に參閱せんとす。純の願なり。今足下乃ち遺文を輯むるを以て、子和(一八)と純とを委す。子和は則ち可なるも、純は則ち不可なり。何となれば蘐園の門、親しく顧命(一九)を受くる者は、足下一人のみ。佗は與らず。如し命を聞かずして、以て命を奉ずる者に代らば、何ぞ以て先師を敬すと爲さんや。不可なる所以なり。子和は則ち可なりと曰ふ所以は、先生の悅ぶ所なればなり。純雅先生に知られず。特に二三兄弟の後に從ひて、其餘論を聞くのみ。然りと雖も純敢へて先生に畔かず。敬んで其教を奉じて以て今に到る。今に于て先生の亡きを以て之を欺くことを欲せず。是を以て敢へて足下

非過論也。惟其行不及其所知。殆所謂行不掩者歟。蓋先生之志在進取。故其取人以才。不以德行。二三門生亦習聞其說。不屑德行。唯文學是稱。是以徂徠之門。多跅弛之士。及其成才也。特不過文人而已。其教然也。外人既以是譏先生。純亦嘗竊不滿先生。此

れば、徂徠の奇を好むこと、仁齋より甚だし。古人の所謂尤めて之に效ふ者、夫子有りと。又曰く、徂徠風流を以て自ら許し、人亦之を與す。予謂へらく徂徠に風流ならざるもの三有り。善く飲んで酒を惡む、一なり。夜坐を好まず、二なり。乘舟を喜ばず、三なりと。又南郭に與ふる書に、徂徠字士朗に贈る序を論刺して曰く、此序は通篇人と爭ふ。君子の道に非ず。序に稱す、洛人恆祿無し。儒生の其間に寄する、亦生を爲し難し。則ち舌耕肆を開き、百千羣を成し、日も給するに遑あらず。性を語り天を語る、率ね宋籍に非ざれば不可なり。故に聰儁仁齋の若きありと雖も、猶ほ其習ふ所に率ふ。洛の陋なる所以是のみと。此れ大に然らず。夫れ洛儒信に生を爲し難し。東儒果して皆寒ならざるか。且つ士の田祿無き者、未だ農・工・商賈たること能はず。則ち其技を鬻いで以て衣食に給す。固より其宜なり。古人傭賃力作する者有り。則ち當時識者以て賤と爲さず。今書生と爲りて升斗の祿無ければ、則ち亦舌耕筆

其言於左。紫芝園漫筆曰。徂徠翁以海量能容自許。人亦以此稱之。余謂徂徠翁固能容。然能容學者。而不能容常人。能容文才之士。而不能容禮法之士。而能容其人。而不能容其言。是未爲能容也。又曰。徂徠先生見識卓絶。知道甚明。周南以爲鄒魯以後無是人者。

ども能く學者を容れて、常人を容るゝこと能はず。能く文才の士を容れて、禮法の士を容るゝこと能はず。而して能く其人を容れて、其言を容るゝこと能はず。是れ未だ能く容るゝと爲さざるなりと。又曰く、徂徠先生見識卓絶し、道を知る甚だ明かなり。(三)周南以て(四)鄒・魯以後是人無しと爲すは、過論に非ざるなり。惟其行其の知る所に及ばず。殆ど所謂行掩はざる者か。蓋し先生の志は進取に在り。故に其の人を取るには才を以てし、德行を以てせず。二三の門生亦其說を習聞し、德行を屑とせず、唯文學是れ稱す。是を以て徂徠の門、(五)跅弛の士多く、其の才を成すに及ぶや、特に文人に過ぎざるのみ。其敎も然り。外人既に是を以て先生を譏る。純も亦嘗て竊に先生に不滿なり。此れ先生の(六)鷄肋純を視る所以なり。書に云ふ、知ること艱きに非ず、行ふこと惟れ艱しと。(七)先生有りと。又曰く、徂徠先生平日小子輩に教へず。是を以て其門に長幼の序無しと。又曰く、徂徠先生謂ふ、仁齋先生奇を好むと。余より之を觀

數千言者。純自識足下以來。數年于茲。未聞足下有所誦以今日較前年。亦未見其有所進。而所進者吹笛耳。近來辟價頗減。豈徒然哉。程正叔有言曰。人有三不幸。少年登高科。一不幸也。足下其思諸。又曰。吾子冬則畏霜雪。夏則畏雷。一歲之內。避雷與霜雪。則其無畏者幾希。古語所謂畏首畏尾。身其餘幾。吾子近之。純聞西域有無雷之國。南方有八蠶之地。吾子乃不生於彼。而生於此。何造物之不利於吾子也。予則以爲吾子之患。雖由稟受之薄也。亦豈非以奉養太厚。安佚過度。自崇其疾乎。吾子雖少。幸一思諸。

も、亦豈に奉養（一四）太だ厚く、安佚度に過ぐるを以て、自ら其疾を崇うするに非ざらんや。吾子少しと雖も、幸に一たび諸を思へと。

（一）才氣甚だすぐる　（二）少時才氣秀でしも、長じて才氣伸びず　（三）きびしく訓戒して　（四）誠意痛切　（五）無位の浪人　（六）知行としてお倉米を賜はる　（七）儒官　（八）幼童　（九）六經と同じ　（一〇）高き科擧に及第す　（一一）一年に八回も蠶を飼ふ國の義、暖國をいふ　（一二）造物者が足下に不利を與ふ　（一三）天分乏し　（一四）肉體のやしなひに手厚く度にすぎて安逸なるにて其疾患の度合をます

春臺於徂徠。不隨其步趨者。往往有之。不特文章一事而已。今錄

春臺の徂徠に於けるや、其歩趨（一）に隨はざると、往往之有り。特に文章の一事のみにあらず。今其言を左に錄せん。紫芝園漫筆に曰く、徠翁海量（二）能く容るゝを以て自ら許す。人も亦此を以て之を稱す。余謂へらく徠翁固に能く容る。然れ

春臺規砭不ニ少借一。其忠誠激切。它人不レ及焉。其書撮ニ錄于左一。曰。純觀ニ足下於ヒ學。得レ無レ如ニ王公大人一。以レ學爲レ戲以消レ日者一乎。夫足下雖レ非ニ布衣一。然儒生也。不幸早以ニ神童一聞。幸蒙ニ國恩一。賜ニ食廩粟一。列ニ文學一。奉ニ朝請一。雖レ少不レ可ニ以不ヒ知レ所レ務也。古人有下童稚而日誦ニ六藝古文

得んや。夫れ足下は布衣に非ずと雖も、然れども儒生なり。不幸早く神童を以て聞ゆ。幸にして國恩(五)を蒙り、食廩粟(六)を賜ひ、文學(七)に列し、朝請を奉ず。少しと雖も以て務むる所を知らざる可からず。古人童稚(八)にして日に六藝古文(九)數千言を誦する者有り。純足下を識りしより以來、玆に數年、未だ足下の誦する所有るを聞かず。今日を以て前年に較ぶるも、亦未だ其の進む所有るを見ず。進む所は吹笛のみ。近來聲價頗る減ずること、豈に徒然ならんや。程正叔言あり曰く、人に三不幸あり。少年にして高科(一〇)に登るは、一の不幸なりと。足下其れ諸を思へと」又曰く、吾子冬は則ち霜雪を畏れ、夏は則ち雷を畏る。一歳の內、雷と霜雪とを避けば、則ち其の畏無き者幾ど希なり。古語に所謂首を畏れ尾を畏るれば、身其れ餘幾ぞと。吾子之に近し。純聞く、西域に無雷の國有り、南方に八蠶(一一)の地有りと。吾子乃ち彼に生れずして、此に生る。何ぞ造物(一二)の吾子に不利なるや。予則ち以爲へらく、吾子の患、稟受(一三)の薄に由ると雖

赤穗之黨之刺吉良氏也。春臺極口醜詆之。幷駁鳩巢作義人錄曰。室子而不知義如是。世之憒憒者。何足論乎。近時柴栗山。敍赤松國鸞四十六士論評。謂春臺爲貪者疑人盜。而婬者疑人姦者。此己好攻人。而欲人之不己攻也得乎。

赤穗の黨の吉良氏を刺すや、春臺口を極めて之を醜詆し(一)、幷せて鳩巢が義人錄を作りしを駁して曰く、室子にして義を知らざること是の如し。世の憒憒たる(二)者、何ぞ論ずるに足らんやと。近時柴栗山(三)、赤松國鸞の四十六士論の評に敍して、春臺を謂つて、貪者は人を盜かと疑ひ、婬者は人を姦かと疑ふ者と爲す。此れ己れ好で人を攻め、而して人の己を攻めざるを欲するも得んやと。

(一)口ぎたなく罵る　(二)愚なる者　(三)柴野栗山

菅麟嶼幼才氣飈發。年十三。擢列大府儒官。一時稱爲奇童子。然卒苗而不秀。

菅麟嶼幼にして才氣飈發(一)、年十三にして、擢でられて大府の儒官に列す。一時稱して奇童子と爲す。然るに卒に苗にして秀でず(二)。春臺規砭(三)少しも借さず。其忠誠激切(四)、它人は及ばず。其書を左に撮錄せん。曰く、純足下の學に於けるを觀るに、王公大人が、學を以て戲と爲し以て日を消す者の如きこと無きを

不足齋叢書中。呉騫序曰。宋史日本傳謂。其國太宰府。遣三人貢二方物一。或收二得其牒一。今序二刻是書一之太宰純。未レ詳レ爲二何如人一。日本多世レ職。太宰純豈猶其苗裔。或以レ官爲レ氏者乎。惜乎十萬里之波濤難レ盡。不レ易レ問耳。

るのみと。

㊀幕府　㊁宋朝に産物を納む　㊂太宰府よりの書状を收得せる者あり　㊃子孫

譾苑之徒集二南郭宅一。春臺獨後至。足過蹋二板美中之劒一。義當二頂禮以謝一レ過。然徑坐二上頭一。不二一言以陳一レ過。美中性簡傲。恆苦下春臺乖僻動以二苛禮一律上レ己。於レ是故目二春臺一。自執二其劒一加二己額一拜レ之。春臺意色殊惡。

譾苑㈠の徒、南郭の宅に集ふ。春臺獨り後れて至り、足過つて板美中㈡の劒を蹋む。義當に頂禮以て過を謝すべし。然るに徑に上頭㈢に坐し、一言以て過を陳べず。美中性簡傲㈣にして、恆に春臺が乖僻㈤動もすれば苛禮㈥を以て己を律するに苦しむ。是に於て故㈦に春臺を目し、自ら其劒を執つて己が額に加へ之を拜す。春臺意色殊に惡し。

㊀物徂徠の門下　㊁板倉復軒の子號は帆丘　㊂上座　㊃簡易直截にして傲慢　㊄偏辟　㊅禮を極めて嚴格にす　㊆わざと春臺を睨む

毛一哉。然亦倘先生六鬮間之物也。力新甫。鑫有ㇾ餘二乎信一。若蒙ㇾ見ㇾ附。亦等二僕親受一也。徂徠又答書曰。鄉所謂蝌斗時券帖者矣。予嘗誤謂方者三。足下則篆ㇾ之矣。是予所下併二月俸之餘一以優游卒ㇾ歲者。何以能應二足下之需一哉。雖ㇾ然足下則曰。九十月之交云爾。猶二之外府一哉。且也篆距二蝌斗時一爲ㇾ未ㇾ遠也。吾過矣。吾過矣。謹以二團圓者三一。致二諸左右一。

東野俊傑不羣。加ㇾ之刻苦淬勵。出二於天性一。其鴻文鉅藻。既魁二藝苑一。惜哉卒以二劬悴一致二咯血疾一沒。年僅三十七。世不ㇾ問二交不交者一。莫ㇾ不ㇾ惜ㇾ之。嗚呼天少假二之年一。殆不ㇾ可ㇾ量也。

東野俊傑不羣、之に加ふるに刻苦淬勵なる、天性に出づ。其鴻文鉅藻、既に藝苑に魁たり。惜しいかな卒に劬悴を以て咯血の疾を致して沒す。年僅に三十七。世、交不交の者を問はず、之を惜まざるはなし。嗚呼天少しく之に年を假さば、殆ど量る可からざるなり。

(一)骨折り苦しみて勉強す　(二)すぐれて大なる文才文壇随一　(三)心身を過勞す　(四)交際するとせざるとを論ぜず

徂徠於二東野一。以二才學優長一。且及ㇾ門之最

徂徠の東野に於ける、才學優長、且つ門に及ぶの最も先なるを以て之を愛重す。疾んで終るに至り惜むこと甚だし。其徒に與ふる書に、言之に及び、讀者をし

于春秋一矣。子之所レ爲二求貸一。蓋呂而不レ足。㗊而有レ餘。品乎品乎。是亦易易耳。書訖。覺二東方朔郭舍人所レ爲隱者一。聊供二病牀之一玩一耳。東野又書曰。所謂二天三地者。向既以蒙二先生之諾一。唯先生品二其方者一。乃僕又欲二隨而圓一レ之。未レ知能易易乎否。九十月之間。廩米在レ目。伏冀使三握中玉無二佗人是歸一哉。則令三人或稱二僕智囊一者。實在二此物一也。即雖二義

せて以て優游歳を卒ふる所の者、何ぞ以て能く足下の需に應ぜんや。然りと雖も足下則ち曰く、九(二〇)・十月の交云爾と。猶ほこれ外府(二一)のごとくなるかな。且や篆(二二)、蝌斗の時を距ること未だ遠からずと爲す。吾れ過てり。吾れ過てり。謹で團團たる者三を以て、諸を左右に致すと。

㊀ 九月九日重陽の節句 ㊁ 錢なり、其色よりいふ ㊂ 金の支拂節句以前ならば二つの圓いものと三つの四角いものにて賞るべし、二圓三方は蓋し二兩三分をさす ㊃ 天中記を欲すること多年 ㊄ 一朝の食饌を倹してわが渇望を醫したまはんや ㊅ 九月には返金なし難けれど十月に至らば必ず勘定を濟さん ㊆ 金を貸せとのこと承知せり ㊇ 蝌斗の文字を使ひし時代の意、蝌斗の文字は字の畫點等がおたまじやくしの形に似たるよりいふ、支那の古文字也 ㊈ 證文 ㊉ 史記滑稽傳に見ゆ。隱者は隱語の意 (一一) 二圓三方と同じ (一二) 四角のもの三つ、即ち三分 (一三) 祿米下げ渡し眼前に在り (一四) 手の中の玉、即ち書物 (一五) むくげ (一六) 大鵬の有する六箇の大羽 (一七) 下僕の新甫。越後水原の農市島大柏のこと (一八) 使に託せられなば、僕の直接に受けたるに等しとなり (一九) 蝌斗の文字を篆書にしたること、即ち誤らざるやう一歩見易く書かれたりとの意 (二〇) 九月十月の頃には祿米下がれば辨濟するといひしをさす (二一) 金穀財物を藏め置く國庫 (二二) 前書と後書との間違からざれば未だ時期を失はじとの意を含めていふ也

請㆓三圓二方
而獲㆒者先在
焉。不㆑佞渇㆓此
物㆒久矣。唯圓
而方焉者。猶㆓
之其渇㆒也。先
生其或能爲㆑
僕損㆓一朝之
供㆒。令㆑免㆓其渇㆒
否。九月吾不㆑
能矣。其至㆓十
月㆒。必能了㆓算
帳㆒。伏冀㆓方便㆒。
千新萬祝。徂
徠答書曰。承
求㆑金。其言若㆓
周蝌斗時券
契者狀㆒。子幸
不㆑生㆓天王家㆒。
天王則必書㆓

を。其言周の蝌斗(八)時の券契といふ者の狀の若し。子幸に天王家に生れず。天王ならば則ち必ず春秋(九)に書せん。子の求貸を爲す所、蓋し呂にして足らず、品にして餘あり。品か品か。是亦易易たるのみ。書き訖つて、東方朔・郭(一〇)舍人の爲れる所の隱者のごときを覺ゆ。聊か病牀の一玩に供するのみと。東野又書して曰く、所謂(一一)二天三地は、向に既に以て先生の諾を蒙る。唯先生其方なる者を品(一二)とす。乃ち僕又隨つて之を圓にせんを欲す。未だ知らず能く易易たりや否やを。九・十月の間、廩米(一三)目に在り。伏して冀くは握中(一四)の玉をして佗人に是れ歸するなからしめよ。則ち人をして或は僕を智嚢と稱せしむるもの、實に此物に在るなり。卽ち毳毛(一五)と雖も、然れども亦倘しくは先生の六翮間(一六)の物ならん。力新甫(一七)、蠢なれども信ずるに餘あり。若し附せられなば、亦僕が親受に等しきなりと。徂徠又答ふる書に曰く、郷に所謂蝌斗(一八)時の券帖は、予嘗て誤り謂つて方なる者二とす。足下則ち之を篆(一九)にす。是れ予が月俸の餘を併

罷レ官。侯猶優待輸レ粟云。徂徠始唱二古文辭一也。世之學者牽二於舊聞一罕二信レ之者一。東野與二縣周南一早先二諸子一歸レ之。東野最得二肯綮一。徂徠終木二鐸于海内一。東野實贊二翼之一。

うまくとらへたること、肯は骨につける肉、綮は骨のいりくめる所、古、料理の名人が、牛を料理するに、其刃巧に肯綮にあたりし故事より出づ (六) 社會を教へ導く者 (七) たすく

東野家屢空。嘗寄二書徂徠一借レ財。徂徠誤解違二其數一。今撮二錄各書于左一。東野書曰。向書舖齎二天中記一至。曰。九日在レ邇。主人渴二黃白一之切。交金在二節前一。二圓三方而得レ易。若不レ能。

東野家屢〻空し。嘗て書を徂徠に寄せ財を借る。徂徠誤解して其數を違ふ。今各書を左に撮錄せん。東野の書に曰く、向に書舖天中記を齎して至る。曰く、九日(二)邇に在り。主人(三)黃白に渴するの切なる、(三)交金節前に在らば、二圓三方にして易ふることを得。若し能はずんば、三圓二方にして獲んことを請ふ者先に在りと。不佞(四)此物に渴すること久し。唯圓にして方なる者、猶ほ之れ其の渴するがごときなり。先生其れ或は能く僕の爲に(五)一朝の供を損じ、其渴を免れしめんや否や。九月は吾れ能はず。其れ十月に至らば、必ず能く算帳を了へん。伏して方便を(六)冀ふ。千祈萬祝と。徂徠の答書に曰く、(七)承く金を求むること、

藤煥圖。字東壁。小字仁右衞門。號二東野一。下野人。
東野木姓瀧田氏。幼爲レ孤。乃來二江戸一養二於安藤氏一。因冒二其姓一。又修爲レ藤。初學二於中野撝謙一。亡レ幾更師二徂徠一。憤激自奮。才氣大發。於レ是以レ儒仕二柳澤侯一。年二十九

巻之七

藤煥圖

藤煥圖、字は東壁、小字は仁右衞門、東野と號す。下野の人。

東野本姓は瀧田氏、幼にして孤となり、乃ち江戸に來り安藤氏に養はる。因つて其姓を冒す。又修して藤となす。初め中野撝謙に學ぶ。幾も亡く更めて徂徠を師とし、憤激(一)自ら奮ひ、才氣大に發す。是に於て儒を以て柳澤侯に仕ふ。年二十九にして官を罷む。侯猶ほ優待して粟(二)を輸ると云ふ。徂徠始めて古文辭を唱ふるや、世の學者舊聞(三)に牽かれ、之を信ずる者罕なり。東野、縣周南(四)と早く諸子に先んじて之に歸し、東野最も肯綮(五)を得たり。徂徠終に海内に木鐸(六)たること、東野實に之を贊翼(七)す。

(一) 自ら發奮して才氣大に發す　(二) 祿米を送る　(三) 今まで聞く所にひかさる　(四) 山縣周南　(五) 物の急所を

房。於几上見有端明集。乃亦知其於文不必漢。於詩不必唐。將集衆美以成大者也。而退省其所爲。文不必漢。未嘗不漢。詩不必唐。未嘗不唐。而二者雜諸宋。未嘗墮宋。則雖所不必守乎。而竟未得不以家風矣。

跋ニ踏海集一論レ之。其略曰。蓋仲英於ニ述作一。欲下別自出ニ機軸一以爲中一家上者耳。嘗曰。苟有レ得ニ於我一。雖ニ家風一所レ不ニ必守一也。我雖ニ不肖一。豈至下歩趨不レ能ニ自施一。徒從レ人周旋。以レ此爲下不レ墜ニ家聲一乎。則其志可ニ以觀一矣。蓋仲英方レ館ニ于郭翁一。或有下以難ニ於爲ニ後者上。故言及レ之也爾。余嘗過ニ其

を爲さんと欲する者のみ。嘗て曰く、苟も我に得ること有れば、家風と雖も必ずしも守らざる所なり。我れ不肖と雖も、豈に歩趨(三)自ら施すこと能はず、徒に人に從つて周旋し、此を以て家聲を墜さずと爲すに至らんやと。則ち其志以て觀る可し。蓋し仲英郭翁に館するに方つて、或は以て後たるを難ずる者有り、故に言之に及べるのみ。余嘗て其房(四)に過り、几上に端明集あるを見たり。乃ち亦知る、其文に於ける漢を必とせず、詩に於ける唐を必とせず、將に衆美(五)を集めて以て大を成さんとする者なるを。而して退いて其の爲す所を省るに、文漢を必とせざるも、未だ嘗て漢ならずんばあらず。詩唐を必とせざるも、未だ嘗て唐ならずんばあらず。而して二者諸(六)を宋に雜へて、未だ嘗て宋に墮ちず。則ち必ずしも守らざる所と雖も、而も竟に未だ家風を以てせざるを得ずと。

(一) 大内熊耳　(二) 新しき發明をなす　(三) 自分獨りにて歩み走ること能はずして人に從ひて立ちめぐる　(四) 室
(五) 多くの美を集め取る　(六) 漢唐を宋に交へて宋におちず

不レ能二自雪一。見待レ時申レ狀。令三鬼得レ歸二父母國一。仲英痛心刺レ骨。乃至二江戸一。籲レ天三鳴二之官一。事始得レ辨。遂令三父仍レ舊享二祀於西宮祠中一。

宮の祠中に享けしむ。

㈠神官 ㈡神官の長の貪慾を公儀に訴ふ ㈢手先となつて働く黨類 ㈣たくらみて無實の罪におとしいる ㈤流離零落 ㈥無實の罪 ㈦死後の靈

仲英得二南郭指授一。爲二儒雅士一。已開レ門敎レ人。未レ幾。南郭丈夫子皆亡。有二季女一。仲英就贅。仲英本姓中西。於レ是冒二服氏一。其子孫至レ今世住二南郭故宅一。不レ墜二家聲一。是古人所二希觀一也。

仲英、南郭の指授を得、儒雅の士となり、已に門を開きて人に教ふ。未だ幾ならず、南郭の丈夫子皆亡す。季女あり。仲英就いて贅す。仲英、本姓は中西、是に於て服氏を冒す。其子孫今に至り世々南郭の故宅に住し、家聲を墜さず。是れ古人に希に覯る所なり。

㈠純粋の儒者 ㈡男の子 ㈢いりむことなる

仲英最善レ詩。而與二南郭一頗異レ途。餘熊耳

仲英最も詩を善くす。而も南郭と頗る途を異にす。餘熊耳踏海集に跋して之を論ず。其略に曰く、蓋し仲英の述作に於ける、別に自ら機軸を出し以て一家

正面。楷字刻ニ南郭先生墓五字ニ。左右後三面。不レ勒ニ一字ニ。毎歳以ニ忌辰六月二十一日ニ。其徒集ニ會於斯ニ。各賦レ詩以弔レ之。自ニ没寶暦乙卯ニ。至レ今不レ絶。

す。没せし寶暦乙卯(一)より、今に至りて絶えず。

(一) 九年

服元雄。字仲英。小字多門。南郭義子。攝津人。仲英父某。爲ニ西宮祝人ニ。嘗訴ニ主祠貪汚ニ。反爲ニ其爪翼ニ所ニ搆誣ニ。竟放逐以ニ流落ニ死。臨レ死顧謂ニ仲英ニ曰。吾逢レ寃

服元雄

服元雄、字は仲英、小字は多門、南郭の義子、攝津の人。

仲英の父某、西宮の祝人(一)の爲に、嘗て主祠(二)の貪汚を訴へ、反つて其爪翼(三)の爲に搆誣(四)せられ、竟に放逐せられ流落(五)を以て死す。死に臨み顧みて仲英に謂つて曰く、吾れ寃(六)に逢ひ自ら雪ぐこと能はず。兒時を待つて狀を申べ、鬼(七)をして父母の國に歸るを得しめよと。仲英痛心骨を刺す。乃ち江戸に至り、天に籲んで三たび之を官に鳴し、事始めて辨ずるを得、遂に父をして舊に仍つて祀を西

有二乃父風一。惜哉病レ痘而沒。年僅十七。南郭識二其墓一。有レ詩名二鍾情集一。

に十七。南郭其墓に識す。詩あり鍾情集と名づく。

(一) 痘瘡

南郭年既老。蘐苑名流凋喪略盡。歸然獨存。以レ是名望益重。太宰徳夫。藤東壁。松子允。縣次公。平子和。越君瑞墓門之記。南郭皆撰レ之。

南郭年既に老い、(一)蘐苑の名流凋喪略盡き、(二)歸然として獨り存す。是を以て名望益々重し。(三)太宰徳夫・(四)藤東壁・(五)松子允・(六)縣次公・(七)平子和・(八)越君瑞の墓門の記は、南郭皆之を撰す。

(一) 徂徠派の名士死去して盡く (二) 獨り立つて高きさま (三) 春臺 (四) 安藤東野 (五) 松崎白圭、字に子允 (六) 山縣周南 (七) 平野金華 (八) 越智雲夢

品川東海寺中少林院。南郭墓在焉。碑高二尺餘。廣厚一尺許。其

品川東海寺中少林院に、南郭の墓在り。碑は高さ二尺餘、廣厚一尺許。其正面には、楷字にて南郭先生墓の五字を刻し、左右後の三面には、一字をも勒せず。毎歳忌辰六月二十一日を以て、其徒斯に集會し、各詩を賦して以て之を弔

高蘭亭曰。余與二南郭一友者十數年。未三嘗見二喜慍之色一。其平生隨二己所一レ好。毀譽不レ拘。與レ物無レ競。頗類二謝安爲一レ人。

(一)高蘭亭曰く、余南郭と友たること十數年、未だ嘗て喜慍(二)の色を見ず。其平生己の好む所に隨ひ、毀譽拘らず、物と競ふ無し。頗る謝安の人となりに類せりと。

(一) 高野蘭亭、徂徠門　(二) 喜び又いかる色を見ず

又問二南郭一曰。先生詩以レ誰爲二準的一。曰。余非二必有一レ所二誦法一焉。初年唯好讀二杜詩一。今而竊思レ之。雖二拙劣一。間得二杜之髣髴一者。蓋爲レ此故也。

又南郭に問うて曰く、先生、詩は誰を以て準的(一)と爲すと。曰く、余必ずしも誦(二)法する所有るに非ず。初年唯好んで杜詩を讀む。今にして竊に之を思ふに、拙劣と雖も、間〻杜(三)の髣髴を得るものは、蓋し此が爲の故なりと。

(一) 標準　(二) 古人の詩を誦して摸範とす　(三) 杜甫の詩に似よりたる所あるはこのためなり

男惟恭。字原卿。才藻卓絶。

男惟恭、字は原卿、才藻卓絶、乃父の風有り。惜しいかな痘(一)を病みて沒す。年僅

意之篇。則李王以下不二敢齒一也。四編則衰矣。宇士新評下南郭送二守秀緯一序上曰。子遷學二濟南一。自謂得レ之。此篇卽其擬者。然濟南潔而深。子遷蕪而淺。門牆猶遠。何論二堂室一。蓋天才秀異。不レ苦二結撰一。故乏レ學。少レ思。疎二於事一。而昧二於字一。其於二李文一未レ能二盡解一。是以未レ得二其法一。至レ如二自運一。亦多二傴陋一。雖レ然子遷猶可レ論。餘未レ可レ論也。吾祖曰。南郭天才流麗。其詩合作者眞足レ配二古人一。然其聲律動失二法度一。是學力不レ足處。至レ文則大較婉佻。浮而乏二於實一。雜而淺二於法一。雖三響高二一世一。而貫珠不レ稱。物茂卿嘗序二其初稿一云。它日使三子遷木二鐸一方一。詩之教庶幾被二之一世一哉。文亦然。然其慧而才敏也。故其巧與レ俊終或不レ能二全闕一レ之。時出レ之。子遷乃無レ所レ不レ有已可レ見。雖三茂卿之私二其徒一哉。以二其不レ可二爲レ之諱掩一也。

と雖も、其の之が爲に諱掩すべからざるを以てなり。(二六)

(一)妙所にいたる (二)立脚を堅實にす (三)瑕も類もきず (四)りつは (五)字句の彫琢 (六)酸いとからいと好みが違ふ (七)伊東藍田 (八)南郭の別號 (九)圓熟の境 (一〇)斧にて材木を斬取る如く強ひて他より材料を取り入れ、前人を眞似しあと多し (一一)圓頓の妙規渾然として文の奥妙を極め間然すべき所なし (一二)李攀龍、王世貞以下の文は比較にならず (一三)宇野士新、徂徠の門下釋大潮に從ふ (一四)守屋秀緯 (一五)南郭の字 (一六)李攀龍なり、常に濟南を冠して言ふより云ふ (一七)粗雜にして淺薄 (一八)門や垣根にも遠きほどゆゑ堂に上り室に入るを論ずる要なし (一九)すぐれたる天才は文を作るに苦心せず (二〇)天稟の才うるはし (二一)古人に比す (二二)詩の韻律 (二三)なまめかしくして輕し (二四)古支那の官吏が法令を人民に示す時などに鳴らしたるものにて、木の舌のつきたるすずなり、轉じて世を教へ導く者 (二五)其の技巧と鋭才 (二六)いみおほひ隱す

編四編最粹然矣。乃知此老。剪裁老益精到。然酸鹹嗜好各有レ所レ喜。東藍田答ニ小栗元卿一書云。不佞壯歲從ニ諸老先生一。論ニ芙蕖館之文一。誠於ニ本邦一無レ比則無レ比。然其初編則未レ至ニ混化之地一。是以斧斤取レ材。襲踏痕蹟多見。若夫二編三編。一切圓機混化亡レ蹤。至ニ或得

と。此篇は卽ち其擬する者なり。然れども濟南は潔にして深、子遷は蕪(一七)にして淺、門牆(一八)猶ほ遠し。何ぞ堂室を論ぜん。蓋し天才秀異は結撰に苦まず。故に學に乏しく、思に少なく、事に疎にして、字に昧し(一九)。其の李文に於けるや未だ盡く解する能はず。是を以て未だ其法を得ず。自運の如きに至つても、亦倭陋多し。然りと雖も子遷は猶ほ論ず可し。餘は未だ論ず可からずと。吾が祖曰く、南郭天才流麗にして、其詩合作の者眞に古人(二一)に配するに足る。然れども其聲律動(二〇)れば法度を失ふ。是れ學力の足らざる處なり。文に至つては則ち大較婉佻(二二)、浮にして實に乏しく、雜にして法に淺し。譽一世に高しと雖も、而も實殊(二三)に稱はずと。物茂卿嘗て其初稿に序して云く、它日子遷をして一方に木鐸(二四)たらしめば、詩の教庶幾くは之を一世に被らしめんかな。文も亦然り。然れども其慧にして才敏なる、故に其巧と俊(二五)と終に或は全く之を閟づる能はず、時に之を出す。子遷乃ち有せざる所無きこと已に見るべし。茂卿の其徒に私す

南郭集。自二初編一至二四編一。凡四十巻刊二行于世一。而詩文共以二四編一爲レ造二佳致一。僧大典曰。南郭文第四編爲二妙手一。初編可レ議者多。二編三編未レ爲レ至。江郁北海論レ詩曰。南郭能守二地歩一。不レ求二勝於一句一章一。而全二功於一巻一集一。今閲二其集一。初編瑕類頗多。二編十存二二三一。三

南郭集、初篇より四編に至る。凡そ四十巻。世に刊行す。而して詩文共に、四編を以て（一）佳致に造ると爲す。僧大典曰く、南郭の文、第四編を妙手と爲す。初編は議す可き者多し。二編・三編は未だ至れりと爲さずと。江郁北海詩を論じて曰く、南郭能く地歩（二）を守つて、勝を一句一章に求めず。而して功を一巻一集に全うす。今其集を閲するに、初編は瑕類（三）頗る多し。二編は十に二三を存し、三編・四編最も粋然（四）たり。乃ち知る此老、剪裁（五）老いて益〻精到なるをと。然るに酸醎（六）嗜好各〻喜ぶ所有り。東藍田（七）が小栗元卿に答ふる書に云ふ、不佞壯歳にして諸老先生に從ひ、芙蕖館（八）の文を論ず。誠に本邦に於て比無きは則ち比無し。然るに其初編は則ち未だ混化（九）の地に至らず。是を以て斧斤（一〇）材を取り、襲踏の痕蹟多く見る。若し夫れ二編・三編は、一切圓機（一一）混化して蹤なし。或は得意の篇に至れば、則ち李・王（一二）以下敢へて齒せず。四編は則ち衰ふ。宇士新（一三）、南郭（一四）が守秀緯を送る序を評して曰く、子遷（一五）、濟南（一六）を學び、自ら謂ふ之を得たり

南郭不レ談二經濟一。每曰。如二熊澤了海一。才抱二經世一。身居二要地一。故言行功建。世儒之談二當世一。雖二或靡靡可一レ聽。時不レ可レ施。彊施則果誤レ國。要レ之身不レ居二樞筦一。徒辨給售レ己耳。老子曰。知者不レ言。斯言諒矣。

南郭經濟を談らず。每に曰く、熊澤了海の如き、才經世(一)を抱き、身要地に居る。故に言行はれ功建つ。世儒の當世を談ずる、或は靡靡(二)聽く可しと雖も、時に施す可からず。彊ひて施すときは則ち果して國を誤る。之を要するに身樞筦(三)に居らず。徒らに辨給(四)己を售るのみ。老子曰く、知者は言はずと。斯の言諒なりと。

(一) 世を經綸する才を抱く　(二) 說く所如何にも尤もらしく傾聽すべけども　(三) 要路、樞要の地位　(四) 辨舌巧みに自家を廣告す

南郭曰。宋儒窮理說。豈易レ極二其宗旨一乎。今人四書集註猶且不レ能レ精レ之。亢顏自稱二朱學一。可レ發二一笑一。此邦得二朱之意一者。其唯山崎闇齋乎。

南郭曰く、宋儒窮理の說、豈に其宗旨を極め易からんや。今人四書集註すら猶ほ且つ之を精しうする能はず。亢顏(一)自ら朱學と稱す。一笑を發すべし。此邦朱の意を得る者は、其れ唯山崎闇齋かと。

(一) 厚かましくも朱學派と稱す

南郭稱二唐土一。以二海外或彼邦彼方一。未三嘗稱二中華中國一。與三徂徠自題二東夷物茂卿一。大庭逕。知不足齋叢書中。收二論語皇疏一。而南郭序中。有二中華字一。此鮑以文改二易海外一耳。

南郭唐土を稱するに、海外或は彼の邦、彼の方を以てし、未だ嘗て中華・中國と稱せず。徂徠が自ら東夷の物茂卿と題すると、大に庭逕(一)あり。知不足齋叢書中、論語皇疏を收む。而して南郭が序中に、中華の字有り。此は鮑以文が海外を改易せるのみ。

(一)相違

南郭詩文尤所レ長。經義蓋其短處。故其言人或不レ服焉。當二徂徠喪一。門人集議。南郭引二禮記正義一。以辨二一事一。而皆疑爲二杜撰一。至四再言三疇昔得二之某篇一。猶不レ信。

南郭、詩文は尤も長ずる所にして、經義は蓋し其短處なり。故に其言人或は服せず。徂徠の喪に當つて、門人集議す。南郭禮記正義を引いて以て一事を辨ず。而も皆疑つて杜撰(一)と爲す。再び疇昔(二)之を某篇に得と言ふに至つて、猶ほ信ぜず。

(一)典據なき言　(二)前日

氏求二正本于春臺一。春臺辭以下藁本作レ字不レ愼。且衰邁不レ能二繕寫一。而私謂二小林氏一曰。托二中官一以達レ言。君子所レ不レ爲也。若命出二於閣老一。則不レ得レ不レ進。

す。而して私かに小林氏に謂つて曰く、中官に托して以て言を達するは、君子の爲さざる所なり。若し命閣老より出でなば、則ち進めざるを得ずと。

(一) 加納遠江守をさす　(二) 將軍に獻上す　(三) 草稿の字體亂雜　(四) 年老い體衰ふ

春臺校二刻古文孝經孔安國傳一。由二沼田侯一。(侯後移二封久留里一)上二大府一。孔傳彼邦亡者久矣。而春臺所レ梓。傳入レ彼。乾隆四十一年。(日本安永五年。)鮑以文翻刻入二知

春臺、古文孝經孔安國傳を校刻し、沼田侯(侯後久留里に移封す)に由つて、大(一)府に上る。孔傳彼の邦にて亡はること久し。而して春臺の梓する所、傳へて彼に入る。乾隆四十一年(日本安永五年)鮑以文翻刻して知不足齋叢書中に入る。吳騫が序に曰く、宋史日本傳に謂ふ、其國太宰府、人をして方物を貢せ(二)しめ、或は其牒(三)を收得すと。今是の書を序刻する太宰純は、未だ何如なる人爲るかを詳かにせず。日本多く職を世にす。太宰純とは豈に猶ほ其苗裔(四)か。或は官を以て氏と爲す者か。惜しいかな、十萬里の波濤盡し難し。問ひ易からざ

其侯餽二乾海參一。調二烹之一則肉破味變。春臺怒甚。卽遣二人一却レ之曰。余固勿レ論二鄙賤一。而君所二以許一レ交者。信二其所一レ學也。既信レ之。豈可レ無レ禮乎。然餽以二腐物一。是禮之廢也。夫道者。以レ禮爲レ主。而其既廢レ之。亦何學之爲。今而後不レ願レ造二君之門一。侯曰。是寡人率爾所レ致。卽自裁レ書。更餽二一篋海參一謝レ之。

某侯乾海參(一)を餽る。之を調烹すれば則ち肉破れ味變ず。春臺怒甚だし。卽ち人をして之を却けしめて(二)曰く、余固より鄙賤なるに論なし。而も君が交を許す所以は、其の學ぶ所を信ずればなり。既に之を信ず、豈に禮無かる可けんや。然るに餽るに腐物を以てす、是れ禮の廢せるなり。夫れ道は、禮を以て主と爲す。而るに其れ既に之を廢す、亦何の學かこれ爲さん。今よりして後君の門に造るを願はずと。侯曰く、是れ寡人率爾(三)の致す所と。卽ち自ら書を裁し、更に一篋の海參を餽つて之を謝す。

(一)なまこを煮て乾したるもの、いりこ　(二)突返さしめて　(三)粗忽

侍中某欲下以二經濟錄一進呈上。令三書商小林

侍中某經濟錄を以て進呈(一)せんと欲し、書商小林氏をして正本を春臺に求めしむ。春臺辭するに、(三)藁本字を作すこと愼まず、且つ衰邁繕ひ寫す能はざるを以て

道者。余不レ欲二復見一。當二是時一。侯爲二閣老一。用捨窮達皆出二於其手一。而其言一無レ所二忌憚一。於レ是其臣相議曰。無禮渠自道也。世固多二儒師一。請更招二他人一。世子聞レ之曰。寡人過矣。受二教於師一。何挾之有。乃厚レ禮事レ之。春臺後著二六經略說一。進二諸世子一云。（世子卯殿郎侯第四世。賞（七）二今林祭酒述齋公所生父一。）

の林祭酒述齋公の所生父たり）（七）

㈠性格きびしくして方正なり　㈡怒る貌　㈢おごり高ぶる　㈣老中　㈤用ふるも捨つるも窮せしむるも立身せしむるも自由　㈥身分の高き事を胸中に抱くべき理由なし　㈦大學頭

春臺善吹レ笛。當二是時一。東叡法王好二音律一。聞三春臺妙二于音一。嘗遣レ使召レ之。春臺辭曰。余儒生也。若以レ儒被レ召則不レ俟レ駕。以二其私嗜末技一。爲二王門伶人一。余不レ欲也。自レ此終不二復吹一レ笛。

春臺善く笛を吹く。是時に當つて、東叡法王（一）音律を好む。春臺が音に妙なるを聞き、嘗て使を遣して之を召す。春臺辭して曰く、余は儒生なり。若し儒を以て召さるれば則ち駕を俟たず。其私嗜（二）の末技を以て、王門の伶人（三）と爲るは、余欲せざるなりと。此より終に復笛を吹かず。

㈠東叡山寛永寺の法親王　㈡私にすき好むつまらぬ技藝　㈢樂人

復官。初從中野撝謙爲性理學。既而聞徂徠成一家言。卽棄其學而學焉。遂以治經名冠一時。

春臺爲人嚴毅端方。巖邨侯世子延爲師。其始至。世子不送迎。春臺艴然曰。至賤處士。烏敢傲岸於貴人。雖然所說則聖人之道也。苟奉道者。雖王公不得不禮焉。而其所待薄甚。是非不禮余。卽不奉道也。不奉

春臺人となり嚴毅端方なり。巖邨侯の世子延いて師と爲す。其の始めて至るや、世子送迎せず。春臺艴然として曰く、至賤の處士、烏ぞ敢へて貴人に傲岸せん。然りと雖も說く所は則ち聖人の道なり。苟も道を奉ずる者は、王公と雖も禮せざるを得ず。而るに其の待つ所薄きこと甚だし。是れ余を禮せざるに非ず、卽ち道を奉ぜざるなり。道を奉ぜざる者は、余復見ることを欲せずと。是時に當て、侯、閣老たり。用捨窮達皆其手に出づ。而も其言一も忌憚する所無し。是に於て其臣相議して曰く、無禮は渠自ら道ふなり。世固より儒師多し。請ふ更に他人を招かんと。世子之を聞いて曰く、寡人過てり。敎を師に受く、何ぞ挾むこと之れ有らんと。乃ち禮を厚くして之に事ふ。春臺後に六經略說を著し、諸を世子に進むと云ふ。(世子は卽ち巖邨侯の第四世にして、實に今

無二恆祿一者。宜レ兼二岐黄一。偏以レ儒居。則產難レ文。終或不レ能レ固二其志一也。因レ是門人往往有二儒而兼レ醫者一云。

て門人往往儒にして醫を兼ぬる者有りと云ふ。

㊀一定の俸祿　㊁醫家

太宰純

太宰純。字德夫。小字彌右衛門。號二春臺一。又號二紫芝園一。信濃人。

春臺平手政秀後云。自レ父言辰一冒二太宰氏一。少時來二江戶一。筮二仕某二侯一。皆不レ得レ志去。時年三十六。從レ是後不二

太宰純、字は德夫、小字は彌右衛門、春臺と號す。又紫芝園とも號す。信濃の人。

春臺は平手政秀の後なりと云ふ。父言辰より太宰氏を冒す。少時江戶に來り、某二侯に筮仕す。皆志を得ずして去る。時に年三十六。是より後復官せず。初め中野撝謙に從つて性理學を爲む。既にして徂徠が一家言を成すを聞き、即ち其學を棄てて學ぶ。遂に治經を以て名一時に冠たり。

㊀織田信長の臣、信長の傳　㊁宋儒の性命理氣の學　㊂經書研究

一日門人相集謂曰。先生若得志。使吾儕管何事。座有一人曰。余之不才。先生所素知。但守倉廩。則雖一掬米。不敢私之。天民曰。使如爾者奈何守倉廩。其人作色曰。先生以余爲不廉乎。天民笑曰。否。有竊物之才者。不爲人所竊。爾能不爲人所竊邪。

一日門人相集り謂つて曰く、先生若し志を得ば(一)、吾儕をして何事をか管せしむると。座に一人有り、曰く、余の不才は、先生素より知る所、但倉廩を守らば、則ち一掬の米と雖も、敢へて之を私せずと。天民曰く、爾の如き者をして奈何ぞ倉廩を守らしめんと。其人色を作して曰く、先生余を以て廉ならず(二)と爲すかと。天民笑つて曰く、否、物を竊むの才有る者は、人の爲に竊まれず。爾能く人の爲に竊まれざらんやと。

(一) 志を得て政権に與るに至らば何役をつかさどらしむるか　(二) 潔白たらず

仁齋以儒而爲醫爲不是。其說見儒醫辨。天民異於此。曰。此邦儒

仁齋儒にして醫たるを以て是ならずと爲す。其說儒醫の辨に見ゆ。天民は此に異なり。曰く、此邦儒の恆祿(一)なき者は、宜しく岐黄(二)を兼ぬべし。偏に儒を以て居れば、則ち産支へ難く、終に或は其志を固うする能はざるなりと。是に因

之孤。他日天民聞之曰。東涯實知吾。吾奪之人。未可自知也。至爲人所奪。決無之。東涯反之。

らざるなり。人の爲に奪はるゝに至つては、決して之れ無し。東涯は之に反す。

と。

㊀ 論語「曾子曰、可以託六尺之孤、可以寄百里之命、臨大節而不可奪也、君子人與、君子人也」

天民唱其所獨得以振一時。仁齋沒。其徒半從東涯。半從天民云。

又通倭學。善屬倭文。嘗作片割記。多田南嶺取爲己說。載秋齋閑語。伴蒿蹊畸人傳。錄天民事跡及片割記。以發南嶺剽竊。可謂痛快。

天民、其獨り得る所を唱へ、以て一時に振ふ。仁齋沒するや、其徒半ば東涯に從ひ、半は天民に從ふと云ふ。

又倭學に通じ、善く倭文を屬る。嘗て片割の記を作る。多田南嶺取つて己が說と爲し、秋齋閑語に載す。伴蒿蹊の畸人傳(二)、天民の事跡及び片割の記を錄し、以て南嶺の剽竊を發く。痛快と謂ふ可し。

㊁「七尺ばかりに削りたる木二つをあぐらの足の形に斜に打違へて、神社の棟に、牛の角を戴きたらむやうに立てるものあり、ちぎとぞいふ、又はかたそぎともいふ」云々と筆を起して其由來を詳述せり

人也。必也使レ無レ訟乎。及如有レ用レ我者。吾其爲二東周一乎。苟有レ用レ我者。朞月而已可也。三年有レ成數語上曰。此聖人才德之本領也。奮然爲二己任一。其說二尚書一曰。蔡氏集傳解二得七分一。王耕野所レ著讀書管見。多レ所二發明一。王魯齋書疑。考二定錯簡一。而文理稍覺二順妥一。唯於下斟二酌其意一以施二諸家國一之方上。予竊不レ讓二諸君一耳。嘗將下上疏以二蝦夷地方一爲中内屬上。而年僅四十。志不レ果沒。識者惜レ之。

曰く、此れ聖人才德の本領なり。奮然己が任と爲さんと。其尚書を說けるに曰く、蔡氏集傳は七分を解し得、王耕野が著す所の讀書管見は、發明する所多し。王魯齋が書疑は、錯簡(六)を考定して、文理稍順妥(七)を覺ゆ。唯其意を斟酌(八)して以て諸を家國に施すの方に於ては、予竊かに諸君に讓らざるのみと。嘗て將に上疏して蝦夷地方を以て內屬と爲さんとす。而るに年僅かに四十にして、志果さずして沒す。識者之を惜む。

(一) 經世濟民　(二) 論語顏淵篇に出づ　(三) 論語陽貨篇に出づ　(四) 論語子路篇に出づ　(五) 一箇月　(六) 書物の文句などの入りちがひになれるもの　(七) 適當、妥當　(八) くみ取る

東涯曰。簡亮誠有レ才。然不レ可三以託二六尺

東涯曰く、簡亮誠に才有り。然れども以て六尺(一)の孤を託す可からずと。他日天民之を聞きて曰く、東涯實に吾を知る。吾之を人に奪ふ、未だ自ら知る可か

情。自二其以一レ思爲レ職而言レ之則謂二之心一。其實一也。學者必欲レ指二其孰爲レ心孰爲レ性爲一レ情。何不レ思之甚也。誠所疑語孟字義序曰。吾竊聞二之叔父信齋一矣。一日信齋與二天民一共訪二仁齋之書窩一。談及二性理一。天民質以二其所レ見心性情三名唯一之旨一。問答數回。而仁齋默然稍久而歎曰。非二豪傑之士無レ所レ待而興起者一。不レ能レ與二於此一矣。吾子誠間出之才也。吾當レ改二字義一耳。誠所名永。字崇永。小字五一。天民兄。嘗著二五畿内志一。有レ名二于世一。

誠所名は永、字は崇永、小字は五一、天民の兄なり。嘗て五畿内志を著し、世に名有り。

(一) 告子の義を外にする說孟子に見えたり。舊窠はふるあな　(二) 孟子の說に、惻隱の心は仁の端、羞惡の心は義の端、辭讓の心は禮の端、是非の心は智の端とあり　(三) 生れると倶に生ず　(四) 思考を其の職分とす　(五) 並河天民　(六) 他の說に賴る所なくしておこる　(七) 稀に出づるの人才

天民性剛決負レ才。其學本二于尚書論語孟子一。以二經濟一爲レ志。每稱二所謂聽レ訟吾猶レ

天民、性剛決にして才を負む。其學尚書・論語・孟子に本づき、(一)經濟を以て志と爲す。每に所謂(二)訟を聽くは吾猶ほ人のごときなり、必ずや訟無からしめんか、及び(三)如し我を用ふる者有らば、吾れ其れ東周を爲けんか、(四)苟も我を用ふる者有らば、(五)朞月のみにて可なり、三年にして成ること有らん、の數語を稱して

天民初年從二仁齋一學。後以下仁齋仁義禮智天地自有之物。非三性之所二固有一之說上爲二告子舊窠一。更立二己見一。其說見二天民遺言一。大略以爲。四端之心。卽仁義禮智。仁義禮智。卽四端。非三四端之外別有二仁義一。自二其與レ生俱生一而言レ之。則謂二之性一。自二其情實無レ僞而言レ之。則謂二之

天民、初年仁齋に從つて學ぶ。後仁齋が、仁義禮智は天地自有の物にして、性の固有する所に非らずとの說を以て告子の舊窠(一)と爲し、更に己が見を立つ。其說天民遺言に見ゆ。大略に以爲へらく(二)、四端の心は、卽ち仁・義・禮・智、仁・義・禮・智は、卽ち四端、四端の外別に仁義有るに非ず。其(三)生と俱に生ずるより之を言へば、則ち之を性と謂ふ。其情實僞なきより之を言へば、則ち之を情と謂ふ。其の思(四)を以て職と爲すより之を言へば則ち之を心と謂ふ。其實は一なり。學者必ず其孰か心たり孰か性たり情たるを指さんと欲す。何ぞ思はざるの甚だしきやと。誠所の疑語孟字義の序に曰く、吾竊かに之を叔父信齋に聞けり。一日信齋(五)天民と共に仁齋の書窓を訪ひ、談性理に及ぶ。天民質すに其の見る所の心・性・情の三名唯一の旨を以てす。問答數回にして、仁齋默然稍久しうして嘆じて曰く、豪傑の士(六)待つ所無くして興起する者に非ずんば、此に與ること能はず。吾子は誠に間出(七)の才なり。吾れ當に字義を改むべきのみと。

人。則不三敢黨二此詈一。背戲下作錄二詩盜判一文上。紀下一儒生每作レ詩。必剽二竊古人一。以レ故死而得二罪于冥司一事上。此寓言以縱彈二時名一流一也。

り。

(一)爲すことなくして人の後に立つ　(二)他の詩歌文詞をぬすんで自作とすること　(三)閻魔王　(四)攻擊す

南海又善二丹青一。甞二儲宋沈無名畫譜一。是時池貸成。(名勤。號二大雅堂一)志レ畫。南海謂曰。子學レ畫。當レ學二士夫畫一。乃貽二無名畫譜一。貸成喜摸レ之。愛慕之餘。自改二其名一稱二無名一。貸成沒之後。此譜轉二落木世肅蒹葭堂一云。

南海又丹青(一)を善くす。宋の沈無名の畫譜を舊儲(二)す。是時池貸成(名は勤、大雅堂と號す)畫に志す。南海謂つて曰く、子畫を學ばば、當に士夫の畫を學ぶべしと。乃ち無名の畫譜を貽る。貸成喜んで之を摸す。愛慕の餘、自ら其名を改めて無名と稱す。貸成沒するの後、此譜木世肅(三)の蒹葭堂に轉落すと云ふ。

(一)繪畫　(二)以前より所藏せり　(三)木村巽齋、名は孔恭、大阪の人、蒹葭堂と號す

並河亮

並河亮。字簡亮。私二諡天民一。平安人。

並河亮、字は簡亮、天民と私諡す。平安の人。

予笑而答曰。吝亦所謂知レ一而不レ知二其二一者耳。雷本非二天怒一。古人既辨レ之。聖人戰兢之至。其戒愼豈惟雷耳哉。其既謂二疾風迅雨亦必變一。風雨豈是亦天怒也哉。夫雷也天地間一物。與二夫日月星辰風雲雨雪一。同是造化之使令。日月也。星辰也。風雲也。雨雪也。未レ聞レ有二疑怪者一也。獨至レ雷也則疑以爲二異物一。怪以怖レ之。何其惑也。至二後世一腐譚之士。千言萬語以レ理說レ雷。亦是癡人語レ夢耳。吾觀二古人文辭一。有二觀日之壇一。有二觀星之臺一。有下謂二玩月一者上。有下謂二望雲一者上。有下謂二賞雪一者上。雷豈獨不レ可レ觀乎哉。抑亦謂下月雲可レ愛故以二玩望一。雷也徒可レ怖耳上歟。天下可レ怖者亦甚多矣。外則功名利祿。內則智術忿爭。旁至二酒色佚遊一。鰐海舟船。羊腸車馬。一失二其常一。禍不レ旋レ踵。其疾過二於震雷一。子乃不レ顧二其禍於必然一。反而怖二震雷於萬一一。不二亦熱一乎。客不レ答而去。書以爲レ記云。

の恐しさ 〔二一〕ろね／＼として危險なる路を車馬にて越す時の恐しさ 〔二二〕禍の至ること足をかへす間も無きほど速か 〔二三〕きつと來る禍を顧みずして萬一に來る震雷の禍を怖る

當二南海時一。白石南郭輩。詩名躁二于世一。一時秀才多立二其下風一。南海不レ欲二碌碌後レ

南海の時に當り、白石・南郭の輩、詩名世に躁しく、一時の秀才多く其下風に立つ。南海碌碌〔一〕人に後るゝを欲せざれば、則ち敢へて此輩に黨せず。嘗て詩盜の判に錄する文を戲作し、一儒生の每に詩を作るに、必ず古人を剽竊〔二〕し、故を以て死して罪を冥司〔三〕に得たる事を紀す。此れ寓言以て縱に時の名流〔四〕を彈ずるな

猟上。何能過焉。可レ謂宇宙第一奇觀矣。須臾雨止雲散。長霓飲レ海。涼蟾在レ天。爽籟吹レ鬢。洗レ慮濯レ魄。亦雷之賜也。因榜レ之曰二觀雷一。客有二過覧而訝者一。曰。吁異哉。子之名レ亭。吾聞雷天怒也。故聞レ之者。莫レ不二怖而避一也。聖人猶且爲レ之變。今子反以爲二奇觀一。無下乃異二於人情一者上耶。

きのみと謂はんか、天下怖る可き者亦甚だ多し。外は則ち功名利祿(二七)、内は則ち智術忿爭(二八)、旁酒色佚遊(二九)、鰐海舟船(三〇)、羊腸車馬(三一)に至るまで、一び其常を失はば、禍踵(三二)を旋さず、其疾きこと震雷に過ぐ。子乃ち其禍(三三)を必然に顧ず、反つて震雷を萬一に怖る。亦悖らずやと。客答へずして去る。書して以て記と爲すと云ふ。

(一) 普通ならぬ天分　(二) ひのえの方角、南方　(三) 螺は遠山の形、黛は其の色、煙鬟は烟れるびんづらにて遠山のこと　(四) ほのか　(五) うねうねとつらなる　(六) 鬱陶しくむしあつし　(七) 殷々たる音が、遥かに東方に起りてよせ來る　(八) 西南方　(九) 激しきつむじ風　(一〇) 崩るゝ雲が黒檀の如く眞黒　(一一) 背き去りし龍があやしきさまに引きかへし戰ふ　(一二) 金蛇の如き電光が無數に筋をなし閃光鋭く空壁をたち切る　(一三) 雷の激しき音山も崩るゝばかり　(一四) またゝく間に遠くごろごろと南の方海の方へ去る　(一五) 雷の轟きを香車の軋りに譬ふ　(一六) 膽氣が之が爲にはげまされ高く振ひおこり天上に上る　(一七) 黄帝が蚩尤を誅せしときの激戰　(一八) 文選に雲夢は楚の七澤の一、校獵は大木欄にて禽獸の逃るゝをふせぎ獵ること　(一九) 虹霓、にじ　(二〇) 涼しき月影　(二一) 氣もちよき風　(二二) 孔子は迅雷風烈には顏を變ずといへり　(二三) 孔子が極めて戰々兢々たるは、其の自ら戒め愼むことと雷のみたらじ　(二四) 造物者の使者　(二五) 陳腐の説を爲す士　(二六) 馬鹿ものが夢の話をするが如くとりとめなし　(二七) 手柄や利得　(二八) 智術を弄し人と怒り爭ふ　(二九) 酒と女色とにすさむ　(三〇) 鰐のすむ海を舟にて渡る時

暴雨翻河。襍以冰雹。乖龍恍惚反戰。金蛇萬道。擊電劃壁。俄而霹靂破山。瞬息千里。香車轆轆。南走于海。於是開軒倚柱。坐以觀望。遠者八九里。近者二三里。我膽氣爲之鼓舞。飛興揚揚飄飄天外。其壯也雖觀戰於涿鹿之野。望潮於浙江之津。洞庭張樂。雲夢校

く雷は天の怒なり。故に之を聞く者、怖れて避けざるはなし。（二二）聖人猶ほ且つ之が爲に變ず。今、子反つて以て奇觀と爲す。乃ち人情に異ること無からんやと。予笑つて答へて曰く、客亦所謂一を知つて其二を知らざる者のみ。雷は本天の怒に非ず。古人既に之を辨ず。（二三）聖人戰兢の至、其戒愼豈に惟雷のみならんや。其の既に疾風迅雨亦必ず變ずと謂ふ、風雨豈に是れ亦天の怒ならんや。夫れ雷は天地間の一物、夫の日月星辰風雲雨雪と、同じく是れ（二四）造化の使令なり。日月や、星辰や、風雲や、雨雪や、未だ疑ひ怪む者有るを聞かず。獨り雷に至つては則ち疑つて以て異物と爲し、怪んで以て之を怖る。何ぞ其れ惑へるや。後世に至つて（二五）腐譚の士、千言萬語理を以て雷を說く。亦是れ（二六）癡人夢を語るのみ。吾れ古人の文辭を觀るに、觀日の壇有り。觀星の臺有り。玩月と謂ふ者有り。望雲と謂ふ者有り。賞雪と謂ふ者有り。雷豈に獨り觀る可からざらんや。抑々亦月雲は愛す可し、故に玩望を以てす。雷は徒に怖る可

想其非常之資矣。孰謂南海之才獨於詩也。記曰。予洲雲居丙方一亭。遠望得寸碧。螺黛煙鬟依稀雲際者。藤白也。藤白之山。西枕海磯。東連大嶺。迤邐數百里。夏月雷雨之過。大率從此方。其暑氣坱鬱烈火鑠金。殷其之聲。杳起東偶。及景中狂飈捲沙。崩雲如黲。

方の一亭、遠望寸碧を得たり。（三）螺黛煙鬟雲際に依稀たるは、（四）藤白なり。藤白の山は、西、海磯に枕み、東、大嶺に連る。（五）迤邐數百里。夏月雷雨の過ぐる、大率此方よりす。其暑氣坱鬱（六）烈火金を鑠す。殷たる（七）其聲、杳として東偶に起り、（八）景中に及ぶや、（九）狂飈沙を捲き、（一〇）崩雲黲の如く、暴雨河を翻す。礫ふるに氷雹を以てし、乖龍恍惚反戰、（一一）金蛇萬道、（一二）掣電壁を劃し、俄にして霹靂（一三）山を破る。瞬息千里、（一四）香車轆轆、（一五）南、海に走る。是に於て軒を開き柱に倚り、坐して以て觀望す。遠きは八九里、近きは二三里。（一六）我膽氣之が爲に鼓舞し、飛興揚揚天外に飄颻す。其壯なるや、（一七）戰を涿鹿の野に觀、潮を浙江の津に望み、洞庭に樂を張り、（一八）雲夢に校獵すと雖も、何ぞ能く過ぎん。謂ふ可し宇宙第一の奇觀と。須臾にして雨止み雲散じ、（一九）長霓海に飲み、（二〇）涼蟾天にあり。（二一）爽籟鬢を吹き、慮を洗ひ魄を濯ぐ。亦雷の賜なり。因つて之を榜して觀雷と曰ふ。客過り覽て訝る者有り。曰く、吁異なるかな、子の亭に名づくるや。吾聞き

嘗自試レ才。一夜得二百首一。時年十七。或曰十八。人或疑爲二宿構一。乃延レ客席間立レ題。飲酒談笑而起レ草。如二泉注一。自二日中一及二夜半一百首復成。無三一句蹈二襲前詩一。由レ是名燀二布四方一矣。順菴贈レ詩曰。十八山東妙。聲名世共聞。卮言甜若レ蜜。藻思涌如レ雲。人稱斗南一。馬空冀北羣。百篇不レ終レ日。行看任二斯文一。

亭名二觀雷一。自作二之記一。其意新語壯。足三以

嘗て自ら才を試み、一夜百首を得たり。時に年十七なり。（或は曰く十八と）人或は疑つて宿構(一)と爲す。乃ち客を延き、席間題を立て、飲酒談笑して、草を起すに、泉の注ぐが如く、日中より夜半に及び、百首復成る。一句の前詩を蹈襲(二)するなし。是に由つて名四方に燀布(三)す。順菴詩を贈つて曰く、十八山東の妙(四)、聲名世共に聞く、卮言(五)甜きこと蜜の若く、藻思涌くこと雲の如し、人は稱す斗南の一、馬は空し冀北の羣(六)、百篇日を終へず、行く行く看ん斯文に任ずるをと。

(一) 前よりして腹案す (二) まねびならふ (三) 燀名ひろまる (四) 十八歳にして山東の巧妙を發揮すとなり。山東とは天聖寶元の間范諷石曼卿等曠達を喜び酣飲自ら肆にし禮法を守らず、世之を山東逸黨と謂ふ故事 (五) 美言 (六) 伯樂一度冀北を過ぎて善馬空しきが如く、南海以外俊才乏しきをいふ

亭を觀雷と名づけ、自ら之れが記を作る。其意新に語壯に、以て其非常(一)の資を想ふに足る。孰か謂ふ南海の才獨り詩に於てすと。記に曰く、予が湘雲居の丙(二)

傷未レ得ニ旋頭開一。沙場幾歲摧ニ毛骨一。何日華山休レ戰還。在レ座者皆咋レ舌。白石曰。此詩雄渾悲壯。足ニ以トニ後來可レ任ニ斯文一也。又十五爲飛魚躍活潑潑地。對以ニ光風霽月常惺惺法一。芳洲稱爲ニ的對一。

（九）伯樂より軍馬として選ばれしを怨む　（一〇）未だ戰場に馳驅して休む隙なきを傷む　（一一）幾年かの間沙漠に身體を損す　（一二）驚き畏る　（一三）精神常に明かなる法　（一四）あたれる對句

又十六。席上限ニ燭一寸一。探レ題賦ニ昇レ雲聞レ星云。紫微遙裔彩雲迎。衆緯森森白玉京。月傍ニ九重一瑤闕冷。風飄ニ五色一羽衣輕。錦機夜靜星梭響。環珮秋深天步鳴。應ニ是鈞天夢中到一。不レ勞遠問漢君平。此詩不レ錄ニ于集中一。余嘗聞ニ人之誦一レ之。

又十六のとき、席上燭一寸を限り、題を探つて雲に昇り星を聞くを賦して云ふ、紫微遙裔彩雲迎ふ、衆緯森森白玉京、月九重に傍うて瑤闕冷かに、風五色を飄して羽衣輕し、錦機夜靜かにして星梭響き、環珮秋深うして天步鳴る、應に是れ鈞天夢中に到るべし、勞せず遠く問ふ漢の君平と。此詩集中に錄せず。

余嘗て人の之を誦するを聞く。

（一）天帝の居、北斗星の北に位置す。其處よりはるかに彩雲來り迎ふ　（二）多くの星が森然と天帝の御座所なる白玉京に立ち列ぶ　（三）王の御殿　（四）天女のまとへる羽衣　（五）織女星が機を織る梭の音　（六）腰に帶べる環玉　（七）天女の步み　（八）天帝の居　（九）姓は嚴、名は遵、西漢成都の賣卜者

海。又號鐵冠道人。又號觀雷亭。紀伊人。仕本藩。南海受業於木順菴。自幼才調無雙。尤善詩。年甫十四。與白石南山霞沼篁洲集芳洲寓居。即席賦邊馬有歸思云。遠逐將軍度雪山。九秋大漠劍華間。胡塵四起風悲塞。羌笛一聲月照關。却恨曾逢伯樂顧。長

又鐵冠道人と號し、又觀雷亭とも號す。紀伊の人。本藩に仕ふ。

南海業を木順菴(一)に受け、幼より才調無雙、尤も詩を善くす。年甫めて十四、白石・南山(二)・霞沼(三)・篁洲(四)と、芳洲の寓居に集り、即席邊馬(五)歸思有りを賦して云ふ、遠く將軍を逐うて雪山を度る、九秋(六)の大漠劍華の間、胡塵四起し風塞(七)に悲む、羌笛(八)一聲月關を照す、却つて恨む曾て逢ふ伯樂(九)の顧、長く傷む未だ旋頭の閒を得ざるを、沙場(一一)幾歲毛骨を摧く、何れの日か華山戰(一〇)を休めて還らんと。座に在る者皆舌(一二)を咋む。白石曰く、此詩雄渾悲壯、以て後來斯文に任ず可きを卜するに足ると。又十五のとき鳶飛び魚躍る活潑潑地に、對するに光風霽(一三)月常惺惺法を以てす。芳洲稱して的對(一四)と爲す。

(一) 木下順庵 (二) 南部景衡、長崎の人、富山侯の儒官 (三) 松浦儀、播磨の人、對馬侯の家臣 (四) 榊原篁洲 (五) 邊境の征馬 (六) 劍閣と華山との間の大沙漠の秋九月 (七) 邊塞、國境のとりで (八) えびすの吹く笛 (九)

郎。爲二徐文長一。而遂以二初盛唐一爲二表準一。弇州濟南爲二門戶一。復鳴二歸德一書云。一旦大夢覺。宿酲解。乃斷然以二開天一爲レ關。七子爲レ引。陽春白雪每レ奏彌高。斗文紫氣每レ望彌昌。季子裘敝猶可レ改。呂虔刀鈍尙可レ磨。寧爲二王李一取レ履。不二敢辭一。遂使下雨レ血之鷙爪。化爲中食レ椹之柔吻上也。

て辭せず。遂に血を雨らすの鷙爪をして、化して椹（一六）を食するの柔吻たらしめんと。

(一) 歐陽修・蘇東坡 (二) 陸放翁・袁枚 (三) 李白・杜甫 (四) 祖先とす、學び據るの意 (五) 錢起と劉禹錫 (六) 王世貞と李攀龍の奴僕となりて滿足す。顏魯公の蔡州にあるや再從姪峴家、家僮銀鹿始終之に隨ひし故事 (七) 明の袁宏道 (八) 成島鳳卿、字は歸德、號は錦江、東奥の人 (九) ふつかゑひ (一〇) 唐の開元、天寶時代 (一一) 建安の七子なり、皆詩に秀る、孔融・陳琳・王粲・徐幹・阮瑀・應瑒及び劉楨之なり (一二) 詩詞の甚だ高雅なるをいふ。文選宋玉對楚王問に出づ (一三) すぐれたる文詞 (一四) やぶれたるかは衣 (一五) 王世貞と李攀龍とを斥す (一六) 椹は桑實也、之を食ふの柔吻とは蓋し鳩をいふ、激越の格調を變じて柔好ならしむとの謂ならん

祇園瑜。又名正卿。字伯玉。一字斌。小字與一郎。號二南

祇園瑜

祇園瑜、又の名は正卿、字は伯玉、一の字は斌、小字は與一郎、南海と號す。

嘗小集賦レ詩。有二一人一。以二石見國如一レ硯求レ對。苦思皆未レ得。蛻巖忽朗吟曰。竹生島似レ筆。四座驚歎。

嘗て小集詩を賦す。一人有り。石見の國は硯の如しを以て對を求む。苦思皆未だ得ず。蛻巖忽ち朗吟して曰く、竹生島は筆に似たりと。四座驚歎す。

(一) 小なる會合

蛻巖以二詩豪一厭二一時一。而意見屢改。格調數變。皆足二以驚一レ人。自言初學レ宋。歐蘇而旁放翁簡齋。中年學レ唐。祖二禰李杜一。緣飾以二錢劉諸家一。又退學レ明。甘レ爲二王李銀鹿一。亡レ幾爲二袁中

蛻巖詩豪を以て一時を厭す。而も意見屢〻改り、格調數〻變ず。皆以て人を驚かすに足る。自ら言ふ初め宋を學び、歐・蘇にして旁放翁・簡齋なり。中年唐を學び、李・杜を祖禰し、緣つて飾るに錢・劉諸家を以てす。又退いて明を學び、王・李の銀鹿たるに甘ず。幾もなく袁中郎と爲り、徐文長と爲りて、遂に初盛唐を以を表準と爲し、弇州・濟南を門戶と爲すと。鳴歸德に復する書に云ふ、一旦大夢覺め、宿醒解く。乃ち斷然開天を以て關と爲し、七子を引と爲す。陽春の白雪奏する毎に彌〻高く、斗文の紫氣望む毎に彌〻昌なり。季子の裘敝猶ほ改むべく、呂虔の刀鈍尙ほ磨すべし。寧ろ王・李の爲に履を取るも、敢へ

說兵。其評古之勇將戰士也。論議慷慨。有烈丈夫風。言或及周瑜赤壁。謝玄淝水。織田信長桶狹間。上杉謙信川中島等事。則扼腕按劍。躍如色飛。當世名爲覇儒。年四十八。事赤石侯。先是與世齟齬。游仕屢不遂。家唯壁立。其詠雪詩序云。余頻年窮甚。書簏中除四子外。有詩韻一冊。徐文長集半部。又嘗作不能買書詩。有惠車鄴架滿天地。誰信空拳猶突圍之句。

の風有り。言或は周瑜の赤壁(一)、謝玄の淝水(二)、織田信長の桶狹間、上杉謙信の川中島等の事に及べば、則ち腕を扼し劍を按じ(三)、躍如として色飛ぶ。當世名づけて覇儒と爲す。年四十八にして、赤石侯に事ふ。是より先世と齟齬し(四)、游仕屢く遂げず。家は唯壁の立てるのみ。其雪を詠ずる詩の序に云ふ、余頻年窮甚し、書簏(五)の中四子(六)を除く外、詩韻一冊、徐文長集半部ありと。又嘗て書を買ふこと能はざる詩を作る。惠車鄴架(七)天地に滿つ。誰か信ぜん空拳猶ほ圍を突く(八)を、の句有り。

(一) 呉の周瑜赤壁に魏の曹操を鏖破す　(二) 晉の謝玄秦王苻堅の軍を淝水に鏖にす　(三) 腕をとりしぼり劍の柄を握り顏色飛び立つ如し　(四) ゆきちがふ　(五) 竹にて編める書ばこ　(六) 四書　(七) 惠子は五車の書を有し、李泌鄴侯に封ぜられ藏書多かりし故事　(八) から手にて敵の重圍を突く、書無くして學に志すをいふ

白石。白石不二妄容一ㇾ人。獨異二蛻巖之才。與ㇾ之交肫肫見二中底。江邨北海曰。讀二蛻巖之集。譬猶下上二崑崙之邱。步步是玉。入二栴檀之林。枝枝是香。詩至二於此一宜ㇾ無二遺論。而猶有二未ㇾ盡ㇾ善者一何也。蛻巖用ㇾ才太過耳。張茂先謂二陸士衡一曰。人常恨二才少。而子更患二其多。余於二蛻翁一復云。

るがごとし。詩は此に至つて宜しく遺論(三)なかるべし。而るに猶ほ未だ善を盡さざる者有るは何ぞや。蛻巖才を用ふる太だ過ぎたるのみ。張茂先、陸士衡に謂つて曰く、人常に才の少きを恨む。而るに子は更に其多きを患ふと。余蛻翁に於て復云はんと。

(一) 研究すること年老いても止まず (二) ねんごろにして腹の底までうちあける (三) 議論を挿む餘地無し

蛻巖既爲二伊洛學。又信二此邦神道。又博讀二釋典。恆言云。宣聖之學。東方之道。乾毒之教。鼎足不二相悖。

蛻巖既に伊洛(一)の學を爲し、又此邦の神道を信じ、又博く釋典(二)を讀む。恆に言つて云く、宣聖(三)の學、東方の道、乾毒の教は、鼎足して相悖らずと。

(一) 程子の學 (二) 佛書 (三) 儒學神道佛教は、鼎の足の如く三方對立して互に相もとらず

少時專談ㇾ武

少時專ら武を談じ兵を說き、其の古の勇將戰士を評するや、論議慷慨、烈丈夫

下谷一。以教二授諸生一。而及二其赴レ京也。使二雄琴主事一。亡レ幾執齋沒二于京一。雄琴亦之二大洲一。於レ是侯乃移二明倫堂于大洲一。執齋又嘗屬二長崎鎭臺一。得二王文成公畫像二幅於彼邦一。一則藏二諸明倫堂一。一則藏二諸近江藤樹書院一。今尙各存云。

梁田邦美。本名邦彥。字景鸞。小字才右衞門。號二蛻巖一。武藏人。仕二赤石侯一。

蛻巖生而穎悟。幼學二人見鶴山一。漸長才識高遠。尤工レ詩。才既絕倫。而鑽研至レ老不レ止。年二十六。介二鶴山一見二

梁田邦美

梁田邦美、本の名は邦彥、字は景鸞、小字は才右衞門、蛻巖と號す。武藏の人、赤石侯に仕ふ。

蛻巖生れながらにして穎悟なり。幼にして人見鶴山に學ぶ。漸く長じて才識高遠、尤も詩を工にす。才既に絕倫にして、鑽研老に至つて止まず。年二十六のとき、鶴山を介して、白石に見ゆ。白石妄に人を容れず。獨り蛻巖の才を異とし、之と交る肫肫として中底を見す。江邨北海曰く、蛻巖の集を讀むに、譬へば猶ほ崑崙の邱に上るに、步步是れ玉、栴檀の林に入るに、枝枝是れ香な

執齋門人。有二川田雄琴者一。名資深、字琴卿。初學二梁蛻巖。蛻巖謂曰。余以二一日之長一。文藝則爲二爾師一。至下明二道義一窮中心術上。爾當下就二三輪執齋一而學上。於レ是卽介二蛻巖一。執二贄于執齋一。自レ此奉二餘姚之說一。精思力行。一推二知行合一之旨一。終因二執齋薦一。起仕二大洲侯一。執齋嘗刱二明倫堂于江戸

執齋の門人に、川田雄琴（名は資深、字は琴卿）といふ者有り。初め梁蛻巖(一)に學ぶ。蛻巖謂つて曰く、余一日の長なるを以て、文藝は則ち爾の師たり。道義を明かにし心術(二)を窮むるに至つては、爾當に三輪執齋に就いて學ぶべしと。是に於て卽ち蛻巖を介して、贄(三)を執齋に執る。此より餘姚(四)の說を奉じ、精思力行、一に知行合一(五)の旨を推し、終に執齋の薦に因つて、起て大洲侯に仕ふ。執齋嘗て明倫堂を江戸下谷に刱め、以て諸生を教授す。而して其の京に赴くに及ぶや、雄琴をして主事たらしむ。幾も亡く執齋京に沒す。雄琴亦大洲に之く。是に於て侯乃ち明倫堂を大洲に移す。執齋又嘗て長崎の鎭臺(六)に屬して、王文成公(七)の畫像二幅を彼邦に得、一は則ち諸を明倫堂に藏め、一は則ち諸を近江の藤樹書院に藏む。今尚は各〻存すと云ふ。

(一) 梁田蛻巖　(二) 心のもちかたを研究す　(三) 東脩を納れて入門す　(四) 陽明學　(五) 知は卽ち行にして、行なき知はなしといふ說　(六) 奉行　(七) 王陽明の諡

子。曰孝。曰友。曰睦。曰婣。曰任。曰恤。而一無讀書種子。

執齋學倭歌于内大臣中院。通其祕。余得其集。載六百餘首。蓋儒而善倭歌。未有如伊人也。嘗建壽碣于平安建仁寺中兩足院先塋側。作倭歌二首。勒之碣陰。（歌曰。恒刺賀聶嚧。葛調斯穀納密屋。屋吉貲吉訥。失兒失篤續密兒。斯及納膚恒木篤。其二。貿及栗屋孤。恒偲納過栗葛屋穀。穀篤密郁。葛剌穀乙慈孤納。貲貿篤掠兒篤木。）後五年。寬保甲子正月廿五日。卒于平安。享年七十六。

一も讀書種子無し。(一)

(一) 學問を事とするものなし

執齋倭歌を内大臣中院に學び、其祕に通ず。余其集を得。六百餘首を載せたり。蓋し儒にして倭歌を善くする、未だ伊の人の如きは有らず。嘗て壽碣(一)を平安建仁寺中の兩足院なる先塋(二)の側に建て、倭歌二首を作り、之を碣陰に勒す。（歌に曰く、たらちねにかへす此身を奥津城(三)の、しるしとぞ見る杉のふたもと。其二。契りおく靈のありかをこゝと見よ、軀(四)は何處の土となるとも。）後五年、寛保甲子(五)正月廿五日、平安に卒す。享年七十六。

(一) 生前に建つる碑 (二) 父の墓 (三) 墓 (四) 肉體、靈魂に對していふ (五) 四年、改元して延享元年

使聽者心醉。嘗抵近江小川村。集士民講學。四坐皆感泣服之。翕然相謂爲藤樹先生再生。

翕然として相謂つて藤樹先生の再生となす。

㊀世上の事がらにそらんじ達す　㊁のびやかにして味あり　㊂心を奪はる　㊃一様に向ふ貌

三宅尚齋默識錄曰。三輪希賢。往年自悔親死時幼弱不知不服喪。三十餘年後。先忌日百日計爲服喪。余當時爲說其不可。渠終不用。儀禮喪服傳。嫁女小祥後被出歸于家。服既除。故不與兄弟更著三年服。蓋可以見事之既過者。不復必追矣。

三宅尚齋の默識錄に曰く、三輪希賢、往年自ら親の死せし時幼弱不知にして喪に服せざりしを悔い、三十餘年の後、忌日に先だつ百日計服喪を爲す。余當時爲に其不可を說く。渠終に用ひず。儀禮喪服傳にいふ、嫁女小祥㊀後出されて家に歸れば、服既に除く。故に兄弟と更に三年の服に著かずと。蓋し以て見る可し。事の既に過ぐる者は、復必ずしも追はずと。

㊀人の死後一年になす祭、一周忌

執齋有六男

執齋に六男子あり。曰く孝、曰く友、曰く睦、曰く婣、曰く任、曰く恤。而して

望無ㇾ窮。紅添梅花雨。白知柳絮風。陽炎盈二草野一。落日入二山中一。痩馬追二春色一。黄昏歸路空。三疇吟云。辭ㇾ祿偶成詩一章。偸ㇾ閑取ㇾ適閲二風光一。淵明徑裏孤松老。茂叔窓前萬艸長。非ㇾ市非ㇾ山人寂莫。欲ㇾ晴欲ㇾ雨客彷徨。移ㇾ家自愛三疇內。躑躅含ㇾ紅向二夕陽一。題二水仙一云。夜寂藥珠宮殿內。黄冠綠袖獨蕭然。金盤高棒承二朝露一。自是地行花裏仙。

風光を閲す、淵明徑裏（八）孤松老い、茂叔（九）窓前萬艸長ず、市に非らず山に非らず人寂莫、晴れんと欲し雨らんと欲し客彷徨、家を移して自ら愛す三疇（一〇）の內、躑躅（一一）紅を含んで夕陽に向ふと。水仙に題して云ふ、夜寂たり藥珠（一二）宮殿の內、黄冠綠袖獨り蕭然、金盤高く捧げて朝露を承く、自ら是れ地行花裏（一三）の仙と。

㈠ 飾りをつとめず ㈡ 故鄕 ㈢ 柳の花 ㈣ 夕日 ㈤ 春景色 ㈥ 夕暮、たそがれ ㈦ ひまをこしらへ氣まゝにふるまひ景色を見て樂しむ ㈧ 陶淵明の歸去來の辭に「三徑荒に就き松菊なほ存す」の句あり、即ち隱宅の近傍に老松あるを吟ず ㈨ 周茂叔が、雜草も自家生々の意と一般なりとて、窓前の草を刈らざりし故事より、此は萬草の長ずるを述ぶ ㈩ 三畝の田 （一一） つゝじ （一二） 花の蘂を宮殿に譬へ更に花瓣を黄冠に葉を綠袖に譬ふ （一三） 仙人は空を行くものなれば人を祝して地行仙といふ、此處は水仙を頌していふ

執齋尤諳二達事體一。其言優游有二餘味一。能

執齋尤も事體（一）に諳達し、其言優游（二）として餘味有り。能く聽者をして心醉（三）せしむ。嘗て近江の小川村に抵り、士民を集めて學を講ず。四坐皆感泣して之に服し、

用之常上矣。庶丁幾乎其有丙悟二舊習之非一。而歸乙吾道之正甲焉耳。講レ畢。惠レ我以二筆墨及詩一絶一。情意甚厚。予謂子思子之作二中庸一也。正憂三異端之害二道學一是已。則凡為二吾學一者。固雖レ非レ所レ宜下為二浮屠一講說上。然或知二其非一而歸二於儒一焉。不二亦美事一乎。是予所三以應二其請一也。而師終不レ能レ免二出陷溺之窟一。則所レ惠筆墨受レ之尤無レ說矣。以レ故直。卻レ之。而述レ所レ懷焉。勿レ呀。

に陷溺(六)の窟を免出する能はず。則ち惠む所の筆墨之を受くること尤も說無(七)し。故を以て直に之を卻けて、懷ふ所を述ぶ。呀(八)するなかれと。

(一) 佛陀の音譯、轉じて此處は僧侶を指す (二) 志篤く氣強し (三) 解剖分析、細かに說明す (四) 宋儒性命理氣の理に反す (五) 邪道 (六) 落ちこんだ穴から脱れ出られぬ (七) 理由なし (八) 大口を開く、笑ふ意

執齋詩文固非レ所レ長。然其文達意不レ事二彫繪一。詩則集中亦僅僅耳。世多未レ見レ之。因今舉二三首一。懷鄉云。故園萬里東。茫茫

執齋、詩文は固より長とする所に非ず。然れども其文達意にして彫繪(一)を事とせず。詩は則ち集中亦僅僅のみ。世多く未だ之を見ず。因て今三首を舉ぐ。懷鄉に云ふ、故園(二)萬里の東、茫茫として望み窮無し、紅は添ふ梅花の雨、白は知る柳絮(三)の風、陽炎草野に盈ち、落日(四)山中に入る、瘦馬(五)春色を追ひ、黃昏(六)歸路空しと。三嘯吟に云ふ、祿を辭して偶〻成る詩一章、閑(七)を偸み適を取り

不レ得レ聞レ道。姚江之學。其所二陶鑄一果不レ誣矣。方今江左儒人。以二詞藻一名。如二南郭金華諸才子一姑置レ是。振鐸四方。大倡二聖學一。舍二斯人一其誰也。昔文中子講二道河汾一。王魏房杜之冑。逆レ材成レ德。安知下佗日東都賢士大夫。明レ體適レ用。與二寬量公一相弟昆者不上レ出二輪門一乎。吾儕當三拭レ目而俟一云云。

嘗爲二一浮屠一講二中庸一。而以三彼終不二改レ釋歸レ儒。乃寄レ書却二其所レ贈者一。此可三以觀二其篤修且豪一矣。其文曰。釋徒鞭禪師。請三予講二中庸一。予知二其有レ意三於嚮二正道一。而爲剖二析之一。務斥下佛氏之悖二性命之理一。而棄中日

嘗て一浮屠(一)の爲に中庸を講ず。而も彼終に釋を改め儒に歸せざるを以て、乃ち書を寄せて其の贈る所の者を却く。此れ以て其の篤修(二)且つ豪なるを觀る可し。其文に曰く、釋徒鞭禪師、予に中庸を講ずるを請ふ。予其の正道に嚮ふに意有るを知りて、爲に之を剖析(三)し、務めて佛氏の性命(四)の理に悖つて、日用の常を棄つるを斥く。其の舊習の非を悟つて、吾が道の正に歸する有るを庶幾ふのみ。講畢つて、我に惠むに筆墨及び時一絕を以てす。情意甚だ厚し。予謂ふ子思子の中庸を作るや、正に異端(五)の道學を害せんことを憂ふる是れのみ。則ち凡そ吾が學を爲むる者、固より宜しく浮屠の爲に講說すべき所に非ずと雖も、然れども或は其非を知つて儒に歸する、亦美事ならずや。是れ予の其請に應ずる所以なり。師終

故去。於ㇾ是歸ㇾ京、尋之二大坂一。又來二江戸一。數年之間居止不ㇾ恆。梁蜺巖復二井甃菴一書曰。示及告二寛量小濱公一文一首。讀玩再三。足三以觀二德業之實一矣。大抵紈袴子弟。飽二膏粱一耽二絲肉一。未二嘗學問一。及二其馭ㇾ吏臨一ㇾ民。昔不ㇾ知ㇾ務。甚者毒ㇾ人蠹ㇾ國。如ㇾ公可ㇾ不ㇾ謂二火中蓮一乎。雖ㇾ然微二輪氏一

ず。甚だしきは人を毒し國を蠹す。(一一)公の如き火中の蓮と謂はざる可けんや。(一二)然りと雖も輪氏微りせば(一三)道を聞くことを得ず。姚江の學、(一四)其の陶鑄する所(一五)果して誣ひず。方今江左の儒人、(一六)詞藻を以て名ある、南郭金華諸才子(一七)の如きは姑く是を置き、振鐸四方、(一八)大に聖學を倡ふるもの、斯の人を舍いて其れ誰ぞや。昔文中子道を河汾に講じ、(一九)王・魏・房・杜の曹、(二〇)材を達し德を成す。安ぞ佗日東都の賢士大夫にして、體を明かにし用に適し、寛量公と相弟昆(二一)する者の、輪門に(二二)出でざるを知らんや。吾儕當に目を拭つて俟つべし云云と。

(一) 餘姚は王陽明講學の地、致良知は其學の根本の一なり、故に陽明學を指す (二) 辭職 (三) 居ㇾ所定まらず (四) 梁田蛻巖 (五) 中井甃菴 (六) 御示しになれる (七) しろぎぬのはかま、貴族の子弟の稱 (八) 肥肉美穀 (九) 音樂、絲不ㇾ如ㇾ竹、竹不ㇾ如ㇾ肉の語に取る (一〇) 眼がくらむ、ぼんやりして (一一) 人を傷け國をやぶる (一二) 小濱公 (一三) 執齋 (一四) 陽明學、姚江は陽明の居たる地名 (一五) 土をうねて陶器を作り、金を鎔て金器を造る如く人物を作り上ぐ (一六) 關東 (一七) 服部南郭、井上金華 (一八) 鐸を振ふ意、教を廣むるなり (一九) 河は黃河、汾は汾水、共に河の名 (二〇) 王昌齡、魏徵、房玄齡、杜如晦 (二一) 弟昆に弟兄、相匹敵する意 (二二) 執齋の門

他姓非古。即復本姓三輪。以祭其祖。於是深德直方。聞直方之病革也。疾往訪之。命既絕而不及。乃賦倭歌八首哭之。陳謝其得復三輪云。鑯斯列詞郁。密鑯訥失皃失訥。斯及失郁屋。失怛脣木吉密渴。㞐失謁捺剌詞鴉。又以使直方終不歸王氏學爲恨云。鼇栗篤木篤。穀穀祿䁐骨㞐失。盼咄斯石屋。乙鑯垤鑯葛列失。捺䟐栗葛捺失木。

後有悟於餘姚致良知之學。講說士大夫間。嘗因直方薦宦旣橋侯。遂致仕而去。以下初以朱學進。今不用其說。與侯所求異上也。或云侯信僧祐天。

と、心にこめし、一すぢを、言はで別れし、名殘悲しも。

㊀神主　㊁三輪のしるしは杉なり。過ぎしにかけていふ　㊂王陽明の學

後餘姚致良知の學に悟るありて、士大夫の間に講說す。嘗て直方の薦に因て旣橋侯に宦せしが、遂に仕を致して去る。初め朱學を以て進み、今其說を用ひず、侯の求むる所と異なるを以てなり。或は云ふ、侯、僧祐天を信ず、故に去ると。是に於て京に歸り、尋で大坂に之き、又江戸に來る。數年の間居止恆にせず。梁蛻巖が井蟄菴に復する書に曰く、示及の寛量小濱公に告ぐる文一首、讀玩再三、以て德業の實を觀るに足る。大抵紈袴の子弟、膏粱に飽き絲肉に耽り、未だ嘗て學問せず。其の吏を馭し民に臨むに及び、瞢として務を知ら

三輪希賢。字善藏。號二執齋一。又號二躬耕廬一。平安人。

執齋之先。舊係二大和三輪神社司祝一。父曰二澤村自三一。業レ醫。住二京師一。執齋六歳失レ怙。賈人大村某者。以下同出レ自二司祝一。與二自三一相親善上故。乃育二執齋一。比二漸長一。出冒二眞野氏一。年十九。及二佐藤直方之門一。始曉下承二

三輪希賢、字は善藏、執齋と號す。又躬耕廬と號す。平安の人。

執齋の先は、舊大和三輪神社の司祝(一)に係る。父を澤村自三といふ。醫を業とし、京師に住す。執齋六歳にして怙を失ふ。賈人大村某なる者、同じく司祝より出で、自三と相親善せるを以ての故に、乃ち執齋を育す。漸く長ずる比、出でて眞野氏を冒す。年十九にして佐藤直方の門に及び、始めて他姓を承くるは古に非ざるを曉り、卽ち本姓三輪に復し、以て其祖を祭る。是に於て深く直方を德とす。直方の病革るを聞くや、疾に往いて之を訪ふ。命既に絕えて及ばず。乃ち倭歌八首を賦して之を哭す。其の三輪に復するを得たるを陳謝して云ふ、忘れずよ、(二)三輪のしるしの、過ぎし世を、慕ふも君が、敎ならずや。又直方をして終に(三)王氏の學に歸せざらしむるを以て恨と爲し云ふ、さりとも

其子顯允。拜レ予爲レ師。留二門下一者三月。行將二西歸一。亦偉丈夫子矣。必不レ墜二家聲一者。余皆作レ序送レ之。芳洲更有二丈夫子二人一。皆幼善レ詩。渠不二啻偉丈夫一矣。亦可レ謂二福人一也。又答二屈景山一書曰。洛有二伊原藏一。海西有二雨伯陽一。關以東則有二室師禮一。

(一)みちすぢをちがへる　(二)學に志す方針に差別あり　(三)あきたらざるさま　(四)江村若水、名は宗流、字和島侯の文學　(五)家の評判をわるくせず　(六)男兒　(七)堀正超、安藝侯の儒臣　(八)京都に伊藤東涯あり　(九)室鳩巣

嘗使下子顯允師二徂徠一居中其塾上。未レ幾使二出レ塾而歸一曰。徂徠實一代豪傑。不レ可下以二常儒一視上レ之也。雖レ然其敎レ人。不レ先二德行一。是以家塾失レ序。非下可三以託二少年一者上也。

嘗て子顯允をして徂徠を師として其塾に居らしむ。未だ幾ならず塾を出で歸らしめて曰く、徂徠は實に一代の豪傑、常儒を以て之を視る可からず。然りと雖も其人を教ふるや、德行を先にせず。是を以て(一)家塾序を失ふ。以て少年を託すべき者に非ずと。

(一)徂徠の塾は秩序無し

三輪希賢

當世。而記鍾秀集曰。予於諸友其所敬畏。莫如伯陽氏。

（一）木下順庵の門下　（二）祇園南海

芳洲學術文章。與徂徠殊其途軌。而交朋意厚。毎書詩相通。橘窓茶話曰。物茂卿余故人也。博覽文章域內無比。第於大綱上有差。心實慊焉。徂徠亦屢稱芳洲。與江若水書曰。雨芳洲果來。劇談三日。偉丈夫矣。

芳洲、學術文章、徂徠と其途軌（一）を殊にす。而も交朋意厚く、毎に書詩相通ず。橘窓茶話に曰く、物茂卿は余が故人なり。博覽文章域內比無し。第大綱（二）上に於て差あり。心實に慊焉（三）たりと。徂徠亦屢々芳洲を稱す。江若水（四）に與ふる書に曰く、雨芳洲果して來る。劇談三日。偉丈夫なり。其子顯允、予を拜して師と爲し、門下に留ること三月、行々將に西に歸らんとす。亦偉丈夫の子なり。必ず家聲（五）を墜さざる者。余皆序を作つて之を送る。芳洲更に丈夫子（六）二人あり。皆幼にして詩を善くす。渠啻に偉丈夫たるのみにあらず、亦福人と謂ふ可しと。又屈景山（七）に答ふる書に曰く、洛に伊原藏（八）あり。海西に雨伯陽あり。關以東には則ち室師禮（九）ありと。

直書二今之官職一。而百年前芳洲已著レ鞭焉。橘窻茶話。自二署對馬州文學原任用人雨森東一。可レ見。

芳洲識二白石一者三十年。而交分不レ協。常謂二白石一爲二其心術不一レ可レ測。嘗面二折一事一。白石曰。以レ如二子之言一子疑レ余。所レ謂白頭尙新也。又其橘窻茶話。自二惺窩羅山一。至下其師順菴及社友凡名二一時一者上。盡擧レ之以品二藻其才行一。而獨不レ及二白石一。

芳洲、白石を識ること三十年。而も交分協はず。常に白石を謂つて其心術測るべからずと爲す。嘗て一事を面折す。白石曰く、子の言の如きを以て、子余を疑ふ、所謂白頭尙ほ新なりと。又其橘窻茶話、惺窩・羅山より、其師順菴及び社友凡そ一時に名ある者に至るまで、盡く之を擧げて以て其才行を品藻すれども、而も獨り白石に及ばず。

㊀交分あはず　㊁面前に非難す　㊂白髮の老人となるまで交るも意氣合はざれば昨今交り始めたる人の如くなり　㊃批評

木門俊逸不レ乏二其人一。祇南海才氣最蓋二

木門俊逸其人に乏しからず。祇南海才氣最も當世を蓋ふ。而も鍾秀集に記して曰く、予諸友に於て其敬畏する所、伯陽氏に如くは莫しと。

言不ㇾ足ㇾ道。蓋東人而華ニ其腹一者。固一家言耳。雨伯陽嘗語ㇾ予曰。玉露凋傷楓樹林。美則美矣。不ㇾ如下我猿大夫紅葉鹿鳴。使ニ人易ヒ感之爲モ愈也。伯陽善ニ華音一。綜博有ニ藻材一。其品不ㇾ出ニ茂卿下一。而其言也如ㇾ此。可ㇾ謂ニ知言者一哉。

大夫の紅葉鹿鳴が、人をして感じ易からしむるの愈れりと爲すには如かずと。伯陽華音に善し。(七)綜博にして藻材あり。(八)其品、(九)茂卿の下に出でず。而も其言や此の如し。知言者と謂ふ可きかな。(一〇)

(一) 梁田蛻巖 (二) 外國語の聲音の解し難きを喞りていふ、此處は無意味にして取るに足らざるものとの意 (三) 徂徠は日本人にして魂は支那に化す (四) 雨森芳洲 (五) 美しき露にあひて楓の葉しぼむといふ詩句の趣 (六) 猿丸大夫の奥山に紅葉ふみわけ鳴く鹿の聲きく時ぞ秋はかなしきといふ歌 (七) 支那語 (八) 學問廣くして文才あり (九) 人物 (一〇) 道理ある言を吐く人

世之儒者以ニ今之職名一爲ニ俚俗一。及ニ文記ヒ之。則換ニ易名號一。濫稱亂ㇾ實。非ㇾ所ニ以垂ニ後世一也。至ニ於近時有識之士一。

世の儒者今の職名を以て俚俗と爲す。文之を記すに及び、則ち名號を換易す。濫稱(一)實を亂る。後世に垂るゝ所以に非ず。近時有識の士に至つて、直に今の官職を書すること、百年前芳洲已に鞭を著く。橘窻茶話、對馬州文學原任(二)人雨森東と自署するに、見る可し。

(一) でたらめの名前 (二) 前用人役をつとむ

人嘗戲謂曰。君善操二諸邦音一。而殊熟二日本一。年八十一。始將レ學二倭歌一。而意謂詩則有レ時作レ之。雖レ無二可レ稱者一。得レ不レ謬二平仄一。至二國風一。一不レ解二其法一。先莫レ如レ熟二讀古歌一。自レ今讀二古今集一者一千遍。而後自賦者一萬首。其或有レ所二少通一焉。乃經二二年一千遍畢。又三年而萬首就。

年八十一、始めて將に倭歌を學ばんとす。意謂へらく詩は則ち時有りて之を作る。稱す可き者無しと雖も、平仄を謬らざるを得。國風(一)に至つては、一も其法を解せず。先づ古歌を熟讀するに如くは莫し。今より古今集(二)を讀むこと一千遍、而して後自ら賦すること一萬首なれば、其れ或は少しく通ずる所有らんと。乃ち二年を經て千遍畢る。又三年にして萬首就る。

(一)和歌　(二)醍醐天皇の勅によりて紀貫之等撰す

梁蛻巖杜三楊諧文集序曰。物茂卿譏二和歌一云。三十一字侏離之

(一)梁蛻巖が杜三楊諧文集の序に曰く、物茂卿和歌を譏つて云ふ、三十一字は侏離(二)の言道ふに足らずと。蓋し東人(三)にして其腹を華にする者、固より一家言のみ。雨(四)伯陽嘗て予に語つて曰く、(五)玉露凋傷す楓樹の林、美は則ち美なれど、我が(六)猿

雨森東。字伯陽。小字東五郎。號二芳洲一。平安人。或曰。伊勢人。仕二對馬侯一。

雨森東

雨森東、字は伯陽、小字は東五郎、芳洲と號す。平安の人。或は曰く、伊勢の人と。對馬侯に仕ふ。

芳洲年十七八。來二江戸一。從二學木順菴一。才藻卓絶。順菴稱爲二後進領袖一。遂因二其薦一。筮二仕對馬一。掌二文教一。恒接二對韓人一。名聲馳二海內外一。

芳洲年十七八、江戸に來りて木順菴(一)に從ひ學ぶ。才藻(二)卓絶、順菴稱して後進の領袖(三)と爲す。遂に其薦に因つて對馬に筮仕(四)す。文教を掌り、恒に韓人に接對し、名聲海の內外に馳す。

(一) 木下順庵　(二) 文才すぐる　(三) 頭首、主腦　(四) トして仕ふる、新に仕官するをいふ

芳洲通二象胥之言一。其每與二韓人一相說話。不レ假二譯者一。韓

芳洲象胥(一)の言に通ず。其の毎に韓人と相說話するに、譯者を假らず。韓人嘗て戲に謂つて曰く、君善く諸邦の音を操る。殊に日本に熟すと。

(一) 通譯、通辯

杭云。思慮之害レ人。甚ニ於酒色一。誠矣。竹山非徴曰。余嘗聞レ之。徂徠之疾也。日日宣ニ言侍者一曰。宇宙後人之死。必有ニ靈怪一。今當レ有ニ紫雲覆ヒ舍。若等出視レ之。及ニ病革一輾轉呼號。紫雲不レ絶レ口。家人及高足弟子瞿深恥レ之。絶不レ通ニ外人一。故一時或繆傳以爲レ非ニ良死一云。此竹山傳ニ聞妄語一也。徂徠起ニ于關東一。而風ニ靡海内一。西人動造ニ爲搆言一。以非ニ駁之一。要皆出ニ於媢嫉之心一。

(一) むくみ　(二) たちゐふるまひ又客との應對　(三) 健康を害することはなさず　(四) 何もおもはずして靜養す　(五) 中井竹山　(六) 紫の雲が家をおほふ　(七) ふしまろび、よびさけぶ　(八) あやまり傳ふ　(九) くだらぬ說を傳へきく　(一〇) 西國の人　(一一) 有害言の、惡口　(一二) 忌みねたむ

芝三田長松寺。徂徠墓在焉。猗蘭侯撰ニ其碑文一。葛烏石書レ之。工始竣。遠近爭傳。來摸ニ搨之一者。日甚衆矣。近時東藍田。併ニ春臺撰誌一。更刊木爲ニ一册子一以鬻レ之。長松寺號ニ壽命山一。自レ葬ニ徂徠一後。一號ニ徂徠山一。

芝三田長松寺に、徂徠の墓在り。猗蘭侯其碑文を撰し、葛烏石(一)之を書す。工始めて竣るや、遠近爭ひ傳へ、來つて之を摸搨(二)する者、日に甚だ衆し。近時東藍田(三)、春臺の撰する誌を併せ、更に刊木して一册子と爲し以て之を鬻ぐ。長松寺は壽命山と號す。徂徠を葬りしより後、一に徂徠山と號す。

(一) 葛西因是、名は質　(二) 石ずりにする　(三) 伊東藍田、江戸の儒者、名は龜年

徂徠病浮腫而終。紫芝園漫筆曰。徂徠先生甚重生。自飲食居處。以至出入動止賓客應接之事。苟可以傷生者。斷弗爲也。然其所以病死者。乃以思慮過度也。蓋先生有志于功名。自少以著述爲事。年過六十。舊疾數發。而猶不能清心靜養。遂致篤疾而死。謝在

徂徠浮腫(一)を病んで終る。紫芝園漫筆に曰く、徂徠先生甚だ生を重んず。飲食居處より、以て出入動止賓客應接(二)の事に至るまで、苟も以て生を傷る(三)可きものは、斷じて爲さず。然れども其の病死せる所以は、乃ち思慮度に過ぎしを以てなり。蓋し先生功名(四)に志有り。少より著述を以て事と爲す。年六十を過ぎ、舊疾數〻發して、猶ほ清心靜養すること能はず。遂に篤疾を致して死す。謝在杭云ふ、思慮の人を害する、酒色より甚だしと。誠なりと。竹山(五)の非徴に曰く、余嘗て之を聞く、徂徠の疾むや、日日侍者に宣言して曰く、宇宙俊人の死には、必ず靈怪有り。今當に紫雲(六)の舍を覆ふ有るべし。若等出でて之を觀よと。病革るに及び輾轉(七)呼號して、紫雲口を絶たず。家人及び高足の弟子輩深く之を恥ぢ、絶えて外人を通ぜず。故に一時或は繆傳(八)以て良死に非ずと爲すと云ふと。此れ竹山妄語(九)を傳聞するなり。徂徠關東に起つて海内を風靡す。西人(一〇)動れば爲に莠言(一一)を造り、以て之を非駁す。要は皆娼妬(一二)の心に出づ。

詰物。亦辨二其説一道甚誤。此數人謂二徂徠之益友一可也。佗作書。巧詆以求レ勝者。不レ可二勝數一。要徒滋二口業一。不レ足レ病二徂徠一。

徂徠病中喟然歎曰。吾下世後。遺文必將レ行。然海内無二實知レ我。知レ我者惟有二東涯一耳。

徂徠、病中喟然(一)として歎じて曰く、吾が下世(二)の後、遺文必ず將に行はれんとす。然れども海内實に我を知る無し。我を知る者惟東涯(三)あるのみと。

(一) 感歎してためいきするさま　(二) 死後　(三) 伊藤東涯

徂徠歿爲二享保戊申正月十九日一。是日天大雪。臨レ終謂レ人曰。海内第一流人物茂卿將レ隕レ命。天爲使二此世界銀一。

徂徠の歿せしは享保戊申(一)正月十九日と爲す。是日天大に雪る。終に臨んで人に謂つて曰く、海内第一流の人物茂卿將に命を隕さんとす。天爲に此世界をして銀ならしむと。

(一) 十三年

傍皆有二譯音一。此只可レ行二於一國一。非二萬國通行之法一也。惟物茂卿文集無二譯音一。卽此一事。可レ知三茂卿之爲二豪傑士一也。

㊀ 字の横によみ假名をつけず

近世鴻匠無レ如二徂徠一。後之學者激昂奮勵。竟不レ能レ及也。然其瑜瑕得失。則猶未レ免焉。是以宇士新論語考。石川麟洲辨道解蔽。五井蘭洲非物。中井竹山非徵。服蘇門燃犀錄等。殆中二徂徠膏肓一。吾祖

近世の鴻匠(一)徂徠に如くは無し。後の學者激昂奮勵するも、竟に及ぶこと能はず。然れども其瑜瑕得失(二)、則ち猶ほ未だ免れず。是を以て宇士新論語考(三)、石川麟洲の辨道解蔽、五井蘭洲の非物、中井竹山の非徵、服蘇門の燃犀錄等、殆ど徂徠の膏肓(四)に中る。吾が祖(五)の詰物、亦其道を說くこと甚だ誤れるを辨ず。此數人は徂徠の益友と謂ふも可なり。佗の作書たる、巧詆(六)以て勝を求むる者、勝げて數ふ可からず。要は徒らに口業(七)を滋くするのみ。徂徠を病へしむるに足らず。

㊀ 大學者 ㊁ 缺點及び一得一失 ㊂ 宇野士新 ㊃ 膏は胸の下部、肓は其上部、共に病に冒さるれば治し難き部分なり、轉じて急所、弱點、改め難き缺點の意に用ふ ㊄ 本書の作者原善の祖父 ㊅ うまく非難して勝たんと欲す ㊆ むだ口をたゝくのみ

徂徠每自言。熊澤之知。伊藤之行。加レ之以二我之學一。則東海始出二一聖人一。

徂徠每に自ら言ふ、熊澤の知、伊藤の行、之に加ふるに我の學を以てすれば、則ち東海始めて一聖人を出すと。

或問二徂徠一曰。先生講學外何好。曰。余無二它嗜玩一。惟嚼二炒豆一而詆二毀宇宙間人物一而已。

或ひと徂徠に問うて曰く、先生講學の外何をか好むと。曰く、余它の嗜玩無し。惟炒豆を嚼んで宇宙間の人物を詆毀するのみと。

● そしる

徂徠所レ著之書。字傍不レ施二訓譯一。僧大典萍遇錄載。朝鮮成龍淵曰。貴邦書册。行

徂徠の著す所の書、字傍に訓譯を施さず。僧大典が萍遇錄に載す、朝鮮の成龍淵曰く、貴邦の書册、行傍皆譯音有り。此は只一國に行ふ可し、萬國通行の法に非ず。惟物茂卿文集は譯音なし。即ち此一事、茂卿の豪傑の士たるを知る可きなりと。

曰。凡仁齋之言。一一無二不レ妄者一。然獨其指二佛教一爲レ空。可レ謂レ不レ妄矣。鳳潭憮然曰。無レ緣衆生難レ渡。即揮レ袂而出。此說出二原田溫夫東岳筆疇一。而澀井子章讀書會意所レ載異二於是一。不レ知其相見異レ日而然歟。乃又錄以資二雅噱一。鳳潭造二徂徠一。諸弟子以爲有二魂褫魄悸者一。立二屛後一窺焉。徂徠設二茶酒一相歡。終日無レ忤。將レ出。言曰。今人不レ知二名物一。致三文字有二紕繆一。是不レ用二意目前一也。徂徠然レ之。廣斥二當時文字一。且笑且語。其竟同立二南軒之下一。擧レ手指二一樹一。徂徠未レ答。鳳潭微笑去。徂徠顧二屛後人一曰。彼胡魅レ人。

て雅噱に資す。鳳潭、徂徠に造る。諸弟子以爲へらく魂褫はれ魄悸るゝことあらんと、(六)屛後に立ちて窺ふ。徂徠茶酒を設け相歡び、終日忤ふ無し。將に出でんとす。言ひて曰く、今人名物(七)を知らず。文字紕繆(八)あるを致す。是れ意を目前に用ひざればなりと。徂徠之を然りとし、廣く當時の文字を斥し、且つ笑ひ且つ語る。其竟に同じく南軒の下に立ち、手を擧げて一樹を指す。徂徠未だ答へず。鳳潭微笑して去る。徂徠屛後の人を顧みて曰く、彼の胡、(九)人を魅すと。

(一) 座に通す (二) 僧侶の自稱 (三) てたらめ (四) 膝を打つ (五) なげきいたむ (六) お笑ひ草にそなへる (七) 物の名稱 (八) あやまり (九) 彼の爺め人をばかす

號。願先生命焉。徂徠笑曰。書買出入吾門者五人。而爾所鬻價最高。猶嵩山於五嶽。宜名嵩山房。

く、猶ほ嵩山(一)の五嶽に於けるがごとし。宜しく嵩山房と名づくべしと。

(一)泰山・華山・衡山・恒山・嵩山を五嶽とし、嵩山中央に位して最も高し

僧鳳潭通謁曰。有欲質者。請一見。徂徠即延接。鳳潭曰。衲嘗見伊藤仁齋。仁齋言。佛之爲道空而已。吾釋之教深遠。非空一字所得盡也。仁齋妄誕豈不甚乎。先生以爲如何。徂徠擊節

僧鳳潭(一)謁を通じて曰く、質さんと欲すること有り。請ふ一見せんと。徂徠即ち延接す。鳳潭曰く、衲(二)嘗て伊藤仁齋に見ゆ。仁齋言ふ、佛の道たる空のみと。吾が釋の教深遠にして、空の一字の得て盡す所に非ず。仁齋の妄誕(三)豈に甚だしからずや。先生以て如何と爲すと。徂徠節を擊て(四)曰く、凡そ仁齋の言、一一妄ならざる者無し。然れども獨り其の佛教を指して空と爲すは、妄ならずと謂ふ可しと。鳳潭憮然(五)として曰く、緣なき衆生は渡し難しと、即ち袂を揮つて出づ。此說原田溫夫が東岳筆疇に出づ。而るに澀井子章が讀書會意に載する所は是に異なり。知らず其相見ること日を異にして然るか。乃ち又錄して以

曰。家妹幼宦二某侯一。近賜レ暇歸居レ家。徂徠既覺レ之。明日遣レ使致二鮮魚一。以賀三才子配二佳人一。

を致し、以て才子佳人に配するを賀す。

㊀ 安藤煥圖、字は東壁、號は東野、下野の人　㊁ なれふざける　㊂ あわつる

以二滕元啓能寫一レ字。置二之塾中一使レ寫レ書。嘗與二徂徠侍婢一私。徂徠覺レ之。而不レ問焉。元啓知二其見一レ覺也。遂出亡。久之徂徠過レ市。見三元啓之行二賣印肉一。卽使二從者將來一。元啓奔二匿店後一。追索レ之。復置二塾中一。待レ之如レ故。

㊀滕元啓能く字を寫すを以て、之を塾中に置き書を寫さしむ。嘗て徂徠の侍婢と私す。徂徠之を覺るも、問はず。元啓其覺られしを知るや、遂に出亡す。久しうして徂徠市を過ぎ、元啓の印肉を行賣するを見る。卽ち從者をして將ゐ來らしむ。元啓奔つて店後に匿る。追つて之を索め、復塾中に置き、之を待つこと故の如し。

㊀ 伊藤南昌

書商小林新兵衛。請二徂徠一曰。小子無二家

書商小林新兵衛、徂徠に請うて曰く、小子家號無し。願くは先生命ぜよと。徂徠笑つて曰く、書賈吾門に出入する者五人あり。而も爾が鬻ぐ所價最も高

可レ辨レ字。則入對二齋中燈火一。故自レ且及二深夜一。手無二釋レ卷之時一。其平生惜二分陰一者。率此類也。

無し。其平生分陰(二)を惜むこと、率ね此類なり。

(一) えんぽた　(二) 僅かの時間

南郭某歳元日訪二徂徠一。徂徠方隱レ几閱二孫子一。面垢不レ洗。髮亂不レ梳。若下不レ知二新年一者上。乃亹亹談レ兵不レ置。南郭竟不レ得レ祝二新禧一。

南郭某歳元日徂徠を訪ふ。徂徠方に几に隱つて孫子を閱す。面垢洗はず、髮亂れて梳らず。新年を知らざる者の若し。乃ち亹亹(一)兵を談じて置かず。南郭竟に新禧(二)を祝するを得ず。

(一) 勤めて倦まざるさま　(二) 新年 祝をのぶることを得ず

嘗過二東壁一。時東壁方携レ妓來媟狎。會二徂徠入一。倉皇不レ知レ所レ爲。遂詭

嘗て東壁(一)に過る。時に東壁方に妓を携へ來りて媟狎(二)す。徂徠の入るに會ふ。倉皇(三)として爲す所を知らず。遂に詭つて曰く、家妹幼にして某侯に宦す。近ごろ暇を賜ひ歸つて家に居ると。徂徠既に之を覺る。明日使を遣して鮮魚

徠答曰。事出下於某年某人所レ著一小說上也。乃其書所レ載鼠類之眷屬名姓。矢レ口縷縷如レ注。忠相始服二其彊記一。

㊀博く知りあまねくきく　㊁鼠の嫁入り　㊂一族名前　㊃言葉次第につゞきてづる〳〵とたぐり出す如し　㊄物覺えよし

弟子會二講韓非子一。論議鋒出。徂徠在レ座。箝レ口不レ言。春臺不レ悅曰。說之不レ一。先生何不二折中一。將或不レ得二解紛一邪。徂徠屛レ氣曰。此書余嘗有二成說一。將下待二明日一出示上レ之。而其夜始下レ筆。全篇作二之說一。

弟子韓非子を會講す。論議鋒出す。徂徠座に在り、口を箝んで言はず。春臺悅ばずして曰く、說の一ならざる、先生何ぞ折中せざる。將或は解紛を得ざるかと。徂徠氣を屛けて曰く、此書余嘗て成說有り。將に明日を待つて出して之を示さんとすと。而して其夜始めて筆を下し、全篇之が說を作す。

㊀輪講　㊁議論鋭く出る　㊂衆論を折きて定論を下す　㊃混雜せる議論を解決す　㊄物靜かにいふ　㊅まとまりたる說

徂徠看レ書向レ暮。則出就二簷際一。簷際亦不レ

徂徠書を看て暮に向へば、則ち出でて簷際に就く。簷際亦字を辨ず可からざれば、則ち入つて齋中の燈火に對す。故に旦より深夜に及び、手、卷を釋くの時

其子百八十。局則用二棋局一。而陣列軍伍。攻撃守備。無二一不一レ備焉。可レ謂二工極一矣。嗟超二羣儒一建二大業一。又有二何餘力一而及二此等之事一也。片山兼山乃序二廣象棋譜一曰。命世之人。雖二鞅掌拮据之際一。胸中別有二悠悠閑日月一而優爲レ之。信哉。

まれりと謂ふ可し。嗟羣儒に超えて大業を建つ。又何の餘力ありて此等の事に及ぶか、片山兼山乃ち廣象棋の譜に序して曰く、(三)命世の人、(四)鞅掌拮据の際と雖も、胸中別に悠悠たる(五)閑日月ありて優かに之を爲すと。信なるかな。

(一)軍陣の微細を其内に寄す　(二)巧妙の極　(三)世に名高き人　(四)職務にたづさはり勉めはげむ　(五)あくせくせず靜かなる餘裕時間

大岡忠相越前守曰。聞徂徠博識洽聞無レ所レ不レ知。余將三試問以躓二其答一。乃招問曰。世有二鼠婚之說一。何謂也。徂

大岡忠相（越前守）曰く、聞く、徂徠、(一)博識洽聞知らざる所無しと。余將に試みに問うて以て其答を躓かしめんとすと。乃ち招問して曰く、世に鼠婚の說有り。何の謂ぞやと。徂徠答へて曰く、事某年某人の著す所の一小說に出づと、乃ち其書載する所の鼠類の(二)眷屬名姓、(三)口に列なつて縷縷注するが如し。忠相始めて其(四)彊記に服す。

上ㇾ邪。遂數刻談ニ戰法ー。不ㇾ及ニ他事ー云。松宮觀山學論曰。近日儒士之談ㇾ武。徂徠物子一人而已耳。亦唯博覽之餘力。臆斷自負焉。雖ㇾ以ニ不世豪傑之資ー。然未ㇾ遇ニ明師ー。牢執ニ法制ー不ㇾ問ニ軍略ー。與ニ孔子好ㇾ謀之言ー乖戾焉。其所ㇾ著孫子解及鈐錄。雖ニ涉獵殆盡ー。而未ㇾ見ニ事術磨練之功ー。遂以ニ七書ー爲ニ空理ー。崇ニ後世戚南塘鄭芝龍ー爲ㇾ備也。拘ニ區區小技ー。未ㇾ知ㇾ有下建ニ鎭國之規模ー。畫ニ戰勢之地形ー。所ㇾ謂帷中決ニ千里之勝ー。草廬定ニ三分之謀ー之術上也。不ニ亦惜ー乎。

事術磨練の功を見ず。遂に七書を以て空理と爲し、後世の戚南塘・鄭芝龍を崇んで備れりと爲す。區區たる小技に拘つて、未だ鎭國の規模を建て、戰勢の地形を畫き、所謂帷中に千里の勝を決し、草廬に三分の謀を定むるの術あることを知らず。亦惜しからずやと。

(一) 精しく研究す (二) 博く物事を知るついでを以て獨りぎめの說を立て自ら偉しとなす (三) 軍法のみにとらはれて實際の謀略を言はず (四) そむきもとる (五) 廣く羣書をあさる (六) ことがらを鍛錬した工夫 (七) 孫子・吳子以下の所謂武經七書 (八) 國家を鎭定する大計畫 (九) 幕舍の中に座して遠く戰線の勝を決す。張良を斥す (一〇) 破屋に居て天下を三分する謀を定む。諸葛孔明を斥す

又創ニ造一家象棋ー。以寓ニ兵機ー。名ニ廣象棋ー。

又一家の象棋を創造し、以て兵機を寓す。廣象棋と名づく。其子百八十、局は則ち棋局を用ひて、陣列軍伍、攻擊守備、一として備らざる無し。工極

詞。籠二蓋一世一。如二梁田蛻巖一心亦服二徂徠之學一博。嘗稱二山脇東洋一言曰。凡海内司命。知レ信レ古與レ不。皆靡然莫レ不レ注レ目。蓋亦方伎中之護老哉。

古文辭を唱ふ　(四)漢唐及び其れ以前の文學　(五)外國人などの言語の聞きとり難き形容、文の雅馴ならざるを嘲りていふ　(六)文章すぐる　(七)一世をおほふ　(八)星の名、壽を主るより醫家の義にいふ　(九)醫家の中にての徂徠

少時精二習兵學一。故其就二仕途一也。亦以二兵學一。不二必以一レ儒。晩復專談レ武。與二熊本藪震庵一初相見。時徂徠首謂曰。陣法行伍。此不レ可レ不レ究也。子西海人。必習二水軍一。水軍其以レ何爲二策

少時兵學を精習す。故に其仕途に就くや、亦兵學を以てし、必ずしも儒を以てせず。晩に(一)復專ら武を談ず。熊本の藪震庵と初めて相見る。時に徂徠首に謂つて曰く、陣法行伍、此れ究めざる可からず。子は西海の人、必ずや水軍に習はん。水軍は其れ何を以て策の上と爲すやと、遂に數刻戰法を談じ、他事に及ばずと云ふ。松宮觀山の學論に曰く、近日儒士の武を談ずる、徂徠物子一人のみ。亦唯博覽(二)の餘力、臆斷自負す。不世豪傑の資を以てすと雖も、然れども未だ明師に遇はず。牢く(三)法制を執つて軍略を問はず。孔子謀を好むの言と乖戻(四)す。其著す所の孫子解及び鈐錄は、涉獵(五)殆ど盡せりと雖も、未だ

興封ヒ侯。召ニ先生ー掌ニ書記ー。先生於レ是乎始釋ニ褐於侯門ー。然其祿尙微。尋柳澤公累益レ封。先生亦以ニ公之寵靈ー。累益ニ其秩ー。至ニ五百石ー。雖下以ニ命世之才ー而有も勤ニ勞于侯家ー。自レ非ニ柳澤公之知遇ー。先生之窮達未レ可レ知也。

に徂徠の門人　(五) 庶人の服を脫捨つることにて官仕するをいふ　(六) 寵愛　(七) 世に名ある才能　(八) 人物を見ぬきて好くもてなす

初服ニ朱子說ー。及ニ中年ー著ニ蘐苑隨筆ー。尙護ニ宋儒ー。後挺然立ニ一家見ー。痛駁ニ性理ー。併攻ニ仁齋ー。又倣ニ明李于鱗ー修ニ古文辭ー。先儒所レ作一切排レ之。爲レ不レ免ニ侏儒駃舌ー。其豪邁卓識雄文宏

初め朱子の說に服し、中年に及び蘐苑隨筆を著し、尙ほ宋儒を護る。後挺然(一)一家の見を立て、痛く性理(二)を駁し、併せて仁齋を攻む。又明の李于鱗(三)に倣ひ、(四)古文辭を修む。先儒の作る所は一切之を排して、侏儒駃舌(五)を免れずと爲す。其豪邁卓識、(六)雄文宏詞、(七)一世を籠蓋す。梁田蛻巖の如き心亦徂徠の學博に服す。嘗て山脇東洋を稱する言に曰く、凡そ海内の司命(八)、古を信ずるを知ると不ざると、皆靡然として目を注がざるはなし。蓋し亦(九)方伎中の蘐老なるかなと。

(一) ぬきんでて一家の見識をたつ　(二) 宋儒の生命理氣の學　(三) 明の李攀龍、字は于鱗、號は滄溟、王世貞とともに

撒一文。及送二寸秀緯一序。秀緯與レ余同姓系二大連一。故以二其字一氏之言（雙松字未レ審二何所一レ諱。或曰避二德松君一。或曰。徂徠之仕二于柳澤侯一也。侯與二酒井侯一爲レ姻。酒井侯之先。雅樂助正親。追二號雙松院一。因避二其名一。）

初卜二居于芝街一。時貧居如レ洗。舌耕殆不レ給二衣食一。增上寺前有二腐家一。憐二徂徠貧而有一レ志。日饋二腐查一。後至レ食レ祿。月贈二米三斗一以報レ之。春臺與二南郭一書曰。徂徠先生之未レ仕也。嘗教二授于芝浦一。人所レ知也。後遇二柳澤氏之勃

初め芝街(一)に卜居す。時に貧居洗ふが如く、舌耕(二)殆ど衣食を給せず。增上寺前に腐家(三)あり。徂徠が貧にして志あるを憐み、日に腐查(四)を饋る。後祿を食むに至つて、月に米三斗を贈り以て之に報ず。春臺、南郭(五)に與ふる書に曰く、徂徠先生の未だ仕へざるや、嘗て芝浦に教授すること、人の知る所なり。後柳澤氏の勃興して侯に封ぜらるゝに遇ふや、先生を召して書記を掌らしむ。先生是に於てか始めて褐(六)を侯門に釋く。然れども其祿尙ほ微なり。尋いで柳澤公累りに封を益し、先生も亦公の寵靈(七)を以て、累りに其秩を益し、五百石に至る。命世(八)の才を以て侯家に勤勞有りと雖も、柳澤公の知遇(九)に非ざるよりは、先生の窮達未だ知る可からざるなり。

(一) 芝に居を定む　(二) 講義に依て生活すること　(三) 豆腐屋　(四) 豆腐のかす　(五) 太宰春臺、服部南郭、とも

徂徠之在レ胎也。母彌レ月夢下遇二歲首一以二松枝一插中門上。寤而生二徂徠一。故名二雙松一。後有レ所レ避以レ字行。徂徠號。取二之詩魯頌徂徠之松一。一說其少時好レ雷故自號二蘇雷一。而上總有二往來里者一。因改書爲二徂徠字一。署二三河物茂卿一者。其先三河荻生人。物部守屋後也。本集有中擬二家大連

徂徠の胎に在るや、母月を彌へて(一)、歲首(二)に遇ひ松枝を以て門に插むを夢む。寤めて徂徠を生む。故に雙松と名づく。後避る所有りて字を以て行はる。徂徠の號は、之を(三)詩の魯頌徂徠の松に取る。一說に其少時雷を好むが故に自ら蘇雷と號すと。而るに上總に往來の里といふところ有り。因つて改め書して徂徠の字と爲すと。三河の物茂卿と署するは、其先(四)三河荻生の人、(五)物部守屋の後なればなり。本集に、家の大連の檄に擬する文及び(六)守秀緯を送る序に、秀緯は余と同姓にして大連に系る。故に其字を以て氏とすとの言有り。(雙松の字未だ何の諱む所なるかを詳にせず。或は曰く德松君(七)を避くと。或は曰く、徂徠の柳澤侯(八)に仕ふるや、侯、酒井侯と姻たり。酒井侯の先、雅樂助正親は、雙松院と追號す。因て其名を避くと)

(一) 產月となる　(二) 新年　(三) 詩經魯頌閟宮篇に徂徠の語あり　(四) 徂徠の祖先　(五) 敏達帝に仕へて大連たり、佛教の弘布に反對し蘇我馬子と隙あり、終に攻殺せらる　(六) 守屋秀緯　(七) 五代將軍綱吉の幼名　(八) 柳澤吉保

五値赦還東都。中間十有三年。日與田父野老偶處。倘何問有無師友。獨賴先大夫篋中藏有大學諺解一本。實先大父仲山府君手澤。予獲此研究用力之久。遂得不藉講說通其書也。又與三近書曰。始自不佞茂卿幼讀書海上。蜑戸蜒丁之錯處。雖有疑義。其孰從問決焉。迨乎得先生所爲諸標註者以讀之。廼曰。吁是惠人哉。由此而觀其居上總也。既乏書籍。又無師友。唯其警敏不羣。自幼卽有遠志。是以比其還江戸。業殆大成。終至海內仰爲此邦未曾有人。

三近に與ふる書に曰く、始め不佞茂卿(一〇)幼にして書を海上(一一)に讀みしより、蜑戸蜒丁(一二)之れ錯處(一三)す。疑義ありと雖も、其れ孰に從つて問決(一四)せん。先生の爲る所の諸標註といふを得、以て之を讀むに迨んで、廼ち曰く、吁是れ惠人かなと。此に由つて觀れば、其の上總に居るや、既に書籍に乏しく、又師友無し。唯其警敏(一五)不羣、幼より卽ち遠志有り。是を以て其の江戸に還る比、業殆ど大成し、海内仰いで此邦未曾有の人と爲すに至る。

(一) 幕府 (二) 流罪に處せらる (三) 流離零落す (四) 田舍ものと向ひ居る (五) 亡父の書函の中 (六) 先大父は亡祖父、仲山は其號、府君は亡父の尊稱なれど此處には祖父に通用す (七) 手垢のつきたる書物、卽ち生前愛讀の書物 (八) 人の講義を聞かずして廣く羣書に通ず (九) 宇都宮遯菴 (一〇) 不肖、私 (一一) 上總を斥す (一二) 蜑戸はあまの家、蜒丁は漁夫 (一三) まじりすまふ (一四) 問ひ定む (一五) 才のさときこと拔羣

物茂卿。名雙松。有レ所レ避以レ字行。荻生氏。小字惣右衛門。號二徂徠一。又號二蘐園一。江戸人。仕二柳澤侯一。
徂徠父方菴。以レ醫仕二於大府一。延寶中。坐レ事竄二上總一。時徂徠年幼。從レ父共往焉。譯文筌蹄題言曰。予十四流二落南總一。二十

巻之六

物茂卿

物茂卿、名は雙松、避くる所ありて字を以て行はる。荻生氏、小字は惣右衛門、徂徠と號す。又蘐園とも號す。江戸の人。柳澤侯に仕ふ。

徂徠の父方菴、醫を以て大府(一)に仕ふ。延寶中、事に坐して上總に竄(二)せらる。時に徂徠年幼なり。父に從て共に往く。譯文筌蹄題言に曰く、予十四にして南總に流(三)落し、二十五にして赦に値つて東都に還る。中間十有三年、日に田父野老(四)と偶處す。尚ほ何ぞ師友の有無を問はん。獨り先大夫(五)の篋中大學諺解一本を藏有するに頼る。實に先大父(六)仲山府君の手澤(七)なり。予此を獲て研究力を用ふること久し。遂に講説(八)を藉らずして遍く羣書に通ずることを得たりと。又都(九)

周軒學主二實用一。不レ鶩二虛文一。是以人不レ知二其爲レ儒。然其所レ著。有二四書小學參考各若干卷一。皆藏二于家一。周軒家至レ今數世。職祿相襲。曾孫坦。字大道。號二一齋一。別成二一家一。今以二碩儒一見レ推。蓋皆周軒積善之餘也。

周軒、學實用を主とし、虛文に鶩せず。是を以て人其の儒たるを知らず。其著す所、四書・小學參考各若干卷有り。皆家に藏す。周軒の家今に至る數世、職祿相襲ふ。曾孫坦、字は大道、一齋(一)と號す。別に一家を成す。今碩儒を以て推さる。蓋し皆周軒積善の餘なり。

(一) 佐藤一齋

惇守信義。小大之事。必與衆議之。智者不得獨嵩。愚者亦得寡過。是以吏亡姦慝。民亡盜賊。風俗淳樸。上下和輯。侯晉拜閣老。一時有輿稱。實周軒與有力云。

侯妾擧家子。賀妾者。皆以其爲母侯家之重。獨周軒入內毅然正色曰。爾自今之後。勿恃有子以驕肆。侯家禍福在茲。爾禍福亦在茲。在坐者悚然改容。

侯の妾家子(一)を擧ぐ。妾を賀する者、皆其の侯家に母たるの重を以てす。獨り周軒內に入り、毅然として色を正して曰く、爾今よりの後、子有るを恃んで以て驕肆(二)なるなかれ。侯家の禍福茲に有り。爾の禍福も亦茲に有りと。坐に在る者悚然(三)として容を改む。

(一) あととり、世子 (二) わがまゝ、おごる (三) 懼へ上つて

周軒奉濂洛之學。篤信其師說。故頗與闇齋之徒異趣。嘗原本家禮。創本邦祭儀。侯家今尙遵用之云。

周軒濂洛(一)の學を奉じ、篤く其師說を信ず。故に頗る闇齋の徒と趣を異にす。嘗て家禮(二)に原本し、本邦祭儀を創む。侯家今尙ほ之を遵用すと云ふ。

(一) 程朱の學 (二) 朱子家禮に本づき我邦の祭式を制す

世子立一年。聚二左右少年一。嬉戯無レ度。周軒屢諫不レ聽。遂乞レ辭レ職。老臣白レ之。侯瞿然曰。吾過矣。吾過矣。我昵二頑童一。遠二耆德一。此彼所三以欲二辭一也。吾將レ改レ過。卿等盍レ爲レ我言一レ之。既而侯懲レ艾脩レ德。勵精圖レ治。乃大用二周軒一。擢陞二老職一。增レ祿至二三百餘石一。是時巖邨之政。嚴立二紀綱一。

世子立つて一年、左右少年を聚め、嬉戯度無し。周軒屢〻諫むるも聽かず。遂に職を辭せんと乞ふ。老臣之を白す。侯瞿然(一)として曰く、吾れ過てり。吾れ過てり。我れ頑童を昵み、耆德(二)を遠ざく。此れ彼が辭せんと欲する所以なり。吾れ將に過を改めんとす。卿等盍ぞ我が爲に之を言はざると。既にして侯懲艾(三)德を脩め、勵精治を圖る。乃ち大に周軒を用ひ、擢でて老職に陞し、祿を增して三百餘石に至る。是時巖邨の政、嚴に紀綱(四)を立て、惇く信義を守り、小大の事、必ず衆と之を議す。智者も獨斷(五)にするを得ず、愚者も亦過を寡うするを得、是を以て吏に姦慝なく、民に盜賊なく、風俗淳樸にして、上下和輯(六)す。侯晉みて閣老に拜せられ、一時輿稱(七)あり。實に周軒與つて力ありと云ふ。

(一) びつくり　(二) 德ある老臣　(三) 悔い改む　(四) 政治の大本　(五) 獨りぎめ　(六) 上下のもの和睦す　(七) 世の評判

然而爲二世子一者。凡百當レ愼二守父侯所一レ與。而不レ可三別有二嗜好一。今世子年少。問レ安視レ膳則勿論。方且講レ學演レ武。且夕之不レ暇。而乃馳二心于無益一。罔三或遂啓二土木園池之好一乎。故事雖レ易。臣不三敢奉二レ命。世子悚然曰。卿言是也。請守レ之。

ち心を無益に馳す。(六)或は遂に土木園池の好を啓くなからんか。(七)故に事易と雖も、臣敢へて命を奉ぜずと。世子悚然として曰く、(八)卿の言是なり。請ふ之を守らんと。

(一)きびしくいさぎよし　(二)若君の守役　(三)書齋の南方　(四)萬事　(五)父母の安否を伺ひ食事を自ら視る　(六)無益の事に心づかひする　(七)家を建て庭を築く物數寄のもととなる　(八)おそるゝさま

周軒以二六輻輪一爲二標識一。世子少時夜微二行邸內一。遙望二六輻輪提燈來一。輒曰。合怕老來。合怕考來。盍二避去一。疾走入レ館。

周軒六輻輪(一)を以て標識と爲す。世子少時夜邸內を微行す。遙に六輻輪提燈の來るを望み、輒ち曰く、合怕老來る。(二)合怕考來る。盍ぞ避け去らざるやと、疾走して館に入る。

(一)車輪の中の放散狀なる棒が六本ある如き形の紋　(二)こはいおぢいさん

柳澤公新封レ侯。廣招二名士一。乃以二秩三百石一聘二周軒一。周軒不レ應。蓋以三其仕有二不レ苟者一也。亡レ何因二松軒薦一。釋二褐小室侯一。俸支二二十口一耳。小室即今巖邨侯舊封也。

(一)柳澤公新に侯に封ぜられ、廣く名士を招く。乃ち秩三百石を以て周軒を聘す。周軒應ぜず。蓋し其仕苟もせざる者あるを以てなり。何も亡く松軒の薦に因て、(二)褐を小室侯に釋く。俸二十口を支ふるのみ。小室は卽ち今の巖邨侯の舊封なり。

(一)柳澤吉保　(二)小室侯に官仕す

周軒爲レ人嚴毅廉直。初以レ儒仕。後傅二世子一。世子動作擧止。悉規以レ正。世子嘗欲下就二齋南一鑿中一窗上。周軒不レ肯曰。此易事耳。

周軒人と爲り嚴毅廉直なり。初め儒を以て仕へ、後(一)世子に傅たり。世子動作(二)擧止、悉く規するに正を以てす。世子嘗て(三)齋南に就いて一窗を鑿たんと欲す。周軒肯かず曰く、此れ易事のみ。然れども世子たる者は、(四)凡百當に父侯の與ふる所を愼み守るべくして、別に嗜好ある可からず。今世子年少し。(五)安を問ひ膳を視るは則ち勿論、方に且つ學を講じ武を演じ、旦夕の暇あらず、而るを乃

功。至二周軒一始好レ文。學二於後藤松軒之門一。小少堅二其志節一。嘗蒯緱遊レ京。便道過二伏水一省二伯母一。伯母爲二田光氏母一。家頗富。喜二周軒至一。且感二篤志一。乃出二金百兩一贈レ之曰。若以レ此爲二學資一。周軒辭不レ受。伯母曰。勿。我子放蕩。寢將レ傾レ產。與三其濫費以供二燕樂一。寧與レ若以充二爲レ善之用一。周軒益辭曰。一家主人。業已如レ此。安可レ不三別有レ所レ儲以備二不虞一乎。余一介書生。無レ貲固分耳。但大母之惠。其拜レ賜也多矣。遂不レ受二一金一去。

り。家頗る富む。周軒が至るを喜び、且つ篤志に感じ、乃ち金百兩を出し之に贈つて曰く、若此を以て學資と爲せと。周軒辭して受けず。伯母曰く、勿れ。我子放蕩、寢將に產を傾けんとす。其濫費以て燕樂(三)に供せんより、寧ろ若に與へて以て善を爲すの用に充んと。周軒益〻辭して曰く、一家の主人、業に已に此の如し。安んぞ別に儲くる所ありて以て不虞(四)に備へざる可けんや。余は一介の書生なり、貲(五)なきこと固より分なるのみ。但大母の惠、其の賜を辭するや多しと。遂に一金を受けずして去る。

(一) 史記孟嘗君傳に出でたる字句、蒯は草の名、麻繩をまとひし劒の義、只粗末な劒を一本さしてといふ程の意なり (二) ついでに伏見にまはりて伯母を訪ふ (三) 遊興 (四) 不時の用に備ふ (五) 財物無きこと身分相應

如。曰。之數人也。盛名雷轟。何待レ乎曹丘生一也。又峴巖文柄。贈二桂彩巖一曰。物徂徠老矣。膂末不レ能レ入レ縞。天又奪二滕煥圖一。如レ失二左右手一。室鳩巣醇乎古先生。澹泊自守無二鬬心一也。宅觀瀾竪二幟駿臺一。堂堂正正之威。殆使三牛門塞レ關不二敢東飮一馬矣。不幸星隕。可レ勝レ嘆也。

（五）高き評判頗るやかまし　（六）大弓の矢の猛勢なるも其の末勢は絹一枚をも通じがたし　（七）安東東野の號　（八）安積澹泊は自己を守つて爭ふ心無し　（九）三宅觀瀾は一旗幟を駿河臺にたてゝ文壇に雄視す　（一〇）徂徠の門をいふ　江戸牛込に居住したればなり　（一一）屏して敢て侮らず

佐藤廣義

佐藤廣義。小字勘平。號二周軒一。晩號二塵也一。江戸人。仕二巖邨侯一。

周軒家世以レ武顯。高祖佐藤信淸。小字新九郎。仕二織田右府一有二戰

佐藤廣義、小字は勘平、周軒と號し、晩に塵也と號す。江戸の人。巖邨侯に仕ふ。

周軒の家世ゝ武を以て顯る。高祖佐藤信淸、小字は新九郎、織田右府に仕へ戰功有り。周軒に至つて始て文を好み、後藤松軒の門に學ぶ。小少より其志節を堅うす。嘗て(一)蒯緱京に遊ぶ。(二)便道伏水に過り伯母を省す。伯母は田光氏の母た

是。非二徒汪汪波一。更歎二洋洋美一。

觀瀾年不レ得レ壽。有二著書一亦不三多布二于世一。是以到レ今名寥寥少レ聞。然其學術文章。當世與二有名士一並稱。物徂徠與二竹春菴一書。稱二藪震菴文一曰。習二宋人之文一焉。視三其所二結撰一。不レ出二於東涯觀瀾之下一。又雨芳洲橘窓茶話曰。觀瀾鳩巣。東涯徂徠何

觀瀾、年壽を得ず。著書有るも亦多く世に布かず。是を以て今に到つて名寥寥として聞ゆる少なし。然れども其學術文章、當世有名の士と並稱せらる。物徂徠が竹春菴に與ふる書に、藪震菴の文を稱して曰く、宋人の文に習ふ。其の結撰する所を視るに、東涯・觀瀾の下に出でずと。又雨芳洲が橘窓茶話に曰く、觀瀾・鳩巣・東涯・徂徠は何如。曰く、之の數人たるや、盛名雷轟、何ぞ曹丘生を待たんやと。又蛻巖が文柄、桂彩巖に賜るに曰く、物徂徠老いたり。弩末縞に入ること能はず。天又滕煥圖を奪ふ。左右の手を失へるが如し。室鳩巣醇乎たる古先生、澹泊自ら守つて躁心なし。宅觀瀾幟を駿臺に竪て、堂堂正正の威、殆ど牛門をして關を塞ぎ敢へて東に馬に飲はざらしむ。不幸星隕つ。嘆ずるに勝ふべけんやと。

(一) 世にもてはやされず (二) 竹田定直、春菴と號す、益軒門、福岡の儒官 (三) 結構撰述する文 (四) 雨森芳洲

歸正。自我聖朝開刱之後。尤有大焉。文物彬彬賁飾洪猷。雖三尺童子。皆知貴王而賤霸。崇儒而斥佛。尙釋雜老不知大道云者。豈非乖戾之甚者乎。觀瀾復書曰。來簡云。文淸爲巨擘可乎。此段前後語脈難得領會。其以薛氏爲可尙邪。則正與鄙意合。以爲不足尙邪。則所趣大異。宜措勿論也。丘文莊以岳飛爲未必恢復。是於時勢各有所見。始不以爲直義心術之累。況金兵之强。比宋十倍。勝敗之跡。未易猝以書生紙上語而斷也。其以秦檜爲宋忠臣。則此老好高奇矯衆論之弊然耳。然辨夷夏。正內外。其終身精力所用。正在乎斯。一部世史正綱昭然可見。豈以裂冠毀冕稱臣金虜爲是者邪。特其造詣深義。識趣高卑。固有不及文淸。而由之正與信之厚。蓋亦朱明一代非所易得矣。且夫訂學派以論先輩。自當有體。雖乃高德偉績如王守仁。苟於門路有所乖馳。則義當棄之不顧。而若文莊之學之正。豈可卒然摘其小疵遺其大醇而衍義之補。學的之編。亦豈可以爲詭異謬盭而論邪。云云。前文所云。明人論貴國文者。指王世貞。語見其集。而所云尙釋雜老。亦以批世貞之學。來簡似未悉鄙意。請更被案。

（四四）小さき缺點をとりあげて大なる長所を棄つ、大醇は完全なるところ醇粹せるところ　（四五）大學衍義補と學的、共に文莊の著書　（四六）御書、未だ自分の言ふ所の意をつくさざる如し

南聖重韓人。和觀瀾所示韻曰。觀水必觀瀾。君應取於

南聖重（韓人）、觀瀾が示す所の韻に和して曰く、水を觀れば必ず瀾を觀る、君應に是に取るべし。徒に汪汪の波のみに非ず、更に洋洋の美を歎ぜよと。

（一）君は此の意味を取りて號とせるならん

多二偏倚之失一。而至レ如二文清之學。純實無偏博洽多聞一。背以レ此爲二巨擘一可乎。所謂丘濬者。爲レ學詭異。立レ論謬盭。以二岳飛一爲レ未二必恢復一。稱二秦檜一爲二宋忠臣一。意見如レ此。其佗可レ知。此不レ得レ不レ辨也。云云。明人云云之說。誠不レ滿二一哂一也。我國自二殷太師設上教之後。國俗一變。士趨

見ゆ。云ふ所の釋を尙び老を雜ふとは、亦以て世貞の學を批す。來簡未だ鄙(四六)意を悉さざるに似たり。請ふ更に審かにせられよと。」

(一) 元年 (二) 詩を詠みてやりとりす (三) 高阪玄岱 (四) 祇園南海 (五) はこりたかぶるに足らず (六) 商量して定む (七) とりつまんで記す (八) 思辨該博、卽ち考察深くして批判嚴正、博く涉りて悉さざるなきをいふ (九) 其の精神と德性の輝きが時代の人心を振ひおこす (一〇) 識見のすぐれたる、操守のつゝやかなる信義の厚き、よりどころの正しき (一一) 佔畢は經義をさとらずして徒に文字を讀むのみなること、訓詁は字の注釋 (一二) 簡易速成にしてよりどころなき想像をたくましうしたる言を事とす (一三) 萬人中の一人 (一四) おごれる貌 (一五) 佛教をたつとび老莊をまじへ說く (一六) 苦心して佳句を作る (一七) 輕薄にも自ら喜んで才子を以て任ず (一八) 古代の聖賢の大なる法則肝要なる道の他に屬するを知らず (一九) 狂つて道に迷ふさま (二〇) 仰ぎ慕ひならひて止まず (二一) 弊害 (二二) 返書 (二三) 學問純粹ならぬ弊害あり又一方に偏する缺點あり (二四) 學問博くゆきわたる (二五) おや指、衆人中にて最も優れたる者をいふ (二六) 奇怪にして他と異なる (二七) 謬はあやまり、盭はもとる (二八) 南宋の忠臣岳飛を以て宋室を恢復せし功無しとす (二九) 南宋の宰相として金と通じ國を賣りし奸臣 (三〇) 一笑のねうちだになし (三一) 我朝の立ちしより以來 (三二) 制度典章兼ねそなはり帝王の大業を粉飾す (三三) そむきもとる (三四) 前後の文のすぢみちわかり難し (三五) 時勢に對する見解の然らしむるにて其の人の道義心や心のもちかたなどには關係無し (三六) 奇說を好み多くの人の論に從はざる辯 (三七) 野蠻人と中國人 (三八) 中國の冠を破りすてて金の臣と稱するを尤もとせず (三九) 學殖の深きこと識見の高下 (四〇) 由る所の正しきと、信ずる所のあつきと (四一) 學問の流派を比較して先輩を評論するには體裁なかる可からず (四二) 王陽明 (四三) 學問の路に反す

此謂華而變夷可也。而學世倀倀。唯名之狗。景仰慕效不置。父兄子弟亦皆以是督而趨之。今而孔孟程朱再起。復將悔且怨其言之流弊至此之不逞。宜乎能知其意體其全者。絶無而僅有也。嚴復書曰。明興雖有程篁墩。陳白沙。王陽明諸人。間有駁雜之病。亦

と爲さず。況や金兵の強なる、宋に比すれば十倍にして、勝敗の跡、未だ猝かに書生紙上の語を以て斷じ易からざるをや。其秦檜を以て宋の忠臣と爲すこと、則ち此老(三六)高奇を好み衆論を矯むるの弊然るのみ。然るに夷夏(三七)を辨じ、内外を正すは、其終身精力を用ふる所、正に斯に在り。一部の世史、正綱昭然として見る可し。豈に裂冠(三八)毀冕金虜に臣と稱するを以て是と爲す者ならんや。特に其造詣(三九)の深義、識趣の高卑、固より文淸に及ばざる有り。而れども(四〇)由るところの正しきと信の厚きとは、蓋し亦朱明一代得易き所に非ず。且つ夫の學派(四一)を訂して以て先輩を論ずるは、自ら當に體有るべし。乃ち高德偉績(四二)王守仁の如きと雖も、苟も門路(四三)に於て乖馳する所有らば、則ち義當に之を棄てて顧みざるべし。文莊の學の正の若き、豈に卒然其小疵(四四)を摘み其大醇を遺るべけんや。而して衍義(四五)の補、學的の編、亦豈に以て詭異謬盭と爲して論ず可けんや。云云。前文に云ふ所の、明人貴國の文を論ずる者とは、王世貞を指す。語其集に

由レ之正。一皆有レ所ニ淵源一。不乙與下夫事ニ佔畢訓詁之末一而論二簡捷虛誕之域一者上侔。蓋萬而得レ一焉。云云。明人嘗有下論ニ貴境之文一者上。其意倨然以ニ中夏文明一自處。乃三隨訂ニ其所レ爲レ學。則尙レ釋雜レ老。剝意琢句。沾沾喜以ニ才子一相ニ爲標榜一。不三復知ニ古聖賢之大法要道闕而在レ外矣。

て巨擘と爲すも可ならんか。所謂丘濬は、學を爲す詭異、論を立つる謬盭なり。岳飛を以て未だ必ずしも恢復せずと爲し、秦檜を稱して宋の忠臣と爲す。意見此の如し。其佗知る可し。此れ辨ぜざるを得ざるなり、云々。明人云云の說、誠に一哂に滿たざるなり。我國殷太師教を設けしより後、國俗一變し、士趨りて正に歸し、我聖朝開刱の後より、尤も大なるあり。文物彬彬洪猷を賁飾し、三尺の童子と雖も、皆王を貴びて覇を賤み、儒を崇めて佛を斥くるを知る。釋を尙び老を雜へ大道を知らずと云はるゝ者は、豈に乖戾の甚だしき者に非ずやと。觀瀾復書して曰く、來簡に云ふ、文淸を巨擘と爲すも可ならんかと。此段前後語脈領會を得難し。其の薛氏を以て尙ぶ可しと爲さんか、則ち正に鄙意と合せり。以て尙ぶに足らずと爲さんか、則ち趣く所大に異なり。宜しく措いて論ずることなかるべきなり。丘文莊、岳飛を以て未だ必ずしも恢復せずと爲す。是れ時勢に於て各ゝ見る所あり。始より以て道義心術の累

室鳩巣二百二十韻。祇南海百五十韻一。雖三大作有二才料一。要無益長語。何必足二自夸張一。獨觀瀾出レ羣專論二議經義一。商二榷古今一。撮二錄於此一。以見二其言辨博有レ力。送二嚴書記一序曰。至レ明有二薛文淸。丘文莊一。雖二其精神輝光。不レ能下以鼓二振一時一。潤中化百世上。而識之卓。守之約。信之厚。

潤化する能はずと雖も、而も識(一〇)の卓、守の約、信の厚、由の正、一に皆淵源する所有り。夫の佔畢訓詁(一一)の末を事として、簡捷虛誕(一二)の域に淪む者と侔しからず。蓋し萬(一三)にして一を得、云々と。明人嘗て貴境の文を論ずる者有り。其意倨然(一四)として中夏文明を以て自ら處り、隨つて其學と爲す所を訂するに及んでは、則ち(一五)釋を倘び老を雜へ、刻意(一六)琢句、沾沾(一七)として喜んで才子を以て標榜を相爲し、復古(一八)聖賢の大法要道の屬して外に在るを知らず。此は華にして夷に變ずと謂ひて可なり。而も擧世倀倀(一九)として、唯名に之れ狥ひ、景仰慕效(二〇)置かず。父兄子弟亦皆是を以て督して之に趨る。今にして孔・孟・程・朱再起せば、復將に其言の流弊此に至るを悔い且つ怨むに遑あらざらんとす。宜なるかな能く其意其全(二一)を體するを知る者、絕えて無くして僅かに有るやと。嚴が復書(二二)に曰く、明興り程篁墩・陳白沙・王陽明の諸人ありと雖も、間〻駁雜(二三)の病有り。亦偏係の失多し。文淸の學の、純實無僞(二四)博洽多聞なるが如きに至つては、肯へて此を以

府登用。梁蛻巖祭文曰。文章典雅。貫ニ以藻火黼黻ー。書ニ楠子碑陰ー。雖レ出ニ於少時之作ー。既足ニ以見ニ所レ養之深粹。而志氣精采之鬱浡ー矣。宜乎蚤有レ譽ニ于水府ー。而司ニ史筆之冕鉞ー也。館僚安積栗山二子。有ニ材識ー而博物。且尚退舍使ニ英華擅發ー焉。

(一) 號は錬齋、水戸藩の儒官 (二) 二年 (三) 德川幕府 (四) 梁田蛻巖 (五) 藻火は文詞のあやあるもの、黼黻は共にかざりある禮服の名、此處にては文章に美しきあやあるを形容せる也 (六) 平素の修養の深きと元氣のみちみちたるとを見る (七) 水戸に評判高し (八) 冠冕と斧鉞、編修總裁となりしをいふ (九) 安積澹泊・栗山潜鋒 (一〇) 觀瀾に一歩讓りてすぐれたる才華を十分に發揮せしむ

正德辛卯韓使來聘。儒者就ニ其館中ー爲ニ唱酬ー者甚多。七家唱和集蓋爲ニ之最ー。而多以レ詩不レ以レ文。其間有レ文亦皆平平耳。詩如ニ高玄岱三百九十韻。

正德辛卯韓使來聘す。儒者の其館中に就いて唱酬(一)を爲す者甚だ多し。七家唱和集(二)は蓋し之が最たり。而して多く詩を以てし文を以てせず。其間文有るも亦皆平平なるのみ。詩には高玄岱(三)の三百九十韻、室鳩巣の二百二十韻、祇南海(四)の百五十韻の如き、大作才料有りと雖も、要は無益の長語のみ。何ぞ必ずしも自ら夸張(五)するに足らん。獨り觀瀾羣を出でて専ら經義を論議し、古今を商榷(六)す。此に撮録(七)して、以て其言の辨博(八)にして力あるを見さん。嚴書記を送る序に曰く、明に至り薛文清・丘文莊有り。其精神(九)輝光、以て一時を鼓振し、百世を

仁齋一也。三宅緝明。字用晦。小字九十郎。號二觀瀾一。石菴弟。平安人。仕二大府一。觀瀾始師二淺見絅齋一。末從二木下順菴一。嘗作下拜二楠子墓一文上。鵜飼金平（名眞昌）采上二水戸義公一。公見感稱。乃召爲二國史編修總裁一。正德壬辰年三十八。因二白石薦一。逢二大

三宅緝明

三宅緝明、字は用晦、小字は九十郎、觀瀾と號す。石菴の弟。平安の人。大府に仕ふ。

觀瀾始め淺見絅齋を師とし、末に木下順菴に從ふ。嘗て楠子の墓を拜する文を作る。(一)鵜飼金平(名は眞昌)采て水戸義公に上る。公見て感稱し、乃ち召して國史編修總裁と爲す。(二)正德壬辰年三十八、白石の薦に因て、(三)大府の登用に逢ふ。(四)梁蛻巖が祭文に曰く、文章典雅、賁るに藻火黼黻を以てし、(五)楠子の碑陰に書す。少時の作に出づと雖も、既に以て養(六)ふところの深粹、志氣精采の鬱浡を見るに足れり。宜なるかな蚤く(七)水府に譽有りて、史筆の(八)冕鉞を司るや。館僚(九)安積・栗山の二子、材識ありて博物なるも、且つ尙ほ退舍して英華を(一〇)擅に發せしむと。

何窮亦極矣。於レ是兄弟相携來二江戸一。設授取レ給。居數年。石菴獨歸二京師一。尋至二大坂一。時名翹然起。弟子雲集。中井甃菴等。相謀請二諸官一。建二庠校一。名二懐德堂一。衆皆推二石菴一主レ之。固辭不レ可。遂領二祭酒事一。後中井氏嗣レ之。至レ今不レ衰。

㊀家業を事とせず ㊁家財道具を賣却して舊き負債を拂ふ ㊂短き粗衣、なつぱ等の如き粗食 ㊃勉強心 ㊄方各々一堵なる家の意、狭き家をいふ、一堵は五板、一板は方一丈なり ㊅書を講じて生活をたつ ㊆高く抜出でたる貌 ㊇名は誠之、播州龍野の人、大阪に住す ㊈學校 ㊉校長、教授の最上席

石菴工レ書。頗得二顏法一。隻字人爭求レ之。而資質朴素。其所レ書未二嘗款印一。又通二倭歌及俳諧一。

石菴書を工にし、頗る顏法を得、隻字も人爭つて之を求む。而も資質朴素にして、其の書する所未だ嘗て款印せず。又倭歌及び俳諧に通ず。

㊀顏眞卿の筆法 ㊁書に押すべき印、落款

香川太沖曰。世呼二石菴一爲二鵺學問一。此謂三其首朱子。尾陽明。而聲似二

香川太沖曰く、世石菴を呼んで鵺學問と爲す。此れ其首は朱子、尾は陽明にして、聲仁齋に似たるを謂ふなり。

㊀學問の雑駁なるをいふ

三宅正名。字實父。號石菴。又號萬年。平安人。石菴少耽學。不視家道。由是產遂蕩盡。乃斥賣家什。以償舊債。則所餘僅數金耳。謂弟觀瀾曰。今雖貧極。短褐蔬食。可以支數年。鑽堅之志愈厚。環堵之室。對几而講習。共至忘寢食。亡

三宅正名

三宅正名、字は實父、石菴と號し、又萬年と號す。平安の人。

石菴少うして學に耽り家道を視ず。是に由つて產遂に蕩盡す。乃ち家什を斥賣し、以て舊債を償ふ。則ち餘す所僅かに數金のみ。弟觀瀾に謂つて曰く、今貧極ると雖も、短褐蔬食、以て數年を支ふ可しと。鑽堅の志愈〻厚く、環堵の室几に對して講習し、共に寢食を忘るゝに至る。何も亡く窮亦極る。是に於て兄弟相携へて江戸に來り、教授して給を取る。居ること數年にして、石菴獨り京師に歸る。尋いで大坂に至る。時に名翹然として起り、弟子雲集す。中井甃菴等、相謀りて、諸を官に請ひ、庠校を建て、懷德堂と名づく。衆皆石菴を推して之に主たらしむ。固辭して可かず。遂に祭酒の事を領す。後中井氏之を嗣ぎ、今に至つて衰へず。

師之神主及狼疐錄。不レ若三瘞レ之無二佗日爲一レ人所一レ汚也。留守退藏亦列二其座一。獨不二以爲一レ是。然衆議遂決。乃瘞二新黑谷光明寺尙齋墓側一。明日寺僧遽來報曰。昨夜有レ盜發レ墓。衲適見而尤レ之。則拔レ劒恐喝。衲辟易。彼遂恣二其意一而去。不レ知墓中有二何財貨一致二此厄一乎。訂齋皺レ頞曰。吁此必留守退藏所レ爲也。卽往視レ之。則果失二神主狼疐錄一。

彼遂に其意を(三)恣にして去る。知らず墓中何の財貨有りて此厄を致すかをと。訂齋頞を(四)皺めて曰く、吁此れ必ず留守退藏の爲す所ならんと、卽ち往いて之を視れば、則ち果して神主・狼疐錄を失へり。

(一) 位牌　(二) 僧侶の自稱　(三) 思ふ存分に目的を果して去る　(四) かほをしかめる

尙齋娶二田代氏一。擧二一男三女一。男重德。字一平。英敏好レ學。年三十一先卒。女其一適二門人久米訂齋一。訂齋又以二經藝一名。

尙齋田代氏を娶り、一男三女を擧ぐ。男重德、字は一平、英敏にして學を好む。年三十一にして先つて卒す。女、其一は門人久米訂齋に適く。訂齋又經藝(一)を以て名あり。

(一) 經書六藝

備二弓弩羅絡一。詰朝將下率二丁壯一遍探中叢窟上。而其半夜聞二窓外呼一。曰。惡狐既斃二河上一。卽遣二人見一レ之。果有二死狐一。蓋衆狐捨擊斃レ之。以免二其寃一也。尙齋乃令三居者剝二其皮一。常坐二其上一。時鞭レ之曰。毛獸奈何害二萬物之靈一。

るなり。尙齋乃ち屠者(七)をして其皮を剝がしめ、常に其上に坐し、時々之を鞭つて曰く、毛獸奈何ぞ萬物の靈を害すると。

(一)一人の老婆　(二)村長　(三)全鄕、全村　(四)弓弩は弓、羅絡は網　(五)若者を引きつれて狐の穴ヶ探る　(六)多くの狐が打ち殺す　(七)穢多

尙齋沒後。門人久米訂齋。多田東溪。石王塞軒等。相議曰。先師不幸無レ後。吾輩雖下講二遺業一授中生徒上。不レ能レ保三世如二今日一也。

尙齋の沒後、門人久米訂齋・多田東溪・石王塞軒等、相議して曰く、先師不幸にして後無し。吾輩遺業を講じ生徒に授くと雖も、世々今日の如きを保すること能はず。師の神主及び狼疐錄は、之を瘞めて佗日人の爲に汚さるゝこと無きに若かずと。留守(一)退藏亦其座に列す。獨り以て是とせず。然るに衆議遂に決し、乃ち新黑谷光明寺なる尙齋の墓側に瘞む。明日寺僧遽て來り報じて曰く、昨夜盜有り、墓を發く。衲(二)適々見て之を尤むれば、則ち劍を拔いて恐喝す。衲辟易し、

尙齋固守二朱說一。深疾レ異レ己者一。而與二三宅石菴。三輪執齋。玉木葦齋一相友者。唯其舊交不レ忍レ絕云。石菴信二陸象山一。執齋喜二王陽明一。葦齋奉二神道一。石菴執齋爲レ其所二論刺一。尙且每稱二尙齋一爲二溫厚長者一。

尙齋固く朱說を守り、深く己に異なる者を疾む。而るに三宅石菴・三輪執齋・玉木葦齋と相友たるは、唯其舊交絕つに忍びざればなりといふ。石菴は陸象山を信じ、執齋は王陽明を喜び、葦齋は神道を奉ず。石菴・執齋其の爲に論刺(一)せらるゝも、尙ほ且つ每に尙齋を稱して溫厚の長者と爲す。

(一) 論難譏刺せらる

有下一嫗爲二野狐一所上レ魅。其邑正幸助者爲二尙齋姪一。尙齋責レ之曰。若何不下爲驅二閭鄉之狐一盡殺上レ之。於レ是幸助卽

(二)一嫗、野狐の爲に魅さるゝ有り。其邑正幸助といふは尙齋の姪たり。尙齋之を責めて曰く、若何ぞ爲に閭鄉(三)の狐を驅つて盡く之を殺さゞると。是に於て幸助卽ち弓弩羅絡(四)を備へ、詰朝將に丁壯(五)を率ゐ遍く叢窟を探らんとす。而るに其半夜窻外に呼ぶを聞く。曰く、惡狐旣に河上に魅ると。卽ち人をして之を見しむるに、果して死狐あり。蓋し衆狐掊擊(六)して之を魅し、以て其冤を免る

但向二面前一養二誠心一。四十餘年學二何事一。笑坐二獄中一鐵石心。

尙齋削籍之後。講二業于京師一。搢紳列侯從游甚多。土佐侯請爲レ師。乃招來二江戸一。居僅半朞。其大夫山内矩重卒。此人尙齋之知己也。於レ是辭歸レ京。晩年復來二江戸一。時舊君阿部侯延而見レ之。道二往事一嘆二其忠直一。

尙齋削籍(一)の後、業を京師に講ず。搢紳列侯の從游甚だ多し。土佐侯請うて師となす。乃ち招かれて江戸に來る。居ること僅かに半朞(二)にして、其大夫山内矩重卒す。此人は尙齋の知己なり。是に於て辭して京に歸る。晩年復江戸に來る。時に舊君阿部侯延いて之を見、往事を道ひて其忠直を嘆ず。

(一) 免職、官職を削る　(二) 半年

尙齋與二直方一交義素善。而議論未二必同一。每曰。直方四十六士論。使三人消二滅至誠惻怛之心一。

尙齋、直方と交義素より善し。而して議論は未だ必ずしも同じからず。每に曰く、直方の四十六士論は、人をして至誠惻怛(一)の心を消滅せしむと。

(一) まごころあつて痛み悲しむ心

澤等。憫レ之爲請レ宥。而不レ能レ得。越三年。會レ赦而放。於レ是去之二京師一。以レ儒爲レ業。晩私傚二大小學校一。建二培根達支兩堂于勘解由坊一。尙齋氣象豪爽。其在二囹圄一也。危難窘迫之際。處レ之裕如。乃謂古人被レ刑尙能著レ書。吾寧無爲而待レ斃。然筆墨不レ可レ得。因刺レ臂血二書狠疐錄三卷一。其中祭祀來格說一卷。門人山宮仲淵上梓。近時吾友山田思叔。再校二刻之一。

て裕如(七)たり。乃ち謂ふ、古人刑せられて尙ほ能く書を著す。吾れ寧んぞ無爲(八)にして斃るゝを待たんと。然れども筆墨得可からず。因つて臂を刺して狼疐錄三卷を血書す。其中祭祀來格說一卷は、門人山宮仲淵上梓し、近時吾友山田思叔、再び之を校刻す。

(一) 病氣にかこつけ辭職を乞ふ　(二) 四年　(三) 名は知愼、京都嵯峨の人、柳澤吉保に仕へ、後幕府の登用に遇ふ　(四) 町名　(五) 獄舍　(六) さしせまれる場合　(七) ゆつたりとする　(八) 何もせずして死す

尙齋在レ獄。侯嘗遣二人察一レ之。尙齋卽作レ詩示レ之云。富貴壽夭不レ二レ心。

尙齋獄に在り。侯嘗て人をして之を察せしむ。尙齋卽ち詩を作り之に示して云く、富貴壽夭(一)、心を二にせず、但面前に向つて誠心を養ふ、四十餘年何事をか學びし、笑つて獄中に坐す鐵石の心と。

(一) 財富み位貴く長いきし早死するが如きことにて志を曲げず

齋一者三年。闇齋卽レ世。乃折二衷於佐藤直方淺見絅齋二子。二子以二友誼一待レ之。互相切劘。遂共得二山崎門三傑聲一云。

衷す。二子友誼(三)を以て之を待ち、互に相切劘し(四)、遂に共に山崎門三傑の聲(五)を得と云ふ。

(一)死す　(二)兩說を合して其中庸をとる意、此れ二子の說を聽くを以てかくいふ　(三)友人として待遇す　(四)互に切磋琢磨す、互に學德をみがきあふ　(五)評判を得

尙齋就レ官、忠直務盡二其誠一。居十年以二言不一レ行。移レ疾乞二致仕。不レ允。猶數乞不レ止。以レ是得レ罪。寶永丁亥。幽二囚于忍一。友人三輪執齋。細井廣

尙齋官に就くや、忠直務めて其誠を盡す。居ること十年、言行はれざるを以て、疾(一)に移して致仕を乞ふ。允されず。猶ほ數々乞うて止まず。是を以て罪を得、寶永丁亥(二)、忍に幽囚せらる。友人三輪執齋・細井廣澤(三)等、之を憫み、爲に宥を請うて、得る能はず。越えて三年、赦に會つて放たる。是に於て去つて京師に之き、儒を以て業と爲す。晩に私に大小學校に倣ひ、培根・達支の兩堂(四)を勘解由坊に建つ。尙齋氣象豪爽なり。其の囹圄(五)にあるや、危難窘迫(六)の際、之に處し

三宅重固。小字儀左衛門。後更二丹治一。號二尙齋一。播磨人。尙齋父重直。爲二人後一冒二平出氏一。尙齋幼時從二其姓一。剗髮學二醫術一。父命レ之也。年十六喪レ父。十九入二闇齋門一。專攻二儒學一。於レ是種レ髮始復二姓三宅一。後來二江戸一。抗二經席一爲二人師一。遂應二辟阿部侯一。元祿中大君臨二侯邸一。命二尙齋一講二論語一。乃有二衣服賜一。

三宅重固

三宅重固、小字は儀左衛門、後丹治と更む。尙齋と號す。播磨の人。尙齋の父は重直、人の後と爲りて平出氏を冒す。尙齋幼時其姓に從ひ、剗髮し(一)て醫術を學ぶ。父之を命ずるなり。年十六にして父を喪ひ、十九にして闇齋の門に入り、專ら儒學を攻む。是に於て髮を種ゑ(二)て始て三宅に復姓す。後江戸に來り、經席(三)を抗して人の師と爲る。遂に辟に阿部侯に應ず。元祿中大君、侯の邸に臨む。尙齋に命じて論語を講ぜしむ。乃ち衣服の賜あり。

(一) 髮をきり落す　(二) 髮をのばす　(三) 經書講說の座を張る

尙齋學二於闇

尙齋、闇齋に學ぶこと三年。闇齋世に卽く(一)。乃ち佐藤直方・淺見絅齋の二子に折(二)

理。其佗淫辭浮言不レ可二勝數一。若使三此等之說出二於數十年之前一。雖二庸人孺子一。亦知二其妄一而非二笑之一。今也不レ然。自下世之稱二師儒一者上。皆爲レ之所レ動。莫レ不下宗二其說一而信上レ之。況於二後學晚進者一乎。宜乎。其靡然趨而歸レ之也。吾於レ是知世道之日下。人心之日僞。亦可レ悲矣。又仲村氏五經筆記序曰。奈何近世邪誕之說競起。凌二駕漢唐一。詆二毀程朱一。欲下以二一已之私見一誣中天下之耳目上。至レ使三有識之士爲レ之憤惋殆廢二寢與一食。可レ勝レ嘆哉。又答二遊佐木齋一書云。若有二王者起一。必聚二海內之籍一。悉取二其叢雜無用之書一而火レ之。然後詔二天下之學者一。專務二體察踐行一。不レ事二空言一。抑二虛文一。剗二浮華一。正二人心一。距二邪說一。如レ是數年。則天下靡然復二歸於正一矣。

勝手な見識を以て天下萬民の耳目を欺かんとす　（一六）雜多なる無用の書　（一七）體得實行す　（一八）うはべの飾りを剝ぎ取る　（一九）一方になびく形容

鳩巢賜二葬地于江戶大冢筑波山後一。非二寺地一也。從レ是後官儒多賜二葬地于此一。鳩巢墓有二四面一小碑一。前面唯題二鳩巢室先生之墓七字一而已。

鳩巢葬地を江戶大冢（二）筑波山の後に賜ふ。寺地に非ざるなり。是より後官儒多く葬地を此に賜ふ。鳩巢の墓には四面の一小碑有り。前面に唯鳩巢室先生之墓の七字を題するのみ。

（二）小石川區大塚の地、俗に儒者捨場と稱す

其所ㇾ見一之。是其略二於分殊一者。暗二於理一一故也。又題二高木氏僞學論一曰。自ㇾ古邪說之害ㇾ道多矣。然其誕妄麤惡無ㇾ所二忌憚一。未ㇾ有下若二今世之甚一者上。或有下稱二古學一者上。或曰。大學非二孔氏之遺書一。又曰。我能塞二伊洛之淵源一。或有下矜二文學一者上。曰。道不ㇾ出二於天一。又曰。道非二事物當然之

記の序に曰く、奈何せん近世邪誕の說競ひ起り、漢・唐を凌駕し、程・朱を詆毀（一四）し、一己（一五）の私見を以て天下の耳目を誣ひんと欲し、有識の士をして之が爲に憤惋殆ど寢と食とを廢せしむるに至る。嘆ずるに勝ふ可けんやと。又遊佐木齋に答ふる書に云はく、若し王者起ること有らば、必ず海內の籍を聚め、悉く其叢雜（一六）無用の書を取つて、之を火にし、然る後天下の學者に詔して、專ら體察踐行を務め、空言を事とせず、虛文を抑へ、浮華（一八）を剗ぎ、人心を正し、邪說（一七）を距がん。是の如きこと數年ならば、則ち天下靡然（一九）として正に復歸せんと。

（一）閑齋の學　（二）根本原理に力を入れて個々の差別的現象に疎し　（三）殷の湯王が其主たる夏の桀王を伐ち、周の武王が殷の紂王を伐ちしことは、君臣の義と相反せずして兩立すといふことを知らず　（四）敬は主觀的原理にして義は客觀的原理　（五）大學の主眼とする六條目（誠意・正心・修身・齊家・治國・平天下）の中にて正意誠心修身の三條目　（六）齊家・治國・平天下の三條目。誠意・正心・修身の三條目を以て、人間の內部生活たる心を敬にて直くなすものとし、齊家・治國・平天家の三條目を以て、外部生活たる行爲を義にて正しくすといふが如き分類法は誤り　（七）固く守る　（八）理路通ぜず、すぢみちふさがる　（九）でたらめにして粗雜　（一〇）程朱の學のみなもとを塞ぎとむ　（一一）みだりにして輕浮なる言　（一二）凡人や子供　（一三）世の中の道德が日に墮落す　（一四）そしる　（一五）一人の

並行而不㆗相悖㆖。知㆔敬義有㆓內外之分㆒。不㆑知㆑不㆑可㆘以㆓修身以上㆒爲㆓敬以直㆑內。以㆓齊家以下㆒爲㆗義以方㆖外。此其大者也。其他所㆑見多執㆓定一理㆒而不㆑察㆓分殊㆒。所㆔以流㆓於神道㆒也。然今而思㆑之。其理一者守㆓義理之一隅㆒也。於㆓本原一理處㆒。所㆑見未㆑徹。故往往有㆑所㆓窒礙㆒。而欲㆘以㆓

守ればなり。本原一理の處に於て、見る所未だ徹せず。故に往往窒礙(八)する所有り。而して其の見る所を以て之を一にせんと欲す。是れ其の分殊に略なる者にして、理一に暗き故なりと。又高木氏僞學論に題して曰く、古より邪說の道を害するもの多し。然れども其の誕妄(九)麤惡忌憚する所無きこと、未だ今世の甚だしきが若き者有らず。或は古學と稱する者有り。曰く、大學は孔氏の遺書に非ずと。又曰く、我能く伊洛(一〇)の淵源を塞ぐと。或は文學に矜る者有り。曰く、道は天に出でずと。又曰く、道は事物當然の理に非らずと。其佗淫辭浮言(一一)勝げて數ふ可からず。若し此等の說をして數十年の前に出でしめば、庸人孺子(一二)と雖も、亦其妄を知つて、之を非笑せん。今は然らず、世の師儒と稱する者よりして、皆之が爲に動かされ、其說を崇めて之を信ぜざるなし。況や後學晚進の者に於てをや。宜なるかな、其の靡然として趨いて之に歸するや。吾れ是に於て知る、(一三)世道の日に下り、人心の日に僞るを。亦悲む可しと。又仲村氏五經筆

曰。赤穂義士事。世儒之論有ニ異同一者。亦由下其學缺ニ近裏工夫一。不上認ニ自家惻隱之心一。誠如ニ來諭所レ論者一。敬服。至レ今世皆以ニ義士一目レ之者。蓋自ニ鳩巣一始。

今に至るまで世皆義士を以て之を目するは、蓋し鳩巣より始まる。

(一) 其の學問手近き修養鍛錬を缺く　(二) 他人の心事を推しはかりて同情する　(三) 御手紙の論は眞なり

鳩巣墨ニ守朱學一。深惡下當世好立ニ異義一者上。答ニ鈴木貞齋一書曰。僕嚮者以爲山崎氏之學。專ニ於理一而略ニ於分殊一者。知レ有ニ君臣之大義一。不レ知下湯武放伐與ニ君臣之義一

鳩巣朱學を墨守し、深く當世好んで異議を立つる者を惡む。鈴木貞齋に答ふる書に曰く、僕嚮に以爲へらく、(一)山崎氏の學が、(二)理一に專にして分殊に略なるは、君臣の大義あるを知りて、(三)湯武放伐と君臣の義と並び行はれて相悖らざるを知らず。(四)敬義に内外の分有るを知りて、(五)修身以上を以て敬以て内を直くすと爲し、(六)齊家以下を以て義以て外を方にすと爲す可からざるを知らざればなり。此は其大なる者なり。其他見る所多く(七)一理に執定して分殊を察せず。以て神道に流るゝ所以なり。然れども今にして之を思ふに、其理一なるは義理の一隅を

之徒一互相輕。金華一日來見二鳩巣一。出二其得意文一篇一示レ之。且求二刪正一。鳩巣一過稱レ善。金華彊乞レ正。乃削二二十字一更益二五字一。金華不レ喜而去。至二翌日一質二諸南郭一。南郭不レ得レ決焉。又質二諸徂徠一。徂徠視下鳩巣所二竄改一者上曰。如レ此而後成レ文。於レ是其徒始重二鳩巣一。

して之を示す。且つ刪正(三)を求む。鳩巣一過して善と稱す。金華彊ひて正を乞ふ。乃ち二十字を削り更に五字を益す。金華喜ばずして去る。翌日に至り諸を南郭に質す。南郭決することを得ず。又諸を徂徠に質す。徂徠、鳩巣が竄改(四)する所の者を視て曰く、此の如くにして後文を成すと。是に於て其徒始めて鳩巣を重んず。

(一) 物徂徠の一派を指す、徂徠の號を蘐園といふ　(二) 平野金華　(三) 添削を乞ふ　(四) 削りあらたむ

赤穗遺臣一大擧。鳩巣獨稱二贊之一。紀曰二義人錄一。又答二鈴木貞齋一書

赤穗遺臣の一大擧、鳩巣獨り之を稱贊し、紀して義人錄と曰ふ。又鈴木貞齋に答ふる書に曰く、赤穗義士の事、世儒の論に異同あるは、亦其學近裏工夫(一)を缺き、自家惻隱(二)の心を認めざるに由ると。誠に來諭(三)論ずる所の者の如し。敬服すと。

造詣。非二曲學淺識之徒一也。既而翁寓二處敝邑。相與優游上二下其議論一十二年於今一矣。常得二以レ虛往實歸。日聞二其所レ不レ聞。解二我之惑。辨二我之疑。誘二我之善。戒二我之惡。有レ所二視而取レ法。有レ所二畏而不レ爲。使三我免三以陷二於放僻邪侈一者。翁力爲レ多。豈古人所レ謂徵二斯人一誰與歸者歟。又作二祭文一曰。始吾見二公於京師。尋復來二辱於北陸。爾來上二下議論。往復切偲。忠告善道。一以二道義一相期。而不肖弱質。賴レ公而勉强以進二於學一者。十二有七年於茲一云云。嗚呼公乎。遂棄レ吾而死邪。自レ今以往有レ惑。將二誰爲レ之辨。而有レ過。將二誰爲レ之規一耶。譬二之瞽而無レ相。倀倀乎其何之。

る。過在らば、將に誰か之が爲に規さんとするか。之を瞽(二〇)にして相無きに譬ふ。(二一)倀倀乎として其れ何にか之んと。

(一) 尊びつかふ　(二) 直清、即ち鳩巣　(三) 養溜を指して呼ぶ　(四) 木下順菴　(五) 批評　(六) 羽黑養溜　(七) めぐりあふ　(八) 志す所と學殖　(九) 學問不正に見識淺薄　(一〇) 自分と同地に寄寓す　(一一) 與に往來して議論を戰はす　(一二) むなしくして往き、みちて歸る、得るところある意　(一三) 養溜を視て手本とす　(一四) わがまゝにて心ねじけ、よこしまにしておごる　(一五) 范文正公の岳陽樓記に出づ　(一六) 辱くも御出でになる　(一七) 互ひに往來して勉勵しあひ、誠意を以て戒め善く導く　(一八) 道德義理を硏くを目的とす　(一九) 自分はかよわき性質　(二〇) 盲人に介添人無きが如し　(二一) 行くべき道に迷ふ、禮記の字句に取る

鳩巣與二護苑

鳩巣、護苑(一)の徒と互に相輕んず。金華(二)一日來つて鳩巣を見、其得意の文一篇を出

其答書曰。清自レ幼好レ學。有下略得二古人遺意一者上。所二見聞一士大夫亦頗多。然於二義理一。則必得二高明之許可一以自信。於二文辭一則必經二木翁之品題一以自足。私心自謂。二公天下之知己也。故平生以二今世有二二公一爲レ樂耳。又答二遊佐木齋一書曰。與二羽翁一一邂二逅於京師一。見二其趣向

必ず木翁(四)の品題(五)を經以て自ら足る。私心自ら謂ふ、二公は天下の知己なり。故に平生今世二公あるを以て樂と爲すのみと。又遊佐木齋に答ふる書に曰く、羽翁(六)と一たび京師に邂逅(七)す。其趣向造詣(八)を見るに、曲學淺識(九)の徒に非ざるなり。既にして翁敝邑(一〇)に寓處す。相與に優游(一一)其議論を上下すること今に十年なり。常に虛(一二)を以て往き實にして歸るを得、日に其聞かざる所を聞き、我が惑を解き、我が疑を辨じ、我が善を誘ひ、我が惡を戒む(一三)。視て法を取る所有り。畏れて爲ざる所あり。我をして以て放僻邪侈(一四)に陷るを免れしむること、翁の力多しと爲す。豈に古人(一五)の所謂斯の人なかりせば誰と與に歸せんといふ者かと。又祭文を作つて曰ふ、始め吾れ公を京師に見、尋いで復北陸に來辱(一六)す。爾來議論を上下し、往復切偲(一七)、忠告善道、一に道義(一八)を以て相期す。而して不肖(一九)弱質、公に賴つて勉強以て學に進むこと、玆に十有七年云云。嗚呼公や、遂に吾を棄てて死するか。今より以往惑有らば、將に誰か之が爲に辨ぜんとす

原多二後傑一。而皆爲二鳩巣一讓レ席云。正徳辛卯。擧二大府儒員一。遂得二信任一。其所レ著亦不レ少。而六諭演義大意。五倫五常名義。皆奉レ旨撰レ之。

其先備中英賀郡人也。故其擧二郷貫一。常稱二英賀一。又其居二加賀一時。嘗買二廢屋一住レ之。因扁以二鳩巣一。遂以爲二別號一。有レ記見二文集一。

其先は備中英賀郡の人なり。故に其(一)郷貫を擧げ、常に英賀と稱す。又其の加賀に在る時、嘗て廢屋を買つて之に住す。因て(二)扁するに鳩巣を以てし、遂に以て別號と爲す。記有り、文集に見ゆ。

(一) 故郷、本籍地　(二) 扁額に書して掲ぐ

羽黒成實。字養潛。近江人。宦二于彦根一。後致仕從二加賀一。此人學二於闇齋一。有二儒行一。鳩巣嘗嚴二事之一。

羽黒成實、字は養潛、近江の人なり。彦根に宦し、後致仕して加賀に從る。此人闇齋に學び儒行有り。鳩巣嘗て之に(一)嚴事す。其答書に曰く、(二)清幼より學を好み、略古人の遺意を得ること有り、見聞する所の士大夫亦頗る多し。然れども義理に於ては、則ち必ず(三)高明の許可を得以て自ら信ず。文辭に於ては則ち

室直清。字師禮。又字汝玉。小字新助。號ニ鳩巣一。又號ニ滄浪一。備中人。仕ニ大府一。

鳩巣自レ幼耽ニ嗜文籍一。倦不レ知レ息。年甫十五。出仕ニ加賀侯一。一日侯命講ニ大學一。義理明辨。侯以爲ニ異器一。乃令下入ニ京師一受中業木下順菴上。自レ是學日益精。文日益進。木門

室直清

室直清、字は師禮、又の字は汝玉、小字は新助、鳩巣と號す。又滄浪と號す。備中の人。大府に仕ふ。

鳩巣幼より文籍に耽嗜し(一)、倦んで息むことを知らず。年甫めて十五、出でて加賀侯に仕ふ。一日侯命じて大學を講ぜしむ。(二)義理明辨なり。侯以て異器と爲す。(三)乃ち京師に入りて業を木下順菴に受けしむ。是より學日に益ゝ精しく、文日に益ゝ進む。木門原俊傑多し。而も皆鳩巣の爲に席を讓ると云ふ。正德辛卯(四)、大府の儒員に擧げられ、遂に信任を得。其の著す所亦少なからず。而して六諭演義大意・五倫五常名義は、皆旨(五)を奉じて之を撰ぶ。

(一) たしなみふける　(二) 意義明白に說く　(三) すぐれたる人物　(四) 元年　(五) 將軍の命によりて撰述す

琴二家兄一詩上。此白石未レ生。父養二某氏子一爲レ子。後仕二相馬侯一。所レ謂家兄者是也。

鳩巣文集載二白石墓記幷銘一。其志行履歴可二略見一。而淺草報恩寺。有二白石墓一焉。石方僅尺餘。正面題二新井源公之墓一。左側惟記二筑後守從五位下。諱君美。年六十九。享保十年五月十九日卒二十四字一而已。

鳩巣文集に白石の墓記并に銘を載す。其志行履歴略見る可し。淺草の報恩寺に、白石の墓有り。石方僅かに尺餘、正面に新井源公之墓と題し、左側には惟筑後守從五位下、諱君美、年六十九、享保十年五月十九日卒の二十四字を記すのみ。

(一) 志行行動と履歴　(二) 石碑僅かに一尺角餘

古今著書之富。莫レ若二白石一焉。併下未二脫藁一者上。凡一百六十餘種。今尙存二於其家一云。

古今著書の富なる、白石に若くはなし。未だ脫藁せざる者を併せて、凡そ一百六十餘種、今尙ほ其家に存すと云ふ。

(一) 草稿を書き上ぐ

其人之言曰。日出之邦源大官。骨清氣豪身桓桓。胷中壯略龍虎祕。筆下文章星斗蟠。可レ謂國家之爪牙萬里折衝之臣矣。其二曰。腰下秋水端從レ上賜。身上水干攝籙所レ賂。踞二乎皋比之上一。傲二睨日月之表一。口津津腹便便。天下樞機參二乎其間一。推レ誠及レ物拯二濟萬人一。神化丹青渾成二儀表一。將歷二百世一而眞宰儼然不レ可レ奪者歟。

として奪ふ可からざる者かと。

(一) 高玄岱 (二) 屑くも之を薄くすりへらす能はず (三) がら〳〵とまろばす能はず (四) 眉の間の火の字の如き皺、耳の上の一本の毛、與に白石の人相 (五) 電光の如く閃く (六) 機略が變化に應じて自由自在 (七) 靜かに手を拱き、怒りて頭を柱に碎かざらしむ (八) 韓客 (九) 白石 (一〇) 武勇のさま (一一) 胸中の謀略は龍虎のひそみかくるゝ如く壯んに、筆下の文章は星斗の大空に散在する如く見事 (一二) 爪牙の如く國家を拒ぎ守り、萬里の外邦に使して談判して國を辱しめざる臣 (一三) 刀 (一四) かりぎぬに似たる一種の服 (一五) 攝政關白の意、高貴の家柄 (一六) 虎の皮に坐して日月の表に傲然睥睨す、虎の皮は將軍又は儒者の坐席 (一七) 多くして溢るゝさま、此は才辯にいふ (一八) 腹の肥大なるさま (一九) 政治上の要機 (二〇) 神々しき風采精神凡て萬人の手本となる (二一) 眞宰の精神畫像の上にあり〳〵と存して百世の後と雖も犯す可らず

白石無二兄弟一。唯有二姊妹一皆早沒。而集中有下到二信夫郡一

白石兄弟無し。唯姊妹有りしも皆早く沒す。而るに集中信夫郡に到つて家兄に奉ずる詩有り。此れ白石未だ生れず、父、某氏の子を養ひて子と爲す。後相馬侯に仕ふ。所謂家兄とは是なり。

聖世ニ應レ無レ恨。死作ニ閻羅一足レ有レ爲。蓋記ニ其平生之言ニ云。

高天漪作ニ白石像贊二首一。其一曰。誰道是白石。磷磷不レ可レ磨。誰道是非ニ白石一。磊磊不レ可レ轉。眉間火字耳上一毫。兩目流レ光礣礣。一機應レ變縱橫。不レ然韓客殿上。爭得レ使ニ渠從容斂レ手不一レ碎ニ頭柱一乎。而乃

(一)高天漪、白石が像の贊二首を作る。其一に曰く、誰か道ふ是れ白石と。(二)磷磷磨す可からず。誰か道ふ是れ白石に非ずと。(三)磊磊轉ずべからず。(四)眉間の火字耳上の一毫。兩目光を流して礣礣。(五)一機變に應じて縱橫。(六)然らずんば韓客殿上、爭でか渠をして(七)從容手を斂め、頭を柱に碎かざらしむるを得んや。(八)乃ち其人の言に曰く、日出の邦源大官、(九)骨淸く氣豪に身桓桓。(一〇)胷中壯略龍虎祕み、(一一)筆下の文章星斗嫐る。謂つ可し國家の爪牙萬里折衝の臣と。(一二)其二に曰く、(一三)腰下の秋水は端に上より賜はり、身上の水干は(一四)攝籙の贈る所。(一五)皐比の上に踞して(一六)日月の表に傲睨す。口津津(一七)腹便便、(一八)天下の樞機其間に參る。(一九)誠を推して物に及ぼし萬人を拯濟す。(二〇)神化丹靑渾て儀表を成す。將に百世を歷て眞宰儼然(二一)

㊀大名 ㊁閻魔大王 ㊂祇園南海

像二詩一云。蒼顔如レ鐵鬢如レ銀。紫石稜稜電射レ人。五尺小身渾是膽。明時何用畫二麒麟一。時奉レ使西上。初仕二堀田侯一時。寮友有二小瀧某者一。每謂二白石一曰。余少時受二兵法于由井正雪一。今觀二子之面容一。政與二正雪一絶相類。

る、五尺の小身渾て是れ膽、明時何ぞ用ひん麒麟に畫くをと。（時に使を奉じて西上せり。）初め堀田侯に仕ふる時、寮友に小瀧某といふ者有り。每に白石に謂つて曰く、余少時兵法を由井正雪に受く。今子の面容を觀るに、政に正雪と絶だ相類すと。

（一）靑黑き顏鐵の如く鬢髮銀の如く白し（二）、紫石は備州より出づる紫色の石にて角多し、稜稜は角立てる貌、此は眼光のするどきをいふ

少有二大志一常自誦曰。大丈夫生不レ得二封侯一。死當レ爲二閻羅一。祇南海作二哭詩一云。生逢二

少より大志有り。常に自ら誦して曰く、大丈夫生れて封侯たるを得ずんば、死して當に閻羅と爲るべしと。祇南海哭詩を作つて云ふ、生れて聖世に逢ふ應に恨無かるべし、死して閻羅と作る爲すこと有るに足ると。蓋し其平生の言を記すと云ふ。

與二佐久間洞巖一書中云。吾故人莫二鶴樓如一焉。中秋月三十一年必偕賞レ之。今年亦携二子來。有レ詩云。滿堂明月中秋色。歸路淸風十里程。

嘗謂二鶴樓一曰。南郭先生名譽甚噪。余欲二往一見一者有レ年。然一旦被二簡任一居二內班一。則不レ得三私造二處士許一。彼亦既爲二名家一不レ可二引致一。以レ故至レ今不レ果。豈不二遺恨一乎。鶴樓曰。是何難之有。予請爲二紹介一。明日見二之於先生一。乃過二南郭一。語以二此言一。南郭喜卽與二鶴樓一共來。白石倒屣迎入。遂定レ交。

嘗て鶴樓に謂つて曰く、南郭先生名譽甚だ噪し。余往いて一見せんと欲すること年有り(一)。然るに一旦簡任せられて(二)內班に居る。則ち私に處士(三)の許に造ることを得ず。彼亦既に名家なれば引致す(四)可からず。故を以て今に至るも果さず。豈に遺恨ならずやと。鶴樓曰く、是れ何の難きこと之れ有らん。予請ふ、紹介をなし、明日之を先生に見はしめんと、乃ち南郭に過り、語るに此言を以てす。南郭喜んで卽ち鶴樓と共に來る。白石倒屣(五)迎へ入れ、遂に交を定む。

(一) 多年 (二) えらび任ぜられて (三) 浪人 (四) 呼び來る (五) はきものを倒にする程、あわてて迎ふるなり

白石自題二肖

白石自ら肖像に題する詩に云ふ、蒼顏(一)鐵の如く鬢銀の如く、紫石(二)稜稜電人を射

紛五節舞容閑。一痕明月茅渟里。幾片落花滋賀山。提㆑劍膳臣尋㆓虎跡㆒。捲㆑簾淸氏對㆓龍顏㆒。盆梅剪盡能留㆑客。濟得隆冬無㆑限艱。蓋容奇雪字國譯也。故此作皆采㆓故事於此邦㆒。

(一)天性上手　(二)詩のたくみなること當時敵無し　(三)才のさときを見るに足る　(四)伊弉諾伊弉冊の二神天の浮橋に立たし天の瓊矛をもつて滄溟を探りたまひし故事　(五)天武天皇吉野離の宮に在せし時日暮琴を彈じたまひしに向ひの山より怪雲立上り雲中に神女現れて琴の調に合せて舞ひ袖を飜すこと五度なりしといふ故事に基づき、歴代の大嘗會毎に五節の舞を行はせらる。紛々は舞姫の袖飜るさま　(六)膳臣が朝鮮に使して虎に子を奪はれ、雪中に印せる跡を尋ねて虎を殺し、其子の讐を復す　(七)一條帝が「香爐峰の雪は」とのたまひしに對し、淸少納言が其句の續なる「簾をかゝげてみる」を想出し、御簾を捲いて西山の雪を御覽に入れたる故事、此句は白樂天の詩なり　(八)謠曲鉢木にとる

白石以㆓經世㆒爲㆑任。故雖㆔詩至㆓工妙㆒。固不㆑欲㆓以敎㆑人。稱㆓門人㆒者至寡矣。田鶴樓獨以㆑詩稱㆓弟子㆒。白石與㆑之交態終始不㆑渝。

白石經世(一)を以て任と爲す。故に詩工妙に至ると雖も、固より以て人を敎ふるを欲せず。門人と稱する者至つて寡なし。田鶴樓(二)獨り詩を以て弟子と稱す。白石之と交態(三)終始渝らず。佐久間洞巖に與ふる書中に云ふ、吾が故人(四)鶴樓に如くはなし。中秋の月三十一年必ず偕に之を賞せり。今年亦二子を携へ來る。詩あり云ふ、滿堂明月中秋の色、歸路淸風十里の程と。

(一)世を經綸するを任務とす　(二)益田鶴樓　(三)交際することいつも變らず　(四)友人、知人

清翰林鄭任鑰。自寫作二之序一。此本復經二琉球一至二日本一。終落二白石手一。白石珍二藏之一。而序中指二白石一。書二新堪一。此勘堪音相近。蓋誤二傳新井勘解由一。而略二稱之一云。

白石之を珍藏す。而して序中白石を指して、新堪と書す。此れ勘・堪音相近し。蓋し新井勘解由を誤り傳へて、之を略稱すと云ふ。

（一）翰林學士

白石詩才亦爲二天縱一。其精工當世無レ敵。雖三一時出二遊戲一。有下足三以見二其敏警一者上。嘗過二某許一。主人書二容奇二字一索レ詩。輒援レ筆立就。曾下二瓊鋒一初試レ雪。紛

白石詩才亦天縱たり。其精工當世敵なし。(二)一時遊戲に出づと雖も、以て其敏警を見るに足る者有り。(三)嘗て某の許に過る。主人容奇の二字を書して詩を索む。輒ち筆を援つて立どころに就る。曾て瓊鋒を下して初めて雪を試む、(四)紛紛たる五節舞容閑なり、(五)一痕の明月茅渟の里、幾片の落花滋賀の山、劍を提げて膳臣虎跡を尋ね、(六)簾を捲いて清氏龍顏に對す、(七)盆梅剪り盡して能く客を留め、(八)濟ひ得たり隆冬限なきの艱を。蓋し容奇は雪の字の國譯なり。故に此作皆故事を此邦に采る。

竦喪二其魄一。擊劍歌成血吹レ霧。機鋒觸處皆辟易。禮成樂奏賓主歡。王家寶典與レ日赫旬上。南海

自註云。韓客謂レ公曰。嘗聞貴國多下長二於擊劍之技一者上。今可レ得二幸一觀一。公曰。既レ之不レ可二還辨一。吾今爲レ客說二其涯略一。席上作二擊劍歌一篇一以示。

由下與二佐久間洞巖一書上觀レ之。白石號非レ有二深意一也。其少年視二古人姜白石黃白石沈白石等號一以爲二雅稱一。一時題二詩稿一。遂以爲二別號一。然爲レ取二之磨而不レ磷。涅而不レ緇。或陸奧地名一者皆非。

佐久間洞巖(一)に與ふる書に由つて之を觀れば、白石の號、深意有るに非ず。其少年のとき古人姜白石・黃白石・沈白石等の號を視て、以て雅稱(二)と爲し、一時詩稿に題し、遂に以て別號と爲す。然るに之を磨(三)して磷せず、涅して緇せず、或は陸奧の地名に取れりと爲すは皆非なり。

(一) 名は義和、仙臺藩の人、游佐木齋に就學す。又新井白石と親しく交る (二) 好き稱號 (三) みがきて磨りへらず、染めても黑まず

入貢琉球人。得二白石詩草一歸。遂致二之淸一。

入貢の琉球人、白石詩草を得て歸り、遂に之を淸に致す。淸の翰林(一)鄭任鑰、自ら寫して之が序を作る。此本復琉球を經て日本に至り、終に白石の手に落つ。

使來聘。白石建議。饗二使者一止二申樂一奏二雅樂一等。多革二舊例一。或與二使者一廷二論禮法一。使者竟被二摧折一。祇南海賀二白石六十一七言古詩。有下韓之使者執二玉帛一。血面爭レ禮頑如レ石。公歷二西階一樞レ衣升。軒軒如レ霞擧二屋額一。腰帶紫陽太守印。眼如二紫電一髯如レ戟。按レ劍叱叱殿柱震。使者膽

る等、多く舊例を革む。或は使者と禮法を(四)廷論し、使者竟に(五)摧折せらる。(六)祇南海が白石の六十を賀する七言古詩に、韓の使者玉帛を執る、(七)血面禮を爭つて頑として石の如し。公(八)西階を歷衣を樞げて升れば、(九)軒軒霞の如く屋額に擧る。腰は帶ぶ紫陽太守の印。眼は紫電の如く髯は戟の如し。劍を按じて叱叱殿柱震ふ。(一〇)使者膽竦して其魄を喪ふ。擊劍歌成りて血霧を吹き、(一一)機鋒觸るゝ處皆辟易す。禮成り樂奏して賓主歡び、(一二)王家の寶典日と赫く、の句有り。(南海の自註に云ふ、韓客公に謂つて曰く、嘗て聞く、貴國、擊劍の技に長ずる者多しと。今幸に一觀を得可きやと。公曰く、之を觀ること(一三)遽に辨ず可からず。吾今客の爲に其涯略を說かんと、席上、擊劍の歌一篇を作く以て示すと。

(一) 元年 (二) 散樂、猿樂と同じ。滑稽を主とせる狂言 (三) 古昔唐樂の傳來して日本化せしもの (四) 政廳にて議論す (五) 論破せらる (六) 祇園南海 (七) 面を赤くして禮法を爭ふ (八) 西の階段より裳をかゝげて上る (九) 輕くあがること霞の如し (一〇) 使者膽をのゝきたましひを消す (一一) 白石の論鋒に當るもの皆屈服す (一二) 幕府を指す (一三) 早速には取計ひがたし

擇。請舍レ予薦レ彼。順菴嘆曰。世衰道微。日入二偸薄一。如レ子絶無。而僅有者。乃推二岡島予加賀一。後二年元祿癸酉。擧二白石予甲斐府一。時年三十七。

白石仕六年。文廟尙在二潛邸一遭レ災。爲賜二五十金一。白石謂都下數有レ火。今以二此賜一治二屋宇一。亦必當三一朝灰二洪恩一。豈可レ不二別有一レ所レ用乎。乃以二賜金一命二函人一。制二甲冑一領一。其意欲二一旦緩急擐以狗一レ節也。居五年果復遭レ災。家什蕩盡。獨以二其甲冑一隨レ身得レ無レ恙矣。鳩巢文集。有二源君美鎧記一。是也。

白石仕へて六年、(一)(文廟尙ほ潛邸にあり)災に遭ふ。爲に五十金を賜ふ。白石謂ふ、都下數〻火あり。今此賜を以て屋宇を治むるも、亦必ず當に一朝洪恩を灰にすべし。豈に別に用ふる所有らざる可けんやと、乃ち賜金を以て(二)函人に命じ甲冑一領を制す。其意一旦緩急あらば(三)擐いて以て(四)節に狗はんと欲するなり。居ること五年、果して復災に遭ひ、(五)家什蕩盡す。獨り其甲冑を以て身に隨へ恙無きを得たり。鳩巢文集に、源君美鎧記有り。是なり。

(一) 家宣公　(二) 甲冑を作る職人　(三) 甲冑にて身をかたむ　(四) 忠節をつくす　(五) 家の什物殘らず失はる

正德辛卯。韓

正德辛卯(一)、韓使來聘す。白石建議して、使者を饗するに、(二)申樂を止め(三)雅樂を奏す

窶甚。篋中止青錢三百。米三斗而已。曰。此未遑凍餓。意氣不少撓。順菴欲以薦諸加賀。岡島仲通。（名達之。號石梁。）加賀產。亦順菴門子也。聞之戚然語白石曰。予負笈遠遊若干年于玆。比得家書。老母日逼衰頹。倚閭待予歸。每一念至。百感攢心。如幸賴吾先生先容。得釋褐于本藩。則願足矣。白石卽告順菴。以此言曰。予求仕何國之

石梁と號す）は加賀の產、亦順菴の門子なり。之を聞いて戚然(四)として白石に語つて曰く、予笈を負うて遠く遊ぶこと玆に若干年。比ろ家書を得るに、老母日に衰頹に逼り、閭に倚つて(五)予が歸るを待つと。一念至る每に、百感心に攢る。(六)如し幸に吾先生の先容に賴つて、(七)褐を本藩に釋くことを得ば、(八)則ち願足れりと。白石卽ち順菴に告ぐるに此言を以てして曰く、予仕を求むる何れの國かこれ擇ばん。請ふ予を舍て彼を薦めよと。順菴嘆じて曰く、世衰へ道微にして、日に偸薄(九)に入る。子の如きは絕えて無くして、僅に有る者と。乃ち岡島を加賀に推し、後二年元祿癸酉、白石を甲斐府に擧ぐ。時に年三十七。

(一) まづしきこと (二) つゝちの中に銅錢三百文と米三斗あるのみ (三) 加賀の前田侯に推薦せんとす (四) うれふる貌 (五) 齊の王孫賈の母閭門に倚つて賈の歸るを待ちしより、母が遠遊の兒子を待つ意に用ふ (六) 一念これに思ひ及ぶ每に萬感胸にあつまる (七) 前以てのとりなし (八) 褐はいやしき衣服、之を釋くとは脫ぎすつる意にて、官職に就くこと (九) 輕薄

詩一萬首。因ニ健甫ニ求三韓客爲ニ之評一。則客請而接見。遂作レ序褒ニ揚之一。後入ニ木下順菴門一。健甫又爲ニ之介一。元祿戊辰健甫沒。臨レ沒謂ニ白石一曰。以ニ不朽一乞ニ先生一。（指ニ順菴一）書則累レ君。是以順菴作ニ墓記一。載ニ錦里文集一。而今見ニ其墓石一。左右後三面無ニ一字一。惟正面楷字題ニ西山順泰墓五字一。所謂墓記埋ニ之壙中一耳。（健甫墓。在ニ江戸下谷養玉院一）

（四）戊辰健甫沒す。沒に臨み白石に謂つて曰く、不朽（五）を以て先生（順菴を指す）に乞ひ、書は則ち君を累さんと。是を以て順菴墓記を作る。錦里文集に載す。今其墓石を見るに、左右後の三面には一字なく、惟正面楷字にて西山順泰墓の五字を題す。所謂墓記之を壙（六）中に埋むるのみ。（健甫の墓は、江戸下谷養玉院にあり。）

（一）朝鮮より來れる客　（二）面會す　（三）なかだち　（四）元年　（五）不朽に後世に殘す文の意にて碑文をいふ　（六）墓穴の中

辭ニ久留利一後。又遊ニ事堀田侯一。居十年不レ得レ志而去。時

久留利を辭する後、又堀田侯に遊事す。居ること十年志を得ずして去る。時に窶（一）甚だしく、篋（二）中止青錢三百、米三斗のみ。曰く、此れ未だ遙かに凍餓せずと。意氣少しも撓まず。順菴以て諸（三）を加賀に薦めんと欲す。岡島仲通（名は達、

佗日才當下於二文事一發上。新井氏其興乎。

初年從レ父宦二于久留利一。二十一與レ父共辭レ仕。於レ是貧甚。人或勸レ之。業レ醫若教レ字以取レ給。白石不レ從。一刻二意于經史一。時河邨瑞軒。殷富多藏レ書。乃就而借覽。瑞軒心知三白石神姿佗日當二貴顯一。因欲下配二其女一納以爲上レ壻。而白石不レ肯。

初年父に従つて久留利に宦す(一)。二十一にして父と共に仕を辭す。是に於て貧甚だし。人或は之に勸む、醫を業とし若しくは字を教へて以て給を取れと。白石從はず。一に意を經史に刻す(二)。時に河邨瑞軒、殷富(三)にして多く書を藏す。乃ち就いて借覽す。瑞軒心に白石の神姿(四)佗日當に貴顯たるべきを知り、因つて其女に配し納れて(五)以て壻と爲さんと欲す。白石肯ぜず。

(一) 仕ふ　(二) 苦心して經書史書を攻究す　(三) 富みさかゆ　(四) すぐれたる風采　(五) 其の女にめあはす

白石與二對馬西山健甫一名順泰。爲二舊友一。年十六。錄二所レ作

白石對馬の西山健甫（名は順泰）と舊友たり。年十六、作る所の詩一萬首を錄し、健甫に因つて韓客に之が評を爲さんことを求む。則ち客請うて接見(二)し、遂に序を作つて之を褒揚(一)す。後木下順菴の門に入る。健甫又之が介(三)を爲す。元祿

暦丁酉二月十日生二白石一。白石生而岐嶷聰慧。三歳寫レ字。六歳誦レ書。既長器資宏偉。才負二經綸一。其學洽聞多識。通二曉倭漢古今典故一。所二述作一之書。世稱二其有用一。善以二國字一紀レ事。是以雖二日用簡牘一。皆足二以傳一矣。又善賦レ詩。江邨北海稱爲二所謂錦心繡腸。咳唾成レ珠。嚶語諧レ韻者一。

世其有用を稱す。善く國字(六)を以て事を紀す。是を以て日用の簡牘(七)と雖も、皆以て傳ふるに足る。又善く詩を賦す。江邨北海稱して所謂錦心繡腸(八)、咳唾珠を成し(九)、嚶語韻に諧ふ者と爲す。

(一) 三年　(二) 幼時より人に秀でたること　(三) 器量資質偉大なり　(四) 國家經綸の才を有す　(五) 故事　(六) 日本文にてしるす　(七) 手紙　(八) 錦繡の如き美しき心腸　(九) 咳嗽(せき)してつばが飛びても珠玉となり、うはごとを言ひても韻律にかなふ。名詩の言に從つて出で來る形容

比二七歳一。父母拉觀二戲劇一。一一記認置二諸胸臆一。歸語レ之。其次序一無レ所レ違。父異レ之曰。是兒非レ常。

七歳の比、父母拉して戲劇(一)を觀る。一一記認(二)して諸を胸臆に置く。歸つて之を語るに、其次序一も違ふ所無し。父之を異として曰く、是の兒常にあらず。佗日才當に文事に發すべし。新井氏其れ興らんかと。

(一) 芝居狂言　(二) 記憶し置く

得二野水月縦横句一。義公分爲レ韻。與二近臣一同賦。公探二得月字一。有二雲收月明衆星稀。仰見文苑一輪月句一。此即言二澹泊前程一也。至レ是果然。

源君美。字在中。新井氏。小字勘解由。初名璵。號二白石一。又號二錦屛山人一。江戸人。仕二大府一。敍二從五位下一。任二筑後守一。

白石父正濟。常陸人。年少來二江戸一。出仕二土屋侯一。（久留利二萬千石。延寶己未國除。）母坂井氏。以二明

源君美

源君美、字は在中、新井氏、小字は勘解由、初名は璵、白石と號す。又錦屛山人と號す。江戸の人。大府に仕へ、從五位下に敍し、筑後守に任ず。

白石の父正濟は、常陸の人なり。年少江戸に來り、出でて土屋侯（久留利二萬千石、延寶己未國除かる）に仕ふ。母は坂井氏、明曆丁酉(一)二月十日を以て白石を生む。

白石生れて岐嶷(二)聰慧、三歳字を寫し、六歳書を誦す。既に長じて器資(三)宏偉、才、(四)經綸を負ふ。其學洽聞多識、倭漢古今の典故(五)に通曉す。述作する所の書、

蒔花灌園梅香里。七境分趣逃品題。三徑就荒自鋤理。謝眺宅前唯青山。杜甫舍邊皆白水。百年消憂樂琴書。平生宿好翫圖史。借問從容白玉堂。何如穩眠烏皮几。晩節如此人所難。古來儒官幾相似。我醉高歌老圖行。誰知曲曲欽素履。相思何無相見期。伊人宛在水中沚。

當義公之世。史館得人尤盛。及公薨。一時名彥相尋凋喪。澹泊獨存爲世所瞻仰。徂徠書曰。先侯業已卽世。一時鄒枚之輩。寥落殆盡。而足下獨以朱先生高第弟子。歸然以存。有如靈光。初澹泊夢

義公の世に當つて、史館人を得る尤も盛なり。公薨ずるに及び、一時名彥相尋いで凋喪す。(一)澹泊獨り世に瞻仰せらる。徂徠の書に曰く、先侯業に已に世に卽く。(二)一時鄒・枚の輩、(三)寥落殆ど盡く。(四)而るに足下獨り朱先生高第の弟子を以て、歸然(五)として以て存す。靈光の如き有りと。初め澹泊夢に野水月縱橫の句を得、義公分つて韻と爲し、近臣と同じく賦す。公、月の字を探り得、雲收まりて月明かに衆星稀なり、仰ぎ見る文苑(六)一輪の月の句有り。此れ卽ち澹泊の前程(七)を言へるなり。是に至つて果して然り。

(一)名士つぎつぎに無くなる　(二)死す　(三)鄒陽・枚乘の徒、共に梁の孝王に從へる學者　(四)うらぶれて殆ど無くなる　(五)獨りぬきんでて存す　(六)文壇　(七)前途

創年。見君盛壯先著レ鞭。人道小心似ニ高允一。邦慶良史得ニ馬遷一。材擅ニ三長一堪レ總レ局。文經ニ百鍊一成ニ大編一。直筆無レ隱鬼應レ哭。闕文存レ疑世可レ傳。嘉績何翅三載考。華閥已擢羣士先。梁園授レ簡馬卿重。楚臺設レ醴穆生賢。年徂事謝今已矣。優恩賜レ告舊學士。家居自託老圃名。

る、我醉うて高歌す老圃行、誰か知る曲曲素履を欽するを、相思ふ何ぞ相見の期無からん、伊の人宛として水の中沚に在り。

(一) 德川幕府の宗室を漢家に譬へいふ (二) 德川光圀、西山に隱居せるを以て稱す (三) 淮南王劉安が淮南子を編せるの、義公が大日本史編纂に比較せり (四) ぬきん出たる貌 (五) 河間王獻、漢景帝の子、學を好み古を尙び、多く舊書を集め、儒者を好ぶ、故に山東の諸儒多く之に從ふといふ、義公が學者を多く集めたるに比す (六) 西山公死去してより二十年 (七) 陽明學派、陽明の生地より彼の學派を姚江派と稱す、舜水陽明を崇信せるよりいふ (八) 彰考館開かれ大日本史編修開始されたる當時、澹泊其長たりしよりいふ (九) 字は伯華、魏に仕へ太子に經を授く、崔浩と國史を修め、事に坐して殺されんとして後赦さる、小心愼密の名あり (一〇) 史記を著したるは司馬遷なり、大日史を編修する任にあたれるは澹泊なり、史馬遷に比して適任なるを稱す (一一) 才學識の三長、卽ち澹泊は史を書くに三長具はりて能く之を活用せり (一二) 忌憚なく事實を書き又は批評して鬼神を泣かしむ (一三) 立派なる成績は三年に一度の取調のみならんや、古は三年に一回官史の治績を勘考して賞罰す (一四) 立派なる家柄、卽ち水戶家に於て澹泊を諸學士の筆頭に擬んづ (一五) 司馬相如が梁の孝王に從つて梁に遊び、子虛賦を作り、後此賦に依て漢の武帝にめさる (一六) 楚の元王が穆生の酒を嗜まざるより、宴會每に其爲に醴卽ち甘酒を設けて厚遇せる故事 (一七) 主君のてあつき御恩にて休暇を賜ふ (一八) 上述本文の七覽として擧げたる如く、菊を七所に分ち各別種のものを植えたるいふ (一九) 三徑とは蔣元卿といふ隱者が其庭園に三條の徑路をつくりしより出づ、此句は陶淵明の歸去來辭の「三徑荒に就き、松菊猶は存す」をひき、澹泊の隱居して菊を愛するに比せり、鋤理は圃をすく意 (二〇) 謝眺といひ杜甫といふ、皆隱者の境涯に比するなり

紅藥欄。蟠藤岡。涼月樹。採蓮步。黃花塢。老耆園一也。又作二老圃行一。曰。漢家宗室禮數崇。文武最推西山公。著書還笑淮南陋。大雅卓爾河間同。千金購求天下籍。始開二史局一籠二英雄一。忽捐二館舍二十載。當時宿儒安積翁。家學親承舜水傳。餘姚一派流二日東一。惟昔國史草

崇し、文武最も推す西山公(二)、著書還つて笑ふ淮南(三)の陋、大雅卓爾(四)として河間(五)に同じ、千金購求す天下の籍、始めて史局を開き英雄を籠す、忽ち館舍(六)を捐てて二十載、當時の宿儒安積翁、家學親しく承く舜水(七)の傳、餘姚一派日東に流る、(八)惟ふ昔國史草創の年、見る君盛壯先づ鞭を著くるを、人は道ふ小心高允(九)に似たりと、邦は慶す良史馬遷(一〇)を得たるを、材三長(一一)を擅にし局を總ぶるに堪へ、文百錬を經て大編を成す、(一二)直筆隱す無く鬼應に哭すべく、闕文疑を存して世傳ふ可し、嘉績(一三)何ぞ翅三載の考のみならん、華閥(一四)已に擢ず羣士の先、梁園(一五)簡を授け馬卿重く、楚臺(一六)醴を設く穆生が賢、年徂き事謝し今已みぬ、優恩(一七)告を賜ふ舊學士、家居自ら託す老圃の名、花を蒔ゑる園に灌ぐ梅香里(一八)、七境趣を分ち迭に品題、三徑(一九)荒に就き自ら鋤理す、謝朓宅(二〇)前唯だ青山、杜甫舍邊皆白水、百年消憂琴書を樂み、平生宿好圖史を翫ぶ、借問す從容白玉の堂、何如穩眠烏皮の几、晚節此の如きは人の難しとする所、古來儒官幾か相似た

賜二佳品十餘種一。寄二田子愛一書曰。亡師朱文恭。有下乞三菊於二義公一帖上。載在二遺文外集一。覺百事不レ能レ學二文恭一。而唯此一事。稍存二餘風一。不二亦可レ羞之甚一哉。又賀二鳩巣七十一序曰吾百事不レ能。而唯知レ養レ菊。培植三十年。頗一能得二其要領一。乃以レ菊譬二鳩巣一。以成二一篇一。鳩巣亦其黄花塢詩自註曰。主人有二菊癖一。凡諸家奇品。莫レ不三旁搜並收而栽二培之一。種藝尤精。品第極嚴。毎レ至二秋時一。五色燦爛。以奪二人目一。而安積氏之菊聞二於國中一云。

み、稍餘風を存す(一)。亦羞づ可きの甚しきものならずやと。又鳩巣が七十を賀する序に曰く、吾れ百事能はず、唯々菊を養ふことを知る、培植三十年、頗る能く其要領を得たりと、乃ち菊を以て鳩巣に譬へ、以て一篇を成す。鳩巣亦其黄花塢詩の自註に曰く、主人菊の癖有り。凡そ諸家の奇品、旁搜並收し(二)て之を栽培せざるなし。種藝尤も精(三)、品第極めて嚴(四)、秋時に至る毎に、五色燦爛として、以て人目を奪ふ。而して安積氏の菊、國中に聞ゆと云ふと。

(一) 朱舜水の遺風を保存す　(二) あまねく探して手に入れる　(三) 栽培術尤もたくみ　(四) 品評極めてきびし

鳩巣有二老圃七覽詠詩一。七覽謂二碧於亭。

鳩巣、老圃七覽詠の詩有り。七覽とは碧於亭、紅藥欄、蟠藤岡、涼月樹、採蓮歩、黄花塢、老蒼園を謂ふなり。又老圃行を作る。曰く、(一)漢家の宗室禮數

覺自註曰。安積諸書皆作二淺香一。按淺香本貫近江安積陸奥。臣祖先實奥州安積郡人。故臣父貞吉稟レ命更二安積一

澹泊名振二四方一。其修レ書請レ益者。不レ可二枚擧一。而謙虚自卑。於下其親受二提誨一者上。不下敢以二弟子一視上レ之。意謂吾安能足レ爲二人師一。其所二結構一文詩。必示二稾於衆人一以丐レ正。有二一字可レ議。輒改撰。是以人皆益敬服焉。

澹泊、名四方に振ひ、其の書を修め益を請ふ者、枚擧す可からず。而も謙虚自ら卑うし、其親しく提誨(一)を受くる者に於ても、敢へて弟子を以て之を視ず。意謂へらく吾れ安ぞ能く人の師たるに足らんと。其の結構する所の文詩は、必ず稾(二)を衆人に示して以て正を丐ひ、一字の議すべき有れば、輒ち改撰す。是を以て人皆益〻敬服す。

(一) 導きをしふ　(二) 草稿を多くの人に示して訂正を乞ふ

澹泊甚愛レ菊。園中多栽レ之。嘗上二百種于守山侯一。侯亦

澹泊甚だ菊を愛し、園中多く之を栽う。嘗て百種を守山侯に上る。侯亦佳品十餘種を賜ふ。田子愛に寄する書に曰く、亡師朱文恭、菊を義公に乞ふの帖あり。載せて遺文外集に在り。覺、百事文恭を學ぶこと能はず。唯此一事の

幼時學二舜水一。能得二華音一。湖亭涉筆曰。今犬馬之齒將レ頽。而學業不レ成。其所レ存者。稍辨二華音一一事。由二其課程嚴峻晨讀夕誦一。故至レ今不レ忘耳。雨伯陽橘窗茶話載。水戸淺香覺兵衞。紀州高瀨喜朴。二人俱通二唐音一。覺則能讀而不レ會二唐話一。喜則能講而不レ能レ讀レ書。正孟子所謂不レ爲也。非レ不レ能也者。蓋用レ心與レ否之別也。橘窗茶話。安積作二淺香一非レ是。烈祖成

幼時舜水に學び、(一)能く華音を得たり。湖亭涉筆に曰く、今犬馬の齒將に頽れん(二)として、學業成らず。其の存する所は、稍〻華者を辨ずる一事なり。其課程嚴峻にして晨讀夕誦せし(三)に由る。故に今に至つて忘れざるのみと。雨伯陽の(四)橘窗茶話に載す、水戸の淺香覺兵衞、紀州の高瀨喜朴、二人俱に唐音に通ず。覺は則ち能く讀んで唐話を會せず。(五)喜は則ち能く講じて書を讀むこと能はず。正に孟子の所謂爲さざるなり、能はざるに非ざる者なり。蓋し心を用ふると否との別なり。(橘窗茶話に、『安積を淺香に作る。是に非ず。烈祖成蹟自註に曰く、安積をは諸書に皆淺香に作る。按ずるに淺香の本貫は近江、安積は陸奧なり。臣が祖先は實に奧(六)州安積郡の人なり。故に臣が父貞吉命を稟けて安積に更む。』)

(一)支那音を會得す　(二)年齡徒らに老いんとす　(三)朝早くより讀んで夕方に及ぶ　(四)雨森芳洲　(五)支那語を解せず　(六)本籍地

乃僕中年以後一已見識耳。云云。今夏偶見三隨筆中援二引程朱之書一。躍然自喜三所レ見果不レ妄矣。及レ承二清誨一。始知足下中年既覺二宋儒之陋一。六經不三復須二註解一。人之知愚相去天淵如レ此。今欲三改レ頭換レ面革二去舊習一。則齒髮日益頽落。志氣亦因衰耗。峩眉閬苑。可レ望而不レ可レ即。付二之一浩歎一而已。又就二南郭書一考レ之。當將レ薦二南郭於水府一。又其於二通鑑一。喜二涑水舊本一。不レ喜二文公綱目一。序二湖亭涉筆一曰。綱目書法發明雖二議論剴切一。頗有下傷二於苛酷一者上。設使二其人面聞一レ之必有レ辭焉。豈心服哉。

喜び、文公綱目を喜ばず。湖亭涉筆に序して曰く、綱目の書法發明(一三)、議論剴切(一四)なりと雖も、頗る苛酷(一五)に傷るゝ者あり。設し其人に面のあたり之を聞かしめば、必ず辭有らん。豈に心服せんやと。

(一) 程子の學、伊は程伊川の伊、洛は其生地洛陽の洛　(二) 守株は時勢にかゝらず古人の說を墨守すること、もと韓非子の、兎が株につき當り死せるを見、株を守りて兎を待ちし故事より出づ、膠柱は融通のきかざること、ことぢ(柱)ににかは(膠)して瑟を鼓すといふ故事に出づ　(三) 朱舜水　(四) 其の頃は子供のこととて古學とは如何なることかを知らず　(五) 引用、引き用ふ　(六) 御さとし　(七) 人の智あると愚なると天淵の隔りあり　(八) 全然舊習を革む　(九) 齒や髮が脫けおち元氣無くなる　(一〇) 峨眉は山の名、支那四川省嘉定州にあり、閬苑は崑崙山上にありと傳へらる、仙人のすみか、共に遠く望むのみにて行き得ざるたとへ　(一一) 嘆息してやむのみ　(一二) 司馬溫公の說　(一三) 朱子の綱目の書き方や發見する所　(一四) 議論適切　(一五) 餘りひど過ぎる

澹泊主二伊洛學一。然不二守株膠柱一焉。與二徂徠金華輩一數通レ書爲レ交。答二徂徠一曰。幼師二事朱文恭。徒有二其名一而無二其實一。亦如二前書所一レ陳也。文恭務爲二古學一。不三甚尊二信宋儒一。議論往往有二不レ合者一。載在二文集一。可レ徵也。當時童蒙不レ能レ知三其所レ謂古學爲二何等事一。至レ今爲レ憾。尊二信宋儒一。

澹泊(一)、伊洛の學を主とす。然れども守株膠柱(二)せず、徂徠・金華の輩と數〻書を通じて交をなす。徂徠に答ふるに曰く、幼にして朱文恭(三)に師事し、徒に其名有りて其實なし。亦前書に陳ぶる所の如し。文恭務めて古學を爲し、甚だ宋儒を尊信せず。議論往往合せざる者あり。載せて文集に在り。徵す可きなり。當時(四)童蒙其の所謂古學が何等の事たるかを知る能はず。今に至り憾と爲す。宋儒を尊信せしは、乃ち僕中年以後一己の見識のみ、云云。今夏偶〻隨筆中に程朱の書を援引(五)するを見、躍然として自ら見る所果して妄ならざるを喜ぶ。淸誨(六)を承くるに及び、始めて知る足下中年既に宋儒の陋を覺り、六經復詿解を須たざるを。(七)人の知愚相去る天淵此の如し。今頭を改め面を換へ(八)舊習を革め去らんと欲すれば、則ち齒髮(九)日に益〻頽落、志氣亦因て衰耗し、蛾眉・閬苑(一〇)、望む可くして即く可からず。之を一浩歎(一一)に付するのみと。又南郭の書に就いて之を考ふるに、嘗て將に南郭を水府に薦めんとす。又其の通鑑に於ける、涑水(一二)の舊本を

澹泊本稱二角兵衞一。俊才好レ學。義公以爲其器不レ減二乃祖一。乃命襲二稱覺兵衞一。既而祿屢增。職至二番頭一。初年十三。始來二江戶一。師二舜水一。居三歲病レ痘歸レ鄕。故親受二句讀一者。僅孝經小學論語耳。及レ長博學能文。而史學尤擅長。乃入二彰考館一。充二日本史編修總裁一。全編二百四十六卷。稿以二享保庚子一脫。前後與者無慮數十百人。而澹泊之功居レ多。澹泊至レ老氣力不レ衰。其撰二烈祖成蹟二十卷一。時年七十二云。

澹泊本角兵衛と稱す。俊才にして學を好む。義公以爲へらく其器乃祖に減ぜず(一)と。乃ち命じて覺兵衛を襲稱せしむ。既にして祿屢々增し、職、番頭に至る。初め年十三、始めて江戶に來り、舜水を師とす。居ること三歲、痘(二)を病んで鄕に歸る。故に親しく句讀を受けしは、僅かに孝經・小學・論語のみ。長ずるに及び博學能文にして、史學尤も擅長なり(三)。乃ち彰考館(四)に入り、日本史編修總裁に充つ。全編二百四十六卷。稿、享保庚子(五)を以て脫す。前後與る者無慮數十百人。而して澹泊の功多きに居る。澹泊老に至るも氣力衰へず。其の烈祖成蹟二十卷を撰するや、時に年七十二なりと云ふ。

(一) 其の器量祖父に負けず　(二) 天然痘、はうさう　(三) 「史に三長あり」の句より出づ、即ち歴史を書くには才學識の三長を備ふべしとの意、擅長とは即ち三長をほしいまゝにすの意にて、才學識を備へたるをいふ　(四) 德川光圀が大日本史を編する爲に設けたる編輯所の名　(五) 五年

安積覺。字子先。小字覺兵衞。號二老圃一。又號二澹泊齋一。晚又號二老牛居士一。常陸人。仕二水府一。

澹泊祖正信。小字覺兵衞。元和乙卯大坂之役。屬二小笠原秀政一有二戰功一。後委二質於水府一。父繼食二其祿一。澹泊亦襲レ之。舜水答書曰。令祖立二功於往日一。而孫子食二其祿一。可レ見下爲レ善蒙レ福也。令祖立二功於他邦一。而上公爲レ之祿二其孫一。未レ見三疇勳之至二於此一也。汝宜レ勉レ之。

安積覺、字は子先、小字は覺兵衞、老圃と號す。又澹泊齋と號し、(一)晚に又老牛居士と號す。常陸の人。水府に仕ふ。

(一) 晚年に、老後に

澹泊の祖正信、小字は覺兵衞、(一)元和乙卯大坂の役、小笠原秀政に屬して戰功有り。後質を水府に委す。父繼いで其祿を食む。澹泊亦之を襲ふ。舜水答書に曰く、令祖功を往日に立て、孫子其祿を食む。見る可し善を爲し福を蒙るを。令祖功を他邦に立つ。(二)上公之が爲に其孫を祿す。未だ(三)疇勳の此に至るを見ず。汝宜しく之を勉むべしと。

(一) 元年　(二) 水府公を指す　(三) むかしのてがら

研二究之一。嘗著二護法資治論十卷一。謂儒與レ佛並存不二相悖一。其友安澹泊痛斥レ之。數切規曰。速火レ之勿レ貽レ禍。儼塾不レ從。然與二澹泊一心交終始不レ變。及レ卒澹泊記レ墓云。與レ余交最熟。每相箴規。而今亡矣。夫世之囂囂者。毀譽出二于愛憎一。臧否失二于權衡一。果孰得而孰失哉。若レ君者。今不レ可二多得一。豈非レ兼二人之所レ難レ能者一邪。

す勿れと。儼塾從はず。然れども澹泊と（四）心交終始變ぜず。卒するに及び澹泊墓に記して云ふ、余と交最も熟す。毎に（五）相箴規す。今は亡し。夫の世の（六）囂囂たる者、（七）毀譽愛憎に出で、臧否權衡を失す。果して孰か得にして孰か失ならんか。君の若きは、今多く得べ可らず。（八）豈に人の能くし難き所の者を兼ぬるに非ずやと。

（一）佛經　（二）安積覺　（三）切にいましめただす　（四）深き交際いつも變らず　（五）互にいましめあふ　（六）世間の口やかましき衆人　（七）或はそしり或は褒むること、もと一己のすききらひの感情より出で善しとし惡しとすること公平を失ふ　（八）なんと人の爲し難きものを有するものにては無きや

安積覺

攝津人。仕ニ水府ー。

儼塾自レ少好レ學。始事ニ福住道祐ー。繼從ニ松永昌易ー。二子咸異レ之。父某以レ醫仕ニ永井侯ー。居ニ攝津高槻ー。比ニ其沒ー。儼塾年二十六。以ニ父遺言ー去ニ高槻ー。游ニ學于京師江戸ー。越七八年業大進。當ニ是時ー。水戸義公。廣辟ニ致海内文學士ー。編ニ修國史ー。儼塾被レ召赴レ之。入レ局與ニ其事ー。

儼塾多ニ藝能ー。醫術兵法擊劍。皆得ニ其要ー。至ニ於釋典ー尤

の人。水府に仕ふ。

儼塾少より學を好む。始め福住道祐に事へ、繼いで松永昌易に從ふ。二子咸之を異とす。父某醫を以て永井侯に仕へ、攝津高槻に居る。其沒する比、儼塾年二十六。父の遺言を以て高槻を去り、京師・江戸に游學す。越えて七八年業大に進む。是時に時り、水戸義公、廣く海内文學の士を辟致し(一)、國史を編修す。儼塾召されて之に赴き、局(二)に入つて其事に與る。

(一) 召しかゝふ　(二) 編輯局

儼塾藝能多し。醫術・兵法・擊劍、皆其要を得、釋典(一)に至つては尤も之を研究す。嘗て護法資治論十卷を著し、謂ふ、儒と佛と並に存して相悖らずと。

其友安澹泊(二)痛く之を斥け、數々切規(三)して曰く、速に之を火にして禍を貽

其交如二兄弟一。後不二相通一。然而義亦無レ可レ言者一。乃是氣質之一癖。學問之大疵。甚可レ惜。直方先生。後來思二舊交一。有下將二通問一之意上。絅齋先生。終執而不レ肯。

(一)友誼と同じ　(二)まのあたり責む　(三)さうするについて此れに言ひ立つべき程の筋道　(四)氣質上の一つの癖、學問上の大なる缺點　(五)音信を通ずる意あり

絅齋以二承應元年八月十三日一生。以二正德元年十月朔一卒。享年六十。絅齋無二男子一。以二兄道哲子某一爲レ嗣。門人若林新七能傳二其學一。

絅齋、承應元年八月十三日を以て生れ、正德元年十月朔を以て卒す。享年六十、絅齋男子無し。兄道哲の子某を以て嗣となす。門人若林新七能く其學を傳ふ。

森尙謙

森尙謙。字利涉。小字龜之助。號二儼塾一。又號二不染居士一。

森尙謙、字は利涉、小字は龜之助、儼塾と號す。又不染居士と號す。攝津

出仕二水府一。以爲其志非レ行レ道。卽贈レ書絶レ之。其著二靖獻遺言一。亦有二寓意一云。

(一)激し易い性質　(二)臣となるを不快におもふ　(三)水戸

絅齋兼好二武事一。常騎馬擊劍。其所レ帶劍鐔。鐫二觀瀾篆赤心報國四字一。

絅齋少二佐藤直方二二歲。初友義甚親。然嘗面二折直方親喪未レ除出仕一。以レ是遂絶交。默識錄曰。絅齋先生與二直方先生一。初

絅齋兼て武事を好み、常に騎馬擊劍し、其帶ぶる所の劍鐔(一)には、觀瀾が篆する赤心報國の四字を鐫る。

(一)劍のつば

絅齋、佐藤直方より少きこと二歲。初め友義(一)甚だ親し。然るに嘗て直方が親の喪未だ除かざるに出でて仕ふるを面折(二)し、是を以て遂に絶交す。默識錄に曰く、絅齋先生、直方先生と、初を其交兄弟の如し。後相通ぜず。然して義(三)亦言ふ可き者無し。乃ち是れ氣質(四)の一癖、學問の大疵、甚だ惜む可し。直方先生、後來舊交を思ひ、將に通問(五)せんとするの意有り。絅齋先生、終に執つて肯ぜずと。

耳。

初年彊學患ニ咯血一。闇齋猶課督不ニ少貸一。槇元眞者。爲謂ニ闇齋一曰。之子疾日篤。請姑廢レ業以保嗇。闇齋不レ可。居無レ幾疾間矣。闇齋曰。死生命也。奈何使三之折ニ其志一。

初年彊學して咯血を患ふ。(一)闇齋猶ほ課督少らくも貸さず。(二)槇元眞といふ者、爲に闇齋に謂つて曰く、之の子疾日に篤し。請ふ姑く業を廢して以て保嗇せしめよと。(三)闇齋可かず。居ること幾もなくして疾間ゆ。闇齋曰く、死生は命なり、奈何ぞ之をして其志を折かしめんと。

(一) 學問を勉强しすぎて血をはく　(二) 業を課しうながして勉强せしむ　(三) 養生

絅齋爲レ人慷慨。每以ニ新委ニ質列侯ニ不レ爲レ潔。故雖ニ貧甚一不ニ敢祿仕一。門人三宅觀瀾

絅齋人となり慷慨、(一)每に新に質を列侯に委ぬるを以て(二)潔となさず。故に貧甚だしと雖も、敢て祿仕せず。門人三宅觀瀾出でて水府に仕ふ。(三)以爲へらく、其志道を行ふに非ずと。即ち書を贈つて之を絶つ。其の靖獻遺言を著す、亦寓意有りと云ふ。

之傳及祭文。迂齋亦受業直方。爲高足。其韞藏錄數卷。多錄直方語。

淺見安正。初名順良。小字重次郎。號絅齋。又號望楠樓。近江人。絅齋少學山崎闇齋。砥行植節。社中無出其右者。後不從闇齋敬義內外說。又不喜神道。是以遂不見容。闇齋沒後悔其叛師。炷香謝罪云。蓋闇齋倡神道。一時及門弟子皆靡之。而堅守舊說。不少變動者。不過絅齋及直方尚齋數子。

淺見安正

淺見安正、初名は順良、小字は重次郎、絅齋と號す。又望楠樓と號す。近江の人。

絅齋少うして山崎闇齋に學ぶ。砥行植節、(一)社中其右に出づる者無し。後闇齋が敬義內外の說に從はず。又神道を喜ばず。是を以て遂に容れられず。闇齋の沒後其の師に叛くを悔い、香を炷して罪を謝せりと云ふ。蓋し闇齋神道を倡へ、一時門弟子の皆之に靡くに及んで、堅く舊說を守り、少しも變動せざりし者は、絅齋及び直方・尚齋の數子に過ぎざるのみ。

(一) 行をみがき節操をかたく立つること社中第一

釋ㇾ卷。與ㇾ人語非二小近四子一。未三嘗載二於口舌一。才之穎。辭之敏。終日與ㇾ人談ㇾ學。譬諭百端。殆教二人踴躍自得一矣。實東方一人耳。所ㇾ憾者。其學止二於小學四子近思之間一。不ㇾ贍二合於近思錄致知篇所ㇾ載先賢之話一者多。而其見識之微。未ㇾ知能入二精微一否。其談ㇾ道所ㇾ謂隔ㇾ壁可ㇾ聞者庶幾矣。發二明其天命本然之妙一者。今不ㇾ存二于世一焉。

微に入るや否や。其の道を談ずること、所謂壁を隔てて聞く可き者に庶幾し。其天命本然の妙を發明する者、今世に存せずと。(一〇)

(一)生れつき度量廣く緻密なり　(二)臨終、人の死せんとする時、呼吸の強弱を見るため、鼻孔に纊(綿)を貼るよりいふ　(三)小學・近思錄及び大學・中庸・論語・孟子の四書　(四)才鋭く言葉きび〳〵す　(五)たとへが色々樣々　(六)了悟して快に堪へざらしむ　(七)東國の第一人者　(八)一致せず　(九)見識の徹底することこまやかなる所まで入るや否や不明　(一〇)天理自然の本性を發揮す

直方門人。有二譬者大神澤一者。筑前人也。才行修美。一時有二聲稱一。稻葉迂齋作二

直方の門人に、(一)譬者大神澤一といふ者あり。筑前の人なり。(二)才行修美、一時聲稱有り。稻葉迂齋之が傳及び祭文を作る。迂齋亦業を直方に受け(三)高足たり。其縕藏錄數卷は、多く直方の語を錄す。

(一)盲人　(二)才能德行りつぱ　(三)高弟

江戶麻布琉璃光寺。其永永處也。一片小碑。正面勒曰。一貫了道居士。左曰。佐藤五郎左衞門直方。右曰。享保四己亥八月十五日沒。

江戸麻布の琉璃光寺は、其の永永(一)の處なり。一片の小碑、正面勒して曰く、一貫了道居士。左に曰く、佐藤五郎左衞門直方、右に曰く、享保四己亥八月十五日沒すと。

(一) いつまでも居る處の意より、埋葬の場所にいふ

三宅尙齋默識錄云。直方先生氣稟宏闊穎悟。故其學不レ苦而至。中年學不レ勤不レ進。屬纊前十四五年。好學之篤。手不レ

三宅尙齋の默識錄に云ふ、直方先生氣稟(二)宏闊穎悟なり。故に其學苦まずして至る。中年學勤めず進まず。屬纊(三)の前十四五年、好學の篤き、手、卷を釋てず。人と語るに小・近・四子(四)に非ざれば、未だ嘗て口舌に載せず。才の穎なる、辭の敏なる、終日(三)人と學を談じ、譬諭(五)百端、殆ど人をして踊躍(六)自得せしむ。實に東方(七)の一人のみ。憾むる所は、其學小學・四子・近思の間に止り、近思錄致知篇に載する所の先賢の語と脗合(八)せざる者多し。其見識(九)の徹、未だ知らず能く精

結城侯。受二俸五十口一。元祿癸酉乞休致。後厩橋侯延爲レ師。年餽二百金一。乃處二其邸一者二十餘年。然以二道不一レ合遂辭レ之。卜二居神田紺屋街一。時年六十九。

厩橋侯延て師となし、年に百金を餽る。乃ち其邸に處ること二十餘年。然れども道合はざるを(四)以て遂に之を辭し、神田紺屋街に卜居す。時に年六十九。

(一)父の後をつぐ　(二)六年　(三)仕を辭す　(四)執る所の道一致せず

享保己亥八月十四日。進二講唐津侯一。今古河侯之祖先也。疾暴作。以二肩輿一昇歸。侯乃賜二人參二兩一。令二稻葉迂齋護視一。翌日遽不レ起。享年七十。門人三輪執齋。聞レ病而至。則已易レ簀。乃作二倭歌一哭レ之。

享保己亥(一)八月十四日、唐津侯（卽ち今の古河侯の祖先なり）に進講す。疾暴に作り、(二)肩輿を以て昇き歸る。侯乃ち人參二兩を賜ひ、稻葉迂齋をして(三)護視せしむ。翌日遽に起たず。享年七十。門人三輪執齋、病を聞いて至れば、則ち已に簀を(四)易ふ。乃ち倭歌を作つて之を哭す。

(一)四年　(二)かご　(三)看護せしむ　(四)死ぬこと、曾參が死に臨み、其敷ける所の簀を、身分不相應なりとて取りかへたる故事に出づ

其識見自レ非下以二東坡一爲中俗儒上。則不レ得レ至二聖賢地位一矣。今欲二多識及詩賦文章皆善一之者。沒レ世不レ能レ爲二眞儒一也。

と能はずと。

(一) 博く見てよく記憶し文章上手に書を善く書く　(二) 博識なる上に詩歌文章共に上手になる　(三) まことの學者

故赤穗侯遺臣殺二吉良氏一。明日跡部光海來謂曰。先生未レ聞乎。昨夜赤穗大石等四十七士復讐。直方曰。言誤矣。遺臣之於二吉良一。何有二讐視之理一乎。遂本二諸柳宗元駁復讐議一。論爲二陵レ上者一。

故赤穗侯の遺臣、吉良氏を殺す。明日跡部光海來り謂つて曰く、先生未だ聞かざるか。昨夜赤穗の大石等四十七士(一)復讐すと。直方曰く、言誤れり。遺臣の吉良に於ける、何ぞ讐とし視るの理有らんや。遂に諸を柳宗元が駁復讐議に本づき、論じて上を陵ぐ者となす。(二)

(一) 仇を討つ　(二) 公を輕んじ犯すものとす

初年承レ父。宦二

初年父に(一)承けて、結城侯に宦し、俸五十口を受く。元祿癸酉(二)乞うて休致す。(三)後

皆以レ號稱。子獨無下可二尊稱一者上。不レ知有二何說一歟。直方曰。余從二邦俗一耳。此邦自レ古無二字號一。何必背二邦俗一之爲。假令余之二彼西之邦一。亦以二名直方通稱五郎左衞門一居。故雖二弟子一直稱曰二直方先生一。稻葉默齋墨水一滴云。斯文源流。以二剛齋一爲二直方先生號一誤矣。弟子野田德勝號二剛號一。或云。直方號二峰松軒一此蓋一時名レ軒耳。非二自表之號一

方通稱五郎左衞門を以て居らんと。故に弟子と雖も直に稱して直方先生と曰ふ。稻葉默齋の墨水一滴に云ふ。斯文源流に、剛齋を以て直方先生の號と爲すは誤れり。弟子野田德勝、剛齋と號すと。（或は云ふ、直方峰松軒と號すと。此れ蓋し一時軒に名くるのみ。自表の號に非ず）

（一）日本の風俗　（二）家の名とするのみ

嘗曰。博覽彊記能文善書。莫レ若二宋蘇東坡一焉。然自レ得レ道者一而視レ之。東坡固不レ足レ論也。故學者

嘗て曰く、博覽彊記、能文善書なること、宋の蘇東坡に若くものなし。然れども道を得る者より之を視れば、東坡固より論ずるに足らず。故に學者、其識見、東坡を以て俗儒と爲すに非ざるよりは、則ち聖賢の地位に至ることを得ず。今多識及び詩賦文章皆之を善くせんと欲する者は、世を沒ふるまで眞儒たるこ

子一極嚴。直方事レ之不レ惰。遂能得二其旨一。及三闇齋晩年唱二神道一。則不レ能レ無レ疑。是以竟倒二弟子籍一。直方又作二敬義內外考論一曰。易文言敬義內外。此乃以二心與レ身言レ之。敬義先生以爲身爲レ內。家國天下爲レ外。予辨レ之不レ止。由レ是遂得二罪於先生一。不レ出二入於師門一者幾二年。由レ此觀レ之。其爲二闇齋一所レ絕者。非二推不レ奉二神道一。

又敬義內外考論を作つて曰く、易の文言(二)の敬義內外は、此れ乃ち心と身とを以て之を言ふ。敬義につき先生以爲へらく身を內と爲し、家國天下を外と爲すと。予之を辨じて止まず。是に由つて遂に罪を先生に得、師の門に出入せざること幾ど二年と。此に由つて之を觀れば、其の闇齋の爲に絕たるゝこと、惟だ神道を奉ぜざるのみに非ず。

(一) 闇齋の學說に通ず　(二) 易經の篇名、孔子の作する所と傳ふ。敬を主觀的原理とし義を客觀的原理とする說

直方無二字號一。或謂曰。山崎闇齋。子之師也。淺見絅齋。三宅尚齋。則子之友也。而

直方字號無し。或ひと謂つて曰く、山崎闇齋は、子の師なり。淺見絅齋・三宅尚齋は、則ち子の友なり。而も皆號を以て稱す。子獨り尊稱す可き者無し。知らず何の說ありやと。直方曰く、余(一)邦俗に從ふのみ。此邦古より字號なし。何ぞ必ずしも邦俗に背くことをなさんや。假令余彼の西の邦に之くも、亦名は直

兄來訪。言及文辭事。此人能通西土之音。號稱文章家。乃出僕文稿視之。天漪兄就其中一兩篇以西音讀一過曰。善。但文辭傷緊。欠一閑字耳。僕即言下敬服。

天漪以享保壬寅八月八日沒。享年七十四。墓在江戶東叡山中。護國院後塋。其父母及師獨立髮齒。亦瘞此地。各有建石。

天漪、享保壬寅(一)八月八日を以て沒す。享年七十四。墓は江戶東叡山中、護國院の後塋(二)に在り。其父母及び師獨立の髮齒も、亦此地に瘞む。各〻建石有り。

(一) 七年　(二) 後方にある墓地

佐藤直方。小字五郎左衛門。備後人。直方年二十一。介永田養菴謁山崎闇齋。闇齋敎弟

佐藤直方

佐藤直方、小字は五郎左衞門、備後の人。直方年二十一、永田養菴を介して山崎闇齋に謁す。闇齋、弟子を敎ふること極めて嚴なり。直方之に事へて惰らず。遂に能く其旨(一)を得たり。闇齋が晩年神道を唱ふるに及び、則ち疑なき能はず。是を以て竟に弟子の籍を削らる。直方

時緣下貪三聽老和尙吾伊作二金石響一之所上奪。遂爲忘レ言。未レ審二其人已還否一也。儻未則敢請二一方便一也。且要爲通二賤名一。以便二日後鳴謝一。則或添二天涯一相識者一。亦遊道之益廣也。

(一)豪氣にしてすぐれたる天性 (二)にらみ下す (三)讀書の音聲が金石を鳴らす如く美音なるに聽きほれて言ふべきことを忘る (四)書を手に入れる工夫 (五)自分の名前 (六)後日に禮を述べる便利 (七)遠地の知り人を殖すも交際を廣くするわけ

鳩巢當世之碩儒也。其文辭亦不レ爲レ疎。而推二奬天漪一。得二其言一以爲二定論一。答二三宅緝明一書曰。僕平生讀レ書。稍有レ所レ得。及レ所レ著文頗多甚。欲下就二識者一正上之。前日天漪

鳩巢は當世の碩儒(一)なり。其文辭亦疎と爲さず。而も天漪を推奬し、其言を得て以て定論となす。三宅緝明に答ふる書に曰く、僕平生書を讀み稍得る所有り、及び著す所文頗る多甚(二)。識者に就いて之を正さんと欲す。前日天漪兄來訪、言文辭の事に及ぶ。此人能く西土の音に通じ(三)、號して文章家と稱す。乃ち僕の文稿を出し之を視す。天漪兄其中に就いて、一兩篇西音を以て讀むこと一過して曰く、善し。但文辭緊に傷る(四)。一閑の字を缺くのみと。僕卽ち言下に敬服すと。

(一)大學者 (二)たくさん (三)支那語に通ず (四)緊張し過ぐ

池之技皆精勤。先有ニ林樂後高岱一。春臺曰。林道榮者。長崎舌人也。與ニ高玄岱一俱以レ善ニ草書一知レ名。然林不レ及レ高。筆法無ニ變化一故也。但林兼ニ諸體一。高非ニ草字一不レ能作。此則高不レ及レ林處也。人特稱レ林者。以レ此也已。

字に非ざれば作ること能はず。此れ則ち高が林に及ばざる處なり。人特に林を稱するは、此を以てのみと。

(一)長崎と支那とは海をへだつること僅かの距離　(二)書道にくはし　(三)通譯者、通辯

徂徠以ニ豪邁之資一。睥ニ睨一世一。獨於ニ天滿一。嘗欲レ得ニ其書一。且求ニ與レ之締レ交。與ニ香國禪師一書可レ見。曰。嚮者在レ坐。視ニ崎人高玄岱字一。意欲レ得ニ其一二幅一。而一

徂徠、豪邁(一)の資を以て、一世を睥睨(二)す。獨り天滿に於ける、嘗て其書を得んと欲し、且つ之と交を締ばんと求む。香國禪師に與ふる書に見るべし。曰く、嚮者に坐に在つて、崎人高玄岱の字を觀、意、其一二幅を得んと欲す。而るに一時老和尚吾伊(三)が金石の響を作すを貪り聽くに奪るゝに縁つて、遂に爲に言ふことを忘る。未だ其人已に還りしや否やを審かにせざるなり。儻し未らざれば則ち敢へて一方便(四)を請ふ。且つ要す爲(五)に賤名を通じ、以て(六)日後鳴謝に便ぜんを。則ち或は天涯(七)一相識者を添ふる、亦遊道の益廣ならんと。

聲馳二遠邇一。遂與二室鳩巣一。宅觀瀾一同應二大府之召一。來二江戸一列二儒員一。白石宅集。鳩巣席間贈レ詩云。三人同召出二蒿萊一。齒德共推當日魁。一二變良工醫レ國手一。翻成詞客掞天才。羨君授レ簡稱二先達一。笑我論レ年拒二後杯一。嘉會由來難二屢得一。樽前莫レ惜玉山頽。

稱するを、笑ふ我が年を論じて後杯を拒ぐを、嘉會(九)由來屢〻得難し、樽前惜むなかれ(一〇)玉山の頽るゝをと。

(一) 大才 (二) 遠近 (三) 三宅觀瀾 (四) 白石の家に於ける集會 (五) よもぎや雜草の生えたる田舍より出づ (六) 年齡も德も其の時三人中の第一 (七) 醫家より一變してひろくすぐれたる才の文士となる、掞は蓋ふ意 (八) 特に任命を受けて (九) このやうな好き會合は屢々はなし (一〇) 醉ひ倒る

又兼能レ書。其法自二獨立一而得レ之。當世與二林道榮一齊レ名。白石曰。榮死子新獨二歩天下一。南海篆隷歌曰。崎陽於レ華只一葦。臨

又兼ねて書を能くす。其法獨立よりして之を得、當世林道榮と名を齊しうす。白石曰く、榮死して子新天下に獨歩すと。南海が篆隷の歌に曰く、(一)崎陽の華に於ける只だ一葦、(二)臨池の技皆精勤、先に林榮後には高岱有りと。春臺曰く、林道榮は、長崎の舌人(三)なり。高玄岱と俱に草書を善くするを以て名を知らる。然れども林は高に及ばず。筆法に變化無きが故なり。但し林は諸體を兼ね。高は草

川之勝。殆十有餘年矣。一日慕レ母之念不レ歇。輒登ニ商舶一直到ニ長崎一。時寛永六年。父歳二十有七。僕即長崎之産也。從レ幼師ニ事曼公戴先生者一。先生浙之杭州西湖人。明之遺士也。明亡航レ海。寓ニ長崎ニ十有餘年。僕之親炙也久。而其語言音韻。則不レ期而頗解焉。至レ今皓首猶操ニ南音一。但愧執レ性迂晉。質體脆薄。動輒嬰レ疾。雖三少有ニ夙志一。不レ能ニ肆レ意勤レ業。徒増ニ犬馬之年一耳。先生沒。僕不ニ自度一。妄欲下破ニ浪長風一。一詣中華域上者數。而國禁不レ許レ越レ界。乃退閲ニ中原輿地圖等一。效レ作ニ臥遊一。聊復慰レ懷云云。

(六)體質薄弱　(七)思ふ存分　(八)徒につまらぬ年をとるばかり　(九)舟に乗りて海を渡る　(一〇)支那の地
(一一)寝ながらにして遠きに遊ぶと、宋史に出でたる宗少文の故事

天漪自レ幼有ニ瑰才一。其居ニ長崎一。學ニ於僧獨立一。(戴笠。字曼公。)傍通ニ醫術一。乃以レ醫遊ニ事薩州一。亡レ幾去復住ニ長崎一。以ニ藝學一爲レ事。久之名

天漪幼より瑰(一)才有り。其の長崎に居るや、僧の獨立(戴笠、字は曼公)に學び、傍ら醫術に通ず。乃ち醫を以て薩州に遊事す。幾も亡く去つて復長崎に住し、藝學を以て事と爲す。久しうして名聲遠邇(二)に馳す。遂に室鳩巣・宅觀瀾(三)と同じく大府の召に應じ、江戸に來りて儒員に列す。白石が宅集(四)に、鳩巣、席間、詩を贈つて云ふ、三人同じく召されて蒿萊(五)を出で、齒徳(六)共に推す當日の魁、良工國を醫するの手を一變して、翻(七)つて成す詞客揆天の才、羨む君が簡(八)を授け先達と

東郭ニ詩序。陳ニ其歸化顚末ヲ。乃錄ニ左方ニ。曰。東都高玄岱。字子新。自號ニ天漪ト。本中華族。祖渤海高壽覺。福建彰郡人。航レ海薩摩州寓焉。後歸レ明。父大誦年十六。跡レ祖入レ明弔ニ祖氏之墟ヲ。遊レ晉轉レ齊踰レ燕跨レ趙。北經ニ匈奴之域ヲ。南及ニ東寧之陬ニ。行嘆ニ天下文物之盛ヲ。歷ニ覽名山大

及ぶ。行ゝ天下文物の盛なるを嘆じ、名山大川の勝を(二)歷覽すると、殆ど十有餘年なり。一日母を慕ふの念歇まず。輒ち商舶に登り直に長崎に到る。時に寛永六年、父歳二十有七なり。僕は卽ち長崎の產なり。幼より曼公戴先生といふ者に師事す。先生は浙の杭州西湖の人、明の遺士なり。明亡びて海に航し、長崎に寓すること二十有餘年。僕の(三)親炙するや久し。而して其語言音韻、則ち期せずして頗る解す。今に至るも(四)皓首猶ほ南音を操る。但だ愧づ、(五)性を執る迂魯、(六)質體脆薄、動もすれば輒ち疾に嬰るを。少にして夙志ありと雖も、(七)意を肆にして業を勤むること能はず。(八)徒に犬馬の年を增すのみ。先生沒し、僕自ら度らず、妄に浪を長風に破つて、一たび(一〇)華域に詣らんとすること數ゝなり。而も國禁、(九)界を越ゆるを許さず。乃ち退いて中原の輿地圖等を閱して、(一一)臥遊を作すに效ひ、聊か復懷を慰す云云と。

(一) 祖先の住所のあとを訪ふ (二) へめぐりみる (三) 親しく教を承く (四) しらが頭 (五) うまれつき愚かなり

高玄岱。字子新。一字斗膽。小字新右衛門。號天漪。又號婺山。肥前人。仕大府。天漪祖高壽覺。西土人也。父大誦號一覽。爲長崎譯者。一覽改稱姓高。爲深見。蓋高氏出自渤海。渤海倭讀深見。故以稱焉。天漪與朝鮮聘使李

巻之五

高玄岱

高玄岱、字は子新、一の字は斗膽、小字は新右衛門、天漪と號す。又婺山とも號す。肥前の人、大府に仕ふ。

天漪の祖高壽覺は、西土の人なり。父大誦は一覽と號し、長崎の譯者なり。一覽、姓高を改稱して深見となす。蓋し高氏は渤海より出づ。渤海の倭讀は深見なり。故に以て稱す。天漪、朝鮮の聘使李東郭に與ふる詩の序に、其歸化の顚末を陳ぶ。乃ち左方に錄す。曰く、東都の高玄岱、字は子新、自ら天漪と號す。本中華の族なり。祖、渤海の高壽覺は、福建彰郡の人なり。海に航して薩摩州に寓し、後明に歸る。父大誦年十六、祖を跡うて明に入り、祖氏の墟を弔ふ。魯に遊び齊に轉じ燕を踰え趙に跨り、北匈奴の域を經、南東寧(一)の隈に

荊公。佐藤直方討論筆記曰。頃年一文人著二一書一梓行。其中有二闢齋先生傳一。其立文命意。本以レ誹二謗先生一爲レ主。則固非二直筆可レ信者一。而言論抑揚之間。陽褒陰貶。輕慢不遜。殊非下讀二聖書一者之氣象上也。至三於紀事之失二其實一。則初不レ述四先生之所三以爲二先生一。而徒稱二傳聞無稽之言一。不レ論二先生出處履歴之有レ故。而妄載二庸夫昏耄之說一。嗟呼可レ鄙矣哉。且彼於二先生一。有二何怨嫉一而詆毀至レ此耶。今亦不レ暇三一一辨二其是否一。明者試取二其書一一觀。則可下見二彼之爲レ人之實一。而知中其言之不レ足二以爲レ證矣。

可き者に非らず。而して言論抑揚(五)の間、陽褒陰貶(六)、輕慢不遜、殊に聖書を讀む者の氣象に非ず。紀事の其實を失ふに至つては、則ち初より先生の先生たる所以を述べずして、徒に傳聞無稽(七)の言を稱す。先生の出處履歴の故あるを論ぜずして、妄りに庸夫昏耄(八)の說を載す。嗟呼鄙むべきかな。且つ彼の先生に於ける、何の怨嫉ありて詆毀(九)此に至るや。今亦一一其是否を辨ずるに暇あらず。明者試に其書を取つて一觀せば、則ち彼が人と爲りの實を見、而して其言の以て證と爲すに足らざるを知る可しと。

(一) ふとしめたる辭 (二) 王安石 (三) 出版、刊行 (四) 文を作るの趣意 (五) 抑揚論議する間に於て (六) 表面にほめて陰にけなす (七) 聞きつたへのでたらめの言 (八) 俗人やおいぼれの說 (九) そしり傷く

明林珍何倩顧長卿。來在長崎。芝山每致詩文。乞是正。彼各極口襃賞至為韓柳歐蘇無過。於是芝山自以為然。江邨北海曰。林何顧三人。孟浪訣言。固不足論而季明信之。自夸眦。遂缺精細工夫。余酷愛季明慷慨有氣節。因深惜為三人所誤。非過論。

明の林珍・何倩・顧長卿、來つて長崎に在り。芝山每に詩文を致し是正を乞ふ。彼各ゝ口を極めて襃賞(一)し、韓柳歐蘇(二)も過ぐる無しと爲すに至る。是に於て芝山自らも以て然りと爲す。江邨北海曰く、林何顧の三人、孟浪訣言(三)、固より論ずるに足らず。而るに季明(四)之を信じ、自ら夸眦(五)し、遂に精細(六)の工夫を缺く。余酷だ季明が慷慨氣節有るを愛す。因て深く三人の爲に誤らるゝを惜むと。過論に非ず。

(一) 批評 (二) 韓退之・柳宗元・歐陽修・蘇東坡 (三)・孟浪はでたらめ、訣言はへつらひ (四) 芝山 (五) 自慢す (六) こまかなる修養をなさず

芝山作山崎闇齋傳。大寓貶辭。且附論比闇齋於王

芝山、山崎闇齋の傳を作り、大に貶辭(一)を寓す。且つ附論して闇齋を王荊公(二)に比す。佐藤直方の討論筆記に曰く、頃年一文人一書を著し梓行(三)す。其中に闇齋先生の傳有り。其立文命意(四)、本先生を誹謗するを以て主と爲す。則ち固より直筆信ず

乏彥士之叅。詞賦亦似未英懿。故不欲就而正焉。又答鵜眞昌書曰。深艸元政陳元贇。執交吾子有年于斯。僕在洛晤語不過二三會。僕當時年少氣銳不肯下人。唯視元贇爲人卑猥瑣碎。無風雅之致。元政爲人暗弱固滯。無實見之明。或賤或廢日與同志譏笑耳。又無親厥詞葩之可取也。故不屢往來。不亦惜乎。嘗聽朱之瑜老人往年謝世。心越禪師無恙否。定知吾子與此二老者。每每淸譚。僕嘗遭彼二老者。前後到兩三席。徒談花鳥話風月而已。殊無一言及學問上。但於心越。則唱和一絕云云。近來偶逢木老儒。一癡訥人而已。未嘗看風彩。曩遇荒景元。贈答詩數章。學力未如幼敏之名也。

三席に到るも、徒に花鳥を談り風月を話するのみ、殊に一言學問上に及ぶ無きを。但だ心越に於ては、則ち一絕を唱和す云云。近來偶〻木老儒(一七)に逢ふに、一(一八)癡訥人のみ。未だ嘗て風彩を看ず。曩に荒景元に遇ひ、詩數章を贈答す。學力(一九)未だ幼敏の名に如かずと。

(一) 大學者 (二) 氣象あら〳〵し (三) 明の何倩と林珍 (四) まごころありてまじりけ無し (五) みだりなる態度 (六) 德行すぐれたる人士 (七) 英も懿も秀でたること (八) 鵜飼錬齋水戸の儒官、京都の人 (九) 面會して語る (一〇) みだりにして氣宇小さく、風雅のおもむき無し (一一) 暗愚にして心ちゞまり眞相を見る明無し (一二) 一人は賤しく、一人は世榮を廢し、毎日同志のものと人を譏るのみ (一三) 文藻のとるべきものを見ず (一四) 死歿す (一五) 名は興儔、明人、德川光圀に聘せられて祇園開山となる (一六) 風雅の談話 (一七) 木下順庵 (一八) 口無調法なる愚人にすぎずして風采のりつぱなる所なし (一九) 學力未だ幼時のすぐれたりといふ評判ほどになし

齋門。廣才博覽最究性理。又善賦詩屬文。當世稱碩儒。而氣豪宕自視甚高。每好排斥時輩。其適從錄二卷。擧撞巢窟擊蛇笏等目。縱毀罵仁齋。又謝何林二老書曰。陳元贇在洛而曩相會。朱舜水在此而邇面晤。潛察厥言行學術。疑弗端誠純粹矣。多猥俚之態。

當世碩儒と稱す。而して氣豪宕自ら視る甚だ高く、每に好んで時輩を排斥す。其適從錄(一)二卷は、撞巢窟擊蛇笏等(二)の目を擧げて、縱に仁齋を毀罵す。又何(三)林二老に謝する書に曰く、陳元贇、洛に在りて曩に相會し、朱舜水、此に在りて邇ろ面晤す。潛かに厥の言行學術を察するに、疑ふらくは端誠純粹(四)ならじ。(五)猥俚の態多く、(六)彥士の姿に乏し。詞賦亦未だ英懿(七)ならざるに似たり。故に就いて正すことを欲せず。又鵜眞昌(八)に答ふる書に曰く、深艸の元政・陳元贇、交を吾子に執ること斯に年有り。僕、洛に在り、(九)唔語二三會に過ぎず。僕、當時、年少氣鋭、人に下るを肯ぜず。唯視る元贇人と爲り卑猥(一〇)瑣碎、風雅の致無く、元政人と爲り暗弱(一一)固滯、實見の明なきを。(一二)或は賤或は廢、日に同志と譏笑するのみ。又厥の詞葩(一三)の取る可きを覩る無し。故に屢々往來せず。亦惜からずや。嘗て聽く朱之瑜老人往年(一四)世を謝すと。(一五)心越禪師恙なきや否や。定めて知る吾子と此二老者と、每每淸譚(一六)せしを。僕嘗て彼の二老者に遭ふこと、前後兩

大高坂季明。字清介。號芝山。又號一峰。又號黃軒。土佐人。

芝山家世臣土佐。父宜重致仕而歸田。後至關東。芝山自幼好讀書。比年十八。出土佐入京來江戸。苦學自勉。弱冠宦巖城侯。居若干年。去又游事稻葉侯。晩以祿不足用。乞休致。不允。尋罹災。侯有重賜。於是作止足軒記。不敢復乞休。

大高坂季明、字は清介、芝山と號す。又一峰と號し、又黃軒とも號す。土佐の人。

芝山の家、世々土佐に臣たり。父宜重致仕(一)して歸田し、後關東に至る。芝山、幼より好んで書を讀む。年十八の比、土佐を出で京に入り江戸に來り、苦學自ら勉む。(二)弱冠巖城侯に宦し、居ること若干年、去つて又稻葉侯に游事す。(三)晩に祿の用に足らざるを以て、休致を乞ふ。允されず。尋で(四)災に罹る。侯重賜有り。是に於て止足軒の記を作り、敢へて復休を乞はず。

(一)辭職して田間に歸る　(二)二十歳頃　(三)晩年俸祿が支出に足らざるを以て辭職を乞ふ　(四)火災

芝山出谷一

芝山、谷一齋の門に出で、廣才博覧最も性理を究む。又善く詩を賦し文を屬る。

氏所謂有二宿寃一者。曾不レ知下己之爲二宿寃一更甚上也。蘭洲承二朱學於家庭一。力斥二徂徠一護二宋儒一。然不二固執一。故其所二自得一。往往反レ朱立レ說。見二瑣語質疑篇一。

說を立つること、瑣語質疑篇に見ゆ。

(一) 名は積善、甃庵の長子 (二) 前世よりのうらみ (三) 自ら發見せる學說

蘭洲與二中井甃菴一交義相厚。甃菴墓碣蘭洲紀レ之。而甃菴子竹山弟履軒書井篆額。銘曰。天相二斯文一。寔降二先生一。襄二夫異言一。承二績往聖一。有レ委有レ源。通儒全才。琢二詞蒼碈一。休風千載。

蘭洲、中井甃菴と交義相厚し。甃菴の墓碣は蘭洲之を紀す。而して甃菴の子竹山蘭洲の墓に銘す。竹山の弟履軒の書並に篆額あり。銘に曰く、天斯文を相け、寔に先生を降す、夫の異言を襄ひ、績を往聖に承く、委有り源有り、通儒全才、詞を蒼碈に琢く、休風千載。

(一) 儒道 (二) 古の聖人 (三) 末あり元あり (四) 事理に通ぜる學者、全き才 (五) 蒼は深青、碈は玉に次ぐ石、蘭洲が甃菴の墓碣を書せるを斥す (六) 美風千年の後に傳ふ

大高坂季明

煩。扶助之勤。銘レ心不レ忘。今親老汝年尚少。幸全レ生無レ滅レ家。是所レ望也。我罹二此惡病一。餘喘無レ所レ惜。命在二旦夕一。死レ水則幸也汝則避矣。栗泣曰。相親數年。臨レ難委レ之不祥也。語未レ畢門外詾詾且泣且號曰。水聲近。後者死。栗乃扶レ舅出二門外一。託レ人曰。乞救二此翁命一。舅曰。汝與レ夫來。不レ然我不二獨生一。栗曰。敬諾。大人步遲。請先行。妾與二良人一及レ之。乃以二舅副衣及田地典劵一。油紙裹レ之。以託二其人一遣レ之。而後入レ室侍二夫側一。誓レ天以與レ夫同レ死。水至遂溺而死。民屋亦蕩焉。夫妻之尸不レ知二在所一。水退民復二其業一。聞二栗女之志一。各出二錢物一。以修二其冥福瑞蓮佛寺一。甲斐國邑宰小宮山某。具二其狀一。達二之台聽一。且曰。舅六右衞門幸免焉。然去年不レ登。安兵衞以レ田質レ金以充レ租。伏望國恩賜二黃金一以優賞焉。則遺老有レ賴。死者可レ瞑。且以勵二民志一。於レ是賜二黃金若干一。以養レ舅。邑宰以二賜金一復二其田地一。以爲二安兵衞後一。且爲立二烈婦之碑一。謀二之一儒先一。以二國字一紀二其事一。嗚呼西婦之徵。上動二君心一。下傳以爲レ美。其名與レ石不レ朽。可レ謂二天道無一レ知也耶。

中井竹山非徵曰。蘭洲先生嘗言。徂徠之駁二仁齋一也。曰仁齋之於二宋儒一。一如下佛

（二）中井竹山の非徵に曰く、蘭洲先生嘗て言ふ、徂徠の仁齋を駁するや、曰く、仁齋の宋儒に於ける、一に佛氏の所謂宿冤有る者の如しと。嘗て己の宿冤を爲すこと更に甚だしきを知らざるなりと。蘭洲、朱學を家庭に承け、力めて徂徠を斥け宋儒を護る。然れども固執せず。故に其の自得する所、往往朱に反して

水橫流。夫妻葬二魚腹一。享保十三年戊申十二月。官嘉二其節一。賜二黃金一以旌二其事一。初七月八日。大風暴雨。川流沸騰。懷レ隄襄レ陸。田中村在二其下流。夜中人相呼曰。水將レ至。避レ之可。當二是之時一。夫疾病四肢爛潰。乃知レ不レ可レ起。乃謂レ栗曰。我死二於水一。汝疾避矣。汝不二我醜一。湯藥之

す。民屋亦蕩す。夫妻の尸在所を知らず。水退き民其業に復し、栗女の志を聞いて、各〻錢物を出し以て、其冥福(一四)を瑞蓮佛寺に修す。甲斐國の邑宰小宮山某、其狀を具して之を台聽(一五)に達す。且つ曰く、舅六右衞門幸に免る。然れども去年登らず(一六)。安兵衞田を以て金に質して以て租に充つ。伏して望む國恩黃金を賜ひ以て優賞せよ。則ち遺老(一七)賴る有り、死者瞑す可く、且つ以て民の志を勸さんと。是に於て黃金若干を賜ひ、以て舅を養ふ。邑宰、賜金を以て其田地を復し、以て安兵衞が後をなし、且つ爲に烈婦の碑を立て、之を一儒先に謀り、國字を以て其事を紀す。嗚呼匹婦の微、上君心を動かし、下傳へて以て美となす。其名石と朽ちじ。天道知る無しと謂ふ可けんや。

(一) 事を敍することつばらにしてつくせり (二) 貧は金、裝は衣裳、よめいりの仕度 (三) 床につく (四) 勞役、水を汲み米を舂くの意 (五) 綿糸をうみて薪の代を償く (六) 仰ぎ願つて一生を過ごす (七) 夫の病氣篤くして手足たゞれくづる (八) 藥を煎じる面倒 (九) 餘命惜む所無し (一〇) 難義にあつて棄つるは不可 (一一) やかましくさわぐ (一二) つゝしんで承知せり (一三) 地劵、同地の所有主を明記せる書付 (一四) 後世の安樂を佛に祈る (一五)

野外。必持湯茶往省之。遠出晩歸。必迎里門。一村人莫不相聚嘆賞者。有年于茲矣。嗚呼婦人之於夫也。所仰望而終身也。夫疾不事事。舅耄而家衰。豈堪託身。矧惡疾人情所憎。且無子。而年尚少。不捨之改嫁者。天下能有幾人。栗女孝且義矣哉。嗟天道無知。洪

と。是の時に當つて、夫(七)疾病にして四肢爛潰す。乃ち起つ可からざるを知る。乃ち栗に謂つて曰く、我れ水に死せん。汝疾く避けよ。汝、我を醜しとせず、湯藥の煩、扶助の勤、心に銘じて忘れず。今親老い汝年尚ほ少し。幸に生を全(八)うして家を滅すなかれ。是れ望む所なり。我れ此惡病に窘む。餘喘(九)惜む所なし。命旦夕に在り。水に死せば則ち幸なり。汝は則ち避けよと。栗、泣いて曰く、相親むこと數年。難(一〇)に臨んで之を委するは不祥なりと。語未だ畢らざるに、門外洶洶(一一)且つ泣き且つ號んで曰く、水聲近し。後るゝ者は死せんと。栗乃ち舅を扶けて門外に出し、人に託して曰く、乞ふ此翁の命を救へと。舅曰く、汝、夫と來れ。然らずんば我れ獨り生きじと。栗曰く、敬諾(一二)。大人歩むこと遲し。請ふ先づ行け。妾、良人と之に及ばんと。乃ち舅の副衣及び田地典券(一三)を以て、油紙之を裹み、以て其人に託して之を遣る。而して後室に入り夫の側に侍し、天に誓つて以て夫と死を同じうす。水至り遂に溺れて死

者也。因揭㆓於此㆒。曰。烈婦栗女。甲斐國田中村農夫之女也。幼孤依㆓村長某家㆒。村長愛㆓其爲㆑人。與㆓資裝㆒嫁㆓同村安兵衛者㆒。未㆑幾安兵衛染㆓惡疾㆒。臥在㆓牀蓐㆒。栗事㆑之身執㆓井臼㆒。毫無㆓厭心㆒。晝則代㆑夫耕㆑田。夜則還扶㆓助之㆒。其暇紡績以供㆓薪柴㆒。舅六右衛門。過㆓七十歲㆒。每㆔出遊㆓

しむ。未だ幾ならずして安兵衛悪疾に染み、臥して(三)牀蓐に在り。栗之に事へて身(四)井臼を執り、毫も厭心無し。晝は則ち夫に代りて田を耕し、夜は則ち還つて之を扶助し、其暇には(五)紡績以て薪柴に供す。舅六右衛門、七十歳を過ぐ。出でて野外に遊ぶ毎に、必ず湯茶を持ち往いて之を省す。遠く出で晩く歸れば、必ず里門に迎ふ。一村の人相聚つて嘆賞せざる者なし。玆に年有り。嗚呼婦人の夫に於けるや、(六)仰望して身を終ふる所なり。夫疾みて事を事とせず。舅耄して家衰ふ。豈に身を託するに堪へんや。矧や悪疾は人情の憎む所なるをや。且つ子無くして、年尚ほ少し。之を捨てて改嫁せざる者、天下能く幾人か有る。栗女や孝且つ義なるかな。嗟天道知る無し。洪水横流、夫妻魚腹に葬らる。享保十三年戊申十二月、官其節を嘉し、黄金を賜ひて、以て其事を旌す。初め七月八日、大風暴雨、川流沸騰し、隄を懐み陸に襄る。田中村は其下流に在り。夜中人相呼で曰く、水將に至らんとす。之を避けて可なり

既行二刻于世一。其他人勸ㇾ梓。而謙讓不ㇾ許。又兼攻二國學一。世有二源語梯三卷一。人得ㇾ益焉。其附言曰。此書不ㇾ詳二何人所ㇾ著。人或購二得之市一。此狡猾貪ㇾ利者。盜二蘭洲源語詁一。改二刻其題署一也云。河井立牧桂山集。載ㇾ倣二蘭洲春曙百首倭歌一。由ㇾ此視ㇾ之。又好詠二國風一。

蘭洲文世不二多傳一。余嘗見二其烈婦溺死記一。敍事曲悉。使二人悲痛一。實是婦女之鑑戒。不ㇾ可二蕪沒一。

益を得。其附言に曰く、此書何人の著す所なるかを詳かにせず。人或は之を市に購得すと。此れ狡猾にして利を貪る者が、蘭洲の源語詁を盗みて、其(三)題署を改刻せるなりと云ふ。河井立牧の桂山集に、蘭洲の春曙百首の倭歌に倣ふを載す。此に由つて之を視れば、又好んで國風を詠ぜしなり。

(一) 出版をすゝむ　(二) 修む　(三) 標題を更む

蘭洲の文、世に多く傳らず。余嘗て其烈婦溺死の記を見るに、(一)敍事曲悉、人をして悲痛せしむ。實に是れ婦女の鑑戒にして、蕪沒すべからざる者なり。因て此に掲ぐ。曰く、烈婦栗女は、甲斐國田中村の農夫の女なり。幼にして孤、村長某の家に依る。村長其人となりを愛し、(二)資裝を與へて同村安兵衛といふ者に嫁せ

九郎。號二蘭洲一。又號二洲菴一。持軒男。大坂人。蘭洲嗣二家學一。又有レ重二名於世一。享保中。中井甃菴設二鄕校于大坂尼崎坊一。三宅石菴主二講席一。蘭洲爲二助教一焉。亡レ何來二江戶一。遂召仕津輕侯一。獻替多二裨益一云。然以二言或有一レ不レ行。乃移レ病乞レ去。有司惜而不二爲通一。數乞終允。即歸二休于大坂一。復敎二授其鄕校一。以終二其身一。辭二津輕一後。遠近爭召。而皆不レ應也。

男。大坂の人。

蘭洲家學を嗣いで、又世に重名有り。享保中、中井甃菴、鄕校を大坂尼崎坊に設く。三宅石菴講席を主る。蘭洲助敎たり。何もなく江戶に來り、遂に召されて津輕侯に仕ふ。獻替(一)裨益多しといふ。然るに言或は行はれざる有るを以て、乃ち(二)病に移し去らんことを乞ふ。有司惜んで爲に通ぜず。數〻乞うて終に允さる。即ち大坂に歸休し、復其鄕校に敎授し、以て其身を終ふ。津輕を辭する後、遠近爭ひ召ししも、皆應ぜず。

(一) 善を勸め惡を止め、よく君をたすく　(二) 病にかこつけて去らんとす

蘭洲博學富二著述一。瑣語質疑篇非物編

蘭洲博學著述に富む。瑣語・質疑篇・非物編は、既に世に行刻す。其他人(二)梓を勸むるも、謙讓許さず。又兼て國學を攻む(三)。世に源語梯三卷有り。人

則天下之能事畢矣。以レ故說レ書循二環學庸語孟一。未三嘗及二佗。此方坊間諸賈。命二其業一曰二某屋一。如二所謂茶屋酒屋之類一。擄人戲目二先生一。謂二四書屋加助一云。

年八十三輪執齋作二倭歌一賀レ之。曰。脟曤速乙的。怛葛孤續過屋孤。恌捺盻謌失。榖榖祿訥訥栗木。貰吉奴都饑乙木。此陳二其德與一レ壽無レ疆。人仰レ之如レ日也。碑曰。享保六年辛丑。閏七月十八日終二于家一。享年八十一。傳曰。享保中享年八十。卒二於大坂僑居一。

年八十、三輪執齋倭歌を作り之を賀す。曰く、日にそひて高くぞ仰ぐ、學び得し心の法も盡きぬ齡もと。此れ其德と、壽の疆無きと、人之を仰ぐこと日の如くなるを陳べしなり。碑に曰く、享保六年辛丑、閏七月十八日、家に終る。享年八十一。傳に曰く、享保中享年八十、大坂の僑居に卒すと。

（一）僑居

五井純禎

五井純禎。字子祥。小字藤

五井純禎、字は子祥、小字は藤九郎、蘭洲と號す。又洲菴と號す。持軒の

敗紙一用二其空白一。以レ暴二殄天物一爲レ戒。天資坦率。不レ修二邊幅一。不レ飾二辭說一。平生不三嘗言二人之惡一。或與レ人語。言或不レ當亦不レ斥レ之。但曰。某所レ不レ解。閭閻鄙俚之言。多レ所レ不レ解。苟及レ問レ學。誨誘懇至不レ解不レ已。嘗謂レ人曰。某胸中未三嘗蓄二一惡念一。又曰。人不レ能レ爲レ惡者也。有二一書生一。遽曰。吾輩不レ能レ然。先生正レ色曰。不レ意君之爲レ人乃爾。惡若可レ作試爲レ之。家傳二日本紀學一。治レ之尤精。不レ雜二迂怪不經之說一。又嗜二和歌一。不レ務二瑯鏤一。敏而有レ理。又梁田蛻巖作レ傳曰。先生常謂人得三能通二四子一。可三以識二宇宙第一理一。乃行而躬焉。

ること尤も精し。迂怪不經の說を雜へず(一一)。又和歌を嗜む。瑯鏤を務めず(一二)、敏にして理有り。又梁田蛻巖、傳を作つて曰く、先生常に謂ふ、人能く四子に通ずるを得ば、以て宇宙第一理を識る可し。乃ち行つて躬にせば、則ち天下の能事畢れりと。故を以て書を說くに學庸語孟を循環し、未だ嘗て他に及ばず。此方坊間の諸賈、其業を命じて某屋と曰ふ。所謂茶屋酒屋の類の如し。攝人(一三)戯に先生を目して、四書屋加助と謂ふと云ふ。

(一) 持軒は蘭州の父なるよりかくいふ　(二) 大和宇田の人、本姓小崎氏、名は具平、通稱彦六、大阪に住す、國學者　(三) 和歌　(四) 家産富有にて親類のためにごまかされたるも問はず　(五) 困窮する　(六) 安ずるさま　(七) むやみに消失す　(八) 率直にしてかざり氣なし　(九) 村里の俗語　(一〇) をしへ導くこと極めて懇にてわからねば止めず　(一一) まはり遠く且つ常經を逸しだる說なし　(一二) 瑯はゑがく、鏤はたちばむ、即ちつくりかざる　(一三) 攝津の人

此地文學之興。以持軒爲首。南郭復闡洲書曰。在昔尊翁先生唱道浪華。海內景仰久矣。又學下河邊長流。善國風。東涯撰墓碑。盛稱其學術行義曰。壯時家道饒阜。爲親眷所掩而不問。及晚遂致窘迫。乃曰。若無人相恤則死耳。淡泊自守晏如也。簡牘往來。常揀

生道を浪華に唱へ、海内景仰すること久しと。又下河邊長流(二)に學び、國風(三)を善くす。東涯、墓碑を撰び、盛に其學術行義を稱して曰く、壯時家道饒阜(四)、親眷の爲に掩はれしも問はず。晩に及び遂に窘迫(五)を致す。乃ち曰く、若し人相恤むこと無くば則ち死せんのみと。淡泊自ら守つて晏如(六)たり。簡牘の往來、常に敗紙を揀んで其空白を用ひ、天物を暴殄(七)するを以て戒と爲す。天資坦率(八)にして、邊幅を修めず、辭說を飾らず。平生嘗て人の惡を言はず。或は人と語るに、言或は當らずとも亦之を斥けず。但曰く、某の解せざる所と。閭閻(九)鄙俚の言、解せざる所多し。苟も學を問ふに及んでは、誨誘(一〇)懇至解せざれば已まず。嘗て人に謂つて曰く、某胸中未だ嘗て一惡念を蓄へずと。又曰く人は惡を爲す能はざる者なりと。一書生有り。遽かに曰く、吾輩然ること能はずと。先生色を正して曰く、意はざりき君の人と爲り乃ち爾らんとは。惡若し作す可くんば試みに之を爲せと。家に日本紀學を傳ふ。之を治む

持軒其先家二大和五井戸一。因氏二五井戸一。世稱二井戸一者同出二于此一。共一族云。持軒本醫者也。嘗誤二方劑一致二人不起一。慨然改レ轍爲レ儒。則學篤行修綽有二古風一。本多侯厚レ禮辟レ之。以聞二講說一。大喜二其誠實一。一時名彥。伊藤仁齋。東涯。仲邨愓齋。貝原益軒。恥軒。三輪執齋等。咸以二文字一爲二交驩一。初宗二宋儒一。晚有レ所レ見不レ拘二守一。如二其論一レ性。專以二氣質一爲レ說云。

同じく此に出づ。共に一族と云ふ。持軒は本醫者なり。嘗て方劑(一)を誤つて人を不起に致す。慨然として轍を改めて(二)儒となる。則ち學篤く行修り綽として(三)古の風有り。本多侯禮を厚うして之を辟し、以て講說を聞き、大に其誠實を喜ぶ。(四)一時の名彥、伊藤仁齋・東涯・仲邨愓齋・貝原益軒・(五)恥軒・三輪執齋等、咸文字を以て交驩(六)をなす。初め宋儒を宗とし、晚に見る所有りて拘守(七)せず。其の性を論ずる如き、專ら氣質を以て說を爲すと云ふ。

(一)處方を誤つて人を死に致す　(二)方針をかへて儒者となる　(三)ゆつたりとして古人の風あり　(四)同時代の名士　(五)貝原好古　(六)よしみを交ふ　(七)かゝはり守らず

持軒成童入レ京。居十餘年。歸二大坂一敎授。

持軒、成童にして京に入り、居ること十餘年、大坂に歸つて敎授す。此地、文學の興る、持軒を以て首となす。南郭が蘭洲に復する書に曰く、在昔尊翁先(一)

男三的。字文甫。號二圭齋一。卒于京師。伊藤東涯記レ墓曰。惟昔遯菴先生。學二于松永氏之門一。講レ經授レ徒。久在二輦下一。人所二師尊一。君夙承二家庭之訓一。兼從二先子一遊。天資樂易。善與レ人交。家世臣二事吉川家于防州巖國一。鄕人嚮レ學君有レ力焉。

男、三的、字は文甫、圭齋と號す。京師に卒す。伊藤東涯墓に記して曰く、惟ふに昔遯菴先生、松永氏の門に學び、經を講じ徒に授く。久しく輦下(一)に在り。人の師尊する所。君夙に家庭の訓を承け、兼て先子(二)に從つて遊ぶ。天資樂易(三)、善く人と交る。家世吉川家に防州巖國に臣事す。鄕人の學に嚮ふこと、君力有りと。

(一) 天子のお膝元、京都 (二) 仁齋 (三) 性質快活にして心やすく、よく人と交際す

五井守任。字加助。號二持軒一。大坂人。

五井守任

五井守任、字は加助、持軒と號す。大坂の人。持軒、其先は大和の五井戸に家す。因つて五井を氏とす。世、井戸と稱する者も

先生ニ。蓋其標註皆蠅頭細字。猶蝨著レ衣。故云レ爾。

物徂徠少在ニ上總一時。得ニ遯菴標註一讀レ之。後介ニ縣長伯一（周南父）贈レ書。稱ニ諸標註一以爲下惠及ニ海内一者上。而此書未レ致。遯菴就レ木。周南代レ父復ニ徂徠一書曰。以下與ニ都由的一書上託。嗟乎的也。以ニ今年春一下世。乃與ニ孝孺一議。致ニ之巖邑一。使下的子文市祭ニ告墓一。以成中先生之志上也。由的吾嘗所ニ兄事一也。學術褒然質行可レ尙。不下當ニ彼其身一與ニ先生一一相識上。今則及レ墓也。悲哉。

物徂徠少うして上總に在りし時、遯菴の標註を得て之を讀む。後、縣長伯(一)（周南の父）を介して書を贈り、諸標註を稱して以て惠海内に及ぶ者と爲す。而るに此書未だ致さざるに、遯菴木に就く(二)。周南の父に代つて徂徠に復する書に曰く、都由的に與ふる書を以て託せらる。嗟乎的や、今年春を以て下世す(三)。乃ち孝孺(四)と議して之を巖邑(五)に致し、的の子文市をして墓に祭告し、以て先生の志を成さしむ。由的は吾が嘗て兄事せし所なり。學術褒然(六)、質行尙ぶ可し。彼、其身に當つて先生と一たびも相識らず(七)。今則ち墓に及ぶ。悲しいかなと。

(一) 山縣長伯をなかだちとなす　(二) 棺に入る、死す　(三) 死す　(四) 山縣周南　(五) 岩國　(六) 學問經術立派にして性質行動尊敬に價ひす　(七) 徂徠

嘗著二日本古今人物史一。而中川清秀傳。有下書事觸二忌諱一者上。以レ此得二罪大府一。乃於二巖國一禁錮。數年遭レ赦。於レ是又入レ京。壹以二教授一爲レ任。久之名益重。其遭レ赦爲二延寶乙卯六月二十四日一。是日山鹿高祐號二素行子一寛文六年。坐レ事幽二于赤穗侯一。亦倶赦。

嘗て日本古今人物史を著す。而るに中川清秀の傳、書事忌諱(一)に觸るゝ者有り。此を以て罪を大府に得、乃ち巖國(二)に禁錮せらる。數年にして赦に遭ふ。是に於て又京に入り、壹に教授を以て任と爲す。久しうして名益〻重し。其赦に遭ひしを延寶乙卯(三)六月二十四日となす。是日山鹿高祐（素行子と號す。寛文六年、事に坐して赤穗侯に幽せらる）亦倶に赦さる。

(一) 其筋の嫌疑にふる　(二) 周防岩國　(三) 三年

遯菴博學著書多。於二四子及諸書一著二標註一。以便二初學一。時號二標註由的一。又或稱二蝨

遯菴、博學にして著書多し。四子(一)及び諸書に於て標註を著し以て初學に便ず。時、標註由的と號し、又或は蝨先生と稱す。蓋し其標註皆蠅頭の細字にして、猶ほ蝨の衣に著けるがごとし。故に爾云ふ。

(一) 四書に同じ、論語・孟子・大學・中庸の總稱

宇都宮三近。字由的。號頑拙。又號遯菴。周防人。仕巖國吉川氏。遯菴幼時游學京師。明暦丁酉年二十四。承主命歸鄉。途中有詩及倭歌。編名巖邑紀行。印行于世。其居京學於松永尺五門。乃紀行難波吟有昨日二月上丁日。老師尺五講堂前。各羞蘋蘩評書卷。祭至聖而配大賢。我爲公程背此會。幾思師友意悁悁句。

宇都宮三近

宇都宮三近、字は由的、頑拙と號す。又遯菴と號す。周防の人。巖國の吉川氏に仕ふ。

遯菴、幼時京師に游學す。明暦丁酉、年二十四、主命を承けて郷に歸る。途中、詩及び倭歌有り。編して巖邑紀行と名づけ、世に印行す。其京に居るや、松永尺五の門に學ぶ。乃ち紀行難波の吟に、昨日二月上丁の日、老師尺五講堂の前、各〻蘋蘩を羞めて書卷を評し、至聖を祭りて大賢を配す、我れ公程の爲に此會に背く、幾たびか師友を思ひ意悁悁の句あり。

(一) 三年 (二) 上のきのとの日、釋奠を行ふ日なり (三) うき草と白よもぎ、祭に供ふ (四) 孔子を祭りて顏孟其の他の大賢を併せ祭る (五) 憂へかなしむ

著ニ遊記一。實有ニ內助一云。東涯題ニ貝原翁及妻某氏字帖一。曰。前時海之西有ニ二巨儒一。曰省菴先生。曰損軒先生。先人之於ニ省菴子一也。雖レ未レ識レ面。笄牘往來。每相推重。於ニ損軒子一也。嘗相ニ會于一搢紳家一。而道不レ契。牛山香月子筑產也。宦ニ于兩豐之間一。時時上レ都過ニ訪先人一。故平素周ニ旋三老宿之間一。而損軒子則特其所ニ親依一也。近又遊レ京。际ニ予乙軸一。則損軒子與ニ其內子某氏一之遺筆也。俾ニ予跋ニ其尾一。嗚呼損軒子之書。端好有レ度。老而不レ衰。某氏躬ニ孟光之賢一。而兼ニ衛氏之筆一。皆予之所ニ夙聞一。而加レ之以ニ牛山子尚レ賢懷レ德之誠一。曷可レ負ニ其託一耶。

山香月子は筑の產なり。兩豐の間に宦し、時時都に上つて先人を過訪す。故に平素三老宿(六)の間に周旋(五)す。損軒子は則ち特に其の親依するところなり。近ろ又京に遊び予に乙軸を际す。則ち損軒子と其內子(七)某氏との遺筆なり。予に其尾に跋せしむ。嗚呼損軒子の書、端好度(八)あり。老いて衰へず。某氏孟光(九)の賢を躬にして、衛氏(一〇)の筆を兼ぬ。皆予の夙に聞く所なり。而して之に加ふるに牛山子の賢を尙び德を懷ふの誠を以てす。曷ぞ其託に負く可けんやと。

(一) 文筆にすぐる　(二) 和歌　(三) 東涯の父仁齋を指す　(四) 書簡のやりとり　(五) 豐前豐後　(六) 三老學者の間　(七) 內室卽ち妻　(八) 端正にして法度あり　(九) 漢の人、夫を擇びて梁鴻の妻となり、隨つて霸陵の山中に入る　(一〇) 晉の衛瓘、草書を善くす

存齋樂軒。皆益軒兄而好レ學有ニ著作一。存齋有ニ丈夫子二一。曰可久。曰重春。重春承ニ益軒後一。樂軒子曰ニ好古一。號ニ恥軒一。益軒養爲レ子。博雅類ニ益軒一。惜哉先沒。

存齋・樂軒は、皆益軒の兄にして、學を好み著作有り。存齋に丈夫子(一)二有り。曰く可久。曰く重春。重春、益軒の後を承く。樂軒の子を好古と曰ひ、恥軒と號す。益軒養つて子と爲す。博雅(二)、益軒に類す。惜しいかな先だちて沒す。

(一) 男の子　(二) 博學至醇なること益軒に似たり

益軒妻江崎氏。名初字得生。號ニ東軒一。才德並全。治レ經通レ史。善嫻ニ文墨一。工作ニ隷書一。又詠ニ國風一。常從ニ益軒一遊ニ歷勝地一。益軒多

益軒の妻江崎氏、名は初、字は得生、東軒と號す。才德並び全く、經を治め史に通ず。善く文墨に嫻ひ、工に隷書を作る。又國風(二)を詠じ、常に益軒に從つて勝地を遊歷す(一)。益軒多く遊記を著す、實に内助有りと云ふ。東涯、貝原翁及び妻某氏の字帖に題して曰く、前時、海の西に二巨儒有り。曰く省菴先生、曰く損軒先生。(三)先人の省菴子に於けるや、未だ面を識らずと雖も、竿牘(四)往來、毎に相推重す。損軒子に於けるや、嘗て一搢紳の家に相會す。而も道契はず。牛

愼思錄駁ニ時輩之學一曰。游蕩氾濫偏僻駁雜。或云。讀レ書學レ文之事常多。愼レ德力レ行之功常少。或云。欲レ立ニ己說一。而責ニ人之小疵一。動常傷ニ于刻薄一。雖レ有ニ其說是者一也。其心則非矣。浮躁淺露非ニ君子之氣象一。其文字雖ニ間有ニ可レ採者一。其人猥陋可レ賤而已矣。是蓋指ニ徂徠黨一也。又斥下爲ニ大學非ニ聖人之言一者上。爲ニ近世之俗儒一。是指ニ仁齋一也。此他學術論。及異學誹ニ朱子一辨。載ニ自娛集一。皆論下刺當世排ニ宋儒一更立中門戶上。

愼思錄に時輩の學を駁して曰く、游蕩氾濫偏僻駁雜(一)と。或は云ふ、書を讀み文を學ぶの事常に多く、德を愼み行を力むるの功常に少なしと。或は云ふ、己が說を立てんと欲して、人の小疵(二)を責め、動もすれば常に刻薄(三)に傷る。其說是なる者有りと雖も、其心は則ち非なり。浮躁淺露(四)、君子の氣象に非ず。其文字間採る可き者有りと雖も、其人猥陋(五)賤む可きのみと。是れ蓋し徂徠の黨を指すなり。又大學は聖人の言に非ずと爲す者を斥け、近世の俗儒と爲す。是れ仁齋を指すなり。此他學術論、及び異學の朱子を誹る辨（自娛集に載す）は、皆當世宋儒を排して更に門戶を立つるを論刺(六)す。

(一) とりとめなく、みだりがはしく、かたよりいりまじる　(二) 小なるきず　(三) 冷酷に過ぐ　(四) 輕率にして淺薄　(五) いやしくみだら　(六) 攻擊す

雜然相向。喋喋相語。中有二一少年一。亢顏談レ經。旁若レ無レ人。益軒暗無レ言。若レ無レ能者一。既而及レ船達レ岸。各告中其姓名郷里上。則少年始知レ爲二益軒一。恧然不二自容一。遂不レ陳二其名一鼠竄去。

告ぐるに及へば、則ち少年始めて益軒たるを知り、恧然(四)として自ら容れず。遂に其名を陳べず鼠竄(五)して去る。

(一) ごた〳〵と向ひあつてぺら〳〵話す　(二) 傲然として經義を說く　(三) 唖の如く無言　(四) 恥づかしくてたへられず　(五) こそ〳〵と立去る

益軒讀書之所有二二室一。一則號二益軒一。一則號二損軒一。並自命也。世或有下爲三姪好古號二損軒一者上。或有地爲下初號二損軒一。後從二書估言一更號中益軒上者天。皆謬傳不レ可レ信。

益軒、讀書の所二室有り。一は則ち益軒と號し、一は則ち損軒と號す。並に自ら命ずるなり。世或は姪好古損軒と號すと爲す者有り。或は初め損軒と號し、後書估(一)の言に從ひて更めて益軒と號すと爲す者有り。皆謬傳(二)にして信ず可からず。

(一) 本屋　(二) あやまれる言ひつたへ

五沒。臨沒賦詩二首倭歌一首。詩云。平生心曲有誰知。常畏天威欲勿欺。存順沒寧雖不克。朝聞夕死豈不悲。幼求斯道在孤懷。德業無成夙志乖。八十五年爲曷事。讀書獨樂是生涯。倭歌曰。穀矢葛怛蠖。乙實鵄跋葛栗訥。穀穀實矢闘。鵄速石過傭栗訥。幽嵬屋密失葛捺。譯曰。顧回往事如經宿。八十餘年夢裏過。

生の心曲誰有りて知らん、常に天威を畏れ欺くなからんと欲す、存順沒寧克はずと雖も、朝聞夕死(二)豈に悲しからずや。(三)幼にして斯道を求むること孤懷に在り、德業成る無く夙志乖く。八十五年曷事をか爲せる、讀書獨樂是れ生涯と。倭歌に曰く、來しかたは、一夜ばかりの心ちして、八十路あまりの、夢を見しかな。（譯に曰く、往事を顧回すれば經宿の如し、(四)八十餘年夢裏に過ぐ）

(一) 平生の心中誰か知らん　(二) 論語里仁の「子曰朝聞道、夕死可矣」の語に取る　(三) 幼時より聖人の道をもとめんことを獨り心に求む　(四) 一夜泊り

嘗居東將西歸。取路于海上。同船數人名姓不相知。

嘗て東に居て將に西に歸らんとし、路を海上に取る。同船數人名姓相知らず。雜(一)然相向ひ、喋喋相語る。中に一少年有り。(二)亢顏經を談ず。傍人無きが若し。益軒(三)喑として言無く、能無き者の若し。旣にして船岸に達し、各々其姓名鄕里を

我國俗之所レ宜。而詞意易二通曉一。故古人歌詠極精絶矣。古昔雖二婦女一亦能レ之者多矣。唐詩者非二本邦風土之所一レ宜。其詞韻異二于國俗之言語一。雖レ摸二倣于中華一。故雖二古昔之名家一。其所レ作拙劣不レ及二于和歌一也遠矣。我邦只可下以二和歌一言二其志一述中其情上。不レ要下作二拙詩一以招中詅癡符之誚上。又曰。白樂天以謂。作レ詩者勞レ心虛役二聲氣一。連朝接夕不三自知二其苦一。非レ魔而何。愚謂此以レ詩爲レ魔也。其言宜矣。然而白樂天其言如レ此。而所レ爲不レ免下爲二詩魔一所上レ惱者何邪。

し難し。故に古昔の名家と雖も、其の作る所拙劣にして和歌に及ばざるや遠し。我が邦、只和歌を以て其志を言ひ其情を述ぶ可し。拙詩を作つて以て詅(四)癡符の誚を招くを要せずと。又曰く、白樂天以謂へらく、詩を作る者は心を勞し虛しく聲氣を役す。連朝接夕自ら其苦を知らず。魔に非ずして何ぞやと。愚謂ふ此れ詩を以て魔と爲すなり。其言宜し。然り而して白樂天其言此の如くにして、而も爲すところ詩魔の爲に惱まさるゝを免れざるは何ぞやと。

(一) 役に立たぬむだごと　(二) 古人の歌は甚だすぐる　(三) 言語の韻が日本語と異なる　(四) 癡鈍を衒賣する札の意、拙き文章詩歌をはこり顔を世に出すを嘲る

益軒年八十

益軒年八十五にして沒す。沒するに臨んで詩一首倭歌一首を賦す。詩に云ふ、平(二)

一作二樂訓一。八十四作二養生訓一。愼思錄載。魏志曰。胡昭怡怡無レ不レ愛。雖二僕隷一必加レ禮焉。年八十而不レ倦二於書籍一者。於二胡徵君一見レ之矣。篤信謂。胡昭愛敬之德量不レ可レ及。可二以爲一レ法。如二八十讀一レ書不レ倦。吾雖二毫畫一。亦日夕手不レ釋レ卷矣。是爲レ可二企及一。此自紀二其實一也。

年三十九著二近思錄備考一。明年著二小學備考一。並版二布于世一。後學因レ此而進者多云。人見鶴山云。本邦先儒編著固多。而裒二輯經傳註解一者。以二益軒先生此二篇一爲レ始。

年三十九、近思錄備考を著し、明年小學備考を著す。並に世に版布す。後學(一)此に因つて進む者多しと云ふ。人見鶴山云く、本邦先儒の編著固より多し。而して經傳註解を裒輯(二)する者、益軒先生の此二篇を以て始となすと。

(一) 後進の學徒　(二) あつめ編む

益軒雖二時作一レ詩。素好二倭歌一。而不レ好レ詩。每謂レ詩爲二無用閑言語一。愼思錄曰。和歌者

益軒、時に詩を作ると雖も、素より倭歌を好んで詩を好まず。每に詩を謂つて無用(一)の閑言語となす。愼思錄に曰く、和歌は我が國俗の宜しき所にして、詞意通曉し易し。故に古(二)人の歌詠極めて精絕なり。古昔は婦女と雖も亦之を能くする者多し。唐詩は本邦風土の宜しき所に非ず。其詞(三)韻國俗の言語に異なり、中華に摸倣

百有餘種。多書以二國字一。語極懇切。田夫紅女童兒隸卒皆便レ之。與下近時所二刊行一。泛泛者上。廻不レ類。又善二修養一。投レ老猶矍矍不レ衰。其所二屬綴一者不レ少。六十作二和漢名數增補一。六十七作二大和廻一。七十四作二筑前續風土記及點例一。七十五作二諸菜譜一。七十九作二大和本艸一。八十

行する所の泛泛(二)たる者と迴かに類せず。又修養に善し。老に投じ猶ほ矍矍(三)として衰へず。其の屬綴(四)する所の者も少なからず。六十、和漢名數增補を作り、六十七、大和廻を作る。七十四、筑前續風土記及び點例を作り、七十五、諸菜譜を作る。七十九、大和本艸を作り、八十一、樂訓を作り、八十四、養生訓を作る。愼思錄に載す、魏志に曰く、胡昭怡怡として愛せざる無く、僕隷と雖も必ず禮を加ふ。年八十にして書籍(五)に倦まざる者は、胡徵君に於て之を見ると。篤信謂ふ、胡昭が愛敬の德量及ぶ可からず。以て法と爲す可し。八十にして書を讀んで倦まざるが如きは、吾れ耄耋(六)と雖も、亦日夕手に卷を釋かず。是れ企及(七)すべしとなすと。此れ自ら其實を紀するなり。

(一) 田夫は農夫、紅女は工女、童兒は子供、隸卒はめしつかひの類 (二) つまらぬ書 (三) 元氣さかんなる貌 (四) 編著する書 (五) 支那三國時代の隱士、德行あり、漢の末、孫狼亂をなす、されど昭の隱れたる陸渾の一邑を侵すなく、邑民、昭に賴りて始めて安し、怡怡は愉快なるさま (六) 老ぼれ (七) 爲すことを得

生死。氣有生死。及體用一源。顯微無間。主一無適。冲莫無朕等之說。爲與聖經有徑庭。而爲人謙恭純篤。其言曰。吾幸生于朱子之後。而得窺其書。可謂無窮之幸。又罔極之恩也。故吾敬之如神明。信之如蓍龜。視諸世之其學未眞。輒拾人之短以爲口實者。則霄壤不啻也。

て、輒ち人の短を拾ひ以て口實となす者に視れば、則ち霄壤も啻ならざるなり。

(一) 以下の各項皆朱子の學說の主要點なり。大極は本體なり、本體はもと現象を超越せり、形なく感覺し得べからず、故に無極といふ (二) 陰陽其物は道にあらず、陰陽する所以即ち作用を以て道となす (三) 理は本體にして生死なし、氣は現象にして生死あり (四) 體は本體、用は本體の作用にして、共に源を一にす (五) 顯は本體の活動してあらはれたるもの即ち用なり、微は靜かにして未だ現れざるもの即ち體なり、體用一源なれば、顯微の間にへだてなきは當然なり (六) 心專一にして放散せざる意、朱子は之を敬といふ (七) 冲莫は天地の空漠たるをいひ、無朕は何等のきざしなきをいふ、朱子は天地は空漠にして、其間何のきざしなけれども、其中に萬物の將に生ぜんとする形象備れりと說く、靜中に動あり、無中に有あるなり (八) 聖人の書に說く所とへだたりあり (九) 蓍はめどぎ轉じて筮竹、龜は其甲をやきて吉凶を卜するもの

益軒好著書。而救世之心實苦。其所著

益軒好んで書を著す。救世の心實に苦なり。其著す所百有餘種、多く書するに國字を以てし、語極めて懇切に、(一)田夫紅女童兒隸卒皆之を便とす。近時刊

年一入レ京講學。是時都下名彦胥傾レ心下レ之。遂以二博見篤學一名重二海內一。益軒學無二常師一。或以爲二松永昌三門人一者謬矣。太宰德夫於二儒林一最鮮二許可一。其於二益軒一。嘗稱說曰。博學洽聞海內無レ比。

㊀七年　㊁軒は黃帝の姓たる軒轅氏の略、岐は岐伯と稱する人、共に醫學の祖、轉じて醫術の稱　㊂人に殊なりすぐれたる性質　㊃名士　㊄春鐘　㊅儒者仲間に於て最も許すこと少し　㊆學問博く見聞ひろし

初其學無レ所レ主。於二陸象山王陽明說一。皆有レ所レ取焉。及三後讀二學蔀通辨一。壹歸二依朱學一。雖レ然晚年著二大疑錄二卷一。以下大極本無極。陰陽非レ道。所二以陰陽一者道。性有二本然氣質一。理無二

初め其學主とする所無し。陸象山・王陽明の說に於て、皆取る所有り。後學蔀通辨を讀むに及び、壹に朱學に歸依す。然りと雖も晚年大疑錄二卷を著し、大極(一)は本無極(二)、陰陽は道に非ず、陰陽する所以の者道なり、性に本然の氣質有り、理(三)に生死無し、氣に生死有りと。及び體用一源(四)、顯微無間(五)、主一無適(六)、沖莫無朕(七)等の說を以て、聖經(八)と徑庭有りと爲す。而も人と爲り謙恭純篤なり。其言に曰く、吾、幸に朱子の後に生れて、其書を窺ふことを得たり。無窮の幸、又罔極の恩なりと謂ふ可し。故に吾之を敬すること神明の如く、之を信ずること蓍龜(九)の如しと。諸を世の其學未だ眞ならずし

貝原篤信。字子誠。小字久兵衞。號ニ益軒一。又號ニ損軒一。筑前人。仕ニ國侯一。益軒以ニ寛永庚午十一月十四日一。生ニ于福岡城中官舍一。父利貞號ニ寛齋一。通ニ軒岐家言一。益軒自レ幼警敏有ニ殊質一。九歲就ニ兄存齋一讀レ書。多成ニ暗誦一。及ニ中

貝原篤信

貝原篤信、字は子誠、小字は久兵衞、益軒と號し、又損軒と號す。筑前の人。國侯に仕ふ。

益軒は寛永(一)庚午十一月十四日を以て、福岡城中の官舍に生る。父は利貞、寛齋と號し、(二)軒岐家の言に通ず。益軒、幼より警敏にして(三)殊質有り。九歲、兄存齋に就いて書を讀み、多く暗誦を成す。中年に及び京に入りて講學す。是時都下の名彥(四)心を傾けて之に下る。遂に博見篤學を以て名海内に重し。益軒、學、常師なし。或は以て松永昌三の門人となすも謬れり。(五)太宰徳夫、(六)儒林に於て最も許可鮮し。其の益軒に於ける、嘗て稱說して曰く、(七)博學洽聞海内比無しと。

字。其分レ門略倣二小學一而敷二衍之一。博纂二錄倭漢古今賢媛一。此邦女誡。其克裨二世敎一。蓋莫レ過二此書一。鳩巢以二其不レ載二義經妾靜一。引下采レ葑采レ菲無レ以二下體一。以尤レ之。要惟遺二一烈女一耳。何害二此編一。

の克く世教を裨くるもの、蓋し此書に過ぎたるなし。鳩巢、其の義經の妾靜を載せざるを以て、(二)葑を采り菲を采る、下體を以てする無かれを引き、以て之を尤む。要するに惟一烈女を遺すのみ。何ぞ此編を害はん。

(一) 意味をおし廣む　(二) 世の風教の助けになる　(三) 詩經邶風谷風篇に出づ。葑菲はかぶら、下體は根、卽ちかぶらを採りて食するに、其根は時によりて味に美惡あれど根惡しくして其莖の美をすつべからずとの義にて、小惡を以て大善をすつべからずとの意

愓齋行狀一卷。門人阿波增益夫。奉二遺言一撰レ之。首載二肖像及愓齋自題詩一首一。其詩云。利名雙字胡爲者。

愓齋行狀一卷、門人阿波の增益夫、(一)遺言を奉じて之を撰ぶ。首に肖像及び愓齋自題の詩一首を載す。其詩に云ふ、利名の雙字胡爲なる者ぞ、億萬の民生倶に(二)策驅す。(三)耆耋弃材世計に懜し、(四)林曲に考槃して永く言に娛むと。

(一) 增田謙之、字は益夫、阿波の人　(二) 名と利との爲にかけまはる　(三) 年老いて才拙く世渡りにくらし　(四) 山水の間に遊樂す

惕齋少二伊藤仁齋一二歳。頡頏齊レ名。當世稱曰。惕齋難レ兄。仁齋難レ弟。

惕齋、伊藤仁齋より少きこと二歳。頡頏(一)名を齊しうす。當世稱して曰く、惕齋兄たり難く、仁齋弟たり難しと。

(一) 相上下して聲名同等なり

惕齋饒二著書一。其筆記詩集傳後所レ記四十五部。凡三百十八卷。其鋟梓者十六部。凡百七十四卷。而沒後所レ刊者甚多矣。若夫後世儒者。其所二述作一。非二身自刻一レ之、則身後終充二之鼠蠹口腹一。愧二於惕齋一多矣。

惕齋、著書饒し。其筆記・詩集・傳の後に記す所四十五部、凡そ三百十八卷。其鋟梓(一)の者十六部、凡そ百七十四卷にして、沒後刊する所の者甚だ多し。若し夫の後世の儒者が、其の述作する所、身自ら之を刻するに非ざれば、則ち身後終に之を鼠蠹(二)の口腹に充つること、惕齋に愧づる多し。

(一) 板に刻したるもの　(二) 紙を食ふ蟲

姫鏡三十二卷。爲二婦女一著レ之。則綴以二國

姫鏡三十二卷は、婦女の爲に之を著す。則ち綴るに國字を以てし、其門を分つ略小學に倣つて之を數衍(一)し、博く倭漢古今の賢媛を纂錄す。此邦の女誡、其

惕齋奉二性理學一。以二誠敬一爲レ本。深非三時輩渉二異說一。其敎レ人以二小學近思錄一開二發之一。惓惓至レ老不二少怠一。室鳩巢與二和角某一書曰。惕齋一生崇二信程朱一。始終不レ變。可レ謂二近世之醇儒者一。老夫雖レ不三敢自比二先輩一。其崇二信程朱一則不二多讓一焉。

又雨伯陽橘窻茶話曰。余少歲時以二明經一爲レ志。如二中村米川諸儒一。固不レ可下以二博學一名上レ之。然其立レ身卓偉。自修謹嚴。亦可三以爲二篤行鄕先生一。今則無二斯人一矣。

惕齋、性理學(一)を奉じ、誠敬を以て本と爲し、深く時輩(二)の異說に渉るを非とす。其の人を敎ふる、小學近思錄を以て之を開發す、惓惓(三)として老に至るまで少しも怠らず。室鳩巢、和角某に與ふる書に曰く、惕齋、一生程朱を崇信し、始終變ぜず。近世の醇儒者(四)といふべし。老夫敢へて自ら先輩に比するにあらずと雖も、其の程朱を崇信すること則ち多く讓らずと。又雨伯陽(五)の橘窻茶話に曰く、余少歲の時明經(六)を以て志と爲す。中村・米川諸儒(七)の如き、固より博學を以て之に名づく可からず。然れども其の身を立つる卓偉(八)、自ら修むる謹嚴なること、亦以て篤行の鄕先生と爲す可し。今則ち斯の人なしと。

(一)宋儒の性命理氣の學 (二)同時代の人々 (三)倦むことなき貌 (四)純粹の學者 (五)雨森芳洲 (六)經書の理を明かにす (七)中村惕齋・米川操軒 (八)身を持することけだかし

買豎之間。不レ知ニ物價一。其家世素封也。而盈縮無レ所レ問。嘗爲ニ管長一所ニ賊墨一。親串欲ニ以鳴レ官。惕齋不レ可曰。以ニ私財一損ニ人性命一。不慈莫レ大レ焉。從レ是家道日湮。而亦不レ爲レ意。

墨せらる。親串以て官に鳴さんと欲す。惕齋可かずして曰く、私財を以て人の性命を損ず。不慈焉れより大なるはなしと。是れより家道日に湮ふ。而も亦意と爲さず。

(一)名を顯し財を利することには淡泊にて望みなし　(二)商人の中に生長す　(三)富家　(四)財産の殖え減るを氣にかけず　(五)番頭に横領せらる　(六)親戚は官に訴へんとす

惕齋凡所レ學。靡レ不ニ通曉一。天文地理尺度量衡類。皆能究ニ極之一。而尤邃ニ于禮一。其處レ家行レ己。吉凶及日用之間。一軌ニ於古道一。言動不レ苟。踐履足レ則。又審ニ音律一。其所ニ發明一者。雖ニ當世達者一。欽ニ服之一。

惕齋、凡そ學ぶ所通曉せざるなし。天文地理尺度量衡の類、皆能く之を究極す。而して尤も禮に邃し。其家に處りて己を行ふや、吉凶及び日用の間、一に古道に軌ふ。言動苟もせず、踐履則るに足る。又音律を審かにす。其の發明する所は、當世の達者と雖も、之に欽服す。

(一)禮法を深く極む　(二)家に在る時の動作　(三)ふみ行ふ所の動作は手本となる　(四)當時の達人

仲邨之欽。字敬甫。小字仲二郎。號二惕齋一。平安人。惕齋自下爲二童子一時上。厚重不レ好二嬉戲一。七八歳受二句讀于鄕師一。不レ煩二督責一。及レ長惟務二篤實一。不レ喜二浮靡一。先世住二市中一。而惕齋厭二其喧囂一。遷居二幽地一。日杜レ門潛二心大業一。諸論レ學談レ文之外。不三敢爲二泛交一。

仲邨之欽

仲邨之欽、字は敬甫、小字は仲二郎、惕齋と號す。平安の人。

惕齋、童子爲りし時より、厚重(一)にして嬉戲を好まず。七八歳、句讀を鄕師に受け、督責(二)を煩さず。長ずるに及び惟篤實を務め、浮靡(三)を喜ばず。先世(四)市中に住す。而るに惕齋其喧囂を厭ひ、遷つて幽地(五)に居る。日に門を杜ぎて心を大業に潛め、諸〻學を論じ文を談ずるの外、敢へて泛交(六)をなさず。

(一)擧作重々し　(二)教師の戒めすゝめを待たず自ら勉む　(三)輕浮を好まず　(四)先代　(五)靜かなる土地　(六)廣き交際

惕齋於二功名財利一。澹然無レ情。雖三少長二于

惕齋、功名(一)財利に於ては、澹然として情無し。少より賈豎(二)の間に長ずと雖も、物價を知らず。其家世〻素封(三)なり。而して盈縮(四)問ふ所無し。嘗て管長(五)に贓

藤字一省レ艸也。此事不レ類一懶齋爲レ人。可レ怪已。謙靜錄自序署曰。伊薦子滕臧季廉。有レ跋男撰レ之。曰。少男藤井理定。殆如異レ姓者一。

ぶ。曰く、少男藤井理定と。殆ど姓を異にする者の如し。

象水者懶齋長子也。好レ兵。有レ詩云。驥足未レ乘千里風。蝸廬縮レ首艸萊雄。眼前什物雖レ云レ笑。十萬甲兵屯二腹中一。鳩巣和レ之云。洛西高士有二家風一。何事英材慕二七雄一。貔貅百萬無二一事一。休下將二些子一上中胸中上。

象水は、懶齋の長子なり。兵を好む。詩有り云ふ、(一)驥足未だ乘せず千里の風、(二)蝸廬首を縮む(三)艸萊の雄、(四)眼前の什物笑ふと云ふと雖も、十萬の甲兵腹中に屯すと。鳩巣之に和して云ふ、洛西の(五)高士家風有り、(六)何事ぞ英材七雄を慕ふ、(七)貔貅百萬一事無し、(八)些子を將つて胸中に上するを休めよと。

(一)千里馬未だ千里の風に乘らず (二)蝸牛の殼の如き陋室に首をちゞむ (三)荒蕪地、即ち片田舍の英雄 (四)眼前家の中の道具類の貧弱なること笑ふにたへたり (五)象水を斥す (六)英才ありながら儒學を事とせず戰國七雄のしわざを學ぶは何故ぞ (七)勇士猛卒百萬ありとも一事のなすところなし (八)つまらぬ事を胸に思ひ上すなかれ

無二國香一。非二復絶世姿一。苒苒歳將レ晩。孤芳徒自持。高人好二奇服一。佩芳固無レ遺。豈料側陋質。謬辱二君子知一。揄揚言亦至。微生非レ所レ宜。但恨處二僻遠一。不レ植二君園池一。願早充二下陳一。朝夕近二容儀一。

懶齋所レ交。皆以二篤學一稱者也。川井正直。二十七歳長二懶齋一。懶齋爲作二行狀一。米川操軒一歳長。仲邨惕齋一歳少。惕齋序二本朝孝子傳一曰。伊蒿滕丈人。愚受二其知一久。而所二兄事一也。

懶齋の交はる所、皆篤學を以て稱せらるゝ者なり。川井正直は二十七歳懶齋に長ず。懶齋爲に行狀を作る。米川操軒は一歳長じ、仲邨惕齋は一歳少し。惕齋、本朝孝子傳に序して曰く、伊蒿滕丈人、（一）愚、（二）其知を受くること久し。而して兄事する所なりと。

㊀自分　㊁知らるゝこと既に久し

懶齋姓藤井氏。然題署單二用滕字一。此不二啻去一レ井。又於二

懶齋、姓は藤井氏なり。然るに題署、滕の字を單用す。此は啻に井を去るのみにあらで、又藤の字より艸を省けり。此事、懶齋の人と爲りに類せず。怪む可きのみ。諫諍錄自序に署して曰く、伊蒿子滕臧季廉と。跋有り男之を撰

艱險。下視邇古今。唐虞忽已逝。岐山不可尋。文彩須日愛。羽儀世所欽。誰復爲稻粱。低首從羣禽。飢餐綠竹實。寒棲椅桐陰。自甘隱淪久。寧辭霜露深。淸高有如此。虞羅安可侵。其若杜生江渚。旖旎被其涯。長風搖紫莖。洪波浸朱蕤。風波迭驅迫。恐爲衆艸欺。自羞

(二一)苒苒歳將に晩れんとし、(二二)孤芳徒に自ら持す、(二三)高人奇服を好み、(二四)佩芳固より遺る無し、豈に料らんや側陋の質、謬て君子の知を辱うせんとは、(二五)揄揚言亦至る、微生の宜しき所に非ず、但恨む(二六)僻遠に處り、君の園池に植らざるを、願くは早く下陳に充ちて、(二七)朝夕容儀に近かん。

(一)ちよつとも會ひしことなし (二)鳳凰がひろびろとせる空に飛ぶ、懶齋にたとふ (三)崑崙山 (四)希望する所は舜帝の樂 (五)ひらひらと飛びながら韶のめでたき遺音を物に寄せて傳ふ、懶齋が聖賢の遺言を傳ふる事を斥す (六)年月極めて遠し (七)唐堯虞舜 (八)周の祖古公亶父岐山の下に居る (九)鳳のあや、懶齋の文藻にたとふ (一〇)儀表は世の尊む所 (一一)米欲しさのために首を下げて多くの鳥に從はんや。懶齋の淸節仕へざるをいふ (一二)隱淪零落 (一三)淸潔高尚 (一四)虞人の網も潔白なるも鳳を捕へがたし (一五)かきつばた、鳩巣自ら譬ふ (一六)風になびくさま (一七)赤くたれたる花 (一八)風と波と互に杜若を壓迫す (一九)自ら蘭の如き優れたる香氣なきをはづ (二〇)杜若は世にまれなる姿にあらず、鳩巣自ら評す (二一)歳月の經つさま (二二)只一つの花の咲き殘れる如く獨り空しく節を守る (二三)懶齋を斥す (二四)芳香を腰に佩ぶるに遺漏なし。懶齋の交る所君子に乏しからざるに何のあやまりか自分は其の知遇を得たり (二五)懶齋が鳩巣をほむる言過分にて自らの當る所に非ず (二六)遠方に居りて面接するに由なきは殘念 (二七)足下の後列に居りて朝夕お姿に近づきたきもの

子之書一。而不ㇾ會二朱子之學一。此其所三以危二凶也。

鳩巣於二懶齋一。本無二半面之識一。而其推二尊之一。稱二伊蒿先生徵君一。懶齋嘗和二鳩巣之思ㇾ親詩一。鳩巣作二古詩二首一以謝ㇾ之。一則詠二懶齋一。一則自敍。且志ㇾ喜云。曰。鳳凰翔二溟漠一。時鳴崑山岑。鳴聲一何悲。生平多二苦心一。所ㇾ願簫韶奏。蹁躚託二遺音一。世路日

鳩巣の懶齋に於ける、本半面の識無し。(一)而も其の之を推尊する、伊蒿先生徵君と稱す。懶齋嘗て鳩巣の親を思ふの詩に和す。鳩巣、古詩二首を作つて以て之を謝す。一は則ち懶齋を詠み、一は則ち自ら敍し、且つ喜を志すと云ふ。曰く、鳳凰溟漠に翔り、(二)時に鳴く崑山の岑。(三)鳴く聲一に何ぞ悲しき。生平苦心多し。願(四)ふ所簫韶の奏、(五)蹁躚遺音を託す。世路日に艱險。下視すれば古今邈たり。(六)唐(七)虞忽ち已に逝き、岐山尋ぬ可からず。(八)文彩須く日に愛すべし、(九)羽儀世の欽す(一〇)る所。誰か復稻粱の爲に、(一一)首を低れて羣禽に從はんや。飢うれば餐ふ綠竹の實、寒ゆれば棲む椅桐の陰。自ら隱淪に甘ずる久し、寧ろ辭せんや霜露の深き。(一二)淸高此の如き有り。(一三)虞羅安ぞ使すべけんやと。(其二)。杜若江渚に生じ、(一五)旖(一六)旎として其涯に被る。長風紫莖を搖かし、洪波朱蕤を浸す。(一七)風波迭に驅迫す、(一八)恐くは衆艸の爲に欺かれん、(一九)自ら羞づ國香無きを、(二〇)復絕世の姿に非ず、

懶齋嘗居二官舍一。人私告曰。此屋多レ祟。子勿レ居焉。人之住レ此。莫下不レ遭二災厄一者上。予不レ忍三復見二子之他日離一レ患也。懶齋不二以爲一レ意。居レ之二十年終無レ恙。乃曰。白居易有二凶宅詩一云。寄レ語家與レ國。人凶非二宅凶一。信哉。

懶齋嘗て官舍に居る。人私かに告げて曰く、此屋祟多し。子居ること勿かれ。人の此に住する、災危に遭はざる者なし。予復子の他日患に離るを見るに忍びずと。懶齋以て意と爲さず。之に居ること二十年、終に恙無し。乃ち曰く、(一)白居易に凶宅(二)の詩有り、云く、語を寄す家と國と、人凶にして宅凶なるに非ずと。信なるかなと。

(一) 唐の詩人白樂天　(二) 怪しきことある家

人或謂二懶齋一曰。爲二朱學一者多失二急迫一。如二土佐野中氏一是也。懶齋曰。野中氏讀二朱

人或は懶齋に謂つて曰く、朱學を爲むる者多くは急迫(一)に失す。土佐の野中氏(二)の如き是れなりと。懶齋曰く、野中氏は朱子の書を讀んで、朱子の學を會せず。此れ其の國を危くせる所以なりと。

(一) 氣短かの缺點あり　(二) 野中兼山

所レ惡。然圜平不三以爲二意。懶齋亦不レ禁。

懶齋深疾二浮屠一。閑際筆記多罵二詈緇侶一。若二深艸元政一。以レ孝聞者也。然以三其所レ著釋氏二十四孝。取二大安寺榮好一。謂二元政一爲レ不レ知二孝道一。

懶齋深く浮屠(一)を疾み、閑際筆記多く緇侶(二)を罵詈す。深艸の元政の若き、孝を以て聞ゆる者なり。然るに其の著す所の釋氏二十四孝、大安寺榮好を取るを以て、元政を謂つて孝道を知らずと爲す。

(一) 佛　(二) 僧侶

懶齋多レ所レ著。而本朝孝子傳。本朝諫諍錄。志存レ裨二益世教一。孝子傳。合二倭文一有二三版一。可レ謂レ盛矣。如二大和爲善錄。藏笥百首徒然艸摘義一。亦一片婆心。不レ爲レ無レ益二兒女一。

懶齋著す所多し。而して本朝孝子傳本朝諫諍錄は、志、世教(一)を裨益するに存す。孝子傳は、倭文を合して三版有り。盛なりと謂ふ可し。大和爲善錄・藏笥百首徒然艸摘義の如き、亦一片の婆心(二)、兒女に益なしと爲さず。

(一) 世の風敎に補ひあり　(二) 人の爲をおもふ心

巣與二遊佐某一書曰。藤井懶齋直清亦聞二其人一。此地有下自二京師一來仕者上。素識二懶齋一。爲二直清一語二其爲レ人。有レ言有レ德一隱君子也。孟子以レ王說二齊梁之君一。而懶齋心慕レ之。其言有二條理一。今不レ克二具錄一。常居レ家。慨然曰。東都若有レ命召二隱士一。雖レ老二死於行一必往至二東都一。一以二此義一陳。亦足矣。一言之後。使二在京縉紳聞一レ之。雖三爲斷レ舌亦無レ悔焉。足下所レ絕二於言議一。而彼乃平生之志在レ此。想足下聞レ之必大惡レ之。懶齋年八十餘。有レ子名團平。卓犖喜レ兵。好說二天下之形勢一。其父與二操軒惕齋一爲二理學友一。而團平深爲二父執一

心之を慕ふ。(五)其言條理有り。今具錄する克はず。常に家に居て、慨然として曰く、東都若し命有り隱士を召さば、(六)行に老死すと雖も必ず往いて東都に至り、一に此義を以て陳ぜば亦足れり。一言の後、在京の縉紳をして之を聞かしめなば、爲に舌を斷つと雖も亦悔ゆるなしと。足下の(七)言議に絕つ所、而も彼乃ち平生の志此に在り。想ふに足下之を聞かば必ずや大に之を惡まんと。懶齋年八十餘。子あり名は團平。(八)卓犖兵を喜び、好んで天下の形勢を說く。其父操軒・惕齋と理學の友たり。團平深く(九)父執に惡まる。然れども團平以て意と爲さず。懶齋亦禁ぜず。

(一)德川幕府　(二)夜乘行してゆく　(三)鳩巣の名　(四)王道　(五)其の言には條理あれど詳しく抄出する能はず　(六)途中に老死す　(七)口に出さざること　(八)氣象すぐれて大　(九)父の友人

名部忠菴。以二醫術一宦二久留米侯一。嘗療二一病者一。而不レ起。自以爲レ誤レ治所レ致。於レ是慨然投レ匕辭レ事。乃入レ京專修二儒業一。晩以レ近二其先塋所在一。退二居于京西鳴瀧村一。超然絶二世累一。其學宗二紫陽一。高談二性理一。一時褒然有二隱君子聲一。

す。起(一)たず。自ら以爲へらく治を誤つて致す所と。是に於て慨然として匕を投じて事を辭す。乃ち京に入り專ら儒業を修む。晩に其の先塋(二)の所在に近きを以て、京西鳴瀧村に退居し、超(三)然世累を絶つ。其學紫陽(四)を宗とし、高く性理を談じ、一時褒(五)然として隱君子の聲あり。

(一) 死す　(二) 先祖の墓　(三) 世俗に遠ざかり世事のわづらひを無くす　(四) 朱子學　(五) 賞揚して隱君子と評判せり

懶齋本豪氣。及レ老益慷慨。每曰。余有二一策一。關東若召レ吾。則兼レ程而至。即日獻レ之。朝陳夕死無二復憾一矣。室鳩

懶齋本豪氣、老に及び益々慷慨なり。每に曰く、余に一策あり。關(一)東若し吾を召さば、則ち程を兼ねて至り、即日之を獻ぜん。朝に陳べ夕に死すとも復憾なしと。室鳩巣(二)、遊佐某に與ふる書に曰く、藤井懶齋は、直清(三)も亦其の人を聞けり。此地、京師より來仕する者有り。素懶齋を識る。直清が爲に其人と爲りを語る。言有り德有る一隱君子なり。孟子、王(四)を以て齊・梁の君に說く。懶齋

則其取レ友豈得レ不レ端乎。而皆與ニ操軒ー交睦。及レ沒也。各悼惜以紀ニ其學德ー。而益軒所レ錄。最足三以想ニ象其生平ー。曰。先生之爲レ人也。明敏而有ニ志操ー。求レ福不レ回。其接レ人也厳而和。其處レ事也敬畏而不レ苟。其出レ言也辨而有レ序。聞焉者不レ厭。其爲レ學也純正。專好ニ經術ー。平日用ニ心於程朱之書ー。最勤不レ好ニ雜書ー。文中子所謂不ニ雜學ー故明者。其此人之謂乎。(略前後)

て志操有り。福を求めて回ならず。其の人に接するや、厳にして和。其の事に處するや、(三)敬畏して苟もせず。其の言を出すや、(四)辨にして序あり。聞く者厭はず。其の學を爲すや、純正にして、專ら經術を好む。平日心を程朱の書に用ひ、最も勤めて雜書を好まず。文中子の所謂雜學ならざるが故に明かなりとは、其れ此人の謂かと。(前後を略す)。

(一) 惜みいたむ (二) 才さとくして節義あり (三) おそれつゝしみていゝ加減にせず (四) 辯舌巧にして順序あり

藤井臧。字季廉。號ニ懶齋ー。又號ニ伊蒿子ー。筑後人。

懶齋初稱ニ眞

藤井臧

藤井臧、字は季廉、懶齋と號し、又伊蒿子と號す。筑後の人。

懶齋は初め眞名部忠菴と稱す。醫術を以て久留米侯に官す。嘗て一病者を療

外。不レ欲三泛觀二他書一。嘗與二伊藤仁齋一語。及下仁齋唱二古義一以非二斥宋儒上。乃修レ書曰。朱子得二聖人之道一。吾子持二異言一排レ之。語二養德之學一。則爲二薄德一。語二講學之事一。則無レ益二於學一。是謂二之聖教罪人一。速改レ之則止矣。不則雖二契分日久一。不レ得レ不レ絕焉。其言切至。而仁齋不レ聽焉。遂贈二絕交書一。

を修して曰く、朱子は聖人の道を得たり。吾子異言を持して之を排す。(二)養德(三)の學を語れば、則ち薄德たり。講學の事を語れば、則ち學に益無し。是れ之を聖教の罪人といふ。速かに之を改むれば則ち止む、不ずんば則ち契分(四)日久しと雖も、絕たざるを得ずと。其言切至(五)なり。仁齋聽かず。遂に絕交書を贈る。

(一) 大學・中庸・論語・孟子・小學・近思錄・尚書・周易　(二) 足下異見をいだいて朱子を排す　(三) 德性を修養する學　(四) 交際の日久しかれど絕交せざるを得ず　(五) 熱烈深刻

操軒所レ友皆一時知名士也。如二藤井懶齋。仲邨惕齋。貝原益軒一。當世以二君子一稱。

操軒の友とする所皆一時知名の士なり。藤井懶齋・仲邨惕齋・貝原益軒の如き、當世君子を以て稱せらる。則ち其友を取る豈に端しからざるを得んや。而して皆操軒と交睦し、沒するに及ぶや、各ゝ悼惜(一)以て其學德を紀す。而して益軒の錄する所、最も以て其生平を想象するに足る。曰く、先生の人となりや、明敏(二)にし

米川一貞。字幹叔。小字儀兵衞。號ニ操軒一。平安人。操軒父服レ賈。而見ニ操軒自レ幼嗜レ書不レ欲ニ區區逐一レ利。命就ニ三宅寄齋一。學。則寄齋期以ニ遠到一。寄齋沒。乃謁ニ山崎闇齋一請レ益。遂以ニ性行篤學一名ニ于世一。而不レ干ニ祿仕一。嘗公侯徵辟。並不レ就。仲邨惕齋撰ニ實記一詳ニ其行誼一。

米川一貞

米川一貞、字は幹叔、小字は儀兵衞、操軒と號す。平安の人。操軒の父賈に服す(一)。而るに操軒、幼より書を嗜み、區區(二)として利を逐ふを欲せざるを見、命じて三宅寄齋に就いて學ばしむ。則ち寄齋期するに遠到(三)を以てす。寄齋沒す。乃ち山崎闇齋に謁して益を請ふ(四)。遂に性行篤學を以て世に名あり。而も祿仕を干めず。嘗て公侯徵辟す。並(五)に就かず。仲邨惕齋、實記を撰び其行誼を詳かにす。

(一)商賈をなす　(二)こせこせ　(三)學の大成すべきを豫期す　(四)教授を願ふ　(五)何れにも召聘に應ぜず

操軒壹奉ニ程朱之說一。四子小近書易等

操軒壹に程朱の說を奉じ、四子(一)・小・近・書・易等の外、泛く他書を觀ることを欲せず。舊伊藤仁齋と善し。仁齋が古義を唱へ以て宋儒を非斥するに及び、乃ち書

最著稱。謂二之伊藤首尾藏一。奥田三角撰仁齋妻瀨埼氏墓碣曰。東涯先生緒方氏出。而愛護踰二親子一。四子長英仕下于二福山一。長衡于二高槻一。長準于二久留米一。長堅于中紀藩上。皆以レ儒顯。

顯ると。

(一)五人の男の子　(二)名高し

吾祖初年在二京師一時。與二蘭嵎一相友。是以祖之母貞順原氏墓記。及傷寒私斷序。皆屬二蘭嵎一撰レ之。又善レ書。先友不破子讓藏二數張一。以下余之家與二蘭嵎一有レ舊。嘗將二分贈一。未レ果遭二回祿一。又能二繪事一。奥田三角跋二其墨蘭一曰。蘭嵎好作二墨嵎一。近因二道學先生言一斷二此戲一。

吾が祖(一)初年京師に在りし時、蘭嵎と相友たり。是を以て祖の母貞順原氏の墓記、及び傷寒私斷の序、皆蘭嵎に屬して之を撰ばしむ。又書を善くす。先友不破子讓(二)數張を藏す。余が家、蘭嵎と舊あるを以て、嘗て分贈せんとし、未だ果さずして(三)回祿に遭ふ。又繪事を能くす。(四)奥田三角其墨蘭に跋して曰く、蘭嵎好んで墨蘭を作る。近ろ道學先生の言に因つて(五)此戲を斷つと。

(一)著者原善の祖原瑜　(二)五六枚　(三)火事　(四)東涯の門人　(五)此道樂を止む

満坐汗レ掌以
爲。伊人生二長
乎寒素一。未レ慣レ
說二大人一。則視二
其巍巍然一而
然也。中使促
不レ應。侯亦許レ
之。既而蘭嵎
徐曰。公坐レ褥。不レ可レ講二聖人之書一也。侯聞レ之遽去レ褥。於レ是方講說。音吐朗暢。辨論明備。座者
皆歎賞曰。眞儒者也。

せども應ぜず。侯亦之を許る。既にして蘭嵎徐ろに曰く、公、褥に坐す。聖人の書を講ずべからずと。侯之を聞き遽てて褥を去る。是に於て方めて講說す。(五)音吐朗暢、辨論明備、座する者皆歎賞して曰く、眞の儒者なりと。

(一)動作正しくして重々し　(二)一座のもの手に汗を握つて危ぶむ　(三)貧賤の家に生長して貴人の前にて講ずるになれず　(四)威光高きを視て怯れたり　(五)音聲爽かにして議論明白

仁齋有二五丈
夫一。長原藏。次
重藏。次正藏。
次平藏。次才
藏。人呼稱二伊
藤五藏一。皆足三
以世二其家學一。
而原藏才藏

仁齋、(一)五丈夫有り。長は原藏、次は重藏、次は正藏、次は平藏、次は才藏なり。人呼んで伊藤の五藏と稱す。皆以て其家學を世々にするに足る。而して原藏・才藏最も著稱(二)あり。之を伊藤の首尾藏と謂ふ。奥田三角の撰する仁齋の妻瀨埼氏の墓碣に曰く、東涯先生は緒方氏の出にして、愛護親子に踰ゆ。四子、長英は福山に、長衡は高槻に、長準は久留米に、長堅は紀藩に仕ふ。皆儒を以て

之言。曰。集序。亡兄在日既蒙二見允一。言二華山公許一レ之也。純唄然歎曰。昔者水戸義公與二其世子一。共鑄二明人朱舜水遺文一。而自題二其名於卷端一。且冠以二門人二字一。當時以爲二奇事一。今者華山公之於二原藏一也。既許レ序レ集。又作二墓銘一。其人其事皆相類。可レ謂レ奇矣。夫義公者。國家宗室。華山公者。皇朝大臣也。而舜水原藏。皆一匹夫也。匹夫而受二是尊寵一。何其榮也云云。

(一) 墓碑の銘　(二) ゆるさる、此は華山公より序を與ふるを承諾されたるなり　(三) 嘆息する貌　(四) 珍しきこと　(五) 幕府の一家　(六) 無位の平民

伊藤長堅。字才藏。號二蘭嵎一。仁齋第五子。平安人。仕二紀伊侯一。
蘭嵎博學能文類二父兄一。而擧止端重。其始講二君侯之前一。對レ書不レ講。

伊藤長堅

伊藤長堅、字は才藏、蘭嵎と號す。仁齋の第五子。平安の人。紀伊侯に仕ふ。

蘭嵎、博學能文父兄に類す。而して擧止端重なり。其の始めて君侯の前に講ずるや、書に對して講ぜず。(一)満坐(二)掌に汗して以爲へらく、伊の人(三)寒素に生長して、未だ大人に說くに慣れず。則ち其(四)巍巍然たるを視て然るなりと。中使促

東涯墓碣銘。內大臣藤原常雅撰。權中納言藤原俊將篆額。右中將藤原英朝書。世以榮レ之。春臺與二南郭一書曰。去年七月平安伊藤原藏沒。其弟及門生立二碣於其墓一。華山內大臣銘レ之。八條中將書。坊城中納言篆額。間者有二京師客一。持二其文一來示レ純。中述二其弟才藏

東涯の墓碣銘は、內大臣藤原常雅の撰、權中納言藤原俊將の篆額、右中將藤原英朝の書なり。(一)世以て之を榮とす。春臺、南郭に與ふる書に曰く、去年七月平安の伊藤原藏沒す。其弟及び門生碣を其墓に立つ。華山內大臣之に銘し、八條中將の書、坊城中納言の篆額なり。間者京師の客有り。其文を持ち來りて純に示す。中に其弟才藏の言を述ぶ。曰く、集序は、亡兄の在せし日既に見(二)允を蒙むると。華山公之を許すを言へるなり。純、喟然として歎じて曰く、昔者水戶の義公、其世子と、共に明人朱舜水の遺文を輯め、(三)自ら其名を卷端に題し、且つ冠するに門人の二字を以てす。當時以て(四)奇事と爲す。今者華山公の原藏に於けるや、既に集に序するを許す。又、墓銘を作る、其人其事皆相類す。奇と謂ふ可し。夫れ義公は、(五)國家の宗室、華山公は、皇朝の大臣なり。而して舜水・原藏は、皆(六)一匹夫なり。匹夫にして是の尊寵を受く。何ぞ其れ榮なるや云云と。

衆美。而才短二教誨一。是以有レ問則答レ之。答亦不二精詳一。不レ問則不レ示レ之。不レ示亦非レ有レ吝。然其於二父師之説一也。補二其罅漏一。張二皇幽渺一。筆削改竄可レ謂レ有二大勳勞一矣。童子問語孟字義之二書。既已刊行。論孟古義坏樸略具。而成説未レ完。老生與二門人一校讐討論。予亦忝レ在二末席一。以レ今思レ之。論語一書。章章句句。説二修爲一者多。故仁齋之旨符合矣。抑至三孟子論二心性一。則窒礙不レ通者過半矣。故今所二刊行一孟子古義。其實成二于東涯削鐻之手一者也。由レ此言レ之。則東涯之學識。未三必無レ異二議於其家説一。而孝子仁人。豈忍二夢寐之發一哉。是以當レ知先生之篤志賢慮。非三他人之所二敢及一也。

を以て之を思ふに、論語の一書、章章句句、修爲(七)を説く者多し。故に仁齋の旨符合せり。抑々孟子心性(八)を論ずるに至れば、則ち窒礙(九)通ぜざる者過半なり。故に今刊行する所の孟子古義は、其實東涯削鐻の手に成れる者なりと。此に由つて之を言はば、則ち東涯の學識、未だ必ずしも其家説(一〇)に異議無きにあらず。而も孝子仁人、豈に夢寐にも之れ發はすに忍びんや。是を以て當に知るべし先生の篤志賢慮は、他人の敢へて及ぶ所に非ざるを。

(一) とりつまんて録する　(二) 學識博く見聞あまねし　(三) 實際の應用　(四) すきある部分、もれたる部分を補ふ　(五) 幽妙にして解し難き分部を明瞭にす　(六) 大略成り上れども説完全ならず　(七) 修養　(八) 孟子の心性の論に至りては　(九) とゞこほる所ありて意義通ぜず　(一〇) 仁齋の説に對して異議無きにあらず

家眞本一校ニ刻之一也。二帖東涯沒後。三角以下其草寫藏ニ於己家一者上刻レ之。故舛誤甚多。東涯男東所。嘗更校ニ正二帖一云。然其本未レ印。則無ニ人知レ之者一。

(一)文字のうつしあやまり、魯と魚との字形類するよりいふ　(二)引用書　(三)草字にて寫す　(四)あやまり

東涯門人高養浩者。叛レ師奉ニ宋儒一著ニ時學鍼焫一。中紀ニ東涯之學行一。頗爲ニ詳悉一。乃撮ニ錄于左一。客曰。敢問東涯先生之爲レ人如何。曰。溫厚之長者也。博識治聞不レ減ニ徂徠一。惜哉性過ニ謙讓一。而智乏ニ施設一。學包ニ

東涯の門人高養浩といふ者、師に叛いて宋儒を奉じ、時學鍼焫を著す。中に東涯の學行を紀し、頗る詳悉を爲す。乃ち左に(一)撮錄す。客曰く、敢へて問ふ東涯先生の人と爲り如何と。曰く、溫厚の長者なり。(二)博識治聞徂徠に減らず。惜い哉性謙讓に過ぎて、(三)智施設に乏し。學衆美を包ねて、才敎誨に短し。是を以て問ふこと有れば則ち之に答ふ。答亦精詳ならず。問はざれば則ち之に示さず。示さざるも亦吝むこと有るにあらず。然れども其父師の說に於けるや、(四)罅漏を補苴し、(五)幽渺を張皇し、筆削改竄、大勳勞有りと謂ふ可し。童子問・語孟字義の二書、既に已に刊行す。論孟古義(六)坏樸は略具つて、成說未た完からず。先生、門人と校讐討論す。予も亦末席に在るを忝うす。今

長次先夭。臨レ送レ喪弟子數人哭二于柩前一。時一僧來弔謂曰。當二悲哀如レ是時一。諸君豈得レ不レ信二吾無常輪迴說一乎。木村源進毅然曰。吾黨若信レ道不レ篤。至レ如二今日一。或殆爲二左道一所レ惑。僧默然。

に一僧來弔し謂つて曰く、悲哀是の如き時に當らば、諸君豈に吾が無常輪迴の(二)說を信ぜざるを得んやと。木村源進毅然として曰く、吾黨若し道を信じて篤からずんば、今日の如きに至つて、或は殆ど左道(三)の爲に惑されんと。僧默然たり。

(一) 長男次男は早死す　(二) 萬物には常相なく、世をかへ生をかへて轉々すと說く佛教の說　(三) 邪道

名物六帖。人品人事器財三帖。皆奧田三角所レ校也。而器財校正。人品人事誤二魯魚一謬二引書一。此器財東涯在日。即就二其

名物六帖の、人品・人事・器財三帖は、皆奧田三角の校する所なり。器財は校正しく、人品・人事は魯魚(一)を誤り引書(二)を謬る。此れ器財は東涯の在りし日、即ち其家の眞本に就いて之を校刻す。二帖は東涯の沒後、三角、其の草寫(三)して己が家に藏むる者を以て之を刻すればなり。故に舛誤(四)甚だ多し。東涯の男東所、嘗て更に二帖を校正すと云ふ。然れども其本未だ印せざれば、則ち人の之を知る者無し。

不レ然。辨疑錄一拾二仁齋遺漏一。以主二張家說一耳。其題辭曰。先君子體二沈潛之識一。奮二獨得之見一。一片婆心和盤托出。雖二微言精義剖析無一レ餘。而初學晩進尙煩レ問。因叙二舊聞一。參以二新得一。筆爲二辨疑錄四卷一。以爲二答問之資一。

精義剖析餘すなしと雖も、(五)初學晩進尙ほ問を煩はす。因つて舊聞を叙し、參ふるに(六)新得を以てし、筆して辨疑錄四卷と爲し、以て答問の資と爲す。

(一)亡父仁齋　(二)深遠の學識　(三)一片の老婆心を以てねんごろに說明す　(四)微細精密の言義、解きわけて餘すところなし　(五)初學者後進者煩はしく問ふ　(六)新しき發見

東涯餘力工二臨池一。片紙隻字人爭求レ之。而其錄經語必以二楷字一。是以間有二詩賦諸語作以二行草一。人疑爲レ非二親筆一。

東涯、餘力(一)臨地に工なり。片紙隻字人爭つて之を求む。其錄經(二)の語は必ず楷字を以てす。是を以て間〻詩賦諸語の作るに行草を以てする有れば、人疑つて親筆に非ずと爲す。

(一)後漢の張芝が池に臨みて書を習ひ、池水爲に黑水と變ぜりといふ故事より、習字をいふ　(二)經書の語を抄錄せしは皆楷書なり

東涯生二三男一。

東涯三男を生む。(一)長次先つて夭す。喪を送るに臨み、弟子數人柩前に哭す。時

相映早歸ㇾ鄉。自書二扇頭一以贈ㇾ之。春臺云。田郎妙齡好二遠遊一。一旦尋ㇾ師西入ㇾ周。天邊月落函關曉。雲際星流渤海秋。周道如ㇾ砥任二奔走一。那識古人骨已朽。到日試問柱下官。往時老聃今在否。麟嶼造二東涯一出眎ㇾ之。東涯一見且笑曰。物先生襟度郭如可二想見一。太宰子亦慷慨有二氣節一。

（一〇）走自在なり　（一一）守藏室の史、即ち藏書室の史、老子周に仕へて此官に在り　（一二）仁齋死して東涯其の聲名劣れるを賦す　（一三）賤きことと想ひやらる　（一四）氣概に富む

東涯音吐甚低。且訥訥如ㇾ不ㇾ能ㇾ言。對門有二箍桶匠一。其篾東聲亂二東涯講書一。聽者每苦二其難ㇾ分。

東涯、音吐甚だ低し。且つ訥訥(一)として言ふこと能はざるが如し。對門に箍桶匠(二)有り。其篾束(三)の聲東涯の講書を亂し、聽者每に其の分ち難きに苦む。

（一）口どもる　（二）桶屋　（三）桶のたがを入れる者

或曰。東涯辨疑錄。答二貝原益軒大疑錄一而作ㇾ之。此言

或ひと曰く、東涯の辨疑錄は、貝原益軒の大疑錄に答へて之を作ると。此言然らず。辨疑錄は一に仁齋の遺漏を拾ひ、以て家說を主張するのみ。其題辭に曰く、（一）先君子、（二）沈潛の識を體し、獨得の見を奮ふ。（三）一片の婆心和盤托出、（四）微言

内一。四方後學多輻湊。菅麟嶼既入二徂徠門一。又心郷二注東涯一。遂負レ笈赴レ之。徂徠固不レ爲レ意。春臺内甚不平。各有二送別詩一。徂徠云。五十三驛莫レ言レ難。處處山川秋好レ看。明日先從二函嶺一望。如レ絲大道達二長安一。其二。揮レ鞭意氣愜二秋涼一。才子奉レ恩遊二洛陽一。但到西山紅葉好。錦衣

心東涯に郷注し、(一)遂に笈を負うて之に赴く。徂徠固より意と爲さず。春臺内甚だ不平なり。各〻送別の詩有り。徂徠云ふ、五十三驛難しと言ふこと莫れ、處處山川秋看るに好し。明日先づ(二)函嶺より望まば、絲の如き大道長(三)長に達せんと。其二、鞭を揮つて意氣(四)秋涼に愜ふ、(五)才子恩を奉じて洛陽に遊ぶ、但到れ西山紅葉好し、(六)錦衣相映じて早く郷に歸れと。自ら扇頭に書して以て之を贈る。春臺云ふ、(七)田郎妙齡遠遊を好み、一旦師を尋ねて西周に入る、(八)天邊月落つ函關の曉、雲際星は流る渤海の秋、(九)周道砥の如く奔走に任す、那ぞ識らん古人骨已に朽つるを。到るの日試に(一〇)柱下の宮に問へ、(一一)往時の老聃今在りや否やと。麟嶼、東涯に造り、出して之を眎す。東涯一見し且つ笑つて曰く、物先生の(一二)襟度郭如たること想見す可し。太宰子亦(一三)慷慨氣節有り。

(一) 心を傾く (二) 箱根山 (三) 支那の舊都の名、轉じてわが京都を指す (四) 軒昻の意氣秋氣の爽快なるに調和す (五) 麟嶼をさす (六) 名を成して早く郷に歸れ (七) 麟嶼は山田氏、故にいふ (八) 麟嶼が京都に往くを孔子周に往きて道を老子に問へる故事に托していふ (九) 周に入るの道、卽ち京都に行くの道は平坦にて砥面の如く奔

玄達在ㇾ坐。同觀極ㇾ口刺二譏之。而東涯暗不ㇾ容二一言。二生曰。此文非二啻聱牙不ㇾ成ㇾ語。而說亦可ㇾ謂ㇾ不ㇾ通矣。先生以爲二何如。東涯曰。不人各有ㇾ見。何必輕駁ㇾ之。況其形二容天狗之狀一者盡矣。今之秉ㇾ筆者。恐不ㇾ及。二生大愧。

以て何如と爲すと。東涯曰く、不、人各〻見るところ有り。何ぞ必ずしも輕く之を駁せん。況や其の天狗の狀を形容することを盡せるをや。今の筆を秉る者、恐くは及ばじと。二生大に愧づ。

（一）二人與に仁齋の門人　（二）そしる　（三）だまつて一口も言はず　（四）文章ごつ〳〵して平易流暢ならず

東涯時俊傑輩出。各豎二旗幟一以自振二一方。而紹述文集二十卷。不ㇾ有二一言及ㇾ之者。識者以爲ㇾ難。

東涯の時俊傑輩出し、各〻（一）旗幟を豎て以て自ら一方に振ふ。而も紹述文集二十卷、（二）一言之に及ぶ者有らず。識者以て難しと爲す。

（一）一派の說を立てて相下らず　（二）東涯の紹述文集には一言諸俊傑を批評せしものなし

東涯聲動二海

東涯、聲海内を動かす。四方の後學多く輻湊す。菅麟嶼既に徂徠の門に入り、又

東涯與二徂徠一同レ時。各鳴二東西一。而徂徠每臧二否東涯一不レ置。或遇二自レ西至者一。即首叩以二東涯所業一。東涯異二於此一。嘗麟嶼至日。出二徂徠贈レ己序一以見レ之。麟嶼出。東涯曰。物氏文。譬猶下蒙二鬼臉一恐二喝孩兒一者上。奥田三角多年親二炙東涯一。聞二其評二騭徂徠一。唯此一言耳。

東涯、徂徠と時を同じうし、各〻東西に鳴る。徂徠毎に東涯を臧否(一)して置かず。或は西より至る者に遇へば、即ち首に叩くに東涯の所業を以てす。東涯は此に異なり。嘗(二)麟嶼の至りし日、徂徠が己に贈るの序を出だし以て之を見す。麟嶼出づ。東涯曰く、物氏の文は、譬へば猶ほ鬼臉(三)を蒙つて孩兒を恐喝する者のごとしと。奥田三角多年東涯に親炙(四)す。其の徂徠を評騭するを聞くこと、唯此一言のみ。

(一) よしあしを批評す　(二) 山田氏、菅原氏なるを以て自ら菅とす。名は正朔、始め徂徠に學び後東涯に從ふ　(三) 鬼の面を被つて子供をおどす　(四) 親しく教を受く

弟子嘗持二徂徠天狗說一來眎二東涯一。時北村可昌。松岡

弟子嘗て徂徠の天狗說を持ち來りて東涯に眎す。時に(一)北村可昌、松岡玄達坐に在り。同じく觀て口を極めて之を刺譏(二)す。東涯唫(三)として一言を容れず。二生曰く、此文は啻(四)に聱牙にして語を成さざるのみに非ず、說も亦通ぜずと謂ふ可し。先生

遺二於路一。見以爲二藥物一。使二從者擧一レ之。解レ囊而視。則內有二十餘金一。東涯忽顰蹙曰。此當下候二遺者一而還上レ之。卽立二其地一以待者良久。日將二昏黑一。遲遲而去。歸置二之閣上一。及二伊勢巫祝至一。付以納二大神宮一。

む。囊を解いて視れば、則ち內に十餘金有り。東涯忽ち顰蹙（一）して曰く、此れ當に遺者を候ちて之を還すべしと。（二）卽ち其地に立ち以て待つこと良〻久し。日將に昏黑ならんとし、遲遲として去り。歸て之を閣上に置き、伊勢の巫祝（三）の至るに及び、付して以て大神宮に納む。

（一）顔をしかむ　（二）遺失者の來るを待ちてかへす　（三）はふり。此處は大神宮の御師をいふ

又嘗夜更歸。途中誤溲二防火水桶一。去者里餘。始覺三其爲二貯水一。則還而扣レ戶謝者再三。明旦又遣三人洗二滌之一。

又嘗て夜更けて歸る。途中誤つて防火水桶に溲す。（一）去ること里餘、始めて其の貯水たるを覺る。則ち還つて戶を扣き謝すること再三、明旦又人をして之を洗滌せしむ。

（一）天水桶に小便す

也。嘗謂二集會弟子一曰。昨買二一匣于骨董肆一。置二之几側一。以藏二抄册一。甚爲レ便。乃使二童子取一レ之。陳二於前一曰。余欲レ令三工新製二如レ是器一者有レ年。不レ意既有二鬻者一也。弟子視レ之。則藏二接柄三絃一之匣也。（接柄三絃。隨二其用一捨而折二接之一）於レ是互相目而不レ答。奧田三角進曰。先生未レ知邪。此物娼妓藏二三絃一之匣。請卻。東涯正レ色曰。小子勿二妄語一。三絃柄長。奈何藏二此短匣一。

となすと。乃ち童子をして之を取らしめ、前に陳して曰く、余、工をして新に是の如き器を製せしめんと欲すること年有り。意はざりき既に鬻ぐ者あらんとはと。弟子之を視れば、則ち接柄の三絃を藏むるの匣なり。（接柄の三絃は、其用捨に隨つて之を折り接ぐ）是に於て互に相目して答へず。奧田三角進んで曰く、先生未だ知らざるか。此物は娼妓が三絃を藏むるの匣なり。請ふ卻けよと。東涯色を正して曰く、（五）小子妄語することなかれ。三絃は柄長し。奈何ぞ此短匣に藏めんと。

（一）儒學の知識ひろく深し　（二）行爲正し　（三）まじりけ無し　（四）一つの函を古道具屋にて買ふ　（五）門弟子、三角を指していふ。妄りなる言を吐くなかれと也

嘗値二一小嚢

嘗て一小嚢の路に遺ちたるに値ふ。見て以て藥物と爲し、從者をして之を擧げし

三一焉。學不レ由二師傳一。一也。不レ仕。二也。有二子東匡一。三也。物先生不レ有レ一二於此一。又祇南海木門高足。固與二仁齋一異レ趣。而其送二高生一序曰。聞三世有二語孟字義之書一。索而讀レ之。於レ是始知三京師有二伊藤君者一。予雖下固拘二于兹一不上レ能二一接見一。苟觀二其書一也。則可レ知二其爲一レ人也。觀二夫至言要言一。左二右聖賢一以鞭二笞邪説一。奮然把レ麾爲レ世先登者。昭昭乎見二于筆端一。使二人驚見一。猶二景星卿雲可レ仰而不上レ可レ企也。嗚呼是豈今之人也哉。抑古之所レ謂超然獨立者歟。

に取る所あり　(四)孟子の言、何人にも依頼する所なくして獨立興起する意　(五)嗚鏑、戰の初め先づカブラヤを放つにより凡て物の初めをいふ　(六)物徂徠は三者の中一をも有せず　(七)祇園南海は木下順庵門下の高弟　(八)孔孟の聖賢の言を引きて邪説をむちうち攻撃す　(九)勇を奮つて采配を握り世人を導く、儒道のためにつくすをいふ　(一〇)はつきりと文字に現る　(一一)景星は德星、卿雲は景雲、共にめでたきしるしとして現る

伊藤長胤。字原藏。號二東涯一。又號二慥慥齋一。私諡紹述。仁齋長子。平安人。

東涯經術湛深。行誼方正。粹然古君子。

伊藤長胤

伊藤長胤、字は原藏、東涯と號す。又慥慥齋と號し、紹述と私諡す。仁齋の長子。平安の人。

東涯は(一)經術湛深、(二)行誼方正、(三)粹然たる古君子なり。嘗て集會の弟子に謂つて曰はく、昨、(四)一匣を骨董肆に買ふ。之を几側に置き、以て抄册を藏むるに、甚だ便

師徂徠。猶有レ所レ擇。然其漫筆云。伊仁齋豪傑之士也。所謂不レ待二文王一而作者也。物先生亦豪傑之士也。然後二伊氏一而出。故其學雖レ不レ本二伊氏一。而不レ能レ不下以二伊氏一爲中嚆矢上也。又曰。余嘗見二伊氏一而與レ之言。觀二其貌一也恭。聽二其言一也從。余故以爲二君子一。又曰。仁齋有二不レ可レ及者

はずと。又曰く、余嘗て伊氏を見て之と言ふ。其貌を觀るに恭、其言を聽くに從。余故に以て君子と爲すと。又曰く、仁齋に及ぶ可からざる者三あり。學、師傳に由らざること、一なり。仕へざること、二なり。子、東厓あること、三なり。(六)物先生此に一を有せずと。又(七)祇南海は木門の高足、固より仁齋と趣を異にす。而も其の高生を送る序に曰く、世語孟字義の書あるを聞き、索めて之を讀む。是に於て始めて京師に伊藤君といふ者あるを知る。予固より茲に拘つて一たびも接見する能はずと雖も、苟も其書を觀るや、則ち其の人と爲りを知るべきなり。夫の至言要言を觀るに、(八)聖賢を左右にして以て邪説を鞭箠し、(九)奮然麾を把つて世の爲に先登すること、昭昭乎として筆端に見はれ、人をして驚見せしむること、猶ほ(一〇)景星卿雲の仰ぐ可くして企つ可からざるがごとし。嗚呼是れ豈に今の人ならんや。抑ゝ古の所謂超然獨立する者かと。

(一) 仁齋の說を信ぜざるものと雖も推服せざること能はず (二) 然はさだむること、卽ちしなさだめ (三) その說

輩一徇二徉梵刹一。見レ佛即拜。門人不レ悅曰。先生恆力辨二釋氏之非一。而今拜二其像一者何也。仁齋曰。釋誠與レ儒異。然而過二其地一。不レ禮二其主一可乎。

先生恆に力めて釋氏の非を辨ず。而も今其像を拜するは何ぞやと。仁齋曰く、釋誠に儒と異なり。然れども其地を過り、其主に禮せずして可ならんやと。

(一) 佛寺

凡唱二一家說一以爲己始得レ道者。自レ非二其黨一外視如二寇讎一。至レ如二仁齋一。於二其不レ信レ之者一。亦不レ能レ不レ推。太宰春臺自視甚高。常所二評騭一雖二其

凡そ一家の說を唱へて以て己始めて道を得たりと爲す者は、其黨に非ざるより外は視ること寇讎の如し。仁齋の如きに至つては、(一)其の之を信ぜざる者に於ても、亦推さざること能はず。太宰春臺自ら視る甚だ高く、常に(二)評騭する所、其師徂徠と雖も、猶ほ(三)擇ぶ所有り。然るに其漫筆に云ふ、伊仁齋は豪傑の士なり。所謂(四)文王を待たずして作る者なり。物先生も亦豪傑の士なり。然れども伊氏に後れて出づ。故に其學伊氏に本かずと雖も、而も伊氏を以て(五)嚆矢と爲さざる能

仁齋實爲二一代儒宗一。天下學者四面來歸レ之。東涯盍簪錄曰。先人敎二授生徒一四十餘年。諸州之人無三國不二至。唯飛彈佐渡壹岐三州人不レ及レ門。執レ謁之士以レ千數。

仁齋實に一代の儒宗たり。天下の學者四面より來つて之に歸す。東涯の盍簪錄に曰く、先人、生徒を敎授する四十餘年。諸州の人、國として至らざる無し。唯飛彈・佐渡・壹岐三州の人のみ門に及ばず。(二)謁を執るの士千を以て數ふと。

(一)第一流の學者 (二)名刺を通じて謁をきく士

邦俗立春前一夕。撒二炒豆一。高聲叫曰。福内鬼外。殆不レ類二於兒戲一乎。而仁齋必著二禮服一行二之家一。其不三好爲二崖異一者如レ此。

(一)邦俗、立春の前一夕、炒豆を撒き、高聲叫んで曰く、福は内鬼は外と。殆ど兒戲に類せざらんや。而るに仁齋は必ず禮服を著て之を家に行ふ。其の好んで(二)崖異を爲さざること此の如し。

(一)我國の風俗 (二)强ひて他と異なることを行はざること此の如し

嘗率二門人數

嘗て門人數輩を率ゐて(一)梵刹に徜徉し、佛を見て卽ち拜す。門人悅ばずして曰く、

情厚且眞。東涯題後曰。先人作此詩時。予未冠。尚記其事云云。由此觀之。仁齋年五十七八家猶寒。然先是肥後侯祿千石招之。辭以母老侍養無人。世復安得其心不爲利祿動如斯人者乎。

り。然るに是より先肥後侯祿千石にて之を招く。辭するに母老い侍養人無きを以てす。世復安ぞ其心の利祿の爲に動かざる斯の如き人者を得んや。

(一) 學問の研究二十年　(二) 金を貰へど感謝の意を表せざるは傲るに非ず、足下の清深厚にして言語の盡す所に非ればなり　(三) 元服せず、幼少なり　(四) 貧し

左右比屋戮力濬義井。仁齋聞之。出欲共焉。衆皆曰。吾曹成之足矣。何役先生爲。仁齋曰。敢不謝義之辱乎。雖然余汲此井。既與衆不異。今豈有獨不與之理乎。遂執綆分其勞。

(一)左右比屋力を戮せて義井(二)を濬ふ。仁齋之を聞き、出でて共にせんと欲す。衆皆曰く、吾曹之を成さば足れり。何ぞ先生を役することを爲んと。仁齋曰く、敢へて義の(三)辱きを謝せざらんや。然りと雖も余此井を汲む、既に衆と異ならず。今豈に獨り與らざるの理あらんやと。遂に綆(四)を執つて其勞を分つ。

(一) 左右の近隣　(二) 共井戸　(三) 志の辱きを感謝す　(四) つるべつな

然不二以爲一意。妻跽進曰。家道育鞠。妾未二嘗爲一レ不レ堪。而獨其不レ可レ忍者。孺子原藏。未レ解三貧爲二何物一。羨二人家有一レ瓷。連求不レ已。妾雖三口能譙二呵之一。腸爲斷絕。言訖泣下。仁齋隱レ几閱レ書。一言不レ爲二之答一。直卸二其所レ著外套一以授レ妻。

に獨り其の忍ぶ可からざるは、(四)孺子原藏、未だ貧の何物たるかを解せず、人の家の瓷あるを羨み、連に求めて已まざることなり。妾、口能く之を(五)譙呵すと雖も、腸爲に斷絕すと。言訖つて泣下る。仁齋几に隱り書を閱し、一言も之が答を爲さず。直に其の著る所の外套を卸ぎ、以て妻に授く。

(一) 糯はもち米、瓷は餅　(二) 平然として氣にかけず　(三) 家事と子供の教育　(四) 小供　(五) 叱る

仁齋謝二荒川景元惠一レ金詩云。討習研磨二十春。恩如二父子一最相親。受レ金不レ謝元非レ傲。適爲二君

仁齋、荒川景元が金を惠むを謝する詩に云ふ、(一)討習研磨二十春、恩父子の如く最も相親し。(二)金を受けて謝せず元傲るに非ず、適に君の情厚く且つ眞なるが爲なりと。東涯後に題して曰く、先人此詩を作る時、予未だ(三)冠せざるも、尙ほ其事を記す云々と。此に由つて之を觀れば、仁齋年五十七八にして家猶ほ(四)寒な

仁齋視者久之曰。此石生龍。非下人之可二愛重一者上也。請遠棄二之郊外一。貴紳不レ悅。然其不レ安也。遂結二茅茨于原野一置レ之。居十餘年。果雷雨驟至。霹靂一聲。茅茨破壞。有レ龍從二石中一出。騰レ空而去。

遂に(三)茅茨を原野に結んで之を置く。居ること十餘年、果して雷雨驟かに至り、霹靂一聲、茅茨破壞し、龍あり石中より出で、空に騰つて去る。

(一)大切に所藏す　(二)心中不安なるにより　(三)小屋を野原に立てて置く

有レ人爲レ狐所レ魅。諸術不レ能レ辟。適聞二仁齋之德能服一レ妖。招二請之一。仁齋至。口未レ吐二一言一。狐慴服謝レ罪去。

人あり狐に魅せられ、諸術(一)辟くること能はず。適〻仁齋の德能く妖を服すと聞き、之を招請す。仁齋至る。口未だ一言を吐かざるに、狐(二)慴服罪を謝して去る。

(一)色々の法術も狐氣を去りがたし　(二)おそれ服す

仁齋家故赤貧。歳暮不レ能レ買二糯瓷一。亦曠

仁齋、家故赤貧にして、歳暮(一)糯瓷を買ふこと能はざるも、亦(二)曠然として以て意と爲さず。妻跽き進んで曰く、(三)家道育鞠、妾未だ嘗て堪へずと爲さず。而る

盬服。不レ知其内人邪。將其閨愛邪。出接レ余頗款洽。臨レ去瞯二其庖中一。亦美酒嘉肴備二辨宴席一。不レ意今之世有二樂レ善好レ施如レ此者一。

大石良雄取二贄仁齋一。一日來侍二其講一レ書。而時時睡弗レ聽。衆皆匿レ笑。退後垢罵曰。惰懶如レ彼不レ如レ不レ學。仁齋曰。小子勿二妄謗一。以レ子觀レ彼非二庸器一。必能堪二大事一。

大石良雄贄を仁齋に取り、(一)一日來つて其書を講ずるに侍す。而して時時睡りて聽かず。衆皆笑を匿す。退いて後垢罵(二)して曰く、惰懶彼の如くんば學ばざるに如かずと。仁齋曰く、小子妄りに謗ること勿かれ。予を以て彼を觀るに庸器(三)に非ず。必ず能く大事に堪へんと。

(一) 束脩をおさめて入門す　(二) のゝしる　(三) 凡庸の器量

某貴紳珍二襲一石一。大如レ量。備二五色一。一日召二仁齋一眎レ之。

某貴紳一石を珍襲(一)す。大さ量の如く、五色を備ふ。一日仁齋を召して之を眎す。仁齋、視ること久しうして曰く、此石龍を生ず。人の愛重す可きものに非ず。請ふ遠く之を郊外に棄てよと。貴紳悦ばず。然れども其の(二)安からざるより、

曰。小憩而去於ㇾ事無ㇾ害。郎君其勿ㇾ辭。直牽ㇾ袂上ㇾ樓。仁齋固不ㇾ知ㇾ爲二倡家一。中心私揣。是非ㇾ內二交於吾一。又非ㇾ要二譽於鄕黨朋友一。蓋輕ㇾ財敷ㇾ德施及二路人一也。啜ㇾ茶喫ㇾ煙厚致ㇾ謝而去。渠亦見二其狀貌殊不ㇾ類二治郎一。不二强留一也。仁齋歸謂二弟子一曰。今日偶過ㇾ市。一家使下小女迎二余途一延上中其樓上。則綺窗繡簾殆爲二異觀一。畫幅琴箏陳設具ㇾ趣。而婦女六七人。盛粧

上る。仁齋固より倡家たるを知らず。中心私かに揣る、是れ交(二)を吾に內るゝに非ず。又譽を鄕黨朋友に要むるに非ず。蓋し財を輕じ德を敷き、施して路人に及ぶなりと。茶を啜り煙(三)を喫し、厚く謝を致して去る。渠も亦其狀貌の殊に治郎(四)に類せざるを見、强ひて留めず。仁齋歸つて弟子に謂つて曰く、今日偶〻市を過る。一家小女をして余を途に迎へ、延いて其樓に上らしむ。則ち綺窗繡簾(五)殆ど異觀を爲し、畫幅琴箏陳設(六)趣を具す。而して婦女六七人、盛粧(七)豔服す。知らず其內人(八)か、將た其閨愛(九)か。出でて余に接する頗る款洽(一〇)なり。去るに臨み其庵中を瞯へば、亦美酒嘉肴宴席(一一)に備辨す。意はざりき、今の世善を樂み施を好む、此の如き者有らんとはと。

(一) 遊郎 (二) 交際を吾に求むるに非ず (三) 煙草を吸ふ (四) 遊冶郎 (五) あやの帷を垂れし窓、刺繡せるすだれ幕 (六) 畫の掛物、琴などの裝飾趣あり (七) 美しくけはひし者飾る (八) 妻 (九) 妾 (一〇) てあつし (一一) 酒宴の準備す

行。掠奪以自給。是其業也。仁齋曰。以若所爲爲業。吾何拒焉。輒脫服以授之將去。於是賊止仁齋曰。吾儕草竊爲衣食數年。未嘗見擧止如客者。抑客何爲者。曰儒者也。曰儒者爲何事。曰以人道教人者也。所謂人道者。孝於親弟於弟。不可一日無者是也。人而無道禽獸焉耳。言未畢。賊皆頓首涕泣曰。噫君與吾鈞是人也。而事業之迥異如是。吾甚恥。願君宥吾儕罪。今而後飮灰洗胃。謹奉教于門下。遂皆改心自勵云。

弟に弟に、一日も無かる可からざる者是れなり。人にして道無ければ禽獸のみと。言未だ畢らざるに、賊皆頓首涕泣して曰く、噫君と吾と鈞しく是れ人なり。而も事業の迥かに異なること是の如し。吾れ甚だ恥づ。願はくは君吾儕の罪を宥せ。今より後灰(九)を飮んで胃を洗ひ、謹んで教を門下に奉ぜんと。遂に皆改心し自ら勵むと云ふ。

(一)おひはぎ　(二)酒代　(三)胴巻の金　(四)ふくろに入れたる錢　(五)破れどてら　(六)夜中おしあるき人の物を奪ひ取つて生活す　(七)おひはぎ　(八)擧動　(九)すつかり心を入れかへて教を受けたし

嘗過花街。娼家使婢邀入。仁齋不肯。婢

嘗て花街(一)を過る。娼家、婢をして邀へ入れしむ。仁齋肯ぜず。婢曰く、少しく憩うて去る、事に於て害無けん。郎君其れ辭する勿かれと。直に袂を牽いて樓に

壯。亦被レ召在レ列。諸儒皆初怡聲下レ氣以辨說。而及三各不二相容一也。努喙立レ說諠譁不レ已。仁齋獨坦夷溫厚終始如レ一。竟擧坐皆歸レ之。

(一)聲をやはらかにす　(二)口を尖らせて自說を立て騒ぎてやまず　(三)氣平かにおだやか

嘗夜二行郊外一。劫賊四五人當レ路立。各按レ劍曰。吾徒不レ醉不レ樂。今無二酒資一。客若缺二腰纏一。則自脫二衣裳一供レ之。仁齋神色不二少動一曰。今日適無二槖錢一。敝縕袍脫以遺レ之耳。且問汝輩常以レ何爲レ業邪。曰。昏夜橫

嘗て郊外を夜行す。劫賊(一)四五人路に當つて立ち、各〻劍を按じて曰く、吾徒醉はざれば樂まず。今酒資(二)無し。客若し腰纏(三)を缺かば、則ち自ら衣裳を脫して之を供せよと。仁齋、神色少しも動かず、曰く、今日適〻槖錢(四)無し。敝縕袍(五)、脫して以て之を遺らんのみと。且つ問ふ汝輩常に何を以て業と爲すかと。曰く、昏夜橫行(六)し、掠奪以て自ら給す。是れ其業なりと。仁齋曰く、若る所爲を以て業と爲す。吾れ何ぞ拒まんと。輒ち服を脫ぎ以て之に授け將に去らんとす。是に於て賊仁齋を止めて曰く、吾儕草竊(七)衣食を爲すこと數年。未だ嘗て擧止(八)客の如き者を見ず。抑〻客は何爲なる者ぞと。曰く儒者なりと。曰く儒者何事をか爲すと。曰く人道を以て人に敎ふる者なり。所謂人道とは、親に孝に

言。弟子曰。人著レ書以恣議レ己。苟辭不レ塞。豈可二默而止一乎。先生而不レ答。則請余代折レ之。仁齋曰。君子無レ所レ爭。如彼果是我果非。彼於レ我爲二益友一。如我果是彼果非。他日彼其學長進。則當二自知一レ之。小子宜二深戒一。爲レ學之要。惟虛心平氣。以レ爲レ己爲レ先。何毀レ彼立レ我。徒憎二玆多口一。

彼果して是に我果して非ならば、彼は我に於て益友たらん。如し我果して是に彼果して非ならば、他日彼其學長進せば、則ち當に自ら之を知るべし。(三)小子宜しく深く戒むべし。學を爲すの要は、唯だ虛心平氣にして、(四)己を爲むるを以て先と爲す。何ぞ彼を毀り我を立て、徒に玆の(五)多口を憎まんと。

(一)辨解の辭無きに非ればだまつて居るわけ無し (二)辯駁 (三)門人を指す (四)學をおさむるは自分の身を修むるを第一とす (五)口數多し

後德大寺藤公。好レ學。時集二京師諸名儒一。使二其相討論一。以聽二其定說一。時仁齋年方

後德大寺藤公、學を好み、時〻京師の諸名儒を集め、其を相討論せしめ、以て其定說を聽く。時に仁齋年方に壯、亦召されて列にあり。諸儒皆初め(一)怡聲氣を下し以て辨說し、各〻相容れざるに及ぶや、(二)努嘴說を立て諠譁已まず。仁齋獨り(三)坦夷溫厚終始一の如し。竟に擧坐皆之に歸す。

天長漠漠空。嶺環村落北。湖際寺門東。男子莫二空死一。請看神禹功。識者以レ此知二其志之所一レ存。

初奉二宋儒一。著二大極論性善論心學原論等一。及二年三十七八一。始出二己見一。故其說無論早晚有二異同一。而古學文集襍二載之一。是東涯之孝思。雖下非二定見一者上。不レ忍レ棄レ之云。

初め宋儒を奉じ、大極論・性善論・心學原論等を著す。年三十七八に及び、始めて己が見(一)を出す。故に其說無論早晚異同(二)有り。古學文集之を襍載す。是れ東涯の(三)孝思、定見(四)に非ざる者と雖も、之を棄つるに忍びざりきと云ふ。

(一)自分の意見を立つ　(二)初年と晩年とにて相違あり　(三)孝行の志　(四)確定せる見解に非るものも棄て去りがたし

大高坂清介。著二適從錄一。以駁二仁齋一。弟子持來眎レ之曰。先生作二之辨一。仁齋笑而不レ

大高坂清介、適從錄を著し、以て仁齋を駁す。弟子持來り之を眎して曰く、先生之が辨を作れと。仁齋笑つて言はず。弟子曰く、人、書を著して以て恣に己を議す。苟も辭(一)塞らずんば、豈に默して止むべけんや。先生にして答へずば、則ち請ふ余代つて之を折(二)んかと。仁齋曰く、君子は爭ふ所無し。如し

邦事也。在二此邦一固屬二無用一。假令能レ之不レ易レ售。不レ如下爲二醫術一以致中生産上。仁齋不レ從。當二是時一家日衰謝。沮者愈不レ止。而其志確乎不レ變。

とす　(六)支那　(七)醫術を習って資産を作るが宜し　(八)衰微す

年十九從レ父過二琵琶湖一。有レ詩云。古來云此水。一夜作二平湖一。俗說尤難レ信。世傳詎亦迂。百川流不レ已。萬谷滿相扶。天下滔滔者。應レ憐異教趨。又登二園城寺絶頂一云。山行六七里。往到二杳冥中一。船遠閑閑去。

年十九、父に從ひ琵琶湖を過る。詩有り云く、古來云ふ此の水、(一)一夜平湖と作ると。俗說尤も信じ難し、世傳詎ぞ亦迂なる。(二)百川流れて已まず、萬谷滿ちて相扶く。(三)天下滔滔たる者、憐むべし異教に趨るをと。又(四)園城寺の絶頂に登るに云ふ、山行六七里、往いて(五)杳冥の中に到る。船遠くして(六)閑閑として去り、天長うして(七)漠漠として空し。嶺は環る村落の北、湖は際る寺門の東。男子空しく死すること莫かれ、請ふ看よ(八)神禹の功と。識者此を以て其志の存する所を知る。

(一)俗說、孝靈天皇の御宇一夜に富士山を生じ同時に琵琶湖を生ずと云ふ　(二)多くの河水流れて止まず、其の上多くの谷々に水滿ちて之を助くるを以て終に此の湖を爲せり　(三)天下の人士河水の滔々たる如く相連れて邪道にはしるは憐むべし　(四)三井寺　(五)景色の遙かにかすむ中　(六)のどか　(七)ひろびろ　(八)眼前の大景より夏の禹王九州改造を聯想し功名の念を想起せしなり

伊藤維楨。字原佐。號仁齋。又號古義堂。私諡古學。平安人。

仁齋自幼穎異挺發異羣兒。其始習句讀時。意已欲以儒焜燿于一世。及稍長堅苦自勵。而家素業賈。故親串以爲迂于利。皆沮之曰。學問是彼

巻之四

伊藤維楨

伊藤維楨、字は原佐、仁齋と號す。又古義堂と號し、古學と私諡す。平安の人。

仁齋幼より穎異挺發羣兒と異なり。(一)其始めて句讀を習ひし時、(二)意已に儒を以て一世に焜燿せんと欲す。(三)稍長ずるに及び堅苦自ら勵む。而るに家素賈を業とす。(四)故に親串以て利に迂なりと爲し、(五)皆之を沮んで曰く、學問は是れ彼の邦の事なり。此の邦に在りては固より無用に屬す。假令之を能くするも售れ易からず。(六)醫術を爲めて以て生産を致すに如かずと。仁齋從はず。是時に當つて家日に衰謝し、(七)(八)沮むこと愈ゝ止まず。而も其志確乎として變ぜず。

(一) 才能すぐれて衆に拔んづ　(二) 素讀を學ぶ　(三) 世の中に名を輝かす　(四) 商賣　(五) 親類共は利益にうとし

之。其中有ニ遷都事一。故予以レ此而識ニ其學不レ爲ニ無所見一也。方ニ今之世一。能爲ニ斯業一亦雖ニ其人一矣哉。夫徂來名擅ニ一世一。於ニ詞林一鮮ニ許可。而獨稱レ之如レ此。則足ニ以定ニ一齋一。

㊄ 草稿 ㊅ 見識無きに非ず ㊆ 文理に於て容易に人を許さず

一齋墓在ニ江戸澀谷長谷寺。有レ石勒ニ銘序一。大高坂清介撰レ之。碑面楷字題ニ谷一齋宜貞居士之墓九字。

一齋の墓は江戸澀谷長谷寺に在り。石有り銘序を勒す。(一)大高坂清介之を撰ぶ。碑面の楷字谷一齋宜貞居士之墓の九字を題す。

㊀ 彫りつける

之。性淡泊不ㇾ屑二財貨一。野中兼山嘗出二重價一。購二正宗所ㇾ鍛一名劍一。乃托二一齋一付二之研工一。時某甲將ㇾ冠。一齋爲二之賓一。則贈二其劍一爲ㇾ祝。他日兼山聞ㇾ之。亦略不ㇾ介ㇾ意。

す。一齋之が賓たり。則ち其劍を贈つて祝と爲す。他日兼山之を聞き、亦略意(四)に介せず。

(一)晩年　(二)研師に渡す　(三)元服す　(四)何とも思はず

一齋悟性不ㇾ逾二中人一。而勤苦求ㇾ意。以ㇾ是其學有二體用一。徂徠蘐苑隨筆曰。有二谷一齋先生者一。嘗上二封事一。而沮格不ㇾ用焉。予得二其藁一而讀ㇾ

一齋、悟性(一)中人に逾えず。而も勤苦意を求む。是を以て其學體用(二)有り。徂徠の蘐苑隨筆に曰く、谷一齋先生といふ者有り、嘗て封事(三)を上る。而るに沮格(四)して用ひられず。予其藁(五)を得て之を讀むに、其中に遷都の事あり。故に予此を以て其學の無所見(六)たらざるを識る。今の世に當り、能く斯の業を爲す、亦其人を難んずるかなと。夫れ徂來、名を一世に擅にし、詞林(七)に於て許可する鮮し。而るに獨り之を稱すること此の如し。則ち以て一齋を定むるに足らん。

(一)智慧普通人に越えず　(二)學問の根本的基礎と其の運用　(三)建白書　(四)遮り止められて取り上げられず

寄二儒學一。後遂穉レ髪稱二大學一。以レ儒爲レ業。大儒野中兼山。山崎闇齋。皆得二之訓導一。時喪亂之餘。文運未レ闢。況僻鄕最乏二典籍一。而時中求二諸四方一。多儲レ之。家本饒貲爲殆蕩盡。嘗使二一齋學二小倉三省所一也。謂曰。吾聞富貴失レ志。田產五百石。此非レ所三以惠二子孫一也。乃鬻レ之僅存三數頃可二以餬一レ口云。

方に求め、多く之を儲ふ。(五)家本饒貲なりしも爲に殆ど蕩盡す。嘗て一齋をして小倉三省の所に學ばしむるや、謂つて曰く、吾れ聞く(六)富貴は志を失ふと。(七)田產五百石、此れ子孫を惠む所以にあらずと。乃ち之を鬻ぎ、僅かに數頃(八)の以て口を餬す可きを存すと云ふ。

㊀ 親鸞上人を開祖とする浄土眞宗派 ㊁ 氣象大きくして主義節操を有す ㊂ 戰國の亂後にて文化未だ開けず ㊃ かたゐなかにて書物乏し ㊄ 富家なりしも書物代のために財を無くす ㊅ 富貴なれば志撓く ㊆ 田地の上り高五百石 ㊇ 數町歩

一齋去二土佐一移二京師一。而來二江戶一。遊二事稻葉侯一。暮年辭レ

一齋土佐を去り京師に移つて、江戶に來り、稻葉侯に遊事し、(一)暮年之を辭す。性淡泊にして財貨を屑とせず。野中兼山嘗て重價を出し、(二)正宗が鍛ふる所の一名劍を購ふ。乃ち一齋に托して之を(二)研工に付す。時に某甲將に(三)冠せんと

伯養以寶永己丑八月二十日終。享年八十有七。妻省君先一年卒。年八十。共窆于江戸牛籠宗參寺。

伯養、寶永己丑(一)八月二十日を以て終る。享年八十有七。妻省君先だつこと一年にして卒す。年八十。共に江戸牛籠の宗參寺に窆る。

(一) 六年

谷松。字宜貞。小字三介。號己千。又號一齋。土佐人。一齋父素有。字時中。初入釋祖親鸞派。住持土佐眞常寺。爲人豪爽有志節。最

谷松

谷松、字は宜貞、小字は三介、己千と號し、又一齋と號す。土佐の人。一齋の父素有、字は時中。初め釋に入り親鸞派(一)を祖とし、土佐の眞常寺に住持たり。人となり豪爽(二)、志節有り。最も儒學を喜ぶ。後遂に髮を種ゑて大學と稱し、儒を以て業と爲す。大儒野中兼山・山崎闇齋、皆之が訓導を得たり。時喪亂(三)の餘、文運未だ闢けず。況や僻鄕(四)最も典籍に乏しきをや。而るに時中諸を四

讀レ書通レ古。伯養之學ニ釋老一也。省君隨而領ニ解其義一。伯養之爲レ王爲レ朱也。省君亦克治レ之。世稱曰。夫婦並有ニ才學一者。有ニ二山伯養。貝原益軒一耳。嘗伯養將レ出而有レ火。乃謂ニ省君一曰。火遠矣。必不レ及焉。若漸逼則吾歸携レ汝去。少焉風急延燒及ニ近鄰一。弟子謂ニ省君一曰。災今難レ免。內君盍ニ早去一。省君從容曰。夫臨レ出謂レ妾曰。火逼必歸共行。然不レ待レ夫而去。此不レ奉ニ夫之言一也。與下不レ奉ニ夫之言一以求中苟生上。寧燒死而全ニ女子節一。時火益熾。居益危。而守レ死不レ變。已而伯養遄歸倶共去。

養・貝原益軒有るのみと。嘗て伯養將に出でんとして火有り。乃ち省君に謂つて曰く、火遠し。必ず及ばじ。若し漸く逼らば則ち吾れ歸つて汝を携へ去らんと。少くありて風急に、(三)延燒近鄰に及ぶ。弟子、省君に謂つて曰く、災今免れ難し。內君盍ぞ早く去らざると。省君從容として(四)曰く、夫出づるに臨み妾に謂ひて曰く、火逼らば必ず歸つて共に行かんと。然るに夫を待たずして去らば、此れ夫の言を奉ぜざるなり。夫の言を奉ぜずして以て苟も生を求めんよりは、寧ろ燒死して女子の節を全うせんと。時に火益々熾に、居益々危し。而も死を守り變ぜず。已にして伯養遄て歸り倶に共に去る。

(一)佛子及び老莊の子　(二)陽明學となり又朱子學に變ず　(三)燒け廣がりて近所に至る　(四)平然とおちつく

五巻。嘗勸二藤房一讀二朱子集註一。事載二長濟草一。今爲レ子誦讀焉。乃誦者歷歷可レ聽。伯養驚且喜曰。吾子記憶誠出二天性一。非レ由レ此余何以得レ知レ之。請再誦。余將レ錄レ之。玄信又復誦。伯養隨而筆レ之。以爲レ得二明證一。當二是時一。京師藤井懶齋撰二朝諫諍錄一。伯養以下與二懶齋一爲中久要上故。致二之懶齋一以載二諫諍錄一。迨後永井良宗本朝通紀。島良安倭漢三才圖繪。載下垂水廣信此邦始讀二朱注一事上。蓋皆本二諫諍錄一也。而所謂垂水廣信古今無二其人一。嘉文亂記。及長濟草。亦未レ聞レ有二其書一。是本出二玄信一時妄語一。而伯養信レ之。海內遂唱二犬吠之說一。此日夏高繁兵家茶話所レ辨也。

語に出でて、伯養之を信じ、海内遂に犬吠(一〇)の說を唱ふと。此れ日夏高繁の兵家茶話に辨ずる所なり。

㈠ ことづくる　㈡ 家の系圖　㈢ 自分の妻の謙稱、愚妻　㈣ 諫言　㈤ 伊は程伊川の伊、洛は洛陽即ち伊川の生地、轉じて程子の稱　㈥ 藤原藤房　㈦ あきらかなるさま　㈧ 今一度誦す　㈨ 舊くよりの約束　㈩ 一犬虛に吠えて萬犬實を傳ふるが如く、嘘を次々に傳ふ

伯養妻垂水氏。名三。字省君。貞正有レ操。且學二於伯養一。

伯養の妻垂水氏、名は三、字は省君、貞正操有り。且つ伯養に學び、書を讀み古に通ず。伯養の釋老(一一)を學ぶや、省君隨つて其義を領解す。伯養の王(一二)となり朱となるや、省君亦克く之を治む。世稱して曰く、夫婦並に才學有る者、二山伯

問曰、荊妻垂水氏也。傳言昔者。垂水某者。仕二伊勢國司一。既失二其名一。且未レ知レ爲二何世人一。則其跡絶不レ可レ考。豈不二遺憾一哉。玄信曰。此垂水廣信也。廣信稱二河内守一。伊勢垂水人。初仕二其國司一。後事二後醍醐天皇一。諫疏不レ聽而去。廣信好レ學。始奉二伊洛說一。所レ著有二嘉文亂記六十

なり。廣信、河内守と稱す。伊勢垂水の人。初め其國司に仕ふ。後後醍醐天皇に事へ、諫疏(四)聽かれずして去る。廣信學を好み、始めて伊洛(五)の說を奉ず。著す所、嘉文亂記六十五卷あり。嘗て藤(六)藤房に勸めて朱子集註を讀ましむ。事長濟草に載す。今子の爲に誦讀せんと。乃ち誦する者(七)歷歷として聽く可し。伯養驚き且つ喜んで曰く、吾子の記憶誠に天性に出づ。此に由るに非ずんば余何を以てか之を知るを得ん。請ふ(八)再誦せよ。余將に之を錄せんとすと。玄信又復誦す。伯養隨つて之を筆し、以て明證を得たりと爲す。是時に當つて、京師の藤井懶齋國朝諫諍錄を撰ぶ。伯養、懶齋と(九)久要を爲すを以ての故に、之を懶齋に致し以て諫諍錄に載せしむ。迨後永井貞宗の本朝通紀、寺島良安の倭漢三才圖繪、垂水廣信此邦にて始めて朱注を讀む事を載す。蓋し皆諫諍錄に本づくなり。而るに所謂垂水廣信は古今其人無し。嘉文亂記及び長濟草、亦未だ其書有るを聞かず。是れ本玄信一時の妄

伯養居ㇾ家平生著二上下一。上下禮服也。居二本鄕弓街一時。其家無ㇾ井。常斛二之鄰家一。鄰家一日潽ㇾ井。義當下出二役夫一以助上ㇾ之。適伯養僕有ㇾ疾。伯養乃出躬自執ㇾ綆分ㇾ力。倘不ㇾ脫二上下一云。

伯養家に居て平生上下を著く。上下は禮服なり。本鄕弓街(一)に居せし時、其家に井なし。常に之を鄰家に斛む。鄰家一日井を潽ふ。義當に役夫を出して以て之を助くべし。適〻伯養の僕疾あり。伯養乃ち出で躬自ら綆(二)を執て力を分つ。倘ほ上下を脫がずと云ふ。

(一)弓町　(二)井戸淺へ　(三)つるべなは

有二瞽者佐佐木玄信者一。善記二諸家系譜一。而至二其不ㇾ可ㇾ得ㇾ詳。則牽合附會以欺ㇾ世。一日過二伯養一。談及ㇾ譜。伯養

瞽者佐佐木玄信といふ者有り。善く諸家の系譜を記し、其の得て詳かにす可からざるに至つては、則ち牽合附會(一)して以て世を欺く。一日伯養に過り、談、譜に及ぶ。伯養問うて曰く、(二)荆妻は垂水氏なり。傳へ言ふ、昔者垂水某なる者、伊勢の國司に仕ふと。既に其名を失し、且つ未だ何の世の人なるかを知らず。則ち其跡絶えて考ふ可からず。豈に遺憾ならずやと。玄信曰く、此れ垂水廣信

蚤修二王氏心學一。後來聞二洛閩正學一。幡然服二從之一。今也以下其德二於己一者上誠二乎人一。以下其獲二於己者上共二乎人一。豈非レ忠耶。

伯養篤學愼行。當世比二之中江藤樹一云。室鳩巣答二遊佐次郎左衛門一書曰。至二於谷氏二山氏一。雖レ未レ見二其人一。耳聞レ之熟。蓋操軒惕齋之亞也。足下以爲二篤行君子一者得レ之。

伯養、篤學愼行(一)、當世之を中江藤樹に比すと云ふ。室鳩巣が遊佐次郎左衛門に答ふる書に曰く、谷氏(二)・二山氏に至つては、未だ其人を見ずと雖も、耳之を聞き熟す。蓋し操軒(三)・惕齋(四)の亞なり。足下以て篤行の君子と爲すは之を得たりと。

㊀ 學問に熱心に行つゝしむ　㊁ 土佐の谷一齋　㊂ 米川氏、名は一貞、京師の販夫にして三宅寄齋に學ぶ　㊃ 中村惕齋

伯養娶レ妻。其儀一遵二文公家禮一。家禮有二壻乘馬文一。伯養家不レ畜レ馬。乃借二之人一而行二其事一。

伯養妻を娶る。其儀一に文公(一)家禮に遵ふ。家禮に壻乘馬の文有り。伯養、家に馬を畜はず。乃ち之を人に借りて其事を行ふ。

㊀ 朱子家禮

二山義長。字伯養。小字彌三郎。號時習堂。石見人。

伯養年少時來江戸。及壯仕中川侯。亡何辭去。乃鬻藥隱于郭北駒籠。伯養素嗜學。致仕後。孜孜以求道爲事。初好釋老。又奉王陽明說。既而有疑焉。終歸朱紫陽。於是著朱王學辨。仲郁惕齋序之曰。二山老丈

二山義長、字は伯養、小字は彌三郎、時習堂と號す。石見の人。

伯養、年少の時江戸に來り、壯に及び中川侯に仕ふ。何も亡く辭し去る。乃ち藥を鬻ぎて郭北(一)の駒籠に隱る。伯養素學を嗜む。致仕の後、孜孜として道を求むるを以て事となす。初め釋老(二)を好み、又王陽明の說を奉ず。既にして疑有り。終に朱紫陽(三)に歸す。是に於て朱王學辨を著す。仲郁惕齋之に序して曰く、二山老丈(四)蚤く王氏の心學(五)を修む。後來洛閩(六)の正學を聞き、幡然として之に服從す。今や(七)其己に懲る者を以て人を誡め、其己に獲る者を以て人に共にせしむ。豈に忠に非ずやと。

(一) 城北駒込　(二) 佛學と老莊學と　(三) 朱學を指す　(四) 長者に對する尊稱　(五) 王陽明の心を主とする學風
(六) 洛は洛陽にして二程子の生地、閩は閩中にして朱子の生地、轉じて程朱の學　(七) 自分の懲りたる佛老及び王學を以て人を戒め、自分の覺る所ありたる朱學を人に勸む

朱殷一以爲戰而被レ創。謂曰。丈夫哉。予雖レ無レ爲。而幼而强レ病加二先陣之數一。亦鄉人之所二共知一也。明年二月二十八日城將レ拔。主公麾レ兵直登。銃飛如レ電。死傷甚多。熱不レ可レ堪。翁以二此扇一扇二主公一。渴甚。十時攝津擘二橘子一奉レ之。渴猶不レ止。翁授二扇於予一。下而取レ飮。遂與二諸軍一居二其巢穴一。無二噍類一矣。屈レ指二三十二年于今。而扇如レ新。翁之愛レ君可レ知焉。古人有レ功不レ伐。況予之無レ功哉。然翁之求不レ可レ辭。遂爲二之銘一。銘曰。柄在二掌握一。動而樹レ功。從二君於難一。誕輔二威風一。嗟省菴以二文事一表二見于一世一。今讀二此編一。則其少年勇壯豈非二毅然大丈夫一哉。卽使三省菴生二于戎馬之際一。則其所レ爲亦迥出レ羣矣。古云有二文事一者必有二武備一。省菴有レ焉

二山義長

省菴高義世絶無。其學亦世所レ不二多有一也。而性謙讓。告二男守直一遺訓曰。我無レ才無レ德。汝與二諸生一。勿レ撰二年譜行狀行實碑銘墓銘。及文集序等一。

省菴、高義(一)、世絶えて無し。其學亦世に多く有らざる所なり。而も性謙讓なり。男守直に告ぐる遺訓に曰く、我れ才無く德無し、汝、諸生と、年譜行狀行實(二)碑銘墓銘及び文集の序等を撰ぶことなかれと。

(一) 義の高きこと世に絶えてなし　(二) 行事の實、實は狀と相對していふ語

出二手足一示レ之曰。予本在二麾下之列一。然瘡痛如レ此。不レ得レ從二君行一。將三乘レ馬赴二先陣一。勿二以爲上レ背二軍法一也。既而至二竹楯下一。家父喜曰。所二以止一レ汝者。慮二其不一レ來也。今能來。其志不レ在二必死一縁レ底至レ此。夜將二參半一。與レ衆同進。果而躓倒。蹈二甲冑一行者不レ知レ數。兩奴扶起而進。鳥銃雨集。左右死多。血濺二予之左肱一。黎明與レ衆同退過二麾下一。小原氏横レ弓在二君傍一。見二左肱

れば今に二十二年。而も扇新なるが如し。翁の君を愛する知るべし。古人は功有るも伐らず。況や予の功無きをや。然れども翁の求辭す可からず。遂に之が銘を爲す。銘に曰く、柄は掌握に在り、動いて功を樹つ。君に難に從ひ、誕いに威風を輔くと。(二〇)嗟省菴文事を以て一世に表見す。(二一)今此編を讀む。則ち其少年の勇壯豈に毅然たる大丈夫に非ずや。卽し省菴をして戎馬の際に生れしめば、則ち其爲す所亦迥かに羣を出でん。(二二)古云ふ、文事有る者は必ず武備有りと。(二三)省菴焉れ有り。

(一) 島原の亂 (二) 江戸 (三) うみ血くづれたゞれ手足の伸縮自由ならず (四) 竹束の楯のかげ (五) 一弓は八尺 (六) 脚脛の腫物 (七) 脚のはれ上ると (八) 足うら反戻して歩行すべからず (九) 半歩 (一〇) 父の友 (一一) 旗下 (一二) 汝の來らざるやう止めしは來るまじきを心配すればなり (一三) 夜半 (一四) 銃丸雨の如く飛びくる (一五) 夜明方 (一六) あか黒き血の色 (一七) 蜜柑 (一八) 根據地を攻め落して鏖殺す (一九) 生類無し (二〇) 扇の柄は手のひらに握られ、動いて功を立つ (二一) 一時代にあらはる (二二) 戰國時代 (二三) 孔子の言

竹楯下。去㆓君營㆒可㆔三十餘弓㆒。家父數遣㆑使戒㆑予曰。今夜將㆑攻㆑城。汝既微且尫。又苦㆓跰蹩㆒。手不㆑得㆑執㆑刀。足不㆑得㆑行㆑路。强從㆓君行㆒。則跬步而倒。人不㆑言㆓其病㆒而笑㆓其怯㆒矣。我非㆑愛㆓死㆒而愛㆓而名㆒也。又倩㆓執友安東内藏助㆒堅制止㆑予。予著㆓甲冑㆒扶㆓兩奴㆒至㆓君營㆒。招㆓當事池邊氏㆒。

に赴かんとす。以て軍法に背くと爲すこと勿れと。既にして竹楯下に至る。家父喜んで曰く、(一二)汝を止めし所以は、其の來らざるを慮ればなり。今能く來る。其志必死に在らずんば底に緣つてか此に至らんと。夜將に參半(一三)ならんとし、衆と同じく進む。果して躓き倒る。甲冑を蹈んで行く者數を知らず。兩奴扶起して進む。(一四)鳥銃雨集して左右死多し。血予が左肱に濺ぐ。黎明(一五)衆と同じく退き麾下を過ぐ。小原氏弓を横へ君傍に有り。左肱の朱殷(一六)を見て以爲らく、戰つて創を被ると。謂つて曰く、丈夫なるかなと。予爲すこと無しと雖も、而も幼にして病を强ひて先陣の數に加はる。亦鄕人の共に知る所なり。明年二月二十八日、城將に拔けんとす。(二〇)主公兵を麾き直に登る。銃飛んで電の如く、死傷甚だ多し。熱堪ふべからず。翁、此扇を以て主公を扇ぐ。渴甚だし。十時攝津(一七)、橘子を擘いて之を奉る。渴猶ほ止まず。翁、扇を予に授け、下つて飮を取る。遂に諸軍と與に其巢穴(一八)を屠り、噍類(一九)無し。指を屈す

序云。一日訪二石松翁一。翁出レ扇示レ予謂曰。昔在有馬之役。所三與レ子更扇二主公一者也。子記レ之乎。因憶彼時予年十六。在二東武一患二小瘡一。腫痛甚矣。淹在二牀褥一。強レ病乗レ馬。自二東武一從二君行一。倍レ道兼行既至二有馬一。瘡痛不レ可レ堪。膿血潰爛。手足不レ得二屈伸一。二十日夜。家父兄加二先陣一在二

つて曰く、昔(一)在有馬の役に、子と更〻主公を扇ぎし所の者なり。子之を記するかと。因て憶ふ、彼の時予年十六。(二)東武に在りて小瘡を患ふ。腫痛甚だし。淹しく牀褥に在り。病を強ひて馬に乗り、東武より君の行に從ひ、道を倍して兼行し既に有馬に至れば、瘡痛堪ふ可からず。(三)膿血潰爛し、手足屈伸するを得ず。二十日夜、家父兄先陣に加はりて竹柵(四)下に在り。君の營を去ること三十(五)餘弓なるべし。家父數〻使を遣して予を戒めて曰く、今夜將に城を攻めんとす。汝既に微且つ(六)尫。又跛盭(七)に苦み、手、刀を執るを得ず、(八)足、路を行くことを得ず。強ひて君の行に從はば、則ち跬歩(九)にして倒れん。人其病を言はずして其怯を笑はん。我れ而の死を愛むに非ず、而の名を愛むなりと。又執友(一〇)安東内藏助を倩ひて堅く制して予を止む。予甲冑を著け兩奴に扶けられて君の營に至り、當事池邊氏を招き、手足を出し之を示して曰く、予本麾下(一一)の列に在り。然れども瘡痛此の如く、君の行に從ふことを得ず。將に馬に乗つて先陣

邦張斐文至二長崎一。寄二書及詩一以褒賞。詩中云。曾遯二聲名一到二若耶一。是海外亦有聞也。

省菴年過二四十一未レ娶。舜水贈レ書以爲レ虧二孝道一。四十三始置レ妾。妾居者五年而出。妾悲二其離別一。涕泣殆絶。省菴乃賡二韓文公別鵠操韻一。作二慈鴉操詩一云。雄鴉不レ營レ巢。雌鴉將二安歸一。雛死又有レ雛。義不レ當二乖離一。母子道之大。其餘事之微。此別何足レ嗟。且有二反哺傍レ母飛一。妾生二二男子一。長早夭。故有二此作一。

省菴、年四十を過ぎ未だ娶らず。舜水書を贈つて以て孝道を虧くと爲す。四十三、始めて妾を置く。妾居ること五年にして出づ。妾、其離別を悲み、涕泣(一)殆ど絶す。省菴乃ち韓文公の別鵠操の韻を賡ぎ、慈鴉操の詩を作つて云ふ、(二)雄鴉巢を營まず、雌鴉將に安にか歸らんとする。(三)雛死し又雛有り、義當に乖(四)離すべからず、母子は道の大、其餘は事の微なり。此別何ぞ嗟くに足らん、且つ(五)反哺母に傍つて飛ぶ有りと。妾、二男子を生み、長早く夭す。故に此作有り。

(一) 泣きて氣絶せんとす (二) 省菴自ら言ふ (三) 一男死し一男生れしをいふ (四) 義として母子は其の緣離れず (五) 反哺は烏の孝、一男母と共に行くをいふ

本集載扇銘

本集に載する扇の銘序に云ふ、一日石松翁を訪ふ。翁、扇を出して予に示し謂

一次費銀五十兩。二次共一百兩。苜蓿先生之俸盡於此矣。又土儀時物絡繹差人送來。其自奉斂衣糲飯菜羹而已。或時豐腆則魚鰯數枚耳。家止一唐鍋。經時無物烹調。塵封鐵鏽。其宗親朋友戚共非笑之諫沮之。省菴恬然不顧。惟日夜讀書樂道已爾。我今來此十五年。稍稍寄物表意。前後皆不受。過於矯激我甚不樂。然不能改也。此等人中原亦自少有。汝不知名義。亦當銘心刻骨世世不忘也。奈此間法度嚴不能出境奉候。無可如何。若能作書懇懇相謝甚好。又恐汝不能也。

るの意 (二〇) 破れ衣、あら搗き飯、野菜のあへもの (二一) 馳走のときが僅かに鰯數匹 (二二) 長らくの間煮焚きをすることなし (二三) いさめ止める (二四) 無頓着 (二五) 漸次物品を贈つて感謝の意を表す (二六) かたいぢに過ぎて自分も面白くおもはず (二七) 中國、支那 (二八) 汝は省菴の名字を知らざれど深く記憶して忘るべからず (二九) 國境を越え出て訪問すること能はず

省菴初年學松永尺五。尺五沒之後五年。見舜水託業。於是學益富行益脩。伊藤東涯稱爲關西巨儒。彼

省菴、初年松永尺五に學ぶ。尺五没するの後五年。舜水に見えて業を託す。是に於て學益〻富み行益〻脩る。伊藤東涯稱して關西の巨儒と爲す。彼邦の張斐文長崎に至り、書及び詩を寄せて以て褒賞す。詩中に云ふ、曾て(二)聲名を遞して(一)若耶に到ると。是れ海外にも亦聞有るなり。

(二) 評判傳はりて若耶の地に到る (一) 支那浙江省紹興縣の南にある山の名

年。先年南京七船同住長崎十九。富商連名具呈。懇留累次。倶不准。我故無意於此。乃安東省菴。苦苦懇留。輾展央人。故留駐在此。是特爲我一人開此厲禁。也。既留之後。乃分半俸供給我。省菴薄俸二百石。實米八十石。去其半止四十石矣。毎年兩次到崎省我。

我を省す。一次費銀五十兩、二次共に一百兩。苜蓿(八)先生の俸此に盡く。又土(九)儀時物絡繹として(七)人を差して送り來る。其自ら奉ずる、敝衣(一〇)糲飯菜羹のみ。或は時に豐腆(一一)あれば則ち魚鰯數枚のみ。家には止一唐鍋あり。時を(一二)經て物の烹調なく、塵封じ鐵鏽びたり。其宗親朋友咸共に之を非笑し之を諫沮(一三)す。省菴恬然(一四)として顧みず、惟日夜書を讀み道を樂むのみ。我れ今此に來りて十五年。稍稍(一五)物を寄せ意を表す。前後皆受けず。矯激(一六)に過ぎ我れ甚だ樂ます。然れども改むること能はざるなり。此等の人中原(一七)亦自ら有ること少なし。汝名義を知らざるも、亦當に心に銘し骨に刻み、世世忘れざるべきなり。此間法度(一八)嚴しく出境奉候する能はざるを奈ん。如何ともすべき無し。若し能く書を作り懇懇(一九)相謝せば甚だ好し。又恐る汝の能はざるを。

(一) 元年 (二) 高き節義 (三) 富商連署して願出て懇に引留むること再三なれど允許せず (四) 苦心して引留め、彼方此方と頼むべき人を求む (五) 嚴しき禁制を解く (六) 毎年二回長崎に到つて舜水を伺ふ (七) 一回の費用 (八) 古來苜蓿は窮困の意に用ふ (九) 土地の産物時の産などの贈物。絡繹は往來の絶えざる貌にして、始終贈物あ

安東守約。字魯默。初名守正。號二省菴一。筑後人。仕二柳河侯一。

明曆乙未。朱舜水來二長崎一。時人未レ及レ知二其學一。唯省菴往師焉。時舜水貧甚。乃割二祿之半一贈レ之。至レ今稱爲二一大高誼一。其詳見下舜水與二孫男毓仁一書中上。曰。日本禁レ留二唐人一已四十

安東守約

安東守約、字は魯默、初の名は守正、省菴と號す。筑後の人。柳河侯に仕ふ。

明曆乙未(一)、朱舜水長崎に來る。時人未だ其學を知るに及ばず。唯省菴のみ往いて師とす。時に舜水貧甚だし。乃ち祿の半を割き之を贈る。今に至つて稱して一大高誼(二)と爲す。其詳、舜水が孫男毓仁に與ふる書中に見ゆ。曰く、日本、唐人を留むるを禁ずること已に四十年。先年南京の七船同じく長崎に住する十に九、富商連名具呈し、懇留累次、倶に準さず。我れ故に此に意無し。乃ち安東省菴(三)、苦苦懇留、轉展人を央む。故に留駐此に在り。是れ特に我れ一人の爲に此厲禁(四)を開くなり。既に留るの後、乃ち半俸を分けて我に供給す。省菴薄俸二百石(五)、實に米八十石。其半を去れば止だ四十石なり。(六)每年兩次崎に到つて

藏。因レ遇因レ遷。焉有焉亡。唯學之好。至レ老不レ忘。几上筆研。架頭縹緗。照レ螢聚レ雪。數レ墨尋レ行。既無二新得一。豈率二舊章一。悔レ溺二博雜一。終失二蒼黃一。寫レ眞誰也。惟洲之篁。塵埃滿レ幅。面目可レ傷。卷還二之子一。何足二以藏一。

出世の遲るゝこと漢の揚雄に似たり （五）老年になりて出世す （六）七十歳 （七）莊子にいふ、北冥に魚あり、其名を鯤と爲す、鯤の大、其の幾千里なるを知らざるなり、化して鳥と爲る、其の名を鵬と爲す、鵬の背、其幾千里なるを知らざるなり、怒つて飛べば其翼垂天の雲のごとし云々。大志を立つるをいふ （八）齊人魯仲連趙に遊ぶ、秦趙を攻め趙下らんとす、仲連曰く、彼の秦は禮義を棄てゝ首功を上ぶの國なり、彼即し肆然として帝となり、政を天下に爲さば、則ち連東海を蹈んで死するあらんのみと。義を守つて屈せざるをいふ （九）擧げ用ひらるれば進んで道を行ひ、捨てらるれば退いて道を藏す （一〇）偶倖と運命とによる （一一）何れを利益とし何れを損失とせん （一二）筆と硯 （一三）書物、和本は多くあさぎ色の帙に入りしよりいふ （一四）車胤孫康の故事 （一五）新しく研究發明する所もあらねば又古くさき文章をものすることも爲さず （一六）博くして雜駁 （一七）孔稚珪父に終始參差、蒼黄反覆とある如く、色々の説に從ひて定見なしとの謙辭ならん （一八）眞の姿を描寫せしは誰ぞ、篁洲よとなり

順菴以二元祿戊寅十二月二十三日一沒。得レ年七十八。白石追悼詩八首自註。略紀二其履歷一。與二男菊潭撰小傳一可二併見一。順菴臨レ沒屬二後事于篁洲白石一。棺中藏以二孝經一卷一。

順菴、元祿戊寅(一)十二月二十三日を以て沒す。年を得る七十八。白石が追悼詩八首の自註、略其履歷を紀す。男菊潭が撰する小傳と併せ見る可し。順菴沒するに臨み後事を篁洲(二)・白石に屬す。棺中藏むるに孝經一卷を以てす。

（一）十一年 （二）榊原篁洲、新井白石

先生。加之南部思聽。松浦禎卿。三宅用晦。服部紹卿。向井魯甫。爲二十哲。而思聽禎卿爲同庚。稱之二妙。

自題篁洲所寫肖像云。咨爾與我。如陰有陽。不言不笑。非閒非忙。道存目擊。神傳毫芒。平生履歷。尺寸短長。四十從仕。遲暮類揚。六十被徵。晩達似唐。古稀既過。來者可恇。北溟奮翮。東海望洋。富貴貧賤。用捨行

自ら篁洲が寫す所の肖像に題して云ふ、咨爾と我と、陰に陽有るが如し。言はず笑はず、閒に非ず忙に非ず。道、目擊に存し、神、毫芒に傳ふ。平生の履歷、尺寸短長。四十仕に從ふ、遲暮、揚に類す。六十徵さる、晩達、唐に似たり。古稀既に過ぎたり、來者恇るべし。北溟、翮を奮ひ、東海、洋を望む。富貴貧賤、用捨行藏、遇に因り運に因る、焉ぞ有とせん焉ぞ亡とせん。唯學之れ好み、老に至るも忘れず。几上の筆研、架頭の縹緗。螢を照し雪を聚め、墨を數へ行を尋ぬ。既に新に得る無し、豈に舊章に率はんや。博雜に溺るゝを悔ひ、終に蒼黄に失す。眞を寫す誰ぞや、惟れ洲の篁。塵埃幅に滿たば、面目傷む可し。巻いて之を子に還す、何ぞ以て藏するに足らん。

(一) 暇あるでもなく忙しきでもなし　(二) 道は眼前見る所に在り、精神は筆端に傳ふ　(三) 僅かの長所と短所　(四)

美在中。室直清師禮。應二對外國一則雨森東伯陽。松浦儀禎卿。文章則祇園瑜伯玉。西山順泰健甫。南部景衡思聴。博該則榊原玄輔希翊。皆瑰奇絶倫之材矣。其岡島達之至性。岡田文之謹厚。堀山輔之志操。向井三省之氣節。石原學魯之靜退。亦不レ易レ得者。而師禮之經術。在中之典刑。實曠古之偉器。一代之通儒也。夫以二若數子之資一。而終身奉二遵服膺先生之訓一。不三敢一辭有二異同一焉。則先生之德與レ學可レ想矣。

し、敢へて一辭(二四)の異同有らず。則ち先生の德と學と想ふ可し。

(一) 遠邇は遠近、贄は入門の時弟子より師に贈るもの (二) 德の完成し材能のすぐれたるもの多く出づ (三) 宇野字鼎、京都の人、向井滄洲に學ぶ (四) 桃李一時に開きたる如く一代の俊秀盡く集まる (五) 柴野栗山、名は邦彦、讃岐の人、昌平黌に敎官たり (六) 新井白石 (七) 室鳩巣 (八) 雨森芳洲 (九) 松浦霞沼 (一〇) 祇園南海 (一一) 西山西山 (一二) 南部南山 (一三) 榊原篁洲 (一四) 偉大にして比するものなき材能 (一五) 岡島石梁 (一六) 岡田竹圃 (一七) 堀南湖 (一八) 向井滄洲 (一九) 石原鼎庵 (二〇) 物しづかにして謙遜なり (二一) 室鳩巣 (二二) 新井白石 (二三) 古來未だ有らざるすぐれたる人物、一代に冠絶する大儒 (二四) 一言も異説を稱へず

新井在中。室師禮。雨森伯陽。祇園伯玉。榊原希翊。世謂二之木門五

新井在中・室師禮・雨森伯陽・祇園伯玉・榊原希翊、世に之を木門の五先生と謂ふ。之に南部思聰・松浦禎卿・三宅用晦・服部紹卿・向井魯甫を加へて、十哲と爲す。而して思聰・禎卿は同庚(一)たるより、之を二妙と稱す。

(一) 同年齡

王守仁之文一。常以二其集一置レ傍。有レ暇頻頻讀レ之。一日語レ僕曰。舜水朱子甚敬二守仁一。得二其文一必改レ容稱嘆。

㊀韓退之の文　㊁晩年になり江戸にうつる　㊂王陽明

順菴爲二一世一所レ敬慕。遠邇納レ贄及レ門者。不レ可レ勝數一。而成德達材多出焉。宇士新稱爲二桃李滿一レ門。近時柴栗山序二文集一。敘下列其名二于世一者上。乃載二于左一。曰。盛矣哉錦里先生門之得レ人也。參二謀大政一則源君

順菴、一世に敬慕せられ、遠邇(一)贄を納れて門に及ぶ者、勝げて數ふ可からず。而して成德達材(二)多く出づ。宇士新(三)稱して桃李(四)門に滿つとなす。近時柴栗山(五)、文集に序し、其の世に名有る者を叙列す。乃ち左に載す。曰く、盛なるかな錦里先生門の人を得たるや。大政に參謀するには則ち源君美在中(六)・室直淸師禮(七)、外國に對應するには則ち雨森東伯陽(八)・松浦儀禎卿(九)、文章には則ち祇園瑜伯玉(一〇)・西山順泰健甫(一一)・南部景衡思聰(一二)、博該は則ち榊原玄輔希翊(一三)、皆瑰奇(一四)絶倫の材なり。其岡島達(一五)の至性、岡田文(一六)の謹厚、堀山輔(一七)の志操、向井三省(一八)の氣節、石原學魯(一九)の靜退(二〇)、亦得易からざる者にして、師禮(二一)の經術、在中(二二)の典刑は、實に曠古(二三)の偉器、一代の通儒なり。夫れ若の數子の資を以てして、終身先生の訓を奉遵服膺

物徂徠曰。錦里先生者出。而搏桑之詩皆唐矣。服南郭曰。錦里先生實爲二文運之嚆矢一。雖三其詩不二甚工一首二唱唐一。又聞先生恆言。非レ熟讀二十三經注疏一。則不レ可レ謂レ通レ經矣。由レ此觀レ之。所謂古學亦先生爲二之開祖一。

物徂徠曰く、錦里先生といふ者出でて、搏桑の詩皆唐と。(一)服南郭曰く、錦里先生は實に文運の嚆矢たり。(二)其詩甚だ工ならずと雖も、唐を首唱すと。又聞く、先生恆に言ふ、十三經注疏を熟讀するに非ざれば、則ち經に通ずと謂ふ可からずと。此に由つて之を觀れば、所謂古學も亦先生之が開祖たり。(三)

(一) 扶桑即ち日本の詩は皆唐代の詩にならふに至れり　(二) 服部南郭　(三) 文運を興したる最初の人

室鳩巣答二堀正修一書曰。恭靖先生在レ京時。酷愛二韓文一。無二日不一レ讀。每レ出輒以二韓文一自隨。及二晩節東遷後一、又受二

室鳩巣が堀正修に答ふる書に曰く、恭靖先生京に在る時、酷だ韓文を愛し(一)日として讀まざる無し。出づる每に輒ち韓文を以て自ら隨ふ。晩節東遷の後に(二)及んでは、又王守仁の文を愛し、常に其集を以て傍に置き、暇あれば頻頻之を讀む。一日僕に(三)語つて曰く、舜水朱子甚だ守仁を敬し、其文を得れば必ず容を改めて稱嘆すと。

少從㆓某侯㆒來㆓江戶㆒。不㆑得㆑志而歸㆑京。從㆑是閉㆑戶讀㆑書。久之名震㆓海內㆒。加賀侯厚㆑幣召㆑之。辭曰。先師松永先生之子某。嗣承㆓家學㆒。未㆑就㆓仕途㆒。家道屢空。請用㆑彼以使㆑得㆓其宿望㆒。侯聞㆑之曰。今之世交同㆓手足之親㆒。誼比㆓金石之固㆒。於㆓利害所㆑關。則崖岸相向者比比皆然。如㆓順菴㆒。可㆑謂㆑有㆓古人節㆒矣。即與㆓松永氏子㆒倶禮㆓聘之㆒。越若干年。蒙㆓簡拔㆒爲㆓大府儒員㆒。時年六十二。實天和二年七月二十七日也。

少うして某侯に從つて江戶に來り、志を得ずして京に歸る。是より戶を閉ぢ書を讀む。久しうして名海內に震ふ。加賀侯幣を厚うして之を召す。辭して曰く、先師松永先生(一)の子某、嗣いで(二)家學を承く。未だ仕途に就かず。(三)家道屢〻空し。請ふ彼を用ひて以て其宿望を得しめよと。侯、之を聞いて曰く、今の世、交(四)手足の親しきに同じく、誼金石の固きに比するも、利害の關る所に於ては、則ち(五)崖岸相向ふ者比比として皆然り。順菴の如きは、古人の節ありと謂ふ可しと。卽ち松永氏の子と倶に之を禮聘す。越えて若干年、(六)簡拔を蒙り大府の儒員となる。時に年六十二。實に天和二年七月二十七日なり。

(一) 松永尺五　(二) 家の學事をうけつぐ　(三) 家計に困る　(四) 交際は恰も手と足との親しきが如く、交誼は金石の如く固し　(五) 兩岸の互に峙つが如く、爭ひはりむかふ　(六) 多人數中より選拔して登用す

又號二順菴一。私ニ諡二恭靖一。平安人。

順菴自レ幼彊記。善讀レ書寫レ字。海大師見而撫レ之曰。此兒有二異質一。卽欲三敎以爲二法嗣一。順菴不レ從。年十三作二太平賦一。詞旨淳正。世以爲二國瑞一。大納言烏丸公。上二之後光明帝一。帝覽而大稱賞將二錄用一。會宮車晏駕不レ果。既而入二松永昌三門一。勸學勵行日進月修。昌三期以二大器一。一時名士如二貝原益軒。安東省菴。宇都宮遯菴一。咸推遜弗二敢並一。

私諡す。平安の人。

順菴幼より彊記(一)、善く書を讀み字を寫す。海大師(二)見て之を撫して曰く、此兒異質(三)有りと。卽ち敎へて以て法嗣と爲さんと欲す。順菴從はず。年十三にして太平賦を作る。詞旨淳正、世以て國瑞(四)と爲す。大納言烏丸公、之を後光明帝に上る。帝、覽て大に稱賞し將に錄用(五)せんとす。會〻宮車晏駕(六)果さず。既にして松永昌三の門に入り、勸學勵行日に進み月に修る。昌三期する(七)に大器を以てし、一時の名士貝原益軒・安東省菴・宇都宮遯菴の如き、咸推し避けて敢へて並ばず。

(一) 記憶力强し (二) 天海大僧正 (三) 他にすぐれたる性質 (四) 國家のめでたききざし (五) 朝廷に召しかゝへる (六) 天皇崩御 (七) 大人物たるを豫期す

雖二紺眼獰爪一。殆有二逡巡畏伏不レ得レ仰之狀一矣。觀下小二管仲一。見二南子一。欲レ往二公山弗擾一等上。乃可レ見也。孟夫子所二應對教誨一。則咸是戰國士大夫。其語自雄壯。所二以不一レ能レ無二圭角一也。宜乍見以爲二師子一。其實不レ及二宜聖之剛大一一層。顧松軒鏡レ陽而不レ解レ陰。蓋所謂眼光不レ透二紙背一者。宿學如レ渠尚且不レ免。汝輩宜三益研二經義一。

山崎泉者。著二大學辨斷一。駁二伊藤仁齋一。淺見絅齋批レ之。題二批大學辨斷一。印二行于世一。泉者會津人。受二學于松軒一。有二經術一。自序二其所レ著曰。是予所下以竊取二師說一而辨斷上也。所謂師說乃指二松軒一也。

山崎泉といふ者、大學辨斷を著して、伊藤仁齋を駁す。（一）淺見絅齋之を批し、批大學辨斷と題して、世に印行す。泉といふ者は會津の人、學を松軒に受け、（二）經術有り。自ら其著す所に序して曰く、是れ予が竊かに師說を取つて辨斷する所以なりと。所謂師說とは乃ち松軒を指すなり。

（一）名は安正、近江の人、闇齋の門に入り、また之を去る　（二）經學の素養あり

木下貞幹。字直夫。小字平之允。號二錦里一。

木下貞幹

木下貞幹、字は直夫、小字は平之允、錦里と號し、又順菴と號し、恭靖と

但所ㇾ可ㇾ憾者。說ㇾ鱗爲二師子一。失二聖人溫良之意一。此無ㇾ佗。實壯年豪銳之氣使ㇾ然也。天假二數年一。熟讀玩索。則必有二自得一焉。勉旃。余嘆異久之。以爲能形二容至聖大賢之判一。數年之後。曉然覺下論語似二師子一。孟子類中麟。宜聖辭氣溫厚如二肉角不上ㇾ觸。而氣象乃至大至剛不ㇾ可ㇾ當。

かんと欲する等を觀て、乃ち見るべきなり。孟夫子の應對敎誨する所、則ち咸是れ戰國の士大夫なり、其語自ら雄壯にして、圭角(一四)無き能はざる所以なり。宜なり、乍ち見て以て師子と爲すを。其實宣聖の剛大に及ばざる一層なり。顧(一五)ふに松軒陽を窺つて陰を解せず。蓋し所謂眼光(一六)紙背に透らざる者、宿學渠が如くにして尙ほ且つ免れず。汝輩宜しく益々經義を硏くべしと。

(一) 名は邦美、山崎闇齋の學を奉び、又新井白石、室鳩巢、三宅觀瀾等と往來す (二) 江戶 (三) すぐれたる人物 (四) 獅子 (五) 孔子の溫厚なる處をなくす (六) よく讀みて意味を考ふ (七) 聖人と賢人との區別を說明す (八) 孔夫子の言葉つき溫厚にして、恰も麟の角が肉あるため人に觸れざるが如くなれども、其氣象大にして且つ剛く當るべからず (九) 赭色の眼、暴惡の爪、獅子を指す (一〇) しりごみして畏れ伏す (一一) 論語八佾篇に、「子曰く、管仲の器小なる哉」 (一二) 論語雍也篇に「子、南子を見る。子路說ばず。夫子之に矢(ちか)ひて曰く、予に否なる所あらば、天之を厭(す)てん天之を厭てん。」とあるをいふ。南子は衞の夫人にして妖婦の稱あり (一三) 論語陽貨篇に、「公山弗擾、費を以て畔(そむ)く。召く。子往かんとす。子路說ばずして、云々。子曰く、夫 我を召く者にして、豈に徒ならんや。如し我を用ふる者あらば、吾れ其 東周を爲さんか」とあるを指す (一四) 言葉のかど (一五) ちよいと見て獅子とするは尤もなり (一六) 意義の深處まで徹せず

梁田蛻巖謁二松軒一講二論語一事。見二蛻巖行狀一。今錄レ之曰。元祿中江都有二失明儒人後藤松軒一。年七十餘。以二經明識宏一。爲二東諸侯一所二敬禮一。亦傑魁士也。余年廿八。偶見レ之。需三余講二論語君子不レ重則不レ威章一。講畢。松軒曰。論語猶二麒麟一。孟子猶二師子一。今也吾子所レ說佳則佳矣。

(一)梁田蛻巖、松軒に謁し、論語を講ぜしこと、蛻巖行狀に見ゆ。今之を錄せんに曰く、元祿中江都(二)に失明の儒人後藤松軒有り。年七十餘。經に明かに識宏きを以て、東諸侯に敬禮せらる。亦傑魁(三)の士なり。余年廿八、偶ゝ之を見、余に論語の君子重からざれば則ち威あらずの章を講ぜんことを需む。講畢り、松軒曰く、論語は猶ほ麒麟のごとく、孟子は猶ほ師子(四)のごとし。今吾子の說く所佳は則ち佳なり、但憾むべき所は、麟を說いて師子となし、聖人(五)溫良の意を失ふ。此れ佗無し。實に壯年豪銳の氣然らしむるなり。天數年を假し、熟讀(六)玩索せば、則ち必ず自得するあらん、旃を勉めよと。余嘆異久しうして、以爲へらく、能く至聖大賢(七)の判を形容すと。數年の後、曉然として論語は師子に似、孟子は麟に類するを覺る。(八)宣聖、辭氣溫厚、肉角觸れざるが如くにして、而も氣象乃ち至大至剛當るべからず。(九)紺眼獰爪と雖も、殆ど逡巡(一〇)畏伏仰ぎ得ざるの狀有り。(一一)管仲を小とし、(一二)南子を見、(一三)公山弗擾に往

名欽。三宅尚齋門人。曰。所謂二一老者一。疑謂二松軒一也。傳亦松軒使二芝山作一レ之。見二先達遺事一。然芝山又作二大町定靜傳一曰。余在レ洛。每レ見二此老一。忝レ被二誨喩一。此人也。曲識二南學之由一。余向二三省兼山之景行一。躡二長澤山崎之遺蹤一。咸綠二此老之說一也。係二此言一則闇齋傳。乃得二於定靜一而紀レ之。初非下待二松軒之言一者上也。所謂一老者。亦謂二定靜一乎。

(一)會得せしや否や　(二)世の儒者にならひ坊主頭なりし故なり　(三)傲慢　(四)名は季明、土佐の人、谷一齋門　(五)闇齋　(六)谷時中を祖とする程朱學派　(七)小倉三省と野中兼山　(八)大道　(九)長澤少貳と山崎闇齋　(一〇)あとかた

嘗與二大高坂芝山。佐藤直方一。會二一柳侯所一。時松軒講二中庸鳶飛魚躍章一。以二朱註一爲レ差。芝山固守レ註。於レ是忽作レ色與二松軒一呶呶相論。直方不レ容二一言一。更講二此章一。亦從二朱註一。

嘗て大高坂芝山(一)佐藤直方と、一柳侯の所に會す。時に松軒、中庸の鳶飛び魚躍るの章を講じ、(二)朱註を以て差へりと爲す。芝山固く註を守る。是に於て(三)忽ち色を作し、松軒と呶呶相論ず。直方一言を容れず。更に此章を講じて亦朱註に從ふ。

(一)備後の人、初め闇齋の門に在り　(二)朱子の註解を誤れりとす　(三)忽ち顏色を變じてやかましく議論す

一日詣二闇齋一聞二其講一。闇齋視二松軒一甚卑。講畢呼曰。坊主有レ所レ會乎否。蓋以下松軒傚二時儒一薙髮上也。松軒惡二其倨傲一。不三再見二闇齋一。且終身手不レ取二闇齋著書一云。大高坂芝山作二闇齋傳一。見二芝山會稿一其末錄下芝山與二一老者一論中闇齋爲レ人。多寓下貶二闇齋一之意上。唐崎彦明

一日闇齋に詣り其講を聞く。闇齋、松軒を視ること甚だ卑し。講畢り呼んで曰く、坊主會(一)する所ありや否やと。蓋し松軒が時儒(二)に倣ひ薙髮せるを以てなり。松軒其倨傲(三)を惡み、再び闇齋を見ず。且つ終身手に闇齋の著書を取らずと云ふ。大高坂芝山(四)、闇齋の傳を作り、（芝山會稿に見ゆ）其末に、芝山と一老者と闇齋の人となりを論ずるを錄し、多く闇齋を貶するの意を寓す。唐崎彦明（名は欽、三宅尙齋の門人）曰く、所謂一老者とは、疑ふらくは松軒を謂ふなり。傳も亦、松軒、芝山をして之を作らしむと。先達遺事に見ゆ。然れども芝山又大町定靜の傳を作りて曰く、余、洛に在り、此老(五)を見る每に、誨喩を被るを忝うす。此人や、曲(六)に南學の由を識る。余三省(七)・兼山(八)の景行に向ひ、長(九)澤・山崎(一〇)の遺蹤を踐むこと、咸此老の說に緣るなりと。此言に繇れば則ち闇齋の傳は、乃ち定靜に得て之を紀す。初より松軒の言を待つ者に非ざるなり。所謂一老者とは、亦定靜を謂ふか。

後藤松軒

後藤松軒 字名 鄕貫未レ審。闕竢二後聞一

松軒初年以レ客依二肥後侯一。寛永中耶蘇賊起。侯奉レ命稱レ兵伐レ之。松軒從レ之。當レ陣臨レ場奮戰有レ功。而爲二銃丸一所レ中喪二兩明一。松軒素嗜レ學。從レ是後愈專銳レ志。日使二人讀一レ經以聽レ之。遂有レ所二自得一。一時以二眞儒一振。列侯致レ禮請レ講者甚多。小室侯尤信二其說一。每招二見之一。厚賜二眷遇一。小室侯。卽今巖村侯之先云。

後藤松軒（名字郷貫未だ審ならず。闕いて後聞を竢つ。）

松軒初年客を以て肥後侯に依る。寛永中耶蘇の賊起る。侯命を奉じ兵を稱げて之を伐つ。松軒之に從ひ、陣に當り場に臨み奮戰功有り。銃丸の爲に中てられ兩明(一)を喪ふ。松軒素學を嗜む。是より後愈〻專ら志を銳くし、日に人に經を讀ましめ以て之を聽く。遂に自得(二)する所あり。一時眞儒(三)を以て振ふ。列侯禮を致し講を請ふ者甚だ多し。小室侯尤も其說を信じ、每に之を招見し、厚く(四)眷遇を賜ふ。小室侯は、即ち今の巖村侯の先なりと云ふ。

(一) 兩眼盲となる　(二) 自ら發明す　(三) 眞の儒者として名聲世に振ふ　(四) 手厚くもてなす

又一説曰。新古今集載源重之倭歌曰。貲孤跋鴟偨。倩鴟偨矢傑鴟偨。矢傑結列獨。屋木朌益兒嗈倩。璽倩刺璽栗結栗。王陽明立志之説符二此歌意一。矢傑鴟偨蕃山也。故以爲レ號。

又一説に曰く、新古今集に載せたる源重之の倭歌に曰く、筑波山、(一)端山蕃山、しげけれど、思ひいるには、障らざりけりと。(二)王陽明が立志の說此歌意に符す。しげ山は蕃山なり。故に以て號と爲すと。

(一)麓の山、木の茂る山　(二)王陽明の志を立つるの說が此の歌の意味に符合す

蕃山以レ疾沒二于古河一。元祿辛未八月十七日也。距二其生元和己未一。春秋七十三。葬二古河大堤邑鮭延寺一。人之展二其墓一者。今尚不レ絶云。

蕃山疾を以て古河に沒す。元祿辛未(一)八月十七日なり。其生れたる元和己未(二)を距ること、春秋七十三。古河大堤邑鮭延寺に葬る。人の其墓を展する者(三)、今尚ほ絶えずと云ふ。

(一)四年　(二)五年　(三)參詣するもの

鐵一爲レ不レ是。蓋本二于漢貢禹一矣。大氏熊澤子說似二迂闊一。雖レ然以二年後多一驗視レ之。實非二世儒所一及也。其幽囚數十年面無二憂色一。有三人問二當世事一。默然不レ答。即索レ笙而吹レ之。

蕃山履歷。門人巨勢直幹紀二實錄一。外裔草加定環述二行狀一。岡山菱川大觀作レ傳。而皆言名伯繼。不レ載レ字。所謂了介其字歟。又皆言改二食地和氣郡寺口邑一名二蕃山一。蓋取二義於倭歌端山蕃山什一。其致仕寓レ京時。以二蕃山一爲レ姓。乃男右七承二姓蕃山一。縁二此言一蕃山不二必其別號一。蓋人號二稱之一也。或曰。其處二古河一。近二筑波山一。故自號二蕃山一。

蕃山の履歴・門人巨勢直幹實錄を紀し、外裔(一)草加定環行狀を述べ、岡山の菱川大觀傳を作る。而して皆言ふ名は伯繼と。字を載せず。所謂了介は其字か。又皆言ふ食地(二)和氣郡寺口邑を改めて蕃山と名づくと。蓋し義を倭歌の端山(三)蕃山の什に取る。其致仕して京に寓せし時、蕃山を以て姓と爲し、乃ち男右七姓蕃山を承くと。此言に縁れば蕃山は必ずしも其別號ならず、蓋し人之を號稱するなり。或は曰く、其の古河に處るや、筑波山に近し。故に自ら蕃山と號すと。

(一) 母系の子孫　(二) 領所　(三) 新古今集の歌、次章に出づ

樹一者不レ少。西川某者。著二集義和書一。顯非二二卷一。辨三其盤二藤樹一。

(一) 其見解異なり

物徂徠與二藪震菴一書云。承レ問熊澤集書。不レ佞未レ見二其書一。嘗聞其人太聰明。蓋百年來儒者巨擘。人才則熊澤。學問則仁齋。餘子碌碌未レ足レ數也。湯淺常山丞稱二蕃山一曰。其經濟出レ自二老子一。以三鑿レ地取二銅

物徂徠(一)の藪震菴に與ふる書に云ふ、問を承けたる熊澤集書、(二)不佞(三)未だ其書を見ず。嘗て聞く、其人太だ聰明、蓋し百年來儒者の巨擘(四)たり。人才は則ち熊澤、學問は則ち仁齋、(五)餘子は碌碌未だ數ふるに足らざるなりと。(六)湯淺常山丞、蕃山を稱して曰く、其經濟は老子より出づ。地を鑿ち銅鐵を取るを以て是ならずと爲すは、蓋し漢の貢禹に本づく。大氏熊澤子の說迂闊(七)に似たり。然りと雖も年(八)後驗多きを以て之を視れば、實に世儒の及ぶ所に非ざるなり。其幽囚數十年にして面に憂色無く、人の當世の事を問ふ有れば、默然として答へず。即ち筌を索めて之を吹くと。

(一) 名は弘篤、熊本の人、徂徠門　(二) 集義和書　(三) 自分　(四) かしら　(五) 他の人々　(六) 名は元禎、備前の人、服部南郭門　(七) 迂遠の如し　(八) 後になりて效果あらはる

女。熊澤氏出也。琵琶乃傳レ自二其妣一云。吁先生昔在二備前州一。倡二新建學一。有二經濟志一。凜凜高風可レ欽也。則手澤所レ存。誰不二敬慕一。況主母賜乎。按蔣揆長安客話載。渾不似如二琵琶一。小槽圓腹如二半瓶榼一。相傳昭君琵琶制。使二胡人重造一。而其形小。昭君笑曰。渾不レ似。遂以名。元史以爲二火不思一。今以爲二胡撥思一。皆相傳之訛。因憶先生洽聞。其命レ名必非下取二諸和歌一而已上。濱庇古訓二義。一曰沙嘴崩壞。或曰舟篷簷。拾遺作二濱楸一。予謂此得レ非三兼二取於沙嘴崩壞渾不レ似レ昔之義一乎。其與二若壺名二飛鳥川一同意矣。九京如可レ起。則先生當三微笑稱二善哉一。

に微笑して善哉と稱すべしと。

（一）樂人 （二）老長を尊んで丈といふ （三）手にとつて見る （四）漆の色褪む （五）大夫の妻の稱、蓋し夫人と同義に用ひたるならん （六）亡妣 （七）王陽明が新建國侯に封ぜられしより其名をとる （八）經世濟民の志 （九）潔き高尙の人格たふとむべし （一〇）手あかが附き居るもの、親しく用ひたるもの （一一）小さき胴にて腹圓く、瓶の蓋の半分のや ノ （一二）漢武帝の宮嬪、胡に嫁ぐ （一三）傳へ聞きの誤り （一四）はまひさしの古きよみ方に二つの意味あり （一五）砂洲がくづれる （一六）舟のとま （一七）茶壺 （一八）墓より生起さすべくば

蕃山之學出二於藤樹一。然執見不レ同。其集義和書。議二藤

蕃山の學は藤樹より出づ。然れども執見同じかず。其集義和書には、藤樹を議する者少なからず。西川某といふ者、集義和書顯非二卷を著し、其の藤樹に盭れるを辨ず。

興。奥田嘉甫三角集。記二渾不似一云。丁卯春遊レ伊。留二好問君第一。殆一月矣。其老川口丈好古之士也。出二一琵琶一告曰。此了海熊澤子物也。名曰二濱庇一。余接而見レ之。則漆光退蝕古雅可レ愛。蓋宋元間物矣。叩二其所以一。則曰。主母妙閣孺人出納氏賜焉。孺人大藏大輔職直

古雅愛す可し。蓋し宋・元間の物なり。其所以を叩けば、則ち曰く、主母妙閣（五）孺人出納氏の賜なり。孺人は大藏大輔職直の女にして、熊澤氏の出なり。琵琶は乃ち其妣（六）より傳ふと云ふと。吁先生昔備前州にありて、新建（七）の學を倡へ、（八）經濟の志あり。凜凜（九）たる高風欽す可きなり。則ち手澤（一〇）の存する所、誰か敬慕せざらん。況や主母の賜をや。按ずるに蔣揆の長安客話に載すらく、渾不似は琵琶の如し。（一一）小槽圓腹、半瓶榼の如し。相傳ふ、昭君琵琶の制、胡人をして重造せしむ。而るに其形小なり。（一二）昭君笑つて曰く、渾て似ずと。遂に以て名づくと。元史以て火不思と爲し、今以て胡撥思と爲す。皆相傳の訛なり。（一三）因つて憶ふ、先生洽聞、其の名を命ずる、必ずしも諸を和歌に取るのみに非ず。（一四）濱庇、古訓二義あり。一に曰く沙嘴崩壞、（一五）或は曰く舟篷簷と。（一六）拾遺には濱楸に作る。予謂ふに此れ沙嘴崩壞渾て昔に似ざるの義を兼取るに非ざるを得んや。其の茗壺（一七）に飛鳥川と名づくると同意なり。（一八）九京如し起す可くんば、則ち先生當

蕃山與二釋元政一友善。梵語難レ通者。必就二元政一解レ之。是以元政坐不三縱破二佛敎一。但毎歎曰。今世僧多無レ行。設使二釋迦見一。則其謂二之何一。吾儒之道亦然。使二孔子見二今所謂儒者一。豈有レ不二慨嘆一。

蕃山、釋元政(一)と友とし善し。梵語の通じ難き者は、必ず元政に就いて之を解す。是を以て元政の坐、縱(二)に佛教を破らず。但毎に歎じて曰く、今世の僧多く行なし。設し釋迦をして見しめば、則ち其れ之を何とか謂はん。吾が儒の道も亦然り。孔子をして今の所謂儒者を見しめたらんには、豈に慨嘆せざる有らんや、と。

(一) 元井伊直孝の臣、出家して深草に居る　(二) むやみに佛敎をそしらず

蕃山好レ樂。時時與二小倉少將一拉二伶人三四人一。至二元政稱心菴一。蕃山鼓二琵琶一。少將彈レ琴。元政咏二倭歌一。各以遣レ

蕃山樂を好む。時時小倉少將(一)と伶人三四人を拉して、元政の稱心菴に至る。蕃山は琵琶を鼓し、少將は琴を彈じ、元政は倭歌を咏じ、各以て興を遣る。奥田嘉甫の三角集、渾不似に記して云ふ、丁卯春伊に遊び、好問君の第に留ること、殆ど一月。其老川口丈(二)は好古の士なり。一琵琶を出し告げて曰く、此は了海熊澤子の物なり。名づけて濱庇といふと。余接(三)して之を見る。則ち漆光退蝕(四)

禮遇甚厚。後侯移二封古河一。藩山從移レ之。未レ幾遂以レ言獲二罪大府一。乃被レ幽二于古河一。

年少時體貌充肥。自以爲武夫之職。一旦緩急被レ甲持レ兵。馳驅奔走無レ所レ不レ爲。而豐肥如レ斯甚艱レ之。雖レ由二稟受一。亦或安佚所レ致。從レ是攻レ苦食レ淡。日夜武事是講。或出二曠野一放二鳥銃一。或行二山村一投二民家一。其當二宿直一也。藏二木兵于裯笥一。僚友就レ寢後。獨竊出二空庭一演二槍劍法一。或深夜登レ屋習レ禦レ火。如レ是者十餘年。身軀稍瘦削。

(一)年少の時體貌充肥す。自ら以爲へらく(二)武夫の職、一旦緩急あらば甲を被り兵を持し、馳驅奔走爲さざる所無し。而るに(三)豐肥斯の如く甚だ之に艱む。(四)稟受に由ると雖も、亦或は(五)安佚の致す所と。是より(六)苦を攻め淡を食し、日夜武事是れ講ず。或は曠野に出でて鳥銃を放ち、或は山村に行きて民家に投ず。其宿直に當るや、(七)木兵を(八)裯笥に藏め、僚友寢に就くの後、獨り竊に空庭に出でて槍劍の法を演ず。或は深夜屋に登りて(九)火を禦ぐを習ふ。是の如きこと十餘年、身軀稍々(一〇)瘦削す。

(一)若き時身體肥えふとる　(二)武士のつとめ　(三)肥えふとる　(四)うまれつき　(五)のらくらして居るため　(六)苦しきことをなし淡泊な食をとる　(七)木刀　(八)夜具を入れる器　(九)消防の稽古す　(一〇)痩せほそる

及二西歸一。往別二板倉侯一。侯曰。子仕二明君一。言聽計從。吾徐籌レ之。子欲レ善二其終一。則早致仕屏二處田里一。從レ今後勿二復東來一。勿三復言二世事一。此功成身退之義也。蕃山拜謝去。然眷遇之渥。不レ得三俄乞二骸骨一。且奉レ命又復來二江戸一。是時既與二共レ事者一有レ隙。蕃山不二自安一。乃辭二岡山一到二京師一。而貴紳候レ之。門常爲レ市。於レ是去棲二遲明石一。明石侯本師二尊蕃山一。

徐ろに之を籌るに、子其終(三)を善せんと欲せば、則ち早く致仕して田里に屛處(四)し、今より後復東來するなかれ。復世事(五)を言ふなかれ。此れ功成りて身退くの義なりと。蕃山拜謝して去る。然れども眷遇(六)の渥き、俄に骸骨(七)を乞ふを得ず。且つ命を奉じて又復江戸に來る。是時既に事(八)を共にする者と隙有り。蕃山自ら安んぜず。乃ち岡山を辭して京師に到る。而るに貴紳之を候し、門常に市を爲す。是に於て去つて明石に棲遲(九)す。明石侯本蕃山を師尊し、禮遇甚だ厚し。後侯古河(一〇)に移封せらる。蕃山從つて之に移る。未だ幾ならずして遂に言を以て罪(一一)を大府に獲、乃ち古河に幽せらる。

(一) 諸侯が朝して職務上の成行などを述ぶること、此は參覲交代を指す　(二) つきしたがふ　(三) 平和に晩年を送る　(四) とぢこもり居る　(五) 世上の事務を論ずる勿れ　(六) 主君のもてなし　(七) 身は君に奉りしものなれば骨のみ乞ふて辭職すの義　(八) 同役の執政となか惡し　(九) 閑居、かくれすむ　(一〇) 下總に在り　(一一) 幕府

張目注視良久。遂不交一言。見侯曰。余今見一士。不知仕臣乎。將處士邪。侯曰。渠爲吾講兵書。處士由井民部助者也。（名正雪）蕃山正色曰。余熟視其貌。以察其意。君勿復近如彼士。他日正雪亦來見侯曰。前日比退朝。見某衣某形人。未知其爲誰。侯曰。渠說吾以經書。岡山臣熊澤次郎八者也。正雪正色曰。余熟視其貌。以察其意。君勿復近如彼士。

士由井民部助といふ者なり。（名は正雪）蕃山色を正して曰く、余其貌を熟視し、以て其意(三)を察す、君復彼の如き士を近づくるなかれと。他日正雪亦來り侯に見えて曰く、前日退朝(四)する比、某衣某形の人を見る。未だ其誰なるかを知らずと。侯曰く、渠吾に說くに經書を以てす。岡山の臣熊澤次郎八といふ者なりと。正雪色を正して曰く、余其貌を熟視し、以て其意を察す、君復彼の如き士を近づくるなかれと。

(一) 威光態度すぐれ秀で骨柄普通ならず　(二) 主人持ちか浪人か　(三) 胸中を見ぬきたり、胸に一物ありて仲々油斷のならぬ人物なりとの意を含めていふ也　(四) 御前より退出する時

嘗扈君之述職。來江戸。時諸侯爭延之。

嘗て君の述職(一)に扈(二)して江戸に來る。時に諸侯爭つて之を延く。西に歸るに及び、往いて板倉侯に別る。侯曰く、子、明君に仕へて、言聽かれ計從はる。吾れ

十八年

所謂所レ守者何事也。曰。賤役餬レ口。豈不レ思レ利乎。而有二中江與右衛門者一。敎二授里中一。嘗聞二其言一。曰。誠正以修二其身一。事レ君致レ忠。事レ親盡レ孝。毋二以レ貧濫一。毋二以レ賤枉一。今若以レ所レ賜利レ之。則欺二此心一也。言畢去。噫澆世安得レ有二此人一乎。蕃山傾聞者良久曰。馬夫一鄕鄙人耳。素不レ識三道之爲二何物一。則趨レ利若レ鶩。何義之思。而其廉潔不レ愧二古之君子一者。必敎育所レ致也。所謂中江氏者。其德與レ學可二想見一也。方二今之世一。捨二此人一而誰適從。是日即束裝往謁。請レ受二業於門一。藤樹辭以レ不レ足レ爲二人師一。蕃山益請不レ罷。二夜寢二其廡下一。藤樹母見レ之。謂二藤樹一曰。人自二遠方一來。懇請如レ此。傳二之其所レ習。誰謂三好爲二人師一。於レ是始接容。時寬永辛巳。蕃山年二十三。

蕃山壁間每懸二義經畫像一。未嘗懸二佗書畫一。

蕃山壁間每に義經の畫像を懸け、未だ嘗て佗の書畫を懸けず。

嘗至二某侯一。及レ入見二一士人威儀特秀骨體非常一。相與

嘗て某侯に至る。入るに及び一士人の威儀特秀、骨體非常なるを見る。相與に目を張り注視する良久しうし、遂に一言を交へず。侯に見えて曰く、余今一士を見る。知らず仕臣か、將た處士かと。侯曰く、渠吾が爲に兵書を講ず。處

足矣。吾曰。孳自作。微二汝發義心一。吾無レ得生之地一。所謂生レ死而肉レ骨也。不レ腆黄物非二敢云一レ報。聊以表二寸心一。馬夫愈辭。乃減二八兩一。亦不レ受。稍稍減纔至二方金二一。馬夫執益確。曰。君毋レ溷レ我。予有レ所レ守也。吾欲問曰。淡二於欲一者。今之世不二多見一。至二其以レ義爲レ利如レ汝。則絶不レ可レ得。

るに其廉潔古の君子に愧ぢざるは、必ず教育の致す所なり。所謂中江氏、其徳と學と想見す可きなり。今の世に方り、此人を捨てて誰にか適從（二四）せんと。是の日卽ち束裝（二五）往いて謁し、業を門に受けんことを請ふ。藤樹辭するに人の師たるに足らざるを以てす。蕃山益〻請うて置かず。二夜其廡下（二六）に寢ぬ。藤樹の母之を見、藤樹に謂つて曰く、人遠方より來り、懇請此の如し。之に其の習ふ所を傳ふとも、誰か好んで人の師と爲ると謂はんと。是に於て始めて接容（二七）す。時に寛永辛巳（二八）、蕃山年二十三。

（一）書笈を負ふ、遠く游學するなり　（二）宿場馬に乘り財布を鞍に結びつく　（三）疲れて寢る　（四）心を痛ましなやます　（五）縊死の覺悟す　（六）あはれみを蒙らず　（七）悲しみ　（八）戸をたゝきて音なふ音　（九）お返しする　（一〇）別の胴卷　（一一）此の失策は自分からしてかす　（一二）汝が遺金を私せざる義心をおこさざりしならば吾生存の道無し　（一三）死者を再び蘇生させる　（一四）腆は善、僅少の黄金　（一五）わが志をあらはす　（一六）段々　（一七）一分金二つ　（一八）わが精神を汚濁すること勿れ、吾採取あり　（一九）義を以て利と見なす　（二〇）卑しき仕事をして細く暮す　（二一）與へらるゝ所の金を受けて利をはからば誠正の心を欺く　（二二）德義地を拂へる末の世　（二三）利益の方に走りおもむくこと暴れ馬の如し　（二四）就き從ふ　（二五）身支度す　（二六）ひさしの下　（二七）面會す　（二八）

天所二弔恤一。逢二此悲涼一。時聞二剝啄聲甚急一。問レ之則稱二馬夫某一。因亟出。渠卽出レ金曰。小子歸レ家將レ洗レ馬。及レ解レ鞍得レ之。是君之所レ遺。故來還呈。封完如レ故。吾驚喜不レ知レ所レ措。腰纏別有二十六兩一。卽解以謝レ之。馬夫不レ受曰。君之物付レ君。奚謝之有。然爲レ冒レ夜來。此願賃得二二百錢一

れ生を得るの地無し。所謂(一三)死を生して骨に肉するなり。不腆(一四)の黃物敢へて報ゆと云ふにあらず。聊か以て(一五)寸心を表すと。馬夫愈〻辭す。乃ち八兩を減ず。亦受けず。稍稍(一六)に減じ纔に方金(一七)二に至る。馬夫執つて益〻確し。曰く、君、我(一八)を溷すこと毋かれ。予守る所有りと。吾れ歎じて問うて曰く、欲に淡き者、今の世に多く見ず。其の義(一九)を以て利と爲すこと汝の如きに至つては、則ち絕えて得べからず。所謂守る所とは何事ぞやと。曰く、賤役(二〇)口を餬す。豈に利を思はざらんや。而も中江與右衞門といふ者有り。里中に敎授す。嘗て其言を聞く。曰く、誠正以て其身を修め、君に事ふるに忠を致し、親に事ふるに孝を盡し、貧を以て濫ること毋かれ、賤を以て枉ぐること毋かれと。今若し賜ふ(二一)所を以て之を利せば、則ち此心を欺くなりと。言畢つて去る。噫澆世(二二)安ぞ此人有るを得んやと。蕃山傾け聞くこと良久しうして曰く、馬夫は一鄕の鄙人のみ。素道の何物たるかを識らず。則ち利(二三)に趨ること鶩の若し。何ぞ義を思はん。而

上京。求二良師一未レ得二其人一。共投宿者一人語曰。往日余爲レ主遠行。時懷二金二百兩一。卽主之所レ使レ齎也。途跨二驛馬一出レ金繫レ鞍。日暮忘レ收レ之而宿。困頓就レ枕。半夜始覺。乃覺レ遺レ金則茫然猶疑爲二夢寐一。旣而神乃定。痛心疾首。千思萬慮。求レ之無レ術。一決二死雉經一。戚然自嘆。不レ爲三

人語つて曰く、往日、余、主の爲に遠く行す。時に金二百兩を懷にす。卽ち主の齎さしむる所なり。途驛馬(二)に跨り金を出し鞍に繫く。日暮之を收むるを忘れて宿し、困頓(三)枕に就く。半夜始めて覺め、乃ち金を遺れたるを覺る。則ち茫然として猶ほ疑ひて夢寐と爲す。旣にして神乃ち定まり、痛心疾首(四)、千思萬慮、之を求むるに術なく、一に死を雉經(五)に決す。戚然として自ら嘆ず、天の弔(六)恤する所とならず、此悲涼(七)に逢ふを。時に剝啄(八)の聲甚だ急なるを聞く。之を問へば則ち馬夫某と稱す。因て亟かに出づれば、渠卽ち金を出して曰く、小子家に歸つて將に馬を洗はんとし、鞍を解くに及んで之を得たり。是れ君の遺るゝ所、故に來つて還呈(九)すと。封の完きこと故の如し。吾れ驚喜措く所を知らず。腰纏(一〇)別に十六兩あり。卽ち解いて以て之を謝す。馬夫受けずして曰く、君の物をば君に付す。奚ぞ謝するとあらん。然れども爲に夜を冒して來る。此顧賃二百錢を得ば足れりと。吾曰く、孽(一一)自ら作す。汝が發義(一二)の心微りせば、吾

任愈厚。亡レ何當二要路一。於レ是布レ德流レ惠賑レ貧救レ困。罷二勾査一禁二賭博一。毀二淫祠一表二節義一。其明二聖教一以闢二異端一。嚴二武備一以戒二不虞一。諸新政海内驚二耳目一。太宰春臺復二湯淺常山一書曰。夫烈公者。不世出之英主。得二熊澤子一而任以二國政一。明良之遇。實千載之一時也。日本詩史載。熊澤了介爲二政其國一。擧レ世所レ知。余嘗閲二松原一清出思稿一。其牛牕泊舟詩。有下漁家兒女亦知レ字。笑將二孝經一敎二老翁一句上。一時敎化可レ想。至レ今泮宮之設。尙有二典刑一云。

るに國政を以てす。明良の遇(一一)、實に千載の一時(一二)なりと。日本詩史に載すらく、熊澤了介が政を其國に爲すは、世を擧げて知る所なり。余嘗て松原一清の出思稿を閲するに、其牛牕泊舟(一三)の詩に、漁家の兒女亦字を知る、笑つて孝經を將つて老翁に敎ふの句有り。一時の敎化想ふ可し。今に至つて泮宮(一四)の設、尙ほ典刑ありと云ふと。

(一)母系の祖父 (二)二十歳 (三)愛し勵ます (四)いか程もたゝぬうち藩の要職につく (五)德政をしき恩惠を施す (六)苛辣なる檢擧を廢す (七)みだりなる祠を取りこはす (八)聖人の敎を明かにして邪道を正す (九)不虞の變事 (一〇)池田光政の私諡 (一一)明君と良臣との出あひ (一二)千年に一度 (一三)備前國邑久郡牛窓港 (一四)諸侯の學校、岡山藩校に閑谷黌ありて今に存す

蕃山初負レ笈

蕃山初め笈(一)を負うて上京し、良師を求めて未だ其人を得ず。共に投宿する者一

熊澤伯繼。字了介。介或作海。小字次郎八。後更助右衛門。號蕃山。又號息遊軒。平安人。仕備前侯。蕃山姓本野尻。出爲外祖熊澤氏後。因承其姓。天性深智儁才卓越古今。年甫十六。仕岡山烈公。比弱冠。公驟加奬眷。將大用。而辭以未學。乃乞游學。越七年。公召還之。信

熊澤伯繼、字は了介(介或は海に作る)、小字は次郎八、後助右衛門と更む。蕃山と號し、又息遊軒と號す。平安の人。(一)備前侯に仕ふ。

● 池田光政

蕃山は姓本野尻、出でて(一)外祖熊澤氏の後と爲る。因て其姓を承く。天性深智、儁才古今に卓越す。年甫めて十六にして、岡山の烈公に仕ふ。(二)弱冠の比、公驟々(三)奬眷を加へ、將に大に用ひんとす。而るに辭するに未だ學ばざるを以てし、乃ち乞うて游學す。越えて七年、公召して之を還す。信任愈々厚く、(四)何くも亡く要路に當る。是に於て(五)徳を布き惠を流し、貧を賑し困を救ひ、(六)勾查を罷め賭博を禁じ、(七)淫祠を毀ち節義を表す。其の(八)聖教を明かにして以て異端を闢き、武備を嚴にして以て(九)不虞を戒むる、諸々の新政、海内耳目を驚かす。太宰春臺が湯淺常山に復ふる書に曰く、夫れ(一〇)烈公は、不世出の英主なり。熊澤子を得て任ず

行云。去二金澤一可二十里一所。山足有下離レ巖爲二地藏菩薩像一者上。記二武相州界一也。呼曰二界地藏一。像缺レ鼻。故亦曰二劓地藏一。曩時有二山闇齋先生者一。嘗作二愛宕詩一。中有下劓二天狗一

を制し君王に奉ぜんはと。

(一) 推敲してかざる (二) 日月うつりかはる四季の中 (三) 鶯の雅名 (四) 調子の整へるもの (五) 皐は丘、京都の北郊愛宕山 (六) 同遊のなかま (七) 〃難を除き祥福を受くるために祈る (八) 神に賴んで敵に勝たんとす (九) 杉や檜を取拂つて天狗の高き鼻を切り去る (一〇) 鳶は鬼神之に遇へば恐るといふ靈體、鳶の天に飛ぶを見て山神の使はしめと見做し、詩の利益あらたかなるを見ずやと戯るゝ也 (一一) 名は純、荻生徂徠の弟子 (一二) 以前 (一三) 駿河宇都谷峠の茶屋にて團子を十づゝ串にさして賣る (一四) 周茂叔の大極圖說に圈を十にせるより、團子の十なるに比喩す (一五) 珍らしき趣向の言葉づかひは他人の眞似がたき所也 (一六) 富士山の八面を諸葛孔明が工夫せし八陣の陣法になずらふ (一七) 日本第一 (一八) 雲の山頂の巖の傍にあつまれるが、變じて龍虎の形となり、蛇のわだかまれるが如く、鳥の飛びかける如くなる (一九) 風の神 (二〇) 諸葛孔明が八陣をつくりて蜀漢の君王に奉じたる如くなすものは誰ならんかとなり

熊澤伯繼

鼻二地藏一之語上。則劓二此像一者。其亦山氏之徒耶。又宇都山詠二十團子一云。大極十團圈。都來是一貫。今此粉團子。誰成二茂叔看一。又一二三四五。六七八九十。貫得天地數。無レ過無二不及一。此奇趣造語不レ容二佗人到一。又一時傳誦者。士山八面擬二八陣一云。富士甲二扶桑一。山頭面八方。天地一望裏。風雲屯二巖傍一。變態成二龍虎一。蛇蟠鳥翱翔。誰哉繼二風后一。制レ陣奉二君王一。

見レ紅。忽有二金衣公子轄一。秋風影裏聽二春風一。頗爲二合調一。又登二愛宕山一云。空手徒行登二宕阜一。同遊相語路先後。頑夫自レ古禱二災祥一。愚將到レ今憑二勝負一。願毀二宮房一鼷二地藏且驅二杉檜一劓二天狗一。山神使者飛鳶鵶。妙用顯然君見否。此可レ謂下氣象豪宕快二人意一者上。太宰春臺湘中紀

將今に到りて勝負を憑む、願はくは宮房を毀つて地藏に鼷し、且つ杉檜(九)を驅つて天狗を劓らん(八)。山神の使者飛鳶鵶(一〇)、妙用顯然君見るや否やと。此は氣象豪宕人意を快うする者と謂ふ可し。太宰春臺(一一)の湘中紀行に云ふ、金澤を去る十里可りの所、山足に巖を雕りて地藏菩薩の像を爲す者有り。武・相州の界を記せるなり。呼んで界地藏と曰ふ。像、鼻を缺く。故に亦劓地藏と曰ふ。曩時山闇齋先生といふ者有り。嘗て愛宕の詩を作る。中に天狗を劓り地藏に鼷(一二)すの語有り。則ち此像を劓る者は、其れ亦山氏の徒かと。又宇都の山十(一三)團子を詠むに云ふ、大極(一四)の十團圈、都て來りて是れ一貫、今此の粉團子、誰か茂叔の看を成せる、又一二三四五、六七八九十、貫き得たり天地の數、過なく不及なしと。此の奇趣(一五)造語、佗人到るべからず。又一時傳誦するもの、士山八(一六)面八陣に擬すに云ふ、富士扶桑(一七)に甲たり、山頭面八方、天地一望の裏、風雲(一八)巖傍に屯し、變態龍虎を成し、蛇と蟠り鳥と翱翔す、誰ぞや風后(一九)に繼いで、陣(二〇)

埋。闇齋疾呼ニ弟子ニ曰。姑瘞ニ之屋中ニ。余詰朝束裝赴ニ關東ニ。訴ニ渠頑嚚ニ。寺僧以爲レ不レ可レ爭。遂枉從ニ其意ニ。

(一)わが國の習慣 (二)埋葬 (三)かりもがり (四)明朝身支度して江戸にゆく (五)僧のかたくなを德川氏に訴ふ

作ニ世儒剃髮辨ニ。駁ニ林羅山ニ。又題ニ孝經ニ詩云。不孝罪條冠ニ五刑ニ。參乎兢戰踐ニ其形ニ。彼哉剃髮腐儒子。不レ信聖門有ニ此經ニ。闇齋爲レ詩直寫ニ其意ニ。不レ屑ニ磨鍛華飾ニ。然秋鶯云。居諸代謝四時中。花散葉濃復

(一)世儒剃髮の辨を作り、林羅山を駁す。又孝經に題する詩に云ふ、不孝の罪條五(二)刑に冠たり、(三)參や兢戰其形を踐む、彼や剃髮の腐儒子、(四)信ぜず聖門に此經あるをと。

(一)儒者が僧侶の如く剃髮する可否論 (二)いれずみ、あしきる、はなきる、陰具きる、死罪 (三)孔子の弟子曾參は常にびくびくとして父母の遺體たるわが身體の傷はれんことをおそる (四)儒に此の孝經あつて身體髮膚を傷けざることをさとすを知らず

闇齋の詩を作るや、直に其意を寫し、(一)磨鍛華飾を屑とせず。然るに秋鶯に云ふ、(二)居諸代謝す四時の中、花散り葉濃かにして復紅を見る。忽ち金衣公子の(三)囀る有り、秋風影裏春風を聽くと。頗る合調と爲す。又愛宕山に登るに云(四)ふ、空手徒行宕阜に登る、(五)同遊相語りて路先後す。(六)頑夫古より災祥を禱り、(七)愚

嚴。師弟之間。儼如君臣。受教者。雖貴卿巨子。不置之眼底。其講書。音吐如鐘。面容如怒。聽徒凜然無敢仰見。諸生每竊相告曰。吾儕未得伉儷。情欲之感時動不能自制。則瞑目一想先生。欲念頓消。不寒而慄。

雖も、之を眼底に置かず。其の書を講ずるや、音吐鐘の如く、面容怒れるが如く、(四)聽徒凜然(三)敢へて仰ぎ見る無し。諸生每に竊かに相告げて曰く、吾儕未だ(五)伉儷を得ず、情慾の感時に動いて自ら制すること能はず。則ち瞑目して先生を一想すれば、欲念頓に消え、(六)寒からずして慄すと。

(一)生れつき頗るきびし　(二)身分尊貴の人　(三)何ともおもはず　(四)講演をきくものぞつとして仰ぎ見ず　(五)妻　(六)寒からざるに身をのゝく

嘗有某喪。用儒禮。不依佛式。寺僧來見曰。子不通國俗。爲此非禮。改則已。不改則我不許瘞

嘗て某の喪有り、儒禮を用ひ佛式に依らず。寺僧來り見えて曰く、子國俗に通ぜずして、此非禮を爲す。改めば則ち已まん。改めずんば則ち我れ(一)瘞埋を許さじと。闇齋疾く弟子を呼んで曰く、如く之を屋中に(三)殯せよ。余詰朝(四)束裝して關東に赴き、(五)渠が頑嚚を訴へんと。寺僧以て爭ふべからずと爲し、遂に枉げて其意に從ふ。

將ㇾ率二騎數萬一。來攻二我邦一。則吾黨學二孔孟之道一者。爲二之如何一。弟子咸不ㇾ能ㇾ答。曰。小子不ㇾ知ㇾ所ㇾ爲。願聞二其說一。曰。不幸若逢二此厄一。則吾黨身被ㇾ堅手執ㇾ銳。與ㇾ之一戰擒二孔孟一。以報二國恩一。此卽孔孟之道也。後弟子見二伊藤東涯一。告以二此言一。且曰。如二吾闇齋先生一。可ㇾ謂ㇾ通二聖人之旨一矣。不ㇾ然安得下能明二此深義一而爲中之說上乎。東涯微笑曰。子幸不下以二孔孟之攻二我邦一爲上ㇾ念。予保二其無一ㇾ之。

何と爲すと。弟子咸答ふる能はず。曰く、小子(二)爲す所を知らず。願くは其說を聞かんと。曰く、不幸にして若し此の危(三)に逢はば、則ち吾黨身に堅(四)を被り手に銳を執り、之と一戰して孔孟を擒にし、以て國恩に報ぜん。此れ卽ち孔孟の道なりと。後弟子、伊東東涯(五)に見え、告ぐるに此言を以てし、且つ曰く、吾が闇齋先生の如き、聖人の旨に通ずと謂ふべし。然らずんば、安ぞ能く此深義を明かにして之が說を爲すことを得んやと。東涯微笑して曰く、子幸に孔孟の我が邦を攻むるを以て念と爲さざれ。予其の之なきを保す(六)と。

(一)支那　(二)弟子の自稱　(三)災難　(四)身に堅き甲冑を著し手に鋭き武器をとる　(五)仁齋の長子　(六)さる事無きを保證す

闇齋天性峭

闇齋、天性峭巖(一)、師弟の間、儼として君臣の如し。敎を受くる者は、貴卿(二)巨子と

曰。寡人雖レ不敏。奉ニ先生之言ー。孜孜求レ諫渴ニ聞忠言ー。何爲至レ今不レ終教乎。曰。君之言及レ此。臣假逢ニ戮辱ー。豈不レ盡レ言哉。所レ謂樂之最大者。幸生ニ於卑賤ー。不レ生ニ於侯家ー。是也。侯曰。敢問何謂也。曰。意者今之爲ニ諸侯ー也。生ニ乎深宮之中ー。長ニ於婦人之手ー。不學無術。徇ニ聲色ー。耽ニ遊戲ー。而爲ニ之臣ー者。迎ニ合主意ー。其所レ爲。因而稱ニ譽之ー。其所レ不レ爲。因而非ニ毀之ー。遂令ニ本然性梏亡消滅ー矣。其視ニ卑賤之幼嘗ニ辛苦ー。長習ニ事務ー。師教友輔。以益ニ其智慮ー者上。爲ニ何如ー也。是臣之所下以生ニ於卑賤ー不レ生ニ於侯家ー。爲中樂之最大上也。於レ是侯茫然自失。嘆息曰。誠若ニ先生之言ー。

何如と爲す。是れ臣が、卑賤に生れ侯家に生れざるをば、樂の最大と爲す所以なりと。是に於て侯茫然(一八)自失、嘆息して曰く、誠に先生の言の若しと。

(一)保科正之　(二)生物は無歡なり　(三)定まれる形勢無し　(四)學事を重んずる也　(五)古書を讀んて古人に親しむを謂ふ　(六)攻撃批難　(七)骨折る　(八)こちらより望みきく　(九)殺戮の恥辱　(一〇)大名の家筋　(一一)何等の學藝をも知らず　(一二)好き聲美しき色に心を奪はる　(一三)主人の心を迎へて氣にかなふやうにす　(一四)をしる　(一五)生れながらの善性　(一六)さまたげて無くす　(一七)身分卑しきものの幼童　(一八)意外の言葉にぼんやりとして氣がぬけたやうになる

嘗問ニ羣弟子ー曰。方今彼邦。以ニ孔子ー爲ニ大將ー。孟子爲ニ副

嘗て羣弟子に問うて曰く、方今(一)彼の邦、孔子を以て大將と爲し、孟子を副將と爲し、騎數萬を率ゐ、來りて我が邦を攻めば、則ち吾黨孔孟の道を學ぶ者、之を如

凡天地之間。有レ生者何限。而得レ爲二萬物之靈一。一樂也。天地之間。一治一亂。無二定數一。而生二右文之世一。讀レ書學レ道。得下與二古之聖賢一把中臂于一堂上上。一樂也。是臣之所レ樂也。侯曰。二樂既得レ聞レ之。請亦聞二其一樂一。曰。此其最大者。而所二以難一レ言者。君侯必不レ信。以爲二毀訾誹謗一。侯

學び、古の聖賢と臂を一堂の上に把るを得ること、一樂なり。是れ臣の樂む所なりと。侯曰く、二樂は既に之を聞くことを得たり。請ふ亦其一樂を聞かんと。曰く、此れ其の最大なる者なり。而して言ひ難き所以の者は、君侯必ず信ぜず、以て毀訾誹謗と爲さんと。侯曰く、寡人不敏と雖も、先生の言を奉じ、孜孜として諫を求め忠言を渇聞す。何爲れぞ今に至り教を終へざるかと。曰く、君の言此に及ぶ。臣假ひ戮辱に逢ふも、豈に言を盡さざらんや。所謂樂の最大なる者とは、幸に卑賤に生れ、侯家に生れざる、是れなりと。侯曰く、敢へて問ふ、何の謂ぞやと。曰く、意ふに今の諸侯たるや、深宮の中に生れ、婦人の手に長じ、不學無術、聲色に徇ひ、遊戲に耽る。而して之が臣たる者は、主の意を迎合し、其爲す所は、因つて之を稱譽し、其爲さざる所は、因つて之を非毀し、遂に本然の性をして梏亡消滅せしむ。其の、卑賤の幼が辛苦を嘗め、長じて事務を習ひ、師教へ友輔け、以て其智慮を益する者に視ぶれば、

告二闇齋一。闇齋毅然曰。侯欲レ問レ道。則先來見。商憮然以爲措大不レ通二時勢一。若薦二若人一。必陵レ上無レ法。累自及。不レ若レ不レ薦也。佗日侯復問曰。曏告所レ告山崎生如何。商曰。小人非レ惰也。前日既傳二命於渠一。渠曰。侯先來見レ余。是非二頑愚一不レ可レ曉。即狂率邀レ名也。請別選二通儒一。侯咨嗟良久曰。方今自稱二師儒一者。多無レ意レ行レ道。東奔西走。欲二其技易一レ售。而寡人聞レ之。禮聞二來學一。不レ聞二往教一。山崎生能守レ之。此乃眞儒也。即日命レ駕訪二其居一。

教ふるを聞かずと。山崎生能く之を守る。此れ乃ち眞儒なりと。即日駕を命じ(一九)て其居を訪ふ。

(一)貧しくみすぼらし　(二)俸は二石、石は一石、わづかの貯蓄　(三)諸侯の謙稱　(四)なかだちして世話せよ　(五)其人の行動云爲を視るに遠く通常人にすぐる　(六)思ひよられしあはせ　(七)感激して御恩に報いる　(八)招きよす　(九)きつとする　(一〇)驚き呆る　(一一)書生世間の事情を知らず　(一二)煩累を自分にまで及ぼさん　(一三)此の間　(一四)かたくなにして事理をさとしがたし　(一五)世情に反し高ぶりて名をあげんとす　(一六)事理に通じたる學者　(一七)嘆く　(一八)禮記の語　(一九)乘物を命ず

會津侯嘗問二闇齋一曰。先生有レ樂乎。答曰。臣有二三樂一焉。

(一)會津侯嘗て闇齋に問うて曰く、先生樂有るかと。答へて曰く、臣に三樂有り。凡そ天地の間、(二)生有る者何ぞ限あらん。而るに萬物の靈たるを得たると、一樂なり。天地の間、一治一亂、(三)定數無し。而るに(四)右文の世に生れ、書を讀み道を

書一。當ニ是時一。非上侯好レ學下レ士。書商亦數謁見。一日侯謂レ商曰。寡人將レ學。爾之所レ知。有下足レ爲ニ人師一者上。請爲介。商曰。近有ニ一儒生山崎嘉右衛門者一。自ニ京師一來。住ニ小人東家一。視ニ其所レ以。度ニ越尋常一。閣下而召レ之。其得ニ不虞之幸福一也。豈不ニ感奮思レ答レ恩乎。侯大喜。乃延致。商歸

足る者有らば、請ふ爲に介せよと。商曰く、近ごろ一儒生山崎嘉右衛門といふ者有り。京師より來りて、小人の東家に住す。其の以てする所を視るに尋常に度越す。閣下にして之を召さば、其れ不虞の幸福を得ん。豈に感奮恩に答ふるを思はざらんやと。侯大に喜び、乃ち延致す。商歸つて闇齋に告ぐ。闇齋毅然として曰く、侯道を問はんと欲せば、則ち先づ來り見よと。商、憮然として以爲へらく、措大時勢に通せず。若し若のごとき人を薦めば、必ず上を陵ぎ法を無し、累自ら及ばん。薦めざるに若かじと。佗日侯復問うて曰く、疇昔告ぐる所の山崎生は如何と。商曰く、小人惰るに非ざるなり。前日既に命を渠に傳ふ。渠曰く、侯先づ來つて余を見よと。是れ頑愚曉す可からざるに非ずんば、卽ち狂卒名を邀むるなり。請ふ別に通儒を選べと。侯咨嗟良久しうして曰く、方今自ら師儒と稱する者、多くは道を行ふに意無し。東奔西走、其技の售れ易からんことを欲す。而して寡人之を聞く、禮、來つて學ぶを聞けども、往いて

之旨與否。闇齋疑之不置。嘗夢見周子。質之。文會筆錄載。嘉嘗編次周子書。意謂大極圖說朱解。於理則固可無不可。但不知周子本意。果如此否。辛卯之夏。四月二十二日。夢見周先生。乃問。大極朱解。莫違尊意乎。曰。不違。曰。或點于第一圈中。失尊意者有焉。先生頷之。又將正所編次。而人呼覺矣。

らく大極圖說の朱解（三）は、理に於ては則ち固に可にして不可無し。但知らず、周子の本意、果して此の如きや否や。辛卯（四）の夏、四月二十二日、夢に周先生に見え、乃ち問ふ、大極朱解は、尊意（五）に違ふことなきかと。曰く、違はずと。曰く、或は第一圈中に點す（六）。尊意を失ふ者あらんと。先生之を頷す（七）。又將に編次する所を正さんとして、人呼びて覺むと。

（一）周茂叔　（二）周子の哲學を圖象し之を解說せしもの。大要を謂へば、宇宙の本體たる大極より陰陽を生じ、陰陽より四時五行を生ず。之より更に乾坤二道成りて萬物化成すといふ說　（三）朱子の解釋　（四）慶安四年　（五）貴殿の思召　（六）大極圖の第一番目の丸の中に點をうつ　（七）うなづく

初來江戶時。寒窶無儋石。故鄰書商賃居。以借閱其

初めて江戶に來りし時、寒窶（一）にして儋石（二）無し。故に書商に鄰りて賃居し、以て其書を借閱す。是時に當りて、井上侯學を好みて士に下る。書商亦數〻謁見す。一日侯、商に謂つて曰く、寡人（三）將に學ばんとす。爾の知る所、人の師たるに

號取二之神道一。宇井弘篤讀思錄云。寶基本紀曰。神垂以二祈禱一爲レ先。冥加以二正直一爲レ本。鎭坐傳記亦載二此言一。

正直を以て本と爲すと。鎭坐傳記も亦此言を載す。

(一) 神威の人に垂るゝは祈禱を第一となす、(二) 暗々裏の神の加護

闇齋學大行二于世一。前後執レ贄者。六千餘人。及三其奉二神道一。高第弟子佐藤直方淺見絅齋。其餘反レ之者亦甚多。

闇齋、學大に世に行はれ、前後贄(一)を執る者、六千餘人。其神道を奉ずるに及び、高第弟子(二)佐藤直方・淺見絅齋、其餘之に反く者亦甚だ多し。

(一) 束脩を納れて弟子となるもの (二) 高級の門弟

周子大極圖說。程子未二嘗一言及一レ之。至二朱子一作二之解一。其果得二周子

周子(一)の大極圖說(二)、程子未だ嘗て一言も之に及ばず。朱子に至りて之が解を作る。其の果して周子の旨を得たりや否やと、闇齋之を疑つて置かず。嘗て夢に周子に見えて之を質す。文會筆錄に載す、嘉、嘗て周子の書を編次す。意に謂へ

者猿田彦之教也。乃以二庚申日一祀レ之。鶯谷山人藻鹽草曰。凡神皆用二八數一。猿田彦神獨用二七數一。此有二深義一矣。蓋申位二于西南隅一。而金所レ旺。與下寅位二于東北維一。而土所レ旺相對上。而寅申共當二七數一。以相二發土金一。卽自然妙義也。是以二于庚申日一祀二猿田彦一。又曰。道之教始二於猿田彦一。成二於舍人親王一。發二揮於垂加靈社一。

に位して、(五)金の旺なる所、(六)寅は東北の維に位して、土の旺なる所と相對す。而して(七)寅申共に七數に當り、以て土金を相發す。卽ち(八)自然の妙義なり。是れ庚申の日を以て猿田彦を祀るなりと。又曰く、道の教は、猿田彦に始まりて、舍人親王に成り、(九)垂加靈社に發揮すと。

(一) 天照大神の御名　(二) かのえさるの日に猿田彦神を祭る　(三) 記紀等の古典には物の分量を示すに、彌の意味をもつ八の字を多く用ひたれど、猿田彦の神にのみ、其の鼻の長さ七咫、背の長さ七尺餘り、當に七尋と言ふべしと書紀の一書にあり　(四) 申の方向は西々南に當る　(五) 西方は木火土金水の五行のうちにて金氣盛なり　(六) 寅の方向は東と北に當る。維は隅　(七) 寅より申まで及び申より寅まで共に十二支の順序七つ目なり　(八) 天地自然の微妙なる道理　(九) 闇齋を指す

文集其名嘉或作レ柯。蓋初名也。垂加之

文集に其名を嘉或は柯に作る。蓋し初名なり。垂加の號は之を神道に取る。宇井弘篤の讀思錄に云ふ、寶基本紀に曰く、(一)神垂は祈禱を以て先と爲し、(二)冥加は

人唯一。而其道之要。在二土金之教一而已。土卽敬也。土與レ敬。倭訓相通。而天地之所二以位一。陰陽之所二以行一。人道之所二以立一。皆出レ自レ此。乃合二之居敬窮理之說一曰。神聖之出二于世一。東西雖レ異レ處。其旨自妙契矣。跡部光海跋二垂加文集一曰。徵二正直瓊矛之道一。守二土金之教一。通二兒屋根命宗源之傳一。遂二舍人親王正統之書一。揭二天人唯一之神光一。拜二日德一仰二神國一。以立二忠孝之大義一焉。

孝の大義を立つと。

(一)濂溪の周茂叔、洛陽の程明道、程伊川の學 (二)戶の人、卜部流の神道を唱ふ (三)自己一派の說 (四)人の常道、敬を主とし廣く物理を窮む、朱子の學說の根本思想 (五)すぐれたる物 (六)ツチとツヽシムと日本よみにて通ず (七)天地の位置する原由、陰陽二氣の運行する原由、人倫の道の確立する原由 (八)宋儒の說、精神を一に統一して動くなきを敬といひ、敬に居て理をきはむる說 (九)日本の神と支那の聖人と (一〇)不思議に符合す (一一)跡部良顯、幕府麾下の士、儒佛をあはせて一流の神道を唱ふ (一二)天神の瓊矛を以て正直の德を表はすとし又瓊矛をトボコと訓じて陰陽和合の道を說く (一三)垂加神道にては唯一神道の源流を兒屋根命に歸す (一四)日本書紀を尊み、舍人親王の上二字をイヘヒトと訓じて崇拜す

闇齋深欽二猿田彥神一。每云。道者大日孁貴之道。而教

闇齋深く猿田彥神を欽び、每に云ふ、道は大日孁貴(一)の道にして、敎は猿田彥の敎なりと。乃ち庚申(二)の日を以て之を祀る。鷲谷山人の藻鹽草に曰く、凡そ神は皆八數を用ふ。猿田彥神獨り七數(三)を用ふ。此れ深義有り。蓋し申(四)は西南の隅

亦深器之。而惜其陷異端。示之四子及程朱書。則大悅。遂畜髮歸於儒。時年二十五。

闇齋學初專祖濂洛。及晩從吉川惟足者。學本邦所謂神道。遂立一家言。此道爲中興祖。其言曰。伊弉諾尊。伊弉册尊。順陰陽之理。正彝倫之始。嗣之天照大神。以三種神器治海内。夫神者天地之心。人者天下之神物。蓋天

闇齋の學、初め專ら濂洛(一)を祖とす。晩に及び吉川惟足(二)といふ者に從ひ、本邦の所謂神道を學び、遂に一家言(三)を立つ。此道中興の祖と爲す。其言に曰く、伊弉諾尊・伊弉册尊、陰陽の理に順つて、彝倫(四)の始を正す。之に嗣いで天照大神、三種の神器を以て海内を治む。夫れ神は天地の心、人は天下の神物(五)。蓋し天人唯一にして、其道の要は、土金の敎にあるのみ。土は卽ち敬なり。土と敬とは、倭訓(六)相通ず。而して天地の位(七)する所以、陰陽の行はるゝ所以、人道の立つ所以、皆此れより出づと。乃ち之を居敬窮理(八)の說に合せて曰く、神聖(九)の世に出づる、東西處を異にすと雖も、其旨自ら妙契(一〇)すと。跡部光海(一一)、垂加文集に跋して曰く、正直瓊矛(一二)の道に徹し、土金の敎を守り、兒屋根命(一三)宗源の傳に通じ、舍人(一四)親王正統の書に達し、天人唯一の神光を揭げ、日德を拜し神國を仰ぎ、以て忠

埋。闇齋疾呼二弟子一曰。姑殯二之屋中一。余請朝束裝赴二關東一。訴二渠頑嚚一。寺僧以爲レ不レ可レ爭。遂枉從二其意一。

(一)わが國の習慣　(二)埋葬　(三)かりもがり　(四)明朝身支度して江戸にゆく　(五)僧のかたくなを德川氏に訴ふ

作二世儒剃髮辨一。駁二林羅山一。又題二孝經一詩云。不孝罪條冠二五刑一。參乎兢戰踐二其形一。彼哉剃髮腐儒子。不レ信二聖門有二此經一。闇齋爲レ詩直寫二其意一。不レ屑二磨鍛華飾一。然秋鶯云。居諸代謝四時中。花散葉濃復

世儒剃髮(一)の辨を作り、林羅山を駁す。又孝經に題する詩に云ふ、不孝の罪條五刑(二)に冠たり、參(三)や兢戰其形を踐む、彼や剃髮の腐儒子(四)、信ぜず聖門に此經あるをと。

(一)儒者が僧侶の如く剃髮する可否論　(二)いれずみ、あしきる、はなきる、陰具きる、死罪　(三)孔子の弟子曾參は常にびくびくとして父母の遺體たるわが身體の傷はれんことをおそる　(四)儒に此の孝經ありて身髮膚を傷けざることをさとすを知らず

闇齋の詩を作るや、直に其意を寫し、磨鍛(一)華飾を屑とせず。然るに秋鶯に云ふ、居諸(二)代謝す四時の中、花散り葉濃かにして復紅を見る。忽ち(三)金衣公子の囀る有り、秋風影裏春風を聽くと。頗る合調(四)と爲す。又愛宕山に登るに云ふ、空手徒行宕阜(五)に登る、同遊(六)相語りて路先後す。頑夫古より災祥(七)を禱り、愚

嚴。師弟之間。儼如君臣。受教者。雖貴卿巨子。不置之眼底。其講書音吐如鐘。面容如怒。聽徒凜然無敢仰見。諸生每竊相告曰。吾儕未得伉儷。情欲之感時動不能自制。則瞑目一想先生。欲念頓消。不寒而慄。

雖も、之を眼底に置かず(三)。其の書を講ずるや、音吐鐘の如く、面容怒れるが如く、聽(四)徒凜然敢へて仰ぎ見る無し。諸生每に竊かに相告げて曰く、吾儕未だ伉儷(五)を得ず、情欲の感時に動いて自ら制すること能はず。則ち瞑目して先生を一想すれば、欲念頓に消え、寒(六)からずして慄すと。

(一)生れつき頗るきびし　(二)身分尊貴の人　(三)何ともおもはず　(四)講演をきくものぞつとして仰ぎ見ず　(五)妻　(六)寒からざるに身をのゝく

嘗有某喪。用儒禮。不依佛式。寺僧來見曰。子不通國俗。爲此非禮。改則已。不改則我不許瘞

嘗て某の喪有り、儒禮を用ひ佛式に依らず。寺僧來り見えて曰く、子國俗(一)に通ぜずして、此非禮を爲す。改めば則ち已まん。改めずんば則ち我れ瘞埋(二)を許さじと。闇齋疾く弟子を呼んで曰く、姑く之を屋中に殯(三)せよ。余詰朝(四)束裝して關東に赴き、(五)渠が頑嚚を訴へんと。寺僧以て爭ふべからずと爲し、遂に枉げて其意に從ふ。

將一。率二騎數萬一。來攻二我邦一。則吾黨學二孔孟之道一者。爲二之如何一。弟子咸不レ能レ答。曰。小子不レ知レ所レ爲。願聞二其說一。曰。不幸若逢二此厄一。則吾黨身被レ堅手執レ銳。與レ之一戰擒二孔孟一。以報二國恩一。此卽孔孟之道也。後弟子見二伊藤東涯一。告以二此言一。且曰。如二吾闇齋先生一。可レ謂レ通二聖人之旨一矣。不レ然安得下能明二此深義一而爲中之說上乎。東涯微笑曰。子幸不下以三孔孟之攻二我邦一爲上念。予保二其無一レ之。

何と爲すと。弟子咸答ふる能はず。曰く、小子(二)爲す所を知らず。願くは其說を聞かんと。曰く、不幸にして若し此の危(三)に逢はば、則ち吾黨(四)身に堅を被り手に銳を執り、之と一戰して孔孟を擒にし、以て國恩に報ぜん。此れ卽ち孔孟の道なりと。後弟子、伊東東涯(五)に見え、告ぐるに此言を以てし、且つ曰く、吾が闇齋先生の如き、聖人の旨に通ずと謂ふべし。然らずんば安ぞ能く此深義を明かにして之が說を爲すことを得んやと。東涯微笑して曰く、子幸に孔孟の我が邦を攻むるを以て念と爲さざれ。予(六)其の之なきを保すと。

(一) 支那　(二) 弟子の自稱　(三) 災厄　(四) 身に堅き甲冑を着し手に鋭き武器をとる　(五) 仁齋の長子　(六) さる事無きを保證す

闇齋天性峭

闇齋、天性峭嚴(一)、師弟の間、儼として君臣の如し。敎を受くる者は、貴卿巨子(二)と

曰。寡人雖不敏。奉先生之言。孜孜求諫。渴聞忠言。何爲至今不終教乎。曰。君之言及此。臣假逢戮辱。豈不盡言哉。所謂樂之最大者。幸生於卑賤。不生於侯家。是也。侯曰。敢問何謂也。曰。意者今之爲諸侯也。生乎深宮之中。長於婦人之手。不學無術。徇聲色。耽遊戲。而爲之臣者。迎合主意。其所爲。因而稱譽之。其所不爲。因而非毀之。遂令本然性梏亡消滅矣。其視卑賤之幼嘗辛苦。長習事務。師教友輔。以益其智慮者。爲何如也。是臣之所以生於卑賤不生於侯家。爲樂之最大也。於是侯茫然自失。嘆息曰。誠若先生之言。

何如と爲す。是れ臣が、卑賤に生れ侯家に生れざるをば、樂の最大と爲す所以なりと。是に於て侯茫然自失、（一八）嘆息して曰く、誠に先生の言の若しと。

（一）保科正之　（二）生物は無欲なり　（三）定まれる形勢無し　（四）學事を重んずる也　（五）古書を讀んで古人に親しむを謂ふ　（六）攻擊批難　（七）骨折る　（八）こちらより望みきく　（九）殺戮の恥辱　（一〇）大名の家筋　（一一）何等の學藝をも知らず　（一二）好き聲美しき色に心を奪はる　（一三）主人の心を迎へて氣にかなふやうにする　（一四）そしる　（一五）生れながらの善性　（一六）さまたげて無くす　（一七）身分卑しきものの幼童　（一八）意外の言葉にぼんやりとして氣がぬけたやうになる

嘗問羣弟子曰。方今彼邦。以孔子爲大將。孟子爲副將。

嘗て羣弟子に問うて曰く、方今（二）彼の邦、孔子を以て大將と爲し、孟子を副將と爲し、騎數萬を率ゐ、來りて我が邦を攻めば、則ち吾黨孔孟の道を學ぶ者、之を如

凡天地之間。有生者何限。而得爲萬物之靈。一樂也。天地之間。一治一亂。無定數。而生右文之世。讀書學道。得與古之聖賢把臂于一堂上。一樂也。是臣之所樂也。侯曰。二樂既得聞之。請亦聞其一樂。曰。此其最大者。而所以難言者。君侯必不信。以爲毀訾誹謗。侯

學び、(五)古の聖賢と臂を一堂の上に把ることを得ること、一樂なり。是れ臣の樂む所なりと。侯曰く、二樂は既に之を聞くことを得たり。請ふ亦其一樂を聞かんと。曰く、此れ其の最大なる者なり。而して言ひ難き所以の者は、君侯必ず信ぜず、以て(六)毀訾誹謗と爲さんと。侯曰く、寡人不敏と雖も、先生の言を奉じ、(七)孜孜として諫を求め忠言を(八)渇聞す。何爲れぞ今に至り敎を終へざるかと。曰く、君の言此に及ぶ。臣假ひ(九)戮辱に逢ふも、豈に言を盡さざらんや。所謂樂の最大なる者とは、幸に卑賤に生れ、(一〇)侯家に生れざる、是れなりと。侯曰く、敢へて問ふ、何の謂ぞやと。曰く、意ふに今の諸侯たるや、深宮の中に生れ、婦人の手に長じ、(一一)不學無術、(一二)聲色に徇ひ、遊戲に耽る。而して之が臣たる者は、(一三)主の意を迎合し、其爲す所は、因つて之を稱譽し、其爲さざる所は、因つて之を(一四)非毀し、遂に(一五)本然の性をして(一六)梏亡消滅せしむ。其の、(一七)卑賤の幼が辛苦を嘗め、長じて事務を習ひ、師敎へ友輔け、以て其智慮を益する者に視ぶれば、

告ニ闇齋一。闇齋毅然曰。侯欲レ問レ道。則先來見。商慨然以爲措大不レ通ニ時勢一。若薦ニ若人一。必陵レ上無レ法。累自及。不レ若レ不レ薦也。佗日侯復問曰。嶠昔所レ告山崎生如何。商曰。小人非レ惰也。前日既傳ニ命於渠一。渠曰。侯先來見レ余。是非ニ頑愚不レ可レ曉。即狂率邀レ名也。請別還ニ通儒一。侯咨嗟良久曰。方今自稱ニ師儒一者。多無レ意レ行レ道。東奔西走。欲ニ其技易レ售。而寡人聞レ之。禮聞ニ來學一。不レ聞ニ往教一。山崎生能守レ之。此乃眞儒也。即日命レ駕訪ニ其居一。

教ふるを聞かずと。山崎生能く之を守る。此れ乃ち眞儒なりと。即日駕を命じ（一九）て其居を訪ふ。

（一）貧しくみすぼらし　（二）儋は二石、石は一石、わづかの貯蓄　（三）諸侯の[illegible]　（四）なかだちして世話せよ　（五）其人の行動云爲を視るに遠く通常人にすぐる　（六）思ひよられしあはせ　（七）感激して御恩に報いる　（八）招きよす　（九）きつとする　（一〇）驚き呆る　（一一）書生世間の事情を知らず　（一二）煩累を自分にまで及ぼさん　（一三）此の間　（一四）かたくなにして事理をさとしがたし　（一五）世情に反し高ぶりて名をあげんとす　（一六）事理に通じたる學者　（一七）嘆く　（一八）禮記の語　（一九）乘物を命ず

會津侯嘗問ニ闇齋一曰。先生有レ樂乎。答曰。臣有ニ三樂一焉。

（一）會津侯嘗て闇齋に問うて曰く、先生樂有るかと。答へて曰く、臣に三樂有り。凡そ天地の間、（二）生有る者何ぞ限あらん。而るに萬物の靈たるを得たると、一樂なり。天地の間、一治一亂、（三）定數無し。而るに（四）右文の世に生れ、書を讀み道を

書。當二是時一。非
上侯好レ學下レ
士。書商亦數
謁見。一日侯
謂レ商曰。寡人
將レ學。爾之所レ
知。有下足レ爲二人
師一者上。請爲介。
商曰。近有二一
儒生山崎嘉
右衛門者一。自二
京師一來。住二小
人東家一。視二其
所レ以。度二越尋
常一。閣下而召レ
之。其得二不虞
之幸福一也。豈
不二感奮思レ答レ
恩乎。侯大喜。
乃延致。商歸

足る者有らば、請ふ爲に介せよと。商曰く、近ごろ一儒生山崎嘉右衛門といふ者有り。京師より來りて、小人の東家に住す。其の以てする所を視るに尋常に度越す。閣下にして之を召さば、其れ不虞の幸福を得ん。豈に感奮恩に答ふるを思はざらんやと。侯大に喜び、乃ち延致す。商歸つて闇齋に告ぐ。闇齋毅然として曰く、侯道を問はんと欲せば、則ち先づ來り見よと。商、憮然として以爲へらく、措大時勢に通せず。若し若のごとき人を薦めば、必ず上を陵ぎ法を無し、累自ら及ばん。薦めざるに若かじと。佗日侯復問うて曰く、疇昔告ぐる所の山崎生は如何と。商曰く、小人惰るに非ざるなり。前日既に命を渠に傳ふ。渠曰く、侯先づ來つて余を見よと。是れ頑愚曉す可からざるに非ずんば、即ち狂卒名を邀むるなり。請ふ別に通儒を選べと。侯咨嗟良久しうして曰く、方今自ら師儒と稱する者、多くは道を行ふに意無し。東奔西走、其技の售れ易からんことを欲す。而して寡人之を聞く、禮、來つて學ぶを聞けども、往いて

之旨與否。闇齋疑之不置。嘗夢見周子質之。文會筆錄載。嘉嘗編次周子書。意謂大極圖説朱解。於理則固可無不可。但不知周子本意。果如此否。辛卯之夏。四月二十二日夢見周先生。乃問。大極朱解。莫違尊意乎。曰。不違。曰。或點于第一圈中。失尊意者有焉。先生頷之。又將正所編次。而人呼覺矣。

らく大極圖説の朱解は、理に於ては則ち固に可にして不可無し。但知らず、周子の本意、果して此の如きや否や。辛卯の夏、(四)四月二十二日、夢に周先生に見え、乃ち問ふ、大極朱解は、尊意(五)に違ふことなきかと。曰く、違はずと。曰く、或は第一圏中に點す(六)。尊意を失ふ者あらんと。先生之を頷す(七)。又將に編次する所を正さんとして、人呼びて覺むと。

(一)周茂叔　(二)周子の哲學を圖象し之を解説せしもの。大要を謂へば、宇宙の本體たる大極より陰陽を生じ、陰陽より四時五行を生ず。之より更に乾坤二道成りて萬物化成すといふ説　(三)朱子の解釋　(四)慶安四年　(五)貴殿の思召　(六)大極圖の第一番目の丸の中に點をうつ　(七)うなづく

初來江戸時。寒窶無儋石。故鄰書商賃居。以借閲其

初めて江戸に來りし時、寒窶(一)にして儋石(二)無し。故に書商に鄰りて賃居し、以て其書を借閲す。是時に當りて、井上侯學を好みて士に下る。書商亦數〻謁見す。一日侯、商に謂つて曰く、寡人(三)將に學ばんとす。爾の知る所、人の師たるに

號取二之神道一。宇井弘篤讀思錄云。寶基本紀曰。神垂以二祈禱一爲レ先。冥加以二正直一爲レ本。鎭坐傳記亦載二此言一。

正直を以て本と爲すと。鎭坐傳記も亦此言を載す。

（一）神威の人に垂るゝは祈禱を第一となす　（二）暗々裏の神の加護

闇齋學大行二于世一。前後執レ贄者。六千餘人。及三其奉二神道一。高第弟子佐藤直方淺見絅齋。其餘反レ之者亦甚多。

闇齋、學大に世に行はれ、前後贄（一）を執る者、六千餘人。其神道を奉ずるに及び、（二）高第弟子佐藤直方・淺見絅齋、其餘之に反く者亦甚だ多し。

（一）束脩を納れて弟子となるもの　（二）高級の門弟

周子大極圖說。程子未二嘗一言及一レ之。至二朱子一作二之解一。其果得二周子

（一）周子の大極圖說（二）、程子未だ嘗て一言も之に及ばず。朱子に至りて之が解を作る。其の果して周子の旨を得たりや否やと、闇齋之を疑つて置かず。嘗て夢に周子に見えて之を質す。文會筆錄に載す、嘉、嘗て周子の書を編次す。意に謂へ

者猿田彦之敎也。乃以二庚申日一祀レ之。鶯谷山人藻鹽草曰。凡神皆用二八數一。猿田彦神獨用二七數一。此有二深義一矣。蓋申位二于西南隅一。而金所レ旺。與二寅位二于東北維一。而土所レ旺相對。而寅申共當二七數一。以相二發土金一。卽自然妙義也。是以二于庚申日一祀二猿田彦一。又曰。道之敎始二於猿田彦一。成二於舍人親王一。發二揮於垂加靈社一。

に位して、(五)金の旺なる所、(六)寅は東北の維に位して、土の旺なる所と相對す。而して(七)寅申共に七數に當り、以て土金を相發す。卽ち自然の妙義なり。是れ庚申の日を以て猿田彦を祀るなりと。又曰く、(八)道の敎は、猿田彦に始まりて、舍人親王に成り、(九)垂加靈社に發揮すと。

(一)天照大神の御名 (二)かのえさるの日に猿田彦神を祭る (三)記紀等の古典には物の分量を示すに、彌の意味をもつ八の字を多く用ひたれど、猿田彦の神にのみ、其の鼻の長さ七咫、背の長さ七尺餘り、當に七尋と言ふべしと書紀の一書にあり (四)申の方向は西と南に當る (五)西方は木火土金水の五行のうちにて金氣盛なり (六)寅の方向は東と北に當る。維は隅 (七)寅より申まで及び申より寅まで共に十二支の順序七つ目なり (八)天地自然の微妙なる道理 (九)闇齋を指す

文集其名嘉或作レ柯。蓋初名也。垂加之

文集に其名を嘉或は柯に作る。蓋し初名なり。垂加の號は之を神道に取る。宇井弘篤の讀思錄に云ふ、寶基本紀に曰く、(一)神垂は祈禱を以て先と爲し、(二)冥加は

人唯一。而其道之要。在二土金之教一而已。土即敬也。土與レ敬。倭訓相通。而天地之所二以位一。陰陽之所二以行一。人道之所二以立一。皆出レ自レ此。乃合二之居敬窮理之說一曰。神聖之出二于世一。東西雖レ異レ處。其旨自妙契矣。跡部光海跋二垂加文集一曰。徹二正直瓊矛之道一。守二土金之教一。通二兒屋根命宗源之傳一。達二舍人親王正統之書一。揭二天人唯一之神光一。拜二日德一仰二神國一。以立二忠孝之大義一焉。

孝の大義を立つと。

(一) 濂溪の周茂叔、洛陽の程明道、程伊川の學　(二) 戸の人、卜部流の神道を唱ふ　(三) 自己一派の說　(四) 人の常道、敬を主とし廣く物理を窮む、朱子の學說の根本思想　(五) すぐれたる物　(六) ツチとツ、シムと日本よみにて通ず　(七) 天地の位置する原由、陰陽二氣の運行する原由、人倫の道の確立する原由　(八) 宋儒の說、精神を一に統一して動くなきを敬といひ、敬に居て理をきはむる說　(九) 日本の神と支那の聖人と　(一〇) 不思議に符合す　(一一) 跡部良顯、幕府麾下の士、儒佛をあはせて一流の神道を唱ふ　(一二) 天神の瓊矛を以て正直の德を表はすとし又瓊矛をトボコと訓じて陰陽和合の道を說く　(一三) 垂加神道にては唯一神道の源流を兒屋根命に歸す　(一四) 日本書紀を尊み、舍人親王の上二字をイヘヒトと訓じて崇拜す

闇齋深欽二猿田彦神一。每云。道者大日孁貴之道。而教

闇齋深く猿田彦神を欽び、每に云ふ、道は大日孁貴(一)の道にして、教は猿田彦の教なりと。乃ち庚申(二)の日を以て之を祀る。鶯谷山人の藻鹽草に曰く、凡そ神は皆八數を用ふ。猿田彦神獨り(三)七數を用ふ。此れ深義有り。蓋し申(四)は西南の隅

亦深器之。而惜其陷異端。示之四子及程朱書。則大悅。遂畜髮歸於儒。時年二十五。

闇齋學初專祖濂洛。及晩從吉川惟足者。學本邦所謂神道。遂立一家言。此道爲中興祖。其言曰。伊弉諾尊。伊弉冊尊。順陰陽之理。正彝倫之始。嗣之天照大神。以三種神器治海内。夫神者天地之心。人者天下之神物。蓋天

闇齋の學、初め專ら濂洛(一)を祖とす。晩に及び吉川惟足(二)といふ者に從ひ、本邦の所謂神道を學び、遂に一家言(三)を立つ。此道中興の祖と爲す。其言に曰く、伊弉諾尊・伊弉冊尊、陰陽の理に順つて、彝倫(四)の始を正す。之に嗣いで天照大神、三種の神器を以て海内を治む。夫れ神は天地の心、人は天下の神物(五)。蓋し天人唯一にして、其道の要は、土金の敎にあるのみ。土は卽ち敬なり。土と敬とは、倭訓(六)相通ず。而して天地の位する所以(七)、陰陽の行はるゝ所以、人道の立つ所以、皆此れより出づと。乃ち之を居敬窮理(八)の說に合せて曰く、神聖(九)の世に出づる、東西處を異にすと雖も、其旨自ら妙契(一〇)すと。跡部光海(一一)、垂加文集に跋して曰く、正直瓊矛(一二)の道に徹し、土金の敎を守り、兒屋根命(一三)宗源の傳に通じ、舍人(一四)親王正統の書に達し、天人唯一の神光を揭げ、日德を拜し神國を仰ぎ、以て忠

生レ男。即闇齋也。闇齋幼桀驁不レ可レ制。父爲托二諸妙心寺一。薙髪名絶藏主。乃一意修レ禪無二解怠一。然性行猶不レ悛。嘗與二倫鞏一論議。闇齋詞理塞。即其夜竊就二彼寢一火二紙幃一。或讀二佛典一。深夜忽拍レ案放聲大笑。衆起怪問。曰。笑二釋伽虛誕一。其豪邁不羈。皆此類也。衆議欲レ逐レ之。當二是時一。土佐公子某。居二妙心寺一。公子聰明有二藻鑑一。歎曰。此兒神姿非常。後當レ有レ爲。乃遣二之學二于土佐吸江寺一。時土佐有二鴻儒小倉三省。野中兼山一。共見二闇齋一

釋伽の虛誕を笑ふと(一〇)。其豪邁不羈(一一)、皆此類なり。衆議之を逐はんと欲す。是時に當り、土佐の公子某妙心寺に居る。公子聰明にして藻鑑(一二)有り。歎じて曰く、此兒神姿非常(一三)、後當に爲すこと有るべしと。乃ち之をして土佐の吸江寺に學ばしむ。時に土佐に鴻儒(一四)小倉三省・野中兼山有り。共に闇齋を見て亦深く之を器とす。而して其異端(一五)に陷るを惜み、之に四子(一六)及び程・朱の書を示す。則ち大に悅び、遂に斎髮(一七)して儒に歸す。時に年二十五。

(一) 近江國滋賀郡坂本村に在り、大山咋神を祭る。一名山王權現 (二) 荒馬の馴れざる如く、わるづよし (三) 山城國葛野郡花園村に在り、臨濟宗妙心寺派本山 (四) 髮を剃り落す (五) 一心に佛法修行しておこたらず (六) なかま (七) 言葉の筋がゆきつまる、言ひまかさる (八) 寢所にゆきて紙帳を燒く (九) 聲立てゝ笑ふ (一〇) 釋尊の說かれたる事のうそでたらめ (一一) 心たくましくして物にかゝはらず (一二) 人を知るの明 (一三) けだかき姿普通ならず (一四) 大學者 (一五) 邪道、佛道をさす (一六) 曾子の大學、孔子の論語、孟子の孟子、子思の中庸を指す、四書 (一七) 髮をのばす

山崎嘉。字敬義。小字嘉右衞門。號闇齋。又號垂加。平安人。

闇齋父名某。小字清兵衞。臣木下侯。後致仕業醫于京師。號淨因。母佐久間氏。有娠祈比叡山神。一夜夢拜神。時老翁携梅花一枝來納左袖。遂

巻之三

山崎嘉

山崎嘉、字は敬義、小字は嘉右衞門、闇齋と號し、又垂加と號す。平安の人。

闇齋の父、名は某、小字は清兵衞、木下侯に臣たり。後致仕して醫を京師に業とし、淨因と號す。母は佐久間氏。娠める有りて比叡(二)の山神に祈る。一夜夢に神を拜す。時に老翁梅花一枝を携へ來つて左袖に納る。遂に男を生む、卽ち闇齋也。闇齋幼にして桀驁(一)制す可からず。父爲に諸を妙心寺(三)に托し、鬀髮(四)して藏主(五)と名づく。乃ち一意禪を修めて解怠無し。然れども性行猶ほ悛らず。嘗て倫輩(六)と論議し、闇齋詞理塞る(七)。卽ち其夜竊かに彼が寢(八)に就き紙幃を火く。或は佛典を讀み、深夜忽ち案を拍つて放聲(九)大に笑ふ。衆起きて怪み問ふ。曰く、

善言。然終不レ能レ改。三省沒之後。彈劾益多。驕奢日長。由レ是怨議紛起。遂與二諸大夫一生レ隙。無レ何貶黜。尋病沒。或云。賜レ死。盡沒二入其家一。方將レ毀二祠堂一。威靈忽見。無二敢近者一云。新井白石嘗稱二其經濟一。爲二智慮自絕一レ人。森不染居士。謝二栗山伯栗一書云。近來土州有二野中某者一。開二經學一崇二宋儒一。爲レ邦輔レ治。而性質嚴酷。擊レ非如レ鷹。不レ能レ全二其終一。可レ惜焉耳。

る書に云ふ、近來土州に野中某といふ者有り。經學(一一)を開き宋儒を崇び、邦を爲め治を輔く。而るに性質嚴酷にして、非を撃つこと鷹の如く、其終を全うする能はず。惜むべきのみと。(一三)

(一) きびしくて容赦なし (二) 法をきびしくして些かも猶豫せず (三) 死際をよくして餘福が子孫にまで及ぶ (四) 怨がつもり禍があつまり身を全うせしものなし (五) 罪を責めて排斥す (六) 怨みの言むらがり起る (七) おとしりぞけらる (八) 自殺を命ぜらる (九) 一家を沒收す (一〇) 兼山の神靈あらはれて罰を與ふ (一一) 經世濟民の學 (一二) 聖人の學を開きはじめ宋の程朱等の學者を尊び國を治め政治の助けとす (一三) 人の非行を攻撃すること恰も鷹が小鳥をうつ如く嚴格

石。土佐長岡郡本山者。即其食邑也。葬二母秋田氏于此一。因改二本山一名二歸全山一。山崎闇齋作二之記一。

山崎闇齋之が記を作る。

兼山性嚴毅。其行レ政也。峻法無レ貸。其友小倉三省毎諫曰。古之功臣。善レ終而福祿及二子孫一者。皆德量寛大。垂レ仁布レ惠。若夫嚴刑重罰。雖二一時爲一レ效。其積怨畜禍。亦未レ有二自全一者。吾子熟二慮之一。兼山以爲二

兼山は性嚴毅(一)にして、其政を行ふや、峻法(二)貸すこと無し。其友小倉三省每に諫めて曰く、古の功臣が、終(三)を善くして福祿子孫に及ぶは、皆德量寛大にして、仁を垂れ惠を布けばなり。若し夫れ嚴刑重罰は、一時效を爲すと雖も、其積(四)怨畜禍、亦未だ自ら全うする者有らず。吾子之を熟慮せよと。兼山以て善言となす。然れども終に改むること能はず。三省沒するの後、彈劾(五)益〻多く、驕奢日に長ず。是に由て怨議(六)紛起し、遂に諸大夫と隙を生ず。何もなく貶黜(七)せられ、尋いで病沒す。或は云ふ、死(八)を賜ふと。盡(九)く其家を沒入し、方に祠堂を毀たんとするに、威靈(一〇)忽ち見れ、敢へて近づく者なしと云ふ。新井白石嘗て其經濟(一一)を稱して、智慮自ら人に絕すと爲す。森不染居士、栗山伯栗に謝す

喪三年。一遵文公家禮。不用浮居法。朱舜水答安東守約書云。前聞久留米磯部勘平。目下行三年之喪。今日有書至者云。土佐大夫。野中傳右衛門。葬父依聖法。甚惡佛氏。居喪三年不弛。往往使國中行喪禮。如此則貴國非盡以邪教陷其親。特人自沒溺而不能振耳。此後有行之者。亦不爲驚世駭俗。居今反古不足慮也。

久留米の磯部勘平、目下三年の喪を行ふと。今日書の至る者有りて云ふ、土佐の大夫、野中傳右衛門、父を葬るに聖法に依り、甚だ佛氏を惡む。喪に居ること三年にして弛まず、往往國中をして喪禮を行はしむと。此の如くば則ち貴國盡く邪教(四)を以て其親を陷るゝに非ず。特に人自ら沒溺(五)して振ふこと能はざるのみ。此後之を行ふ者有るも、亦世を驚し俗を駭すとを爲さざらん。今に居り(六)古に反ること慮るに足らずと。(七)

(一) 朱文公即ち朱子の家禮　(二) 佛陀の音譯、浮居の法は佛式に依る葬禮　(三) 安東省庵　(四) 佛教を斥す　(五) 佛に溺れ迷ひて心を奮ひ起すこと能はず　(六) 今後儒葬を行ふも世俗を喫驚せしむることあらざらん　(七) 今の世に居り其の稽古制に反ること心配するに及ばず

兼山世祿六千石。及兼山之身。增食萬

兼山、世祿六千石、兼山の身に及び、增して萬石を食む。土佐の長岡郡本山は、即ち其食邑なり。母秋田氏を此に葬る。因て本山を改めて歸全山と名づく。

異味。計曰、待歸。既至則命投其所漕於城下海中。不餘一箇。衆怪問。兼山笑曰。此不獨饋諸卿。使卿子孫亦飫之也。自此後。果多生蛤蜊。遂爲名產。衆始服其遠慮。

子孫をして亦之に飫かしむるなりと。此より後、果して多く蛤蜊を生じ、遂に名産と爲る。衆始めて其遠慮に服す。

(一) はまぐり　(二) 珍味を味ひ得とおもふ

土佐民俗葬以茶毗。數禁之而不止。兼山令曰。從今後。凡有罪者之死。當焚其屍而葬其遺骨。於是火化自止。

土佐の民俗葬るに茶毗(一)を以てし、數〻之を禁ずるも止まず。兼山令して曰く、今より後、凡そ罪ある者の死は、當に其屍を焚いて其遺骨を葬るべしと。是に於て火化(二)自ら止む。

(一) 火葬　(二) 上に同じ

兼山早喪父。事母至孝。執

兼山早く父を喪ひ、母に事へて至孝なり。喪を執ること三年、一に文公家禮(一)に遵つて、浮屠(二)の法を用ひず。朱舜水、安東守約(三)に答ふる書に云ふ、前に聞く

往來舟船。覆沒者甚多。昔者僧空海。爲鐫二佛像于巖竅一。以新二其冥助一矣。而兼山鑿二大竅一。破二碎水中巉巖一。終令三永世無二風濤之難一。時人有レ詩云。波濤曉起翻二銀屋一。滄海夕晴吐二玉盆一。洞港擬レ觀二神禹績一。巖窩徒誌釋兒痕。又水有二不レ生レ魚者一。嘗舟行見レ之。乃令下經レ此者必投レ石而濟上焉。越數年果生レ魚。海中至清則無レ魚。故有二此術一云。

(一)うまれつき氣象つよく才能すぐれ (二)ひろく書籍を讀み破つて古の事蹟を考ふ (三)寺院をこはして學校を建つ (四)不毛の石地を開きて豐饒なる地となす (五)おはがなへの湯の如し (六)沸騰しわきかへる (七)海水立ちさわぎて渦卷く (八)巖穴 (九)佛の加護 (一〇)巨大なる槌をもつて險しき岩を砕く (一一)白波を銀色の家に譬ふ (一二)明月上る (一三)岩穴の口は昔夏の禹王が洪水を治めし偉績を見るが如し (一四)空海が巖に佛像をきざみし痕跡あれど無用となれり

嘗來二江戸一。及二歸期一也。致二書鄕人一曰。土佐無二物不レ有。自二江戸一齎歸。惟有二蛤蜊一艘一耳。海路幸無レ恙。以二歸日一饋レ之。衆以爲レ嘗二

嘗て江戸に來り、歸期に及ぶや、書を鄕人に致して曰く、土佐は物として有らざる無し。江戸より齎し歸る、惟蛤蜊(一)一艘有るのみ。海路幸に恙無くんば、歸るの日を以て之を饋らんと。衆以て異味(二)を嘗むと爲し、日を計つて歸を待つ。既に至れば則ち命じて其漕する所を城下の海中に投ぜしめ、一箇を餘さず。衆怪み問ふ。兼山笑つて曰く、此は獨り諸を卿に饋るのみならず、卿の

兼山天資剛毅英特。博閲二載籍一考二古昔一。及二其得一レ志也。即以レ所レ學施二之一國一。其毀二佛宇一興二庠校一。變二磽确一爲二膏腴一。或置二農兵一。或栽二藥草一。或育二蜜蜂一等。種種新政。利二于上下一者不レ少云。其功業最可レ觀者。有二津呂御崎者一。海沸如二鑊之湯一。朧朧滾起。洶洶盤旋。危險不レ可レ言。自レ古

兼山(一)、天資剛毅英特(二)、博く載籍を閲し古昔を考ふ。其の志を得るに及ぶや、即ち學ぶ所を以て之を一國に施し、其の佛宇(三)を毀ちて庠校を興し、磽确(四)を變じて膏腴となし、或は農兵を置き、或は藥草を栽ゑ、或は蜜蜂を育する等、種種の新政、上下を利する者少なからずと云ふ。其功業の最も觀る可き者は、津呂の御崎といふ有り、海の沸くこと鑊(五)の湯の如く、朧朧滾起(六)、洶(七)洶盤旋、危險言ふ可からず。古より往來の舟船にして、覆沒する者甚だ多し。昔者僧空海、爲に佛像を巖竅(八)に鐫り、以て其冥助(九)を祈る。而るに兼山大策(一〇)を舉げ、水中の巉巖を破碎し、終に永世に風濤の難無からしむ。時人詩有り云ふ、波濤曉に起りて銀屋(一一)を翻し、滄海夕に晴れて玉盆(一二)を吐く、洞港神禹(一三)の績を觀るに擬し、巖窩(一四)徒に誌す釋兒の痕と。又水の魚を生せざる者有り。嘗て舟行して之を見、乃ち此を經る者をして必ず石を投じて濟らしむ。海中至つて清ければ則ち魚無し。故に此術有りと云ふ。

野中止。字良繼。小字傳右衛門。號二兼山一。土佐人。世仕二國侯一。

兼山少時來二江戸一。得二中庸集註一讀レ之。雖レ未三盡了二其義一。喜レ非下佛說多二虛誕一之比上。乃齎歸請二谷時中一(名素有)講レ之。從レ是始知レ有二聖人之道一。以爲朱仲晦能得二其旨一。因求二朱書于四方一。遂歲遣二人于長崎一。購二得舶來書一。或翻刻之以利二後學一。如二山崎闇齋一亦出二其門下一。然而無レ有二著述傳レ後者一。世惜レ之。

野中止

野中止、字は良繼、小字は傳右衛門、兼山と號す。土佐の人、世〻國侯に仕ふ。

兼山、少時江戸に來り、中庸集註を得て之を讀む。未だ(一)盡く其義を了せずと雖も、(二)佛說の虛誕多きの比に非ざるを喜ぶ。乃ち齎し歸り谷時中(名素有)に請うて之を講ぜしむ。是より始めて聖人の道有るを知り、以爲へらく(三)朱仲晦能く其旨を得たりと。因つて朱書を四方に求め、遂に歲〻人を長崎に遣り、舶來の書を購得し、或は之を翻刻して以て後學に利す。山崎闇齋の如き亦其門下に出づ。然して著述の後に傳はれる者有る無し。世之を惜む。

(一)十分には其の意味を會得せず　(二)佛教の如くつくり事の多からざるを喜ぶ　(三)朱子をいふ

後。先子將下其所二什襲一先生墨蹟一張上付レ我。且戒敕曰。此是聖人之手澤。兒善藏レ之。勿レ使二不レ知者汚一レ焉。今吾子慕二先生一。則使レ得レ觀レ之。乃起更二著禮服一。出二一軸於櫃一。捧置二案頭一。頂禮跪拜者。猶三緇徒之崇二佛像一也。客始起敬以爲。藤樹畎畝之一匹夫。而見レ重二于士大夫之間一如レ此。則其道德。與二世之所レ謂儒者一。迥不レ同。我豈得レ不レ禮乎。盥嗽再拜。而後觀レ之。

れ豈に禮せざるを得んやと、盥嗽再拜して、後之を觀る。(一一)

(一)話の序で　(二)行動を明白に知り居らん　(三)亡父　(四)大切にしてしまひ居る物　(五)書一幅を自分に與へ　(六)いましめさとす　(七)手あかのつきたるもの、此處は眞蹟の意　(八)机上　(九)叩頭して跪き拜すること僧侶が佛像を崇むる如し　(一〇)田の畔、即ち田舍の身分もなきもの　(一一)手あらひ口そゝぐ

藤樹講二書於藤樹下一。因以爲レ號。或云生二於藤樹下一。或云書窗外有二一株藤一。或云。其學倚二附古人一。不レ立二自己見一。猶二藤緣レ物。故取以自號。未レ詳二孰眞一。

藤樹、書を藤樹の下に講ず。因つて以て號となす。或は云ふ、藤樹の下に生ると。或は云ふ、書窗の外に一株の藤有りと。或は云ふ、其學古人に倚附して、(一)自己の見を立てず。猶は藤の物に緣るがごとし。故に取つて以て自ら號すと。未だ孰れか眞なるを詳かにせず。

(一)古人の學說にたより自己獨特の見識を立てず

今日始來絃
誦地。古藤影
掩舊茅堂。

藤樹同里人。
來二江戸一嗣二某
家一。一日有レ客。
言次及レ儒。客
問曰。中江藤
樹子之里人
也。聞其學爲レ
世所レ仰。子必
審二其行誼一。請
爲レ吾語。其人
改レ容曰。藤樹
先生。吾先子
之所二師事一也。
因悉二其平生一。
實不レ乖二近江
聖人名一也。及三
我出爲二此家

講ぜし地 (五) 庭上の古藤の影昔の茅葺の書院をおほひてそのかみの面影を偲ばしむ

藤樹と同里の人、江戸に來りて某家を嗣ぐ。一日客あり、言次(一)儒に及ぶ。客問うて曰く、中江藤樹は子の里人なり。聞く其學世の爲に仰がると。子必ず其行誼(二)を審かにせん。請ふ吾が爲に語れと。其人容を改めて曰く、藤樹先生は、吾が先子(三)の師事する所なり。因つて其平生を悉せり。實に近江聖人の名に乖かざるなり。我が出でて此家の後たるに及び、先子其什襲(四)する所の先生の墨蹟(五)一張を將つて、我に付し且つ戒敕(六)して曰く、此は是れ聖人の手澤(七)なり。兒善く、之を藏め、知らざる者をして汚さしむると勿れと。今吾子先生を慕ふ。則ち之を觀るを得しめんと。乃ち起ちて禮服を更め著け、一軸を櫃より出だし、捧げて案頭(八)に置き、頂禮(九)跪拜すること、猶ほ緇徒の佛像を崇むるがごとし。客始めて起敬し、以爲へらく、藤樹や吠畝の一匹夫のみ。而して士大夫の間に重んぜらるること此の如きは、則ち其道德(一〇)、世の所謂儒者と逈かに同じからざればなり。我

農夫拜掃甚恭。士心訝レ之。因問曰。爾于ニ藤樹ー有ニ何親故ー而敬禮乃爾。農夫曰。欽ニ仰藤樹先生ー。豈惟余哉。闔邑皆然。父老毎語ニ其子弟ー曰。吾里父子有レ禮。兄弟有レ恩。室無ニ忿疾之聲ー。面有ニ和煦之色ー者。職由ニ藤樹先生之遺教ー也。此所三以無ニ一人不ㇾ戴ニ其恩ー也。於レ是士變レ容曰。世稱爲ニ近江聖人ー。吾乃今而知ニ其非ニ虚讃ー也。即敬ニ拜其墓ー。厚謝ニ農夫ー去。

無く、面に和煦(五)の色有るは、職として藤樹先生の遺教に由るなりと。此れ一人として其恩を戴かざる無き所以なりと。是に於て士、容を變じて曰く、世稱して近江聖人となす。吾れ乃ち今にして其の虚讃(六)にあらざるを知ると。即ち其墓に敬拜し、厚く農夫に謝して去る。

(一)すき、農具　(二)清らかなる衣服　(三)全村のものかくの通り　(四)いかりにくんで罵る聲　(五)やはらぎ樂む顏色　(六)其實質なき讃辭、そらぼめ

享保辛丑。伊藤東涯過ニ藤樹書院ー。有レ詩云。江西書院聞レ名久。五十年前訓ニ義方ー。

享保辛丑(一)、伊藤東涯、藤樹書院を過る。詩有り云ふ、『江西(二)の書院名を聞くこと久し、五十年前義方(三)を訓ふ、今日始めて來る絃誦(四)の地、古藤影は掩ふ舊茅堂(五)』と。

(一)六年　(二)近江の西、即ち藤樹書院　(三)正しき道、子弟を敎育せるをいふ　(四)絃歌讀誦の地、即ち學問を

藤樹鄕黨皆薰二其德一。雖レ在二商賈一。見レ得思レ義。若二旅舍茗肆一。有二客所レ遺物一。則必置二之閣上一。以俟二遺者之復來一。歷年之後。塵土坌滿。雖二煙管煙包類一。竟不二收用一。

藤樹の鄕黨皆其德に薰ず。(一)商賈に在りと雖も、得るを見て義を思ひ、旅舍茗肆(二)の若きも、客の遺る丶所の物有れば、則ち必ず之を閣上(三)に置き、以て遺者の復來るを俟つ。歷年の後、(四)塵土坌滿す。煙管煙包(五)の類と雖も、竟に收用せず。

(一)村人皆藤樹の德に感化せらる　(二)宿屋茶屋　(三)棚　(四)數年の後塵埃でうまる　(五)きせる、烟草入

某州一士人。經二過藤樹之故里一。欲レ弔二其墳墓一。問二路農夫一。農夫卽舍二耒耜一。徑趨入レ屋。更二著潔服一出。士跟レ之行。旣而至二墓所一。

某州の一士人、藤樹の故里を經過し、其墳墓を弔はんと欲して、路を農夫に問ふ。農夫卽ち耒耜(一)を舍て、徑に趨つて屋に入り、潔服(二)を更め著て出づ。士之に跟いて行く。旣にして墓所に至る。農夫拜掃甚だ恭し。士、心に之を訝る。因つて問うて曰く、爾が藤樹に于ける、何の親故ありて敬禮乃ち爾るかと。農夫曰く、藤樹先生を欽仰すること、豈に惟余のみならんや。闔邑(三)皆然り。父老每に其子弟に語つて曰く、吾里、父子禮有り、兄弟恩有り、室に忿疾(四)の聲

於酒樓。望二見藤樹一。相謂曰。彼以二聖人一得レ稱者也。聖人其如二吾黨一何。試唾二其面一辱レ之。直來逼。聲色並厲曰。鈍賊得レ非二世所謂今之聖人一。而胡沽二虚名一以誣二罔人一邪。戟レ手向レ之。藤樹徐陳二姓名一曰。少長二于近江農家一。以二其小識一レ字。見レ推爲二里中童蒙師一耳。安得レ若二君之言一乎。其容貌言吐感二動人一。神祇組不レ覺節折曰。吾黨過矣。吾黨過矣。願先生宥二無禮之罪一。從レ今敬受二教於門下一。或謂。藤樹未三嘗來二江戸一。姑録二口碑一俟二後考一。

聖人に非ざるを得んや。而るに(三)胡ぞ虚名を沽つて以て人を誣罔するか。と。手を戟にし之に向ふ。藤樹徐に姓名を陳べて曰く、少より近江の農家に長じ、其小しく字を識るを以て、推されて(四)里中童蒙の師と爲れるのみ、安ぞ君の言の若きを得んやと。其容貌言吐人を感動す。神祇組覺えず(五)節折して曰く、吾黨過てり。吾黨過てり。願はくは先生無禮の罪を宥せ。今より敬んで教を門下に受けんと。(或ひと謂ふ、藤樹未だ嘗て江戸に來らずと。姑らく口碑(六)を録して後考を俟つ)

(一) 男だてを好む　(二) 聲をあらゝげ顔色をはげしくして　(三) 何を以て名實相偕はざる虚名を天下に賣りひろめて人をあざむきしふるか　(四) 里の子供の師匠　(五) 頓に舊を改め己を屈して曰く　(六) 世に言ひ傳へられたる話

手。少頃曰。吾慮レ之。假戰而不レ利。無二輕卸以與レ汝之理一。即撫レ刀起。且曰。戰者必先以二姓名一告。我近江人。中江與右衛門也。於レ是賊大驚。投レ刀羅拜曰。敝鄕雖二五尺童子一。莫下不レ知三藤樹先生爲二聖人一者上。吾黨雖二攘攫爲レ活。豈得レ施二之聖人一哉。願先生矜二其不知一而宥レ之。藤樹曰。人誰無レ過。過而能改。善孰大レ焉。乃說レ之以二知行合一之理一。則賊咸感泣。遂率二其黨一爲二良民一。

㈠王陽明の致知說、朱子は知を客觀的に見陽明は主觀的に見る ㈡士農工商を引接してをしふ ㈢善心をおこさざるものなし ㈣財布 ㈤立所に斬殺せんとなり ㈥まあ待つてくれ ㈦目を閉ぢ腕をこまぬく ㈧しばらく ㈨列び坐して拜む ㈩人の物を掠め取ることをもつて生活す (一一)知と行とは同一、實行にあらはれずば眞の知と言ひがたしといふ說

嘗來二江戶一。一日過二街市一。適大小神祇組。組猶レ黨也。當時都下士。多好二豪俠一共結爲レ黨。其所レ帶大小二刀柄脣一鏤以二神祇二字一。故人呼號二大小神祇組一。或云。其結レ黨。盟二之大小神祇一。故云レ爾。飲二

嘗て江戶に來り、一日街市を過るに、適〻大小の神祇組、（組は猶ほ黨のごとし。當時都下の士、多く(一)豪俠を好み、共に結んで黨を爲す。其帶ぶる所大小二刀の柄脣、鏤むるに神祇の二字を以てす。故に人呼んで大小の神祇組と號す。或は云ふ、其の黨を結ぶや、之を大小神祇に盟ふ。故に爾云ふと）酒樓に飲む。藤樹を望見し、相謂つて曰く、彼は聖人を以て稱を得る者なり。聖人其れ吾黨を如何。試に其面に唾して之を辱めんと、直に來り逼り、(二)聲色並び厲まして曰く、鈍賊も世に所謂今の

起于善一。今世諸儒。絶無二近似者一。嘗夜自二郊外一歸。有二賊數人一突從二林中一出。遮レ路曰。客解レ槖以供二我飮酒一。藤樹乃熟視。擧二錢二百一授レ之。賊拔レ刀。叱曰。所二以求一レ客者。豈止是而已哉。速卸二衣裳及佩刀一。否則不レ須二多言一。藤樹神色不レ變曰。姑緩レ之。吾慮二其授與レ不孰是一。乃瞑目叉

ち熟視し、錢二百を擧げて之を授く。賊刀を拔き、叱して曰く、客に求むる所以の者、豈に止是れのみならんや。速かに衣裳及び佩刀を卸け。否らずんば則ち多言(五)を須ひじと。藤樹神色變ぜずして曰く、姑(六)く之を緩うせよ。吾れ其の授くると不ると孰か是なるを慮らんと。乃ち瞑目叉手す。少頃(八)にして曰く、吾れ之を慮るに、假ひ戰つて利ならずとも、輕(七)しく卸いて以て汝に與ふるの理無しと。卽ち刀を撫して起ち、且つ曰く、戰ふ者は必ず先づ姓名を以て告ぐ。我は近江の人、中江與右衞門なりと。是に於て賊大に驚き、刀を投げ羅拜(九)して曰く、敝鄕五尺の童子と雖も、藤樹先生の聖人たるを知らざる者なし。吾黨攫攫(一〇)して活を爲すと雖も、豈に之を聖人に施すことを得んや。願くは先生其不知を矜んで之を宥せと。藤樹曰く、人誰か過無からん。過つて能く改むる、善孰か焉より大ならんと。乃ち之に說くに(一一)知行合一の理を以てす。則ち賊戚感泣し、遂に其黨を率ゐて良民となる。

公侯辟召。前後皆峻拒不レ應。服南郭殺軒加世君墓誌載。備前前少將侯。尊二尚儒術一。令三熊澤先生矜二式國中一。熊澤先生薦二江州處士藤樹中江先生一。於レ是侯玉帛具レ禮聘レ之。而藤樹以二老且疾一辭不レ至。令二其子及諸弟子至一。云云。

を尊尚し、熊澤(六)先生をして國中に矜式(七)たらしむ。熊澤先生江州の處士(八)藤樹中江先生を薦む。是に於て、侯玉帛(九)禮を具して之を聘す。而るに藤樹老且つ疾を以て辭して至らず。其子及び諸弟子をして至らしむ云々と。

㊀學に篤く行修まる故を以て評判天下に廣まる　㊁めしかゝへんとす　㊂きびしく拒む　㊃服部南郭、名は元喬、徂徠の門人　㊄新太郎少將光政　㊅熊澤蕃山　㊆師表たらしむ　㊇浪人　㊈寶玉や絹帛を賜り禮貌を具備して招く

藤樹篤信二王文成致知之學一。先二躬行一後二文詞一。毎引二四民一訓二諭之一。人無二賢愚一皆服二其德一。莫レ不レ興二

藤樹篤く王文成致知(一)の學を信じ、躬行を先にし文詞を後にし、毎に四民(二)を引きて之を訓諭す。人賢愚となく皆其德に服し、善(三)に興起せざるなし。今世の諸儒、絕えて近似する者無し。嘗て夜郊外より歸る。賊數人有り、突として林中より出で、路を遮つて曰く、客、橐(四)を解いて以て我が飲酒に供せよと。藤樹乃

乃獨返二大洲一。遂陳レ情。乞二歸終レ養。不レ允。於レ是鬻二家什一得二數十金一。以償レ債。又以二其餘一易レ穀積二之家一。意在レ還二是歳俸給一也。而仰レ天心誓レ不レ事二二姓一。而后出亡。藤井懶齋。本朝孝子傳。錄二此事一。作レ贊曰。淡海吹起。陸王儒風。豈翅善レ身。誨レ人有レ忠。爲レ母顚レ祿。旋レ鄕色愉。于嗟篤孝。性乎學乎。

で心に二姓に事へざるを誓ひ、后出でて亡ぐ。藤井懶齋が本朝孝子傳、此事を錄し、(六)贊を作して曰く、淡海(八)吹き起す、陸王の儒風。(七)豈(九)に翅に身を善くするのみならんや、人に誨へて忠有り。母の爲に祿(一〇)を顚し、鄕に旋つて色愉ぶ。(一一)于嗟篤孝、性か學かと。

(一)近江　(二)夢の間も忘るゝ時なし　(三)母を養ふことを遂げんことを乞ふ　(四)家財道具　(五)負債をはたす　(六)二君に仕へず　(七)名は誠、筑後の人、儒を山崎闇齋に學ぶ　(八)淡海は近江、陸王の儒風は陸象山・王陽明の學風、中江藤樹が近江にて王學を講じ、大に世を德化せしをいふ　(九)たゞ自分の身を善くするのみならず人を誨ふるに誠實なり　(一〇)祿をすてたる義にていへるならん　(一一)此の至孝は性質の然らしむる所か將た學習の然らしむる所か

藤樹以二篤學修行一。聲施二海內一。去二大洲一後。

藤樹、篤學修行を以て、(一)聲海內に施す。大洲を去りて後、公侯辟召す。(二)前後皆峻拒して應ぜず。(三)服南郭、(四)穀軒加世君の墓誌に載すらく、備前前少將侯儒術(五)

於庶人。壹是皆以修身爲本。大嘆悟曰。幸此經之存于今也。聖人豈不可學而至焉乎。十七。京師僧來講論語。當是時。大洲之俗。惟武弁是競。無敢從學者。獨藤樹日夕往聽焉。僧居僅月餘而去。因得四書大全讀之。而往往爲僚友所毀謗。於是晝則深藏之。至夜始開卷。

僧居ること僅かに月餘にして去る。因つて四書大全を得て之を讀む。而るに往往僚友(四)の爲に毀謗せらる。是に於て晝は則ち深く之を藏し、夜に至りて始めて卷を開く。

(一)總角、童兒の頃より　(二)聖人の境地と雖も學習して到達せられざることなし　(三)武術を競ひ學ぶ　(四)同役のためにそしらる

藤樹在大洲。慕母之獨居鄉。夢寐無已時。嘗乞歸省。欲即伴來。然母不欲踰波濤如他鄉。則無復如之何。

藤樹大洲にあり、母の獨り鄕(一)に居るを慕ひ、夢寐(二)已む時無し。嘗て乞うて歸省す。卽ち伴ひ來らんと欲す。然るに母波濤を踰え他鄕に如くを欲せず、則ち復之を如何ともする無し。乃ち獨り大洲に返る。遂に情を陳べ、歸つて養(三)を終へんと乞ふ。允されず。是に於て家什(四)を鬻ぎ數十金を得、以て債(五)を償ふ。又其餘を以て穀に易へ之を家に積む。意、是歲の俸給を還すにあり。而して天を仰い

之。嘗老泉出不在時。東坡竊覘レ之。則孟子也。此事諸書無レ所レ載。蓋彼邦相傳言也。

（一）室鳩巣　（二）支那にて昔より言ひ傳への言

中江原

中江原。字惟命。小字與右衞門。號二藤樹一。又號二頤軒一。又號二嘿軒一。近江人。

藤樹祖加藤侯臣。父隱二於農一。先レ祖沒。祖乃拉二藤樹一之二伊豫大洲一。藤樹童丱如二老成一。年甫十一。一日讀下大學自二天子一以至二

中江原、字は惟命、小字は與右衞門、藤樹と號す。又頤軒と號し、又嘿軒と號す。近江の人。

藤樹の祖は加藤侯の臣なり。父、農に隱れ、祖に先んじて沒す。祖乃ち藤樹を拉して伊豫の大洲に之く。藤樹童丱(一)にして老成の如し。年甫めて十一、一日、大學の天子より以て庶人に至るまで、壹に是れ皆身を修むるを以て本と爲すを讀み、大に嘆悟して曰く、幸に此經の今に存するや。聖人(二)、豈に學んで焉に至る可からざらんやと。十七、京師の僧來りて論語を講ず。是時に當り、大洲の俗、惟武弁(三)是れ競ひ、敢へて學に從ふ者無し。獨り藤樹日夕往いて聽く。

計校。然使二先君見一レ之。必有三一元當二處置一。惜乎其不レ及也。今試以二一事一辨レ之。所レ引獨立之言。非レ誣則妄。獨立與二先生一相知日久。何得レ言レ非二面知一。其跋二安南供役紀事一。眞蹟見在。稱二先生之特操一。不二一而足一。至レ云下言奮氣爭。錚錚鐵石。今古上下。無二其事一無二其人一。凜凜大節。可レ稱二今古第一義幟一。此語何與二前言一相戾也。獨立雖二披剃易行之徒一。而其反覆。未二必如一レ此已甚一。故曰非レ誣則妄。

ざれば則ち妄なりと。

(一) 大高坂芝山 (二) 鵜澤眞昌 (三) あはせて攻擊す (四) 支那の歸化人の名 (五) 親しく面貌を知れるに非ず (六) 市中の物賣商人 (七) 中村春帆、字は伯行、水戸の人 (八) 酒泉弘、字は道甫、筑前の人 (九) 甚しく不似合の組合せ也 (一〇) そしる (一一) つまらぬ小人 (一二) 怪しき言を吐くや (一三) 唇を動かすに過ぎざれば固より論ずるに足らず (一四) 根本的に (一五) 無きことを有りといふ (一六) でたらめ (一七) 獨立の手蹟今に在り (一八) 言語激奮し、氣象凜々として鐵石の鳴るが如く、世の古今上下に於て、舜水の如き行爲もなく人物も無く、潔き節義は古今第一等 (一九) 剃髮し常人の行を變じたる僧侶

室師禮曰。朱之瑜云。東坡少時。父老泉常自二枕中一出レ書讀レ之。而深祕不レ使二人見一レ

(二〇)室師禮曰く、朱之瑜云ふ、東坡の少時、父老泉常に枕中より書を出して之を讀む。而して深く祕し人に之を見しめず。嘗て老泉出でて不在の時、東坡竊かに之を覘へば、則ち孟子なりきと。此事諸書に載する所無し。蓋し彼の(二一)邦相傳の言なりと。

元贇。且學ニ獨立言一曰。元贇之瑜非ニ面知一。然曲得レ傳ニ聞其實一也。贇是市井之販夫。瑜是南京之漆工。彼儔奚暇レ爲レ學。又奚作ニ詞章一乎。安澹泊。與ニ村篁溪泉竹軒一書。辨レ之曰。舜水元贇並稱。可レ謂ニ不倫之甚一。況又極レ口譏詆。何物么麼。敢作ニ如レ此鬼恠一。此輩簸ニ弄脣吻。原不レ足ニ

贇は是れ市井の販夫、瑜は是れ南京の漆工なり。彼の儔奚ぞ學を爲すに暇あらん。又[六]奚ぞ詞章を作らんやと。安澹泊、[七]村篁溪・[八]泉竹軒に與ふる書に、之を辨じて曰く、舜水・元贇の並稱は、[九]不倫の甚だしきものと謂ふ可し。況や又口を極めて譏詆[一〇]するをや。何物の么麼[一一]、敢へて此の如き鬼恠[一二]をか作せる。此輩[一三]脣吻を簸弄す。原計校するに足らず。然れども先君をして之を見しめば、必ず一元當に處置すべきに有らん。惜いかな其の及ばざるや。今試に一事を以て之を辨ぜん[一四]。引く所の獨立の言は、誣[一五]にあらざれば則ち妄[一六]なり。獨立、先生と相知る、日久し。何ぞ面知に非ずと言ふを得ん。其の安南供役紀事に跋せるは、眞蹟見在[一七]せり。先生の特操を稱すること、一にして足らず。言奮ひ[一八]氣爭ひ、錚錚鐵石、今古上下、其事無く其人無し。凛凛たる大節、今古第一義幟と稱す可しと云ふに至つては、此語何ぞ前言と相戻れるや。獨立、披剃[一九]易行の徒なりと雖も、而も其反覆、未だ必ずしも此の如く已甚しからず。故に曰く誣に非

文恭酷愛櫻花。庭植數十株。每花開賞之。謂覺等曰。使中國有之。當冠百花。迺知。或者認爲海棠。可謂櫻花之厄。義公環植櫻樹於祠堂旁側。存遺愛也。

賞す。覺(一)等に謂つて曰く、中國をして之れ有らしめば、當に百花に冠たるべし。迺ち知る、或者は認めて海棠と爲すは、櫻花の厄なりと謂ふべし(二)と。義公櫻樹を祠堂の旁側に環植するは、遺愛を存する(三)なりと。

(一) 安積澹泊の名　(二) 或者は櫻花を以て支那の海棠と見なすは櫻花にとつて甚だ災難なり　(三) 舜水の生前愛せし所のものを存す

舜水歸化歷年所。能倭語。然及其病革也。遂復鄉語。則侍人不能了解。

舜水歸化して年所を歷、倭語を能くす。然るに其病革まるに及ぶや、遂に鄉語(一)に復す。則ち侍人了解する能はず。

(一) 支那本國の言語にかへる

大高芝山與鵜眞昌書。並駁舜水與陳

(一)大高芝山の鵜眞昌(二)に與ふる書に、舜水と陳元贇とを並駁(三)す。且つ獨立(四)の言を擧げて曰く、元贇・之瑜は面知(五)にあらず。然れども曲に其實を傳聞するを得たり。

日清談。隼旟畫戟明二千里一。紙帳繩牀自一菴。金奏屢陳容二客和一。玉山不レ動看二賓酣一。我來邂逅逢二新政一。忘却漂流身在レ南。

(一二) 舜水が安南の客舍に在りし時の作 (一三) 大海に遺されたる珠を見出したる義にて、世に逸せられたる名詩を指す (一四) 安南王を頌せる詩なり。劇務を治めて靜かに兵馬を休めて平和を樂しむ。策は馬鞭、銜はくつは (一五) 風鈴を吊せし軒の下に無事平和に高尚なる談話をなす (一六) 隼旟ははやぶさを畫けるはた、畫戟は畫模樣あるほこ (一七) 紙の垂幕と繩をわがねて作りし牀は草庵に似たり (一八) 樂の初めには先づ鐘を鳴らす。屢々音樂を發して客の合奏をゆるす (一九) 醉ひ倒るゝを玉山の頽るゝに譬ふ。此處は安南王が醉へど亂れずして賓客の酒興の盛なるを看るをいふ (二〇) めぐりあふ

舜水文集二十八卷。義公與二世子一共所二編輯一也。每卷署レ名冠以二門人二字一。安東省菴稱爲二公侯之尊。尊レ師如レ此。眞百世之美事。誠然。

舜水文集二十八卷、義公、(一)世子と共に編輯する所なり。每卷名を署し冠するに門人の二字を以てす。安東省菴、稱して、公侯の尊、師を尊ぶこと此の如し、(二)眞に百世の美事なりと爲す。誠に然り。

(一) 光圀公が世子と編す (二) 眞に世にめつたに無き美事

湖亭涉筆曰。

湖亭涉筆に曰く、文恭酷だ櫻花を愛し、庭に數十株を植ゑ、花開く每に之を

或誦二舜水詩一。九州如レ瓦解。忠信苟偸レ生。受レ詔蒙塵際。晦レ跡到二東瀛一。回天謀未レ就。長星夜夜明。單身寄二孤島一。抱レ節比二田横一。已聞鼎命變。西望獨呑レ聲。又安澹泊湖亭涉筆。朱文恭遺事。擧下在二安南旅寓一所レ賦詩一首上。以爲二滄海之遺珠一。其詩云。治レ劇從容綏二策銜一。鈴軒無事

或ひと舜水の詩を誦す。九州(一)瓦の如く解け、忠信(二)苟も生を偸む、詔(三)を受く蒙塵の際、跡を晦して東瀛(四)に到る、回天の(五)謀未だ就らず、長(六)星夜夜明かなり、單身孤島(七)に寄せ、節を抱いて田横(八)に比す。已に聞く鼎(九)命の變、西望して獨り聲を呑む(一〇)と。又安澹泊(一一)が湖亭涉筆、朱文恭の遺事に、安南(一二)の旅寓にありて賦する所の詩一首を擧げ、以て滄海の遺珠(一三)となす。其詩に云ふ、劇(一四)を治めて從容策銜を緩うし(一五)、鈴軒無事日に淸談、隼旟(一六)晝戟千里に明かに、紙帳(一七)繩牀自ら一菴、金奏(一八)屢ゝ陳して客の和を容れ、玉山(一九)動かず賓の酣なるを看る、我れ來つて邂逅新政(二〇)に逢ひ、忘却す漂流身南にあるを。

(一) 支那全土を夏の禹王九州に分ちしより稱す (二) 忠信の心を抱きながらかりそめに生きながらふ (三) 明帝が難を避けて逃れ出でし時詔を受く (四) 東海、日本 (五) 天日を既に墜つるに引きかへす如き明室復興の事業未だ成就せず (六) 不祥の星なり (七) 離れ島の日本に一身を寄す (八) 齊人なり、齊漢の爲に亡ぼさるゝや五百餘人を率ゐ海中の島にのがる。漢の高祖之を召す。横卽ち召に應じゆく途中に於て、共に肩をならべし漢王に仕ふるを恥ぢて自殺す、此は舜水が自己の境遇を田横流浪の身に比せしなり (九) 夏の禹王の制せし九鼎は傳國の寶器たり。國家覆滅の變をいふ (一〇) 飲泣す (一一) 安積艮齋、名は覺、水戶の大日本史の編纂は澹泊の功多きに居る

何益ニ於治理一。僧推月下門。驟則驟矣。曾何補ニ於民事一。雞聲茅店月。人跡板橋霜。新則新矣。曾何當ニ於事機一。而且撚レ髭嘔レ心。儻或不レ能ニ工緻一。徒足レ供ニ人指摘一。又何益ニ詩名一。是以其集中不レ錄ニ一首一。然猶評ニ李杜一曰。李不レ如レ杜。李秀而杜老。李奇險而杜平淡。李用ニ成レ仙等語一。更不レ經ニ煉丹一等。殊不レ雅。不レ若ニ杜家常茶飯有レ味也。然不ニ奇奥之極一。造ニ不レ得平淡一。有レ意レ學ニ平淡一。便水平煎豆腐湯矣。

緻なる能はずんば、徒(九)に人の指摘に供するに足るのみ。又何ぞ詩名に益あらんと。是を以て其集中一首を錄せず。然れども猶ほ李杜(一〇)を評して曰く、李は杜に如かず。李は秀(一一)にして杜は老(一二)、李は奇險(一三)にして杜は平淡(一四)なり。李は仙と成る等の語を用ふ。更に煉丹を經ず等、殊に雅ならず。杜の家常茶飯(一五)味有るに若かず。然れども奇奥の極ならずんば、平淡に造り得ず。平淡を學ぶに意あれば、便ち水平煎豆腐湯(一六)のみ。

(一) 詩賦のために時間を費すは不可　(二) 隋の薛道衡の有名なる詩句　(三) 國の治めかたに利益するところ無し　(四) 唐の賈島の詩句　(五) 精緻微密　(六) 唐の温庭筠の商山早行の詩の句、歐陽修が羈孤行旅流離辛苦の態歎字の中に見ゆと評せるもの　(七) 事の機宜に役立たず　(八) 苦心して詩句を案ずるさま　(九) 徒に人の批難を受けるだけのものにて何等自己の詩人としての名望に利するところなし　(一〇) 唐の詩人、杜甫と李白　(一一) 高く秀づ　(一二) 老錬　(一三) 奇怪　(一四) すなほ　(一五) 日々の常食　(一六) 奇拔にして奧妙の極に至らざれば眞の平淡には至り得ず

舜水有二二男一女一。長大成。字集之。次大咸。字咸一。共殉レ節不レ事レ淸。而先二舜水一卒。大成亦擧二二男一。曰毓仁。曰毓德。延寶六年。毓仁慕二舜水一而來二長崎一。義公遣二今井弘濟往通二消息一。然終不レ得下與二舜水一相見上而歸。

舜水、二男一女有り。長は大成、字は集之、次は大咸、字は咸一。共に節に殉つて淸に事へず。而して舜水に先んじて卒す。大成亦二男を擧ぐ。曰く毓仁、曰く毓德。延寶六年、毓仁舜水を慕つて長崎に來る。義公、今井弘濟をして往いて(一)消息を通ぜしむ。然るに終に舜水と相見るを得ずして歸る。

㊀ 便りを聞かせる

舜水不レ好レ作レ詩。與二奥村庸禮一書曰。吟レ詩作レ賦非レ學也。而棄レ日廢レ時。必不可者也。空梁落二燕泥一。工則工矣。曾

舜水、詩を作るを好まず。奥村庸禮に與ふる書に曰く、詩を吟じ賦を作るは學に非るなり。而るに(一)日を棄て時を廢するは、必ず不可なる者なり。(二)空梁燕泥を落す、工は則ち工なり、曾て何ぞ(三)治理に益あらん。(四)僧は推す月下の門、(五)覈は則ち覈なり、曾て何ぞ民事に補あらん。(六)雞聲茅店の月、人跡板橋の霜。新は則ち新なり、曾て何ぞ(七)事機に當らん。而して且つ(八)髭を撚り心を嘔く。儻し或は工

答二田犀一書曰。中秋爲二知友王侍郎完節之日一。慘遁二柴市一。烈倍二文山一。僕至二其時一備懷二傷感一。終身遂廢二此令節一。

舜水鄉國居宅。及先塋。皆與二王文成一相近。與二野節一書云。但念先父母墳墓近二城市一。恐遭二虜人殘毀一。先祖及高曾墳。去レ城皆不レ能二一里一。蔭木脩拔通邑所レ無。高曾墳與二陽明先生塋一比鄰。其樹木之美。槩不レ能レ及二荒壠一。虜人求二大木一造レ船。此必遭二殘壞一者。又答二佐野回翁一書云。王文成爲二僕里人一。然燈相炤。鳴雞相聞。

舜水の鄕國の居宅、及び先塋(一)は、皆王文成(二)と相近し。野節に與ふる書に云く、但だ念ず(三)先父母の墳墓城市に近きを。恐らくは虜人(四)の殘毀に遭はん。先祖及び高曾の墳、城を去ること皆一里なる能はず。蔭木脩拔通邑無き所なり(五)。高曾の墳は陽明先生の塋と比鄰し、其樹木の美、槩して荒壠に及ぶ能はず。虜人大木を求めて船を造る。此れ必ず殘壞(六)に遭ふ者なりと。又佐野回翁に答ふる書に云ふ、王文成は僕の里人たり。然燈相炤らし、鳴雞相聞ゆと。

(一)先祖代々の墓地　(二)王陽明の諡　(三)父母の墳墓城下近きところにあるを心配す　(四)淸人のために破壞せられん　(五)墓地を蔽ふ樹木の長大なること邑中第一　(六)陽明先生の墓側の樹は我家の墓地の樹の美なるに及ばず

餘金。臨終盡納之水戸庫内。嘗謂曰。中國乏黄金。若用此于彼。一以當百矣。新非白石謂。舜水縮節積餘財。非苟而然矣。其意蓋在充擧義兵以圖恢復之用也。然時不至而終。可惜哉。

る　(七)自ら給すること倹約にして費さず　(八)あざけり笑ふ　(九)死する際　(一〇)日本の黄金を支那にて使用せば百倍の價値を發揮す　(一一)舜水の節を屈して使ひあまりの財を蓄へしは只徒らに然せしに非ず　(一二)明室の再興をはかる軍用金

在彼與經略直浙兵部左侍郎王翊。同志偕謀恢復。而王翊與清兵戰敗而死。實八月十五日也。數年後舜水聞之於邑。作文祭之。從是每歲中秋。必杜門謝客。抑鬱无聊。

彼に在るや、經略直浙兵部左侍郎王翊と、志を同じうし偕に恢復を謀る。而して王翊清兵と戰ひ敗れて死す。實に八月十五日なり。數年の後舜水之を聞いて於邑し、(一)文を作つて之を祭る。是より每歳中秋には、必ず門を杜ぢ客を謝し、抑鬱无聊す。(二)田犀に答ふる書に曰く、中秋は知友王侍郎完節(三)の日と爲す。慘、(四)柴市に逾え、烈、文山(五)に倍す。僕其時に至れば備に傷感(六)を懷くと。終身(七)遂に此令節を廢す。

(一)憂へふさぐ　(二)心ふさいで安んぜず　(三)節義を完うせし日　(四)宋の文天祥が國に殉じたる地、其慘憺たることは文天祥殉國の業にもまさる　(五)文天祥の號　(六)其の忌日に至れば深く悲哀を感ず　(七)自分は一生涯此のよい季節を廢して月見などをせず

即加ニ不字一于其上一。於レ是怒囚レ之。遂將レ殺。而守レ死自誓。王終感動。赦レ死以喜ニ其義烈一。此事舜水自錄レ之。名ニ安南供役紀事一。

(一)旅館の饗應準備甚だ盛大　(二)平然として氣まけせず　(三)手を拱する普通の挨拶をなし身體をこゞめて拜する事をせず

舜水冒レ難而輾轉落魄者十數年。其來居ニ此邦一。初窮困不レ能レ支。柳河安東省菴。師ニ事之一。贈ニ祿一半一。久之水戶義公。聘爲ニ賓師一。寵待甚厚。歲致ニ饒裕一。然儉節自奉無レ所レ費至ニ人或訴ニ笑其嗇一也。遂儲ニ三千

舜水、難を冒して輾轉落魄(一)すること十數年。其來つて此邦に居るや、初め窮困支ふる能はず。柳河(二)の安東省菴、之に師事し、祿の一半を贈る。久しうして水戶の義公(三)、聘して賓師(四)と爲し、寵待甚だ厚く(五)、歲々(六)饒裕を致す。然るに儉節(七)自ら奉じ費す所無し。人或は其嗇を訴笑する(八)に至る。遂に三千餘金を儲へ、臨終(九)に盡く之を水戶の庫內に納る。嘗て謂つて曰く、中國黃金に乏し。若し此を彼に用ひば、一以て百に當らん(一〇)と。新井白石謂ふ、舜水の縮節餘財を積む。苟もして然るに非ず。其意蓋し義兵を擧げ以て恢復(一一)を圖るの用に充つるに在り。然るに時至らずして終る。憫むべきかなと。

(一)諸處に放浪しておちぶれる　(二)筑後柳川藩　(三)德川光圀　(四)客分の師　(五)厚祿　(六)年々財產がふえ

來二此邦一。移二交趾一。復還二舟山一。是時國祚既蹙。舜水知二事不一レ可レ爲。將レ之二安南一。而風利不レ便。再來二此邦一。不レ久又還二舟山一。其意素在下得二海外援兵一以擧中義旗上。乃三來二此邦一。而援兵不レ可レ得。去復至二安南一。欲下尋歸二故國一以察中民情上。時淸既混二壹四方一。義不レ食二其粟一。四來二此邦一。終不二復還一。時萬治二年也。

治二年なり。

(一)明朝に仕ふ (二)官より貸費して學に就かしむる學生 (三)排斥せらる (四)支那浙江省の海上に在る島即ち舟山列島なり (五)今の佛領印度支那 (六)明國將に滅びんとす (七)明朝再興の義兵を擧ぐるにあり (八)天下四方を一統す (九)義として淸の米を食はず

至二安南一日。館人供張甚盛。舜水從容不レ撓。安南王召見。欲レ令レ拜。而長揖不レ屈。其人或以爲不レ解レ事至レ此。畫レ砂作二一拜字一以見レ之。舜水

安南に至りし日、館人(一)の供張甚だ盛なり。舜水(二)從容として撓まず。安南王召見して拜せしめんと欲す。而も長揖(三)して屈せず。其人或は以爲へらく事を解せずして此に至ると。砂に畫いて一の拜字を作り以て之を見しむ。舜水卽ち不字を其上に加ふ。是に於て怒つて之を囚へ、遂に將に殺さんとす。而るに死を守つて自ら誓ふ。王終に感動し、死を赦し以て其義烈を喜す。此事、舜水自ら之を錄し、安南供役紀事と名づく。

文恭。明國浙江餘姚人。避亂歸化。客二于水府一。舜水家世宦二于明一。父正。字存之。號二定寰一。爲二總督漕運軍門一。卒後贈二光祿大夫上柱國一。舜水生二明萬曆二十八年一。早喪レ父。及二漸長一。從二朱永祐。張肯堂。吳鍾巒一學。遂擢二恩貢生一。尋累徵不レ就。以故被レ劾。乃避之二舟山一。而始

避けて歸化し、(一)水府に客たり。

(一) 水戸家

舜水の家、世〻明に宦す。父正、字は存之、定寰と號す。總督漕運軍門たり。卒後光祿大夫(二)上柱國を贈らる。舜水、明の萬曆二十八年に生れ、早く父を喪ふ。漸く長ずるに及び、朱永祐・張肯堂・吳鍾巒に從つて學び、遂に(三)恩貢生に擢でらる。尋いで累に徵せども就かず。故を以て劾せらる。乃ち避けて(四)舟山に之き、始めて此邦に來り、(五)交趾に移り、復舟山に還る。(六)是時國祚既に蹙る。舜水事の爲す可からざるを知り、將に安南に之かんとす。而も風利便ならず。再び此邦に來る。久しからずして又舟山に還る。其意素海外の援兵を得て以て(七)義旗を擧ぐるに在り。乃ち三たび此邦に來る。而も援兵得可からず。去つて復安南に至り、尋いで故國に歸り以て民情を察せんと欲す。時に清既に(八)四方を混壹にす。(九)義として其粟を食まず、四たび此邦に來る。終に復還らず。時に萬

惺窩門人。有㆓武田某者㆒。父沒埋㆓諸惺窩墓側㆒。猶㆓合葬㆒然。人皆笑㆓其不㆑知㆑禮。而莫㆓肯爲告㆑之者㆒。活所以爲㆑不㆑可㆓徒已㆒。遂面論改㆓葬之㆒。

惺窩の門人に、武田某といふ者有り。父沒するや諸を惺窩の墓側に埋め、猶ほ合葬するがごとく然り。人皆其の禮を知らざるを笑ふ。而も肯へて爲に之を告ぐる者莫し。活所以て(一)徒に已むべからずと爲し、遂に(二)面論して之を改葬せしむ。

(一)徒に打捨て置きがたしとなし　(二)面談す

活所以㆓正保五年正月三日㆒沒㆓于平安㆒。年五十四。男守。字元成。號㆓木菴㆒。篤學不㆑隕㆓家聲㆒。

活所、正保五年正月三日を以て平安に沒す。年五十四。男守、字は元成、木菴と號す。篤學にして(一)家聲を隕さず。

(一)家の評判をおとさず

朱之瑜

朱之瑜。字魯璵。號㆓舜水㆒。諡㆓

朱之瑜、字は魯璵、舜水と號し、文恭と諡す。明國浙江餘姚の人。亂を

戚問曰。中夏亦有下刀利與二執レ刀之妙一如レ此者上乎。活所曰。龍泉太阿干將莫邪類。是皆彼邦名器。水截二蛟犀一。陸斷二虎兕一。其利不レ讓レ之。又人君手斬レ人。面快二於心一者。古之人有二行レ之者一。夏桀殷紂是也。吾邦亦有下職斬二罪人一。能堪レ之者上。稱二穢多一。最至卑者也。貴戚默思良久曰。卿言極善。往事吾何心哉。厚褒賜。貴戚又嘗謂曰。吾不幸不レ得二良臣一。活所曰。惡是何言也。惟今君之部下智勇之士。不レ乏二其人一。而以爲レ未レ足者。但君不レ知焉爾。貴戚大感悟。

者有り。(八)夏桀・殷紂是なり。吾邦亦職罪人を斬り、能く之に堪ふる者有り、穢多と稱し、最も至卑の者なりと。貴戚默思良久しうして曰く、卿の言極めて善し。(九)往事吾れ何の心ぞやと。厚く褒賜す。貴戚又嘗て謂つて曰く、吾れ不幸にして良臣を得ずと。活所曰く、惡是れ何の言ぞや。惟今君の部下、智勇の士、其人に乏しからず。而も以て未だ足らずと爲すこと、但君の知らざるのみと。貴戚大に感悟す。

(一)貴人、紀伊大納言頼宣を指す　(二)左右の近臣交る〴〵稱讃す　(三)苦り切つてしかめつらをし　(四)支那人の自ら呼ぶ支那國の稱、夏は大なる意、即ち世界の中央に位する大國の義より出づ。中國、中華　(五)名劍　(六)みづちと犀といふ獸　(七)虎と野牛、共に猛惡を以て名あり　(八)夏の桀王殷の紂王、共に暴君　(九)之まで自分は何といふ考へなりしぞ

之節。而君信ニ任之。可レ謂ニ明良之遇一矣。寛永中林學士有ニ諸家系譜撰一。活所召與ニ其事一。適患レ眼辭歸。此後不ニ全瘳一。作ニ自處詩二十五韻一。陳ニ其志一。有下暮景已五十。眼疾入ニ膏肓一。衰髮爭ニ雪色一。何以問ニ多方一。悠悠待ニ化盡一。肯遭ニ世事妨一句上。

已に五十、(八)眼疾膏肓に入り、衰髮雪色を爭ふ、何を以て(九)多方を問はん、悠悠として(一〇)化し盡すを待つ。肯へて世事の妨に遭はんや、の句あり。

(一) よく待遇せられずして去る　(二) 紀州侯に臣たり　(三) 氣づよく正直にていゝかげんに人と調子をあはせず　(四) 唯々諾々なり、忌み憚ることなく意見を吐くこと　(五) 明君良臣の出あひ　(六) 林羅山　(七) 人の一生老年に近づくを譬ふ　(八) 眼病不治となり、頭髮は雪の如く白し　(九) 多方面のことに關係せず　(一〇) 死するを待つ

一貴戚。勇武絶倫。其佩刀利鈍。必自試ニ諸人一。嘗得ニ一刀一。備前長光所レ鍛也。乃執ニ罪者一立斬レ之。左右互レ辭以讚。活所獨鑒レ類而無レ言。貴

一貴戚あり。勇武絶倫にして、其佩刀の利鈍は、必ず自ら諸を人に試む。嘗て一(一)刀を得。備前長光の鍛ふる所なり。乃ち罪者を執へ立ろに之を斬る。左右(二)辭を互にして以て讚す。活所獨り(三)類を鑒めて言なし。貴戚問うて曰く、(四)中夏亦刀の利きと刀を執るの妙と此の如き者有るかと。活所曰く、龍泉・太阿・干將・莫邪の類は、是れ皆彼邦の(五)名器なり。水に(六)蛟犀を截ち、陸に(七)虎兕を斷つ。其利之に讓らず。又人君手づから人を斬り、心に快とすること、古の人之を行ふ

非二其好一也。年十七。入レ京。次年執二弟子禮一謁二惺窩一。作二杜鵑詩一眎レ之。惺窩大稱賞。由レ此早有二重名一。其詩云。杜鵑春破後。相喚不レ成レ羣。子美詩中涙。堯夫橋上聞。一聲眞識レ氣。再拜亦憂レ君。空駭曉窓夢。月昏數片雲。

子美詩中の涙、(六)堯夫橋上に聞く、(七)一聲眞に氣を識り、(八)再拜亦君を憂ふ、(九)空しく駭く曉窓の夢、月は昏し數片の雲と。

(一)商業に從事し　(二)かねもち　(三)利慾の念の薄きさま　(四)高き評判　(五)杜鵑は春去つて後は相鳴くに羣をなさず　(六)杜甫の杜鵑の詩に、今忽ち暮春の間、我れ病に値うて年を經、身病んで能く拜する能はず、涙下ること迸泉の如しとあり　(七)邵雍字は堯夫、客と天津橋上を過ぎ杜鵑の鳴くを聞きて世の亂るゝを前知せり　(八)地氣の移動を知るにて堯夫の故事をいふ　(九)杜甫の詩中の意を指す

年二十九。應二辟肥後侯一。加藤氏。後國除。未レ幾。不レ遇而去。四十一。臣二紀府一。活所爲レ人剛直。不二苟合一。其就レ仕也。盡二謇諤

年二十九、辟に肥後侯（加藤氏後に、國除かる）に應ず。未だ幾ならず、遇せられずして(一)去る。四十一、紀府に(二)臣たり。活所人となり剛直にして苟も合せず。其の仕に就くや、(四)謇諤の節を盡す。而して君之を信任す。(三)(五)明良の遇といふ可し。寛永中、(六)林學士諸家系譜の撰有り。活所召されて其事に與る。適〻眼を患へて辭し歸る。此後全く瘉えず。自處の詩二十五韻を作り、其志を陳ぶ。(七)暮景

詩集曰。己巳六月二日。先師松永先生三十三年之諱日也。己巳元祿二年也。前三十三年。爲明曆丁酉。不知孰其實也。

那波觚

那波觚、字は道圓、初の名は方、小字は平八、活所と號す。晩に祐氏と稱す。王父の字に因るなり。播磨の人。紀伊侯に仕ふ。

活所の祖は賈に服し、貲富を以て素封と稱す。活所、幼より澹然として利を事とせず。惟喜んで書を讀み字を寫す。父之を異とし、乃ち賈を舍て以て儒と醫とを學ばしむ。而るに醫は其好にあらず。年十七、京に入り、次の年弟子の禮を執つて惺窩に謁し、杜鵑の詩を作つて之を眎す。惺窩大に稱賞す。此に由つて早く重名有り。其詩に云ふ、杜鵑春破るゝの後、相喚んで羣を成さず、

那波觚。字道圓。初名方。小字平八。號活所。晩稱祐氏。因王父字也。播磨人。仕紀伊侯。

活所祖服賈。以貲富稱素封。活所自幼澹然不事利。惟喜讀書寫字。父異之。乃使舍賈以學儒與醫。而醫

（一）祖父

日本詩史。常山樓筆餘等載。尺五以ニ布衣一奉ニ正保天子勅一。召講ニ春秋一。余未ニ以爲一レ然。果然。則門人遯菴撰本傳。順菴哭詩五十韻。頗盡ニ其平生一。而洩ニ此一大美事一乎。恐出ニ於傳聞一。不レ可レ信。

日本詩史・常山樓筆餘等に載す、尺五布衣(一)を以て正保(二)の天子の勅を奉じ、召されて春秋を講ずと。余未だ以て然りと爲さず。果して然らば、則ち門人遯菴の撰する本傳、順菴の哭詩五十韻、頗る其平生(三)を盡して、此一大美事を洩さんや。恐くは傳聞に出で、信ず可からず。

(一) 庶人の身　(二) 後光明天皇　(三) 平生の行狀を書きつくすに此のりつぱな一大事を書きもらす理無し

古今人物史。昌三傳曰。六十六歲。卒ニ于洛之家塾一。于時明暦乙未也。人物史。逸ニ作者名姓一。然相傳爲ニ遯菴撰一。而又遯菴

古今人物史、昌三の傳に曰く、六十六歲にして、洛の家塾に卒す。時に明暦乙未(一)なりと。人物史、(二)作者の名姓を逸す。然れども相傳へて遯菴の撰となす。而して又遯菴の詩集に曰く、己巳六月二日は、先師松永先生三十三年の諱日なり。己巳は元祿二年なり。前三十三年は、明暦丁酉(三)となす。知らず孰か其實なるを。

(一) 元年　(二) 作者の姓名不明　(三) 三年

尺五之沒也。順菴作下哭詩五十韻及慰二苦塊一近體二首上。而順菴之門。亦育二多士一。元寶之際。濟濟乎出胥二熙昌一者。不レ可二指數一。此實淵二源於尺五一云。丁二其三十三年忌辰一。遯菴有レ詩云。先生學術建二元勳一。往昔門人聚若レ雲。三十年來追レ遠日。獨披二荒草一問二孤墳一。又過二講習堂一七律。有下講堂如レ見二先師面一。幾對二遺書一感二舊恩一句上。安東省菴亦初學二於尺五一。有レ賦云。擇レ師遊二于尺五門一。勉レ學謝二雜賓一。

門、亦多くの士を育す。元寶(三)の際、濟濟乎(四)として出でて熙昌(五)に膺る者、指數す可からず。此れ實に尺五に淵源すと云ふ。其三十三年忌辰に丁る、遯菴、詩あり云ふ、先生の學術元勳(六)を建て、往昔の門人聚ること雲の若し、三十年來遠(七)を追ふ日、獨り荒草を披いて孤墳を問ふと。又講習堂を過るの七律に、講堂は先師の面を見るが如し、幾(八)か遺書に對して舊恩を感ずるの句あり。安東省菴も亦初め尺五に學ぶ。賦あり云く、師を擇んで尺五の門に遊び、學(九)を勉めて雜賓を謝すと。

(一) 才能ある人物を養成す　(二) 喪に居るの禮に、苦卽ち蒿をあみたる席を敷き、土塊を枕とし、哀親を草に托し土に托すといふことあり、此は轉じて死人の靈魂にとれり　(三) 元祿寶永　(四) 人材の多く出づる貌　(五) 盛なる也　(六) 第一等の勳功　(七) 遠き故人を追想する日　(八) 亡師の遺書に對して恩義を感ずること幾ばくぞや　(九) 學問に勵精してつまらぬ賓客を謝絶す

講習堂經營始成。石川丈山。有二燕賀詩一。其小序曰。慶安戊子之夏。昌三教授。儴二板廷尉之從臾一。迺有二恩旨一。於二象魏之外一。刱二環堵之室一。結構已成。適應二招邀一。宴語談笑。情盤盡レ歡。幸得二此地一。去レ天尺五。可レ謂二榮路之階。吉祥之宅一也。由レ此視レ之。尺五號。蓋由三賜地近二禁省一也。

講習堂、經營始めて成るや、石川丈山、燕賀(一)の詩有り。其小序に曰く、慶安戊子(二)の夏、昌三教授、板廷尉(三)の從臾に儴りて、迺ち恩旨あり。象魏(四)の外に於て、環堵(五)の室を刱め、結構已に成る。適〻招邀(六)に應じ、宴語語笑、情盤(七)、歡を盡す。幸に此地を得、天を去ること(八)尺五、謂ふべし榮路の階(九)、吉祥の宅なりと。此に由て之を視れば、尺五の號、蓋し賜地の禁省に近き(一〇)に由る。

(一)祝賀の詩　(二)元年　(三)板倉所司代の勸請によつて　(四)宮門の外　(五)方一丈ばかりの小さい室を作る　(六)招待　(七)心樂しみ快樂をつくす　(八)皇居を距ること僅か　(九)立身の階段、幸福のやどりといふべし　(一〇)下賜の土地禁裏に近し

尺五能成二就人材一。木下順菴。宇都宮遯菴。皆出二其門一。

尺五能く人材を成就す。木下順菴・宇都宮遯菴、皆其門に出づ。尺五の沒するや、順菴、哭詩五十韻(一)、及び苫塊(二)を慰むる近體二首を作る。而して順菴の

是時。板倉侯爲二京師所司代一。好レ學重二尺五一。數延聽二其說一。遂爲請二地於堀川一創二一堂一。卽講習堂是也。於レ是從游甚多。木下順菴作二頌禱詩五言古一首。七律二首一。有下先生何爲者。諄諄說二典常一。董帷春晝靜。韓檠秋夜長。白鹿近二仙洞一。三鱣落二講堂一。遊戲或詩賦。餘波溢二文章一。豈只諸生福。眞是大明祥。大哉賢哲志。百世可レ流レ芳句上。

溢る、豈に只諸生の福のみならんや、眞に是れ大明祥、(一四)大なるかな賢哲の志、(一五)百世芳を流す可しの句有り。

(一) 博く書を讀み、よく之を記憶する　(二) 特別に禮遇す　(三) 晩年　(四) 京畿の守備を司る官　(五) 遊學の士　(六) 祝ひの詩　(七) 說いて倦まず　(八) 人のふむべき常道　(九) 漢の董仲舒帷を下して講授すること三年、其間書に親みて園圃を窺はざりしを、松永尺五が講習堂に帷を下して講授せしに譬へたり、帷はとばり　(一〇) 宋の韓琦が夜一卒に燭を持たしめて書を作るに、誤つて其鬚を燒く、公、手を以て之を摩て書を作ること故の如しといふ故事を、尺五の篤學に譬へしなり　(一一) 唐の李渤兄の渉と廬山五老峰下の洞中に隱る、嘗て一の白鹿を養ふ、故に白鹿洞と名づく、後洞に因つて學館を建て學者大に集る。朱熹其の遺址を復し書院を設く　(一二) 後漢の楊震の講堂の前に有冠の雀が三鱣魚(三匹のうなぎ)を啣へて集れり、都講魚を取り進めて曰く、鱣は卿大夫服の象なり、其三匹なるは三台を象るなりと、之より震は官位升れりといふ、轉じて講堂を鱣堂ともいふ、此は此故事を引用して尺五を祝せるなり　(一三) 戯れが或は詩賦となり經典の餘力が文章にあらはる　(一四) 國家の祥瑞　(一五) 百世の末まで芳名を傳ふべし

松永遐年。字昌三。小字昌三郎。號尺五。又號講習堂。平安人。尺五父貞德。號逍遙軒。又號長頭丸。學倭歌于細川幽齋。名播四方。尺五師惺窩。博覽强識。年十八。見豐臣秀頼。講大學。既而至加賀。加賀侯異禮待之。晩又還京敎授。當

松永遐年

松永遐年、字は昌三、小字は昌三郎、尺五と號し、又講習堂と號す。平安の人。

尺五の父貞德は、逍遙軒と號し、又長頭丸と號す。倭歌を細川幽齋に學び、名四方に播く。尺五、惺窩を師とし、博覽强識なり。年十八にして、豐臣秀頼に見え大學を講ず。既にして加賀に至る。加賀侯禮を異にして之を待つ。晩に又京に還つて教授す。是時に當り、板倉侯京師の所司代たり。學を好み尺五を重んず。數〻延いて其説を聽き、遂に爲に地を堀川に請うて一堂を創む。即ち講習堂是なり。是に於て從游甚だ多し。木下順菴、頌禱の詩五言古一首、七律二首を作る。先生は何爲なる者ぞ、諄諄として典常を説く、董帷春晝靜に、韓檠秋夜長し、白鹿仙洞に近く、三鱣講堂に落つ、遊戲或は詩賦、餘波文章に

有レ意書レ之。今錄以備レ考。曰。大學以レ致レ知爲二初教一。中庸以二知仁一爲二達德一。魯論以レ知レ人爲二始終一。此記之八柱。以レ知レ賢爲二第一一。合二古今之符節一者乎。夫知レ人之地位至高也。世俗所謂知レ人者。皆窺二及肩之牆一耳。未レ見二數仞之壁内一。豈察二百官之富宗廟之美一者哉。若不レ能下知二賢才一而用中其士上。則如丁畜二妖狐一欲丙代乙韓獹甲。非二唯不乙守二其家一。還生二恠異一。若不レ能下知二器量一而任中大事上。則如下飼二兒鶚一欲上レ捕二鴻鵠一。非二唯不乙得二其鳥一。還去二林藪一矣。千章萬句在二知レ賢一一言一而已矣。

唯其家を守らざるのみに非ず、還つて恠異を生ぜん。若し器量(一二)を知つて大事に任ずる能はずんば、則ち兒鶚(一三)を飼つて鴻鶴を捕へんと欲するが如し。唯其鳥を得ざるのみに非らず、還つて林藪(一四)に去らん。千章萬句、賢を知るの一言にあるのみと。

(一)讀後の所感意見を書物の最後に識するもの　(二)ひそかに豐臣民の恩にむくいる　(三)參考にする　(四)大學の書は知を致すを以て教育の初めとす　(五)子思の作れる中庸にては仁の意を知悉するを最上の德とす　(六)論語は人心を知るを以て教育の始終とす　(七)大閤記の八ケ條の主意　(八)古と今と其の意見一致せるものか　(九)人を知る地位は至つて高し　(一〇)肩の高さ位の墻の内部をのぞく位にて數ひろも高き壁の内部を見ず　(一一)妖狐は人をたぶらかす如き狐、韓獹は支那戰國時代韓の國に產したる名犬、卽ち妖狐を畜つて犬に代り家を守らしめんとするが如し、唯だ其家を守らしめ得ざるのみならず、却て奇怪なる出來事を生ぜん　(一二)人物の器量すぐれたるを知りて之に大事を委任すること能はざれば　(一三)鶚ははしたか、卽ちはしたかの子を飼つて鴻の鳥や鶴を捕へんとするが如し　(一四)はしたかは林に飛び去らん、

寛文甲辰。九月己酉。以レ疾没。享年七十有六。京師長講堂。其葬地也。有レ碣岡原仲撰レ文。

意林菴詩文不レ傳。惟小瀬甫菴。太閤記跋。見存耳。一說曰。意林菴本仕二豐臣秀頼一。甫菴纂二修太閤記一。其實多出二於意林菴一。且作レ跋。此皆私有レ所レ報云。不レ知然否。但太閤記。及附載八物語。共不レ阿二豐臣氏一。固勿論耳。跋主二八物語一而立レ論。亦非二

意林菴、詩文傳らず。惟小瀬甫菴、太閤記の跋、(一)見に存するのみ。一說に曰く、意林菴は本豐臣秀頼に仕ふ。甫菴、太閤記を纂修するや、其實多く意林菴に出で、且つ跋を作ると。此れ皆私に報ずる所有りと云ふ。知らず、然るや否や。但し太閤記、及び附載する八物語が、(二)共に豐臣氏に阿らざるは、固より勿論なるのみ。跋が八物語を主として論を立つること、亦意有りて之を書するに非ず。今錄して以て備考とす。(三)曰く、(四)大學は致知を以て初教となし、(五)中庸は知仁を以て達徳となし、(六)魯論は人を知るを以て始終と爲す。(七)此記の八柱は、賢を知るを以て第一と爲す。(八)古今の符節を合するものか。(九)夫れ人を知るの地位は至高なり。世俗の所謂人を知るとは、(一〇)皆肩に及ぶの牆を窺ふのみ。未だ數仞の壁内を見ず。豈に百官の富・宗廟の美を察する者ならんや。若し賢才を知つて其士を用ふる能はずんば、則ち(一一)妖狐を畜つて韓獹に代へんと欲するが如し。

見以受二其說一。寬永中。遊二事大納言忠長君一。之二駿河一。居三年。致仕而歸。後又時。往二來西海一。承應癸巳。後光明帝辟講レ易。制不レ至二三位一者。不レ許二升殿一。而優禮得下以二處士一升中列公卿上。常戴二烏紗巾一。著二素紗深衣一。當世儒者皆禿二其頭一。帝常呼稱二北白河三位入道一。寵遇優渥。多有二書器之賜一。甲午帝晏駕。乃靜二處塵外一。自愉適。後諸侯以二重幣一交辟。終不二復起一。

後光明帝辟して易を講ぜしむ。(三)制、三位に至らざる者は、(四)升殿を許さず。而るに(五)優禮、(六)處士を以て升つて公卿に列るを得、常に(七)烏紗巾を戴き、(八)素紗の深衣を著く。當世の儒者皆其頭を(九)禿にするより、帝常に呼んで北白河の三位入道と稱し、(一〇)寵遇優渥、多く書器の賜有り。甲午、(一一)帝晏駕したまふ。乃ち(一二)塵外に靜處し、自ら愉適す。後諸侯(一三)重幣を以て交〻辟す。終に復起たず。寬文甲(一四)辰、九月己酉、疾を以て沒す。享年七十有六。京師長講堂は、其葬地なり。(一五)碣有り、岡原仲文を撰ぶ。

(一) 京都の五大禪寺 (二) 二年 (三) 規則 (四) 宮中の殿上に昇ることを許さず (五) 特別の御待遇 (六) 無位の浪人 (七) 黑きうすぎぬにて造れる帽、隱者などの用ふるもの (八) 白色のうすぎぬにて造れる深衣、深衣は我が長者に似て、腰以下に襞あり、體を被ふこと深きを以て名づくといふ、支那古代には大夫士の朝祭の次服たり (九) 坊主頭 (一〇) 天子の御寵愛あつし (一一) 崩御 (一二) 俗塵の外に靜かに住み自ら氣にかなつた生活をなす (一三) たくさんの進物を贈つて召す (一四) 四年 (一五) 石碑

爲二開祖一矣。正保中。於二江戸城南西久保國正寺一敎レ徒。講二其道一者。爲二福野七郎左衛門。三浦與次右衛門。磯貝次郎左衛門一。而此輩不レ知二其何產一。或云。皆薩人也。國正寺。後徙二麻布二本榎一。此寺昔多藏二元贇筆跡一。罹レ災今皆烏有云。

此輩は其の何れの產なるかを知らず。或は云ふ、皆薩人なりと。國正寺は、後麻布二本榎に徙る。此寺昔は多く元贇の筆跡を藏せしが、(三)災に罹り今皆烏有たりと云ふ。

(一) こぶしにて敵を搏つ武技　(二) 芝區に屬す　(三) 火災にかゝり燒失す

朝山素心

朝山素心。字藤丸。號二意林菴一。平安人。意林菴自レ幼志レ儒。初學二於五山長老一。比レ長朝鮮使李文長者至。乃

朝山素心、字は藤丸、意林菴と號す。平安の人。

意林菴幼より儒に志し、初め(一)五山の長老に學ぶ。長ずる比朝鮮の使李文長といふ者至る。乃ち見えて以て其說を受く。寛永中、大納言忠長君に遊事す。駿河に之く。居ること三年、致仕して歸る、後又時々西海に往來す。承應(二)癸巳、

絶高。瓶史風流。可想見其人。又赤牘之中。言佛法者。其見最正。余頗愛之。因足下之言。知有此書。今得之讀之。實足下之賜也。

元贇能嫺此邦語。故常不用唐語。元政詩。有人無世事交常淡。客慣方言譚每諧。又君能言和語。郷音舌尚在。久狎十知九。傍人猶未解句。

元贇能く此邦の語に嫺る。故に常に唐語を用ひず。元政の詩に、(一)人は世事なく交常に淡く、客は方言に慣れて譚毎に諧ふと。(二)又君能く和語を言へど、郷音舌に尚ほ在り、久しく狎れて十に九を知る、傍人猶ほ未だ解せずの句有り。(三)

(一)日本語に熟達す　(二)人とは元政自らを指し、客とは元贇をいふ、即ち予は世事の煩なければ交り常に淡泊に、君は方言になれて談よくあふ　(三)君は能く邦語を解するも、郷國の音少しく混ず。予は久しく君に狎れて其十中の九を知れど、傍人は猶は其句を解せざることあり

元贇善拳法。當時世未有此技。元贇創傳之。故此邦拳法以元贇

元贇拳法を善くす。當時世未だ此技有らず。元贇創めて之を傳ふ。故に此邦拳法は元贇を以て開祖と爲す。正保中江戸城南西久保國正寺に於て徒を敎ふ。其道を盡す者、福野七郎左衛門・三浦與次右衛門・磯貝次郎左衛門と爲す。而るに

國亂一。逃來二此邦一。遂應レ徵至二尾張一。乃後時時入レ京。又來二江戶一。與二諸名人一爲二文字交一。初萬治二年。於二名古屋城中一。與二僧元政一始相識。契分尤厚。其平生所二唱酬一者。彙爲二元元唱和集一。行二于世一。元政詩文慕二袁中郎一。此邦奉二中郎一。蓋以二元政一爲レ首。而元政本因二元贇一知レ有二中郎一也。元政書曰。數日之前。探レ市得二袁中郎集一。樂府妙絕。不レ可二復言一。廣莊諸篇。識地

年、名古屋城中に於て、僧(四)元政と始めて相識り、(五)契分尤も厚し。其平生唱酬(六)する所、彙めて元元唱和集と爲し、世に行はる。元政の詩文、(七)袁中郎を慕ふ。此邦中郎を奉ずる、蓋し元政を以て首と爲す。而して元政は本元贇に因て中郎あるを知れるなり。元政の書に曰く、數日の前、市を探つて袁中郎集を得たり。(八)樂府の妙絕は、復言ふ可からず。(九)廣莊の諸篇は、識地絕だ高く、(一〇)瓶史の風流は、其人を想見す可し。又(一一)赤牘の中、佛法を言へるもの、其見最も正し。余頗る之を愛す。足下の言に因て、此書有るを知り、今之を得之を讀む。實に足下の賜なりと。

(一) 明の思宗の年號　(二) 崇禎年間の進士の試驗に及第せず　(三) 愛親覺羅氏明を亡ぼして淸とせし亂をいふ　(四) 平安の人、初め井伊直孝に仕ふ、洛西深草に住し、道德高く親に仕へて至孝と稱せらる　(五) 交情あつし　(六) 詩を詠んでやりとりする　(七) 袁枚、淸の錢塘の人、家號を簡齋といふ　(八) 音樂に上すべく詠まれたる敍事詩　(九) 袁中郎集中の篇名　(一〇) 同上　(一一) 同上

與二古人一頡二頏千載之上一。視下夫世之得レ小自足恥二下問一者上。其所レ見之高下懸絶爲二何如一哉。正朴娶二木下順菴女一生二正修一。字身之。號二習齋一。又號二南湖一。聲譽與二景山一抗衡。門人下村某。剞二唐書一。習齋校レ之。且作レ跋曰。曾祖杏菴。親接二北肉夫子之學一。有二遺書數百卷一。子子相承以至レ余。云云。

小しく習得して滿足し自分より下のものに問ふを恥とす (七) 見識の上下の隔り如何ほどならんか (八) 評判景山とはりあふ (九) 藤原惺窩、北肉山人と號するよりしかいふ

陳元贇。字義都。號二既白山人一。明國虎林人。避レ亂歸化。客二于尾藩一。元贇不レ詳二其履歷一。蓋生二于明萬曆十五年一。崇禎進士弗レ第。云。及二其

陳元贇

陳元贇、字は義都、既白山人と號す。明國虎林の人。亂を避けて(一)歸化し、(二)尾藩に客たり。

(一) 我國の民籍に入り (二) 尾張藩

元贇は其履歷を詳にせず。蓋し明の(一)萬曆十五年に生れ、(二)崇禎、進士に第せずと云ふ。(三)其國の亂るゝに及び、逃げて此邦に來り、遂に徵に應じて尾張に至る。乃ち後時時京に入り、又江戸に來り、諸名人と文字の交を爲す。初め萬治二

英號二立菴一。仕二安藝一。次道鄰。仕二尾張一。立菴有二二子一。曰玄達。曰正朴。玄達生二正超一。字君燕。號二景山一。爲二名儒一。鳩巣和二其詩一。并序曰。屈景山。京師人也。自二其先杏菴先生一。以レ儒聞二於當時一。翼子賢孫。不レ墜二家聲一。至レ君大振二前烈一。恢二祖業一。旁求二師友之益一不レ已。觀二其志一將レ有二大成一。其德

二子有り。曰く玄達、曰く正朴。玄達、正超を生む。字は君燕、景山と號す。名儒爲り。(一)鳩巣其詩に和し、并せて序して曰く、屈景山は、京師の人なり。其先杏菴先生より、儒を以て當時に聞ゆ。翼子賢孫、(二)家聲を墜さず。君に至り大に(三)前烈を振ひ、祖業を恢にし、旁ら師友の益を求めて已まず。(四)其志を觀れば將に大成に有らんとし、其德は古人と千載の上に頡頏す。(五)夫の世の、小(六)を得自足して下問を恥づる者を視るに、其の見る所の(七)高下縣絶何如と爲さんやと。正朴は木下順菴の女を娶りて正修を生む。字は身之、習齋と號し、又南湖と號す。(八)聲譽景山と抗衡す。門人下村某唐書を刻す。習齋之を校し、且つ跋を作りて曰く、曾祖杏菴、親しく北肉夫子の學に接し、(九)遺書數百卷有り。子子相承け以て余に至る云々と。

(一) 室鳩巣　(二) 翼は美しきさま、即ちすぐれたる子孫が家の評判をおとさず　(三) 先人の遺業を盛大にし父祖の業を發展さす　(四) 良師良友に就きて善にすゝむことを怠らず　(五) 其の德は千年昔の古人と相上下するほど　(六)

豈望二一羅山一乎。匪レ所三以可二俾稱ㄷ之。正之曰。予固不學無レ所二辨知一。今聞レ所レ告。獨知二羅山之不ㄷ可二跂及一也。足下之直說不夸不羅。最可二感讚一也。又物徂徠與二屈景山一

高きを求めず。其東都に來るや、先大夫も亦嘗て一二接見せり云ふ。夫れ儒者は斷斷たること古より然りと爲す。(一五)而るに乃ち能く爾る者は、(一六)千百人中一人のみと。

(一)謙讓して德を身に修めやしなふ　(二)博識者　(三)日本　(四)ひろく文才を發展せしむること能はず　(五)吾々如き者を十數人集めたりとも、羅山一人に及ばず　(六)跂はつまだつ也、つまだつも尙は羅山の背に及ばず、即ち羅山の學殖に及ばずとなり　(七)足下の正直の言誇らずてらはず　(八)堀景山、名は正超。杏庵の玄孫　(九)才智無し、即ち自己の謙稱、予幼年の時亡父より聞く　(一〇)京都　(一一)上位の弟子　(一二)博學、ものしり　(一三)堀杏庵　(一四)かゞみ屈して自ら處すること謙遜　(一五)辯難論爭することと昔よりきまり　(一六)謙遜なるものは至つて少し

書曰。余不佞髫年時。聞二之先大夫一。昔洛有二惺窩先生者一焉。其高第弟子。若二羅山活所諸公一者五人。名聞海內一。皆務以二辨博一相高。而屈先生者一。獨爲二溫厚長者一。乃詘二然於四人之間一。退讓自將。不レ求二名高一。其來二東都一。先大夫亦嘗一二接見云。夫儒者斷斷自レ古爲レ然。而乃能爾者。千百人中一人耳。

杏菴長子正

杏菴の長子は正英、立菴と號す。安藝に仕ふ。次は道鄰、尾張に仕ふ。立菴に

句云。筆評二邪正一臨二洙水一。藥辨二君臣一汲二上池一。

杏菴爲レ人謙以自牧。羅山行狀曰。幕下之士。阿部正之。語二杏菴正意一曰。聞今時博物者羅山子。而其次レ之者足下也。吁難レ得之才也。正意答曰。羅山則誠然矣。以二彼文學一生二于方今之日域一。而不レ得二展布一也。甚可レ惜焉。吾儕十餘輩雖レ累レ之。而

杏菴人と爲り謙(一)にして以て自ら牧ふ。羅山の行狀に曰く、幕下の士、阿部正之、杏菴正意に語つて曰く、聞く今時の博物者(二)は羅山子にして、其の之に次ぐ者は足下なり。吁得難きの才なりと。正意答へて曰く、羅山は則ち誠に然り。彼の文學を以てして、方今の日域(三)に生れて展布(四)するを得ざるなり。甚だ惜む可し。吾儕(五)十餘輩之を累ぬと雖も、而も豈に一羅山を望まんや。倖しく之を稱す可き所以にあらずと。正之曰く、予固より不學にして、辨知する所無し。今告ぐる所を聞き、彌々羅山(六)の跂及す可からざるを知る。足下の直說(七)不夸不耀、最も感讃す可しと。又物徂徠(八)が屈景山に與ふる書に曰く、余不佞(九)髫年の時、之を先大夫に聞けり。昔洛に惺窩先生と云ふ者有り、其高第弟子(一一)、羅山・活所諸公の若き者五人、名海内(一〇)に聞え、皆務めて辨博(一二)を以て相高ぶる。而して屈先(一三)生は、獨り溫厚の長者と爲す。乃ち四人の間に詘然(一四)として退謙自ら將る、名の

溺之謂也。足下之於衛生。亦宜然。云云。丈山寄酬其自尾陽所示元旦之什詩云。新聲妙句寫韶光。興起西堂夢一場。素問靈樞兼扁鵲。春秋左傳説公羊。昔吟洛邑無邊月。今弄蓬丘不老方。仁術功成富才藝。春風千載呂純陽。又送其歸尾陽詩。有學養驪軻氣。術包盧扁傳句。林春齋。讀耕齋。交尤親。及其沒各有悼詩。亦及醫事。讀耕齋

ひ、術は盧扁(一九)の傳を包ぬの句あり。林春齋・讀耕齋(二〇)と、交尤も親し。其の沒するに及び、各々悼詩(二一)有りて、亦醫事に及ぶ。讀耕齋の句に云ふ、筆は邪正を評して洙水(二二)に臨み、藥は君臣を辨じて上池(二三)を汲むと。

(一) 醫藥醫術に關するわざ (二) そこもとの天性醫術にすぐれしは天に老ありてのことか (三) 醫術を指す (四) 孫思邈、唐の人、百家に通じ、老莊をよくし、醫藥の術に通ず (五) 趙子昂なり、詩文に長じ、書道に名あり、即ち趙子昂は書に達したれど、其爲に學者たるの名を落すことなかりきとにて、暗に正意が醫學と共に儒學をも勵むやう奨めたるなり (六) 論語述而篇に出づ。藝は音樂射御其の他の技能をいふ (七) 養生の道 (八) 尾張 (九) 元旦の作詩に對する返詩 (一〇) 清新美妙の語句にて春景色をうつす (一一) 眼さむれば西の座敷に眠り見たる一場の夢 (一二) 素問靈樞いづれも古の醫書、扁鵲は戰國の世の名醫 (一三) 左傳公羊いづれも孔子の春秋を布衍解説せる書 (一四) 京都に於て際もなき空の月に吟詠す (一五) 蓬萊山、渤海中に在る三神山の一、仙人及び不老の藥皆在りといふ。杏庵の醫術を弄ぶをさす (一六) 醫を仁術と稱す (一七) 時恰も新春なるにより春風千載と長壽を祝す、呂純陽は唐代の道士、杏庵を擬するなり (一八) 騶衍や孟軻の精神を養ふ (一九) 扁鵲の古傳を有つ。扁鵲は盧人 (二〇) 春齋の弟春德の號 (二一) 弔詩 (二二) 魯の川名、孔子講學の舊地なり、杏庵が孔學に親しむをいふ (二三) 水の地上に達せざるもの即ち露滴、史記扁鵲傳に、飲以上池之水とあり

典章文物。無レ不三講究而明二其道一。其於下文章之所三以爲二文章一者上。蓋深知レ之。故其辭簡易平實。自有二條理一。豈若下今世之文。務爲二粉飾一。以投二時好一者上哉。先生所レ作詩文。藏二之於家一久。曾孫習齋君。始克集錄以爲二若干卷一。云云。

(一)詩文の才　(二)禮義音樂刑法政治、規則制度　(三)文章の眞義を深く明らむ　(四)飾りを施して以て世人の好みに迎合する

又精二於方技一。惺窩。羅山。丈山集中。皆稱以二醫正意一。羅山書曰。足下稟賦。天有レ意乎。勿レ溺二於技藝一。孫眞人不三以レ醫貶レ名。趙松雪不二以レ書損レ名。足下以爲二如何一。孔子曰。游二於藝一。非二

又方技に精し。(一)惺窩・羅山・丈山集中、皆稱するに醫正意を以てす。羅山の書に曰く、(二)足下の稟賦、天に意あるか。(三)技藝に溺るゝ勿れ。(四)孫眞人は醫を以て名を貶さず、(五)趙松雪は書を以て名を損せず。足下以て如何と爲す。孔子曰く、(六)藝に游ぶと、溺るゝの謂に非るなり。足下の衛生に於ける、(七)亦宜しく然るべし云云と。丈山が、其の尾陽より示す所(八)元旦の什に寄酬する詩に云ふ、(九)新聲妙句韶光を寫す、(一〇)興起すれば西堂夢一場、(一一)素問靈樞扁鵲を兼ね、(一二)春秋左傳公羊を說く、(一三)昔は洛邑無邊の月に吟じ、(一四)今は蓬丘不老の方を弄ぶ、(一五)仁術功成て才藝に富み、(一六)春風千載呂純陽と。(一七)又其の尾陽に歸るを送る詩に、學は騶衍の氣を養(一八)

法眼一。日本詩史。曰下初仕ニ尾張一後仕ニ安藝上矣。寛永年中。來ニ江戸一謁ニ台德大君一。拜ニ衣服及酒食賜一。且奉ㇾ旨入ニ弘文院一。與ニ諸家系圖傳編修一。別自撰ニ武家系圖若干卷一。

杏菴愛ニ陶淵明爲ㇾ人。常懸ニ其像于壁間一。曰。對ㇾ此則使ニ人頓消ニ塵慮一。

杏菴、陶淵明の人と爲りを愛し、常に其像を壁間に懸けて曰く、此に對すれば則ち人をして頓に塵慮(一)を消さしむと。

(一) 俗念をなくす

杏菴有ニ詞藻一。韓人來聘者。稱爲ニ文苑老將一。鳩巣文集。載ニ杏隱先生詩文二集序一。曰。先生少遊ニ於惺窩之門一。學博而聞多。凡禮樂刑政。

杏菴、詞藻(一)有り。韓人の來聘する者、稱して文苑の老將と爲す。鳩巣文集に、杏隱先生詩文二集の序を載す。曰く、先生少うして惺窩の門に遊び、學博くして聞多し。凡そ禮樂(二)刑政、典章文物、講究して其道に明かならざる無し。其(三)文章の文章たる所以の者に於て、蓋し深く之を知る。故に其辭簡易平實にして、自ら條理有り。豈に今世の文の、務めて粉飾(四)を爲し、以て時好に投ずる者の若くならんや。先生作る所の詩文、之を家に藏すること久し。曾孫習齋君、始めて克く集錄して以て若干卷と爲すと云云と。

堀正意。字敬夫。號二杏菴一。又號二杏隱一。近江人。仕二尾張侯一。杏菴師二事惺窩一。篤行博學。當時與二林羅山。松永尺五。那波活所一。俱有二四天王稱一。嘗游二事安藝侯一。是時尾張敬公。好レ學求レ士。欲下得二杏菴一臣中之。乃遣レ使請レ之。於レ是從仕二尾張一。初爲二法橋一。後晉爲二

堀正意

堀正意、字は敬夫、杏菴と號し、又杏隱と號す。近江の人。尾張侯に仕ふ。

杏菴、惺窩に師事して、篤行博學(一)、當時林羅山・松永尺五・那波活所と、倶に四天王の稱有り。嘗て安藝侯に游事す(二)。是時尾張の敬公、學を好み士を求め、杏菴を得て之を臣とせんと欲す。乃ち使を遣して之を請ふ。是に於て徙りて尾張に仕ふ。初め法橋(三)と爲り、後晉んで法眼となる。(日本詩史に、初め尾張に仕へ、後安藝に仕ふと爲すは誤れり。)寬永年中、江戶に來りて台德大君(四)に謁し、衣服及び酒食の賜を拜す。且つ旨を奉じて弘文院(五)に入り、諸家系圖傳編修に與る。別に自ら武家系圖若干卷を撰ぶ。

(一) 行ひ手あつくして學問ひろし　(二) 客分として仕ふ　(三) 法橋も法眼も共にもと僧の位にて、法橋より法眼、法眼より法印に昇る　(四) 二代將軍秀忠　(五) 林家の學校

岑寂。偶書二所レ思一云。晩近高尚石大拙翁。隱二於洛北四明山下一。毎二出行一。使三僮僕擔二偃月刀一以隨レ之。又作レ詩云。枕頭三尺劍。瓶裏一枝梅。其所レ養可二以知一也。翁平居把二筱竹節大如意一。如レ曰下腰間無二寸鐵一。胸裏揮中三軍上。亦知下其有レ所レ托也。

(一) 晩年 (二) 口に兵事を談ぜず (三) 軍事を問へば (四) 雄々しき心、たけき心 (五) 灰となるの義にて、消ゆること (六) 野に隱遁せりと雖も未だ武士の心がけを忘れず (七) 山中の住居物靜かに吾が思ふ所をそゞろに書くといふ題の文 (八) けだかき人の義、高士 (九) 石川大拙、丈山をいふ (一〇) なぎなた (一一) 丈山の心がくる所之にてわかる (一二) 平生、つれづれ (一三) 竹のふしにて造れる大なる如意をもてあそぶ (一四) 腰に刀の如き武器を帶びざるも、胸中には三軍を指揮するの概あり (一五) 心を寄する所

丈山不レ置二妻妾一無二嗣子一。而緇徒相承住二其舊居一。以致二祭薦一。至レ今不レ廢。居多二遺物一。明陳眉公古琴一張。尤其所二愛重一云。享保中靈元上皇。臨幸手撫レ之。大賞嘆。勅補二其四亡絃一。且命製二錦嚢一盛レ之。

丈山妻妾を置かず嗣子無し。而して緇徒相承けて其舊居に住し、以て祭薦を致し、今に至るも廢せず。居に遺物多し。明の陳眉公の古琴一張、尤も其の愛重する所なりと云ふ。享保中、靈元上皇、臨幸ありて手づから之を撫し、大に賞嘆し、勅して其四亡絃を補ひ、且つ命じて錦嚢を製し之を盛らしむ。

(一) 僧侶ども (二) 祭祀を行ふ (三) 失くなれる四本のいとを補ひかく (四) 琴を納れしむ

千態萬狀、人莫二得而闚一。是以屬二信之麾下一者。雖二老將軍監一。未四嘗開三出レ師有二號令一云。由レ是觀レ之。秀頗用二正戰一。信常用二奇戰一。有レ形二于秀之軍一。無レ形二于信之兵一。豈有下以レ有レ形擊レ無レ形。以二正戰一勝中奇戰上哉。惟理之所レ未レ盡。而又予之所レ不レ曉也。方今遣下信與レ秀以二同軍同運一戰中于一時上。則什之八九信克可レ得レ勝乎。未レ知所三以秀之可二戰勝一者云云。

丈山晚節壹事二風咏一。口絕二兵革一。人或叩レ之。輒曰。衰老無二記憶一。前事皆茫然。雖レ然其雄心蓋猶有二未レ灰者一。林春齋賀二其九十一序云。夫利刀傍レ枕。弓銃在レ側。則雖レ在二山林一。未レ忘二士林之素一。又桐江山人。山房

丈山、(一)晩節壹に風咏を事とし、(二)口に兵革を絶つ。人或は(三)之を叩けば、輒ち曰く、衰老記憶なし。前事皆茫然たりと。然りと雖も其(四)雄心蓋し猶ほ未だ(五)灰せざる者有り。林春齋其九十を賀する序に云ふ、夫れ利刀枕に傍ひ、弓銃側に在り。則ち(六)山林に在りと雖も、未だ士林の素を忘れずと。又桐江山人の、(七)山房岑寂思ふ所を偶書すに云へらく、晩近の(八)高尚(九)石大拙翁、洛北四明山下に隱れ、出行する毎に、僮僕に(一〇)偃月刀を擔はしめ以て之を隨ふと。又詩を作つて云ふ、枕頭三尺の劍、瓶裏一枝の梅と(一一)。其養ふ所以て知る可きなり。翁(一二)平居(一三)竹節の大如意を把翫す。(一四)腰間寸鐵無きも、冑裏三軍を揮ふと曰ふが如き、亦其(一五)托する所有るを知るなり。

能及。信長之所長者。不拘土地之嶮難。不辨兵卒之多寡。出於不意。擊於無備。十戰十勝。能獲其全者也。如挫敵拔國。則源平已還。罕以可準擬於信長者。只與義經在伯仲之間邪。何者亡今川於桶挾。討武田於長篠。攻佐佐木。一朝落數城。其餘奇策祕計。可稱而言哉。是皆奇戰非正戰。至其行軍用兵。則如風之發。如電之過。進退動靜

も、未だ嘗て師を出すに號令あるを聞かずと云ふ。是に由て之を觀れば、秀は(一七)頗る正戰を用ひ、信は常に奇戰を用ふ。秀の軍に形有り、信の兵に形無し。豈に形有るを以て形無きを擊ち、正戰を以て奇戰に勝つこと有らんや。惟れ理の未だ盡さざる所にして、又予の曉らざる所なり。方今信と秀とをして、同(一九)(一八)軍同運を以て一時に戰はしめば、則ち什の八九は信克く勝を得べきか。未だ知らず、秀の戰勝すべき所以の者を云云と。

(一) 武將を批評す (二) 甲冑をつけ武器を手にとる (三) 臨機應變、其場合々々にて巧に兵を動かす (四) 寸分の隙なくして敵に味方の軍容の怠れるすきを覗ふを得しめず (五) 敵國をわが手の中に握る如く自由にす (六) 謀略をめぐらし必勝の策を立つ (七) 交戰の準備なきを襲擊す (八) 完全なる勝利を得 (九) 肩をならべるもの無し (一〇) 兄たり難く弟たり難く負けず劣らず (一一) 今川義元を桶挾間に亡ぼす (一二) 武田勝賴 (一三) 美濃の佐々木承禎 (一四) 人の意表に出づる奧妙の謀略一々述べがたし (一五) 信長の軍の進退動靜は色々樣々にして人之を推測しがたし (一六) 信長の旗下に屬する老將及び軍目附 (一七) 秀吉 (一八) その理由の未だ十分に究め得ざる所にして自分に於ても了解しがたき所なり (一九) 同等の軍勢同一の運命

持二空論一。使二識者見一レ之。則其不二竊笑一者幾希矣。如二丈山一則躬既擐レ甲執レ兵。其言決非二空論一。答二羅山一書。有レ論二信長秀吉一。今録二于左一。曰。凡秀吉之所レ長者。克乘二臨レ機應レ變之勢一。間不レ容髮。不レ使二敵獲一レ窺二惰氣一。幷二呑四海一。指二揮三軍一。寘二敵國於掌握之中一。運レ籌決レ勝者。匪二諸將之所二

則ち躬既に甲(二)を擐き兵を執る、其言決して空論にあらず。羅山に答ふる書に、信長・秀吉を論ずる有り。今左に錄せん。曰く、凡そ秀吉の長ずる所は、克く機(三)に臨み變に應ずるの勢に乘じ、間髮(四)を容れず、敵をして惰氣を窺ふことを獲しめず、四海を幷呑し、三軍を指揮し(五)、敵國を掌握の中に寘いて、籌(六)を運らし勝を決する者にして、諸將の能く及ぶ所に匪ず。信長の長ずる所は、土地の嶮難に拘はらず、兵卒の多寡を辨ぜず、不意に出で、無備(七)に擊ち、十戰十勝、能く其全き(八)を獲る者なり。敵を挫き國を拔くが如き、則ち源平已還、以て信長に準擬(九)す可き者なし。只義經と伯仲(一〇)の間にあらんか。何となれば今川(一一)を桶挾に亡し、武田(一二)を長篠に討ち、佐佐木(一三)を攻め、一朝にして數城を落す。其餘(一四)奇策祕計、稱げて言ふ可けんや。是れ皆奇戰にして正戰に非ず。其軍を行り兵を用ふるに至つては、則ち風の發するが如く、電の過ぐるが如く、進退(一五)動靜千態萬狀、人得て圖るなし。是を以て信(一六)の麾下に屬する者、老將軍監と雖

好ㇾ學ㇾ道。不下爲ニ流俗一所ㇾ移而深感ㇾ之。繇ㇾ茲操ㇾ觚塞ニ其責一矣耳。累年其所ㇾ求者。積逓如ㇾ山。以ニ老病一故。茲歎厭也。自ㇾ今之後。矢而禁ㇾ書ニ扁榜一。吾丈它日。勿三爲ㇾ人乞ニ文字一。又答ニ武杏仙一書曰。前回所ㇾ告拙字。操ㇾ觚汚ㇾ紙。驅ㇾ力呈焉。老嬾嬴薾。甚勸ニ筆研一。吾丈自ㇾ今之後。休三爲ㇾ人匄ニ文字一。依ニ腕將ㇾ脱。方今小陵一句。絶ㇾ筆矣耳。它日思ㇾ之。其爲ㇾ時所ニ競乞一者。如ㇾ此。

に答ふる書に曰く、前回告ぐる所の拙字、觚を操り紙を汚し、力を驅て呈す。(一〇)老嬾嬴薾、(一一)甚だ筆研に勸む。(一二)吾丈今より後、人の爲に文字を匄ふことを休めよ。『腕將に脱けんとするに依る』(一三)方今小陵の一句もて、筆を絶たんのみ。它日之を思へと。其の時の爲に競ひ乞はるゝこと、(一四)此の如し。

(一) 御額みの大字小僕に托して御手許に進呈す (二) 瑕窩を介して丈山の書を求めし人をさす (三) 世俗のために志を變ぜず (四) 觚は木板にて、古昔字を記せしもの、此處にては書をものして依頼を果ししをいふ (五) 書の依頼の滞り積んで山の如し (六) 倦みいとふ (七) 額の類を書かず (八) 足下此後人に頼まれて予に書を乞ふ勿れ (九) 武田杏仙、名は靜、字は信成、衆山と號す、江戸の醫 (一〇) 心進まぬをつとめてお送りする (一一) 老い衰へ瘦せ疲る (一二) 筆硯 (一三) 腕も脱けるばかりなれば筆を執らずといふ杜子美の一句もて筆を絶たん (一四) 時人

儒者之評ニ將帥一。率不ㇾ達ニ軍略一。徒於ニ紙上一

儒者の將帥を評するや、(一)率ね軍略に達せず。徒に紙上に於て空論を持す。識者をして之を見しめば、則ち其の竊に笑はざる者幾ど希ならん。丈山の如きは

是皆陽戈。惺窩見而奇之曰。斯人異時當爲詩宗。富士山云。仙客來遊雲外巓。神龍棲老洞中淵。雪如紈素煙如柄。白扇倒懸東海天。此詩尤膾炙人口。

ふ、(四)仙客來り遊ぶ雲外の巓、(五)神龍棲み老ゆ洞中の淵、雪は紈素(六)の如く煙は柄の如し、白扇倒に懸る東海の天と。此詩尤も人口に膾炙す。(七)

(一)夕日 (二)夕陽に向つて竿を差出せる狀を魯陽の戈に譬へたり。魯陽公が韓と戰爭中、戰酣にして日將に暮れんとせし時、戈を以て天日を招き返へせりといふ故事 (三)他日詩の大家とならん (四)仙人。富士山頂に天女の舞へるを見しこと古傳にあり (五)仁田忠常富士の人穴を究めて神龍を見ると傳ふ (六)白きねりぎぬ (七)廣くいひふらさる

丈山兼工書。嘗奉後光明天皇勅。作隷書以獻。有酒肴之賜。世以爲榮。其與弢窩書曰。所勾大字。附與小价呈似左右。余素聆。其人

丈山兼て書を工にす。嘗て後光明天皇の勅を奉じ、隷書を作り以て獻ず。酒肴の賜有り。世以て榮と爲す。其弢窩に與ふる書に曰く、(一)勾ふ所の大字、小价に附與し左右に呈似す。余素聆く、(二)其人好んで道を學び、(三)流俗の爲に移されずと。而して深く之を感ず。茲に(四)繇て觚を操り其責を塞ぐのみ。累年其の求むる所の者、(五)積逋山の如し。老病を以ての故に、甚だ(六)斁厭す。今より後、矢つて(七)扁榜を書くことを禁ず。(八)吾丈宅日、人の爲に文字を乞ふこと勿れと。又(九)武杏仙

語哉。唯記二其詞言一。不レ陶二其形象一。則取二荊公詩一。爲二宋詩之主張一。乃不レ欲下圖二其人於堂宇一。以朝夕看中厥狀貌上也。若夫子與氏。其家有二陽貨之像一。歷二朝觀夕覽一。可レ不レ斁邪。可レ不レ惡邪。足下以爲二何如一。

嘗變二姓名一稱二圯左近一。羅山爲作二一絕一祝二前程一。乃以二圯左近三字一置二其句頭一。詩云。圯邊一卷授二留侯一。左右從容善運レ籌。近想只成黃石約重來有レ待赤松遊。

嘗て姓名を變じて圯左近と稱す。羅山爲に(一)一絕を作つて前程を祝す。乃ち圯左近の三字を以て其句頭に置く。詩に云ふ、(三)圯邊一卷留侯に授く、(四)左右從容として善く籌を運らす、(五)近く想ふ只成す黃石の約、重ねて來る待つ有り赤松の遊と。

(一)一首の絕句 (二)將來 (三)圯邊は圯橋のほとり、留侯は張良、黃石公が六韜三略の卷物を張良に授けたる故事 (四)漢の高祖の左右にありて從容としてよく計謀をめぐらす (五)黃石公と張良の約に寄せて、赤松の遊をなさんと丈山を待つに託せるなり

漁村夕照句。欲下將二簑衣一曝中返照上。釣竿還

漁村夕照の句に、簑衣を將つて(一)返照に曝さんと欲すれば、(二)釣竿還つて是れ魯陽の戈と。惺窩見て之を奇として曰く、斯の人(三)異時當に詩宗たるべしと。富士山に云

略云。古人有曰。聖人以下不能無小疵。所謂謝王柳劉。可併按矣。洗垢索瘢。則疇獲無過哉。有始有終者。其惟聖人耶。至如介甫。元惡大憝。何比小疵。蘇洵之見介甫。猶孔休之見王莽。詐術讒慝。放辟邪侈。難道先知之所察也。彼一旦雖揜藏其暴戾。臻秉政得志。果引用凶邪。排擯忠直。終以文字殺人亂國。禍及後世。而俾天下環亡。罪莫大焉。周德恭評爲古今第一小人。合莽操懿溫爲一人者也。此言最公而明矣。來書云。程子曰。新法之行。吾黨激成之。昇菴曰。此言亦非。季氏富於周公。求也爲之聚斂而附益之。孔子曰。非吾徒。小子鳴鼓而攻之可也。此聖門之公案。亦不曰冉求聚斂孔子激成之哉。來書云。君子不以人廢言。某亦曰。君子不以言擧人。來書又云。孟子取陽貨之語。某何異孟子之取

がまゝにしてよこしま 〔二九〕 先知の觀察通り。先知は蘇洵をさす 〔三〇〕 安石一旦其惡心を包みかくしたれども宰相の位に居り得意の時代となるや、韓絳、呂惠卿等の惡人を登用し、歐陽修、文彥博、富弼、韓琦、司馬光等の己れに反する忠臣を排斥す 〔三一〕 莽は王莽、漢の平帝を弑して皇帝と稱し後光武及伯升に殺されたる逆臣、操は曹操なり、權謀を用ひて四方を征服す、懿は懿公(齊君)なり、昭公の死後其子舍を弑して自立す、溫は桓溫なり、黨をつくり賢をしりぞけ、閥族をつくる 〔三二〕 羅山の書 〔三三〕 魯の公室の三家の一にして權勢を專らにす 〔三四〕 冉求、孔子の弟子にして季氏の吏 〔三五〕 季氏のために民の貢稅を取上げて富を增加す 〔三六〕 論語先進篇にあり。冉求は吾人君子の徒に非れば汝等鼓を鳴して其罪を宣言し之を責むべし 〔三七〕 儒教にて事を處理する上の目安 〔三八〕 程子の言ひ草を首肯するとなれば冉求の聚斂は孔子が激して遂行せしめしものともいはるべし 〔三九〕 君子は人の言が名言なりとて、其人物も完全なる人なりと擧げ稱することなし 〔四〇〕 異論をとなへず 〔四一〕 安石の詩句を記すのみにて畫像を作らざるならば 〔四二〕 安石の詩を取つて宋時代の詩の主宰とす 〔四三〕 安石の像を詩仙堂の壁上に畫きて朝夕其の姿を見るを欲せず 〔四四〕 孟子 〔四五〕 朝に晩に眺めんには

曰。不有損於介甫。有益於我。陸象山分其罪於諸公。羅大經惜其不浴光風霽月。夫靈運。王維。宗元。禹錫之徒。叛于國陷于賊。猶是不舍。而何獨拒荊公。抑六六詩僊名。出自本邦歌僊。歌僊取歌而不取人也。若今幷論人與詩。則不啻詩僊。謂人僊亦可也。丈山書

厥の狀貌を看るを欲せざなり。若し夫の子輿氏(四四)にして、其家に陽貨の像ありて、朝觀夕覽(四五)を歷ば、歎はざる可けんや、悪まざる可けんや。足下以て何如となす。

(一) 友道 (二) なか好きこと之を以て知らる (三) 藤原公任の選びたる柿本人麿以下三十六人の歌人 (四) 後漢の人、匈奴に使して幽囚せられ十八年にして還る (五) 晉代の詩人、淵明と號す (六) 持統文武の世に仕へし歌人 (七) 古今集撰者の一人、醍醐天皇時代の歌人 (八) 取るべきか捨つべきか議論あるもの (九) 書狀往來して議論をやめず (一〇) 王安石 (一一) 人物の卑俗の爲に言の善きをすてず (一二) 孟子滕文公篇に、陽虎曰く、富を爲せば仁ならず、仁を爲せば富まずとあり。陽虎は陽貨と同じ (一三) 殷の湯王の宰相伊尹と、周の武王・成王の相たる周公旦、共に名宰相 (一四) 房玄齡、杜如晦、共に唐代の名宰相 (一五) 夏・殷・周の三代、共に治世の範とせらる (一六) 王安石の改正法律の施行せられたるは、我黨相集りて反對せし故反つて安石を激して依怙地にならしむとなり。此意淵源錄三、明道傳等に詳なり (一七) 安石の字 (一八) 安石の罪は當時正義派たる歐陽修、富弼、司馬光等の諸公が分擔すべきものと論ず (一九) 大人物の胸中雨後の風月の如く爽かなるをいふ。鶴林玉露の著者羅大經は安石が才餘りありながら度量の小なるを嘆惜す (二〇) 三十六歌仙は歌のよきを取れるにて人物のよきを取れるに非ず (二一) 聖人には過失なしと雖も其れ以下の人間には些少の缺點なきあたはず (二二) 謝靈運・王維・柳宗元・劉禹錫を指す (二三) わざと缺點を洗ひ立てする (二四) 大惡人 (二五) 蘇老泉辨姦論を著して安石を排擊す (二六) 漢書王莽列傳に、孔休が漢の逆臣王莽を嫉視することあり (二七) 策略を以て人をいつはり、讒言を以て人を陷る (二八) わ

越于千古。故古今評レ詩者。胡元任。魏醇甫。蔡正孫之輩。莫レ不下謂二荊公一爲中一大家上者。夫君子不下以レ人廢上レ言。故孟子取二陽貨之語一。朱子楚辭後語。乃載二荊公之詞一。荊公初自謂。設令德不レ及二伊周一。而才須レ優二房杜一。庶幾致二君於三代之盛一。程子曰。新法之行也。我輩激二成之一。又

る所を逭れ難し。(三〇)彼一旦其暴戾を掩ひ藏すと雖も、政を秉り志を得るに臻つて、果して凶邪を引用し、忠直を排擯す。終に文字を以て人を殺し國を亂し、禍後世に及んで、天下をして壞亡せしむ。罪焉より大なるはなし。周德恭評すらく古今第一の小人たり、(三一)莽・操・懿・溫を合して一人と爲せる者なりと。此言最も公にして明かなり。(三二)來書に云ふ、程子曰く、新法の行はるゝ、吾輩之を激成すと。昇菴曰く、此言亦非なり。(三三)季氏は周公より富めるに、(三四)求や之が(三五)爲に聚斂して之を附益す。孔子曰く、(三六)吾が徒に非ず、小子鼓を鳴して之を攻めて可なりと。(三七)此れ聖門の公案なり。亦冉求の聚斂孔子之を激成すと曰はざらむやと。來書に云ふ、君子は人を以て言を廢せずと。(三八)某も亦曰はん、(三九)君子は言を以て人を擧げずと。來書に又云ふ、孟子、陽貨の語を取ると。某何ぞ孟子が語を取りしに異あらんや。(四〇)唯其詞言を記し、(四一)其形象を陶らざらんには、則ち(四二)荊公の詩を取りて、宋詩の主張と爲さんも、乃ち其人を堂宇に圖して以て朝夕(四三)

運。鮑昭。韓愈。柳宗元。劉禹錫。白居易。李賀。盧仝。林逋。邵雍。梅堯臣。蘇舜欽七對。羅山所二改定一也。羅山又欲下以二曾鞏一對二歐陽修一。以二王安石一對中蘇軾上。而丈山惡二安石爲一レ人。不レ肯レ取レ之。則貽書往來。論辨不レ置。丈山卒不レ從焉。羅山書略云。荊公之罪。誠如二足下之言一。而其詩卓二

楚辭後語は、乃ち荆公の詞を載す。荆公初め自ら謂ふ、設令徳は伊・周(一三)に及ばざるも、才は須く房杜(一四)に優るべし、庶幾はくは君を三代(一五)の盛に致さんと。程子曰く、新法(一六)の行はるゝや、我輩之を激成すと。又曰く、介甫(一七)に益有らざるも、我に益有りと。陸象山(一八)は其罪を諸公に分ち、羅大經(一九)は其光風霽月に浴せざるを惜む。夫れ靈運・王維・宗元・禹錫の徒は、國に叛き賊に陷れるに、猶ほ是れ舍てず。何ぞ獨り荆公を拒むや。抑ゝ六六詩僊の名は、本邦の歌僊より出づ。歌僊(二〇)は歌を取つて人を取らず。若し今人と詩とを并せ論ぜば、則ち啻に詩僊のみならず、人僊と謂ふも亦可なりと。丈山の書の略に云ふ、古人曰へる有り、聖人(二一)以下小疵なき能はずと。所謂謝(二二)・王・柳・劉、併せて按ず可し。垢(二三)を洗ひ瘢を索めば、則ち疇れか過なきを獲んや。始有り終有る者、其れ惟聖人か。介甫の如きに至つては、元惡大憝(二四)、何ぞ小疵に比せん。蘇洵(二五)の介甫を見ること、猶ほ孔休(二六)の王莽を見るがごとし。詐術讒慝(二七)、放辟邪侈(二八)、先知(二九)の察す

丈山與羅山一友義殊深。羅山集中。載二其往復書三十八篇。契分可レ見焉。而意見不レ同。有下終不二相容一者上。其三十六詩僊。是倣二本邦三十六歌僊一也。以二蘇武一對二陶潛一。猶三柿本人麻呂配二紀貫之一。左右各十八人。皆有二配對一。初其定レ之。取舍可レ議者。悉問二諸羅山一。蘇武。陶潛。謝靈

丈山は羅山と友義殊に深し。(一)羅山の集中、其往復の書を載すること三十八篇。(二)契分見るべし。而して意見の同じからざる、終に相容れざる者有り。其三十六詩僊は、是れ本邦三十六歌僊(三)に倣へるなり。蘇武(四)を以て陶潛(五)に對するは、猶ほ柿(六)本人麻呂の紀貫之(七)に配せるがごとし。左右各ゝ十八人、皆配對有り。初め其の之を定むるとき、取舍(八)の議す可き者は、悉く諸を羅山に問ふ。蘇武・陶潛・謝靈運・鮑昭・韓愈・柳宗元、劉禹錫・白居易、李賀・盧仝、林逋・邵雍・梅堯臣・蘇舜欽の七對は、羅山の改定する所なり。羅山又曾鞏を以て歐陽修に對し、王安石を以て蘇軾に對せんと欲せしも、丈山安石の人と爲りを惡み、之を取ることを肯ぜず。則ち貽書往來(九)、論辨置かず。丈山卒に從はず。羅山の書の略に云ふ、荊公(一〇)の罪、誠に足下の言の如し。而るに其詩は千古に卓越せり。故に古今詩を評する者、胡元任・魏醇甫・蔡正孫の輩、荊公を謂つて一大家と爲さざる者莫し。夫れ君子は人(一一)を以て言を廢せず。故に孟子(一二)は陽貨の語を取り、朱子の

外。嘗選下漢晉至二唐宋一能詩者三十六人上。令三畫工狩野守信寫二其像一。自錄二其詩各一首一。并以揭二楣間一。號曰二詩僊堂一。諸軒冕來訪者。一切謝二絕之一。其所二友善一。獨如二林羅山。堀杏菴。埜士包。僧元政。及明陳元贇一是也。後水尾天皇屢徵レ之。固辭數四。賦二倭歌一陳二其志一。歌曰。蟣怛剌滋捺。設密訥屋渇蟣訥。過聾孤篤木屋乙訥捺密速鳥。葛傑櫝俗姒葛滋。天皇益高二其操一曰。恬退如レ此。朕豈可レ奪乎。從レ是不二復徵一。

詩各々一首を錄し、并せて以て楣間(三)に掲げ、號して詩僊堂といふ。諸軒冕(四)の來訪する者は、一切之を謝絕す。其友とし善き所、獨り林羅山・堀杏菴・埜士包(五)・僧元政及び明の陳元贇の如き是なり。後水尾天皇屢々之を徵す。固辭すること數四。倭歌を賦して其志を陳ぶ。(歌に曰く、わたらじな蟬(六)の小川の淺くとも(七)老の波そふ影ぞはづかし)天皇益々其操を高しとして曰く、恬退(八)此の如し。朕豈に奪ふ(九)可けんやと。是により復た徵したまはず。

㊀ 世事をなげうちて上り後は、世俗のことに淡泊にして、俗塵の外に超越す ㊁ 世間的の欲望淡泊にして俗塵の外に超越す ㊂ なげしにかゝぐ ㊃ 貴人の冠、轉じて貴人の意 ㊄ 野間三竹、號は靜軒、松永尺五門 ㊅ 山城國下鴨村の東を流れ糺の森の南に至りて加茂川に入る支流 ㊆ 寄る年波の水面に映る影恥かしとなり。老を以て徵辟を謝せしなり ㊇ 淡泊にしてへりくだる ㊈ 志を曲げさす

絶人。元和元年大坂之役。獨竊出營先登。斬首二級。然以其犯令見黜。以母老家貧故。寄食淺野侯。居十歳母以病卒。服闋乃辭去。棲遲叡山麓一乘寺村。以翰墨自娯。丈山初年喜瞿曇氏。後介羅山學惺窩門。壹從事斯文。才尤長於詩。朝鮮權式稱爲日東李杜。物徂徠亦曰。東方之詩杰。

闋つて乃ち辭し去り、叡山の麓一乘寺村に棲遲し(八)、翰墨を以て自ら娯む(九)。丈山初年より瞿曇氏(一〇)を喜び、後羅山を介して惺窩の門に學ぶ。壹に斯文に從事し、才尤も詩に長ず。朝鮮の權式(一一)稱して日東の李杜(一二)と爲す。物徂徠亦曰く、東方の詩杰(一三)と。

(一) 徳川氏の先祖　(二) 尾張國愛知郡の地名、天正十二年四月羽柴秀吉の將池田信輝等徳川家康の虚を衝かんとして擊破せらる　(三) 若き時其の武勇人に越えたり　(四) 慶長十九年の和議破れて元和元年夏再び徳川氏大阪城を攻め豐臣氏を滅ぼす　(五) 軍令を破りし罪により罰せらる　(六) 食客となる　(七) 喪に服する期をはる　(八) 隱れすむ　(九) 文筆をたのしむ　(一〇) 釋迦在俗の時の姓にして、ガウタマ(喬答摩)の音譯、此は轉じて佛學　(一一) 人名　(一二) 日本の李太白、杜甫。大詩人の意　(一三) 詩傑に同じ、すぐれたる詩人

丈山謝事之後。世味泊如。超在塵埃之

丈山事を謝するの後は、世味泊如として、塵埃の外に超在せり。嘗て漢・晉より唐・宋に至る能詩の者三十六人を選び、畫工狩野守信に其像を寫さしめ、自ら其

石川凹。初名重之。字丈山。小字嘉右衛門。號六六山人。四明山人。凹凸窠。大拙。烏鱗。山木。山材。藪里。東溪。三足。皆其別號。三河人。丈山家世仕大府遠祖。祖正信戰死于長久手。父信定亦有武名。丈山少壯勇

卷之二

石川凹

石川凹、初の名は重之、字は丈山、小字は嘉右衛門、六六山人と號す。四明山人・凹凸窠・大拙・烏鱗・山木・山材・藪里・東溪・三足は皆其別號なり。三河の人。

丈山の家は世〻大府(一)の遠祖に仕ふ。祖正信は長久手(二)に戰死し、父信定亦武名有り。丈山少壯(三)にして勇人に絕す。元和元年大坂の役(四)、獨り竊かに營を出でて先登し、首二級を斬る。然れども其の令を犯す(五)を以て黜けらる。母老い家貧しきを以ての故に、淺野侯(六)に寄食す。居ること十歲にして、母病を以て卒す。(七)服

所ニ旁譯一五經上。似ニ好學之篤者一。然一旦犯ニ天地不レ容之罪一。身陷ニ大辟一。雖レ有ニ小善一。亦何足レ稱。中江藤樹。作レ論曰。玄同爲レ人。徒事ニ於博物洽聞一。以ニ徇レ外誇ヒ多爲レ務。而不レ覈ニ表裏眞妄之實一。其待ニ安昌一如ニ犬彘一。故安昌爲ニ怒氣一所レ動。而犯ニ逆理亂常之罪一。

胸を貫き喉をたちきる ㊆ 従ひ學ぶこと多年 ㊇ 訓點を附す ㊈ 死罪 ㊉ 博く物事を聞きしる ⑪ 外的智識を主として内的修養を怠り多智を誇る ⑫ うはべと裏と眞と僞とを明白にせず ⑬ 犬か豚かの如くに取扱ふ ⑭ 道理に反し人道をみだす罪

田村。故又氏二蒲田一。蒲田或作二鎌田一。蓋以二蒲鎌倭讀同一也。

寛永戊辰六月十四日。家人皆出。觀二祇園社會一。得菴獨居讀レ書。方倦裕微睡。弟子安田安昌者。潛來伺レ之。卽就刃。得菴未レ及レ轉レ身。胷洞吭絕。聞者識與レ不レ識。莫レ不二嘆惋一。官卽捕二安昌一刑レ之。羅山作二墓記一惜レ之。噫。彼安昌從遊有レ年。嘗校二刻羅山

寛永戊辰六月十四日、家人皆出でて祇園の社會を觀る。得菴獨居書を讀み、方に倦み裕として微睡す。弟子安田安昌といふ者、潛び來りて之を伺ひ、卽ち就いて刃す。得菴未だ身を轉ずるに及ばず、胷洞吭絕す。聞く者識ると識らざると、嘆惋せざるなし。官卽ち安昌を捕へて之を刑す。羅山墓記を作り之を惜む。噫彼の安昌從遊年有り。嘗て羅山の旁譯する所の五經を校刻す。好學の篤者に似たり。然るに一旦天地容れざるの罪を犯し、身大辟に陷る。小善有りと雖も、亦何ぞ稱するに足らん。中江藤樹、論を作りて曰く、玄同の人と爲り、徒に博物洽聞を事とし、外に徇ひ多きに誇るを以て務と爲す。而して表裏眞妄の實を覈かにせず。其安昌を待つこと犬彘の如し。故に安昌怒氣の爲に動かされて、逆理亂常の罪を犯すと。

㈠ 五年 ㈡ 京都八阪神社の祭禮 ㈢ いびきを高くして眠る ㈣ 刄にて刺す ㈤ 身をかはす間なし ㈥

菅玄同。字子德。號得菴。又號生白室。播磨人。得菴年二十四。入京師曲直瀨玄朔學醫。既而登惺窩門。專修儒學。且好聚群書。架上所插。萬卷不啻。云。久之名聞遠邇。來行束脩者甚衆。惺窩高第弟子五人。得菴其一也。

菅玄同

菅玄同、字は子德、得菴と號す。又生白室と號す。播磨の人なり。

得菴は年二十四にして、京に入りて曲直瀨玄朔を師とし醫を學ぶ。既にして惺窩の門に登り、專ら儒學を修め、且つ好んで群書を聚む。(一)架上插む所、萬卷も啻ならずと云ふ。久しうして名(二)遠邇に聞え、來つて(三)束脩を行ふ者甚だ衆し。惺窩の(四)高第弟子五人あり。得菴は其一なり。

(一)書架に備ふる書物　(二)名遠近に聞ゆ　(三)來つて入門の禮を呈す　(四)すぐれたる弟子

得菴生于播磨飾磨郡蒲

得菴は播磨飾磨郡蒲田村に生る。故に又蒲田を氏とす。蒲田或は鎌田に作る。蓋し蒲と鎌とは倭讀同じきを以てなり。

洒之風。頽敗日久。雙樹襲螢。禪房開扉。先生新拜。國子祭酒。冠服始儼。絳袍藻綬。遠近懷德。束脩禮存。侯伯權貴。結駟造門。春秋祭祀。惟恭惟享。升降周旋。樂音餘響。殿下親臨。屢觀祭儀。側造行殿。來燕來宜。例講經義。珍瑰奇玩。玉帛酒肴。庭實粲粲。大德揚名。享福延壽。先生三全。顧是天祐。物之有終。天地無逌。陰陽消長。四時行健。八十九齡。奄殞厥命。戰戰兢兢。保身全性。謚曰正獻。遺言求銘。吾與夫子。義貫丹青。豈敢辭諸。慟哭薦臻。悲風入衣。淚雨霑巾。自今而後。與誰咨詢。勒銘于石。用啓後人。

豐殺は縁語 〔一五〕 梅洞は春齋の子林春信。即ち春信は學才世に其薰香を發せり」梅と薰盆は縁語 〔一六〕 代々學者の出でたるを形容し、家にたまをつらね、花園に落花をとばせりといふ 〔一七〕 鳳岡は好き時期にあひて林氏の家運起る 〔一八〕 溫厚にしてなさけ深く、すなはにして誠實 〔一九〕 身體の奉養を粗末にし志學の心をば厚くす 〔二〇〕 手より書物をはなさず、意義を詳しくしらぶるを厭はず 〔二一〕 玉を振ふが如く、金の聲の如く、詩句の佳なるをいふ 〔二二〕 出でて官に仕へ國事をとりさばく 〔二三〕 もくろみの立てかたが遠大 〔二四〕 孔子の删定したる春秋をいふ 〔二五〕 治國平天下の政治を助く 〔二六〕 洙水・泗水共に支那魯國にあり、孔子其邊にて弟子を教へたるより、轉じて孔子の教をいふ 〔二七〕 雙樹は林字、即ち林家の學士深く學術を究め、爲めに今迄學問を獨占せし五山の僧徒も門戸を開きて之を林家に讓れり 〔二八〕 弟子より師に贈る入門の禮 〔二九〕 四馬の馬車に乘つて鳳岡を訪問す 〔三〇〕 聖堂に於ける釋奠の禮 〔三一〕 恭しく供物をそなへる 〔三二〕 上り下り立ちめぐり 〔三三〕 德川將軍をさす 〔三四〕 聖堂の側に將軍のお成御殿を作る 〔三五〕 此處に來りて宴し事に從ふ 〔三六〕 將軍の來臨ある每に、例として經書を講義す 〔三七〕 珍奇の品物、珠玉に絹、酒に肴 〔三八〕 贈物が立派 〔三九〕 德、福及壽の三者 〔四〇〕 物に終あることは天地の物之をのがれ難し 〔四一〕 陰陽の二氣互に盛衰し、春夏秋冬の循還怠ることなし 〔四二〕 おそれつゝしむ 〔四三〕 吾と鳳岡とは其の交誼精神を貫く 〔四四〕 聲をあげて泣く 〔四五〕 とひはかる

獻足徵。鷲峰峻峻。奕葉大鳴。讀耕豐熟。梅洞薰盈。家林聯璧。芳園蜚英。鳳岡應期。周鼎以興。先生時遭。乃得其名。溫和慈惠。朴質忠貞。薄身厚志。好古恐榮。手不釋卷。義不厭精。翩翩詩賦玉振金聲。彈冠泣事。規模遠宏。本朝通鑑。取法麟經。貞享以降。式贊權衡。洙

存す。侯伯權貴、駟(二九)を結んで門に造る。春秋祭祀(三〇)、惟れ恭しく(三一)惟れ享け、升降(三二)周旋、樂音餘響あり。殿下(三三)親ら臨み、屢〻祭儀を觀る。側行殿(三四)を造り、來り燕し(三五)來り宜しうす。例、經義(三六)を講ず、珍瑰(三七)奇玩、玉帛酒肴、庭實(三八)粲粲たり。大德名を揚げ。福を享け壽を延ぶ。先生三(三九)を全うせるは、顧ふに是れ天祐なり。物終(四〇)あり、天地遁るゝ無し。陰陽消長(四一)、四時行健。八十九齡、奄かに厥命を殞す。戰戰(四二)兢兢として、身を保ち性を全うす。諡して正獻と曰ふ、遺言に銘を求む。吾と夫子(四三)とは、義、丹青を貫く。豈に敢へて諸を辭せんや。慟哭(四四)薦りに臻る。悲風衣に入り、淚雨巾を霑す。今より後、誰と咨詢(四五)せん。銘を石に勒し、用つて後人を啓く。

㊀ 仕を辭す ㊁ 憫せまりて言はざるを得ず ㊂ 墓碑を立つるは林家の子孫に示すため ㊃ 德は生れ　から有する所、教は古聖の法則による ㊄ 鳳岡の學の淵源甚だ遠きをいふ ㊅ 學問の偉大なる基礎 ㊆ 戰國以來永く絕えたる學問を再興し、太平の文運を大に開く ㊇ 羣を拔きてそびゆ ㊈ 博く事物を知り、理知明か ㊉ 羅山幕府のために外國との修交及び葬儀の典禮を取調べて古例を復す ⑪ 羅山の記述せし記錄は典據とするに足る ⑫ 高く秀てすぐれたるさま ⑬ 代々 ⑭ 讀耕は林春德、卽ち春德は學殖ゆたかにして熟せり、耕と

年八十一致仕。後八年以レ病沒。實享保十七年。六月朔也。下館侯。（今久留里侯先。）作二墓銘幷序一。今錄二銘于左一。曰。言不レ可レ已。實惟迫レ情。碑誄之立。示二爾雲仍一。德其固有。教由二典刑一。源濬流遠。本立道成。崇基隆哉。愼窩先生。遐繼二絶紐一。恢二啓太平一。羅山峩峩。博知叡明。交喪復古。文

年八十一にして(一)致任す。後八年病を以て沒す。實に享保十七年、六月朔なり。下館侯（今の久留里侯の先）墓銘幷に序を作る。今銘を左に錄す。曰く、(二)言已むべからず、實に惟れ情に迫ればなり。(三)碑誄の立、爾の雲仍に示す。(四)德は其固有、教は典刑に由る。(五)源濬うして流遠く、本立つて道成る。(六)崇基隆なるかな。愼窩先生(七)遐く絶紐を繼ぎ、太平を恢啓す。(八)羅山峩峩、(九)博知叡明。(一〇)交喪復古、(一一)文獻徵するに足る。(一二)鷲峰崚崚、(一三)奕葉大に鳴る。(一四)讀耕豐熟、(一五)梅洞薫盈。(一六)家林璧を聯ね、芳園英を蜚ばす。(一七)鳳岡期に應じ、周鼎以て興る。先生時に遭ひ、乃ち其名を得たり。(一八)溫和慈惠、(一九)朴質忠貞。身を薄うし志を厚くし、古を好み榮を恐る。手、(二〇)卷を釋かず、義、精を厭はず。(二一)翩翩たる詩賦、(二二)玉振金聲。(二三)彈冠事に涖み、規模遠宏なり。本朝通鑑は、法を(二四)麟經に取り、貞享以降、式て(二五)權衡を贊く。(二六)洙泗の風、(二七)頽敗日久しく、雙樹螢を囊にし、禪房牖を開く。先生新に拜す、國子祭酒。冠服始めて儼たり。絳袍藻綬。遠近德に懷き、(二八)束脩禮

之厚福方今無比。以今日盛筵知之。然翁不喜何邪。鳳岡曰。若不知乎。壽筵是瀕死之一關也。

なりと。

㈠長壽の祝宴　㈡四方のもの贈物をしてお祝ひを申す　㈢賀筵の食饌座に一ぱいならぶ　㈣死にのぞむ一つの關所

鳳岡歷事五君。凡六十年。元祿享保。最被信任。方正德中。新井白石弄權。議頗不諧。數乞致仕。而不見允。以其名望之隆也。其有所專掌者三焉。曰官爵。曰譜系。曰喪服。此係事體之最大者。其餘機務蓋無不與聞也。故鳳岡之門。客常塡勢奮朝野。

鳳岡五君に歷事すること、凡そ六十年。㈠元祿・享保に、最も信任せらる。正㈡德中に方つて、新井白石權を弄び、議㈢頗る諧はず。數〻㈣致仕を乞へども允されず。其名望㈤の隆なるを以てなり。其專掌㈥する所の者三有り。曰く官爵、曰く譜系㈦、曰く喪服。此れは事體の最大なる者に係る。其餘の機務蓋し與り聞かざる無し。故に鳳岡の門、客常に塡ちて、勢朝野㈧に奮ふ。

㈠綱吉と吉宗の代　㈡家宣將軍の時代　㈢議論甚だあはず　㈣仕を辭すること　㈤人望盛ん　㈥一手に司る役向　㈦家の系圖　㈧幕府と民間

下豪俊爭起。望レ之若二屯雲一。贏レ滕躡レ蹻。負レ書擔レ囊。鹽汗交流。喘息薄レ喉。踵レ門受レ業者。以レ千數。其數千中。有下藉二日月之末光一。而致二身青雲之上一者上。或大小諸侯。厚幣召レ之。以爲二賓師一。亦不レ可二勝記一。其不遇者。在二下醫酒徒之中一。獨自陸沈。於レ是乎莫二能知者一。蘭臺玉山共亦鳳岡門人。

或曰。物徂徠亦出二鳳岡門一。一日鳳岡過二柳澤侯一。侯使二徂徠伴接一。鳳岡謂曰。聞女近倡二異說一以駁二程朱一。駁二程朱一猶恕レ之。然其駁二程朱一者。乃駁二思孟一之漸也。至レ駁二思孟一。則吾決不二少假一レ之。徂徠頓首拜謝。

或は曰く、物徂徠も亦鳳岡の門に出づと。一日鳳岡柳澤侯(一)を過る。侯徂徠をして伴接せしむ(二)。鳳岡謂つて曰く、聞く、女近ろ異說を倡へて以て程朱を駁すと。程朱を駁するは猶ほ之を恕す。然れども其の程朱を駁するは、乃ち思孟(三)を駁するの漸なり。思孟を駁するに至つては、則ち吾れ決して少くも之を假さじと。徂徠頓首拜謝す。

(一) 柳澤吉保 (二) 應接せしむ (三) 子思と孟子とを攻擊するに至る下地

子孫爲設二壽筵一。四方致レ幣稱レ壽。其饋陳滿レ坐。而鳳岡不レ喜。人曰。翁

子孫爲に壽筵(一)を設く。四方幣を致し壽を稱す。其饋陳(二)して坐に滿つ。而るに鳳岡喜ばず。人曰く、翁の厚福方今比無し。今日の盛筵(三)を以て之を知る。然るに翁喜ばざるは何ぞやと。鳳岡曰く、若知らずや、壽筵は是れ死に瀕するの一關(四)

名良資。字斌卿。岡林竹名義道。字勃海。士田栞名貞林。等十有餘人。皆由鳳岡薦。釋褐大府。此他以儒應列侯辟者。前後不少。井上蘭臺送秋山玉山序云。羅山鷟峰二公。創業金馬。而及至整宇先生。世之君子知崇庠序。文辭粲如也。吾黨之甚盛益興。自此始。是故天

り、文辭粲如（六）たり。吾黨の甚だ盛に益〻興る、此より始まる。是故に天下の豪俊爭ひ起り、之を望むこと屯雲（七）の若し。膝を贏ひ蹻を履き（八）、書を負ひ嚢を擔ひ、鹽汗（九）交〻流れ、喘息（一〇）喉に薄り、門に踵つて業を受くる者、千を以て數ふ。其數千の中、日月（一一）の末光に藉りて、身を青雲の上に致す者有り。或は大小諸侯、厚幣（一二）之を召し、以て賓師と爲すもの、亦勝げて記す可からず。其不遇（一三）なる者は、卜醫酒徒（一四）の中に在りて、獨り自ら陸沈（一五）す。是に於てか能く知る者なしと。（蘭臺・玉山、共に亦鳳岡の門人たり）

（一）褐は賤者の服なり、褐を釋くとは、即ち賤者の服をぬぐことにて、浪人が官職につくをいふ。大府は幕府　（二）林羅山及其子の林春齋　（三）漢の武帝學士をして金馬門に待詔せしめ顧問に備ふ。此處は單に學者の意に曰ふ　（四）鳳岡　（五）學校、支那周代には庠といひ、殷代には序といふ　（六）文章粲然として美し　（七）あつまれる雲　（八）膝はきやはん、蹻はわらぢ、旅裝をとゝのへ遊學の途につく　（九）しはからき汗　（一〇）あへぎ〳〵步く形容　（一一）日月の餘光を被る如く鳳岡のおかげにて立身するものあり　（一二）高祿、高額のふちを以て召しかゝふ　（一三）地位を得ざる者　（一四）卜はうらなひをする者、醫は醫師、酒徒は民間のごろつきのなかま　（一五）世俗の中にかくれしづみてあらはれざるをいふ

背曰。肩理潤澤。矍鑠哉老翁也。鳳岡曰。肩下作ㇾ痒。少伸ㇾ手搔ㇾ之。主人又曰。寡人敢請二一言可ㇾ守。鳳岡曰。唯節二比丘一。此時市街有二比丘尼賣ㇾ淫。故俚言謂二好色一爲二比丘好一。其豪氣不ㇾ撓二權貴一。多此類云。

謂つて比丘好きと爲す。其豪氣にして權貴に撓まざること、(九)多くは此類と云ふ。

(一)貴人を訪問す　(二)喜び語る　(三)横柄にいふ　(四)肌のきめつや〳〵とせり　(五)老人の元氣のさかんなるさま　(六)肩の下がかゆいから、かいて呉れ　(七)一口にて身の守りとなるべき言　(八)俗間のいひならはし　(九)權勢ある貴人にへこたれぬ

鳳岡門人甚多。其中如二桂山彩巖（名義樹。字君華。）松浦交翠（名默。字成之。）德力有鄰（名良顯。字子原。）安見晩山（名元道。字大中。）莊恬逸

鳳岡門人甚だ多し。其中桂山彩巖(名は義樹、字は君華)・松浦交翠(名は默、字は成之)・德力有鄰(名は良顯、字は子原)・安見晩山(名は元道、字は大中)・莊恬逸(名は良資、字は臧卿)・岡林竹(名は義道、字は勃海)・土田某(名は貞休)等十有餘人の如き、皆鳳岡の薦に由つて、褐を大府に釋く。此他儒を以て列侯の辟に應ぜし者、前後少なからず。井上蘭臺(一)の秋山玉山を送る序に云ふ、羅山(二)・鵞峰の二公は、創業の金馬(三)なり。而して整宇先生(四)に至るに及び、世の君子庠序(五)を崇ぶことを知

岡慨然以爲。儒之道卽人之道。人之外非レ有二儒之道一。而斥爲二制外者一。可レ謂二敝俗一矣。時大君崇二儒術一。蒙レ命種レ髮。稱二大學頭信篤一。此爲二元祿四年正月十四日事一。於レ是和田春堅稱二傳藏一。大河內春龍稱二新助一。林春益稱二又右衞門一。人見沂稱二又兵衞一。坂井伯隆稱二三左衞門一。伊庭春庭稱二五大夫一。深尾春安稱二權左衞門一。數人皆係二林門一。其餘列國儒者。盡改レ名變レ形以入レ士。至レ今人無二賢愚一。知三儒者教主二世用一。實鳳岡之力也。

福・淨智・淨妙の五寺をいふことあり、此は前者を指す　（一一）法外の人間　（一二）頭髮を剃りて武士の列に入れず　（一三）わるき風俗　（一四）わるき習慣　（一五）世の中の實用を第一とす

嘗詣二貴戚一。主人固重二鳳岡一。乃延與レ坐款語。時天寒。鳳岡喫煙。且傲然曰。老人頭冷。不レ得レ不レ用レ巾。卽取二諸懷中一著レ之。既而主人拊二鳳岡

嘗て貴戚に詣る。主人固より鳳岡を重んず。乃ち延いて坐を與へて（一）款語す。時に天寒し。（二）鳳岡喫煙し、且つ（三）傲然として曰く、老人は頭冷ゆ。巾を用ひざるを得ずと。卽ち諸を懷中に取りて之を著く。既にして主人鳳岡の背を拊でて曰く、（四）膚理潤澤、（五）矍鑠たるかな老翁と。鳳岡曰く、（六）肩下痒を作す。少しく手を伸して之を掻けと。主人又曰く、寡人敢へて（七）一言の守る可きを請ふと。鳳岡曰く、唯比丘を節せよと。此時市街に比丘尼の淫を賣る有り。故に（八）俚言に好色を

成殿三字一揭レ之。又賜二宅地于郭内一。以便二朝參一。蓋吾邦在昔文學稱レ盛。保平已降皇綱解弛。區宇雲擾。士大夫皆投レ筆從二事金革一。於レ是文藝爲二僧徒之物一。其事壹歸二五山一。及三國家致二隆平一。儒者別立レ家。然猶目爲二制外之徒一。禿二其顱一不レ列二士林一。此戰國之頽俗。未レ及レ革也。鳳

を立つ。然れども猶ほ目して制外(一一)の徒と爲し、其顱を禿(一二)して士林に列せず。此れ戰國の頽俗(一三)にして、未だ革むるに及ばず。鳳岡慨然として以爲へらく、儒の道は卽ち人の道にして、人の外に儒の道有るに非ず。而るに斥けて制外の者と爲す、敝俗と謂ふ可しと。時に大君儒術を崇ぶ。命を蒙り髮を種へて、大學頭(一四)信篤と稱す。此を元祿四年五月十四日の事と爲す。是に於て和田春堅は傳藏と稱し、大河内春龍は新助と稱し、林春益は又右衛門と稱し、人見沂は又兵衛と稱し、坂井伯隆は三左衛門と稱し、伊庭春庭は五大夫と稱し、深尾春安は權左衛門と稱す。（數人は皆林門に係る）其餘列國の儒者、盡く名を改め形を變へ以て士に入る。今に至り人賢愚となく、儒教の世用(一五)を主とするを知れるは、實に鳳岡の力なり。

(一) 家ごとに讀書す　(二) 孔子　(三) 上野の山　(四) 將軍の命により　(五) 六代將軍綱吉をさす　(六) 宅地を聖堂の地内に賜ひて參拜に便ず　(七) 保元・平治の亂以來、朝廷の綱紀ゆるむ　(八) 國内雲の如くにみだる　(九) 金は兵器、革はよろひの類。戰爭の意　(一〇) 京都の天龍・相國・建仁・東福・萬壽の五寺をいふ、又鎌倉の建長・圓覺・壽

燭㆒。鳳岡應ㇾ聲賦ㇾ之曰。玉殿沈沈冬夜長。九牧繼ㇾ晷影熒煌。寒花添得德輝美。一抹紅雲遶㆓建章㆒。鳳岡素不ㇾ屑㆓文藻㆒。而思致敏捷。其才可㆓槩見㆒。

て殆ど出仕せざる日無し ㈤ 將軍 ㈥ 珠玉を鏤めたる御殿、沈々は夜の更くること ㈦ 夏の禹王支那全土を九州に分つ。牧は地方長官。晷は日影。此處は柳營の中に諸大名が日影傾くもなほ退出せずついて蠟燭をともして光輝くをいふ ㈧ 寒花は蠟燭を譬へていふ、其の熒煌たる輝きが將軍の德の輝きを添へたりとなり ㈨ 西漢時代の宮殿。一はけ刷いたほどの紅き雲が御殿をとりまく ㈩ 詩文の美辭を好ましくおもはず ⑾ おもひつきの速か ⑿ 其の才華之にて一通り知らる

元祿中。文教大熙。家讀戶誦。先ㇾ是所ㇾ未ㇾ有也。初羅山刱㆓先聖祠于忍岡㆒。鳳岡奉ㇾ旨移㆓之湯島臺㆒。其經營規畫更加㆓弘麗㆒。大君親書㆓大

元祿中、文教大に熙り、(一)家讀戶誦す。是より先には未だ有らざる所なり。初め羅山(二)先聖の祠を(三)忍岡に刱む。鳳岡旨を(四)奉じて之を湯島臺に移し、其經營規畫更に弘麗を加ふ。大君親ら大成殿の三字を書して之を掲げ、又(六)宅地を郭內に賜ひ、以て朝參に(五)便ず。蓋し吾が邦は在昔文學盛なりしと稱す。(七)保平已降皇綱解弛し、(八)區宇雲擾し、士大夫皆筆を投じて事に(九)金革に從ふ。是に於て文藝は僧徒の物となり、其事壹に(一〇)五山に歸す。國家隆平を致すに及び、儒者別に家

鳳岡。又號二整宇一。私二諡正獻一。春齋男。襲二先職一。初稱二春常一。爲二大藏卿法印一。後改二從五位下大學頭一。晩稱二大內記一。

鳳岡爲レ人豪俊雄邁。其學亦承二父祖一。通博多識。爲二一代碩儒一。當二天和新政之時一。夙夜在レ公。殆無二虛日一。一夕侍二大君一。有レ命曰。吾未レ見二汝作一レ詩。試賦二蠟

林戇、一名信篤、字は直民、鳳岡と號す。又整宇と號し、正獻と私諡す。春齋の男なり。先職を襲ふ。初め春常と稱し、大藏卿法印と爲り、後從五位下大學頭に改め(一)、晩に大內記と稱す。

㊀ 晩年

鳳岡人と爲り豪(二)俊雄邁、其學亦父祖に承け、通(三)博多識にして、一代の碩儒と爲る。天和新政の時に當り、夙(四)夜公に在りて、殆ど虛日無し。一夕大(五)君に侍す。命有り曰く、吾れ未だ汝が詩を作るを見ず。試に蠟燭を賦せよと。鳳岡聲に應じて之を賦して曰く、(六)玉殿沈沈として冬夜長し。(七)九牧晷に繼いで影熀煌。(八)寒花添へ得たり德輝の美。一抹の紅雲(九)建章を遶る。鳳岡素より文藻(一〇)を屑じとせず。而して思致の敏捷なる、(一一)其才槩見すべし。(一二)

㊀ 氣象大にしてすぐる　㊁ 博く學に通じ、多く事理を識る　㊂ 大學者　㊃ 早朝より夜晩くまで政府にあり

雪眼月菴。傍花隨柳堂。辛夷塢。仲林。南聰。恆宇。南墩。櫻峰。碩果等。皆所二自稱一也。

春齋有二二男一。長春信。又名愨。字孟著。號二勉亭一。又號二梅洞一。有二才學一。本朝通鑑之修。與有レ力焉。年二十三先卒。士論惜レ之。所レ著有二梅洞遺稿。史館茗話等一。春齋作二西風涙露編一悼レ之。其書載。陳元贇曰。父子齊レ名。古來稀也。林家三代秀才相繼。可レ謂二日域美談一也。次鳳岡。嗣二承箕業一。

春齋に二男有り。長は春信、又の名は愨、字は孟著、勉亭と號し、又梅洞と號す。才學有り。本朝通鑑の修、(一)與つて力有り。年二十三にして先んじて卒す。士論之を惜む。著す所梅洞遺稿•史館茗話等有り。春齋西風涙露編を作りて之を悼む。其書に載す、陳元贇曰く、父子名を齊しうするもの、古來稀なり。林家三代秀才相繼ぐ。(二)日域の美談と謂ふ可きなりと。次は鳳岡、(三)箕業を嗣承す。

(一) 編修　(二) 日本　(三) 父祖の業を受けつぐ

林　戇

林戇。一名信篤。字直民。號二

歲多下嗜二蕎麥麵一者上。盛レ器成レ堆。放飯流歠。張レ口脹レ臉。滿レ腹擁レ喉。更二十餘椀一果然不レ厭。非二消麵蟲一。則不レ及レ此乎。蓋是田舍野人之食也。然侯伯之席。文雅之筵。往往以レ是爲二頓點一。流俗之化無二奈レ之何一。煙酒之行。既五十餘年。蕎麵之行。殆三十年。共是雖レ無レ益二於人一。亦無レ害者必矣。貝原益軒大和本草曰。煙草慶長十年。得二種於番舶一

害無きこと必せりと。（貝原益軒の大和本草に曰く、（一三）煙草は慶長十年に種を番舶に得たり）（一四）

㊀ 晩禾はおくての稻、蕎麥はそば ㊁ そばを食ひしは古來久し ㊂ 珍しくうまき食物 ㊃ 韔は矢ぶくろ、韜は弓ぶくろ、徳川氏天下を統一せし以來 ㊄ 煙草と酒と ㊅ おはぐちに食ひ、ながしこむやうに汁をすふ、無作法なる食ひかたをするをいふ ㊆ 口にふくみ頬張り腹に一ぱいになりて喉につかへる ㊇ 飽きたるさま ㊈ そば食ひ虫、そば好きの人 ㊉ 諸侯の座、風流の席 （一一） お茶うけ （一二） 世間の流行 （一三） 名は篤信、筑前の人、福田侯の臣、松永尺五・山崎闇齋・木下順庵等に學ぶ （一四） 番船、外國船

春齋多二別號一。向陽軒。葵軒。竹牖。爬背子。晞顏齋。也魯齋。物格菴。溫故知新齋。頭

春齋に別號多し。向陽軒・葵軒・竹牖・爬背子・晞顏齋・也魯齋・物格菴・溫故知新齋・頭雪眼月菴・傍花隨柳堂・辛夷塢・仲林・南牕・恆宇・南墩・櫻峰・碩果等は、皆自ら稱する所なり。

相模伊豆駿河。而言窮。座有二少年一。誦二春齋詩一云。武相豆駿遠州際。參尾勢江雍路中。侯喜誦二其句一者再三。

と。侯喜んで其句を誦するもの再三。

(一)武藏・相模・伊豆・駿河・遠江及び三河・尾張・伊勢・近江をよみこむ　(二)平坦の路

續日本紀。養老六年七月。勸二課天下一。種二樹晩禾蕎麥一。繇二是言一。則世啖二蕎麪一也尙矣。意者當時獨給二農食一耳。其上下通用レ之。製殊極二精巧一。以代二珍饌滋味一者。蓋始二于鞬囊以來一。春齋戲答レ惡二煙酒一文曰。近

續日本紀に、養老六年七月、天下に勸課して、(一)晩禾・蕎麥を種樹せしむと。是の言に繇れば、則ち世(二)蕎麪を啖ふや尙し。意ふに當時獨り農食に給せしのみ。其上下通じて之を用ひ、製殊に精巧を極め、以て(三)珍饌滋味に代ふるもの、蓋し(四)鞬囊以來に始まる。春齋が戲に(五)煙酒を惡むに答ふる文に曰く、近歲蕎麥麪を嗜む者多く、器に盛り堆を成し、(六)放飯流歠、(七)口に張り臉に脹れ、腹に滿て喉に擁し、十餘椀を更へて(八)果然として厭かず。(九)消麪蟲にあらずんば、則ち此に及ばざらんか。蓋し是れ田舍野人の食なり。然るに(一〇)侯伯の席、文雅の筵、往往是を以て(一一)頓點となす。(一二)流俗の化之を奈何ともする無し。煙酒の行はるゝこと、既に五十餘年。蕎麪の行はるゝこと、殆ど三十年。共に是れ人に益無しと雖も、亦

邪教一。以惑二蚩蚩之氓一。延及二士林一。誠是當世之一蔽事。而我輩之所レ憂也。不レ可レ不二禁遏一焉。不レ可レ不二芟除一焉。蓋是指二藤樹一也。

又西風淚露編曰。近年聞。高談二性理一。以爲二程朱再出一。而擲二文字一。以二博識一稱レ有レ妨。而指二余輩一爲二俗儒一者亦有レ之。彼爲レ彼。我爲レ我。道不レ同。則不二相爲謀一。余唯守二家業一而已。蓋是指二闇齋一也。

以て程朱の再出と爲して、文字を擲ち、博識を以て妨げ有りと稱して、余輩を指して俗儒と爲す者も亦之れ有り。彼は彼たり、我は我たり。(七)道同じからざれば、則ち相爲に謀らず。余は唯家業を守らんのみと。蓋し是れ闇齋を指せるなり。

(一)明の學者、名は守仁、陽明は其號、知行合一の説を立てて朱學に反す　(二)頑固者　(三)愚民　(四)庶民に對し士以上の人々をいふ　(五)かりのぞく　(六)性命理氣の説　(七)論語衛靈公篇の語、道異なるときは趣向も異にて意見合はざればともに謀慮せずとなり

某侯一夜與二近臣左右一飲。侯問曰。自二江戸一至レ京。經レ國幾也。一人屈レ指答曰。武藏

某侯一夜近臣左右と飮す。侯問うて曰く、江戸より京に至る、國を經ること幾くぞと。一人指を屈して答へて曰く、武藏・相模・伊豆・駿河と。而して言窮す。座に少年有り。春齋の詩を誦して云ふ、(一)武相豆駿遠州の際、參尾勢江雍路の中(二)

官賜二月俸一以供二資用一。其作レ文。祇憑二腹稿口占一。而善書者不レ能レ給。又如二諸家系圖傳一。亦三百餘卷。寛永十七年十二月起草。二十年九月成。

本集百二十卷、鵞峰文集と名づく。之を讀んで益あること、猶ほ羅山集のごとし。近時學人の、(一)詞藻を求めて事實を考へざる者は、以て見るに足らずと爲す。

本集百二十卷。名二鵞峰文集一。讀レ之有レ益。猶二羅山集一。近時學人。求二詞藻一而不レ考二事實一者。以爲レ不レ足レ見。

一 文章の美をのみ求めて事實の確否を考へず

中江藤樹奉二王陽明一。山崎闇齋信二程朱一。皆與二春齋一同レ世。春齋贈二石川丈山一書曰。近歲有二蠢頑者一。借二名於王守仁一而唱二其

中江藤樹(一)王陽明を奉じ、山崎闇齋程朱を信じ、皆春齋と世を同じうす。春齋の石川丈山に贈る書に曰く、近歲(二)蠢頑の者有り。名を王守仁に借りて其邪教を唱へ、以て(三)蚩蚩の氓を惑はし、延いて(四)士林に及ぶ。誠に是れ當世の一蔽事にして、我が輩の憂ふる所なり。禁遏せざる可からず。(五)芟除せざる可からずと。蓋し是れ藤樹を指せるなり。又西風淚露編に曰く、近年聞く、高く(六)性理を談じ、

用。初與二乃父一俱與下造二等儀一之議上。後數奉レ旨編著極夥矣。人或謂レ之曰。少省二思慮一以致二攝養一。春齋輒曰。武人執レ兵而戰。效レ死建レ功。學者讀レ書立レ言。爲隕二性命一。固其所レ望也。

㊀習字　㊁彌正久秀の孫、俳諧をよくし花の本の稱號を賜ふ　㊂なみに擬んづ　㊃羅山をさす　㊄朝儀律令　㊅注意して養生せよ　㊆讀書し學說を立つるためには性命をも捨つ

春齋豪材博識。專用二力述作一。五經皆有二私考一。累二數十卷一。其佗小品極多。其卷帙浩瀚者。爲二本朝通鑑三百十卷一。寬文四年十一月起草。十年十月成。其修二通鑑一也。爲聚二羣儒一。

春齋豪材博識㊀にして、專ら力を述作に用ひ、五經皆私考㊁ありて、數十卷を累ぬ。其佗小品㊂極めて多し。其卷帙浩瀚㊃なる者を、本朝通鑑三百十卷となす。寬文四年十一月起草、十年十月成る。其通鑑を修むるや、爲に羣儒を聚む。官月俸㊄を賜ひ以て資用に供す。其文を作るや、祇腹稿口占㊅に憑り、善く書く者も給すること能はず。又諸家系圖傳の如き、亦三百餘卷にして、寬永十七年十二月に起草し、二十年九月成る。

㊀オすぐれて識ることひろし　㊁一家の意見　㊂短篇の著作　㊃書籍の大部なること　㊄月々の俸給を下賜して著作の費用にあつ　㊅其文を作るには、腹案を口より述ぶるに、筆達者の人も之に追ひつく能はず

林恕一名春勝。字子和。改字之道。稱二春齋一。號二鵞峰一。私二諡文穆一。羅山第三子。平安人。襲二父職一。爲二治部卿法印一。春齋幼時。羅山來二江戸一。春齋與二母氏一留居二平安一。於二文詞一師二那波活所一。於二筆札一師二松永貞德一。年十七始入二江戸一。自レ此趨二家庭一。文藝日益警拔。及二其登

林恕、一名春勝、字は子和、改字は之道、春齋と稱し、鵞峰と號し、文穆と私諡(一)す。羅山の第三子にして、平安の人なり。父職を襲ぎ、治部卿法印となる。

(一) 私のおくり名

春齋の幼時、羅山江戸に來り、春齋は母氏と留つて平安に居る。文詞に於ては那波活所を師とし、筆札(一)に於ては松永貞德を師とす。年十七にして始めて江戸に入り、此より家庭に趨り、文藝(二)日に益々警拔(三)なり。其登用せらるゝに及び、初め乃父(四)と倶に等儀(五)を造るの議に與り、後數々旨を奉じ編著極めて夥し。人或は之に謂つて曰く、少しく思慮(六)を省して以て攝養を致せと。春齋輒ち曰く、武人兵を執つて戰ふや、死を效し功を建つ。學者(七)書を讀み言を立つるや、爲に性命をも隕す、固より其の望む所なりと。

但其先後之異耳。不二亦奇一乎。若論二其氣象一。則先考之和似二明道一。東舟之嚴似二伊川一。其所ㇾ學之優劣。世皆知ㇾ之。不ㇾ待二余言一也。

㊀亡父　㊁程明道、名は顥、程伊川、名は頤、兄弟朱熹とならんで宋學の巨擘　㊂溫和　㊃嚴格

羅山有二四男一。長叔勝。字敬吉。小字左門。年十七沒。羅山作二墓銘一。次長吉。亦早夭。次春齋。嗣二承家學一。次靖。字彥復。祝髮稱二春德一。又號二函三一。又有二考槃薖。讀耕齋。欽哉亭。靜廬號一。博學多二著作一。一時有二聲稱一。亦仕二大府一。寛文元年以ㇾ病沒。年三十八。其家今存。

羅山に四男有り。長は叔勝、字は敬吉、小字は左門、年十七にして沒す。羅山墓銘を作る。次は長吉、亦早く夭す(一)。次は春齋、家學を嗣承す(二)。次は靖、字は彥復、祝髮(三)して春德と稱し、又函三と號す。又考槃薖・讀耕齋・欽哉亭・靜廬の號有り。博學にして著作多く、一時に聲稱あり(四)。亦大府に仕へ、寛文元年病を以て沒す。年三十八。其家今に存す。

㊀わかじに　㊁林家の學問をうけつぐ　㊂祝はたつ、髮をきるなり　㊃其時代に評判高し

林恕

為二鳥有一。羅山慨然仰レ天嘆曰。多年所二力蓄一者。一旦為二祝融一奪。可レ惜。可レ惜。是夕鬱鬱不レ適。越五日奄然長逝。

弟永喜一名信澄。號二東舟一。又號二樗墩一。平安人。學二於惺窩羅山一。博二洽羣經一。羅二網百氏一。名亦與二羅山一齊。年二十八。仕二大府一。削レ髮曰二刑部卿法印一。先二羅山一沒。羅山銘二其墓一。

弟、永喜、一名信澄、東舟と號し、又樗墩と號す。平安の人なり。惺窩・羅山に學び、羣經に博洽し[一]、百氏を羅網し、名亦羅山と齊し。年二十八にして、大府[二]に仕へ、髮を削りて刑部卿法印といふ。羅山に先だちて沒す。羅山其墓に銘す。

[一] 博く諸の經書に通じ、諸氏百家の說を殘らず明らむ　[二] 幕府

春齋曰。先考齡七十五而終。東舟五十四而終。二先生偶與二明道伊川一同二其壽一。

春齋曰く、先考[一]は齡七十五にして終り、東舟は五十四にして終る。二先生は偶ゝ明道・伊川[二]と其壽を同じうす。但其先後の異なるのみ。亦奇ならずや。若し其氣象を論ぜば、則ち先考の和[三]は明道に似、東舟の嚴[四]は伊川に似たり。其學ぶ所の優劣は世皆之を知る。余が言を待たざるなりと。

明暦丁酉正月十九日。郭北失火。弟子報不可免。羅山首肯讀書不輟。又報延燒剝膚。先生盍去乎。於是手其所讀上轎。轎中讀之猶不輟。既而至郭外別業。神色自若。讀者如故。少焉有一人馳報。第宅盡爲焦土。羅山曰。及銅庫乎否。銅庫。卽銅造書庫。係官賜。曰。共

明暦丁酉（一）正月十九日、郭北（二）火を失し、弟子免るべからずと報ず。羅山首肯（三）して書を讀んで輟めず。又報ず、延燒剝膚（四）、先生盍ぞ去らざると。是に於て其讀む所を手にして轎（五）に上る。轎中之を讀んで猶ほ輟めず。既にして郭外の別業（六）に至る。神色自若（七）として、讀むこと故の如し。少くにして一人ありて馳せ報ず、第宅（八）盡く焦土となれりと。羅山曰く、銅庫（銅庫は、卽ち銅にて造れる書庫にして、官賜に係る）に及べりや否やと。曰く、共に烏有（九）となれりと。羅山慨然として天を仰いで嘆じて曰く、多年力蓄（一〇）する所の者、一旦祝融（一一）の爲に奪はる。惜むべし、惜むべしと。是の夕鬱鬱として適まず。越えて五日奄然（一二）として長逝す。

（一）三年　（二）江戸の北部　（三）うなづく　（四）火事燒け及ぼして近く迫る　（五）のりものに乘る　（六）別宅　（七）おちつきて顏色常にかはらず　（八）邸宅凡て燒けつくす　（九）燒失せり　（一〇）骨折り蓄ふ　（一一）火の神　（一二）にはかに死去す

重疾。羅山護視在側。而夜間口和。乃使男春徳錄之。至曉稿成。不加一點。即遣人齎追。及小田原驛致之。秋潭大驚。

羅山治博。於天下之書無不讀。其所著凡百有餘部。皆可傳也。本集百五十卷。雖詞不工。其言足徵者甚多。

羅山治博にして、天下の書に於て讀まざる無く、其著す所凡そ百有餘部、皆傳ふ可し。本集百五十卷、詞工ならずと雖も、其言の徵するに足る者甚だ多し。

(一)學問ひろし

暮年視聽不衰。勤力猶少年。二十一史。自少讀之者數過。而晉書以下未句。及年七十四。欲遍句之。是歲晉書宋書南齊書畢業。翌年蓋棺。

暮年(一)視聽衰へず、勤力猶ほ少年のごとし。二十一史は、少より之を讀むこと數過(三)なり。而るに晉書(四)以下未だ句せず。年七十四に及び、遍く之に句せんと欲す。是の歲晉書・宋書・南齊書、業を畢へ、翌年棺(五)を蓋ふ。

(一)晚年　(二)精力　(三)數遍　(四)唐の太宗が房玄齡・李延壽等に命じ十八家の晉史を集め編せし書　(五)死す

觀二數千畝一。係二羅山賜莊一。春齋櫻峰記曰。櫻峰者何也。忍岡別號也。滿岡之櫻。先考之所レ栽也。据レ此則今所レ存老幹數十章。蓋其遺植也。山王祠旁。又有二稻荷小祠一。古老尙呼曰二林稻荷一云。

滿岡の櫻は、(三)先考の栽うる所なりと。此に据れば則ち今存する所の老幹數十章は、(四)蓋し其遺植なり。山王祠の旁に、又稻荷の小祠あり。古老尙ほ呼んで林稻荷といふと云ふ。

(一)上野の淸水觀音堂　(二)拜領地　(三)亡父、春齋は羅山の三男　(四)羅山の植ゑ殘ししもの

羅山爲二詩文一。揮レ翰如レ飛。頃刻成二千言一。明曆乙未。朝鮮信使愈秋潭。發歸前一夕。寄二扶桑壯遊百五十韻一。以求二賡詩一。時内子荒川氏罹二

羅山の詩文を爲るや、翰(一)を揮ふこと飛ぶが如く、頃刻(二)にして千言を成す。明曆乙(三)未、朝鮮の信使愈秋潭、(四)發歸前一夕、扶桑壯遊百五十韻を寄せて、以て賡詩(五)を求む。時に(六)内子荒川氏重疾に罹り、羅山護視(七)して側に在り。而して夜間口づから和す。乃ち男春德をして之を錄せしめ、(八)曉に至りて稿成り、一點をも加へず。卽ち人をして齎し追はしむ。小田原驛に及び之を致す。秋潭大に驚く。

(一)筆を揮ひて書くこと甚だ速か　(二)暫時　(三)元年　(四)出發歸國の途につく前夕　(五)和韻の詩　(六)卿大夫の妻室をいふ　(七)看護して病妻の側にあり　(八)夜明け方に至りて詩稿出來上り一點の訂正をもなさず

一諸生袖ニ栄陰比事一來問。羅山一一説レ之。晷既移。遂不レ觀レ會。

嘗講ニ春秋一。惺窩寄レ書曰。古人讀ニ春秋於羅浮一。羅浮者是不レ在ニ羅浮一。而在ニ足下明窻淨几之上一。得ニ古人羅浮之意一。則隨レ處有ニ羅浮一而已。因遂以ニ羅山一爲レ號。其餘羅浮。浮山。羅洞。四維山長。胡蝶洞。梅村花。夕顏巷。顏巷。瓢巷。孱眠。雲母溪。尊經堂。皆其別號也。

嘗て春秋(一)を講ず。惺窩書を寄せて曰く、古人春秋を羅浮(二)に讀むと。羅浮は是れ羅浮に在らずして、足下の明窻淨几の上に在り。(三)古人羅浮の意を得ば、則ち處に隨つて羅浮あるのみと。(四)因て遂に羅山を以て號となす。其餘の羅浮・浮山・羅洞・四維山長・胡蝶洞・梅村花・夕顏巷・顏巷・瓢巷・孱眠・雲母溪・尊經堂は、皆其別號なり。

(一) 孔子魯の史記によりて作りし史書 (二) 支那廣東省增城縣にある山にして梅花の名所 (三) 足下春秋を講ず、則ち夫の羅浮は今や却て足下の明るき窓清らかなる机の上にありといふべし (四) 古人の所謂羅浮の眞意を悟り得なば到る處に羅浮を發見すべし

寛永寺地舊名ニ忍岡一。自ニ山王祠一至ニ淸水

寛永寺の地は、舊く忍が岡と名づけ、山王祠より淸水觀(一)に至る數千畝は、羅山の賜莊(二)に係る。春齋櫻峰記に曰く、櫻峰とは何ぞや。忍が岡の別號なり。

元行幸入朝之禮。及宗廟祭祀之典。外國蠻夷之事。莫レ不二與議一焉。

正保中病在レ家。執事元老。承レ旨寄レ書。或就論レ事。令二官醫看一レ病。時有レ事二日光山一。召二見便殿一。特聽二乘輿入一レ城。有レ旨。以二其齡漸高一。令レ朝二朔望一云。

宮に始めて儀を嚴にして、帝の尊きを示す　(四) 名は正信、唐津侯に仕へ後總州に隱居す　(五) 德川家康　(六) 年號あらため　(七) 外國使臣の入朝せし時の禮儀　(八) 先祖の靈廟の祭　(九) 相談に與らざることなし　(一〇) 幕府の執政及び宿老の臣將軍の命を承けて書を送る　(一一) 表座敷にあらざる將軍休息の座敷　(一二) 將軍の命あり　(一三) 朔はついたち、望は十五日

歳暮菅得菴謂二羅山一曰。余未レ讀二通鑑綱目一。請先生以二明春一爲レ余講レ之。羅山曰。子心誠求レ之。何待二來年一。卽以二除目一講起。又嘗見二人邀一觀二祇園神會一。適

歳暮、菅(一)得菴、羅山に謂つて曰く、余未だ通鑑綱目を讀まず。請ふ先生明春を以て余が爲に之を講ぜよと。羅山曰く、子心誠に之を求めば、何ぞ來年を待たんと。卽ち除日(二)を以て之を講起す。又嘗て人に邀へられて(三)祇園の神會を觀る。適〻諸生棠陰比事(四)を袖にし來りて問ふ。羅山一一之を說き、晷(五)既に移りて、遂に會を觀ず。

(一) 菅原玄同　(二) 大晦日　(三) 京都八阪神社の祭禮、毎年六月十四日若しくは十五日に行ふ　(四) 支那の故事を輯めし書、宋桂萬榮の著　(五) 晷は日かげ、日既にかたむき

以爲レ難也。君盡三少愼二其言一。內自省。則必有二不レ可レ及者一。侯赧然曰。誠然。吾甚慚二於噲一。羅山蓋有レ諷云。

よ　(四)甲冑を著けて、兵器を持つ者　(五)心中に反省せば必ず噲に及び難き點あるべし　(六)顏をあからむ　(七)暗に諫む

羅山際二國家創業之時一。大被二寵任一。起二朝儀一定二律令一。大府所レ須文書。無下不レ經二其手一者上。謂爲二我叔孫通一可也。稻葉默齋墨水一滴曰。羅山年十三。元服稱二又三郎信勝一。慶長中。蒙二神祖召一。歷二仕四朝一。卽位改

羅山、國家創業の時に際ひ、(一)大に寵任せられ、朝儀を起し律令を定む。(二)大府須ふる所の文書は、其手を經ざる者無し。謂つて我が叔孫通(三)と爲すも可なり。稻葉默齋(四)の墨水一滴に曰く、羅山年十三にして、元服して又三郎信勝と稱す。慶長中、神祖(五)の召を蒙り、四朝に歷仕して、卽位・改元(六)・行幸・入朝の禮、(七)及び宗廟祭祀の典(八)、外國蠻夷の事、與議(九)せざるはなしと。正保中病んで家に在り。執事・元老(一〇)、旨を承け書を寄せ、或は就いて事を論じ、官醫をして病を看しむ。時に日光山に事有り。便殿(一一)に召見して、特に乘輿城に入るを聽す。旨あり(一二)、其齡漸く高きを以て、朔望(一三)に朝せしむと云ふ。

(一)國家を始めて建設す　(二)朝廷の儀式を再興し法令を定む　(三)漢代の儒者、高祖に說きて朝儀を起し、長樂

見。於レ是羅山益攻二其學一。時惺窩以二性命學一聞。乃介二吉田玄之一（小字與市郎。號二素庵一）入二其門一。業大進。亡レ何謁二見東照君一。席間應二顧問一。辨二光武世系。孝武返魂香出典。及離騷所レ載蘭一。稱レ旨。時年二十三。

寛永中。井伊侯謂二羅山一曰。人稱二樊噲勇一。然其勇吾亦能之。何足二深稱一。羅山答曰。噲爲レ所レ稱者。以二其排レ闥直諫一也。此實非二大勇者一不レ能也。若夫身當二矢石一。卻レ敵斬レ首且其脫二戯下之急一。勇則勇矣。然苟擐レ甲執レ兵者。不二

寛永中、井伊侯羅山に謂つて曰く、人、樊噲(一)の勇を稱す。然れども其勇は吾も亦之を能くす。何ぞ深く稱するに足らんやと。羅山答へて曰く、噲の稱せらるゝは、其の闥(二)を排して直諫せしを以てなり。此れ實に大勇者に非ざれば能はざるなり。若し夫の、身矢石に當り、敵を卻け首を斬り、且つ其の戯下(三)の急を脫せしは、勇は則ち勇なり。然れども苟(四)も甲を擐き兵を執る者は、以て難しと爲さざるなり。君盍ぞ少しく其言を愼まざる。(五)内自ら省みば、則ち必ず及ぶ可からざる者有らんと。侯赧然(六)として曰く、誠に然り。吾れ甚だ噲に慚づと。羅山蓋し諷(七)するところ有りと云ふ。

(一) 漢高祖の臣、鴻門の會に勇武項羽を挫く (二) 扉を押開きて項羽を諫めなせる (三) 旗下の急、大將の危急をい

僧請京尹前田玄以。强之父信時。信時曰。唯見所好。羅山愈不可。竟去歸家。不再入寺門。

德善院と稱し初め秀吉に從ひ關原戰後家康に屬す　(四)唯だ見即ち羅山の好みに任せん

羅山少時。世未有奉宋說者。羅山年十八。始讀朱子集註。心服之。遂聚徒講朱註。淸原博士議之曰。自古無勅許。則不得講書。朝紳猶然。況處士抗顏講新說。不可不罪也。東照君黜博士之議。而稱羅山爲有所

羅山の少時、世未だ宋說を奉ずる者有らず。羅山年十八にして、始めて朱子集註を讀んで、之に心服し、遂に徒を聚めて朱註を講ず。淸原博士(一)之を議して曰く、古より勅許無ければ則ち書を講ずるを得ず。朝紳(二)にして猶ほ然り。況や處士(三)の抗顏新說(四)を講ずるをや。罪せざるべからずと。東照君(五)、博士の議を黜け、羅山を稱して見る所有りと爲す。是に於て羅山益〻其學を攻む。時に惺窩性命(六)の學を以て聞ゆ。乃ち吉田玄之(小字は與市郞、素庵と號す)を介して(七)其門に入り、業大に進む。何も亡く東照君に謁見し、席間顧問(八)に應ず。光武世系・孝武返魂香の出典及び離騷(九)載する所の蘭を辨じて、旨に稱ふ(一〇)。時に年二十三。

(一)明經博士淸原秀賢(氏は船橋)　(二)朝廷の公卿　(三)官途に仕へずして、民間にある士　(四)鐵面皮に新しき學說を講說す　(五)家康　(六)宋儒の人性を天命にもとづくる學說　(七)なかだちとして入門す　(八)席上にて質問に答ふ　(九)楚の屈原の作　(一〇)思召にかなふ

佳二平安一。羅山生而秀偉。幼即嚮レ學。甲斐德本。過レ父讀二太平記一。羅山時年八歲。一聞記レ之。即背誦者數十張。又嘗造二某許一。講二論語集註一。中脫二一葉一。乃操レ筆暗寫以補二葺之一。一字不レ謬。其強識率此類也。

時に年八歲なりしが、一聞して之を記し、即ち背誦(三)するもの數十張(四)なり。又嘗て某の許に造り、論語集註を講ぜしに、中ごろ一葉を脫す。乃ち筆を操り暗(五)寫して以て之を補葺するに、一字も謬らず。其強識(六)率ね此類なり。

(一)生れながら秀でてすぐれる　(二)訪問す　(三)そらにてよむ　(四)數十枚　(五)一枚ぬけたる所をそらにて寫して之を補ふ　(六)物覺えのよきこと此の如し

年十四寓二建仁寺一讀レ書。時宿僧有二才學一者。亦皆屈而問レ字。遂以爲此人入レ佛。則必當レ爲二善知識一。皆勸以二出家一。羅山不レ可。

年十四のとき(一)建仁寺に寓して書を讀む。時に宿僧の才學あるもの、亦皆屈して字を問ふ。遂に以爲へらく、此人佛に入らば、則ち必ず當に善知識(二)と爲るべしと。皆勸むるに出家を以てす。羅山可かず。僧、(三)京尹前田玄以に請ひ、之を父信時に強ふ。信時曰く、(四)唯兒の好む所のまゝにせんと。羅山愈ゝ可かず。竟に去つて家に歸り、再び寺門に入らず。

(一)京都四條の南、臨濟宗建仁寺派本山、榮西の開基　(二)學德秀でたる名僧　(三)京都所司代、前田玄以法印、

髓。聯珠詩格等盛行矣。而惺窩教レ人。已取ニ此書一爲レ式。春齋西風、涙露編曰。惺窩有レ言曰。欲レ學ニ古詩一。則可レ見ニ選詩風雅翼一。欲レ學ニ律詩一。則可レ見ニ瀛奎律髓一。欲レ學ニ絶句一。則可レ見ニ聯珠詩格一。

ばんと欲せば、則ち聯珠詩格を見る可しと。

(一)新井白石と服部南郭　(二)人眞似と人の作をぬすむと　(三)羅山の子春勝

林忠。一名信勝。字子信。號羅山。稱ニ又三郎一。私諡ニ文敏一。平安人。仕ニ大府一。薙髮稱ニ道春一。爲ニ民部卿法印一。羅山其先加賀人。後從ニ紀伊一。及ニ父信時一

林　忠

林忠、一名信勝、字は子信、號は羅山、又三郎と稱し、文敏と私諡す(一)。平(二)安の人。大府(三)に仕へ、薙髮(四)して道春と稱し、民部卿法印となる。

(一)朝廷より賜ふにあらで私におくりなす　(二)京都の古稱　(三)德川幕府　(四)髮を剃りて

羅山、其先は加賀の人なり。後紀伊に從る。父信時に及び平安に住す。羅山生(一)れて秀偉、幼にして卽ち學に嚮ふ。甲斐の德本、父に過(二)り太平記を讀む。羅山

續編。合八卷。字有二譌舛一。一則其孫權中將爲經編。水戸義公校レ之。併二倭文一爲二十七卷一。冠以二後光明帝御序一。夫元寬以降。奎運大興。文儒盛行。其著作布レ世者。汗牛充棟。然未下嘗一聞上レ有二至尊賜序一。如二惺窩一。可レ謂二希世之榮耀一矣。

を併せて十七卷と爲し、冠するに後光明帝の御序を以てす。夫れ元・寬以降、奎運(四)大に興り、文儒盛に行はれ、其著作の世に布く者、汗牛充棟(五)なり。然れども未だ嘗て一の至尊(六)の賜序有るを聞かず。惺窩の如きは希世(七)の榮耀と謂ふ可し。

(一) 菅原玄同、京都儒者、惺窩の門下 (二) あやまり (三) 元和・寛永以來 (四) 文運に同じ、文事の發達 (五) 汗牛し、家の棟に充つる程、書の極めて多きをいふ (六) 天子の賜へる序文 (七) 世にまれなる名譽

今時作レ詩者。或奉二宋詩一。目二白石。南郭輩所レ作。爲二摸擬剽竊一。於レ是唐詩品彙。唐詩選。明七子集漸廢。瀛奎律

今時詩を作る者、或は宋詩を奉じ、白石(一)・南郭が輩の作る所を目して、摸擬剽竊(二)と爲す。是に於て唐詩品彙・唐詩選・明七子集漸く廢れ、瀛奎律髓・聯珠詩格等盛に行はる。而して惺窩の人を敎ふるや、已に此書を取りて式となす。春齋(三)の西風涙露編に曰く、惺窩言有り、曰く、古詩を學ばんと欲せば、則ち選詩風雅翼を見る可く、律詩を學ばんと欲せば、則ち瀛奎律髓を見る可く、絶句を學

波磐堂學問源流。俱載下惺窩歸レ儒之後。不レ蓄二妻妾一。不レ御二酒肉一事上。則誤矣。

て笄すとあり、女の年頃に達せるをいふ　㊃ 名は綬、伊藤龍州の第二子、宮津侯の文學江村毅堂の後を繼ぐ　㊄ 名は師曾、字は孝卿、播州の人、阿波侯に仕ふ　㊅ 酒や肉類を饌に上せず

惺窩旁好二倭歌一。時吟詠發二舒情思一。其集四卷。合二本集一刊二行于世一。羅山始至。席上賦二倭歌一贈レ之。以庶二幾其成立一。歌曰。捺列郁瀰失。孤木訥烏調傯垤。乙鵄但葛吉。捺訥傯瞉篤屋木ゝ失葛列篤續。屋木屑。

惺窩旁ら倭歌を好み、時に吟詠情思を發舒す。其集四卷、本集に合して世に刊行す。羅山始めて至る。席上倭歌を賦し之を贈りて、以て其成立を庶幾ふ。(歌に曰く、なれよ富士、雲の上までいや高き、名の誠をも然れとぞ思ふ)

㊀ 和歌をよみて、其こゝろをのぶ　㊁ 成功を希望す　㊂ 富士の雲上に聳ゆるが如き高名になり、其名に相當するほど實質をも養成せよ

惺窩集有二二板一。一則羅山編次。菅得菴

惺窩集に二板有り。一は則ち羅山の編次、菅得菴の續編、合して八卷にして、字に譌舛有り。一は則ち其孫權中將爲經の編にして、水戸義公之を校せり。倭文

說。而俗自謂也。夫戾二天理一廢二人倫一。何以謂二之眞一。二釋默然。他日又會二某所一。壁間掛二數行艸字一。二釋不レ能レ讀。座者皆曰。艸固難レ讀。非レ如二楷易一レ讀。惺窩一覽輒朗誦曰。古人云。能讀レ楷者。必能讀レ艸。

誦して曰く、古人云ふ、能く楷を讀む者は、必ず能く艸を讀むと。

(一) うぬぼれる (二) 眞諦は第一義諦又は勝義諦ともいひ、世人の認むると否とに拘らざる自明公理、佛教の宣明する眞義、悟上の眞體を指し、俗諦は世間普通認むる公理、凡夫迷悟の所見を指す。此處にては佛教を眞、儒教を俗と稱せるなり (三) 佛陀、此處にては廣く佛者 (四) 天然の道理に違反し人間の道を破る。親子夫婦の恩愛を無視するをいふ (五) 草書の字 (六) 大音に讀みあげる

羅山先生撰二行狀一曰。先生嗜レ酒。然或經レ旬不レ沾レ脣。或痛飮輒醉而不レ亂。又曰。先生有レ男。小字曰レ冬。有レ女既笄。江都北海日本詩史。那

羅山先生の撰びし行狀に曰く、先生酒を嗜む。然れども或は(一)旬を經て脣を沾さず。或は(二)痛飮輒ち醉へども亂れずと。又曰く、先生に男有り。小字を冬といふ。女有り既に(三)笄すと。(四)江都北海の日本詩史、(五)那波魯堂の學問源流、倶に惺窩儒に歸するの後、妻妾を蓄へず、(六)酒肉を御せざることを載するは、則ち誤れり。

(一) 旬は十日間。十日もたつても一滴の酒だに口にせず (二) 大酒して醉へども亂れず (三) 禮記に、十有五にし

厚致二禮敬一曰。余多下欲レ就二正有道一者上。前日數詣數不在。不レ圖今親降二玉趾一。是天假レ余以二納レ履之緣一也。然倉猝之際。他不レ遑レ問。請正二一事一。夫繼レ絶扶レ傾。當二今之時一。將可レ行否。惺窩不レ答。出而慨然曰。渠猶未レ思レ屬二霸主一。又將レ有レ所レ謀焉。嗚呼生靈受レ困。一何忍レ之甚也。

(一)上杉景勝の臣　(二)取次の者　(三)うらみかこつ　(四)めぐりあふ手段なし　(五)あつくうやまひ饗す　(六)德ある人。惺窩をさす　(七)趾はあし。御來臨を辱うす　(八)履を聖道に納る、即ち聖人の道に入るの意か。或は張良の故事より有道の士の數を受くる意にいへるか　(九)取いそげる際　(一〇)絶えたる家を繼ぎ傾敗せる家を扶助す。豐臣氏を扶くる意　(一一)なげくさま　(一二)徳川の幕下　(一三)人民の困苦を受くるを何とも思はざるを甚だし

釋承兌。靈三。共以二才學一自負。嘗詰二惺窩一曰。吾子初奉レ佛。今又爲レ儒。是棄レ眞歸レ俗也。吾子何昧二此義一乎。惺窩曰。所謂眞俗二諦。浮屠所レ

釋承兌・靈三は、共に才學を以て自負(一)す。嘗て惺窩を詰つて曰く、吾子初め佛を奉じ、今又儒と爲る。是れ眞を棄てて俗に歸するなり。吾子何ぞ此義に昧きやと。惺窩曰く、所謂眞俗二諦(二)は、浮屠(三)の說く所にして、俗とは自ら謂ふなり。夫れ天理に戻り人倫を廢す。何ぞ以て之を眞といはんやと。一釋默然たり。他日又某所(四)に會す。壁間數行の艸字(五)を掛けたり。二釋讀むこと能はず。座者皆曰く、艸固より讀み難し。楷の讀み易きが如きに非ずと。惺窩一覽し輒ち朗(六)

欲。乃使₃將命
者陽言₂不在₁。
三來皆如ㇾ之。
最後惺窩謂
曰。渠如復來
則吾見ㇾ之。次
日卽復至。時
値₂其實不在₁。
兼續悵然曰。
余願ㇾ見₂先生₁。
而不ㇾ可ㇾ得。今
日已將₃北發
歸₂會津₁。則終
無ㇾ由₂邂逅₁。信
天也。言畢而
去。有ㇾ頃惺窩
歸。聞ㇾ之曰。窩
猶未ㇾ遠。卽追
至₂大津驛₁及ㇾ
之。兼續大喜。

て曰く、渠如し復た來らば則ち吾れ之を見んと。次の日卽ち復た至る。時に其實に不在なるに値ふ。兼續(三)悵然として曰く、余先生に見えんことを願つて、得可からず。今日已に將に北に發し會津に歸らんとす。則ち終に(四)邂逅するに由無し、信に天なりと。言ひ畢つて去る。頃く有りて惺窩歸り、之を聞いて曰く、渠猶ほ未だ遠からじと。卽ち追うて大津驛に至つて之に及ぶ。兼續大に喜び、厚く(五)禮敬を致して曰く、余正に(六)有道に就かんと欲するもの多し。前日數〻詣りしも數〻不在なりき。圖らざりき、今親く(七)玉趾を降さんとは。是れ天が余に假すに(八)履を納るゝの緣を以てせしなり。然れども(九)倉猝の際、他は問ふに遑あらず。請ふ一事を正さん。夫れ(一〇)絕えたるを繼ぎ傾けるを扶くるは、今の時に當つて將に行ふ可きや否やと。惺窩答へず。出でて(一一)慨然として曰く、渠猶ほ未だ(一二)霸主に屬するを思はず、又將に謀る所有らんとす。嗚呼(一三)生靈の困を受くる、一に何ぞ之を忍ぶの甚だしきやと。

宗二洛閩一。於レ是乎朱學始大行。闇齋答二眞邊仲庵一書曰。朱書之來二于本朝一。凡數百年焉。獨清軒玄惠法印。始以レ此爲レ正。而未レ免レ佛。藤太閣亦以爲。程朱新釋可二肝心一。而猶惑二乎佛一。遂不レ聞下實尊二信之一者上也。慶長元和之際。南浦自謂信レ之。而亦尊レ佛。惺窩自謂尊レ之。而亦信レ陸。陸之爲レ學。陽儒陰佛。儒正而佛邪。厥縣隔不二翅雲泥一。既尊レ此而信レ彼。則背庵草盧之亞流耳。

ぶ。惺窩自ら謂ふ、之を尊ぶと。而も亦陸(一〇)を信ず。陸の學たるや、陽(一一)は儒なれども陰は佛なり。儒は正にして佛は邪なれば、厥の縣隔(一二)翅に雲泥のみにあらず。既に此(一三)を尊びて彼を信ずれば、則ち肯庵草盧(一四)の亞流のみと。

(一) 程朱の學を尊信し、後醍醐天皇の侍讀となる (二) 朱子の學說。朱子名は熹、字は元晦、宋の碩學、程顥程頤等の學を承けて性命理氣の說を唱ふ (三) 從ひあふがる (四) 二程子は洛陽より出で、朱子は閩中より出づるより程朱の學を斯くいふ (五) 朱子の書 (六) 獨清軒は玄惠の號也 (七) 藤原氏の大閤。(蓋し一條兼良を指すか) (八) 程子朱子の經書の新らしき解釋は感心すべし (九) 釋僧文之の號、名は玄昌、日向の人、惺窩明に航せんとして鬼界島に漂着し薩摩の坊ノ津に至り文之の點註四書を得て大に喜ぶといふ (一〇) 宋儒陸象山 (一一) うはべは儒學なれども內實は佛教 (一二) 間の隔たること天地雲泥の差以上なり (一三) 儒學を尊びながら佛教を信ず (一四) 一派

一日直江兼續。山城守來求レ見。而惺窩不レ

一日直江兼續(一)(山城守)來りて見えんことを求む。而るに惺窩欲せず。乃ち將命(二)の者をして陽りて不在と言はしむ。三たび來るも皆之の如し。最後に惺窩謂つ

松公今新書ニ四書五經之經文ー。請レ予欲下以ニ宋儒之意ー。加ニ倭訓于字傍ー。以便中後學上。日本唱ニ宋儒之義ー者。以ニ此册ー爲ニ原本ー。今世徒知レ有ニ上杉謙信。小早川隆景。高坂昌信。直江兼續等。好ニ文于鋻筈之間ー。而知レ有ニ赤松廣通ー者鮮矣。

期待すべし （四）招聘す （五）聲を放つて泣く （六）宋の學者の說に準據して字のよみを字傍につける （七）鋻はかぶと。筈はやはず。戰爭に携はりながら文を好む意

此邦講ニ宋學ー者。以ニ僧玄惠ー爲レ始。爾後有ニ聞唱レ之者ー。其學不レ振。至ニ惺窩專奉ニ朱說ー。林羅山。松永昌三。那波活所諸賢。皆出ニ於其門ー。各爲ニ時所ニ歸仰ー。繼レ之山崎闇齋。獨立自振。亦

此邦の宋學を講ずる者にては、僧の玄惠（一）を以て始と爲す。爾後聞之を唱ふる者有れども、其學振はず。惺窩專ら朱說を奉ずるに至つて、林羅山・松永昌三・那波活所の諸賢、皆其門に出で、各々（二）時に（三）歸仰せらる。之に繼ぐに山崎闇齋あり、獨立自ら振ひ、亦（四）洛閩を宗とす。是に於てか朱學始めて大に行はる。闇齋の眞淺仲庵に答ふる書に曰く（五）、朱書の本朝に來る、凡そ數百年。（六）獨清軒玄惠法印、始めて此を以て正となししも、而も未だ佛を免れず。（七）藤太閤亦以爲へらく（八）、程朱の新釋肝心すべしと。而も猶ほ佛に惑ひ、遂に實に之を尊信する者を聞かず。慶長・元和の際（九）、南浦自ら謂へらく、之を信ずと。而も亦佛を尊

域。多率二諸侯一莅二此地一。惺窩初見二東照君一。見レ禮。又見二中納言秀秋一。秀秋性豪倨。然惺窩至。則肅然改レ容。其性行亦多二為所一レ改云。

播磨赤松廣通。好レ學。獨能拔二流俗一。師二尊惺窩一。嘗刱二學校一。行二釋奠一。惺窩竊以爲。此人當レ期二斯道一。石田三成居二佐和山一。亦重二惺窩一。令二戸田内記者聘一レ之。惺窩欲レ往不レ果。廣通有レ故自刃。惺窩哭レ之慟。與二朝鮮姜沆一書曰。亦

播磨の赤松廣通は、學を好み、獨り能く流俗(一)を拔いて、惺窩を師とし尊ぶ。嘗て學校を刱め釋奠(二)を行ふ。惺窩竊かに以爲へらく、此人當に斯の道を期すべしと。石田三成佐和山に居る。亦惺窩を重んず。戸田内記(三)といふ者をして之を聘(四)せしむ。惺窩往かんと欲して果さず。廣通故ありて自刃す。惺窩之を哭(五)して慟す。朝鮮の姜沆に與ふる書に曰く、赤松公今新に四書・五經の經文を書し、予に請ひ、宋儒(六)の意を以て倭訓を字傍に加へ、以て後學に便ぜんと欲す。日本の宋儒の義を唱ふる者、此冊を以て原本と爲さん。今の世徒らに上杉謙信・小早川隆景・高坂昌信・直江兼續等が、(七)文を鑿管の間に好む有るを知りて、赤松廣通あるを知る者鮮しと。

(一) 世の中の俗人にすぐる　(二) 陰暦二月八月の兩度行ふ孔子の祭、十哲をも併せ祭る　(三) 儒道の振興此の人に

嘗應二關白秀次召一。與二五山緇徒一。同賦二詩于相國寺一。他日復召。卽辭以レ疾。而謂二弟子一曰。君子小人有レ黨。非レ黨而交。終不二相容一也。以レ余交二秀次一。非三唯終不二相容一。後必有二悔不レ可レ追者一。余不レ欲二復見一。秀次聞而銜レ之。惺窩懼レ不レ免。乃避之二肥前名護屋一。當二是時一。豐太閤有レ事二于異

嘗て關白秀次の召に應じて、五山(一)の緇徒と、同じく詩を相國寺に賦す。他日復た召さる。卽ち辭するに疾を以てし、弟子に謂つて曰く、君子(二)小人には黨有り、黨に非ずして交れば、終に相容れず。余を以て秀次に交るは、唯に終に相容れ(三)ざるのみに非ず、後必ずや悔ゆとも追ふ可からざる者有らん。余復た見ゆることを欲せずと。秀次聞いて之を銜む。(四)惺窩免れざるを懼れ、乃ち避けて肥前の名護屋に之く。是時に當り、豐太閤、(五)異域に事ありて、多く諸侯を率ゐて此地に莅む。惺窩初めて(六)東照君に見え、禮せらる。又中納言秀秋(七)に見ゆ。秀秋性豪(八)倨なり。然れども惺窩至るときは、則ち(九)肅然として容を改め、其性行亦爲に改まる所多しと云ふ。

(一) 五山は京都と鎌倉とにあり、此處は京都の天龍・相國・建仁・東福・萬壽の五大寺をさす　(二) 君子には君子のなかま、小人には小人のなかまあり　(三) 心が合はざるのみならず不測の禍を蒙らん　(四) 心中に恨む　(五) 朝鮮征伐をいふ　(六) 家康のこと、家康死後元和三年朝廷より東照大權現の神號を賜はる　(七) 小早川秀秋　(八) 橫柄　(九) つゝしみて態度をあらたむ

不レ利皆死。當二是時一。織田右府唱レ霸。其臣羽柴秀吉。盛用レ事。惺窩乃告二秀吉一。欲下比二死者一一洒上之。秀吉答以レ不レ如レ待レ時。於レ是亡二其地一。惺窩初年削レ髪入レ釋。名レ舜。號二妙壽院一。後悟二其非一。遂歸二於儒一。時海内喪亂。日尋二干戈一。文教掃レ地。而卓然獨唱二道于其間一。爲二後世文學之祖一。自レ非二豪傑士一。豈得レ如レ此乎。物茂卿與二都三近一書曰。昔在遼古。吾東方之國。泯泯乎罔レ知覺。有二王仁氏一。而後民始識レ字。有二黃備氏一。而後經藝始傳。有二菅原氏一。而後文史可レ誦。有二惺窩氏一。而後人人言。則稱レ天語レ聖。斯四君子者。雖三世尸二祝乎學宮一可也。斯言信矣。

に干戈を尋ひ、文教地を掃ふ。(八)而るに(九)卓然として獨り道を其間に唱へ、後世文學の祖となる。豪傑の士に非ざるよりは、豈に此の如きを得んや。(一〇)物茂卿の都(一一)三近に與ふる書に曰く、昔在遼古(一二)、吾が東方の國は、泯泯乎として知覺罔し(一三)。(一四)王仁氏有りて後民始めて字を識り、(一五)黄備氏有りて後經藝(一六)始めて傳はり、菅原氏(一七)有りて後文史誦すべく、惺窩氏有りて、後、人人言ふときは則ち天を稱し聖を語る。斯の四君子は、世〻學宮に(一八)尸祝すと雖も可なりと。斯の言信なり。

(一)土地の豪族　(二)右大臣織田信長　(三)諸侯のはたがしらとなり　(四)權柄をほしいまゝにふるまふ　(五)討死せし父兄のために恥を雪ぐ　(六)佛門に入る　(七)天下亂れて日々戰爭起る　(八)文學教化の道盡く亡ぶ　(九)衆にぬきんづ　(一〇)荻生徂徠　(一一)宇都宮遯庵、名は的、松永昌三の門下　(一二)遠き昔　(一三)蒙昧にして知識無し　(一四)百濟の人、應神天皇の時論語千字文を傳ふ　(一五)吉備眞備、遣唐留學生たり。奈良朝時代の人　(一六)聖人の學藝　(一七)菅原道眞　(一八)學校に神として祭る

藤原肅。字斂夫。號二惺窩一。北肉山人。柴立子。廣胖窩。皆其別號。播磨人。惺窩爲二中納言定家十二世孫一。世食二播磨三木郡。細河村一。父爲純時。爲二土豪別所長治一所二侵掠一。爲純與二長子爲勝一禦レ之。

先哲叢談卷之一

藤原肅

藤原肅、字は斂夫、惺窩と號す。北肉山人・柴立子・廣胖窩は、皆其別號なり。播磨の人。

惺窩は中納言定家十二世の孫なり。世〻播磨三木郡細河村を食む。父爲純の時、(一)土豪別所長治の爲に侵掠せらる。爲純長子爲勝と之を禦ぎ、利あらずして皆死す。是時に當つて、(二)織田右府(三)霸を唱へ、其臣羽柴秀吉、(四)盛に事を用ふ。惺窩乃ち秀吉に告げ、(五)死者の比に一たび之を洒めんと欲す。秀吉答ふるに、時を待つに如かざるを以てす。是に於て其地を亡す。惺窩初年髮を削りて(六)釋に入り、蕣と名づけ、妙壽院と號す。後其非を悟り、遂に儒に歸す。(七)時に海內喪亂、日

略擧識見者。以其未著見者也。

一私記小說。固有可信。有可疑。此編傳其可信。闕其可疑。皆有依據。然而逐章記出典不勝其煩。故槩省之耳。

一此編久藏諸篋笥。不欲災梨棗。嘗一誤示人以藁本。傳寫漸廣。悔之不及。於是更加校正。增入數人。因與慶元堂主人謀授之梓。尙恐謭陋寡聞。取譏大方。博雅君子幸敎焉。

文化丙子秋八月　原善識

先哲叢談凡例

一余嘗自室町氏季至近世。有人物足傳者。則求其傳若行狀墓文裒輯之。凡一百卷。命曰史氏備考。而其言行之迹。別存稗官或口碑者亦多。因更收錄之。且掇取其要于備考中及諸家集。遂成數十卷。先哲叢談是也。此編則獨係其儒家類者云。

一儒家類凡十四卷。今刻者八卷。自永祿訖于享保。餘卷校訂未畢。當嗣刻。此編隨聞見輙紀之。不能無遺漏焉。然如其出羣超倫可以入史者。大氐具于此。滄海遺珠。將俟他日收拾焉。

一次序率從其年齒先後。不分以門流。但林羅山少菅玄同二歲。而羅山國家草創大儒。宜直接惺窩。故獨不拘他例耳。又如父兄子弟並有著顯者。則皆類從附載焉。不則人恐錯認其各處別出。以爲同姓異族。堀杏菴。後藤松軒。未詳其生在何庚。姑以意序之。

一稱姓氏。亦無定例。或復稱。或單稱。皆從其人所自稱。不敢追改之。

一此編專以知先儒之性行履歷爲主。而未及其識見者。以其人皆有成書布于世也。間有

所ㇾ愧實多。自ㇾ今而後。志ㇾ古自鏡。尊ㇾ所ㇾ聞而行ㇾ所ㇾ知。年其兀兀。日有孜孜。卽不ㇾ到古人。亦當ㇾ不ㇾ負其所ㇾ規耳。嗚呼。余二十年間。得ㇾ益公道者如ㇾ此其多。則如ㇾ予者。取ㇾ友於公道一人而足矣。尙幸賴此編以得ㇾ尙論古之人。亦公道之賜也。因序。

文化丙子冬十一月　善庵處士朝川鼎撰

余與原公道兄弟交者。二十餘年矣。其初相知時。予年尙少。氣壯志得。浮慕古人。而謬自詡譽。公道則謙虛篤實。好學自力。每自謂曰。但其學實而行篤。多識前言往行。以畜其德。存養修察積以歲月。乃可到古人耳。何遽以古人自朞。又嘗以此規予。而予狂簡之性。不忘其初。索隱行怪。好殊異乎人。人或呼爲狂生。而公道獨不他人視之。切切偲偲。極盡交誼。其以助予者亦已多矣。旣而予浪遊數年。經涉世故。間關四方。事不如意。行拂亂其所爲。於是乎。始知古人處事制行。自有不可企及者。而公道昔日所規。亦足以起予矣。嗚呼予何知之晚。而公道之見。蚤已及此。此得非其學實行篤所致哉。今玆其所著先哲叢談梓成。予得受而卒讀。竊嘆曰。學殖之富。溢爲文辭。彬彬班班。華而能實。然此書非僅以此爲工也。公道平生攻實學修篤行。又景仰古人。以自勉勵。凡其德可仰。其事可法。學足以明道。言足以垂教者。載籍所傳。口碑所存。窮搜博訪。薈萃成編。乃所謂多識前言往行。以畜其德者。於是乎可見。然公道不以此自居。但謂頌其詩。讀其書。不知其人可乎。是吾編述之大旨。而至其梓之。乃善與人同之微意也。予也近來氣撓志折。浮湛俗間。無復有以自振。今及讀此編。而面熱汗下。

之則毫無力焉。從慂之則有志焉。終以此言爲序。

文化丙子季秋

八十七齡陳人四明井潛撰

先哲叢談序

我東方聖人之道最盛矣。中葉一衰。文與詩亦不盛。文不盛。則辭鄙吝。辭鄙吝。則說經不優。宜哉近世喋喋乎說理氣陰陽。而不識聖人之大道也。昔者華之盛。若我與韓。通呼外邦。論外邦之學。必以我爲最。近者以韓爲最。我衰也可知矣。我神祖之勃興也。文運復開。遠襲姬周。封建之政盛行。列國士皆世祿食邑於其土。雖然先王聖人之道。未全行者。列國君臣不學無術自出焉。昔林文敏。講朱義論語於京師。博士舟橋秀賢。以非典故欲逐之。以聞神祖。神祖笑曰。講者爲特達之識。訴者豈無偏狹之譏。秀賢無言而止。今講經非程朱之義則黜矣。大非神祖之德意。原君公道。憂永天以來。至今世之遺逸久無贊述者。略擧識之。勿論於古學與道學。總得若干人。欲以煩梨棗尙矣。一日得閑示祭酒林公。公曰。君子成人之美。公之於世。何爲不可。於是乎公於世云。公道王父雙桂翁。京師人。初學伊藤東涯。後以醫仕唐津侯。遷爲儒學教授。其學博洽無所不涉。嘗著非朱詰物疑藤諸書。可知其所見不偏也。晩唐津侯移封於古河。遂從移焉。公道此擧可謂繼乃祖之志。不墜家學者矣。潛也不佞。推挽

凡一百卷。名曰史氏備考。以俟他日修史者採掇焉。別撮其要。成若干卷。名之曰先哲叢談。間者又校訂其儒林一類。自永祿訖享保。釐爲八卷。以鋟梓板。蓋當時儒流固未止此。然於國家崇文之化。彌隆彌溥。猶將有所就考焉。況乎公道掄揚昭代。歡抃盛際。固臣子之情所宜然也。吾亦樂敘而道之。

文化十四年歲次彊圉赤奮若孟春月下浣。

江都佐藤坦大道甫題於愛日樓南軒

先哲叢談序

文運之盛衰。關乎世道之汙隆。世道之汙隆。徵諸文運之盛衰。古昔皇朝延喜天曆之際。崇儒術。飭禮樂。民物雍熙。海寓寧謐。蔚然稱文治之世矣。至保平之亂。皇化陵遲。鎌倉氏之霸。武斷爲理。室町氏承之。迨其季世。板蕩極矣。惟夫盛衰迭運。否泰相遞。方是時。天生我烈祖大君。錫以勇智非常之德。賦以文武兼濟之才。掃蕩昏霧。以揭朗日。誅夷鯨鯢。以來麟鳳。既延惺窩先生而禮待之。又擢羅山先生以備顧問。自此之後。崇文之風復興。不睹干戈者。二百餘年於今矣。抑以古昔盛時。典章制度。取諸隋唐而斟酌之。至如制誥章疏。亦多依仿。而衣纓之家。疇官世業以秉文柄耳。自我大府之興也。經綸締造。自然合符於往聖。紀綱法度。不必襲迹於異域。而基業之固。國勢之彊。較諸前古。不翅倍蓰焉。至於師儒文學之士。踵武相接。響然輩出。其餘巧藝異能之流。亦皆應時駢臻。蓋吾邦世道文運之隆且盛。惟方今爲然。自非開基創業之明辟。建弘猷於前。繼體守文之賢君。遵遺訓於後。安能至於如此哉。友人原君公道有感於此。嘗纂集天文已降。文臣武將。暨名一技一藝者。行狀碑誌。家乘譜牒。

でたり。共に松村操の編する所、明治十三年の出板にかゝり、中井竹山以下合せて
四十四人の傳を載せたり。

大正九年三月　　　　文學博士　辻　善　之　助　識

臺東條耕の著に係る。初め琴臺、室町季世以來儒林文苑の士百二十人の履歷を輯め、題して閑散宜史といふ。會〻原念齋の先哲叢談出づ。其七十二人は、概ね琴臺の編する所と大同少異なり。念齋後編の作ありて未だ成るに及ばずして歿す。琴臺乃ち諸友の慫慂により、念齋の既輯にかゝる七十二人を削り、殘を掇り剩を拾ひ、數家を增益して、谷時中以下七十二人六百七十九條を得て、之を先哲叢談後編と稱し、文政十年編成り、文政十三年上梓す。琴臺また續編餘編の企あり。而して其續編の纔に稿を成すに及びて歿す。嗣子信升之を岡本行敏に託して、校正して世に公にせんことを請ふ。行敏乃ち二三の同好と與に校訂して上木す。收むる所吉田了以以下七十二人八百七十二條あり。明治十七年一月出版す。餘編はつひに成稿を見ざりしものゝ如し。その目は、琴臺別に編する所の先哲叢談年表に載す。那波木菴以下七十二人を收む。年表は前後續餘の四編收載の人物について、その生卒著作事歷の大要を載せたり。これについで、また近世先哲叢談、同續編出

さしめしに、私嗜の末技を以て、王門の伶人親せらるゝを屑しとせずして、終に復た笛を吹かざりしと、好一對の話といふべし。

大高坂芝山の、豪宕自ら視ることと高きを敍しては、その詆罵を逞しうするの狀、短篇の中よく之を悉せり。芝山が闇齋傳を作りて、貶辭を寓したるに對しては、佐藤直方の語を假りて之を辨じ、また芝山が、明人の諛辭に誇りしを敍しては、江邨北海の評言を引きて、その精細の工夫を怠りしを惜みしが如きは、寸鐵よく人を刺すの概あり。この外、世にいひ古したることながら、中江藤樹の郊外賊にあひ、之を諭して、つひに良民に歸せしめ、或はまた路傍の農夫の言を假りて、近江聖人の德化を顯したるが如き、伊藤仁齋が、娼家に入りて、饗せられて、終に之を覺らず、東涯が三絃匣を求めて、その何の用を爲すかを知らず、三絃柄長し、奈何ぞ此短匣に藏めんといひしが如きは、その面目紙上に躍如たるものあるを覺ゆ。

本書の後繼　本書の後繼に、先哲叢談後編八卷同續編十二卷あり。いづれも零

斯くの如く、本書は、編中人物を傳すると共に、之に關する叢話を以て、よく巧に之を評せり。　蓋し念齋の主義は、その祖父双桂の學說を承けて、非朱詰物疑藤を以てその宗とし、不偏不倚、折中の學を立せんとするものゝ如し。　編中至る所、自らその意を寓するを見る。　本書冒頭井上四明の序文に、乃祖の志を繼ぎ、家學を墜さざるものといへるも、亦この意に出でたるなからんや。

本書人物描寫の特長　本書の特長としては、その人物描寫の方法が、最もその肯綮に中り、巧に客觀的敍述を用ひて、多く抽象の語を用ひず。　逸事を記するの間、自ら髣髴として、その風采を想望せしむるに足るものあり。　二三の例を擧ぐれば、林鳳岡の傲岸なるを敍せんが爲めに、某貴族を援きて、鳳岡が煙草を吹かしつゝ、老人の頭は冷勝ちのものとて、頭巾を冠り、主人をして肩下の痒きを搔かしめたるの條は、太宰春臺が、嚴毅を持し、自ら高うして苟もせず、巖村侯の世子が、春臺の往いて敎ふるに送迎せざるを怒り、また東叡山法親王が、春臺の善く笛吹くを聞きて、之を召

て、而も其陰を解せず。所謂眼光紙背に透らざる者なりと。服部南郭の事を載せては、彼が唐土を稱するに、海外或は彼邦彼方を以てして、未だ嘗て中華中國と稱せず。徂徠が自ら東夷物茂卿と題すると、大に徑庭ありといひ、之によりて、間接に徂徠を難じたるは、山縣周南が、太宰春臺の鎌倉紀行を見て「皇某」とあるを疑ひ、之に忠告して、皇某とは、是れ何の言ぞや。弟嘗て謂へらく我大東帝國の宇宙に超ゆるもの三、開闢以來一姓を君と爲す、是れ一、德川氏天下を有ちて、而も臣位を去らざること、是れ二、當今封建の勢密に成り、而して仁海陽に浹く、太平の治を致す、漢以來聞かざる所、是れ三、老兄は是れ一代の名儒、社中の巨擘、世の矜式する所、言は則ち法と爲る、駟も舌に及ばず。予敢て名敎の爲め之を言はざるを得ずと辨ぜしと共に、著者の慣用手段を弄したるものにして、以て南郭周南等の國體觀念を窺ふに資すべく、また以て著者の時代における國民自覺の進步を見るに足れり。

春齋藤樹闇齋の三家を合評せるものといふべく、その巧寧ろ狡に類すと稱すべし。梁田蛻巖の言を借りて、後藤松軒を評せるが如き、またこの類なり。曰く、元祿の頃蛻巖年廿八にして、後藤松軒に見ゆ。松軒時に年七十餘、蛻巖をして論語の一章を講ぜしむ。講畢つて後、松軒語つて曰く、論語は猶ほ麒麟の如し、孟子は猶ほ獅子の如し、今や吾子說く所、佳は卽佳なり、憾むらくは麟を說いて獅子と爲し、聖人溫良の意を失ふ。此れ他なし、實に壯年豪銳の氣然らしむるなり。この後よく熟讀玩索せば、則必自ら得るあらん、之を勤めよと。蛻巖之を聞いて、以爲らく、能く至聖大賢の判を形容すと。然るに數年の後、曉然、論語は却て獅子に似、孟子は麟に類するを覺る。蓋し孔子の辭氣、溫厚なるが如く、而かも氣象は卽至大至剛にして當るべからず。紺眼獰爪、殆畏伏して仰ぐを得べからざるの狀あり。孟子の應對するは、皆な戰國の士大夫、故に其語自ら雄壯にして、圭角あり。松軒之を見て、乍ち以て獅子と爲す。而かも其實、孔夫子の剛大なるに及ばず。顧ふに松軒の如きは、陽を窺う

書中人物の評論　本書はたゞに人物の傳記に關する叢話を輯めたるのみに非ずして、また間〻評論を交へたるを以て、單に履歴行狀の資料たるに止まらず、その間自ら著者の見識の穎脱せるものあるを窺ふに足るべし。藤原惺窩の條に、宋學の沿革を略敍して、山崎闇齋の眞邊仲菴に答ふる書を引き、玄惠法印、一條兼良、南浦文之、藤原惺窩等皆朱子學を尊ぶと雖も、而も猶ほ佛臭ある所以を論ぜるが如き、その意のある所を知るに足れり。

林鵞峯の條に、春齋が石川丈山に書を贈つて、藤樹の陽明學を難じ、近歲蠢頑の者、名を王陽明に借りて、其邪教を唱ふ。誠に是れ當世の一蔽事、禁ぜざるべからずといへるを載せ、また鵞峯が西風淚露編に闇齋を指して、高く性理を談じて以て程朱の再出と爲し、而して文字を擲ち、博識を以て妨有りと稱す。而して余輩を指して俗儒と爲す者、亦之れ有り。彼は彼爲り、我は我爲り。道同からざれば、則ち相爲めに謀らず。余は唯家業を守らんのみと論ぜしを引きたる如きは、春齋の語によりて、

此農夫がやうすを見聞するに、今更に心もあらたまり、ねんごろに拜して歸りぬとなり。(寛政七年著)

閑散餘錄

平子和、初メ醫ヲ以テ三浦侯(ソノ頃ハ、三州刈屋ニアリ、後參州西尾ニアリ、今封ヲ作州ニ移ス、)ニ仕フ、醫ヲ業トスルヲ屑トセス、強テ仕ヲ致シ、後儒ヲ以テ守山侯ニ仕フ、時ニ月俸甚微ナリ、アル時五月五日ノ前ニ、官長ノ曰、五日ニハ新シキ葛衣ヲ着テ朝セラレヨト、ソノ日ニ至テ婦人ノ服ヲ着テ出、官長コレヲトカム、子和曰、臣カ如キ微祿ノモノハ、新衣ヲ貯ルヿヲ得ス、然リトイヘトモ官長ノ令ニ違ヒカタシ、細君カ藏ル所ヤヽ新シ、故ヲ以テコレヲ着タリト、侯聞テ卽日ニ月俸ヲ增加セラレシトナン、(明和七年著)

先哲叢談

少曠達、侮弄一世、服官尚縱任不拘、侯家嘗布令曰、佳節見君者宜用新衣、禁垢衣、而金華著其妻衣而出、吏尤曰、所前布之令、要在敬君而已、然子男女同衣裳、是何禮也、金華從容曰、薄祿小臣、家貧不能給新衣、而令不可犯、幸荊婦有一衣稍華、以得免罪戾焉、事聞于侯、卽日加祿數石、

ひとへ物に、布の小紋の羽織を着たり、彼士驚きて扨扨丁寧なる男かな、墓だに敎へ得さすれば、滿足なるにと思ひもて行うち、墓所にいたりぬ、彼農夫竹垣の戸を開きいざ入りて拜し給へといひて、其身は戸外に拜伏せり、士人大に驚き、扨は衣服を改め着せしは、我爲にはあらで、先生を敬するにてありけると心付、扨も汝は藤樹の家來筋の者にてやあると問へば、左には候はず、されど此村の者は、一人として先生の御恩を蒙らざる無し、親をうやまひ、子をしたしむ事をわきまへしりたるは、先生の御蔭なれば、必おろそかに思ふべからずと、我父母も常にをしへ候ひぬと語る、士人も初は只なほざりに一見の心にて來りしが、

藤樹有何親故、而敬禮乃爾、農夫曰、欽仰藤樹先生、豈惟余哉、闔邑皆然、父老每語其子弟曰、吾里父子有禮、兄弟有恩、室無忿疾之聲、面有和煦之色者、職由藤樹先生遺敎也、此所以無一人不戴其恩也、於是士變容曰、世稱爲近江聖人、吾乃今而知其非虛讚也、卽敬拜其墓、厚謝農夫去、

致候ハ、大惡人ニテ候、總テ人ヲ害シ殺生ヲ慰ニ致候ハ、禽獸ノ業ニテ人ニテハ無之候、其上罪人ヲ切候ハ、異國ニモ居者ト申、穢多ノ業ニテ候ト申ス、賴宣卿御顏色替リ、御城へ御皈リ、夜ニ入テ道圓ヲ召テ、汝カ申處至極セリ、向後自身ノ鉼物堅クスマシキト被仰、道圓カ忠言ヲ不淺御感也トゾ（寶曆十年書）

橘南谿東遊記

先年余聞し事あり、尾州の一士人用事ありて、此邊を過ぎ、先生の墓所小川村に有りと聞て、畑うつ農夫に尋しに、畑道なれば知れ申まし、案内して奉らんとて、先に立て行く、程なく小さき藁屋に至り、しばし待たせ給へとて、内に入り、やがて出るを見るに、木綿の新敷

讓之、又人君手斬人而快於心者、古之人有行之者、夏桀殷紂是也、吾邦亦有職斬罪人能堪之者、稱穢多、最至卑者也、貴戚默思良久曰、卿言極善、往事吾何心哉、厚褒賜、

先哲叢談

某州一士人、經過藤樹之故里、欲弔其墳墓、問路農夫、農夫即舍耒耜、徑趨入屋、更著潔服出、士跟之行、既而至墓所、農夫拜掃甚恭、士心訝之、因問曰、爾于

漢混交體を翻して、簡勁なる漢文に改め、而して毫もその原意を失ふことなし。その洗錬の勞苦、蓋し尋常に非ず。今左に二三の原文と譯文とを對照して、その例を示す。

参考諸家傳卷三引大君言行錄

賴宣卿市川清長第ニテ、御自身鉎物ヲナサル、腰帶ト云備前長光ノ御刀ニテ、立伽裟ヲナサレ、其儘ニテ立タルヲ、柄ニテ御突候ヘハ二ニ成倒レ候、御前ノ上下一同ニ噇ト感シ候、賴宣卿御機嫌ニテ、那波道圓ニ御向、異國モ加樣ニ手妻利テ人ヲ切ニ妙ヲ得タル者有ヤト御尋、道圓荅テ申ハ、人ヲ能切候者、異國ニモ御座候ト申、賴宣卿夫ハ何ト名ヲ申タルト仰ラル、道圓承リ、夏桀王殷紂王ト申惡王ニテ候、人ヲ害シ我カ慰ニ

先哲叢談

一貴戚勇武絶倫、其佩刀利鈍必試諸人、嘗得一刀、備前長光所鍛也、乃執罪者立斬之、左右互辭以讚、活所獨蹙頞而無言、貴戚問曰、中夏亦有刀利與執刀之妙如此者乎、活所曰、龍泉太阿干將莫邪類、是皆彼邦名器、水截蛟犀、陸斷虎兕、其利不

材料の蒐集　本書材料を蒐むるに、務めて異聞を錄し、以て後考に資せり。中江藤樹が江戶の街路に、大小神祇組の來り逼るに遭ひて、その恭謙の態度、よくかの暴者をして罪を悔ゆるに至らしめし事の如きは、藤樹が江戶に來りし事實なきによりて、多少の疑の存するありとするも、その口碑を錄して、後考を俟つ所以を注して、妄に捨てざりしは、その用意の淺からざるを見るべし。況やこの事の如きは、以て藤樹の人と爲りをあらはすのみならず、また當時の大小神祇組の狀況を想察せしむるに足るものあるをや。口碑の收錄の外に於て、本書據る所の材料は、既に上にも述べたる如く、傳記行狀碑銘家譜の類の漢文を以て編を成せるものは勿論、隨筆雜著の類に至るまで、博搜旁求よくその微を穿てり。たゞ本書の資料を網羅したる史氏備考は、恐らく今傳はらざるべく、隨うてその材料書目の如きは、殆ど之を知悉するに難きは惜むべきなり。

本書の行文　本書の文を行るや、其の據る所の隨筆雜著の文を譯し、冗漫なる和

を顯はし、世に範を垂るゝもの多きに至ては、單に史材を供するに止まらず、その後人に裨益する所、蓋し歷史家學者のみにあらざるべし。　朝川善菴の序にも、善菴この編を讀むに及んで、面熱し汗下り、愧づる所實に多し、今よりして後は、古を志して自ら鏡とし、所聞を尊んで所知を行はんと。　念齋が著作の目的も、亦思ふに此に存するものありしなるべし。

記載事項の考證　本書は、固より聞見に隨うて之を記せるを以て、事實の眞僞を考定するが如きは、その目的に非ず。　而も編中間ゝ考證を交へ、頗る精覈なるものあり。　以て修史の料に供すべきもの多し。　例せば、惺窩の妻帶及び飲酒について、羅山の撰惺窩先生行狀をひきて、江邨北海の日本詩史・那波魯堂の學問源流に、惺窩儒に歸るの後、妻妾を蓄へず、酒肉を御せずとあるの誤を辨ぜる、また同じく日本詩史常山樓筆餘等に、松永尺五が後光明天皇の勅を奉じて、春秋を進講せし事を載せたるを疑へるが如き是れなり。

本書の價値一般　我國室町季世以降、文化復興の氣運頗る萌し、德川氏の治に及びて、その趨勢大に盛なり。家康夙に學問奬勵の方策を樹てて、藤原惺窩を延き、ついで林羅山を登用し、崇文の風勃然として興り、爾來太平うちつゞきて、儒學の士踵を接して出で、蔚然としてその盛を致せり。本書はよく其等儒林の名士の言行を輯めて、その要を撮り、各家それ〲の特色をあらはせり。之を通讀して、以てよく近世儒學の沿革を明かにするを得べく、優に一部の近世儒學史と稱するを得べし。而してその文章は、特に名文と稱すべきものに非ずとするも、暢達の文、よくその意を通じ、事實を叙すること的確に且つ平明なり。本書載する所、間々他書に見ゆるものこれありと雖も、而かも本書によりて始めて傳へられたる事項少からず。この書なかりせば、殆その傳を佚すべかりしもの多し。今日にありては、儒林の傳記この書を措いては、殆ど之を考ふるに難き者多し。殊にその採錄せる逸事の類に至りては、著者によりて、始めて文に上されたるも少からざるべく、先輩の高節德義

考及諸家の集より、その要を取り、併せ編して數十卷を成せり。之を先哲叢談といふ。今の此の編は、則ちその中の儒家類に係るもののみを選めるなり。その卷凡そ十四卷あり。その中先づ八卷を刻し、佐藤一齋、井上四明、朝川善菴の序を冠し、文化十三年九月梓成る。餘は校訂未だ畢らざりしを以て、之を後日に讓りしが、終に刻するに及ばず。

本書の內容　本書收むる所、年代は永祿より享保に及び、儒家合せて七十二人を數ふ。其次序大率生誕の先後に從ひ、その門流を以てせず。但林羅山は萱玄同より少きこと二歲なれども、德川初朝草創の際における大儒なるを以て、直ちに藤原惺窩に接して、他例に拘はらざることは、凡例にも述べたるが如し。記載の內容は、特に系統を立てたる傳記評論の如きものに非ずして、主としてその性行逸事を記述し、各人皆きれ〴〵の談叢にして、多きは十數條、少きも二三條の事項を輯め、その條項の數總べて五百五十條に及ぶ。

江戸に來り、幕府に仕へて步隊に入り、幾何もなくして歿す。念齋弱冠にして、父に嗣いで隊に入る。母秋田氏、性嚴、教ふるに義方を以てす。人稱して女丈夫といふ。幼にして山本北山に學び、同門の推服する所となる。平生實學を攻め、篤行を修む。專ら繼述を以て務とし、其齋を念祖と名け、扁して以て自らつとむ。餘暇ある每に徒を會して講授す。その著先哲叢談八卷は、文化十四年十一月、官命によつて之を幕府に獻じ、銀五枚を賜はる。林大學頭、其名を聞き、薦めて修史の事に與らしむ。文政三年三月十九日病で卒す。年四十七。著す所、本書の外、賢相野史四卷、許我誌三卷、史氏備考百卷、寉城史翰二卷あり。

本書の成立由來　本書は凡例にも見ゆる如く、念齋嘗て、室町時代の季より近世に至るまで、文臣武將より、一技一藝に名ある者、苟も人物の傳ふるに足るべきものの傳記行狀碑誌家乘譜牒等を求め、之を輯めて凡そ一百卷に及ぶ。名けて史氏備考といへり。其言行の迹、稗史或は口碑に存する者は、別に之を收錄し、且つ史氏備

先哲叢談解題

著者　先哲叢談一部八卷、原念齋の著にかゝる。念齋名は善、字は公道、小字友之介、後三右衛門と稱す。その先は甲斐武田氏の將原美濃守虎胤に出づ。武田氏亡び、子孫轉徙して、京に仕す。虎胤七世の孫を瑜といふ。即ち念齋の祖父なり。瑜字は公琇、双桂と號す。幼にして伊藤東涯に章句を受け、長じて儒名漸く著はれ、兼ねて醫を善くす。その學博洽渉らざる所なく、朱子を非し、徂徠を難じ、仁齋を疑ひ、自己の見を立て、論孟を以て根據となす。嘗て一書を著して洙泗徽響といふ。延享中唐津侯土井利里の召に應じ、初め醫を以て仕へ、更に儒官となる。侯の封を古河に移さるゝに及び、また之に從ふ。明和四年閏九月四日歿す。双桂の子恭胤、字は敬仲、父の祿を襲ぐ。幾何もなくして病を以て致仕せんことを乞ふ。允されず。猶乞うて止まず。これによりて罪を獲て禁錮せられ、終に籍を削らる。旣にして

合七十二人五百五十條

——目次終——

卷之五

卷之六

先哲叢談目次

卷之一

卷之二

卷之三

卷之四

例言

一先哲叢談全八巻を收め、對譯插註す。
一上欄の原文は一に文化十三年版の流布版本に據る。
一目次亦版本所載のまゝを用ひ、之に本書の頁數を書き添ふるに止めたり。
一譯文の第二行目以下を一字下りとせるは、原本の形式に則りたるもの也。
一原文及び譯文中に小活字を用ひたるもの、亦原本の形式に從へる所なり。
一本文中の人名の見出しは、編者の私意を以て便宜之を設けたる所にして、原本にこれあるに非ず。

先哲叢談

全